シンポジウム　1993, 10

細石刃文化研究の新たなる展開

I

列島諸地域における細石刃文化の様相

佐　久　考　古　学　会

八ケ岳旧石器研究グループ

四十ばんめの秋に

厳寒の野辺山、矢出川遺跡において、凍ついた土のなかから細石核を掘り出したときの情景は、いまも鮮やかに頭のなかに焼きついている。

その発見から、四十ばんめの秋がこの八ケ岳のふもとに降りてきた。ほんとうに時の流れとは早いものだとおもう。

矢出川に落されたその最初の点は、今や国内のいたるところに広がり細石器文化の遺跡総数は数百箇所に及ぼうという。さらに、国外とのつながりまでもが論じられようという今日である。

これまでの細石器研究のながれを振り返り、そして新しい方向性をみつめようと、このたびの企画をおこなったところ、国内各地で先進的に研究をすすめておられる多くの皆さんのご賛同を得、ご寄稿をいただくことができた。懐中より感謝の意を表する次第である。

決して地の利がよいとはいえないこの野辺山に、北海道から九州までの多くの方が足を運んでくださる、ひとえにそれは、各位の細石器研究に対する情熱の表われと思うのである。あとは、その情熱が議論を喚起し、細石器文化研究の新しい頁が印されることを祈るばかりである。

ようこそ野辺山へ！

１９９３年１０月３０日

佐久考古学会

会長　由井茂也

シンポジウム

細石刃文化研究の新たなる展開

－ その、めざすもの －

矢出川における細石刃文化の確認から四十年、いまや細石刃文化遺跡は日本国内のいたるところで発見され、資料の蓄積がなされ、その様相が明らかにされつつある。一方、それに伴って“研究の方法論的進展”や“新しい視座からの研究”もみられようという昨今である。

そこでこのシンポジウムでは、国内の最前線で積極的な研究をすすめておられる研究者の方々にお集まりいただき、以下のテーマにそった、紙上および論壇上における、論議の深化をめざした。

八ケ岳旧石器研究グループ
堤　　隆

①　【列島諸地域における細石刃文化の様相】

第Ⅰ部では、列島諸地域の細石刃文化資料の集成をおこない、それぞれの地域での、①研究の経過・②遺跡の分布や立地・③石器群の内容（技法や組成・石材など）・④細石刃文化の様相⑤研究の現状と課題について論じていただいている。

遺物の集成と遺跡一覧表は、それぞれの地域について、もれなくできるかぎり網羅的に作成していただいた。

地域資料の蓄積とその様相の把握、問題点の抽出が議論の土台である。

② 【細石刃文化の成立・展開・終焉をめぐって】

日本列島における細石刃文化の成立について、自生論的見地あるいは伝播論的見地をふまえ、止揚的な議論の深化をはかる。

一方、細石刃文化の展開や尖頭器との共存関係、細石刃文化の終焉と縄文時代の始まりについての考察もおこなう。また、その年代的把握の鍵となる指標テフラについての論文もいただいた。

加えて列島をとりまく大陸の細石刃文化の様相にも注意したい。

③ 【細石刃技法と細石刃、植刃器をめぐって】

細石刃剥離技法に関する研究、細石刃と石材環境、細石刃の形態と機能、東アジアの植刃器をめぐる研究を展開する。

細石刃はどのような技法によって生みだされたか。そして本来的な研究の主役のひとつであるべき細石刃のかたちや機能とは、さらにそれが複合石器としてどのような軸に埋め込まれていたか、についての考察をおこなう。

④ 【細石刃文化期の生活様式をめぐって】

細石刃文化期における行動論的な分析に向けての視座の提示、一方で「内水面漁撈が存在しえたか」という重要なテーゼを含めたその生業活動をめぐる問題について、新しい切口をもって議論していただく。

一方、その生活にかかわって残された遺構（礫群や石囲い炉）のあり方とその背景についての考察なども、生活様式の評価にかかわる問題として見逃せないだろう。

第 I 部

列島諸地域における細石刃文化の様相

目　次

① 九州地方南部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・ 宮田栄二

② 九州北部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 綿貫俊一

③ 中国地方の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 光石鳴巳

④ 四国・瀬戸内の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・ 西村尋文

⑤ 近畿・東海西部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・ 松浦五輪美

⑥ 東海地方東部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・ 笹原芳郎

⑦ 南関東の細石器文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 西井幸雄

⑧ 北関東の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 桜井美枝

⑨ 本州中央部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・・ 堤　隆

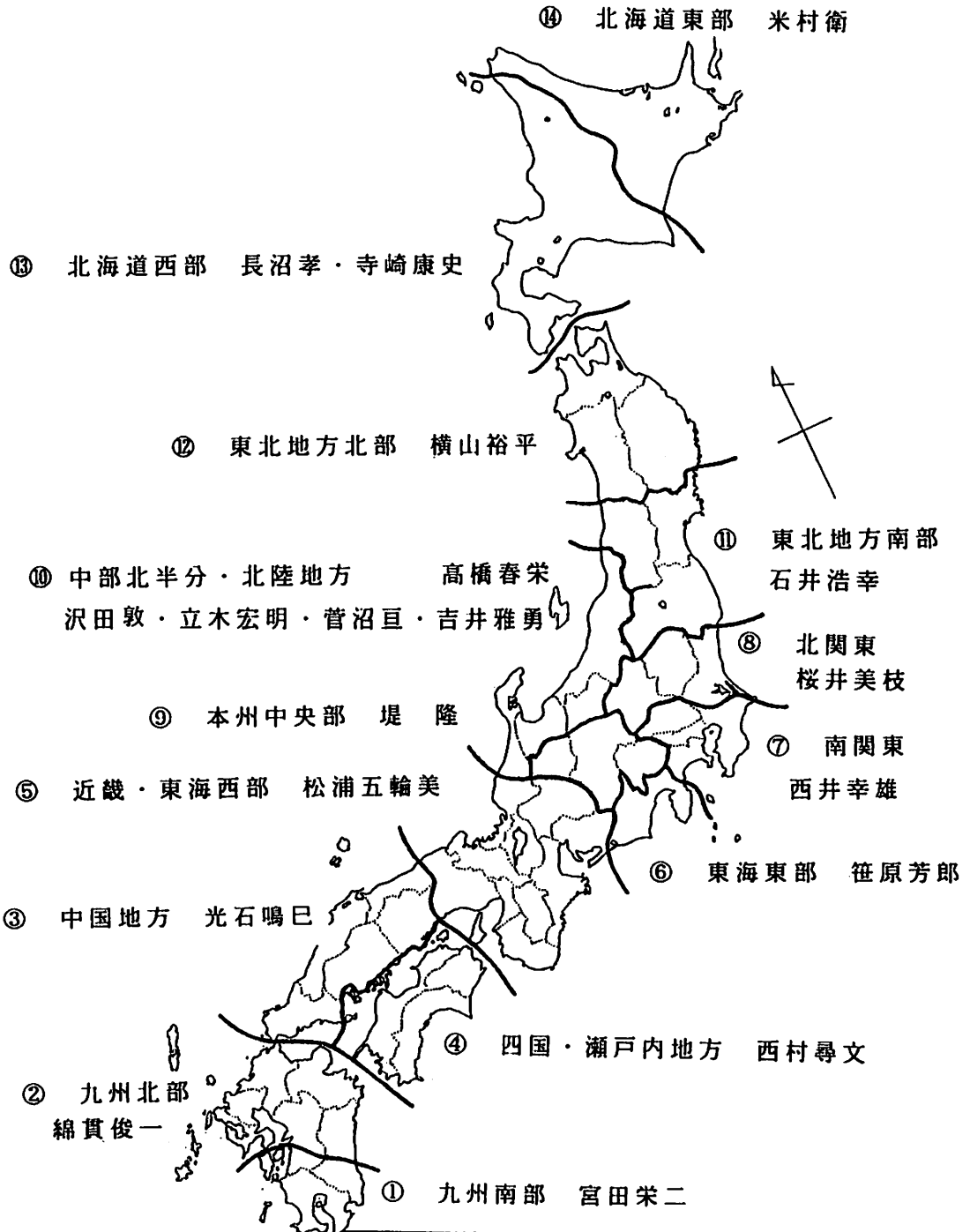
⑩ 中部北半・北陸地方の細石刃文化 ・・・・・ 高橋春栄・沢田敦
・立木宏明・菅沼亘・吉井雅勇

⑪ 東北地方南部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・ 石井浩幸

⑫ 東北地方北部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・ 横山裕平

⑬ 北海道西部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・ 長沼孝・寺崎康史

⑭ 北海道東部の細石刃文化 ・・・・・・・・・・・・・・・ 米村　衛



列島諸地域における
細石刃文化の様相
地域区分（区分は便宜的）

九州地方南部の細石刃文化

宮田栄二

1　研究の経過

１９６６年　池水寛治氏による上場遺跡の調査で南九州で初めて細石刃文化を含む旧石器文化の存在が確認される。細石刃文化層は２枚で上層は爪型文土器と共伴。

１９６８～　出水高校考古学部による上場高原の分布調査。石飛遺跡の第一次調査。

１９７６年　鹿児島県教委による加栗山遺跡・加治屋園遺跡の調査。加栗山遺跡では石鏃の共伴が、加治屋園遺跡では独特の加治屋園型細石刃核が出土する。

１９７７年　宮崎県児湯郡下の畦原型細石刃核が発表される。

１９７９～　各種の開発事業にともない細石刃文化の遺跡が多く発見される。

１９８８年　鹿児島市教委による横井竹ノ山遺跡の調査。石鏃と土器の共伴を再確認。

１９９０年　鹿児島県教委による西丸尾遺跡・榎崎Ｂ遺跡の調査。細石刃文化に伴う礫群及びピット群の検出により共伴遺構が新たに視点となる。

2　遺跡の分布

Ａ　人吉盆地　細石刃文化の遺跡は比較的集中している。

Ｂ　上場石飛高原　日東産黒曜石原産地周辺であり細石刃文化の遺跡は比較的集中する。

Ｃ　天草諸島　細石刃文化の遺跡は点在する。

Ｄ　出水丘陵　細石刃文化の遺跡は点在する。

Ｅ　川内川下流域　上牛鼻産の黒曜石原産地が近辺に所在するが、遺跡は散在している。

Ｆ　大口栗野盆地　日東系・桑ノ木津留産の黒曜石原産地が周辺にあるが遺跡は散在する。

Ｇ　姶良台地　自動車道建設などにより確認されている細石刃文化の遺跡は散在しているものの未発見の要素がつよい。

Ｈ　薩摩中央台地　鹿児島市から日置郡のシラス台地に土器や石鏃を共伴する比較的規模が大きい遺跡が所在する。遺跡は自動車道建設などに伴うもので、この台地には大規模な遺跡が集中すると予想される。

Ｉ　南薩台地　細石刃文化の遺跡は散在する。

J　鹿屋原台地　　バイパス建設により近距離に３遺跡確認されていることより、高須川流域には比較的集中すると予想される。

K　曾於串間台地　細石刃文化の遺跡は散在する。

L　都 城 盆 地　細石刃文化の遺跡は散在する。

M　大淀川下流域　南部では船野型細石刃核をもつ遺跡が散在する。

3　細石刃石器群

B　上場石飛高原

上場遺跡　　３層では野岳・休場型細石刃核が、２層では細石器に伴い爪形文土器が共伴している。

E　川内川下流域

成岡遺跡　　野岳・休場型細石刃核を主体にしている。石材は樋脇町上牛鼻産の黒曜石が大部分を占める。ナイフ型石器との共伴が問題になっているが時期的に区別される可能性が高く検討を要する。

大栫遺跡　　加治屋園型細石刃核と長崎県産と推定される黒曜石を石材にした福井型細石刃核が共伴している。

G　姶良台地

星塚遺跡　　野岳・休場型細石刃核と畦原型細石刃核が共伴している。

H　薩摩中央台地

加治屋園遺跡　黒曜石製の野岳・休場型細石刃核と偏平な凝灰岩質頁岩を素材にした多量の加治屋園型細石刃核と少量の畦原型細石刃核が出土している。隆帯文土器が共伴している。

加栗山遺跡　　38ブロックからなる総計約７万点という膨大な量の遺物が出土。細石刃核は野岳・休場型細石刃核を主体とするが船野型や加治屋園型等も見られる。整形した大型の石皿と石鏃が出土。鹿児島市三船産黒曜石を主体とし上牛鼻産も使用され、頁岩のみのブロックも存在する。

横井竹ノ山遺跡　野岳・休場型細石刃核を主体にし福井型のブランクも出土している。25点の石鏃と多くの無文土器が共伴している。

J　鹿屋原台地

西丸尾遺跡　　野岳・休場型細石刃核と局部磨製石斧、礫器で構成される。細石器の

石材の大部分は近くの高隈山で産する水晶である。

榎崎B遺跡　良質の黒曜石小礫を素材とした野岳・休場型細石刃核を主体にしている。磨製石斧２本と神子柴型類似の大型石斧か共伴している。９基の礫群とそれに囲まれた位置にピット群が検出されている。

榎崎A遺跡　良質の黒曜石小礫を素材とした野岳・休場型細石刃核を主体に畦原型細石刃核が共伴している。

L　都城盆地

池増遺跡　畦原型と船野型細石刃核が多量に出土しているという。報告書の刊行が待たれる。

4　細石刃文化の様相

九州の細石刃文化について、橘昌信（橘1979）、木崎康弘（木崎1981）、小畑弘己（小畑1983）は細石刃核の型式学的な分析と各遺跡での共伴関係を通じて、細石刃核の編年的位置づけを行い、南九州の細石刃文化の編年にも言及している。

ここでは三者の編年観を基本にし、各遺跡で出土している野岳・休場型の形態的変化と共伴関係を視点にして、南九州の土器と石鏃を共伴する横井竹ノ山遺跡などの最近の資料による編年観を提示しておく。

Ⅰ期…野岳・休場型細石刃核を単純に出土する遺跡。この時期の野岳・休場型細石刃核は、打面幅（作業面幅）が広く、打面は後方に傾斜したものが大部分を占める。床並B遺跡、西丸尾遺跡、石峰遺跡が相当する。

Ⅱ期…野岳・休場型細石刃核を主体にするが、この段階では野岳・休場型細石刃核は剥片素材を多用し、打面幅に比較して作業面長が長くなり打角は大きくなるものも増加する。また、板状の偏平な剥片のみでなく石核整形を要さない小礫も細石刃核素材として使用される。このように本来のいわゆる「野岳・休場型細石刃核」とは異なる多様化した形態を呈し、石核整形をあまり施さない新規の野岳・休場型細石刃核が主体を占めるようになる。さらに多くの遺跡で船野型・畦原型・加治屋園型が共伴するようになる。星塚遺跡、榎崎B遺跡、榎崎A遺跡、成岡遺跡などが相当する。この段階の終末期には加栗山遺跡のように石鏃が出現する

Ⅲ期…細石刃核は板状剥片素材で両側面の石核整形はほとんど施されない新期の野岳・休場型細石刃核を主体にし、加えて福井型やブランク形成を行う加治屋園型細石刃核も認

められるようになる。細石器に土器や石鏃が共伴する段階。加治屋園遺跡、里城遺跡、横井竹ノ山遺跡が相当する。

畦原型と加治屋園型細石刃核は南九州地域に限定して出土し他地域に認められない特徴的なものである。これらの細石刃核について共通する技術基盤が認められることより、両者は加治屋園技法による畦原型細石刃核と呼称されることもある。しかし使用される素材の違いや出土分布域の差が認められること等より両者は区別して呼称しておきたい。

船野型細石刃核は東九州を中心に分布しているもので、これまで最古期のものと考えられていたが、中期段階から土器出現期まで存続する（綿貫1992）という。南九州で船野型は黒曜石を石材とし第Ⅱ期に出土している。

南九州で現在知られている旧石器時代の遺跡は、その大部分が開発に伴う調査により確認されたものである。そのなかで遺跡数を比較するとナイフ形石器文化のものより圧倒的に細石刃文化の数が多い。細石刃文化期後半になると自然環境や食料事情が著しく好転し、より生活しやすい環境になると考えられる。そのために遺跡数が増大するのであろう。細石刃の製作は板状剥片素材を多用し簡略化していく。そういう状況の延長線に、細石器は消え多量の土器・石鏃・石斧や配石炉・住居跡などで構成される掃除山遺跡や栫ノ原遺跡などの縄文時代草創期の大遺跡が全国でも早い段階に形成されていく。

5　細石刃文化研究の課題

南九州細石刃文化期における自然環境や植生などを明らかにする必要がある。また出土黒曜石の原産地推定は肉眼観察のみであり、化学的な分析を行う必要がある。石器群の把握では、時期の異なる石器群が重複している可能性もあり共伴関係について慎重な検討が望まれる。本資料集作成にあたり宮坂孝弘・永友良典・長友郁子氏の協力をいただいた。

引用・参考文献

宮坂孝弘・木村元浩・六田育子　1992　「九州旧石器時代関係資料集成－鹿児島県」九州旧石器文化研究会

永友良典　1992　「九州旧石器時代関係資料集成－宮崎県」九州旧石器文化研究会

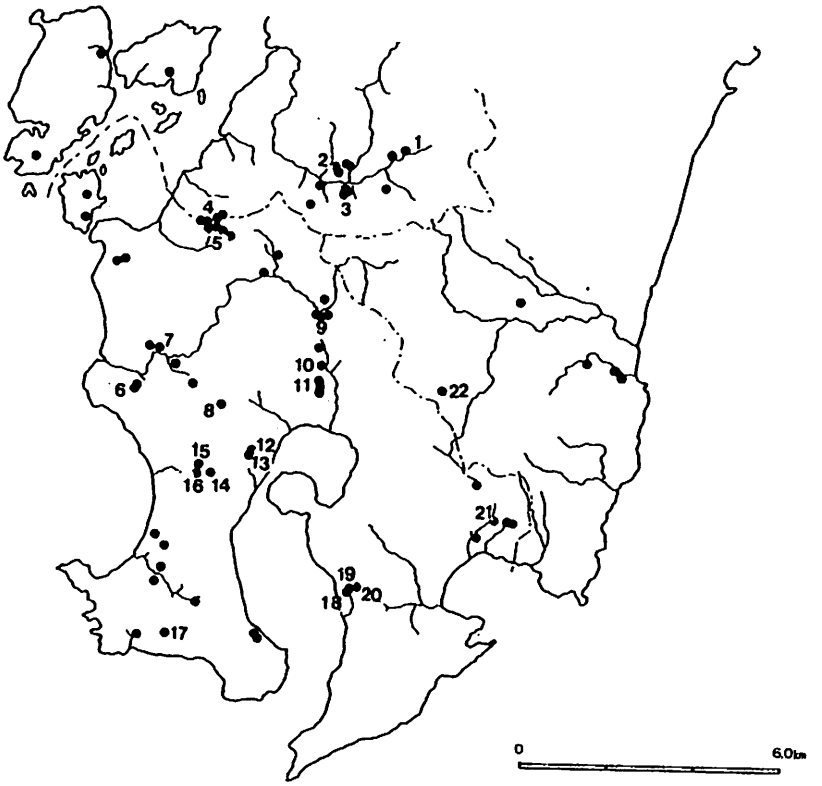
宮崎県総合博物館埋蔵文化財センター　1993　「埋蔵文化財センター開設10周年記念企画展図録集－宮崎の遺跡　1982~1991」

橋　昌信　1979　「九州地方の細石器文化」　駿台史学　47

木崎康弘　1981　「九州地方の細石核」　鹿大史学　55.56合併号

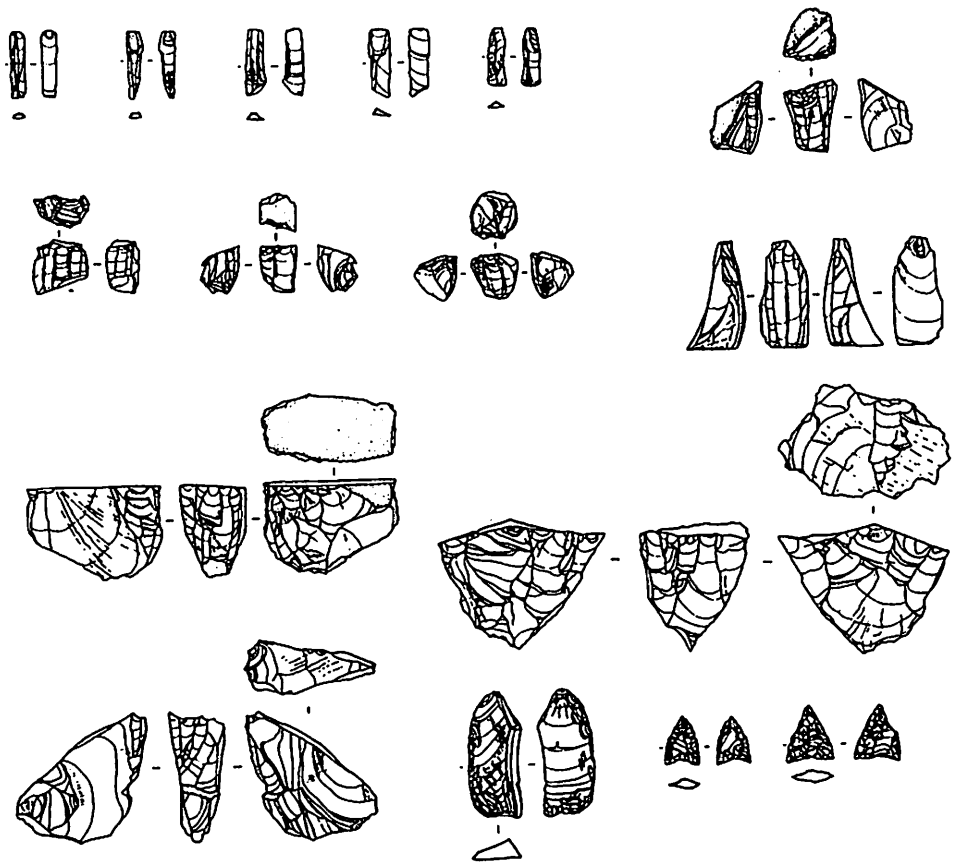
小畑弘己　1983　「九州の細石刃文化」　物質文化　41

綿貫俊一　1992　「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」　古文化談叢　28

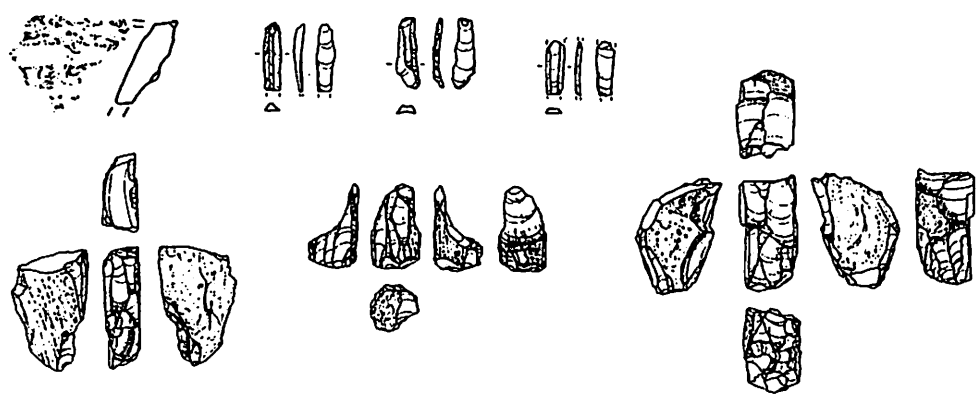


1　里城遺跡
2　狸谷遺跡
3　白鳥平Ⅰ遺跡
4　石飛遺跡
5　上場遺跡
6　成岡遺跡
7　大椿遺跡
8　床並Ｂ遺跡
9　諏訪遺跡
10　星塚遺跡
11　石峰遺跡
12　加治屋園遺跡
13　加栗山遺跡
14　横井竹ノ山遺跡
15　枦堀遺跡
16　仁田尾遺跡
17　登立遺跡
18　西丸尾遺跡
19　榎崎Ｂ遺跡
20　榎崎Ａ遺跡
21　道重遺跡
22　池増遺跡

第１図　九州地方南部の細石器出土遺跡

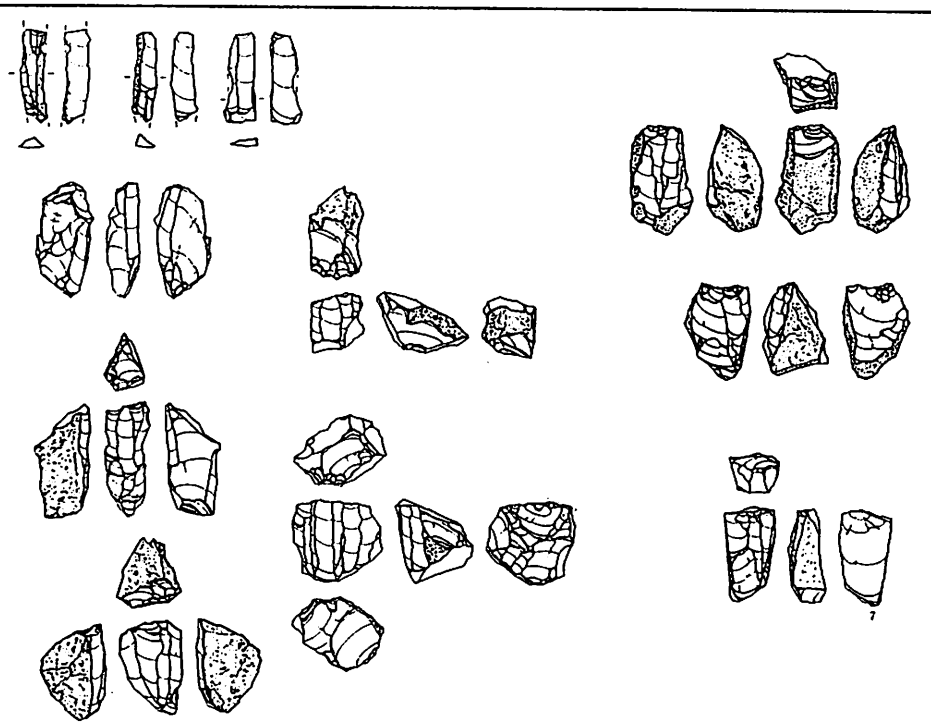


第2図　人吉盆地　里城遺跡（1）

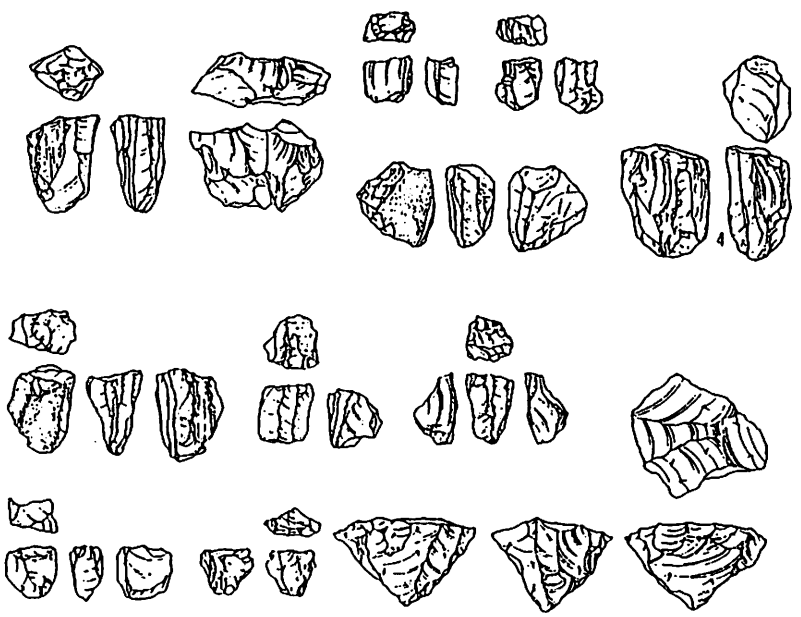


第3図　人吉盆地　狸谷遺跡（2）

0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm

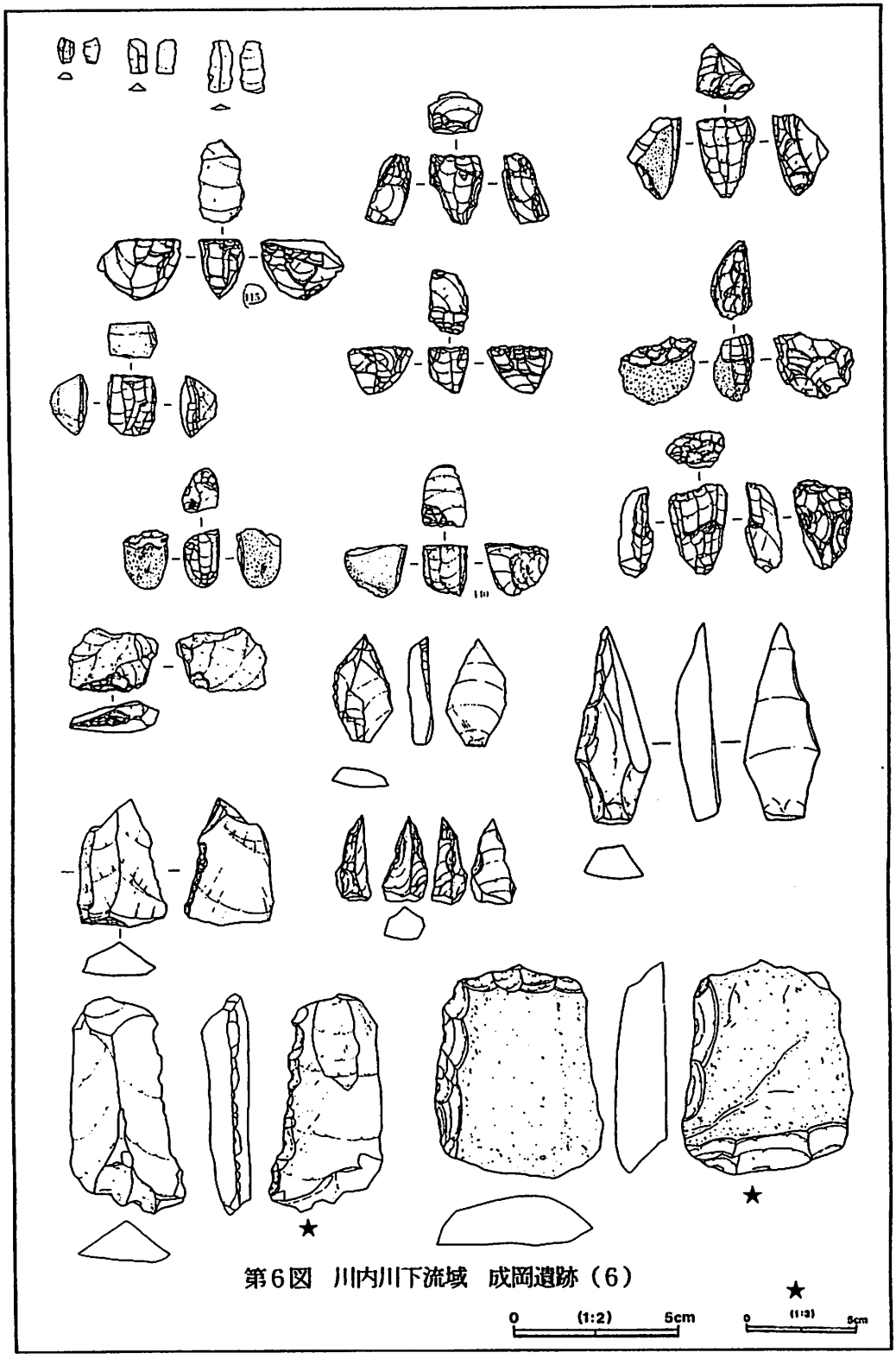


第4図　人吉盆地　白鳥平Ⅰ遺跡（3）

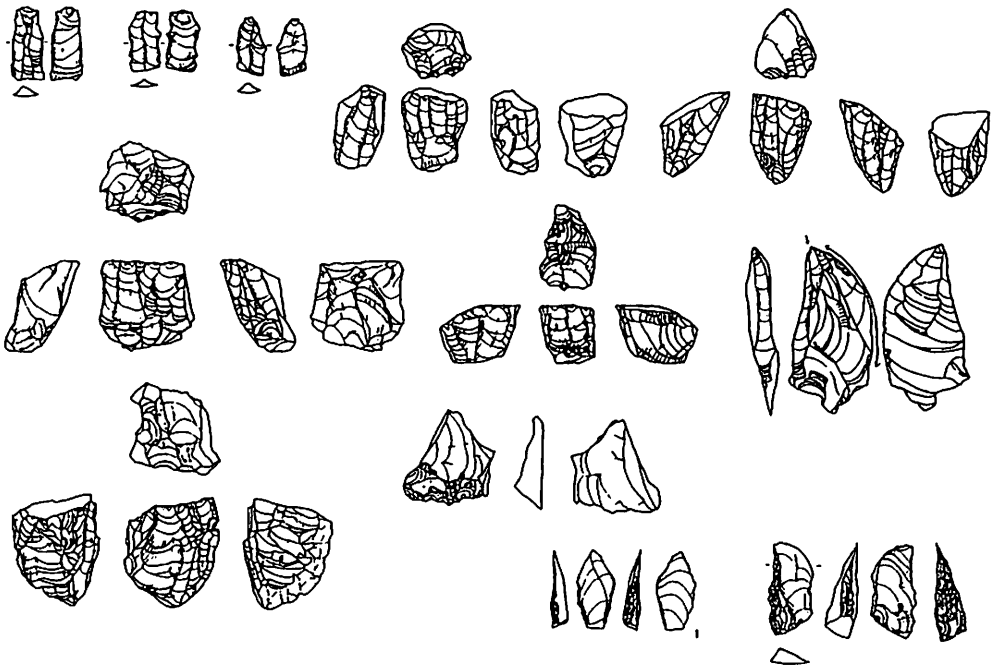


第5図　上場石飛高原　上場遺跡（5）

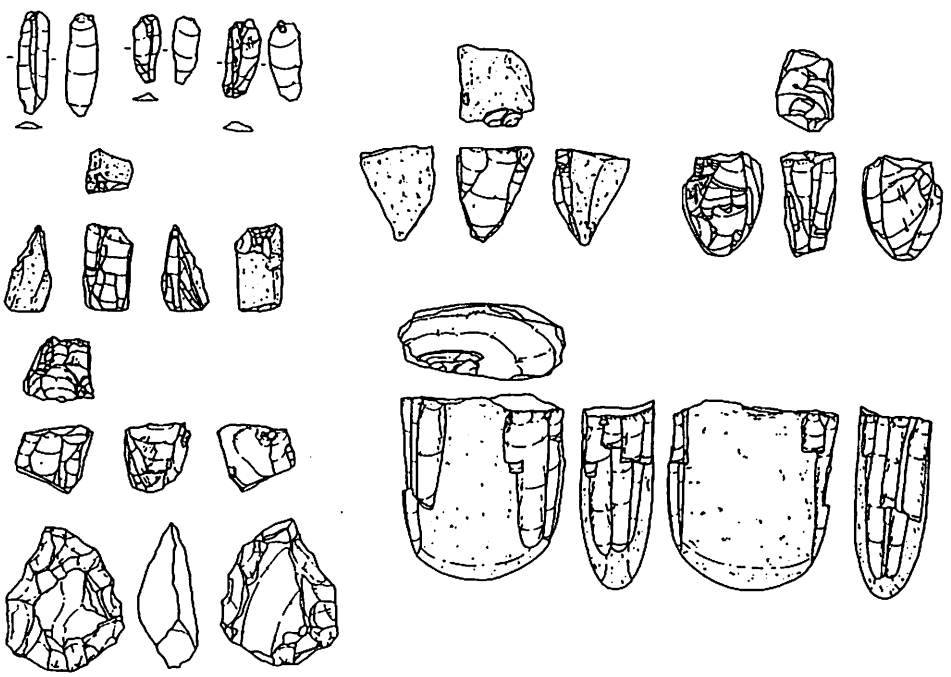
0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm



第6図　川内川下流域　成岡遺跡（6）

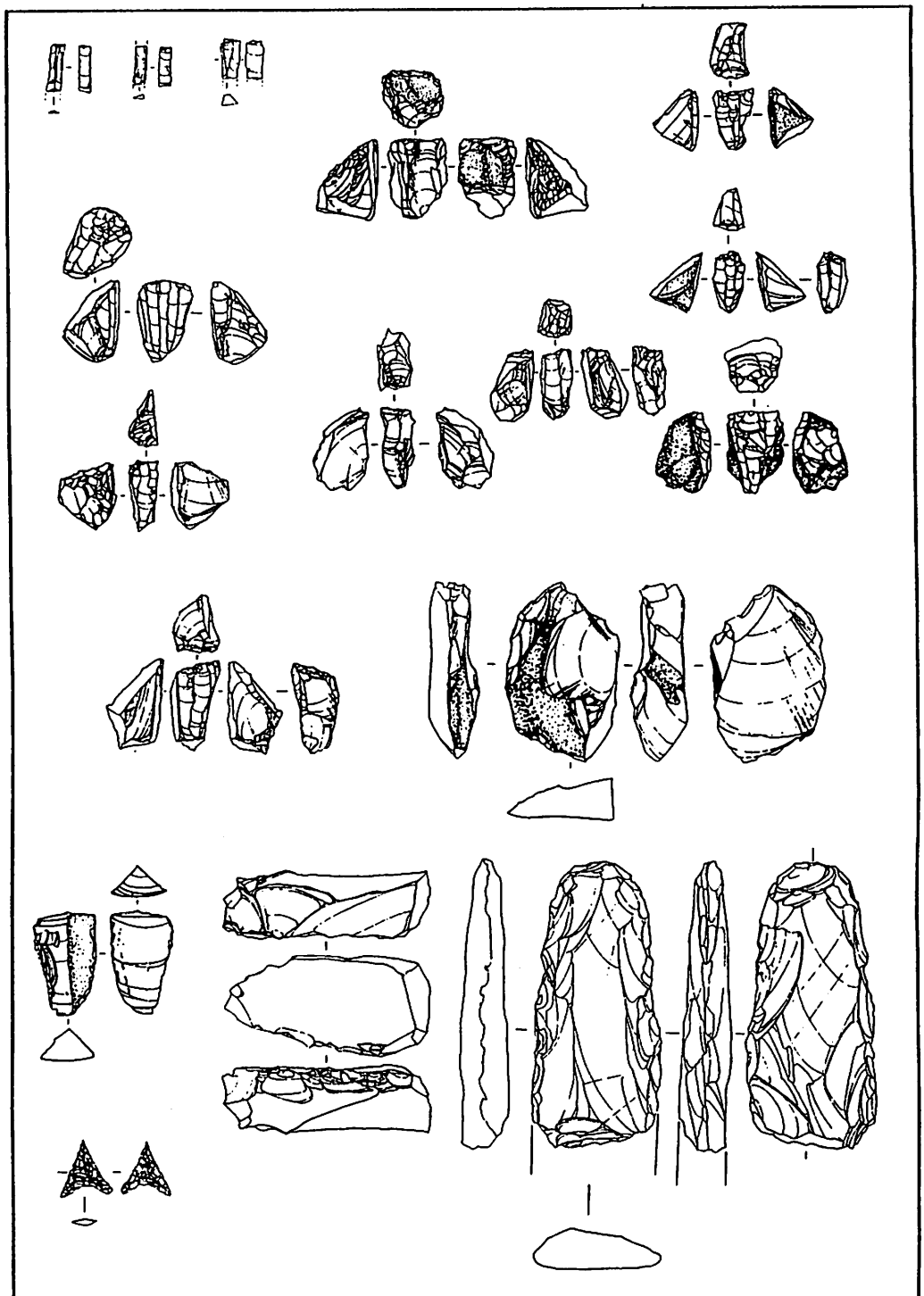


第７図　川内川下流域　床並Ｂ遺跡（８）

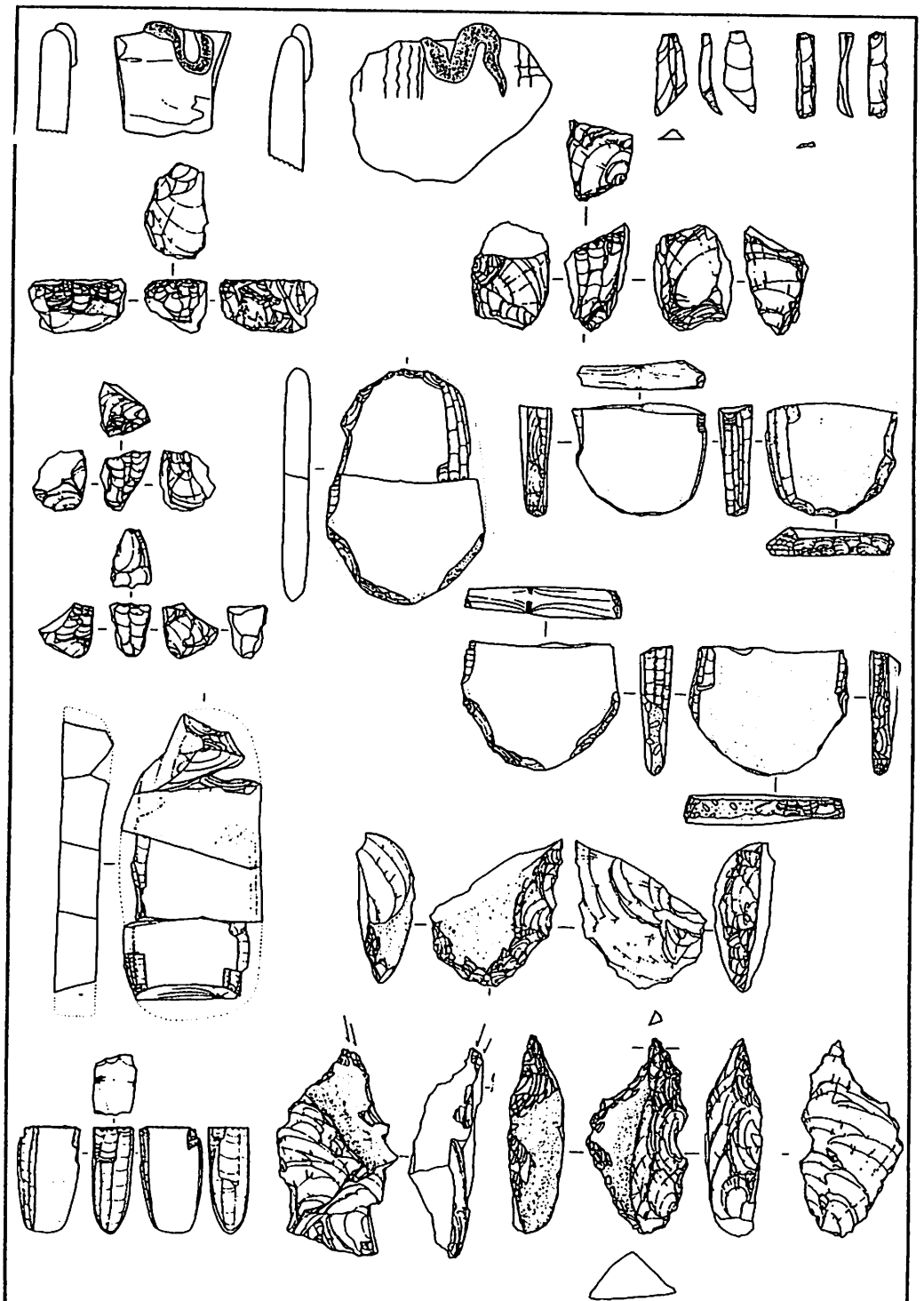


第８図　姶良台地　星塚遺跡（１０）

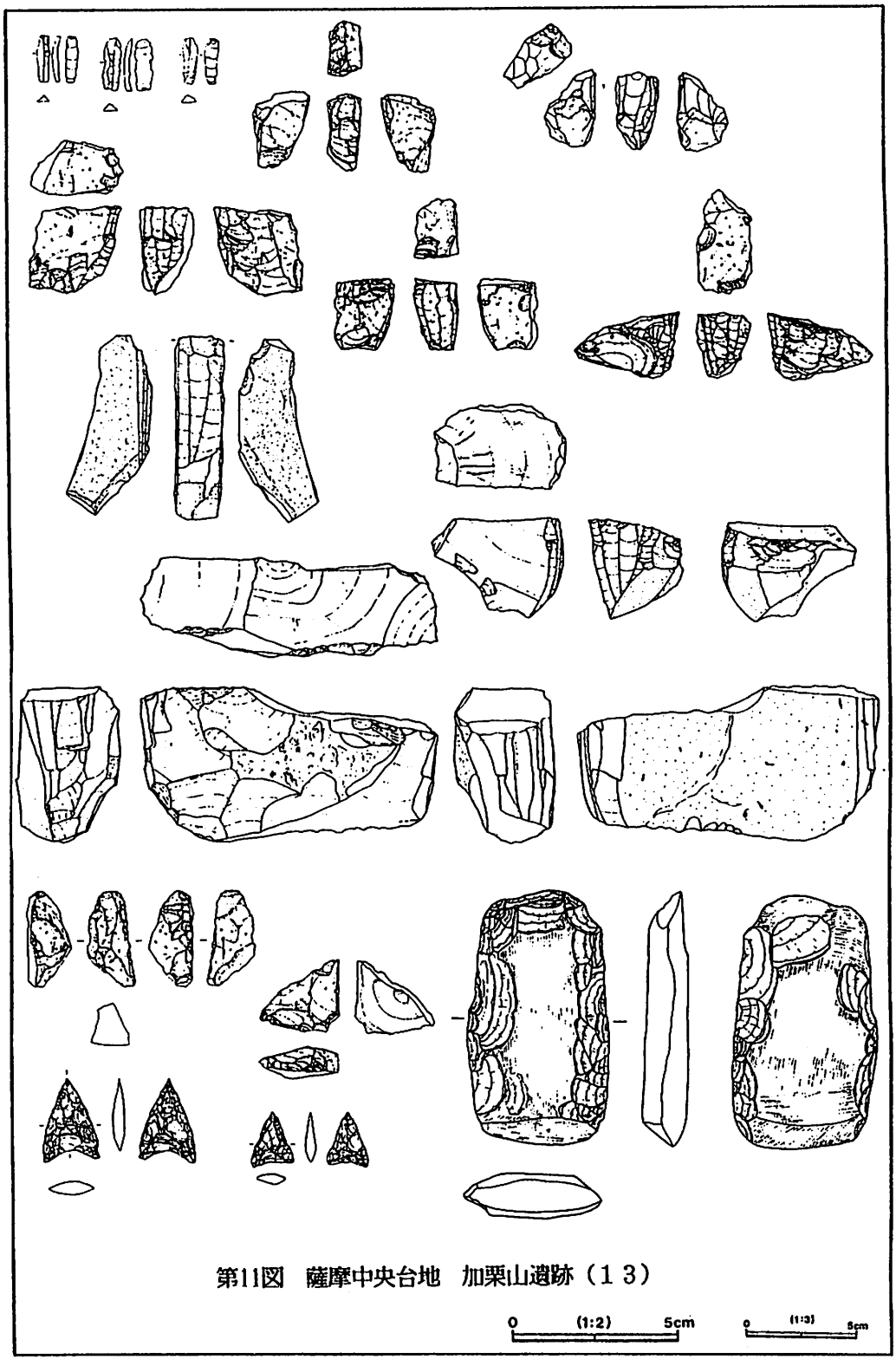
0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



第9図　姶良台地　石峰遺跡（１１）



第10図　薩摩中央台地　加治屋園遺跡（１２）

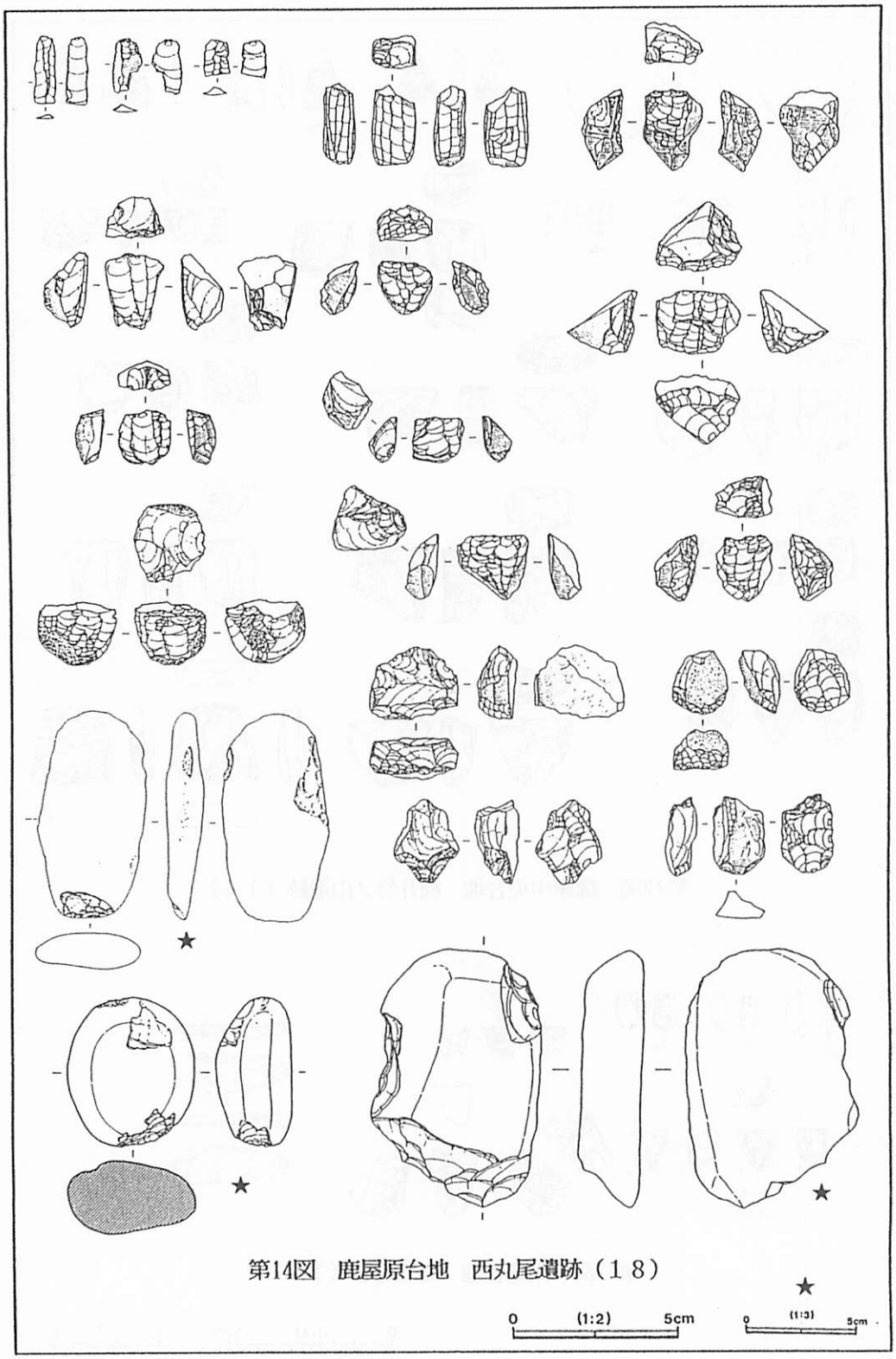


第11図　薩摩中央台地　加栗山遺跡（１３）

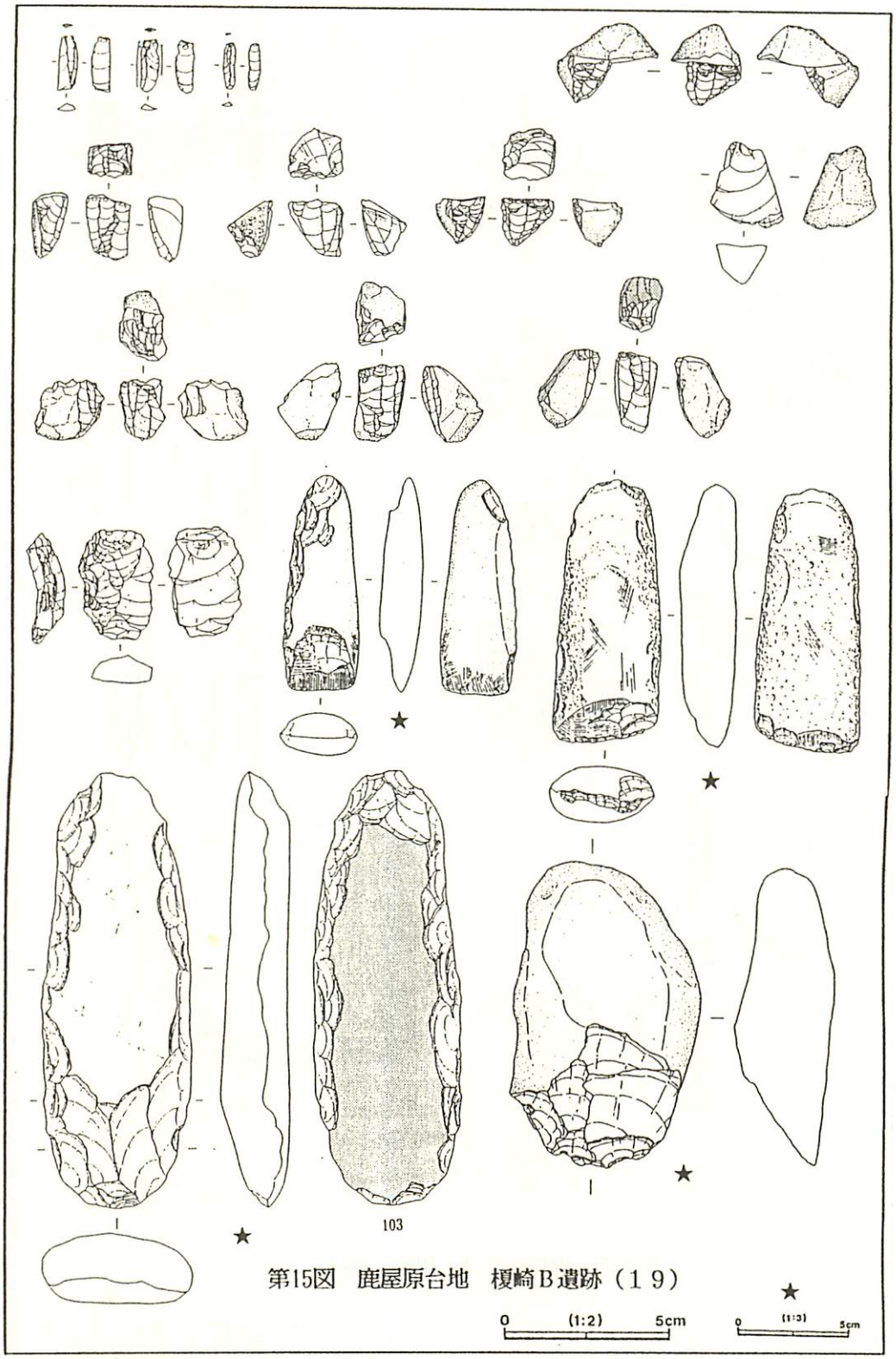
第12図　薩摩中央台地　横井竹ノ山遺跡（１４）

第13図　南薩台地　登立遺跡（１７）

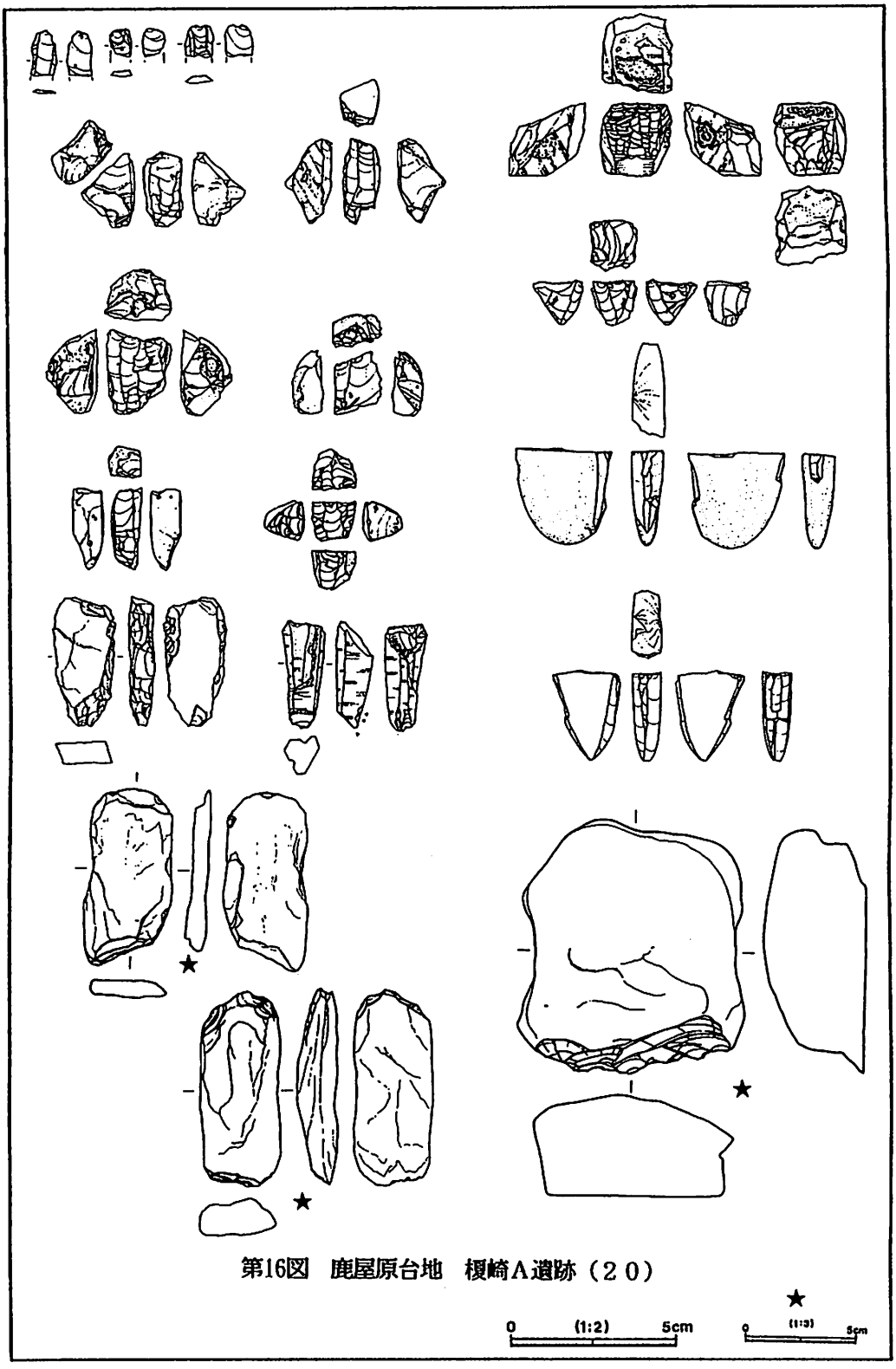
0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



第14図　鹿屋原台地　西丸尾遺跡（１８）



第15図　鹿屋原台地　榎崎B遺跡（１９）



第16図　鹿屋原台地　榎崎A遺跡（２０）

第 1 表　　九州南部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鎹	土				
1	里城	17	7										1	○	○	有	熊本県球磨郡多良木町	人吉盆地	報告書　有
2	別府		○													有	熊本県球磨郡須恵村	人吉盆地	
3	尾鉢		○														熊本県球磨郡上村	人吉盆地	
4	深水谷川																熊本県球磨郡相良村	人吉盆地	
5	深水小園	○															熊本県球磨郡相良村	人吉盆地	
6	狸谷	7	3												3	有	熊本県球磨郡山江村	人吉盆地	報告書　有
7	城馬場	○	○													有	熊本県球磨郡山江村山田	人吉盆地	
8	白鳥平　I	10	10													有	熊本県人吉市赤池水無町	人吉盆地	報告書　有
9	〃　II	○													○	有	熊本県人吉市赤池水無町	人吉盆地	未報告
10	島畑		○														熊本県人吉市赤池水無町	人吉盆地	
11	高山	○	○														熊本県人吉市下戸越町	人吉盆地	
12	田野		○														熊本県人吉市田野町	人吉盆地	
13	石飛東	6	9									6	3			有	熊本県水俣市石坂川	上場・石飛高原	報告書　有
14	石飛	○	○	○								○		○	○	有	熊本県水俣市石坂川	上場・石飛高原	
15	ぐみの木段	○	○									○					熊本県水俣市湯出頭石	上場・石飛高原	
16	五目木	○	○														熊本県水俣市湯出頭石	上場・石飛高原	
17	郷田	○	○													有	鹿児島県出水市上大川内	上場・石飛高原	
18	狸山	○	○													有	鹿児島県出水市上大川内	上場・石飛高原	
19	上場	○	○	○	○									○	○	有	鹿児島県出水市上大川内	上場・石飛高原	5次にわたる調査の実施 1次のほか未報告
20	日東	○	○													有	鹿児島県大口市平出水	上場・石飛高原	
21	樹底下塔尾		○														熊本県天草郡倉岳町	天草諸島	
22	妻の鼻																熊本県本渡市亀場町	天草諸島	九州旧石器文化研究会による細石器文化資料集成より
23	内ノ原																熊本県牛深市久玉町	天草諸島	
24	尻無平	72	6														鹿児島県出水郡東町川床	天草諸島	報告　有
25	山門野	3	1													有	鹿児島県出水郡東町山門野	天草諸島	旧石器時代遺物は採集
26	涼松	5	4														鹿児島県出水郡野田町上名	出水丘陵	報告　有
27	赤剥	8	4														鹿児島県阿久根市鶴川内	出水丘陵	報告　有
28	中尾	1	1														鹿児島県阿久根市鶴川内	出水丘陵	報告　有
29	成岡	721	180	19								10	12			有	鹿児島県川内市中福良町	川内川下流域	報告書　有
30	西ノ平		3	2								1				有	鹿児島県川内市中福良町	川内川下流域	報告書　有
31	小田		○														鹿児島県薩摩郡東郷町斧淵	川内川下流域	
32	大椿	○	○													有	鹿児島県薩摩郡東郷町阿淵	川内川下流域	未報告

第 3 表　九州南部　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鐵	土	発掘	所在	所属	備考
33	池頭　A		○														鹿児島県薩摩郡樋脇町	川内川下流域	加治屋園型MC多数採集
34	松山ケ迫	○	○													有	鹿児島県日置郡入来町浦之名	川内川下流域	未報告
35	床並　B	406	27	2	4	3						7				有	鹿児島県日置郡入来町浦之名	川内川下流域	礫群2 基
36	新開原	○	○													有	鹿児島県大口市宮入	大口栗野盆地	未報告
37	郡山	○	○													有	鹿児島県大口市宮入	大口栗野盆地	現在調査中
38	山崎　B	4	7									1	1			有	鹿児島県姶良郡栗野町木場	大口栗野盆地	旧石器時代の遺物は二次砂礫層より
39	諏訪	○	○	○	○											有	鹿児島県姶良郡栗野町木場	大口栗野盆地	未報告
40	木場　A	5														有	鹿児島県姶良郡栗野町木場	大口栗野盆地	下層に出ナイフ形石器文化
41	木場　A－2	8	1													有	鹿児島県姶良郡栗野町木場	大口栗野盆地	下層に出ナイフ形石器文化
42	麦生田	○	○														鹿児島県姶良郡栗野町北方	大口栗野盆地	多量のMC・MBが採集される
43	中尾田		1													有	鹿児島県姶良郡横川町中尾田	姶良台地	
44	風塚	9	9	3							2	1台	1			有	〃　姶良郡横川町下ノ風塚	姶良台地	報告書　有
45	石峰	177	13	4	1			1						2	○	有	鹿児島県姶良郡溝辺町石峰	姶良台地	報告書　有
46	柳ケ迫		1													有	鹿児島県姶良郡溝辺町柳ケ迫	姶良台地	報告書　有
47	長ケ原	1	1								3					有	鹿児島県姶良郡溝辺町長ケ原	姶良台地	報告書　有
48	加治屋園	340	343	6	12	3	3				2				114	有	鹿児島県鹿児島市川上町	薩摩中央台地	報告書　有
49	加栗山	2532	349	119				1	1		15	1	21	13		有	鹿児島県鹿児島市川上町	薩摩中央台地	報告書有　石皿も共伴
50	横井竹ノ山	88	20			1				6	6			25	23	有	鹿児島県鹿児島市犬迫町	薩摩中央台地	報告書有模形石器 4点
51	枦堀	○	○													有	鹿児島県日置郡松元町石谷	薩摩中央台地	現在調査中
52	仁田尾	○	○	○										○		有	鹿児島県日置郡松元町石谷	薩摩中央台地	現在調査中
53	塚ノ越		1													有	鹿児島県日置郡吹上町入来	南薩台地	細石核は表採
54	冨見ノ上	3	1														鹿児島県日置郡吹上町入来	南薩台地	
55	宇治野原	1	3													有	鹿児島県日置郡金峰町白川	南薩台地	トレンチ調査
56	平田尻	○	○													有	鹿児島県加世田市	南薩台地	未報告
57	石坂上		○														鹿児島県川辺郡知覧町	南薩台地	
58	奥木場	2	1									6	2			有	鹿児島県枕崎市東鹿籠町	南薩台地	報告書有ナイフ形石器文化と混在
59	登立	25	4								2					有	鹿児島県川辺郡知覧町塩屋	南薩台地	報告書　有
60	岩本		5													有	鹿児島県指宿市岩元	南薩台地	報告書　有
61	小牧　3A		○													有	鹿児島県指宿市岩元	南薩台地	未報告
62	西丸尾	251	36	3	3			1		5	5					有	鹿児島県鹿屋市白水町	鹿屋原台地	報告書有　礫群4 基
63	榎崎　B	162	31	5				3	6	1	2					有	鹿児島県鹿屋市郷之原町	鹿屋原台地	報告書有ピット群2 礫群9 基
64	榎崎　A	101	15	6	1			3	3	1	2					有	鹿児島県鹿屋市郷之原町	鹿屋原台地	報告書有　模形石器 2

第 5 表　　九州南部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鏃	土				
65	中原		2													有	鹿児島県曽於郡志布志町安楽	曽於串間台地	報告書有　畦原型MCは縄文層より出土
66	道重	21	3													有	鹿児島県曽於郡志布志町安楽	曽於串間台地	報告書　有
67	倉園　B	3	2													有	〃　曽於郡志布志町内ノ倉	曽於串間台地	報告書有　トレンチ調査
68	井手平		1													有	〃　曽於郡志布志町内ノ倉	曽於串間台地	報告書有　トレンチ調査
69	掛尾　B		1	1												有	鹿児島県曽於郡末吉町南之郷	都城盆地	報告書有　トレンチ調査
70	池増	○	○													有	宮崎県北諸県郡山田町中霧島	都城盆地	未報告（かなり まとまった資料出土）
71	東城原第2	2	4		1											有	宮崎県西諸県郡野尻町紙屋	大淀川下流域	細石刃文化の 遺物は 縄文文化層に 混在
72	沓掛		○														宮崎県宮崎郡清武町今泉	大淀川下流域	
73	田上		1													有	宮崎県宮崎郡清武町木原	大淀川下流域	MCは 表採資料
74	前原西	○	○													有	宮崎県宮崎市熊野	大淀川下流域	

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝礫器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
鏃＝石鏃、土＝土器

九州北部の細石刃文化

大分県教育委員会文化課
綿貫　俊一

1　研究の経過

1959年　鎌木義昌・芹沢長介の両氏が九州を旅行し、長崎県野岳遺跡の遺物観察と同県福井岩陰の踏査（12月）を行なう。

1960年　長崎県福井岩陰の発掘調査が鎌木・芹沢両氏によって行なわれた。2層の爪形文土器と3層の隆起線文土器に細石刃文化の組成が伴うことが判る。更に下層の4層では土器が伴出せず、槍先形尖頭器と細石刃文化の組成が伴う。

1962年　別府大学の賀川光夫氏により大分県聖岳洞窟の発掘が行なわれた。細石刃文化の組成とともに化石人類頭蓋骨が日本で初めて確認された。

1963年　和島誠一・麻生優の両氏が長崎県百花台遺跡の発掘を行なう。細石刃文化の組成が上層から、下層から百花台型台形石器を主体とした組成がみつかる。

1963年　明治大学の杉原荘介氏が佐賀県原遺跡を発掘。堆積土の状態が劣悪だったが細石刃石器群とナイフ形石器が共伴すると解釈された。

1965年　『日本の考古学1－先土器時代』が出版され、麻生優・鎌木義昌・高橋護氏・間壁忠彦らの論文がその後の細石刃文化研究に大きな影響を与える。

1969年　1972年まで3次にわたり、別府大学の橘昌信氏により宮崎県船野遺跡が発掘された。同遺跡は細石刃文化とナイフ形石器が共存する時期とされた。

1970年　麻生優氏によって1979年まで10次に及ぶ長崎県泉福寺洞穴の発掘が始まる。福井岩陰と同様に細石刃石器群に土器が共伴することが判る。ただ、福井と違うとされるのは隆起線文土器より古いとされる豆粒文土器と、爪形文土器より新しいとされる押引文土器にも細石刃石器群が組み合わさる点である。

1972年　福岡県教育委員会により1975年に及ぶ門田遺跡の発掘が始まる。門田型と称されるようになる多量の「半船底形細石核」が出土する。この他、局部磨製石斧や爪形文土器が出土する。

1973年　平安博物館の渡辺誠氏が大分県宮地前遺跡を発掘した。「船野型」細石核の分布が大分県に及ぶことが判明した。

１９７６年　大分県荻町教育委員会によって政所馬渡遺跡が発掘された。大野川流域においても福井型細石核に土器（無文部）が伴った。

１９８６年　大分県犬飼町教育委員会によって市ノ久保遺跡の発掘が始まる。1987年にも実施され、船野型細石核の分布域で神子柴型石斧３挺が集中（デポ）してみつかる。

1953年12月に長野県矢出川遺跡にて日本で最初に発見された細石刃文化は、その後、1954年12月の岡山県鷲羽山遺跡、同年８月の香川県井島遺跡、同年10月の北海道札滑遺跡、1959年５月北海道立川遺跡等の九州・四国地方を除く各地で科学的調査が行なわれ、細石刃文化が詳らかにされていった。こうした各地の情勢の中で、九州の細石刃文化を含む旧石器時代研究は、「岩宿」以前と同様の状況であった。

その後、九州外で旧石器時代研究を主導していた鎌木義昌・芹沢長介は、1959年３月下旬に九州を旅行した際、井手寿謙氏が保管する長崎県野岳遺跡等の旧石器時代資料を観察したほか、吉田正隆氏からは長崎県福井岩陰についての教授を受けている。更に彼らは同年12月22日に福井岩陰を訪れている。実はこの出来事によって、鎌木・芹沢両氏が野岳遺跡の位置づけと福井岩陰発掘のきっかけとなっている。

そして1960年の夏、考古学史上に残る福井岩陰の発掘調査がおこなわれ（以後、1964までに３回）、その結果、各層より旧石器文化伝統の遺物が出土した（鎌木・芹沢1965～1967までに３回）。とりわけ、旧石器時代の最終末と考えられてきた細石刃文化伝統が、３つの層にわたって含まれており、しかも上部２つの層では土器を伴っていた。更に北海道の「有舌尖頭器」では土器がみつかっていないことなどから、芹沢氏は隆起線文土器群を最古の段階に位置づけることになる（芹沢1967.3）。芹沢氏のこうした位置づけに対しては以後多くの賛同者が現れるが、その後、問題になった石器組成の地域差への考慮、細石刃核の型式学的考慮、そして比較資料が地域によって異なるなど矛盾が内包されていたのである。この点の経緯については栗島義明による論文に詳しく、これらの背景を知るうえで参考になった（栗島1991.3）。

ともあれ土器に細石刃が伴うというセンセーショナルな事実によって脚光をあびた福井２・３層の成果と位置づけるであるが、福井４層の位置づけについても重要な指摘を行なっている。芹沢氏は1967年３月の論文で「第４層は、（中略）土器を伴出しないとはいえ細石刃と両面加工の尖頭器を組成しているので、有舌尖頭器文化の一時期に属するものかもしれない。そうすると、これはむしろ 13000年以降関東ロームでいえば板鼻褐色軽石層

以降ということとなり、旧石器時代直後の文化層とみるのが妥当となるだろう。」とし、1967年4月の論文では「（前略）九州東部・四国・本州・北海道にひろく分布する有舌尖頭器文化も時期的には福井の第2・第3層・第4層に相当するであろう」とする。また鎌木・芹沢両氏は福井4層の細石核を半円錐形と称しているが、野岳・遠目遺跡の半円錐形細石核と明確に区分しながらも、その技術・形態・石器組成から野岳（半円錐形）→福井4層（半円錐形）→福井2・3層（船底型）の変遷を示すのである。（芹沢1967.4, 鎌木1965.3）。尖頭器を含まない矢出川文化（野岳）の組成並びに細石核との技術・形態上の違いからすればその変遷は当然の帰結であった。とりわけ福井岩陰調査責任者の一人であった芹沢氏にすれば、それまでの彼自身による尖頭器の研究から、福井4層の尖頭器が「有舌尖頭器文化」（中石器文化）に由来すると考えたことは当然であった。

1965年3月に発表された鎌木氏の論文の2ヶ月後、河出書房新社より『日本の考古学1－先土器時代』が出版される。この中に「細石器文化」と題する麻生優氏の論文がある（麻生1965.3）。麻生氏は福井岩陰の層位的事例を基軸に、資料の少なかった情勢の中で全国的な細石刃核編年を行なっている。それは基本的には「半円錐形→円錐形→船底型」という変遷であった。しかし当時すでに知られていた「九州：隆起線文土器＋細石刃文化、四国・本州：隆起線文＋有舌尖頭器文化」という並行関係等にみられる地域的な分布差と時間勾配（遺物分布の地理勾配）をあまり考慮していなかった。実はこういった事柄は、後年神奈川県上野遺跡第1文化層の細石核・備讃瀬戸の細石核を福井岩陰2・3層（土器共伴）の細石核に関連を考える意見が出てくるが、これも再考の必要があろう。

以上見てきた鎌木・芹沢両氏と麻生氏に代表される九州細石刃編年の違いは、両者が福井岩陰の成果を重要視しながらも、前者が石器組成と技術・形態といういわば“様式”的観点へシフトしていたのに対し、後者は技術・形態を論点の中心に据えたところにあると考える。芹沢氏と麻生氏は、旧石器研究の初期に遺跡の発掘やレポートの作成において共同の作業をしたことも多いことから、親密な関係にあったと考えられる。したがって両者に研究方法上の著しい違いがあったとは思えない。事実、前記の麻生論文の最末尾には「これらの細石器の編年・地方差・組成の研究を軸として解決の方向に前進するであろう。」と研究の方向性を記述しているからである。しかるに西南日本の細石刃文化の編年に対する両者の違いは、本ノ木論争の渦中で、「有舌尖頭器」の変遷に注意し、福井岩陰成果を熟知していた芹沢氏と、そうでない麻生氏の立場に起因していたと考えられる。ともあれ鎌木・芹沢両氏の変遷案は、増加する今日の縄文時代草創期資料に照らしてみてもきわ

めて重要な提示であったと筆者は受け止めている。それは福井4層の尖頭器を隆起線文土器以前の「有舌尖頭器第1段階（本ノ木・鳴鹿）」に対しているからである。1990年代の今日、芹沢氏の「有舌尖頭器第1段階・同第2段階（中林・立川）」は、本州の細石刃文化期以後隆起線文土器文化期以前に位置する、長者久保・神子柴文化期の幅の中で理解する人が多くなっている（鈴木1988.3, 栗島1991.3）。そうした点からすると、鎌木・芹沢両氏がすでに指摘した九州での隆起線文土器＋細石刃石器群の在り方とほぼ同時期の、本州・四国では隆起線文土器＋有茎尖頭器石器群という地域差と同様な地域差が、長者久保・神子柴文化期にも存在したことになる。つまり九州では細石刃が続いていたということになる。こうした指摘は、従来どちらかといえば見過ごされがちで近年の細石刃文化の位置づけの際、発掘・表採資料を隆起線文・爪形文土器展開期か野岳・休場段階のいずれかに落ち着かせる傾向があったように思える（萩原1986.6, 橘1979.9）。

以上、鎌木・芹沢両氏と麻生氏の見解を観察してきたわけであるが、その後の研究に与えた影響は、麻生氏の見解の方がより大きいと言える。その理由は、鎌木・芹沢両氏の論文が『歴史教育』・『信濃』という考古学専門誌ではない定期刊行物（雑誌）に掲載されたのに対し、麻生氏の論文は、大手出版社による（現在でも入手可能）シリーズ出版物という違いであろうと考えられる。それは実際に重要な論点であるにも関わらず、麻生氏の論文が細石刃石器群を論じた論文には必ずといっていいほど参考文献として引用されているのに較べて、鎌木・芹沢両氏の論文が引用されることが非常に少ないことからも理解できる。その後麻生氏の論文に影響を受け、細石刃核の技術・分布・編年について論じられるようになるが、福井4層に尖頭器が組成されるという事実に立脚した位置づけは1991年3月の栗島氏の論文発表までなかったのである（栗島1991.3）。

栗島氏以前に多くの研究者が鎌木・芹沢両氏の見解に学び、福井4層での細石刃と尖頭器の共伴に目をむけていたならば、九州における長者久保・神子柴文化並行段階の位置づけが詳らかにされていたに違いない。当時においては唯一というべき細石刃文化の層位関係や、福井2・3層と福井4層の細石刃技法の違いについてが語られたといえる。

さて、その後の研究動向は福井岩陰のレポートや、麻生氏の論文発表後、細石核の技術・分布・編年を論点の中心に据えた研究方向に展開していくことは前述したが、その際、「半円錐形」細石核という用語に由来する問題が出てくるのである。「半円錐形」細石核は、前述した鎌木氏・芹沢氏・麻生氏の論文の中で、福井4層・宇久島・野岳・遠目の細石刃核に対して用いられた。彼らが、野岳と福井4層の「半円錐形」細石核を編年案のな

かで区分したのは、実質的に技術の違いによる「形態差」を認識していたからであるが、問題は同一の用語を使用した点に生じていく。更にまた「鷲羽山、井島の細石核は、福井2・3層の石核を片面のみ加工した形態に類似していることに反し、岡山県玉野市出崎採集の細石核を標準とする一群は、半円錐形の形態をもち、福井4層または長崎県遠目、野岳遺跡の細石核と類似するという事実である。（中略）福井4層の細石核は厳密な意味では、遠目、野岳ほど正確な半円錐形は呈しておらず、あるいは鷲羽山・井島の石核により近いものかもしれない。」という重要な結論が、鎌木・高橋護両氏によって指摘されている（鎌木・高橋1965.5）。前記の論点を前段・中段・後段に分けた場合、前段をうけて後段を読むと福井4層の細石核は上層である2・3層に近い属性をもっていると彼らが考えていたと受けとめることができる。こうした記述を読んでも、福井岩陰の発掘者たちが4層の細石核について「半円錐形細石核」と称しながらも、他の遺跡出土の「半円錐形細石核」との技術上の違いを認識していたことに注意する必要があったのである。なぜならばこの後、福井4層出土の細石核が「野岳型細石核」の標式的・層位的遺跡と理解されていくことはなかったのである。

さて上述してきた「半円錐形細石核」あるいは「円錐形細石核」の標式的遺跡とされてきた野岳遺跡の細石核についての本格的論文が鈴木忠司氏によって提出された（鈴木1971.8）。この論文では、多様な体形を見せる野岳遺跡出土の細石核は技術的再検討の結果、考古学上の「円錐形」のあり方とは異なり、「角柱形」をとるのが一般形とされた。そこで西南日本に広がる同系の細石核を「野岳－休場型細石核」と称した。この鈴木論文は、それまでの細石核がいわば感覚的表現による名称であったのに対し、本格的な技法解明を通じ、西南日本における同形態の細石核を体系的に理解しようという方向を示した点で画期的な論文であった。ほぼ同様な意味で、宇久島出土細石核の主体は「半円錐形」ではなく「半船底形」にあるとした清水宗昭氏の意見もある。つまりこれらの見解は、半円錐形～円錐形という用語を用いた遺跡の理解（技術・編年）は現実にあわないということであり、これに代わる名称として「野岳型細石核」が用いられるようになる。この点で福井4層の位置づけが「野岳型細石核」の用語のもとに迷走していくきっかけとなったとも考えられるのである。それはなぜかというと実質的に、円錐形・半円錐形＝野岳型細石核という状況が暗黙的に理解されつつあったと考えられるからである。それは鈴木氏が野岳型細石核とした標本の類例に対し、半円錐形とした池水寛治氏のレポートもあるからである（池水1967.10）。この点について具体的にどうであるか、問題となる論文を見てみよう。

最初に橘昌信氏の手による1973年と1975年の論文を見る。1973年の橘論文においては、彼が福井岩陰の調査に参加していたこともあってか、BⅡ型・BⅢ型という表現ながら、鎌木・芹沢両氏も認識していた2種類の「半円錐形細石核」の存在を認識していたのである。ところが、1975年の橘論文においては、あくまでも2種類の半円錐形細石核のうち、野岳型とは異なる1種であった福井4層例についても「野岳型」の名称を用い、標式的、層位的遺跡として位置づけている（橘1975）。橘氏は1990年代の今日に至るまで細石刃文化期に属する遺跡の発掘を手掛けられた他、それらに関するレポート・論文なども多く、現在の九州において意欲的な研究活動をされている一人である。しかも上述の見解は今日までの橘氏の著作に一貫しており、看過できない。それは「野岳型」という字面だけによる細石核の比較によって現実の遺物から離れた方向にむかったからである。ここに至っては、鈴木氏が詳細な検討によって「野岳型細石核」を提唱した真意と逆の方向と言える。こうした橘氏の意欲的活動をうけて、小畑弘己氏も、1983年に九州における細石刃技法に関する総括的論文を発表しており（小畑1983）、その内包する問題については触れたことがある（綿貫1992.10）。それは、小畑論文の前段では福井4層の細石核を野岳型とは異なる1種（BⅡ型）で瀬戸内との関係を説明するが、後段の編年を記述した部分では、野岳型（BⅠ型）のみを説明するなど用語が一人歩きしているのである。

これまで、福井4層の問題と「半円錐形細石核」についてどのように理解されてきたのかふりかえってみた。その結果、普段我々が当然のように理解してきたことのなかに、内包している様々な問題が垣間見れることがわかった。

さて、九州の北半分部分においては、いまひとつ重要な細石器文化伝統がある。それは九州東部を中心に分布する「船野型細石核」である。1970年、宮崎県岩土原遺跡で初めて見つかって以来、地名表に記されているとおり宮崎県北部、大分県大野川流域を中心に多くの遺跡が見つかっているが、研究の歴史が長いとは言えない。その後主要遺跡の一つである宮崎県船野型遺跡が1970年から数年にわたって発掘されてからも低迷であった。そして鈴木忠司氏による1979年の論文、1977年の大分県小牧遺跡、1980年大分県上下田遺跡の発掘調査が橘昌信氏によって行われたことが、当地域における研究が急速に進展した画期である。こうした調査・研究が詳らかにしたことは、船野型細石核の主要分布圏・組成・細石刃技法など多岐にわたる。

主要分布圏に関しては、先行するナイフ形石器群以来流紋岩を主要な石材とする石器群の分布域と同じである。すなわち、宮崎県北部と大分県の大野川流域である。これとは別

に、東海地方まで広がる細石刃文化伝統と理解する前述の鈴木論文がある。

組成については、ナイフ形石器群と長者久保・神子柴文化伝統に属する遺物の共伴問題がある。九州における、ナイフ形石器群との共伴問題については佐賀県原遺跡が嚆矢である。原遺跡は明治大学によって1963年に発掘された。その動機は当初からナイフ形石器群と細石刃石器群が共伴するのではないかという表面採集遺物に導かれた問題意識によるものであった。発掘調査の結果、石器群分析には不利な条件が判明したが、その共伴はあり得る方向で理解され、その後これらの共伴問題については明治大学出身者である橘氏に引き継がれた。橘氏が1970年代に発掘した宮崎県船野遺跡では、厚くないローム層の中から角錐状石器・台形石器・ナイフ形石器・細石刃・細石核などが垂直・平面分布の上で分離できない状況で検出された。この結果をうけて、橘氏はナイフ形石器群と細石刃石器群とが共伴する時期と理解するわけである。そこで、東九州の船野型細石核を主体とする細石刃文化はナイフ形石器と共伴する細石刃石器群段階・細石刃文化単純段階・細石刃石器群に土器が伴う段階に区分するが、西北九州もほぼ同様な基準で区分する（橘1979.10 ）。橘氏による細石刃石器群の段階区分案のうちもっとも問題にされるのがナイフ形石器群との関係である。いうまでもなくそれがセットとしてみることができないのではないかという疑いがつよく残っているからである。具体的には、原遺跡の発掘調査の結果、風化土壌であることから石器群分析には不利な条件であると理解されていた点である（杉原・戸沢1971）。この点について、西北九州の土壌堆積が劣悪であるという状況認識は1990年代の今日においても研究者の一般的理解でもある。船野遺跡のローム堆積もそうした意味で、疑念が生じる層厚しかないといえる。さて、1970年代後半〜1990年代に至る東九州地方、西北九州地方における旧石器時代研究の進展から、ナイフ形石器終末期に角錐状石器や細石核が伴っていないことが知られており（柳田1985.5, 萩原1986.6）、良好な層位にある遺跡に立脚した論が必要であろう。過渡的段階として、細石刃石器群とナイフ形石器群の組合せは様式論的観点からは充分考えられる。こうした両石器群が共存するという観点から論を展開するのは研究史上の背景もあってか、明治大学出身者に多い。しかし彼らが立論に用いた遺跡例は（杉原・戸沢1971.9, 木崎1981, 橘1973.3, 1979.9, 安蒜1979.9, 織笠1983）、近年の良好な層位的事例に照らし合わせるとき、いま一度再検討が必要といえるのではないだろうか。

船野型細石核の細石刃技法は、残された石核からの復元が試みられ、遺跡名を冠した名称が付与されている（鈴木1979.3, 橘1979.9）。その技法の外延は次のとおりである。

まず鈴木氏は、基本的に打面が単一の石核を、打面の形・側面の形・細石刃剥離進行状況・長幅などの違いによって、ＡⅠ類・ＡⅡ類・Ｂ類・ＣⅠ類・ＣⅡ類に区分した。そのうえで細石核の分類は、剥離作業の進行によって説明がつくとし、標式的な進化はＡⅡ→Ｂ→ＣⅠ→ＣⅡになると説明された。更に「打面が単一の剥離作業面・節理面からなる。打面になされる細部調整がない。打面角が直角に近いが水平打面が多く、これを打面として石核調整と細石刃生産を行う。」という分析結果を示し、こうした石核進化の特徴を「海老山技法・海老山型細石刃核」と称した。そして九州の宮地前遺跡、船野遺跡の細石核を同じ技法による「船野型細石核」と称した。

一方橘氏は九州の細石核を論じた中で、船野型細石核を「全体的な形態は船底形を呈すが両面加工素材によるものではない。細石刃核の器高と打面の幅がほぼ等しく、ずんぐりとした体形をなしている。正面観は幅の広いＵ字型～逆台形を呈する。母岩から剥離された素材の主要剥離面を打面とし、側面調整を行い、細石刃剥離作業に向かう。この際打面調整は行わない。」と定義している。

鈴木氏と橘氏の見解は、ほぼ同様ではあるが細部において差異が観察される。それは橘氏が鈴木分類のＡⅡ類・Ｂ類のうち正面観がＵ字形～逆台形を呈する例を限定していることである。要するに「船野型細石核」における定義を幅広く理解する鈴木氏に対して橘氏はこれを限定して理解しているのである。こうした定義の違いは両者における研究手法をみると必然的なものともいえる。橘氏の場合、1973年の処女論文以来、福井型・岩ヶ元型・門田型・岩土原型・野岳－休場型・船野型など、九州に分布する細石核を総括的に分類し、記述する方法に立脚している。とりわけ、実質的な船野型の紹介となった1973年の論文中で「Ｂ－Ⅰ型」とされた船野遺跡出土の細石核はわずかに13例である。これに対し鈴木氏は、１遺跡・１地方から得られた極めて多量の細石核を分類することから始めているのである。現在、九州においては多様な細石刃技法の存在がわかっている他、船野型についてもさまざまな剥離進行状況を示す例が増加している。こうした現状では橘氏の分類や外延ですべてを理解するのは困難であり、鈴木氏の分類手法をふまえて解釈するほうが、より現実的で理解しやすいであろう。

小結　これまで長々と研究史の１断面を観察してきた。それは『細石刃文化研究の新たなる展開』に際し、九州の細石刃研究を深く振り返って、再出発する必要があるのではないかと考えたからである。そこで今回取り上げた事柄は、筆者が前稿を草するにあたり細石刃文化と長者久保・神子柴文化との関係を調べる際に気付いたことである。とりわけ筆

者にとっては1987年の夏に大分県市ノ久保遺跡において3挺の神子柴型石斧が集中して発見された状況を系統的・文化的に理解する際に研究史を遡って関連する時期を考える必要があった。その結果、我々が何気なく理解して用いている福井4層や2種類の半円錐形細石核に絡む誤解がその後の研究を捻曲げている場合や、細石刃石器群がナイフ形石器と共伴するというレポートに対して資料批判も行わないまま安易に用いられる場合もあった。これらの点が、九州に住む筆者が直面している問題である。

2　遺跡の分布

A　北・東松浦半島　佐賀県北部と長崎県北部には様々な手法・型式の細石核を出土する遺跡が数百ヶ所集中する。その一つの理由として、腰岳・牟田や針尾といった黒曜石の原石産地が近隣にひかえていることにもあろう。とりわけ、上場台地、北松浦半島北部に密集する。細石核は、その多くが石ヶ元型やこれに近い例が多い。上場台地は、小河川によって開析された台地群であるが、そのほとんどで細石刃か細石核が見つかっている。更にナイフ形石器も同様に採集されている。これらのことは平坦な上場台地が、ナイフ形石器文化の人々にあっても、また細石刃文化の人々にあっても重要な遊動生活空間であったことが分かる。

一方、北松浦半島を中心とした地域にあっては、ナイフ形石器文化と細石刃文化の遺跡立地に差異があるらしい（1992年 7月19日に行われた九州旧石器文化研究会での萩原博文氏の発言）。この地区の地勢はなだらかな山岳地形と、これから派生する丘陵地形と、谷地形などからなっている。このうち遺跡は、なだらかな山岳地形の山腹平坦部と丘陵地形に集中している。これらの地区において共通するのはそのほとんどが小規模遺跡ということである。こうした中にあって、福井岩陰の各層、泉福寺洞穴の各層、城ヶ岳平子（宇久島）遺跡等では多量の遺物が出土しており、各段階における拠点的遺跡といえよう。

B　東・西彼杵半島・島原半島　遺跡はやはり多いが、松浦地区に比べるとやや少なくなる。遺跡の規模は、野岳・堂崎・百花台といった大きな場合もあるが、一般に小規模。これは腰岳・牟田と針尾などの黒曜石産地からの距離と関係があろう。遺跡は丘陵などに立地する野岳・堂崎などの遺跡や、百

花台のように火山性台地に立地する場合がある。諫早付近に集中しているが、これは工業団地造成に伴う発掘に起因している。

C　福岡平野周辺　福岡平野に集中するが、開発に伴う開発に原因があろう。遺跡規模が小規模であることが普通で、戸原や門田などの拠点遺跡は少ない。細石核は、前2地区と同様に楔形細石核の例が多く分布する。

D　菊池川流域　細石刃文化の遺跡はまばらで、3カ所しかない。その立地は沖積地を前面に臨む台地末端部で確認されている。松島・小野崎遺跡は細石核だけで50個以上見つかっており、拠点的な性格が考えられる。

E　筑後川上流　大分県と熊本県にまたがる。日田盆地周辺では盆地を臨む台地に立地する。上流の五馬台地は周囲を山と深い谷が取り囲む広大な台地である。この台地上に形成された小丘陵上に立地する。最上流部は、阿蘇外輪山北麓高原上に形成された丘陵上に立地する。五馬台地で遺跡がやや集中する傾向があるが、他の地区はまばらな分布となっている。

F　白川・緑川流域　阿蘇外輪山から西方にのびる台地上に遺跡が立地する。細石刃文化の遺跡は6ヶ所あるが、特に集中する傾向はない。遺跡の規模が比較的に大きいものに谷尾崎遺跡がある。細石核は、野岳－休場型と岩土原型が多い。

G　大野川流域　阿蘇Ⅳの埋積と大野川の開析によって生じた段丘・台地に立地する。船野型細石核を主体とする遺跡が数十遺跡あるが、密集感はあまりない。本流沿いに位置する市ノ久保遺跡では、船野型を主体とする細石核が約150 点出土している。

H　宮崎平野・延岡平野周辺　隆起海岸平野を河川が開析してできた台地に立地する。一ノ瀬川流域に密集する。流紋岩原産地に近い延岡平野周辺に群集する傾向がない。

3　細石刃石器群

A　上場台地（西北九州）

中尾二ツ枝遺跡　15例の細石核の全てが石ヶ元型（唐津型）である。この他、彫刻刀形石器がある。石材は牟田産黒曜石である。

石ヶ元下道遺跡　9例の細石核の全てが石ヶ元型で構成される。

川原田遺跡　細石核は野岳－休場型単純であるが、断面三角のスポールが1例ある。その他の細石刃以外の遺物はナイフ形石器群との区分が困難である。石材は腰岳・牟田産黒曜石である。

B　西松浦半島

福井岩陰第4層　細石核は、船野Ⅰ・Ⅱ型・岩土原型が主体のようで、これに若干の野岳・休場型がある。その他の石器には、コンベックス形の削器・槍先形尖頭器が特徴的に伴う。石材は腰岳・牟田産黒曜石が主体で、これに東浜産黒曜石が加わっている可能性がある。石器のうち、コンベックス形削器と槍先形尖頭器はほぼサヌカイトに限られる。

福井岩陰第2・3層　細石核は、西海技法・福井技法と呼ばれる技術による例がほとんどと考えられる。野岳－休場型的な例もあるが福井型細石核のヴァリエーションかも知れない。第2層からは爪形文土器・第3層からは隆起線文土器・有孔円盤がある。石材は腰岳・牟田産黒曜石が主体である。

泉福寺洞穴第5層～第11層　細石刃関係文化層は、下から11層を中心とする細石器文化層、10層の豆粒文土器文化層、7～9層の隆線文土器文化層、6層の爪形文土器文化層、5層の押引文土器文化層に分けられる。しかし、土器について言えば、10層から隆線文土器が、9層から豆粒文土器土器が多量に伴っているのが事実である。字面上では区分されているが、実際の区分は難しいと言えよう。11層からは遺物の出土数が少なく、本来的には土器が伴う可能性もあろう。細石核は稜柱形など様々な変異をみせるが、主体となるのは多少なりとも鱗状調整を施したブランクを用い、側方からの打面調整を行なう例である。石ヶ元（唐津）型と呼ばれる細石核はない。各層からは様々な彫刻刀形石器・掻器・削器が出土しているが定型的なものはない。石刃技法を用いた掻器や削器の中には細石核用ブランクとの区別が難しい例も多い。その他、8層から石斧・矢柄研磨

器、6層からサム・エンド・スクレイパー、有肩尖頭器、5層から石鏃・槍先形尖頭器・有茎尖頭器が若干量出土している。しかし、その主体は各層とも莫大な細石核・細石刃関係遺物である。これらのことは、近隣の遺跡においては数点の細石核が普遍的であることを考えると、11層を除く各層のあり方は異常ともいえる量である。したがって、近隣の遺跡にとって泉福寺洞穴は拠点遺跡といえる。そしてまさに、この点が泉福寺洞穴最大の特徴といえる。石材は福井岩陰と異なって、東浜・針尾島産黒曜石が多い。

C　西彼杵半島・島原半島（西北九州）

野岳遺跡　当遺跡の遺物は採集資料であるが、九州で最も早く発見され、「野岳・休場型細石核」の標式遺跡である。細石核は多数採集されているようであるが、体系的に分類・報告された鈴木忠司氏の論文を見ると、他型式・他技法の細石核は含んでおらず「野岳－休場型細石核単純遺跡」のようである（鈴木1971.8）。細石核類の石材は黒曜石であるが、腰岳・牟田産であるのか、東浜・針尾産であるのかは不明である。

百花台遺跡　下層に百花台型台形石器を多量に含むナイフ形石器群、上層に細石刃石器群と層位的・時期的に分離されることが証明された遺跡である。レポートに図示された細石核の全ては「野岳－休場型」に帰属するが、『日本の考古学1－先土器時代』所収の鎌木・間壁論文には1例の石ヶ元型が図示されている。これらに若干の彫刻刀形石器・削器で構成される。ナイフ形石器も出土しているようであるが平面分布上、細石刃石器群の集中部より外れており、その共伴は疑わしい。石材は黒曜石であるが、産地は不明である。

D　筑後川上流域

宇土遺跡　細石器文化遺物には、野岳－休場型細石核・削器・敲石・細石刃等からなり、その出土状況は良好で、上下の分布領域が約15cm前後となっている。ナイフ形石器は含まず、石材は90%以上が腰岳・牟田産黒曜石である。隣接する遺跡に五馬大坪遺跡があるが、これも野岳－休場型細石核で、腰岳・牟田産黒曜石を石材とする。

E　大野川流域

市ノ久保遺跡　細石刃核約 150点のうちほとんどは船野Ⅰ・Ⅱ型で、これに若干の野岳－休場型・岩土原型を含む。この他、大小の各種掻・削器や神子柴型石斧・チョッパーなどで構成される。なお、神子柴型石斧の出土状況は3例が隣接していた。数千例に上る遺物のほとんどは流紋岩を石材とし、十数例の野岳－休場型細石核には腰岳・牟田産や在地のチャートが利用される。遺物が数千点、広範囲にわたって分布しており、大野川本流沿いの拠点集落と考えられる。

松山遺跡　細石核24点のほとんどは船野Ⅰ・Ⅱ型で、これに若干の野岳－休場型・岩土原型を含む。この他、各種の削器・神子柴型石斧の欠損例などで構成される。遺物のほとんどは流紋岩を石材とし、若干の野岳－休場型細石核には腰岳・牟田産黒曜石や在地のチャートが利用される。市ノ久保に隣接する遺跡である。

上下田遺跡　細石核の特徴は、市ノ久保・松山の両遺跡とほとんど同じで、この他、各種削器や彫刻刀形石器・槍先形尖頭器・神子柴型石斧の未成品・礫器などで構成されている。石材のほとんどは流紋岩であるが、石斧の未成品が安山岩、野岳－休場型細石核にチャートが用いられる。細石刃の中には77例中５例が腰岳・牟田産黒曜石を用いる。

政所馬渡遺跡　細石核の特徴は、３例とも福井型を基調とした例で、作業面方向からのスポール剥離で打面を作る例が目立つ。この他、サム・エンド・スクレイパーがある。石材の大半は腰岳・牟田産黒曜石で、これに若干の在地系チャートが加わる。

F　番匠川流域

聖嶽洞窟遺跡　２例の野岳－休場型細石核・削器・ピーエス・エスキーユ・使用痕ある剥片・細石刃・台形石器等からなる。この他、骨角器・化石人骨・月輪熊の化石が出土している。石器群の石材は 100%腰岳・牟田産黒曜石を用いる。

G　宮崎平野

船野遺跡　数百mの間隔をおいて、第１地点と第２地点がみつかっている。第１地点からは流紋岩を石材とする船野Ⅰ・Ⅱ型・南九州産黒曜石を石材とす

る野岳－休場型細石核がある。この他、未公開資料の中には、無茎式の石鏃・斧状石器がある。船野Ⅰ・Ⅱ型細石核、畦原型細石核と野岳・休場型細石核は若干分布域がずれており、時期区分できる可能性もある。第2地点もほぼ同様なあり方であるが、野岳－休場型が1例と少ない。第1地点・第2地点とも様々な石器があるが、ナイフ形石器・角錐状石器・台形石器に本来伴うものとの区分が困難である。

井野遺跡　細石核6例は、畦原型単純である。この他、石鏃が出土している。細石核の石材は硬砂岩で、石鏃は姫島産黒曜石である。

4　細石器文化の様相

これまで、九州北半部で発見された代表的な遺跡について触れてきた。ここではそれらの様相についてまとめてみたい。

さて、第1表は九州旧石器文化研究会が作成した「九州旧石器時代関係資料集成Ⅰ－細石器文化編－」を元に筆者が分類作成した。これを見ると、西北九州地域では野岳型と石ヶ元型を出土する遺跡が最も多く、ついで岩土原型の順になる。土器を共伴することが確実な福井Ⅰ・Ⅱ型は、福井岩陰・泉福寺洞穴を除くとほとんど分布しないことが注意される。こうした状況は福岡県側も同様な傾向である。しかも、野岳型と石ヶ元型は同じ遺跡から出土することは少ない。この点は野岳型と石ヶ元型が所属する相対的な編年的位置が違うということであろう。熊本県の菊地川流域や熊本平野周辺も野岳型と岩土原型が主体的であるが、前者がやや多い。大分県側の筑後川上流部では野岳型単純が多い。

大野川流域・別府湾周辺においては圧倒的に船野型が多く、付随的に他型式の細石核も分布する。そして野岳型単純と他型式の細石核とが共存する場合は少ない。なお当地域においては政所馬渡遺跡・エゴノ口遺跡・田良原B遺跡で、福井型細石核が伴っている。

宮崎県側は、船野型と畦原型が主体として分布するが、両型式が採集や発掘で一緒に見つかっている遺跡は多くない。井野遺跡では畦原型のみ6点が出土していることもあるので、畦原型細石核単純段階の存在も考えられる。船野遺跡第1地点では野岳－休場型が船野型を量的に凌駕する。しかも平面分布上両者は若干のズレが観察されるので、時期的に区分されよう。大分県側も含めて、発掘例で船野型と野岳型が同一のブロック内に分布するとき、後者は量的に少ない特徴がある。したがって、船野遺跡第1地点における船野型と野岳型を同一段階のセットと見ると、通常のあり方から突出した量的比率を示している

第1表　遺跡ごとの細石刃核の種類

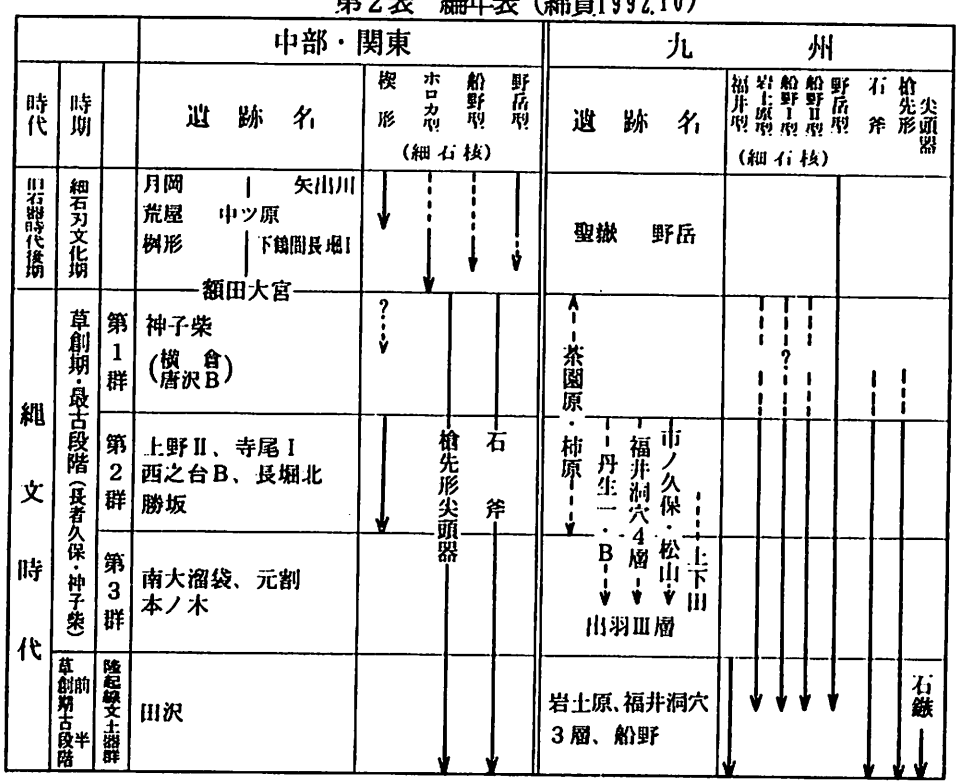
No.	遺跡名	野岳型	福井一型	福井二型	円田型	石ヶ元型	岩戸段型	宇久島型	船野一型	船野二型	畦原型
	長崎県										
	<五島・松浦周辺>										
33	寄宿遺跡	2									
31	九爪遺跡	1									
30	城ヶ岳平子遺跡		4	1			1	7			
4	田崎遺跡					1					
3	津吉遺跡					2					
16	長田池遺跡					1					
32	赤尾遺跡					1					
47	大堂遺跡	1				1					
8	松瀬田遺跡					2					
10	福井遺跡		5	3			2		1	1	
18	泉福寺洞穴遺跡	4	34	14	4	4	8				
	(I) 細石器文化層		(1)	(1)							
	(II) 豆粒文土器文化層	(1)	(22)	(3)		(2)	(3)				
	(III) 隆起文土器文化層	(2)	(2)	(2)	(4)		(4)				
	(IV) 爪形文土器文化層	(1)	(7)	(5)		(1)	(1)				
	(V) 押引土器文化層		(2)	(3)		(1)					
	<大村湾・島原周辺>										
29	百花台遺跡	7				1					
27	西輪久道遺跡	21					2		2		
40	鷹野遺跡	5	1	2							
23	野岳遺跡	24									
24	堂崎遺跡	10			1	6		10			
26	平遺跡	1									
25	平木場遺跡	1									
24	松山A遺跡		1		1	1					
	佐賀県										
	<松浦・唐津周辺>										
2	石ヶ元ト遺遺跡					9					
3	海中野遺跡					1					
4	コクダシ遺跡					1					
5	馬部甚蔵山遺跡	2				2					
6	枝去木山中遺跡					1					
7	中尾二ッ枝遺跡					14					
8	磯道遺跡	2									
9	川原田遺跡	3									
10	牛石遺跡	1									
11	原遺跡	6			2	1	1		1	1	
13	竹木場前田遺跡								1		
17	枝去木分校入口遺跡					2					
19	笹の尾遺跡					1					
21	唯木場遺跡	1									
23	山田松遺跡					3					
25	丹上遺跡	1									
26	押川遺跡					1					
31	前田A遺跡					1					
32	白蛇山遺跡			2							
35	ヤヒギア遺跡		1		1						
43	大島周辺遺跡	7		1							
44	サカセ西方遺跡	2	1		2	2					
	<佐賀平野周辺>										
36	小路遺跡					1					
37	山下遺跡						1				
38	櫟分遺跡			4							
39	東分遺跡						1				
	福岡県										
	<福岡平野周辺>										
9	諸岡池遺跡					1					
11	鹿部東町遺跡					1					
12	蒲田池遺跡						1				
14	赤石池遺跡				1						
17	戸原遺跡	3			6	1	2				
21	笠岡谷古墳群					1					
23	瑞納遺跡					1					
28	有田遺跡103次		1								
29	藤山A遺跡				1						
34	三宅廃寺				1						
31	蒲田(部木)遺跡	7					3	3			
36	柏原N遺跡					2					
37	弥永遺跡B地点	1									
38	諸岡遺跡G区	3									
39	板付遺跡A2区	1									
40	高畑遺跡10次	1									
33	井尻B遺跡	2									
45	天神池前遺跡					1					
46	柏田遺跡	1					1				
47	門田遺跡(辻田地区)	4			5	7					
48	門田遺跡(門田地区)		1		6	5					
49	門田遺跡(谷地区)	9	2	1	9	6	2		1		
59	萩原遺跡	2									
58	野間坂遺跡	5									
	福岡県										
	<筑後平野周辺>										
68	庄屋野遺跡		1								
69	六ロ遺跡					1					
72	野口遺跡						1				
70	ひょうたん山遺跡					1					
71	赤坂遺跡								1		
73	中尾遺跡	2									
75	大中平遺跡	8									
	<遠賀川・宗像周辺>										
1	砂井田遺跡	1									
5	長行遺跡						1				
7	原始遺跡					1					
	熊本県										
	<菊池川流域>										
2	中原遺跡	2									
3	松島・小野崎遺跡	5			1		4	1			
4	伊野A遺跡	8					1		2		
5	伊野B遺跡	1									
13	鶴の浦遺跡						1				
53	鶴牛ト原遺跡						1				
	<熊本平野周辺>										
6	象山遺跡	1									
7	竹田遺跡	1									
24	谷尾崎遺跡	7					3		1	1	
30	小火器射撃場遺跡						1				
31	牧原B遺跡	1									
39	西原A遺跡	3							1		
40	西原B遺跡	2									
	大分県										
	<筑後川上流周辺>										
1	田代A遺跡	1									
7	一尺八寸山遺跡	1									
4	森尾遺跡	2									
14	平草遺跡				2	1					
16	五馬大坪遺跡	3							1		
17	宇土遺跡	2									
	<別府湾周辺>										
21	早水台遺跡	1					1				
22	エゴノ口遺跡			4							
26	雄城台遺跡								1		
27	丹生2・H遺跡	1									
28	丹生7・D遺跡	1?		3							
	<大野川上・中流域>										
31	政所馬渡遺跡	1		2				1			
30	聖岳遺跡	1									
39	宮地前遺跡								2		
37	松木遺跡								1		
43	小牧遺跡								1	1	
48	上下田遺跡	1					3		2	2	
49	山ノ久保遺跡									2	
50	松山遺跡						1		4	1	
51	長谷遺跡								1		
38	一丁田遺跡								1		
45	高畑遺跡	1					1		1	1	
53	田良原B遺跡		1								
	宮崎県										
	(五ヶ瀬川・耳川流域)										
1	赤木遺跡								3	2	
5	岩土原遺跡	4					2		1	1	
6	寺迫遺跡										1
	<宮崎平野北部>										
8	満野地遺跡								1		
9	大久保遺跡										7
10	白鳥遺跡										1
11	椎原遺跡								1		
12	谷の口遺跡								2		
13	住吉B遺跡								1		
20	一丁田遺跡								1		
23	西畦原遺跡										3
24	東畦原遺跡										3
26	瀬戸口遺跡	1									
33	松本遺跡								1		2
35	岡宿遺跡										2
34	船野遺跡	4	1						5		1
43	六野原遺跡										2
44	法華寺遺跡										1
44	井野遺跡										6
46	東城原第2遺跡								2	2	

ことになる。

以上、九州北半部における細石核の分布を観察してきた。その結果、西北九州・北部九州においては、野岳型と石ヶ元型が主体となるが、他の地域においては野岳型・船野型・岩土原型・畦原型などが主体となって分布することが判った。

さて、岩土原型を除く楔形細石核（福井型・石ヶ元型・門田型・宇久島型）は西北・北部九州に分布している。それらのうち、石ヶ元型・門田型・宇久島型も福井・泉福寺と同様に、その編年的位置は隆起線文土器出現からと推定しておきたい。石ヶ元型・門田型・宇久島型における、ブランク製作→縦・横の削片剥離（打面作出）→細石刃生産という技法上の近縁性から見ても福井Ⅰ・Ⅱ型と型式学上近い関係にある。つまり福井・泉福寺での福井Ⅰ・Ⅱ型細石核と土器の共伴を念頭におくと、そうした楔形細石核もまた同様な時期に位置づけることがより自然である。逆に言えば、そうした楔形細石核を隆起線文土器群以前（長者久保・神子柴文化並行期・矢出川遺跡の時期）に位置づけることは、今の段階にあっては無理があるということである。そうした推定を支持する事例として、城ヶ岳平子（宇久島）や門田谷地区における土器の出土がある。こうした脈絡のなかで九州の「福井型細石核・西海技法」と南関東の類例を比較する必要があろう。

第2表　編年表（綿貫1992.10）



上述したように見てくると、西北・北部九州における細石核出土遺跡の大半は隆起線文土器群段階からそれ以後ということになる。それでは西北・北部九州以外の地域はどうであろうか。

大分県・宮崎県の東九州地域では、船野型細石核を主体とする石器群が船野遺跡のようにナイフ形石器群を伴う段階から土器を伴う段階までの幅で考えられてきた。（橘1979.9）。しかし、ナイフ形石器群を伴うという遺跡は近年の層位学的事例によって疑問視される場合が多い。むしろ「ナイフ形石器群は伴わない」と考えると、組成上の違いはあまりないのである。つまり、近接した時期であると考えても無理がない。

さて、東九州地域においては、西北九州で見られるような楔形細石核がほとんど分布していないが、人の住まない空白地域であったとは考えにくい。むしろ西北九州系の楔形細石核が分布していない地域を埋めるかのように、船野型細石核が分布することに注意すべきである。そこで船野型細石核が主体となる石器群の位置づけが必要になってくる。そうした位置づけの指標として船野型細石核を主体とする石器群の組成を見ると、そのほとんどに長者久保・神子柴文化系や縄文時代草創期的な遺物が観察されるのである。具体的には、市ノ久保・松山遺跡での神子柴型石斧、上下田遺跡の槍先形尖頭器の共伴がある。さらにまた、船野遺跡から出土した未発表資料の中には平基石鏃や石斧とおぼしい例がある他、岩土原遺跡では隆起線文土器が出土している。こうした事情から、船野型細石核を主体とする石器群は長者久保・神子柴文化並行段階を中心に、一部福井3層並行段階（隆起線文土器群）にかかる時期に盛行したと考えられる。このような脈絡のなかで福井4層の槍先形尖頭器を理解することができよう。

次に、船野型細石核を主体とする組成に先行〜後出すると考えられる組成について見てみよう。

まず、西北・北部九州において古相と考えられる遺跡は、野岳－休場型細石核を主体とした百花台遺跡・野岳遺跡の組成があげられよう。これらの遺跡が古相という層位的証拠はないが、土器や矢柄研磨器をもつ楔形細石核より新しくすることはできない。また近年の南関東などでの層位的事例は、野岳－休場型を古相とすることを支持するだろう。したがって、野岳→福井4層（長者久保・神子柴文化並行段階）→福井2，3層・泉福寺・門田・城ヶ岳平子・石ヶ元下道という変遷が、今のところ道理にかなう。こうした変遷のうち、古相の野岳遺跡に対応する遺跡が東九州ではやや不明瞭である。大野川流域付近では有名な聖嶽洞窟例の他、大分川上流域の三反田遺跡がある。これらは、その技術と組成か

ら見て野岳－休場型細石核単純期と考えられる。宮崎県側においては船野遺跡第1地点における黒曜石を石材とする多量の野岳－休場型細石核がある。これも前述した理由で単純期と考えられる。こうした野岳－休場型細石核単純期が東九州においても古相であるという根拠は、船野型細石核が新しい段階まで残るという型式学上の連続性からである。

一方、船野型細石核以後はどうであろうか。大分県側の大野川流域周辺では政所馬渡遺跡、宮崎県側では井野遺跡が船野型細石核以後の代表的な遺跡である。そのうち大分県の大野川流域では、黒色帯層中の段階から船野型細石核を主体とする段階に至るまで、人々は好んで流紋岩を石器の石材とした。ところが、政所馬渡遺跡から出土した福井型細石核の段階になると、黒曜石やチャートばかりで以後全く流紋岩を用いることはない。宮崎県側では、流紋岩を石材に用い、これに隆起線文土器が伴う岩土原遺跡がある。これが事実とすれば、宮崎県側においては福井型細石核並行段階にまで流紋岩が用いられたことになるが、縄文時代早期には用いられていない。一方、宮崎県側の畦原型細石核が新しいという根拠は、鹿児島県側で畦原型とともに石鏃の共伴例が多いということにある。つまり縄文時代に発達する石鏃は新しい文化要素であるので、これに伴う畦原型細石核もまた編年上新しい部分に偏ると言える。

以上の結果をうけて、典型的変遷の方向をまとめると次のようになる。大野川流域では野岳－休場型（聖嶽）→船野Ⅰ・Ⅱ型（市ノ久保）→福井型（政所馬渡）となり、宮崎平野周辺では野岳－休場型（船野）→船野Ⅰ・Ⅱ型（赤木）→畦原型（井野）となる。一見従来の先学による編年案と変わらない。しかし強調しておきたいのは古相とされてきた前述の福井4層や船野Ⅰ・Ⅱ型を主体とする遺跡の大半は長者久保・神子柴文化並行段階に位置するということである。

さて、これまで記述してきたことを整理すると次のようになる。最初に野岳－休場型細石核を主体とする石器群が九州全域を席捲する。次に主要な細石核構成の一つとして船野Ⅰ・Ⅱ型が主体となる遺跡（福井4層・市ノ久保・上下田・赤木）が九州北半部に展開する段階。最後に、新しい技術の流入・特殊進化に由来する細石刃技法と旧来の細石刃技法が各地域で展開する段階となる。

5　細石刃文化研究の課題

九州の細石刃文化研究にあたっては、様々な問題があろう。筆者にとって、当面の課題は次のとおりである。

1）ナイフ形石器群から細石刃石器群への移行状況を、極めて良好な多層遺跡において、様式論的観点と個体識別的観点から検証すること。従来、両石器群の共伴するという遺跡の残存状況が良好でないにもかかわらず、文化論・編年論が展開されてきたが、より一層の注意が払われる必要があろう。

2）長者久保・神子柴文化並行段階を詳らかにすること。この点については宮崎県出羽洞窟の生活遺跡、多久三年山・茶園原の生産遺跡、熊本県柿原の“デポ”等の位置づけが含まれる。こうした問題に関連して、福井・泉福寺等西北九州における「西海技法」と、諏訪間編年（諏訪間1988.4）の段階ＸＩ（長者久保・神子柴文化）に属する月見野上野第２文化層などの細石核を関連付けて考える織笠昭氏の詳細な論文がある。この論文について東九州で研究する立場にある筆者からすれば疑問点がある。すでに触れたように大分県市ノ久保遺跡・同県松山遺跡における船野型細石核主体の細石器文化は、神子柴型石斧の共伴によって長者久保・神子柴文化並行段階（諏訪間編年の段階ＸＩ）に属することは確実である。また同県政所馬渡遺跡の細石核は、その技術上の特徴と用いた石材から福井２層～３層における細石核に対応する。こうした福井・泉福寺の細石刃石器群（土器を伴う可能性が強い泉福寺１１層を含める）には土器が共伴しており、諏訪間編年の段階ＸⅡ以降に対応する。大分県側においても石材利用の違いから船野型細石核を主体とする石器群が古く、政所馬渡遺跡における福井型細石核がより新しいことが判っている。船野型細石核主体の石器群には西北九州との強い交流を示すかのように、腰岳・牟田産黒曜石を石材とする細石刃・細石核が観察される。つまり市ノ久保・松山で見られる腰岳・牟田産黒曜石を石材に用いた細石核が、西北九州における細石核の特徴を間接的に物語っていることになる。市ノ久保・松山における腰岳・牟田産黒曜石を石材とする細石核は「野岳－休場型」であって、「福井型・西海技法」ではなかった。したがって関東における諏訪間編年の段階ＸⅡ（隆起線文土器群）以前の細石核と、西海技法を関係付けるには無理がある。

ともあれ、他地域との並行関係を詳らかにするには様々な観点からの注意深い交差編年が必要とされよう。

3）九州北半部に400ヶ所近い細石器文化の遺跡があるが、これは九州の面積から考えても突出した状況（他地域と比較して）である。この数字には他地域よりも長く細石刃文化

伝統が残るという状況もあろう。この間の事情をいま少し詳らかにする必要があろう。

4）細石刃文化から、縄文文化的石器群への移り変わりを詳らかにすること。泉福寺では爪形文土器より上層から押引文土器と細石刃石器群が出土している。この事実が凡九州的なものか、そうでない状況にあるのかを確かめる必要があろう。また泉福寺洞穴の押引文文化層と条痕文文化層の遺物を比べると、様式上のヒアタスがなお存在しているように感じられる。

以上思いつくままに、日頃筆者が考える課題を示した。その他、中国・朝鮮・本州との並行関係の問題、細石核以外の石器製作・剥片剥離技術の問題、共通性と地域的特性、細石刃の切断、細石核の打角、細石刃技法と石材分布の関係など多岐にわたる事柄がある。あるいは、筆者の力量を超えた社会論への接近も課題である。小論では、九州における細石刃文化研究において最も遅れた分野の１つである長者久保・神子柴文化並行段階を中心に記述してきた。今後は記述の及ばなかった事柄も含め、より一層の研鑽を積んでいきたい。

謝辞

小論は日頃考えていることをまとまりもなく起草してしまった。文章中に誤認や礼を欠く表現があれば、それはすべて筆者に帰するものである。また地名表や図版作成の際に用いたレポート類があまりにも膨大なためカットしてしまいました。以上二つの事柄に対して深くお詫び申しあげます。なお小論作成にあたって下記の方々から御教示・御援助をいただいた。筆を置くにあたってお礼を申し上げたい。

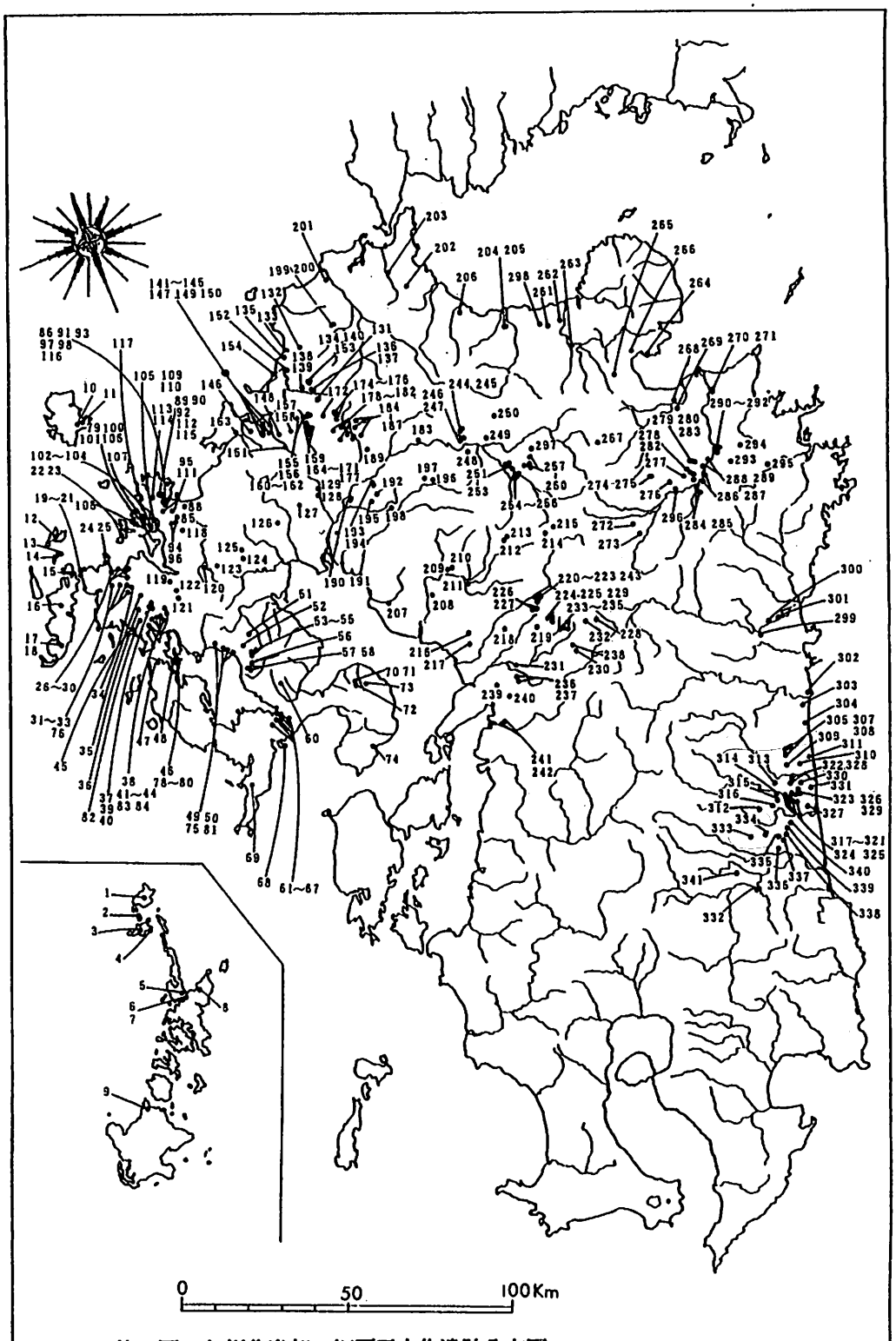
図版・地名表作成者

高橋信武・後藤幹彦・阿南亨・稲村秀介・上田由香・江島伸彦・金丸武司・小谷桂太郎・弘川幸一

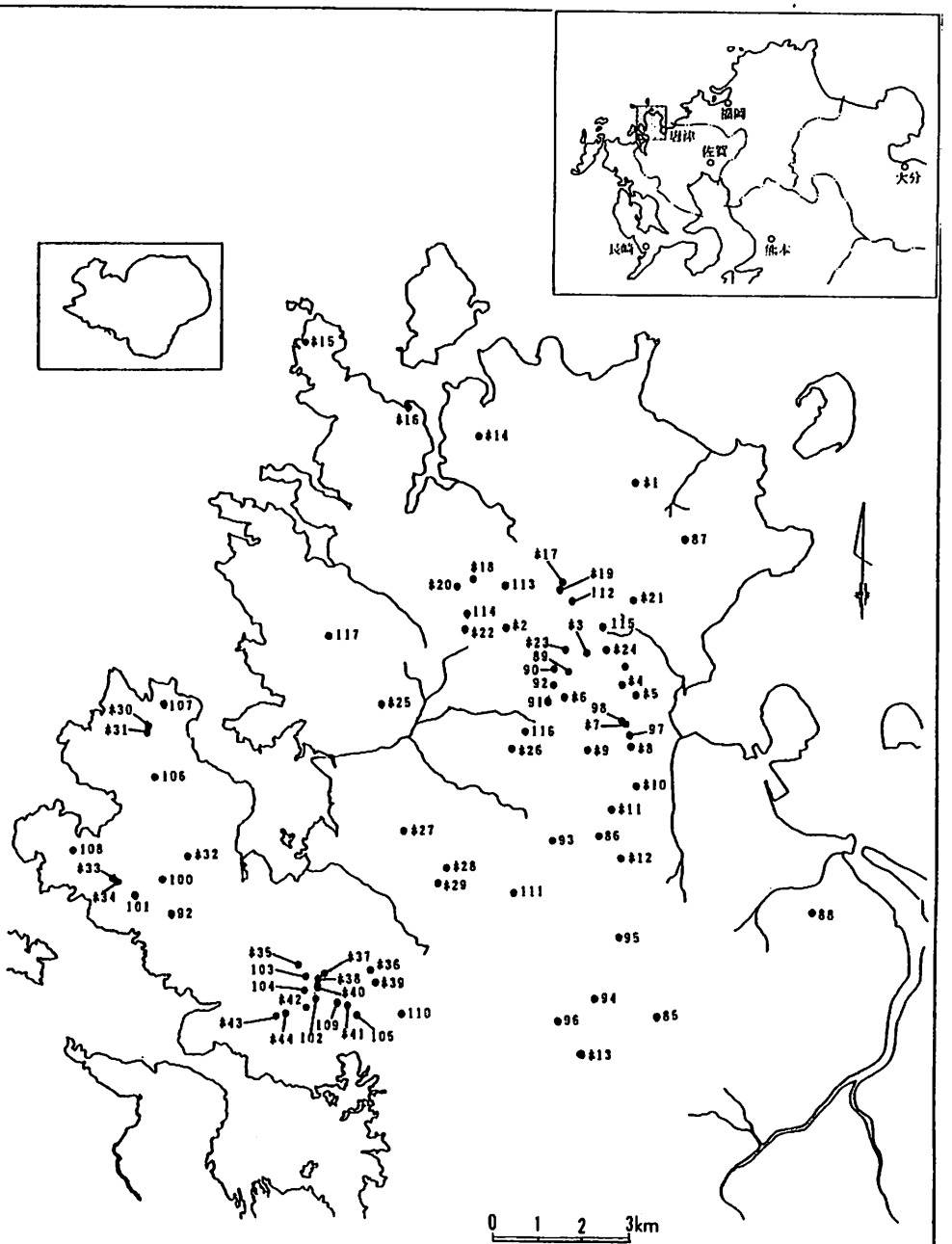
6　主要文献

相田薫・他1986「月見野遺跡群上野遺跡第１地点」『大和市文化財調査報告書』第21集、大和市教育委員会刊、神奈川
麻生優1965.5「細石器文化」『先土器時代－日本の考古学』Ⅰ、河出書房新社刊、（東京）、161-172
安蒜政雄1979.9「日本の細石核」『駿台史学』第47号、駿台史学会（明治大学文学部）刊、（東京）、152-183
池水寛治1967.10「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』第 3巻第 4号、東京考古学会刊、（東京）、1-21
岡本東三1979「神子柴・長者久保文化について」『研究論集』Ⅴ『奈良国立文化財研究所学報』第35冊、（奈良）1-57
織笠昭1983「佐賀県　原遺跡」『探訪　先土器の遺跡』有斐閣刊、（東京）、306-313
織笠昭1984「細石器文化組成論」『駿台史学』第60号、駿台史学会（明治大学文学部）刊、（東京）、71-93
織笠昭1992.5「南関東における西海技法の受容と変容」『人間・遺跡・遺物』わが考古学論集２、発掘者談話会刊（千葉）、75-92
小畑弘己1983.8「九州の細石刃文化」『物質文化』№41、物質文化研究会刊、（東京）、1-12
賀川光夫・下村悟史1982『政所馬渡』別府大学付属博物館刊、（別府）
鎌木義昌・高橋護1965.5「瀬戸内海地方の先土器時代」『先土器時代－日本の考古学』Ⅰ、河出書房新社刊、（東京）、284-302
鎌木義昌・間壁忠彦1965.5「九州地方の先土器時代」『先土器時代－日本の考古学』Ⅰ、河出書房新社刊、（東京）、303-322
鎌木義昌1965.3「西日本の細石刃文化」『歴史教育』第13巻 3号、歴史教育研究会編、日本書院刊、（東京）、34-38
鎌木義昌・芹沢長介1967.3「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会刊、（東京）、256-265
木崎康弘1983.4「東日本細石核技術展開についての一理解」『旧石器文化考古学』№26、旧石器文化談話会刊、（京都）、51-73
九州旧石器文化研究会（編）1992「細石器文化編」『九州旧石器時代関係資料集成』Ⅰ、九州旧石器文化研究会刊
栗島義明1988.3「草創期的石器組成の変遷と消失」『埼玉考古』第24号、埼玉考古学会刊、（1986年12月のシンポジウムの基調報告）、（埼玉）、34-45
栗島義明1991.3「西南日本における神子柴文化の系統」『平成 2年度　科学研究費補助金（総合研究Ａ）日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』、（1991年1 月5 日(4.55 ～6:00) に行われた第10回例会の記録）、（千葉）、35-36
栗島義明1991.7「「本ノ木論争」から学ぶもの（一）」『埼玉考古学論集・設立10周年記念論文集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、（埼玉）、127-154
茂山護・大野寅夫1977.10「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』第 3号、宮崎県考古学会刊、（宮崎）、1-10
清水宗昭1971.9「堂崎遺跡調査報告書」『長崎県文化財調査報告』第10集、長崎県教育委員会刊、（長崎）
杉原荘介・戸沢充則1971.9「佐賀県原遺跡における細石刃文化の様相」『考古学集刊』第 4巻第 4号、東京考古学会刊、（東京）、1-28
杉原荘介・戸沢充則・安蒜政雄1983「佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡」『明治大学文学部研究報告』考古学9 、明治大学文学部刊、（東京）
鈴木重治1967.3「宮崎県見立出羽洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会刊、（東京）、298-314
鈴木重治1973.5「宮崎県岩土原遺跡－土器伴出細石器文化の一例－」『石器時代』№10、石器時代文化研究会刊、（東京）、91-98

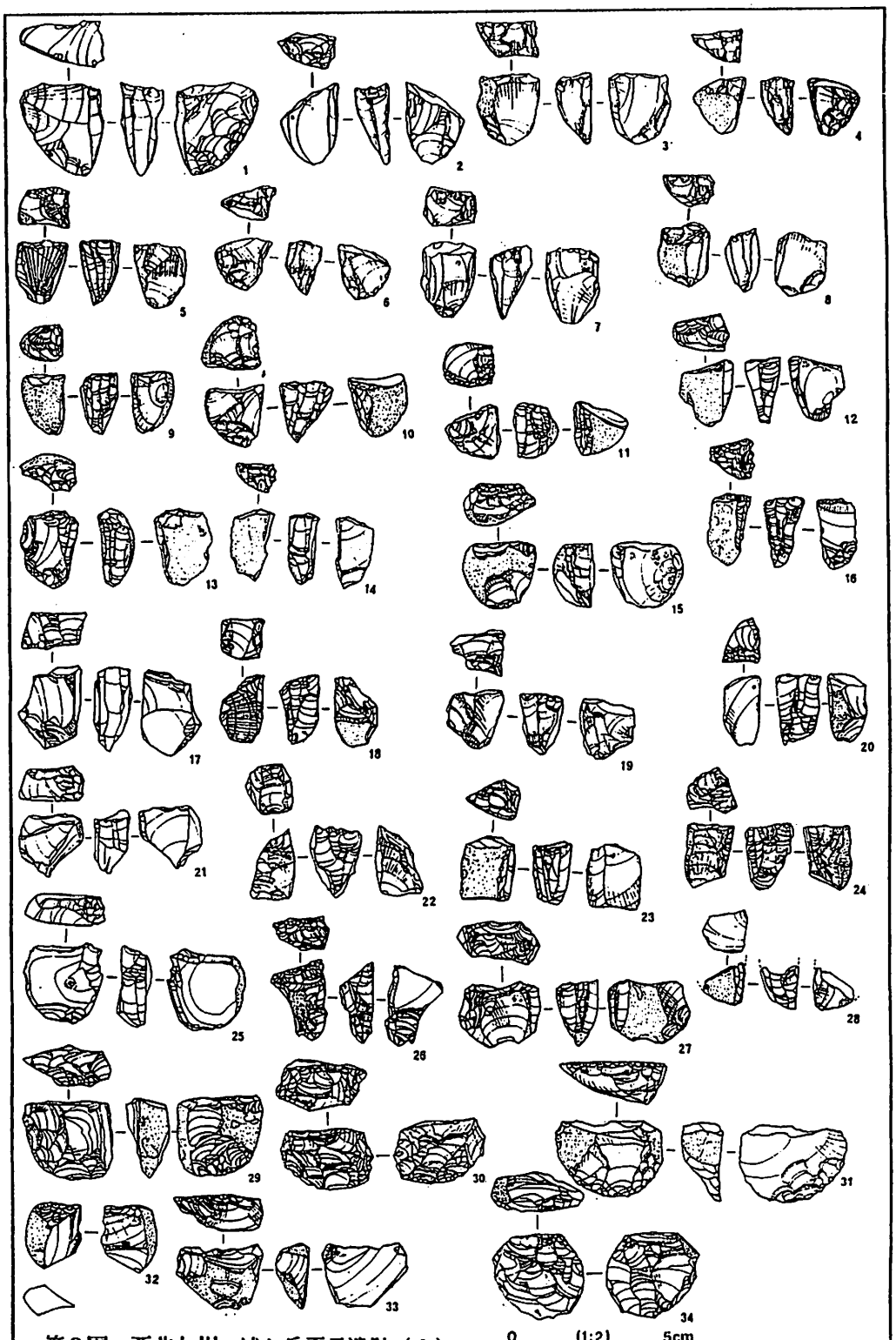
鈴木忠司1971.8「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』
第23巻第 8号、古代学協会刊、（京都）、175-192
鈴木忠司1979.3「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』、古代学協会刊、
（京都）、1-34
諏訪間順1988.4「相模野台地における石器群の変遷について－層位的出土例の検討による
石器群の段階的把握－」『神奈川考古』第24号、神奈川考古同人会刊、（神奈川）、1-30
芹沢長介1961.3「日本における細石器文化」『歴史教育』第 9巻第 3号、日本書院刊、
（東京）、10-16
芹沢長介1966.3「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」
『日本文化研究所研究報告』第 2集、東北大学日本文化研究所刊、（仙台）、1-67
芹沢長介1967.3「１洞穴遺跡と日本の旧石器」『日本の洞穴遺跡』
日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会刊　、東京）、344-349
芹沢長介1967.4「旧石器時代（1966年の動向）」『月刊考古学ジャーナル』№7 、
ニュー・サイエンス社刊、（東京）、3-8
芹沢長介1967.4「旧石器時代の終末と土器の発生」『信濃』第19巻第 4号、信濃史学会刊
、（長野）、249-256
芹沢長介編1974.1「最古の狩人たち－旧石器時代－」『古代史発掘』１、講談社刊、
（東京）
橘昌信1973「九州における細石器文化－細石核の分類と編年試論－」『考古学論叢』１、
別府大学考古学研究会刊、（別府）、11-26
橘昌信1975「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』３、
別府大学考古学研究会刊、（別府）、1-69
橘昌信1979.9「九州地方の細石器文化」『駿台史学』第47号、駿台史学会
（明治大学文学部）刊、（東京）、133-151
橘昌信1979.10 、「東九州における細石核－船野型細石核－」『月刊考古学ジャーナル』
№167 、ニュー・サイエンス社刊、（東京）、61-63
橘昌信1981.2『大分県上下田遺跡発掘調査報告書』別府大学付属博物館刊、（別府）
橘昌信1983.2『大分県上下田遺跡第２次発掘調査報告書』別府大学付属博物館刊、
（別府）
橘昌信1983.8「細石器（九州地方）」『季刊考古学』第 4号、雄山閣出版刊、（東京）、
64-66
橘昌信1985.7「九州における細石器文化共伴遺物」『肥後考古』第 5号、肥後考古学会刊
、（熊本）、167-180
戸沢充則1964「矢出川遺跡」『考古学集刊』第 2巻第 3号、東京考古学会刊、（東京）、
1-35
萩原博文1986.6「西日本の細石器文化」『月刊考古学ジャーナル』№306 、
ニュー・サイエンス社刊、（東京）、22-26
林謙作1974.2「東北アジアの細石刃技術－福井洞穴の細石核製作工程との比較を中心とし
て－」『日本考古学・古代史論集』吉川弘文館刊、（東京）、23-85
柳田俊雄1989.5「九州地方後期旧石器時代の終末期におけるナイフ形石器の形態的特徴」
『旧石器考古学』38、旧石器文化談話会刊、（京都）、143-152
横田義章1981.8「いわゆる「神子柴型石斧」の資料」『九州歴史資料館研究論集』７ 、
九州歴史資料館刊、（福岡）、51-58
吉留秀敏1991.9「大分県野津町採集の細石器について－田良原Ｂ遺跡・奥畑遺跡－」
『九州旧石器』第 2号、中国書店刊、（福岡）、115-121
綿貫俊一1987.11 「大野郡犬飼町市ノ久保遺跡の調査」『大分県考古学会々報』№3 、
大分県考古学会刊、（大分）、6-7
綿貫俊一1992.10 「長者久保・神子柴文化並行段階の九州」『古文化談叢』第28集、
九州古文化研究会刊、（福岡）、1-33



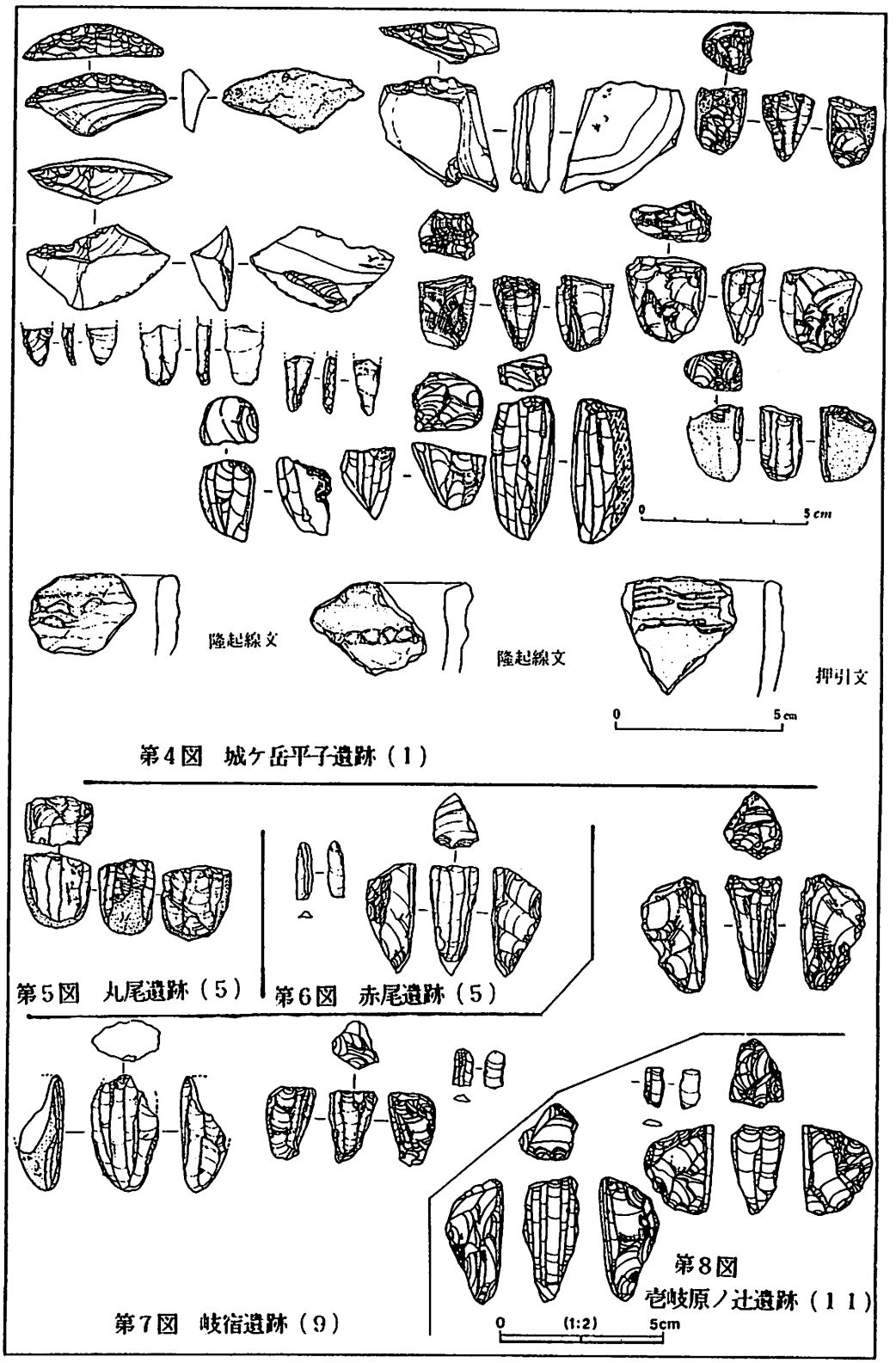
第1図　九州北半部の細石刃文化遺跡分布図



第2図　補遺　佐賀県上場台地の遺跡



第3図　西北九州　城ケ岳平子遺跡（1）



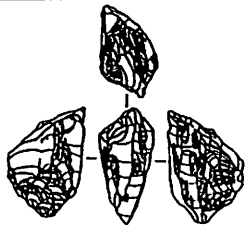
第4図　城ケ岳平子遺跡（1）

第5図　丸尾遺跡（5）

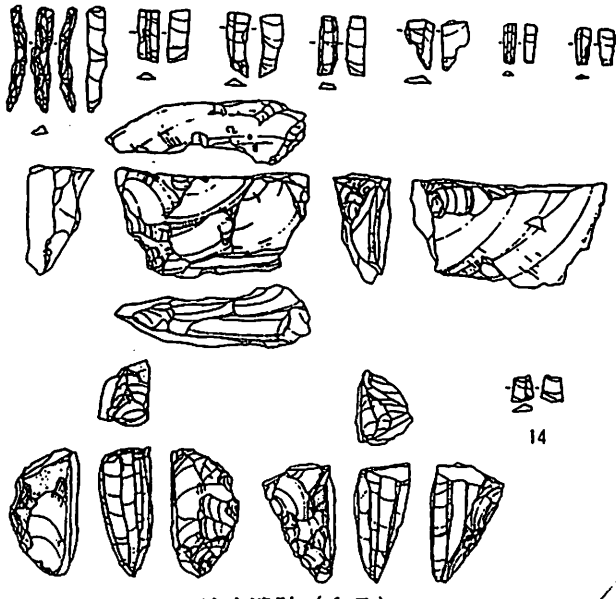
第6図　赤尾遺跡（5）

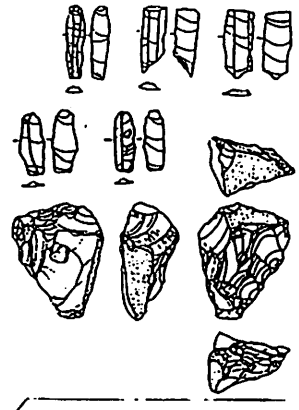
第7図　岐宿遺跡（9）

第8図
壱岐原ノ辻遺跡（11）

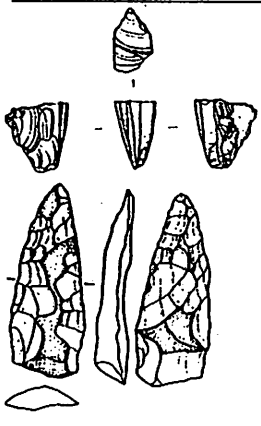


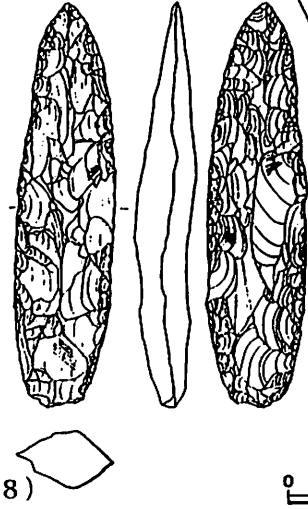
第9図　長田池遺跡（12）



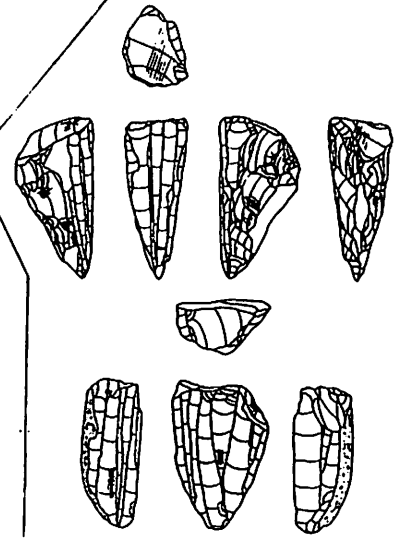


第10図　津吉遺跡（17）



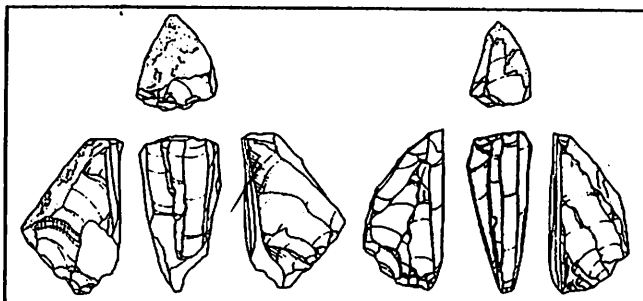


第11図　田崎遺跡（18）

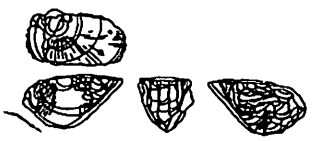


第12図　牟田遺跡（25）

0　(1:2)　5cm

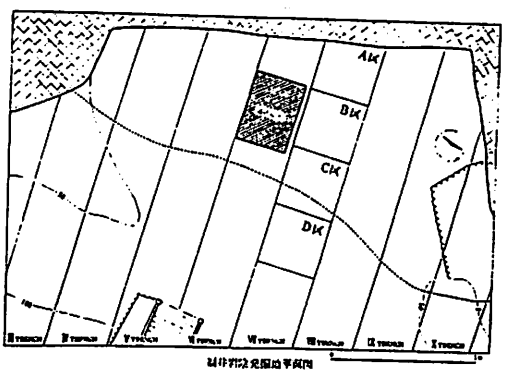


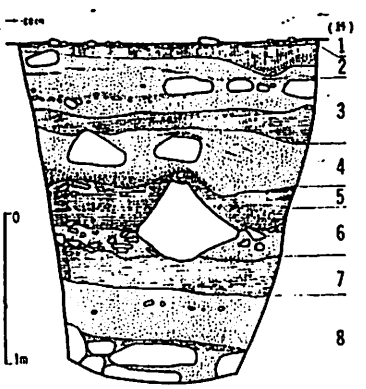
第１３図　楼楷田遺跡（２７）



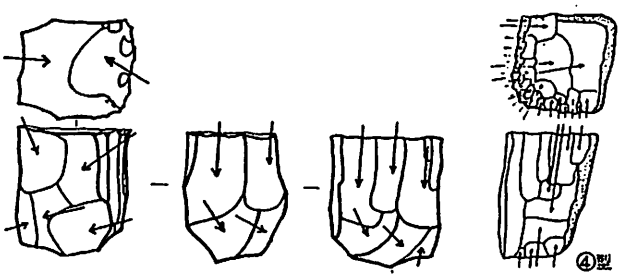
第１４図　白岳池遺跡（３１）

第１５図　ナンゴラ池遺跡（32）



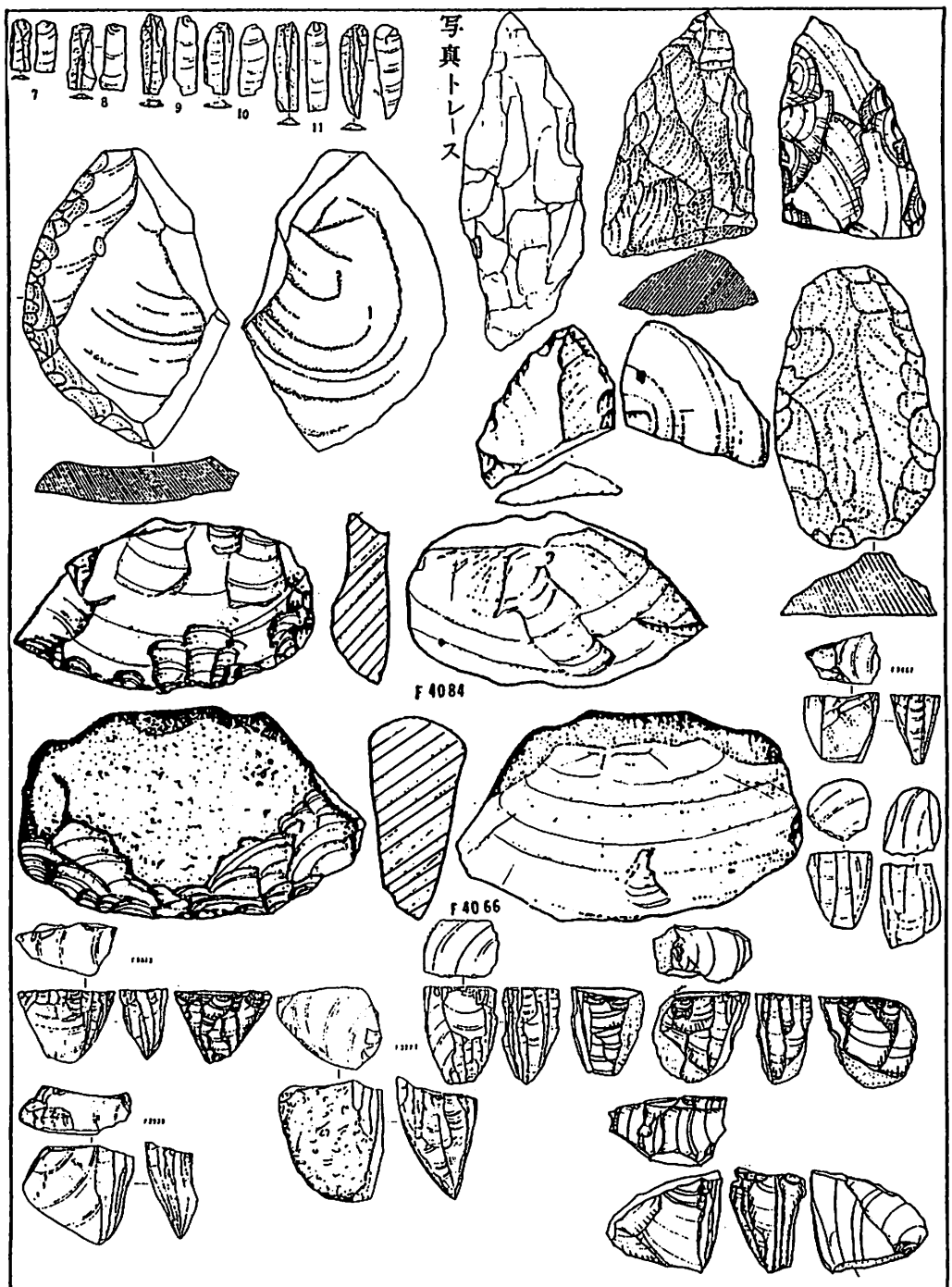


第１６図　福井岩陰（３４）



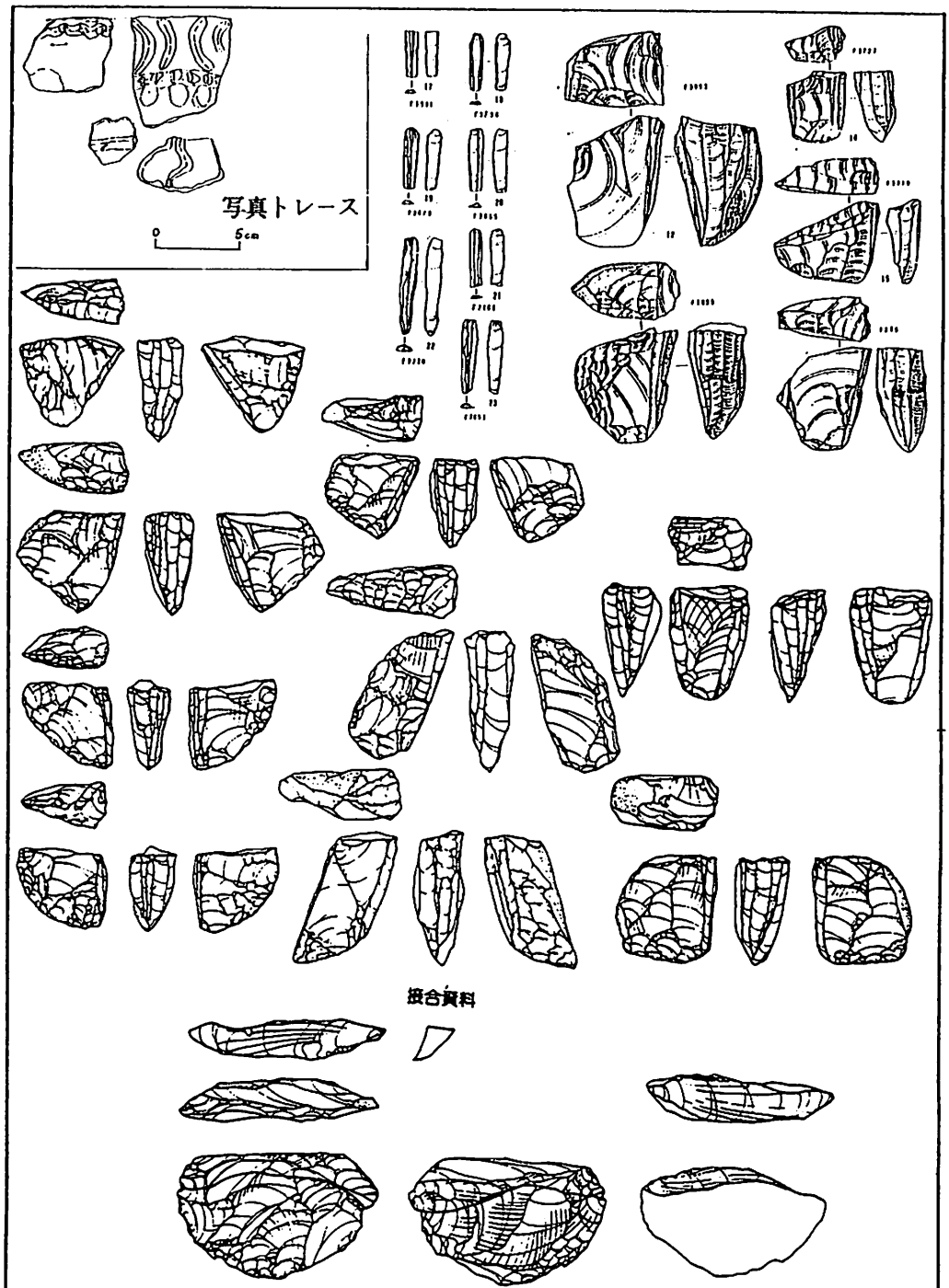
第１７図　福井岩陰４層

0　(1:2)　5cm



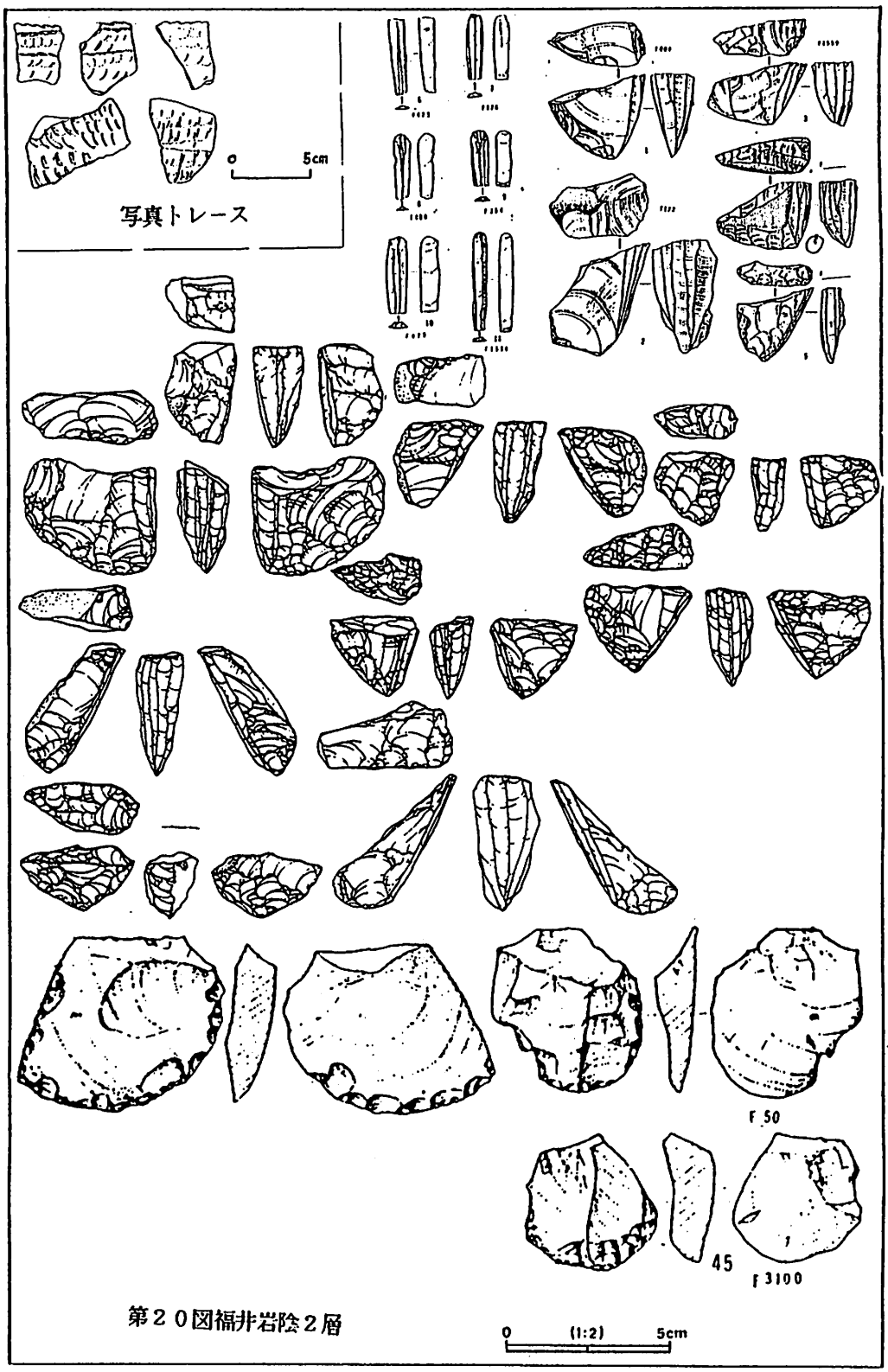
第18図　福井岩陰4層（34）

0　(1:2)　5cm

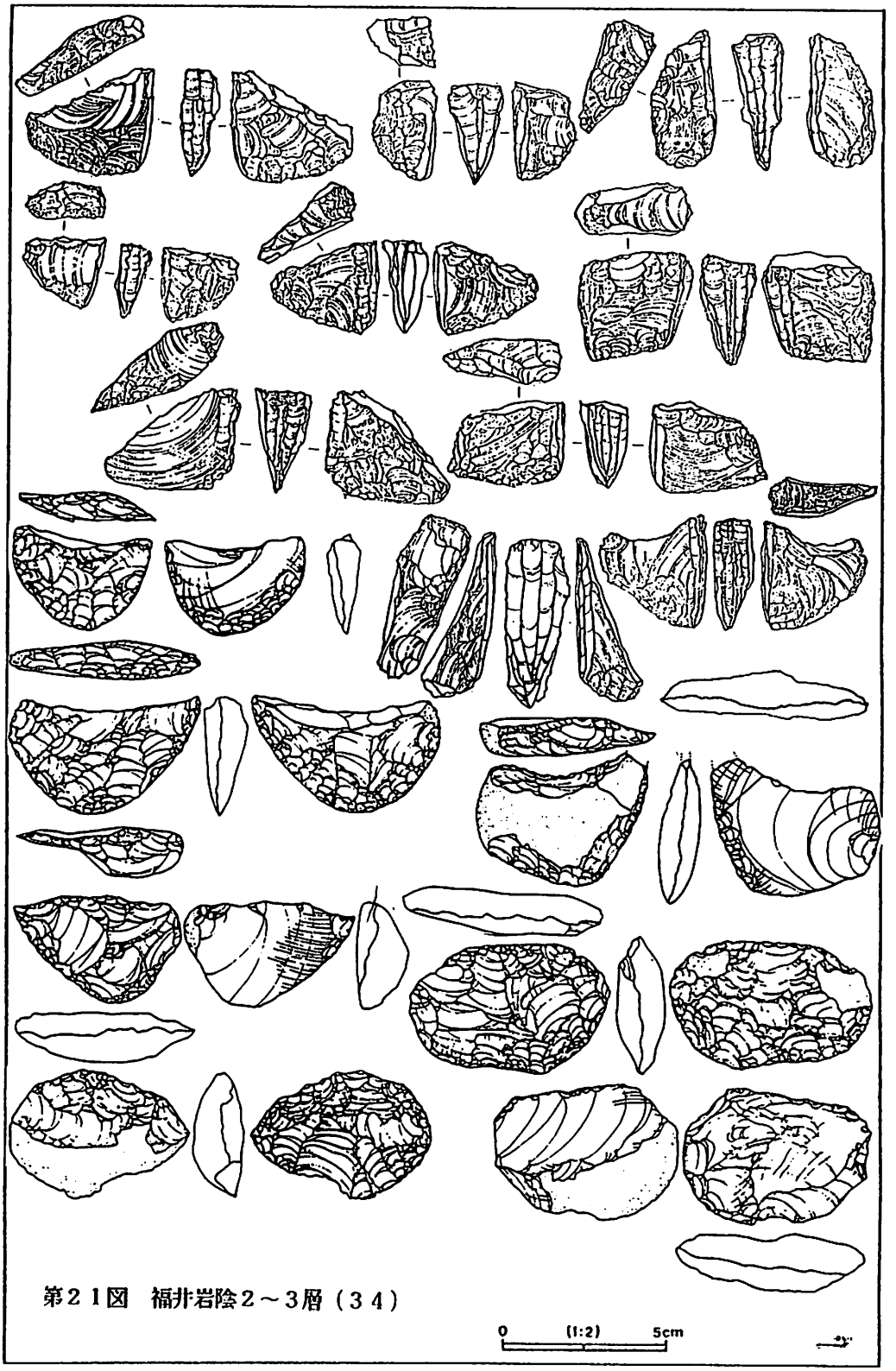


第19図　福井岩陰3層

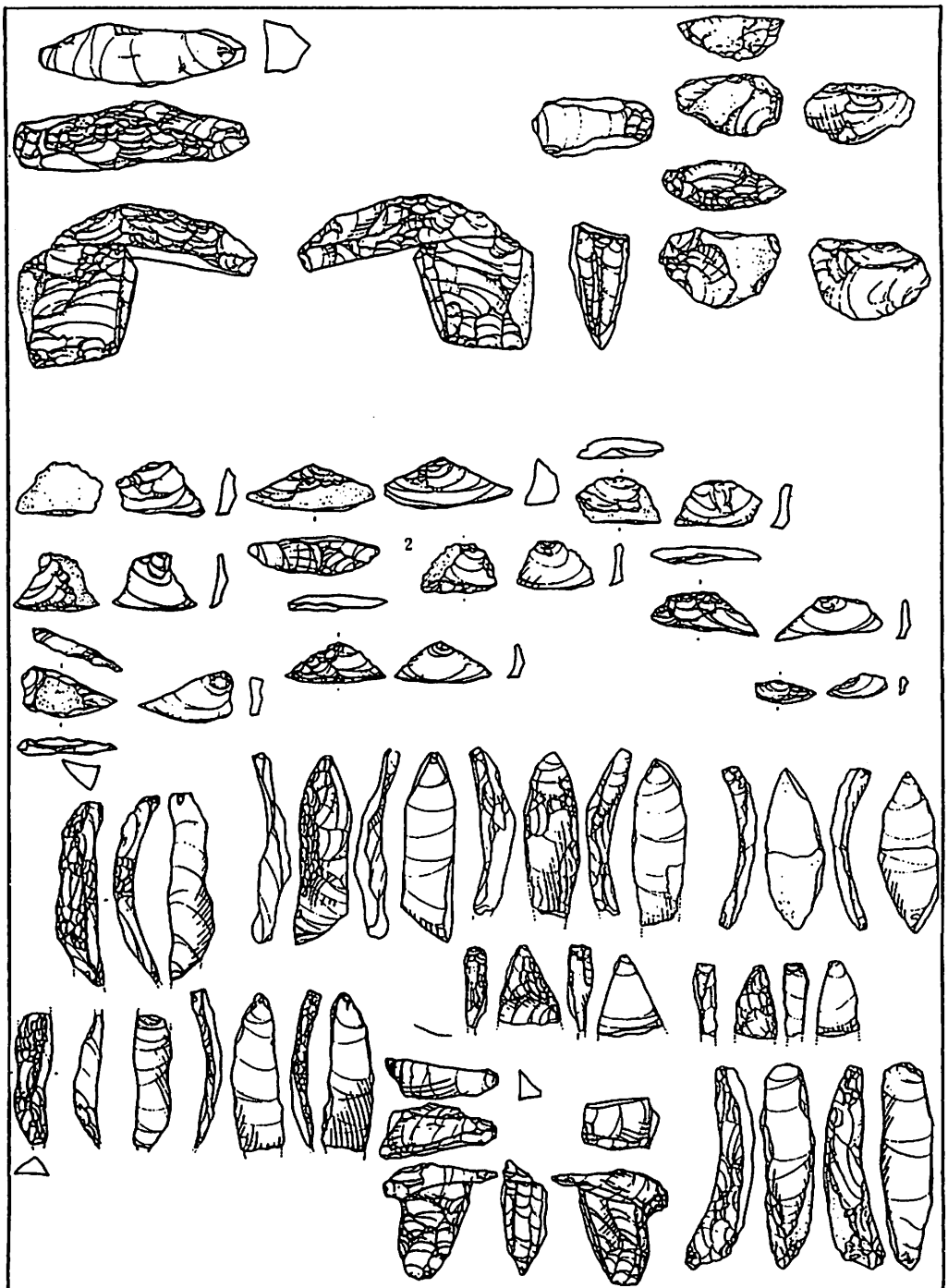
0　(1:2)　5cm



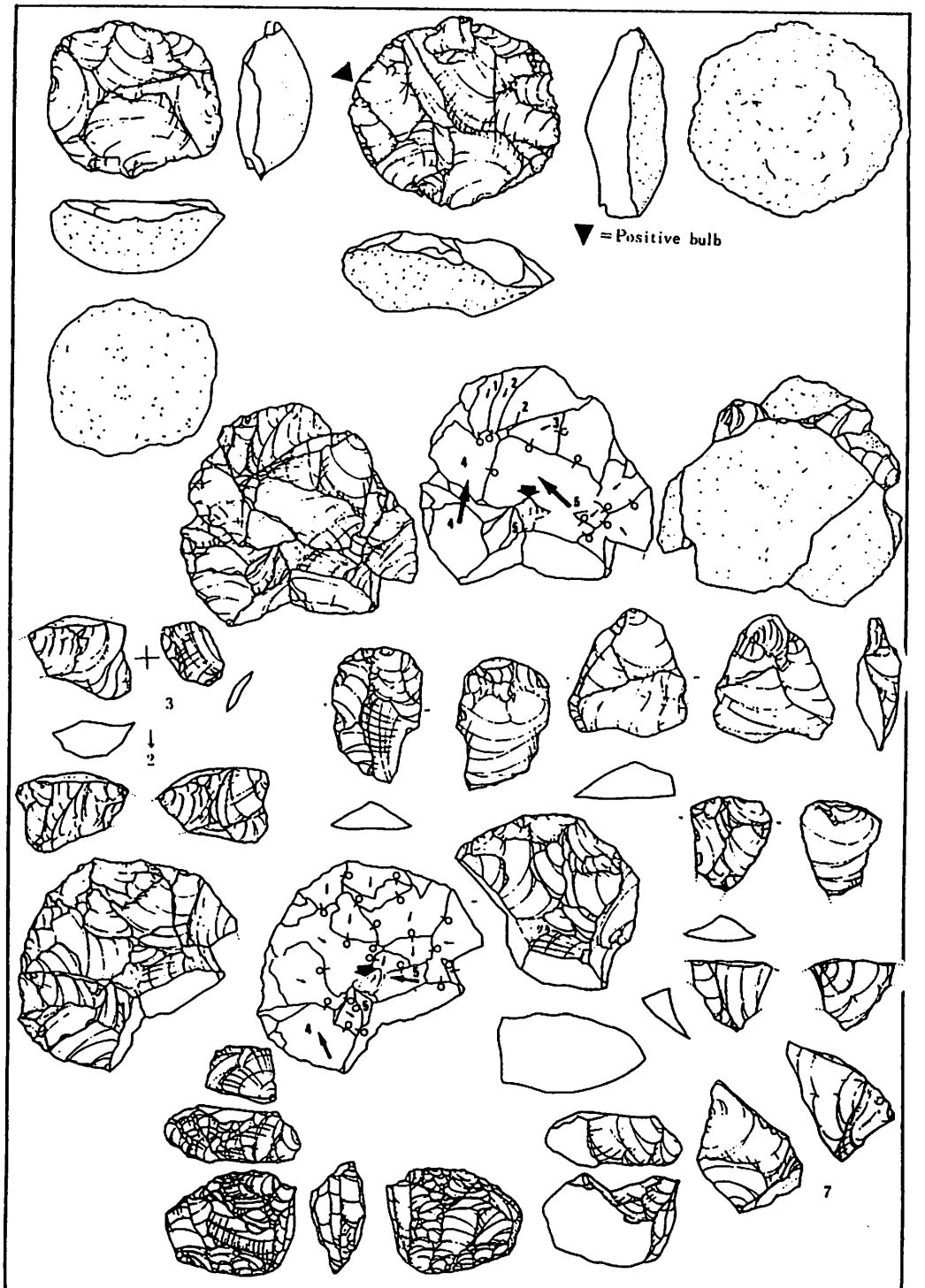
第２０図福井岩陰２層



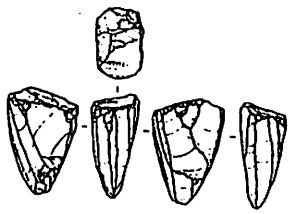
第２１図　福井岩陰２～３層（３４）



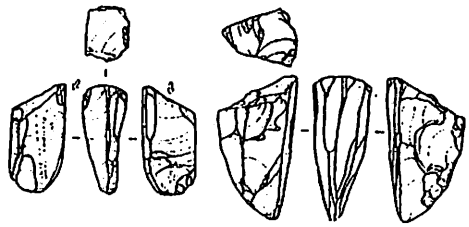
第２２図　福井岩陰２～３層（３４）



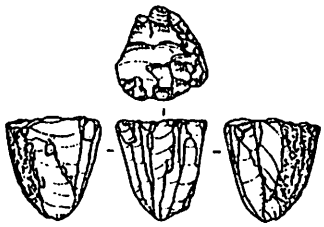
第２３図　福井岩陰２～３層（３４）



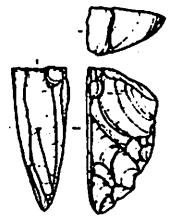
第２４図　牟田張遺跡（３６）



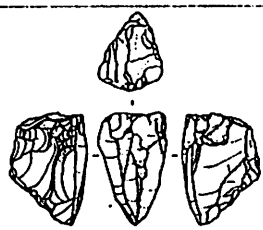
第２５図　板山遺跡（３７）



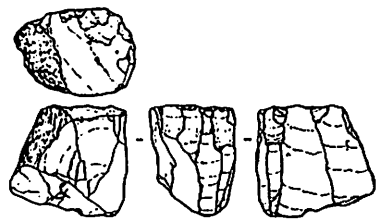
第２６図　平河原遺跡（３８）



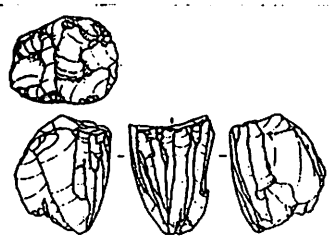
第２７図　岩下洞穴Ⅸ層（３９）



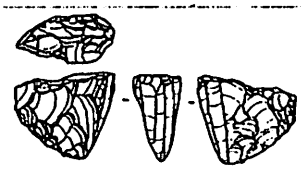
第２８図　耳切遺跡（４０）



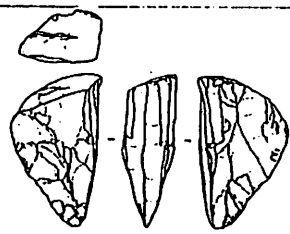
第２９図　相当原遺跡（４１）



第３０図　福田遺跡（４４）

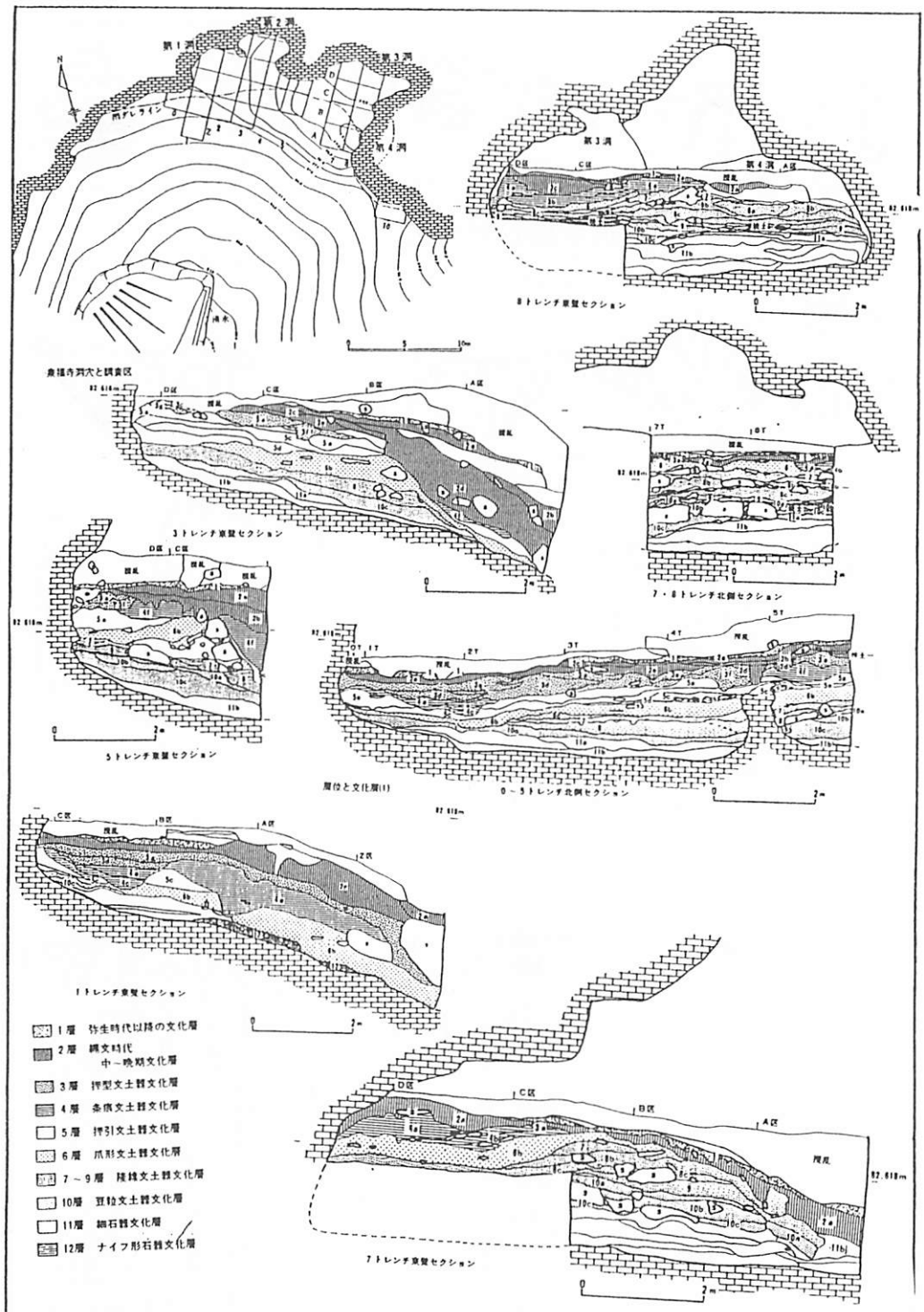


第３１図　中屋敷遺跡（４５）

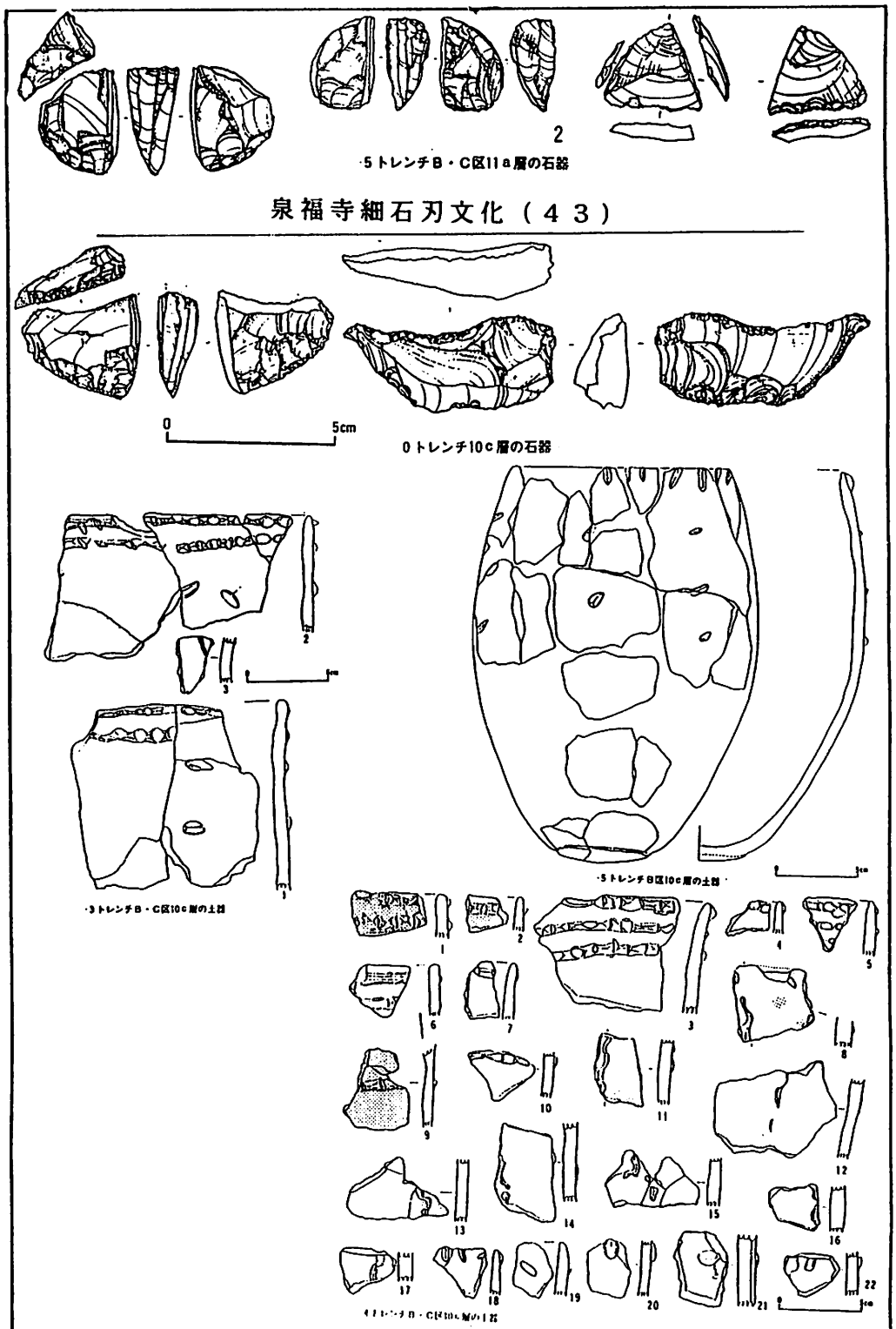


第３２図　矢峰遺跡（補）→泉福寺北方約１ｋｍの地点

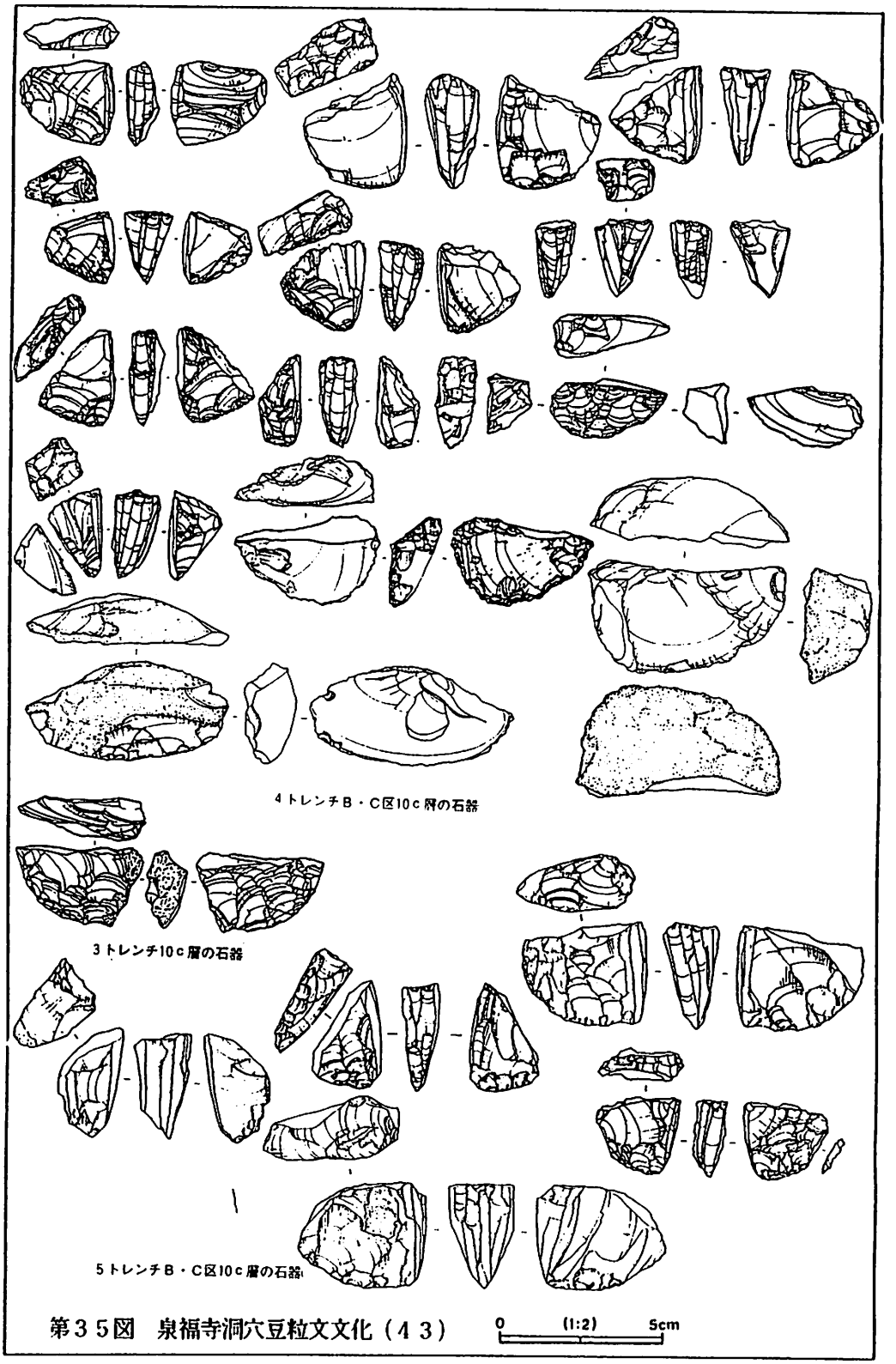
0　(1:2)　5cm



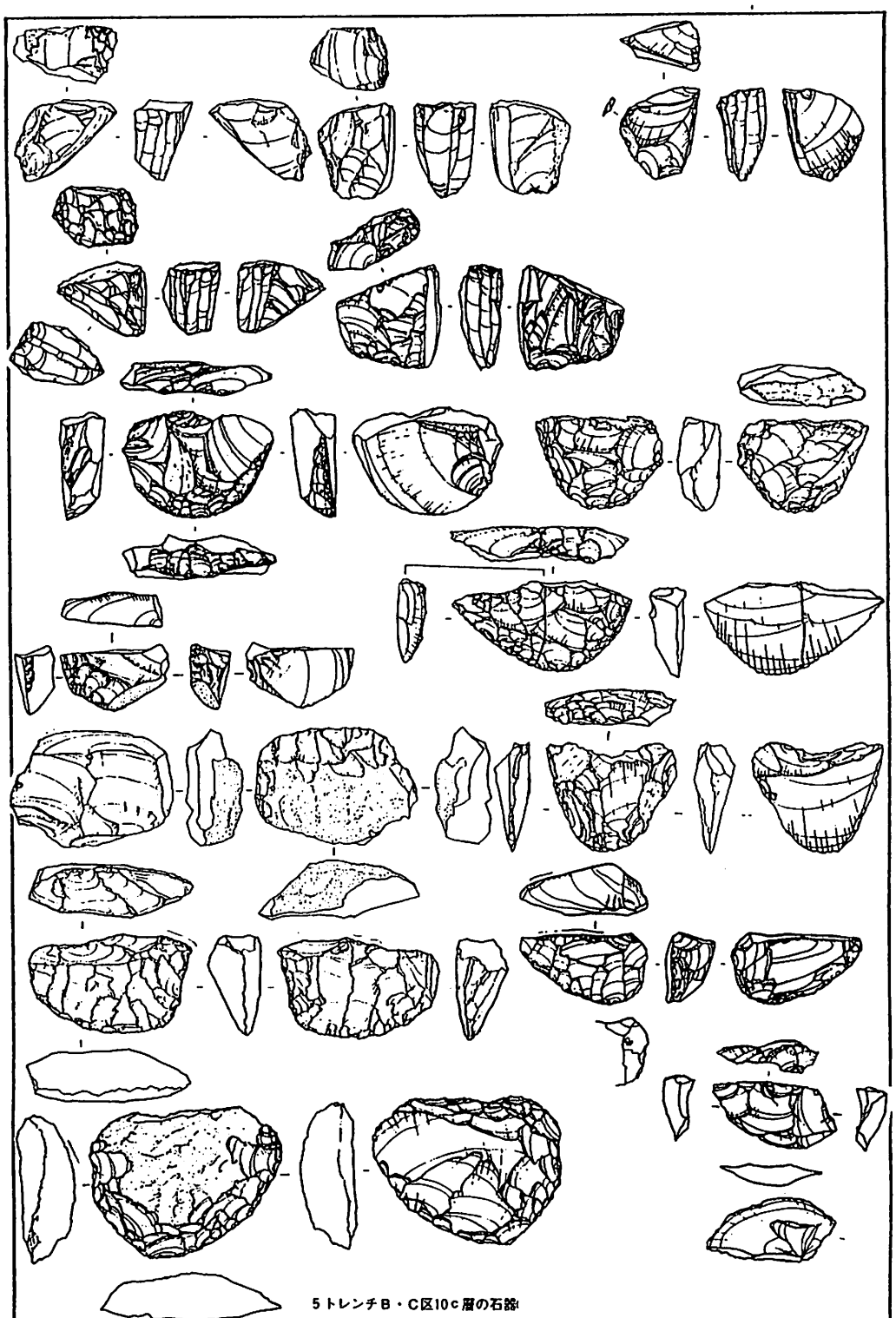
第３３図　泉福寺洞穴（４３）の調査区と地層



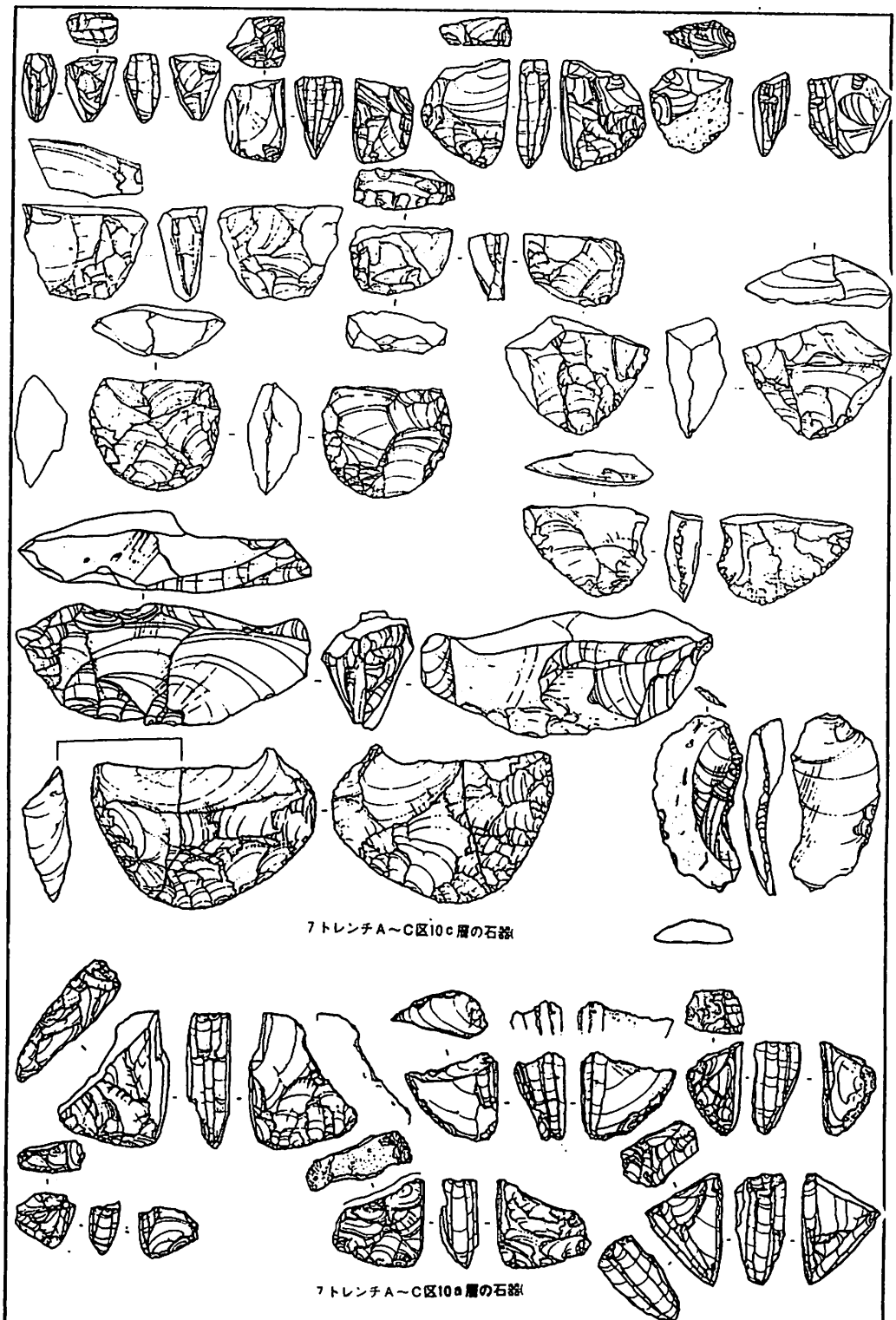
第34図　泉福寺洞穴豆粒文文化（43）



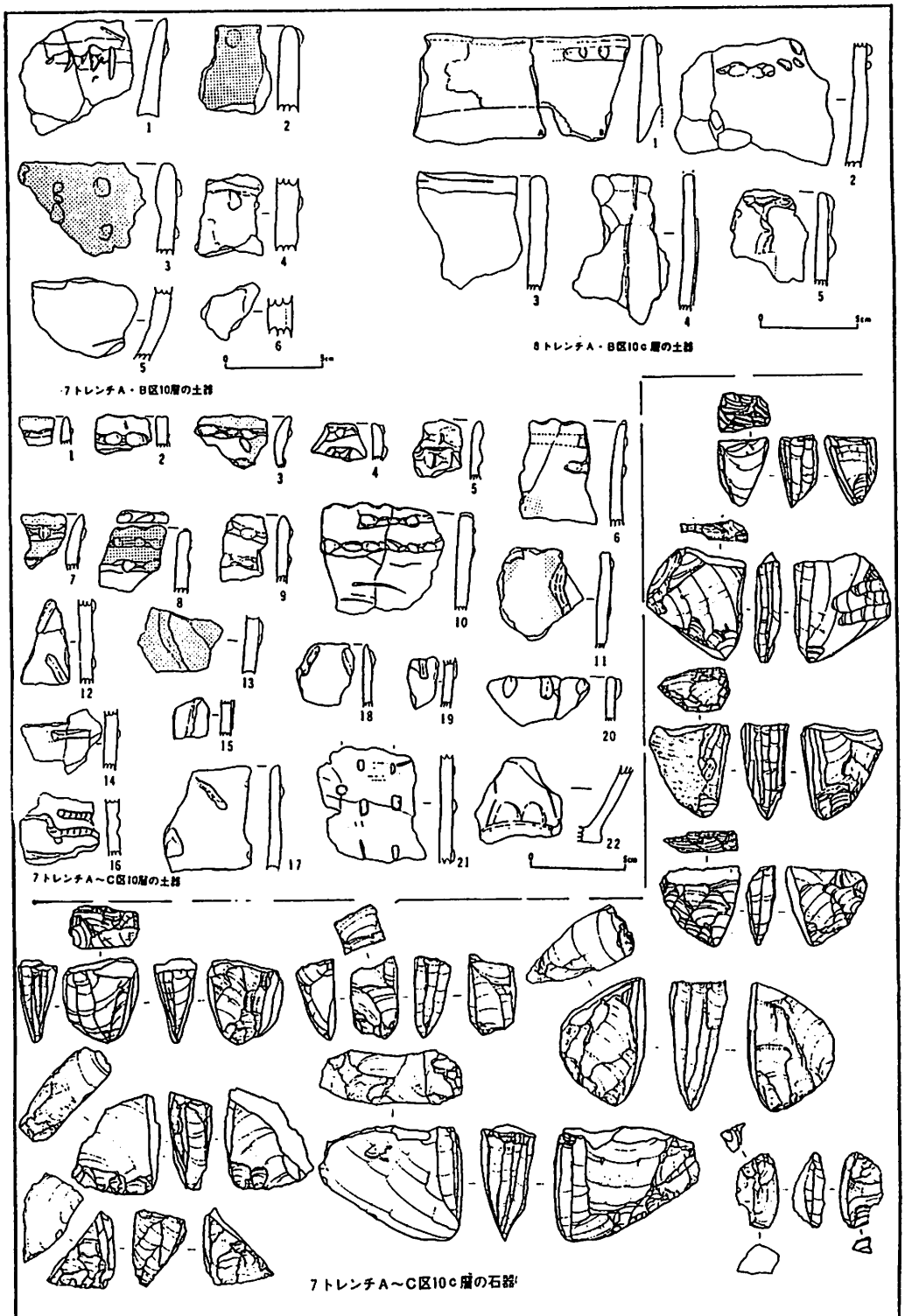
第35図　泉福寺洞穴豆粒文文化（43）



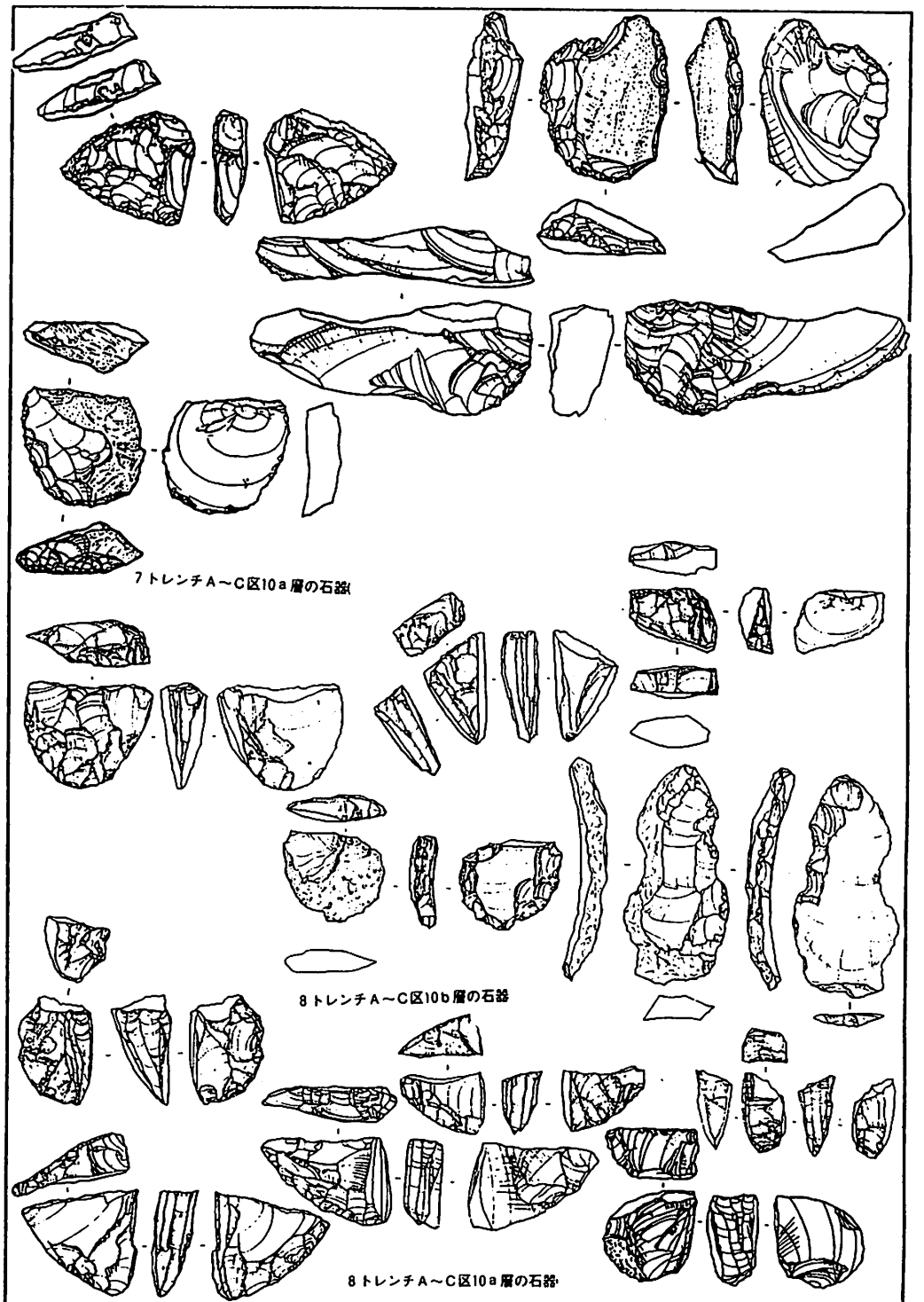
第３６図　泉福寺洞穴豆粒文文化（４３）



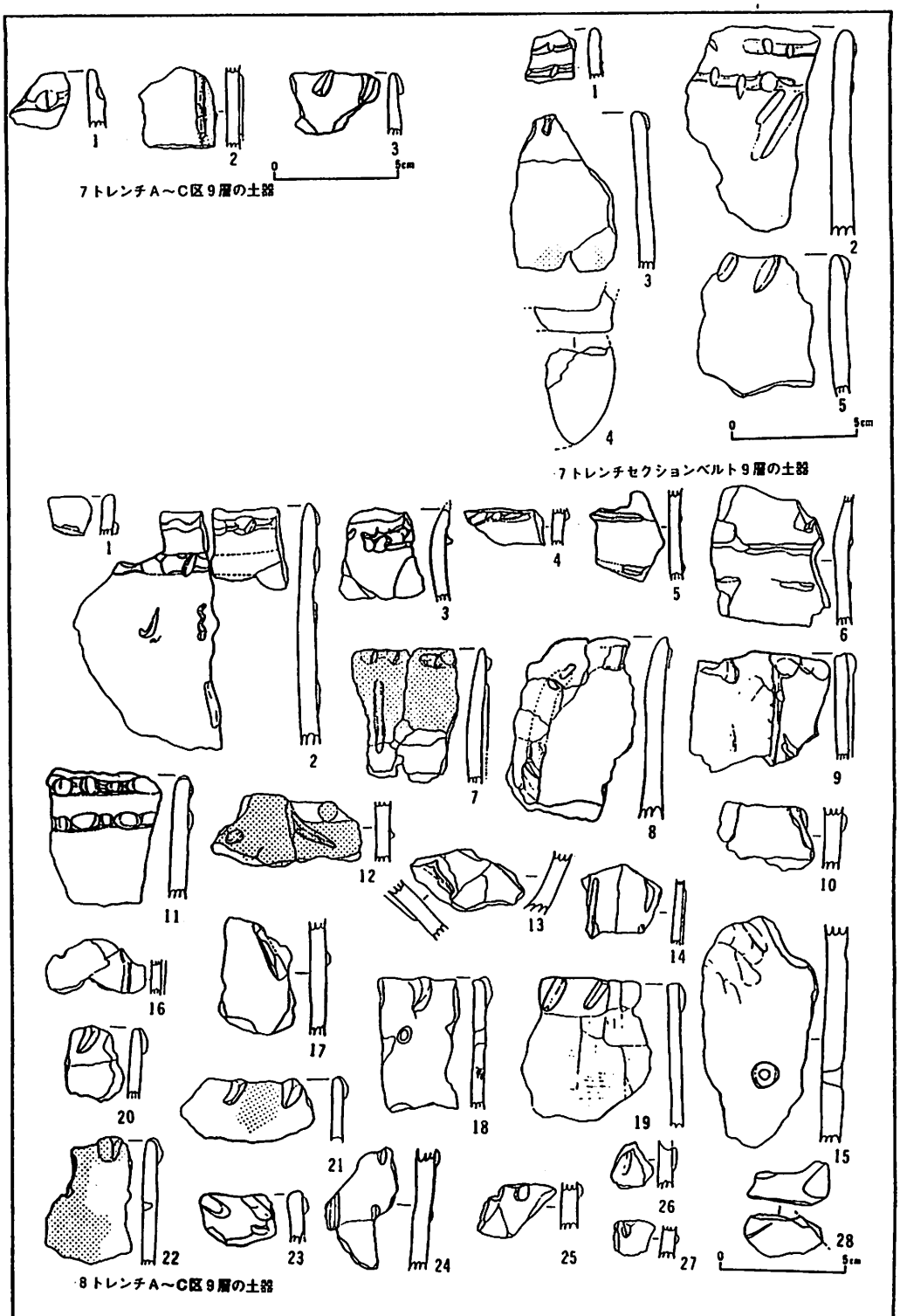
第３７図　泉福寺洞穴豆粒文文化（４３）



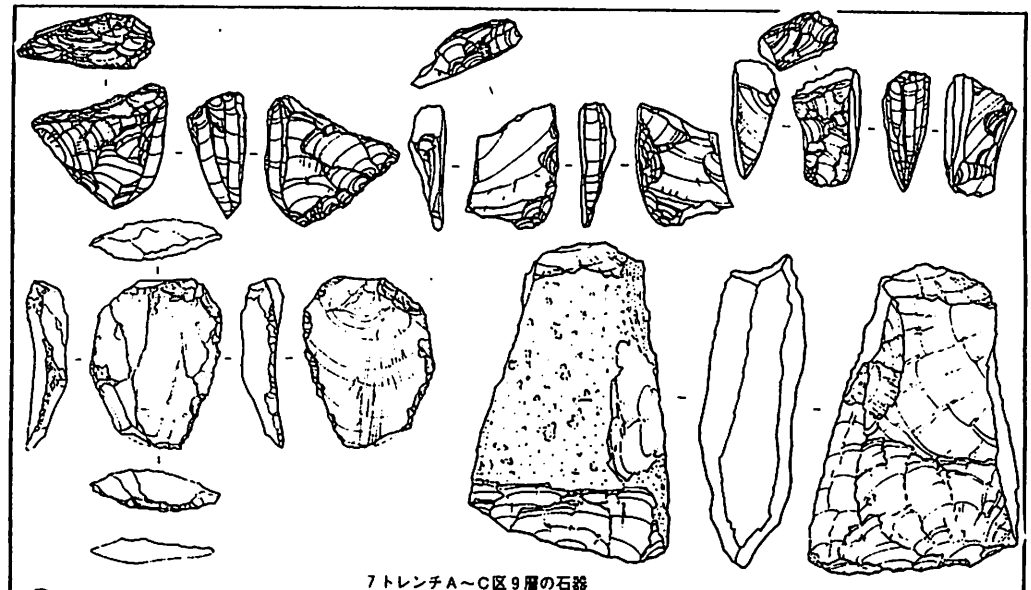
第３８図　泉福寺洞穴豆粒文文化（４３）　0　(1:2)　5cm



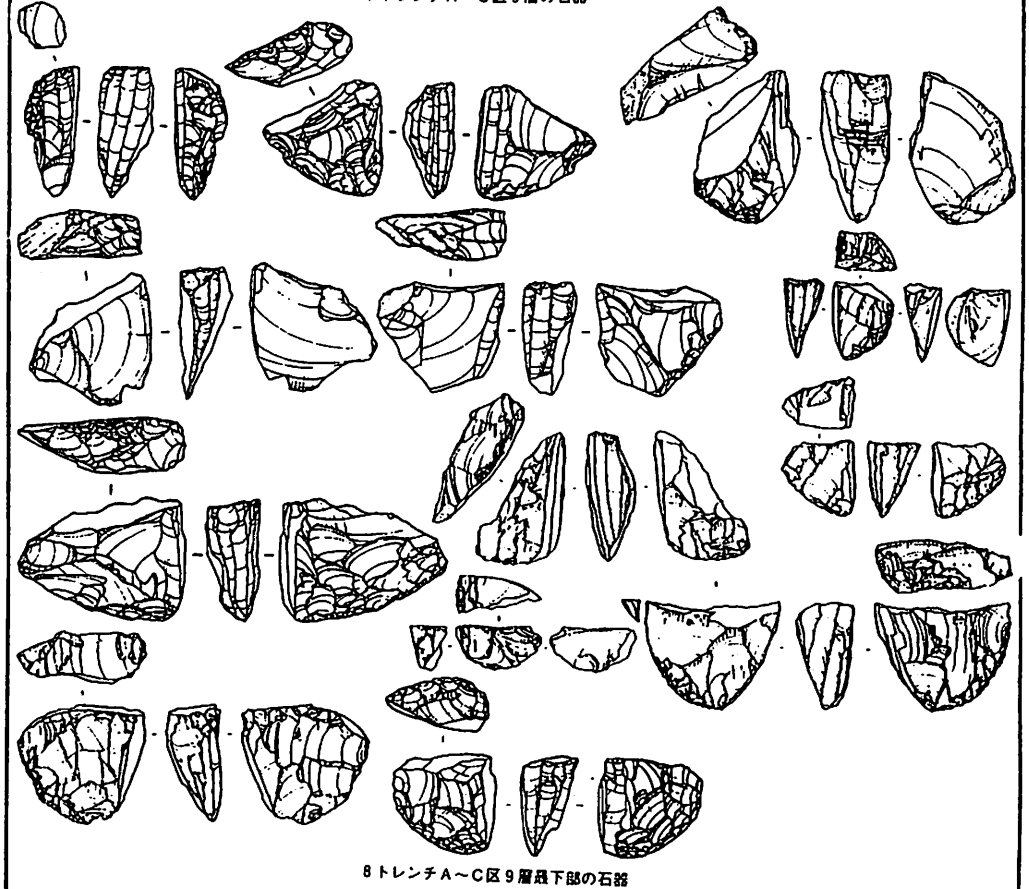
第39図　泉福寺洞穴豆粒文文化（43）



第40図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）　0　(1:2)　5cm

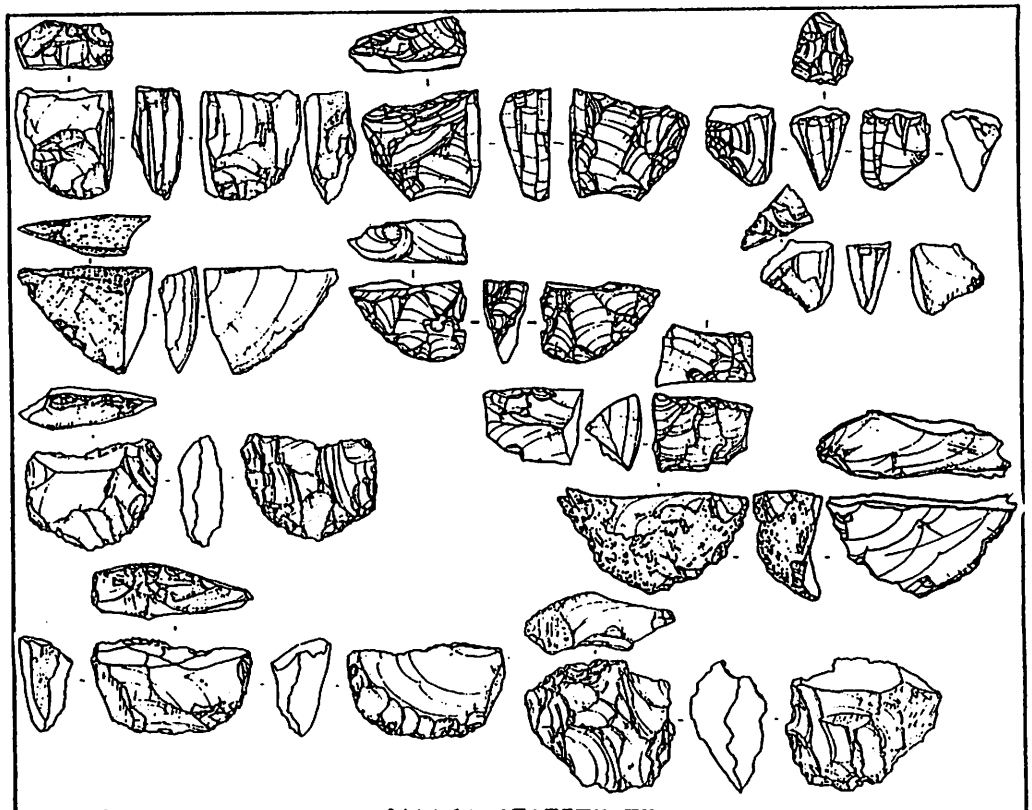


7トレンチA～C区9層の石器

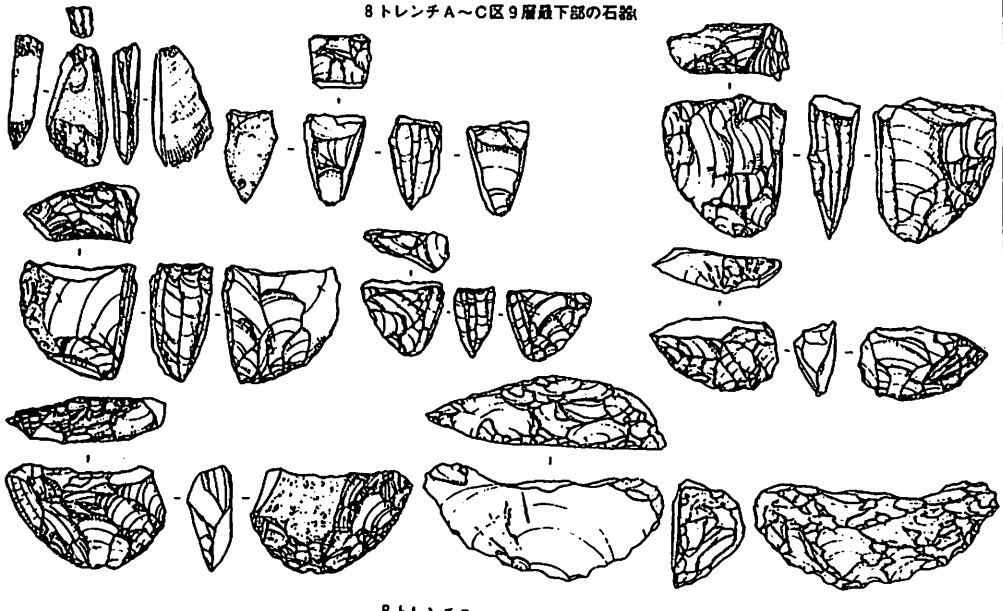


8トレンチA～C区9層最下部の石器

第41図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）　0　(1:2)　5cm

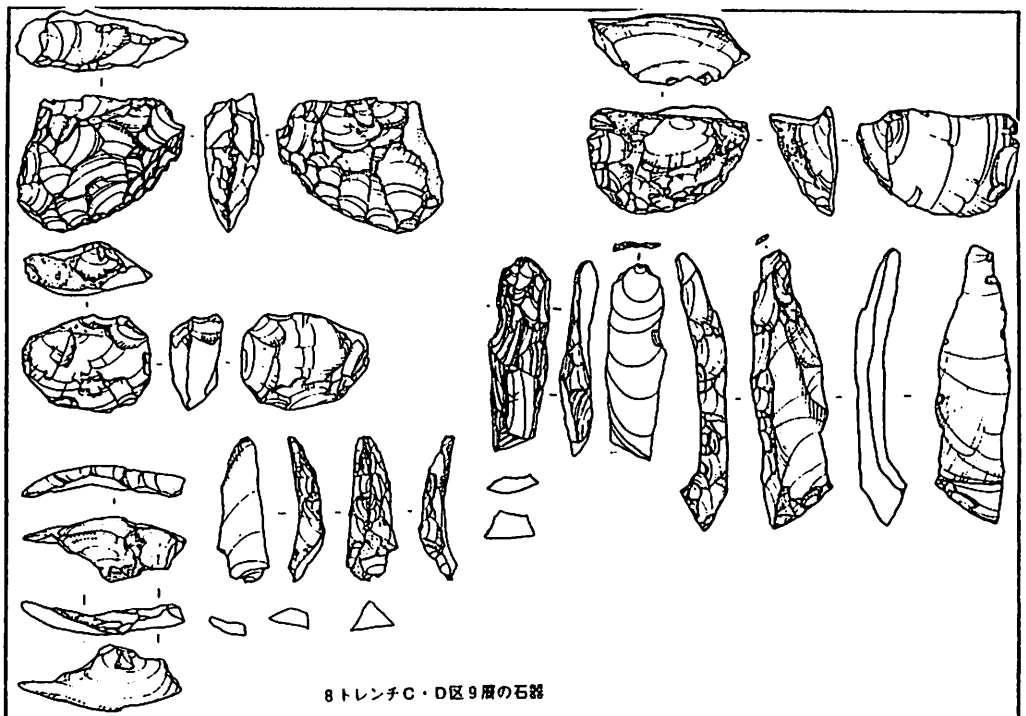


8トレンチA～C区9層最下部の石器

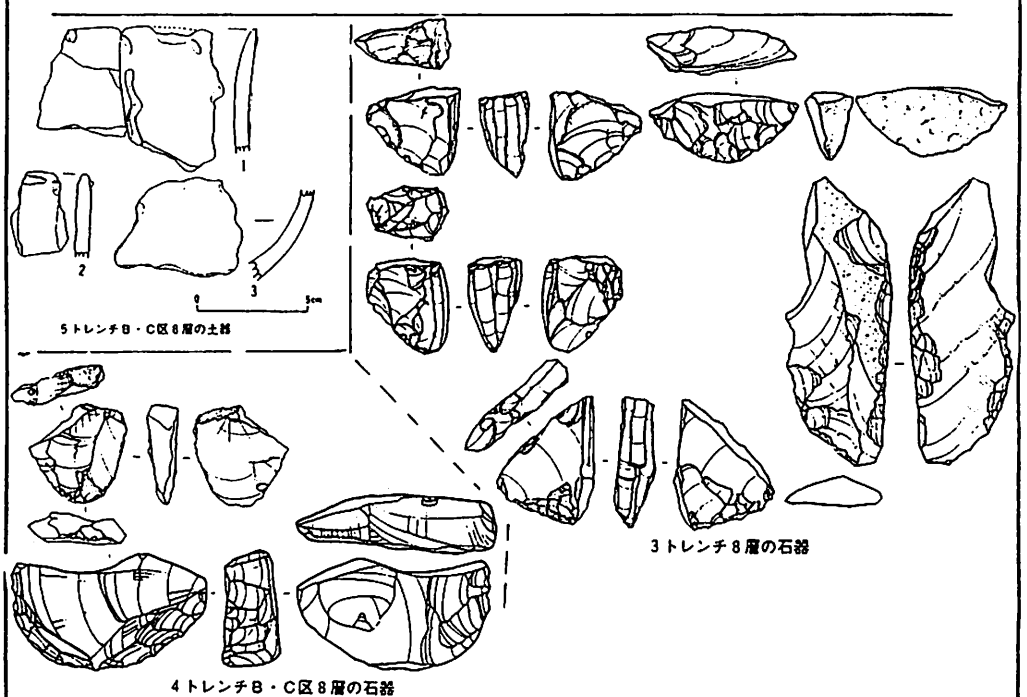


8トレンチC・D区9層の石器

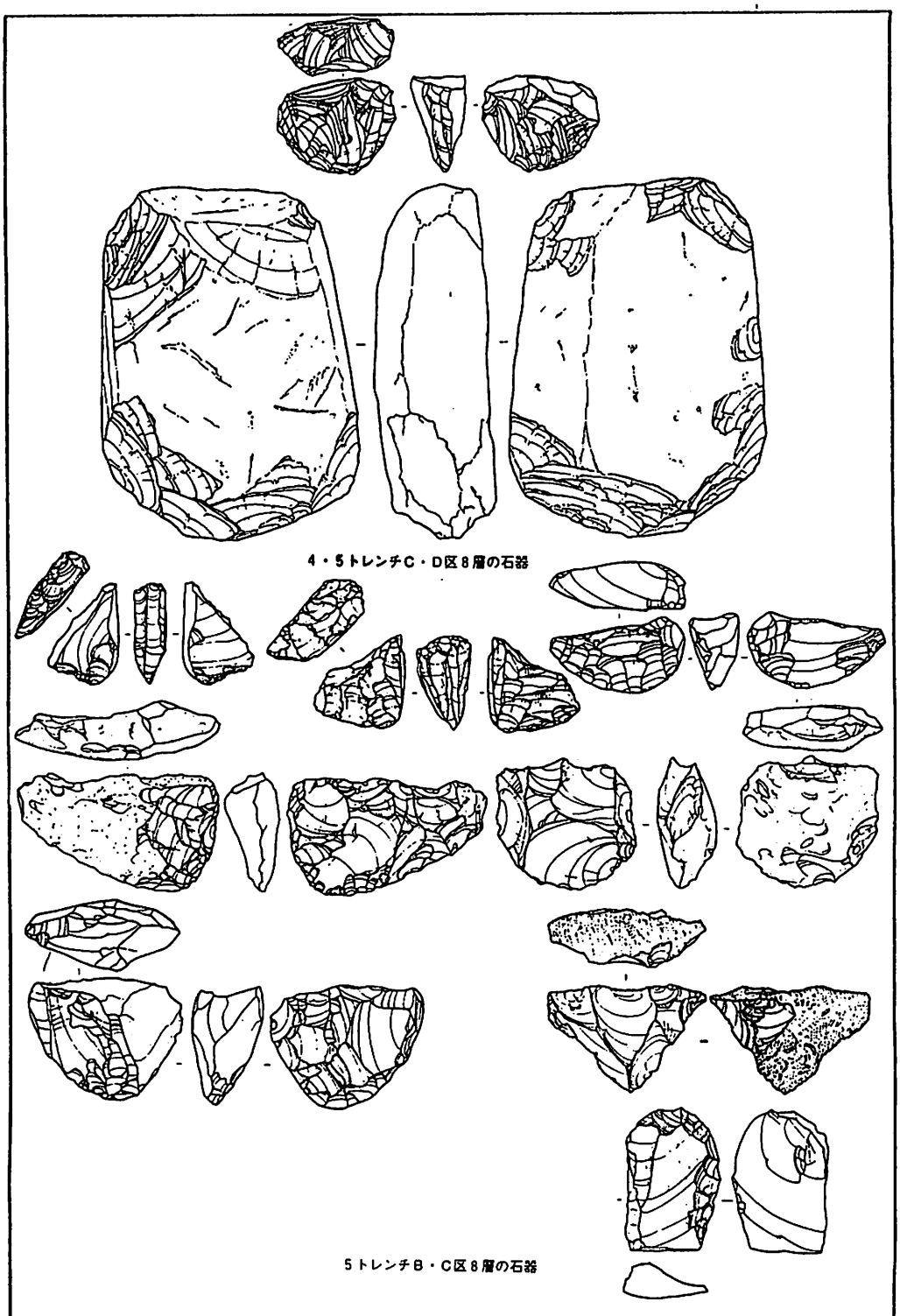
第42図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）　0　(1:2)　5cm



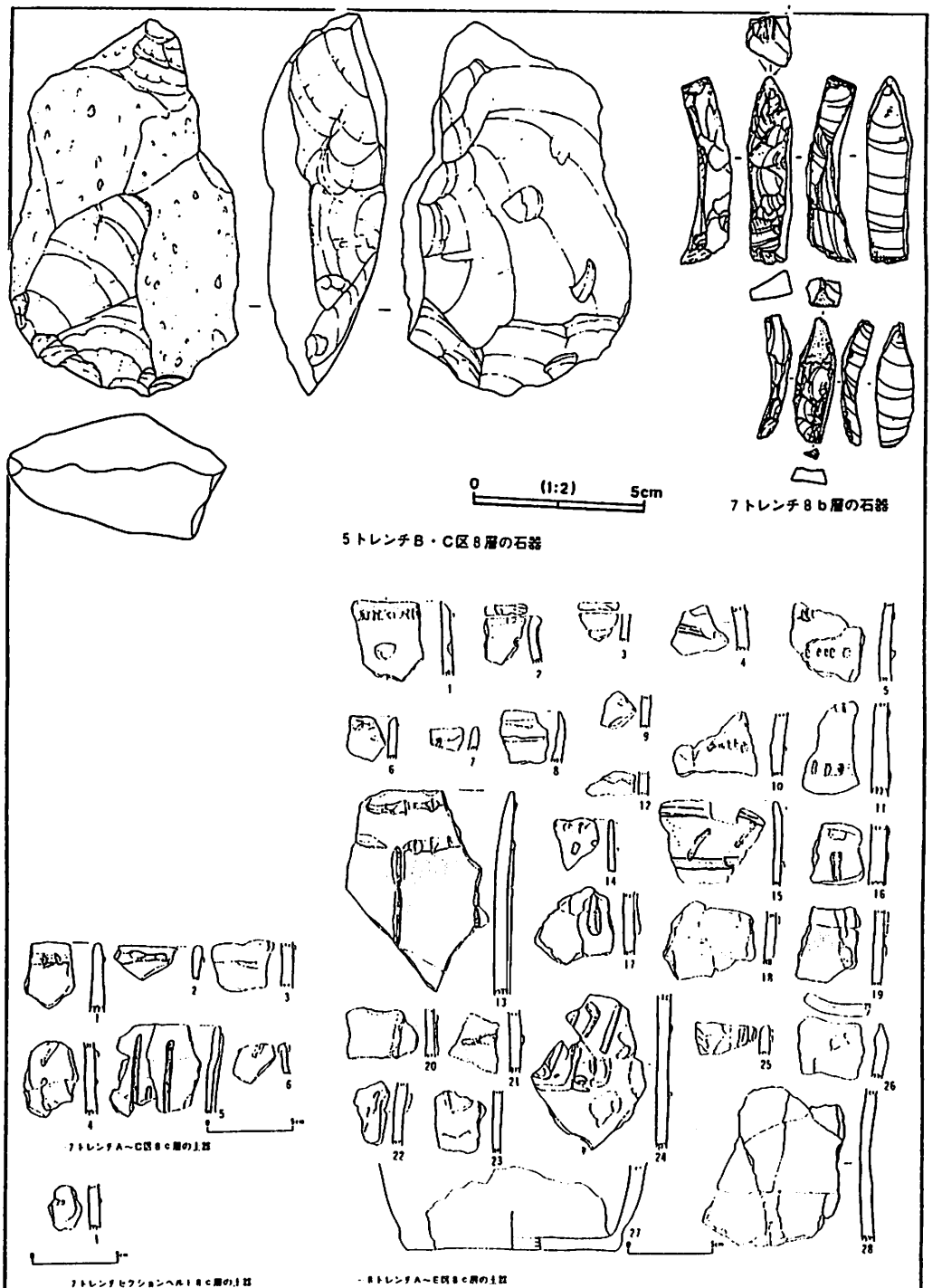
第43図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）



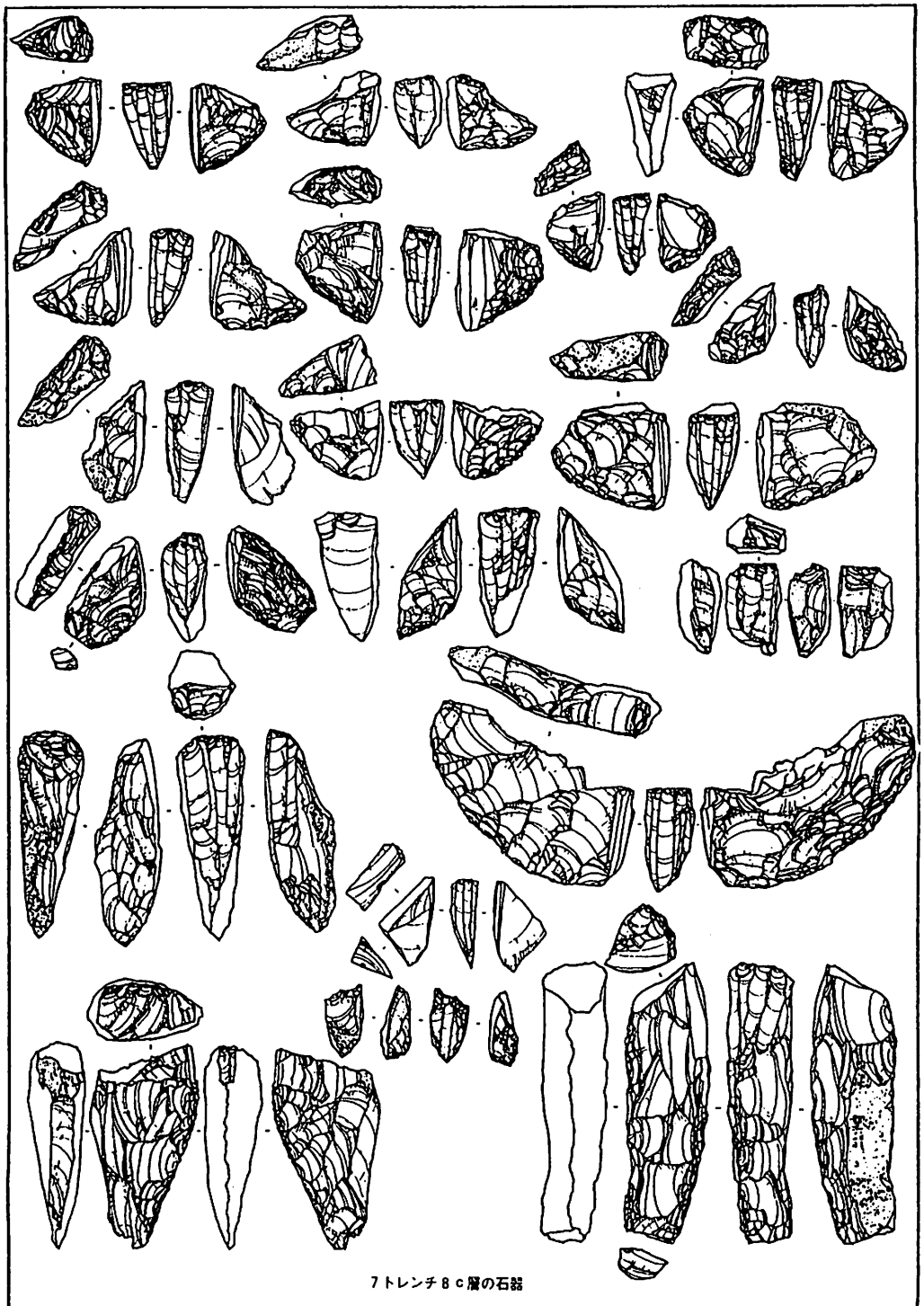
第44図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）　0　(1:2)　5cm



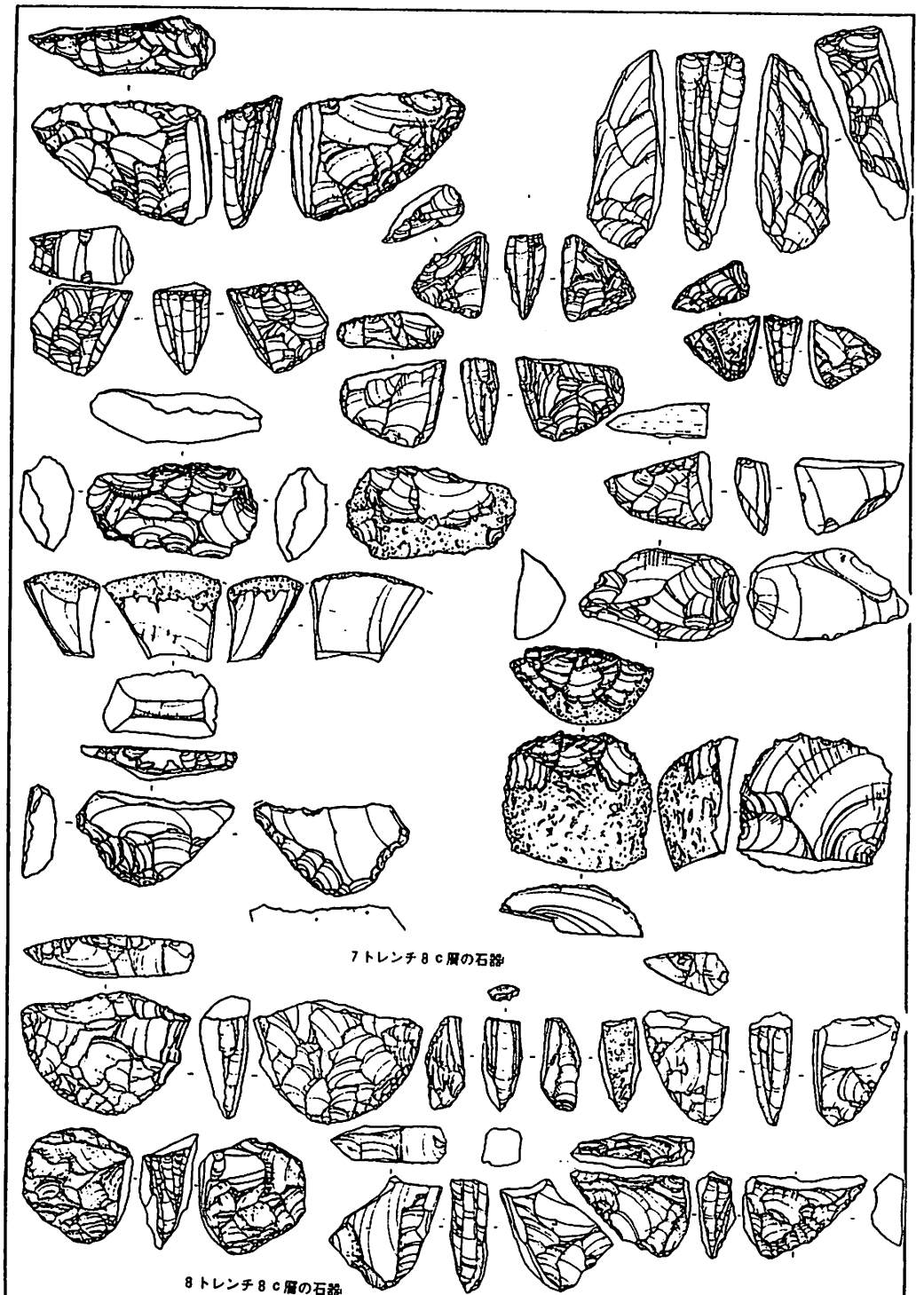
第45図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）



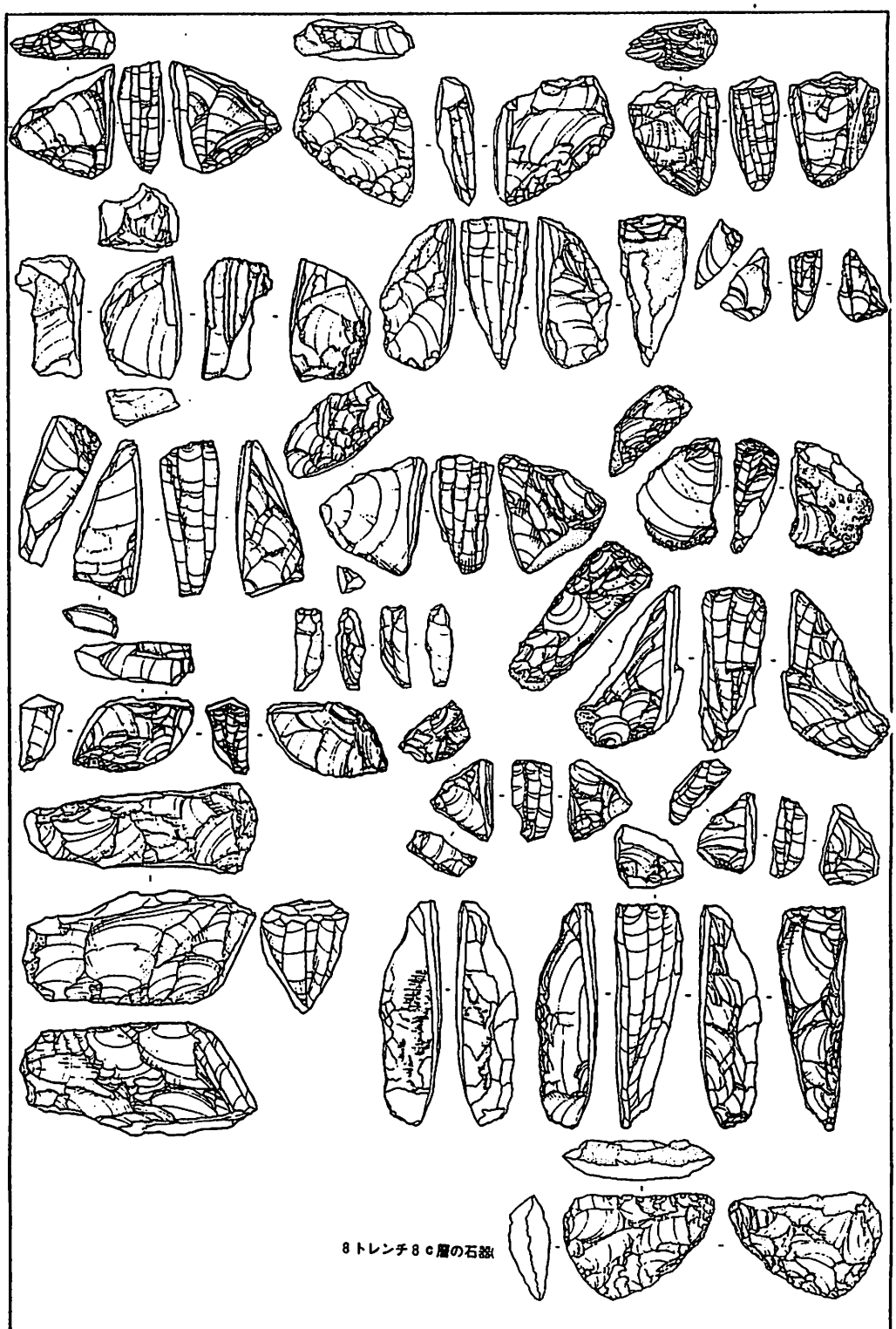
第46図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）



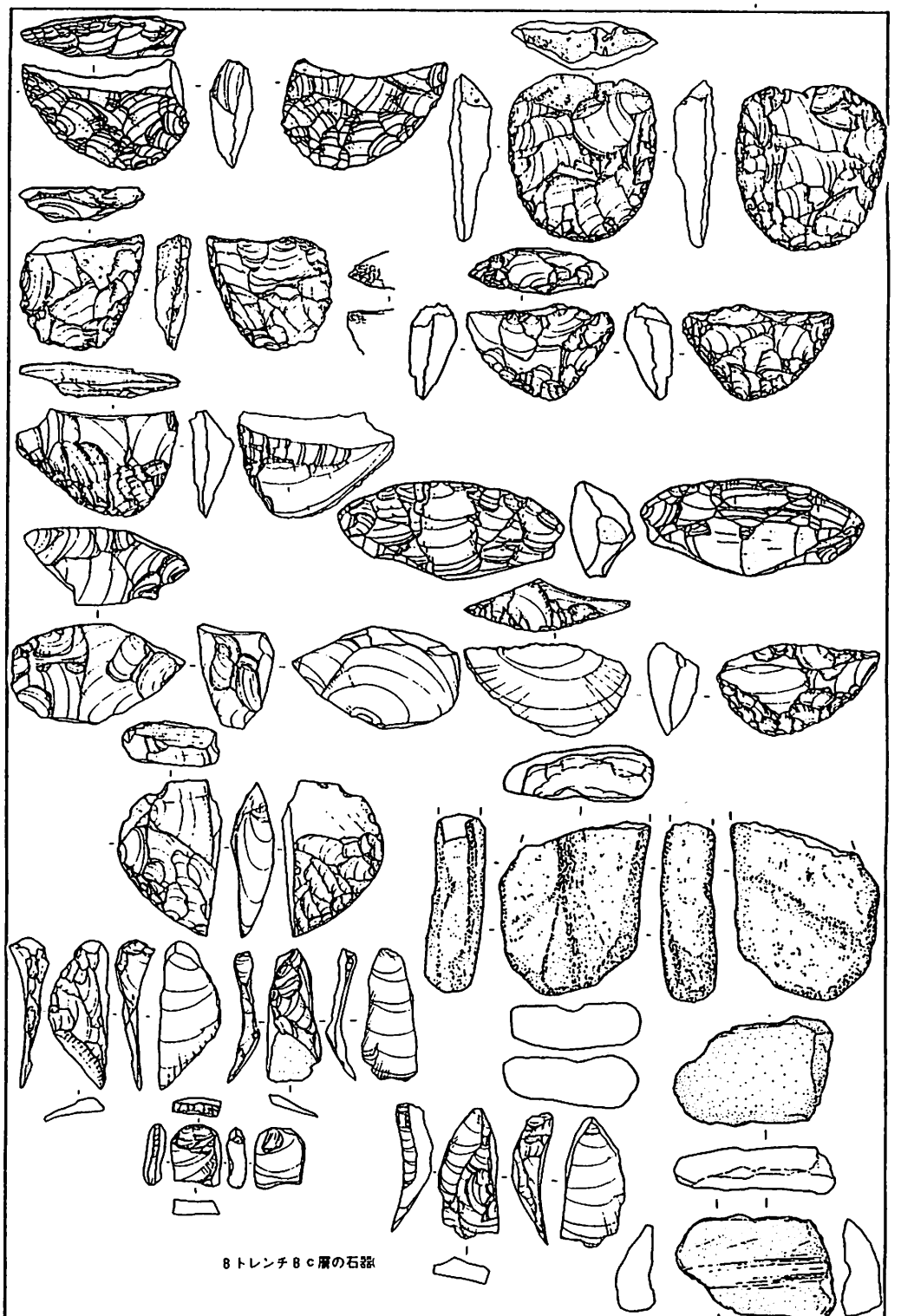
第47図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）　0　(1:2)　5cm



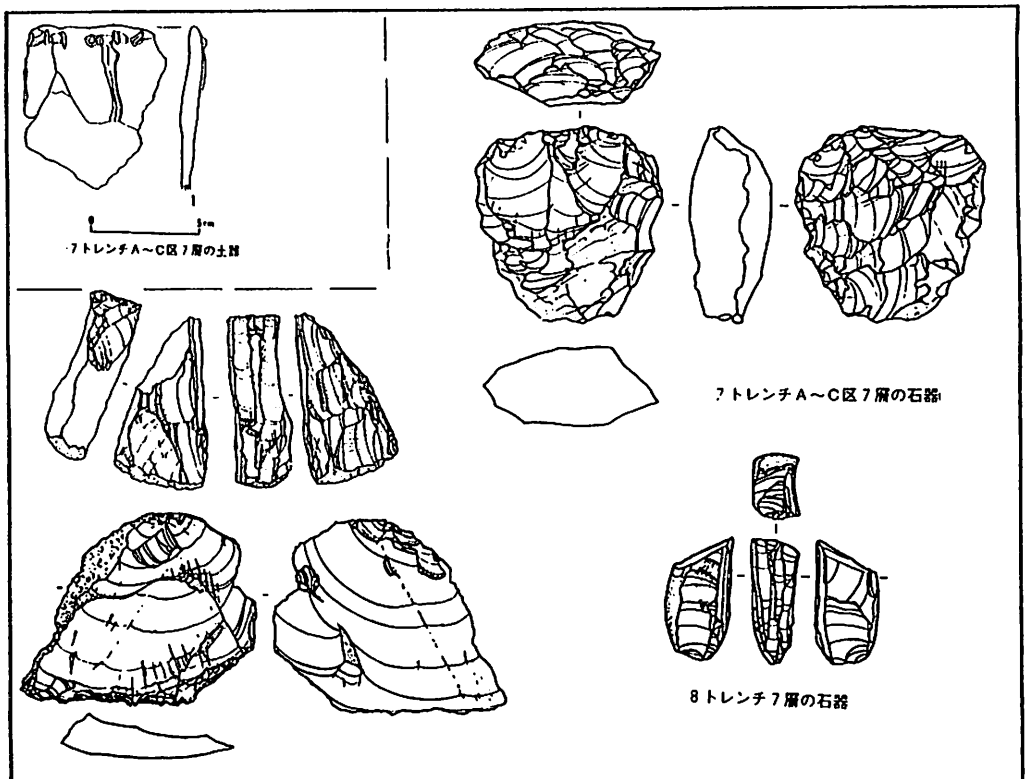
第48図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）　0　(1:2)　5cm



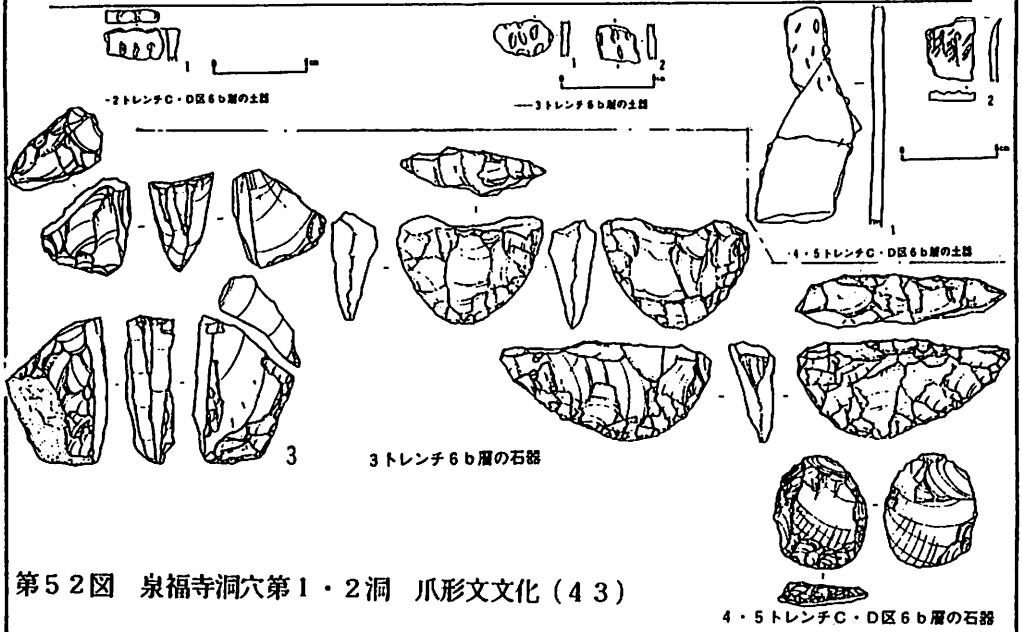
第49図　泉福寺洞穴隆線文文化（43）



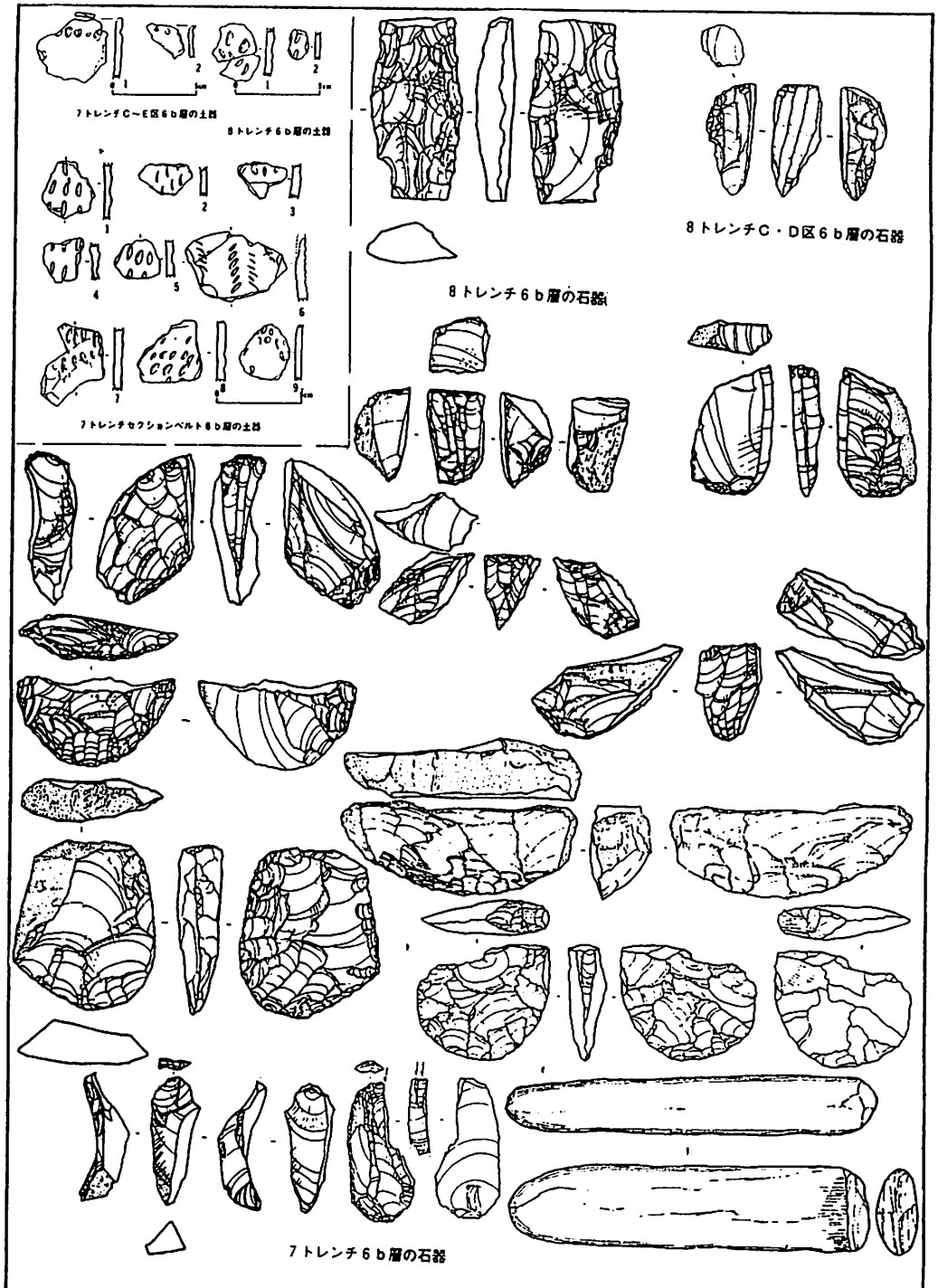
第５０図　泉福寺洞穴隆線文文化（４３）



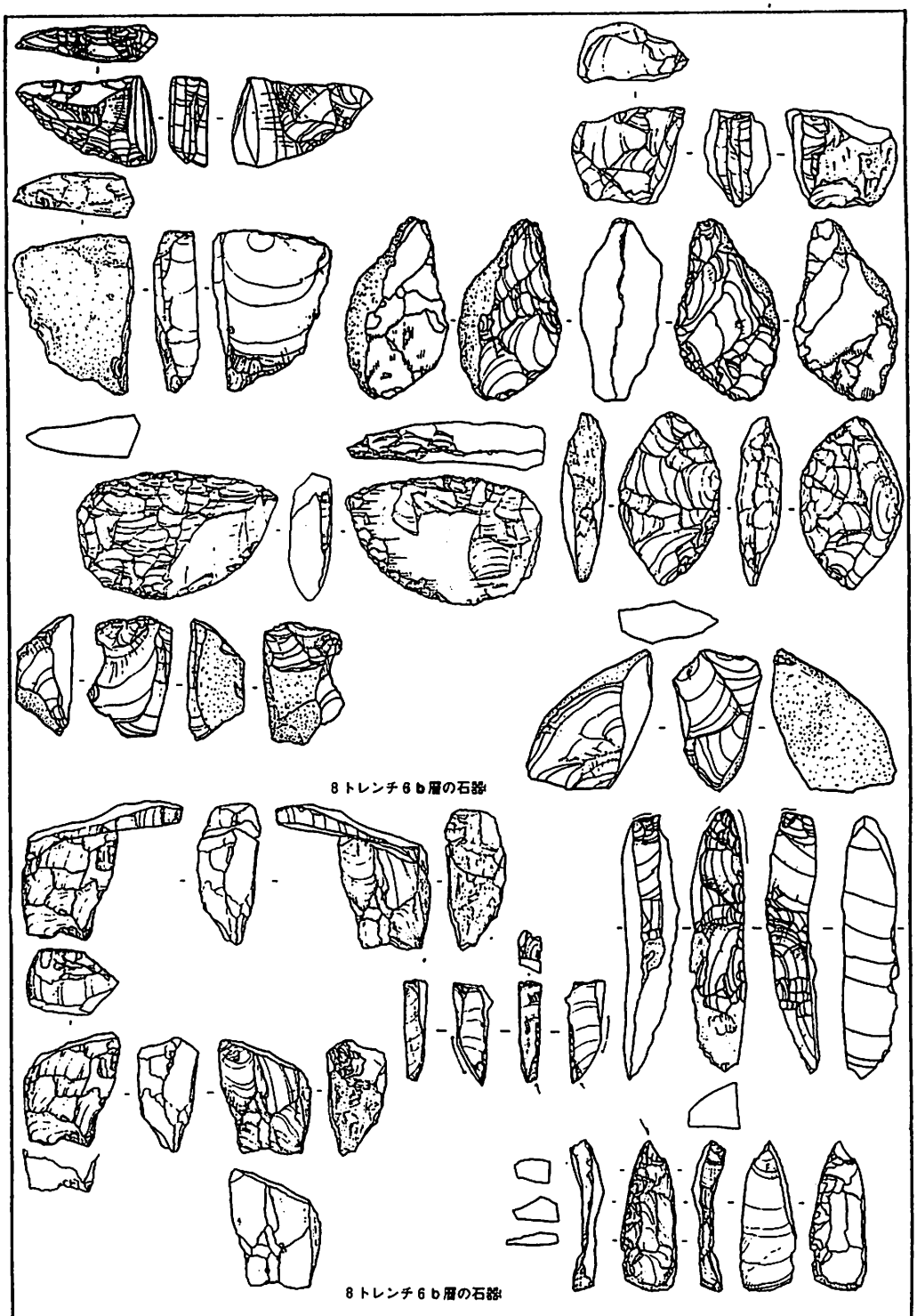
第５１図　泉福寺洞穴隆線文文化（４３）



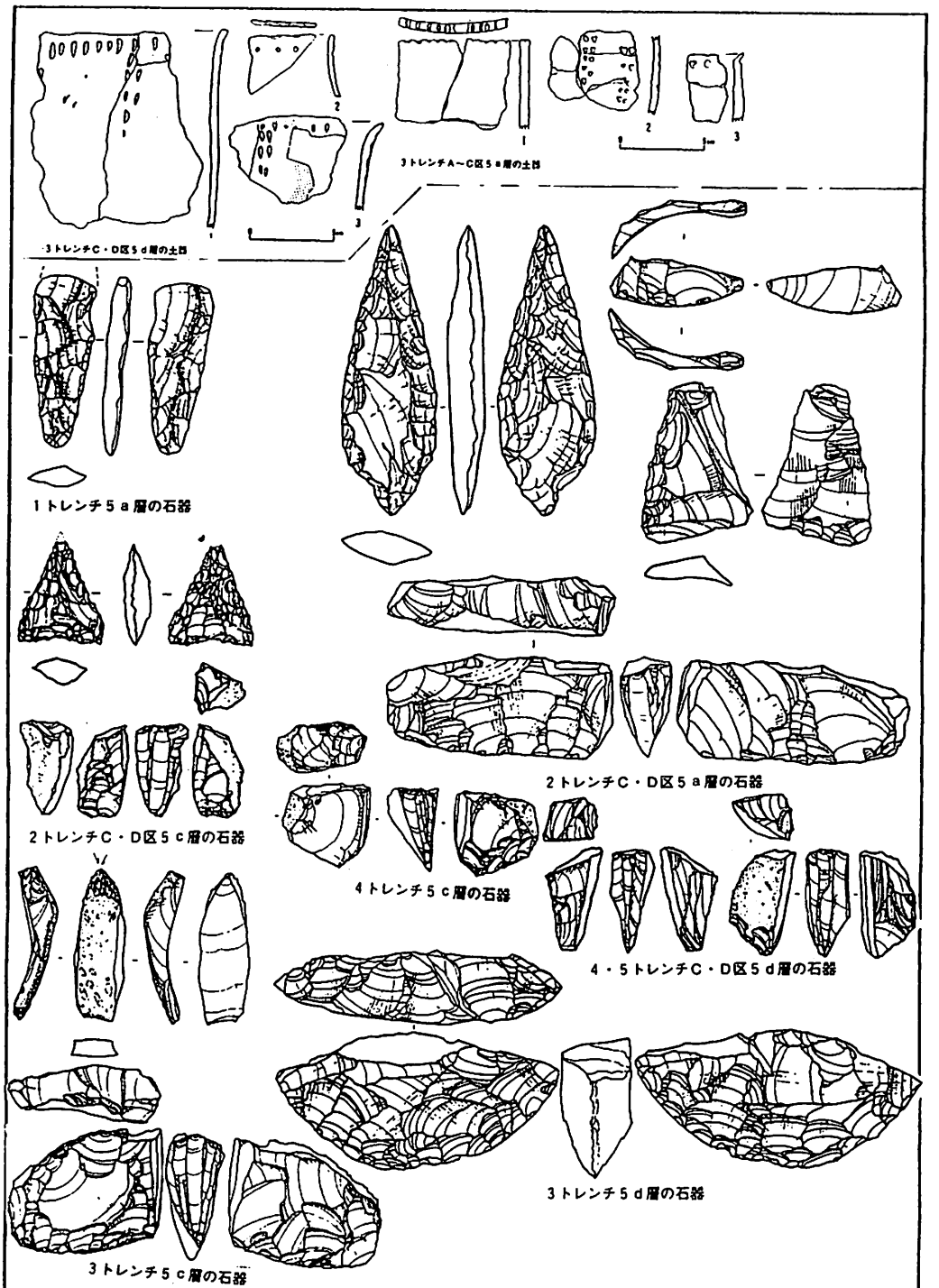
第５２図　泉福寺洞穴第１・２洞　爪形文文化（４３）



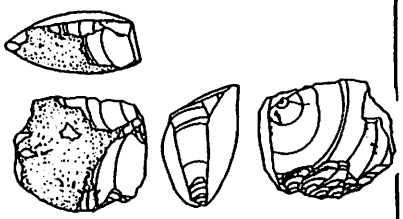
第53図　泉福寺洞穴第3洞　爪形文化（43）　0　(1:2)　5cm



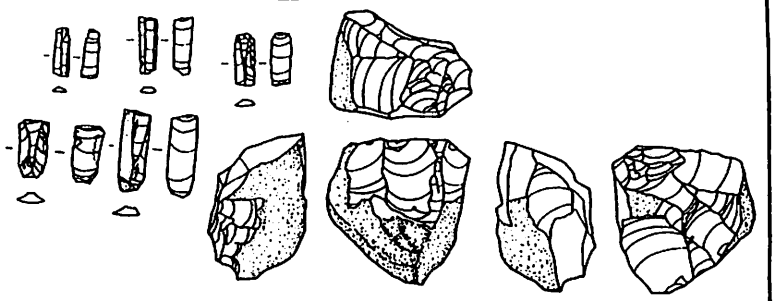
第54図　泉福寺洞穴第3洞　爪形文文化（43）　0　(1:2)　5cm



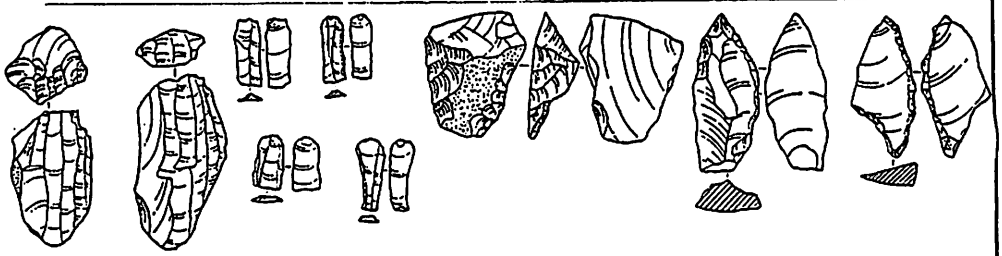
第55図　泉福寺洞穴押引文文化（43）　0　(1:2)　5cm



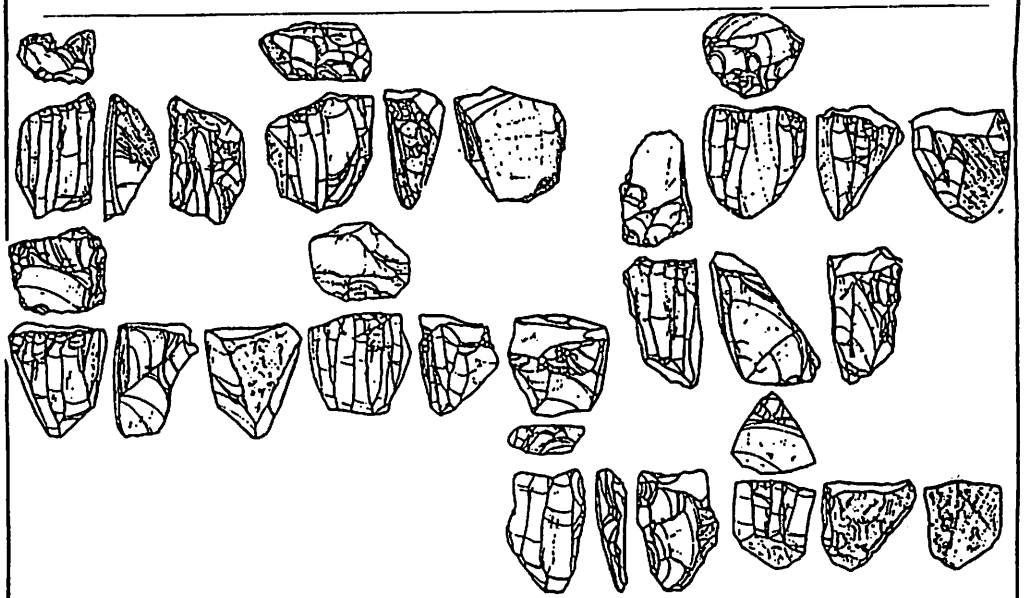
第５６図　古里Ｆ遺跡（４６）



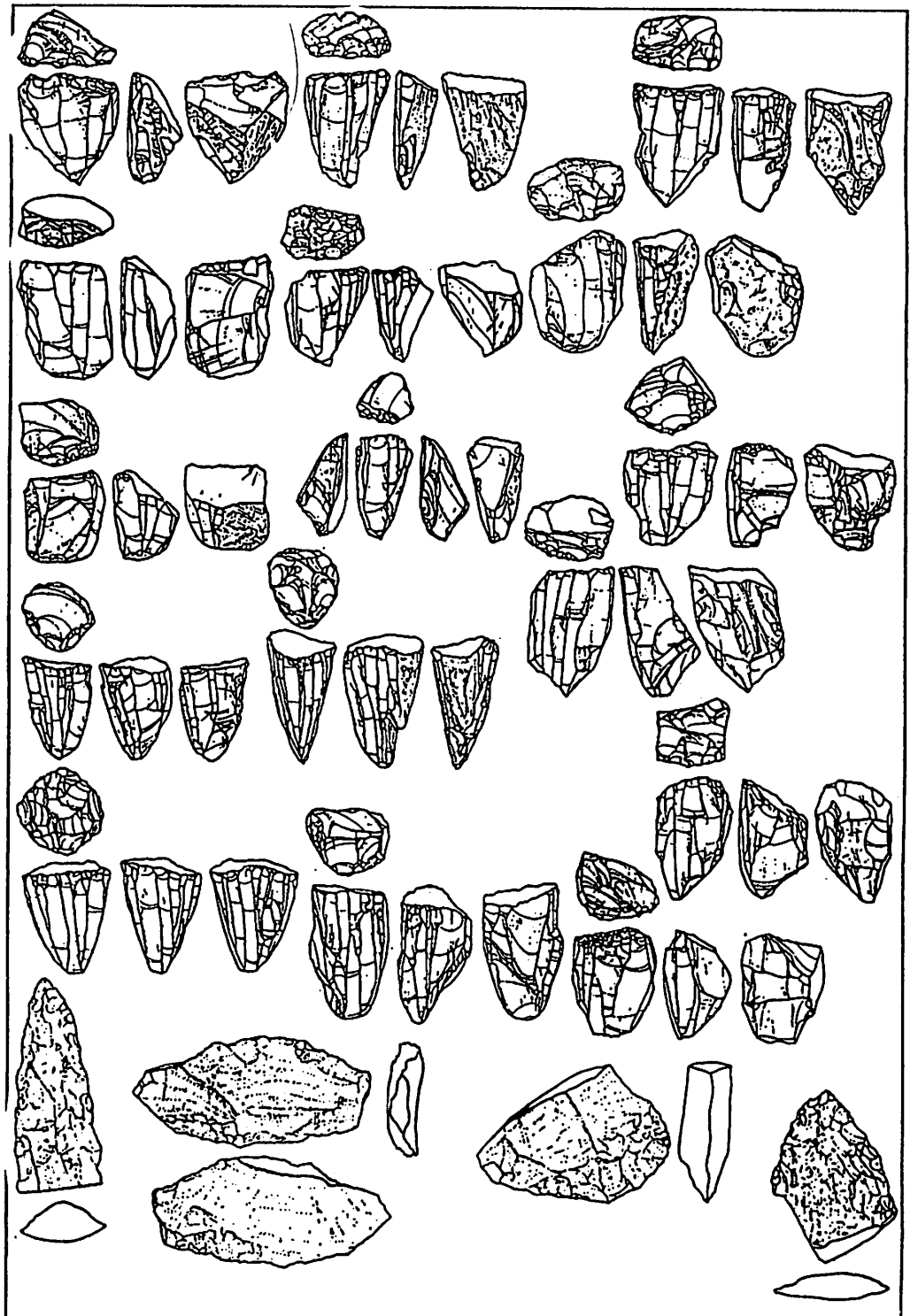
第５７図　ケイマンゴー遺跡（４７）



第５８図　遠目遺跡（５１）

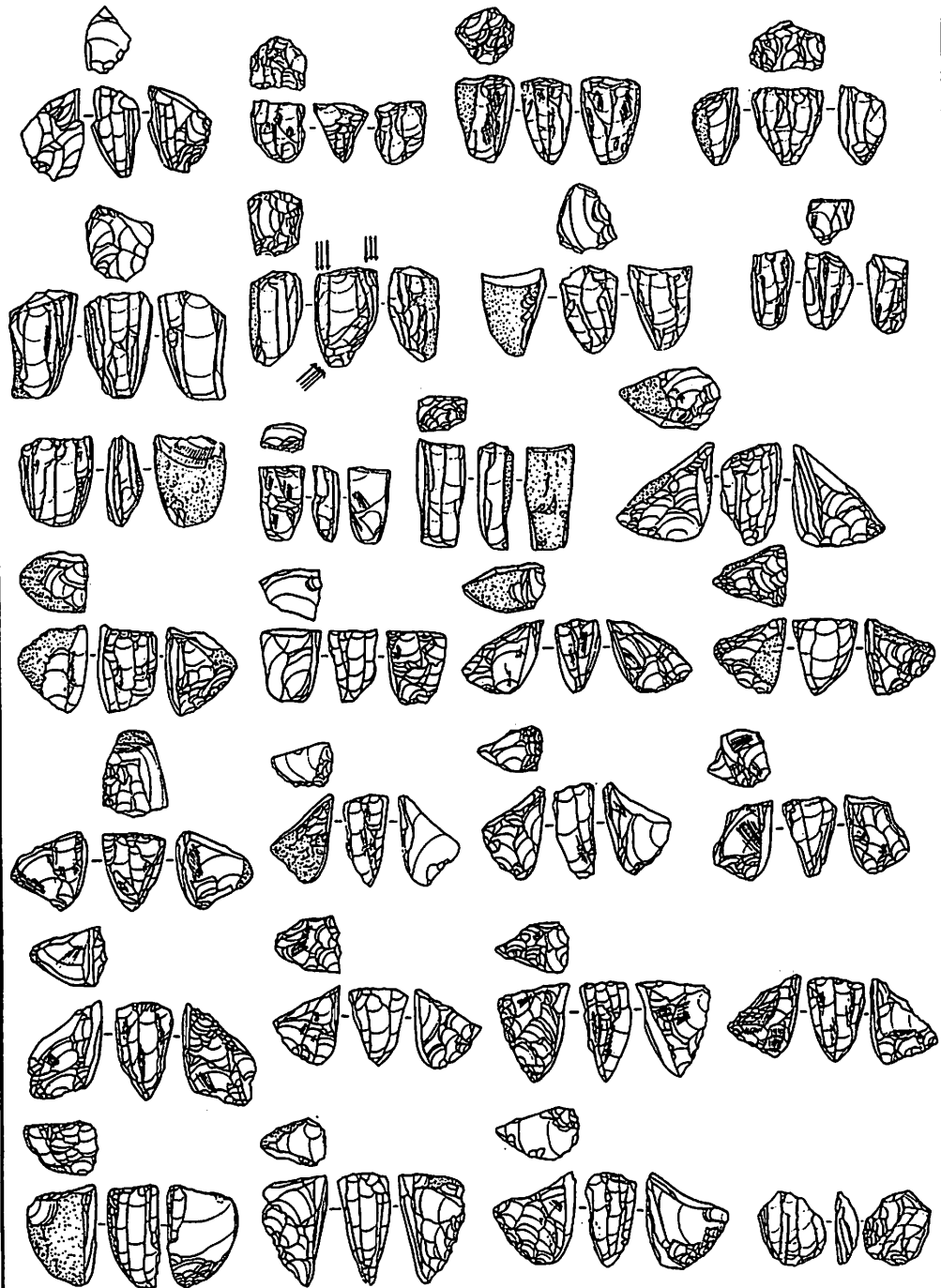


第５９図　野岳遺跡（５３）　0　(1:2)　5cm

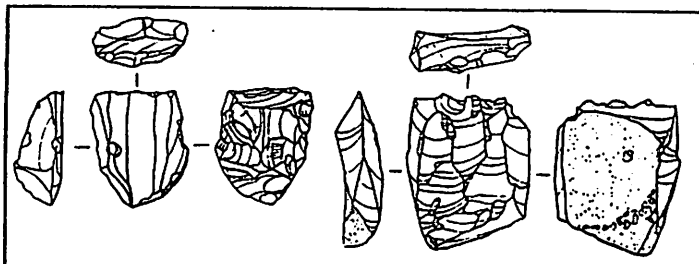


第６０図　野岳遺跡（５３）

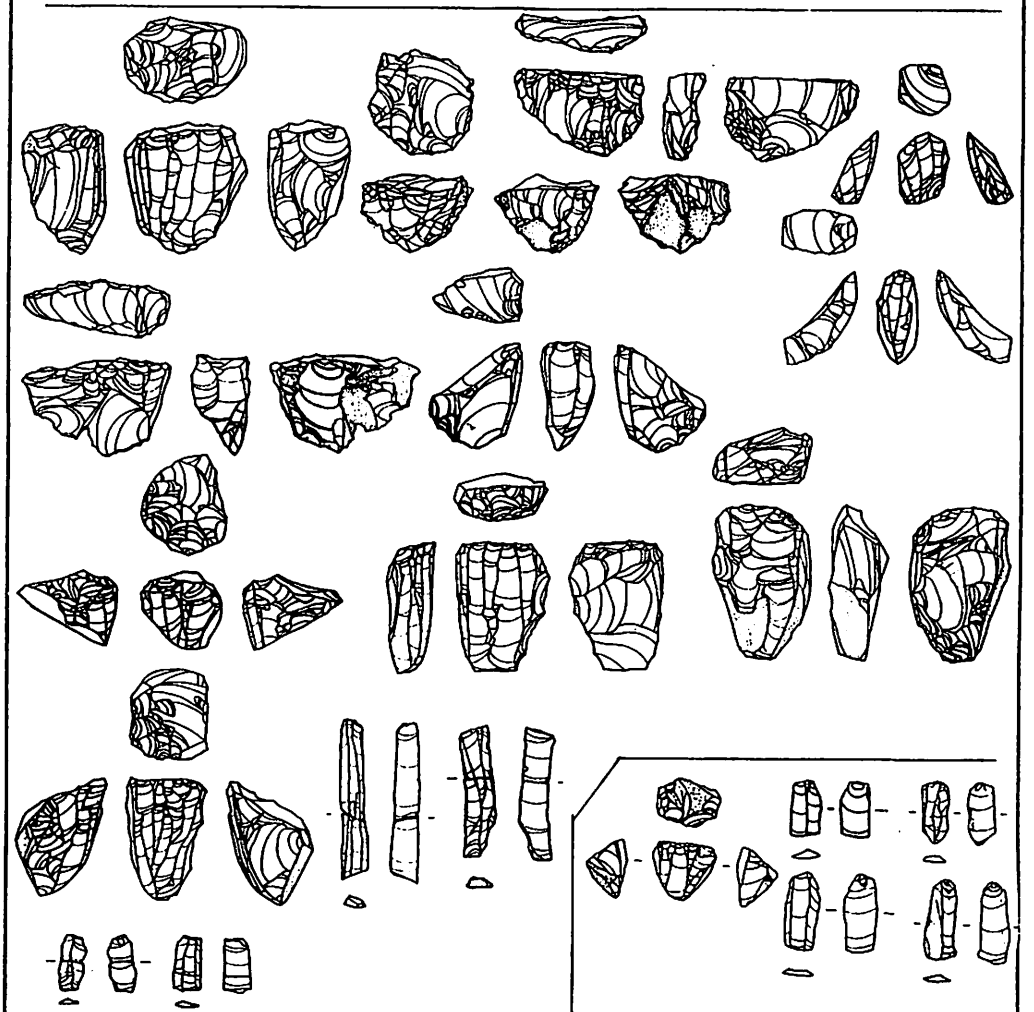
0　(1:2)　5cm



第６１図　堂崎遺跡（９）　0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



第６２図　位牌塔遺跡（６０）



第６３図　鷹野遺跡（６３）

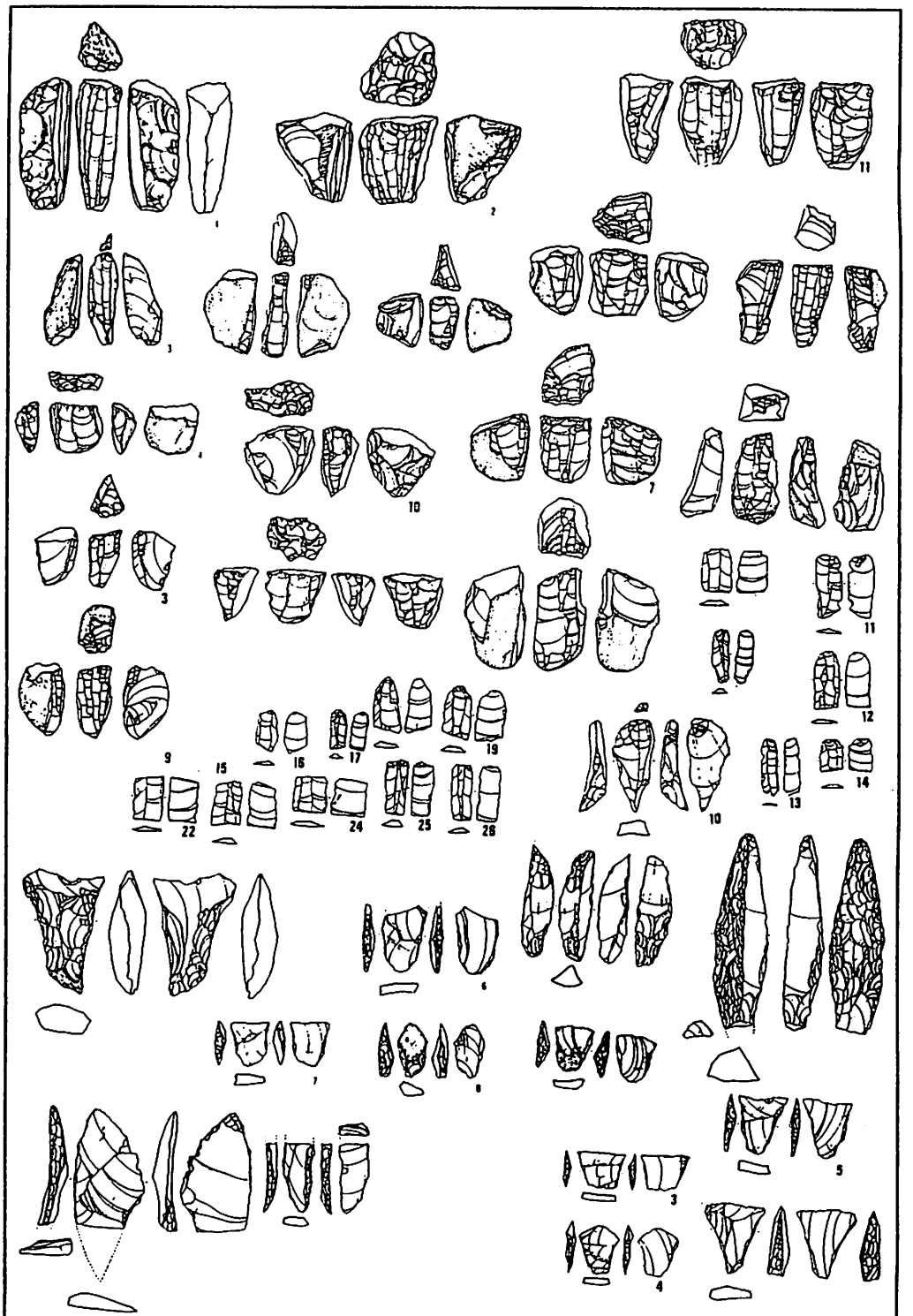
第６４図　平遺跡（６４）

0　(1:2)　5cm

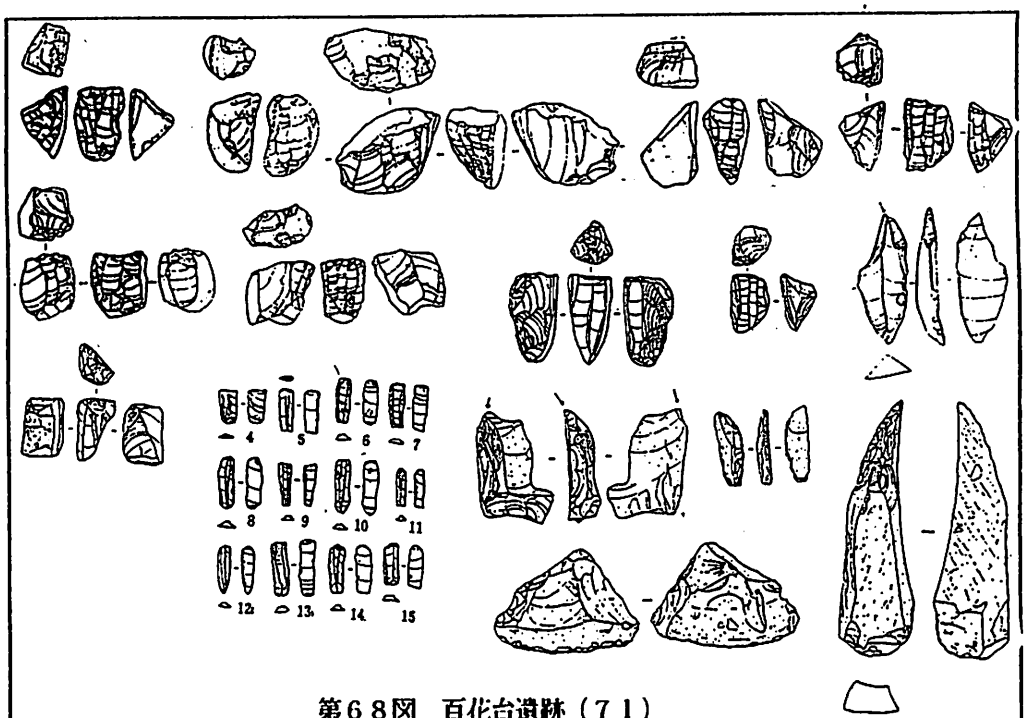
第６５図　西輪久道遺跡（６５）

第６６図　平木場遺跡（６７）

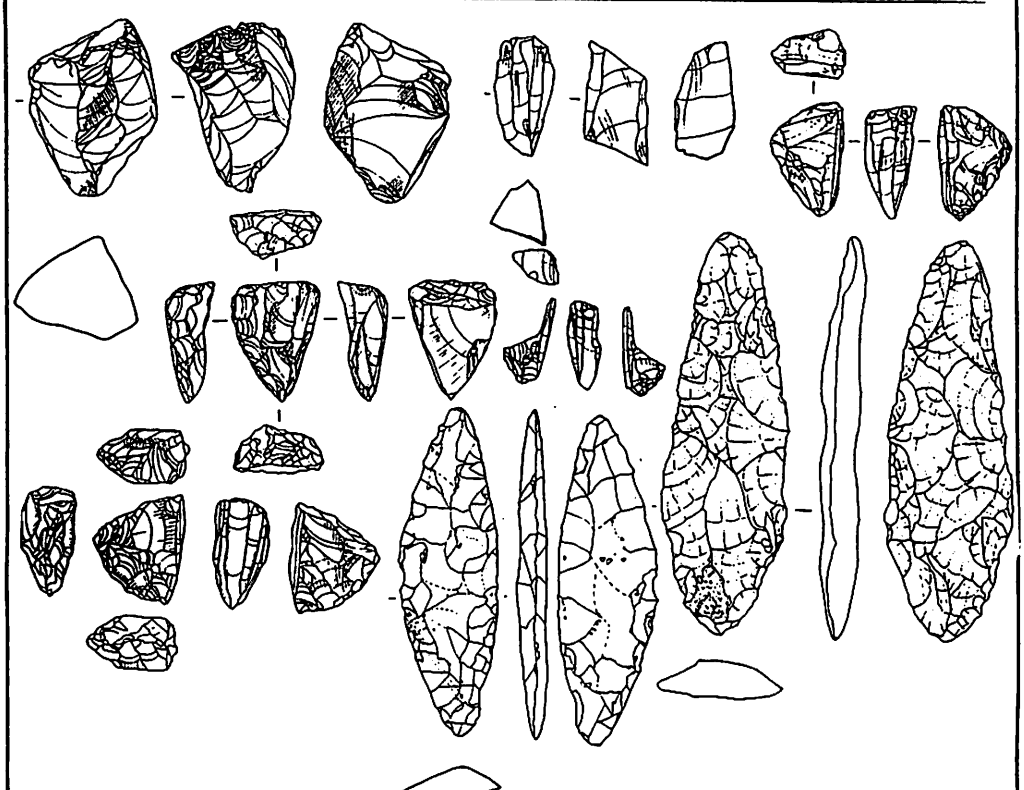
0　(1:2)　5cm



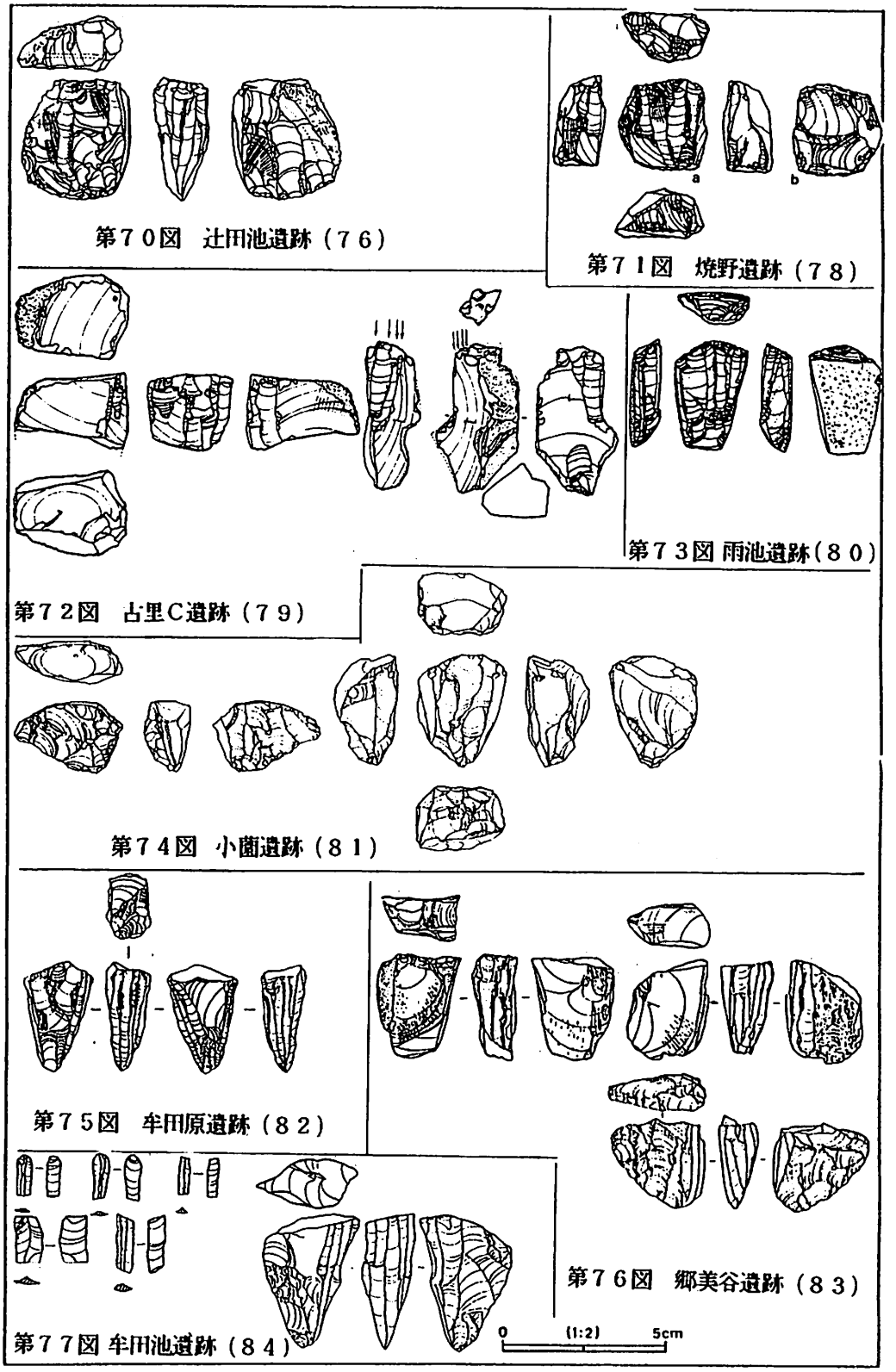
第67図　百化台S遺跡（70）　0　(1:2)　5cm



第６８図　百化台遺跡（７１）



第６９図　松山Ａ遺跡（７５）



第７０図　辻田池遺跡（７６）

第７１図　焼野遺跡（７８）

第７２図　古里Ｃ遺跡（７９）

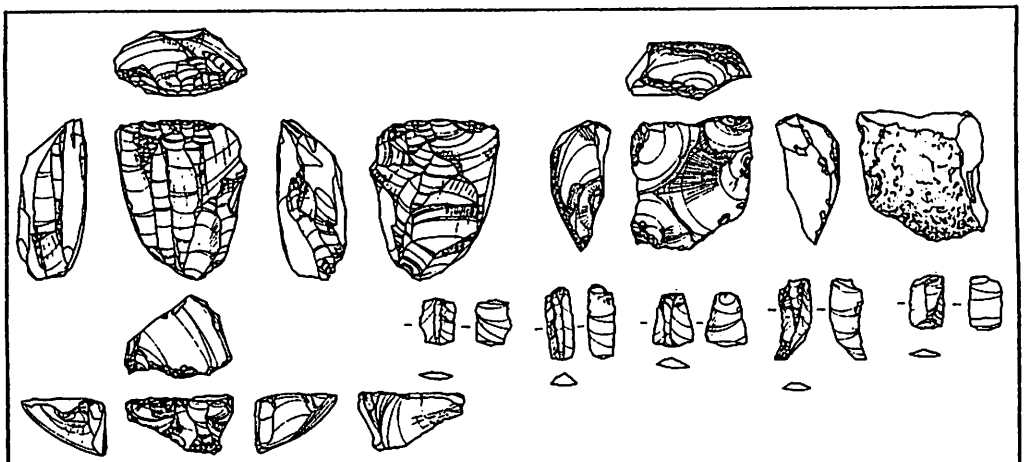
第７３図 雨池遺跡（８０）

第７４図　小薗遺跡（８１）

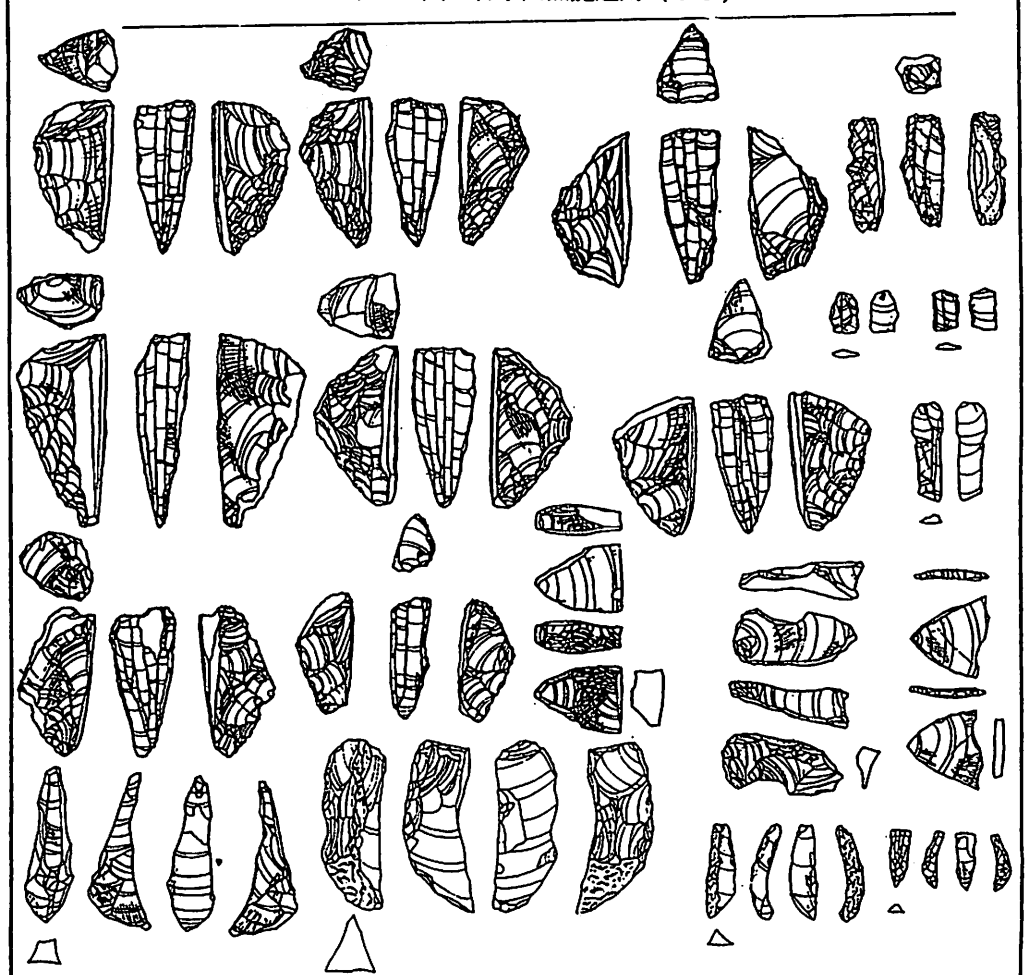
第７５図　牟田原遺跡（８２）

第７６図　郷美谷遺跡（８３）

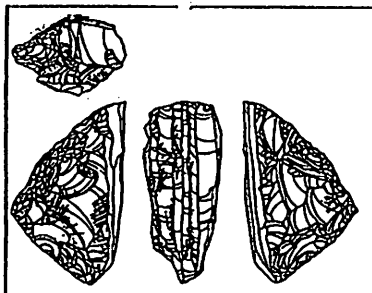
第７７図 牟田池遺跡（８４）



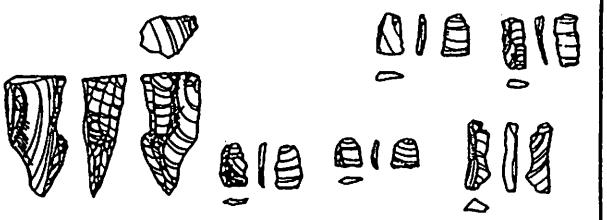
第７８図　菅牟田黒龍遺跡（８５）



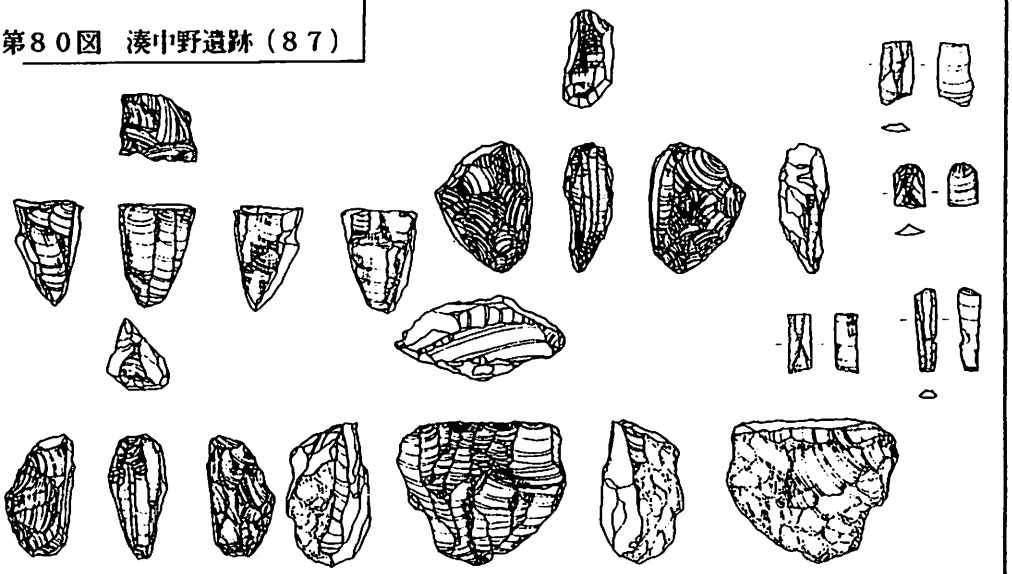
第７９図　石ケ元下遺跡（８６）　0　(1:2)　5cm



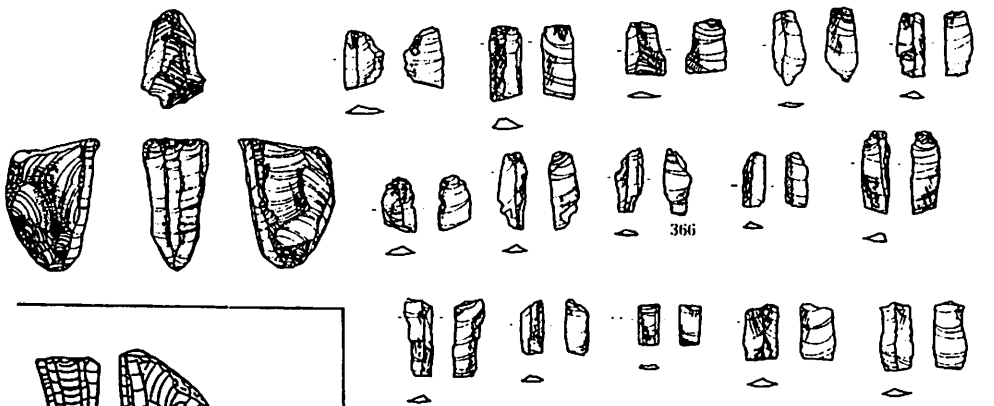
第８０図　湊中野遺跡（８７）



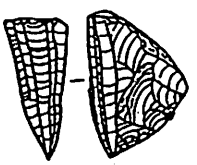
第８１図　コクダシ遺跡（８８）



第８２図　馬部甚蔵山遺跡（８９）

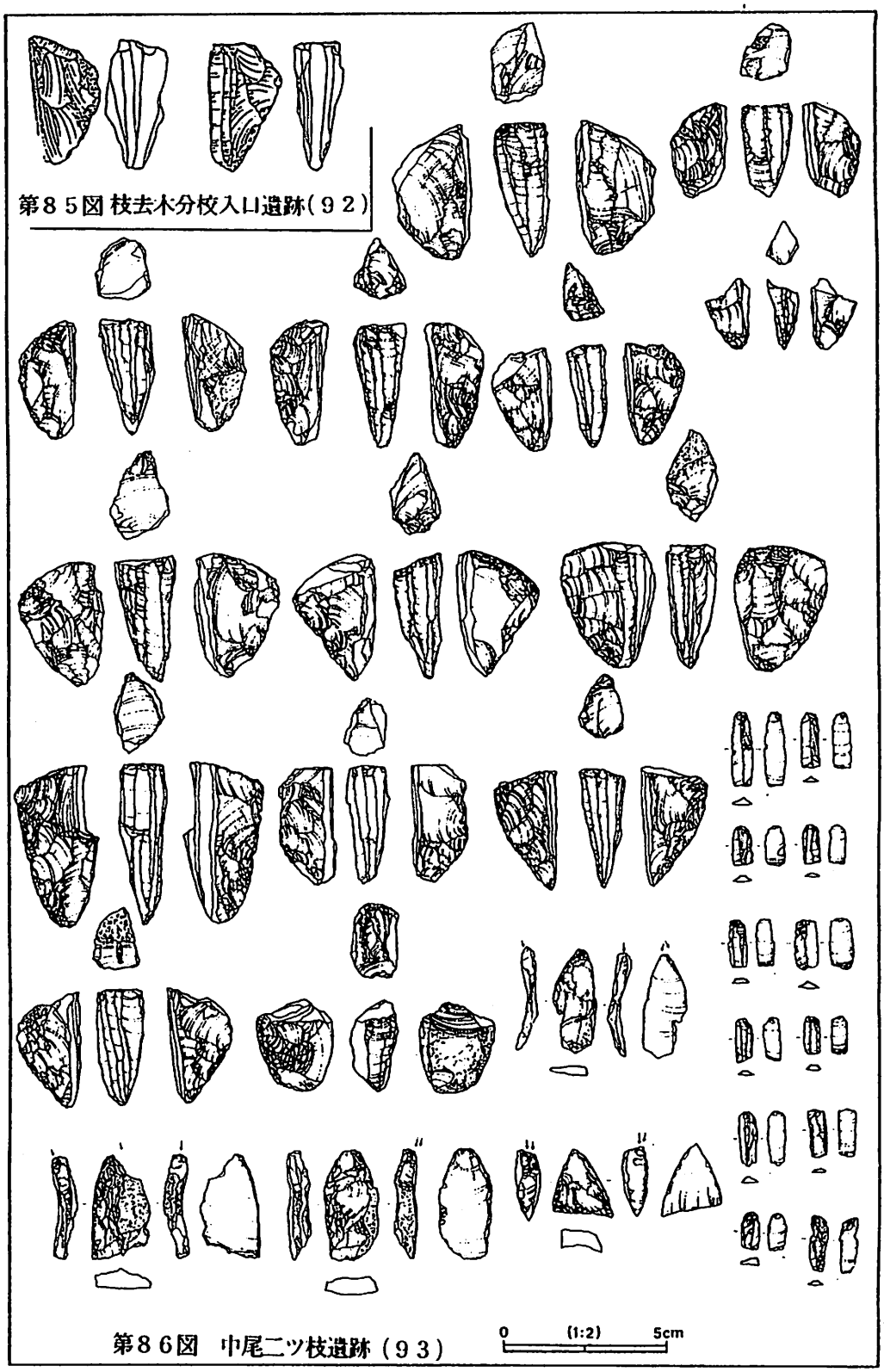


第８３図　枝去木中山遺跡（９０）



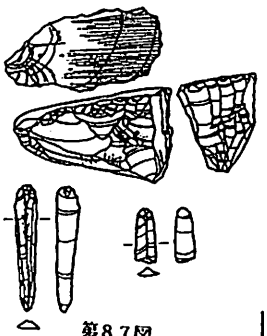
第８４図　上山田遺跡（９１）

0　(1:2)　5cm

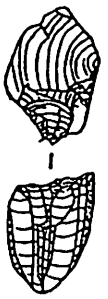


第８５図 枝去木分校入口遺跡（９２）

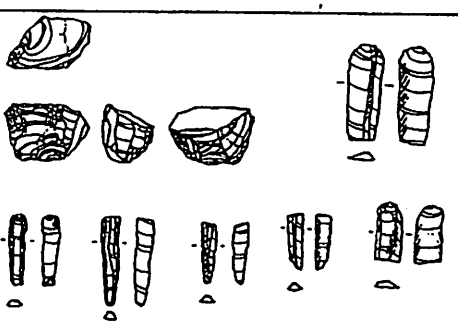
第８６図 中尾二ツ枝遺跡（９３）



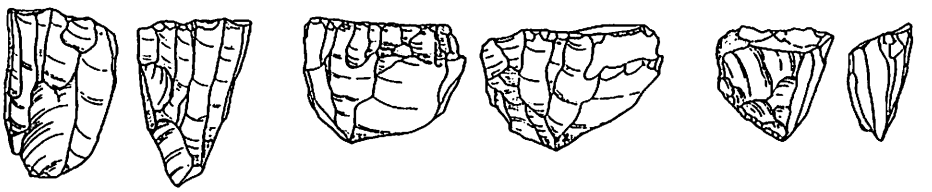
第８７図
竹木場両田遺跡（９４）



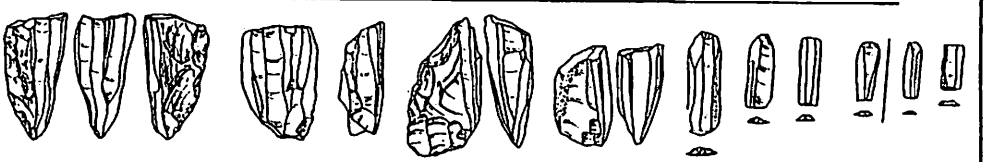
第８８図
馬場野ゴルフ場（９５）



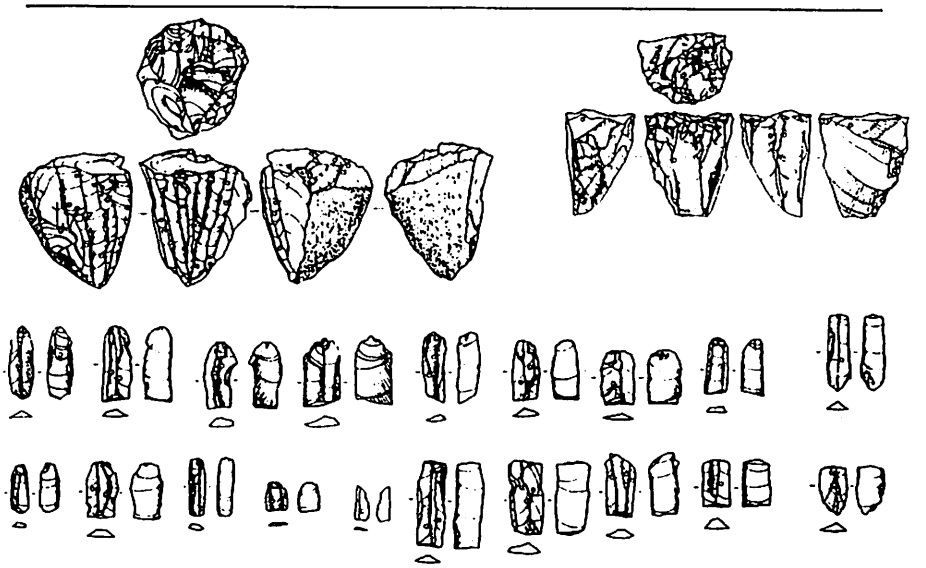
第８９図　唐ノ川丸尾遺跡（９６）



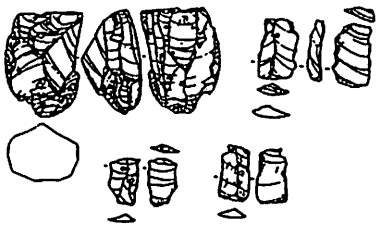
第９０図　一本松遺跡（９７）



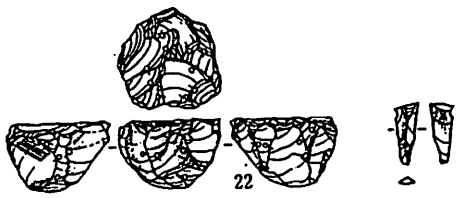
第９１図　笹ノ尾遺跡（９８）



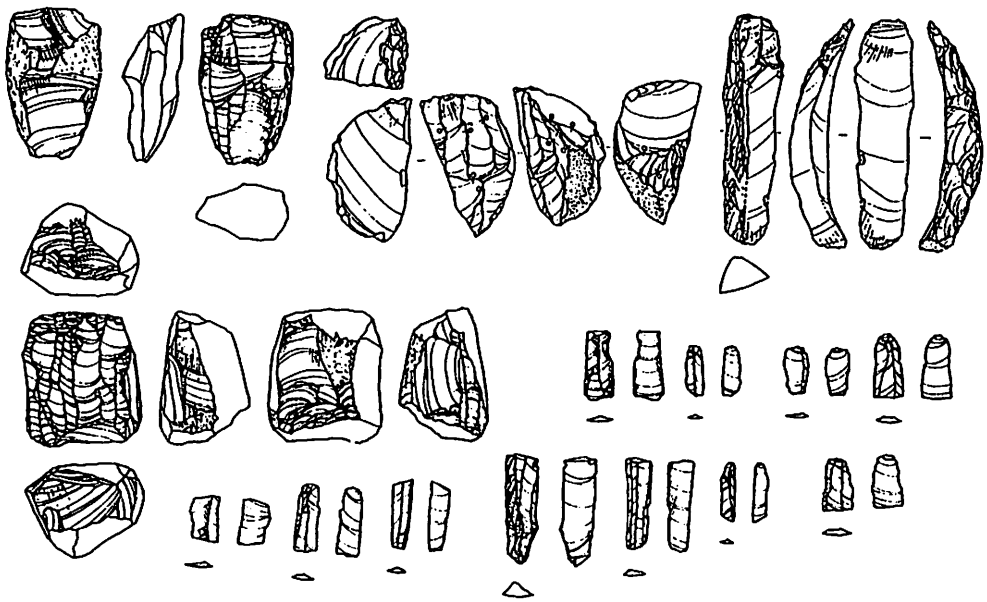
第９２図　磯道遺跡（９９）　0　(1:2)　5cm



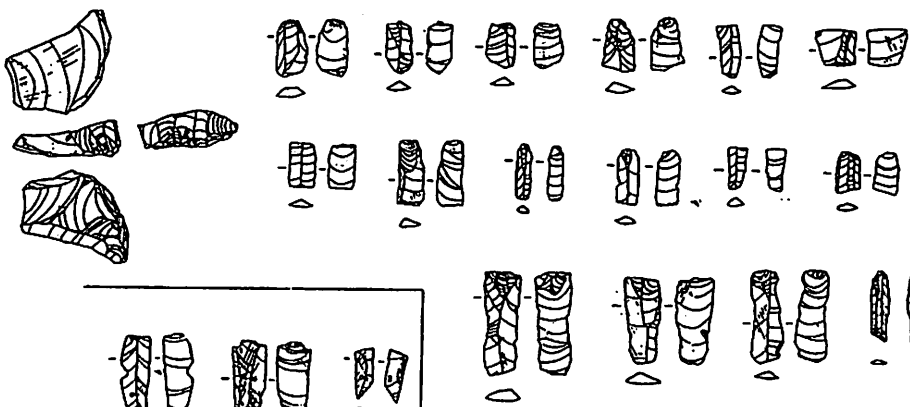
第９３図　丹土遺跡（１００）



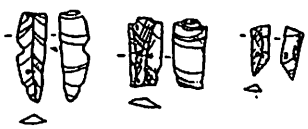
第９４図　尾山遺跡（１０１）



第９５図　川原田遺跡（１０２）

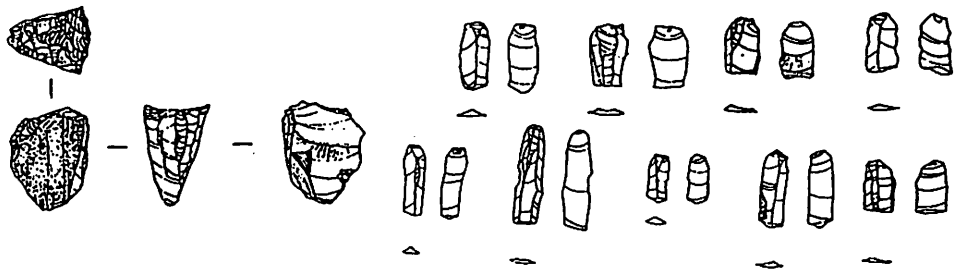


第９６図　新木場東遺跡（１０３）

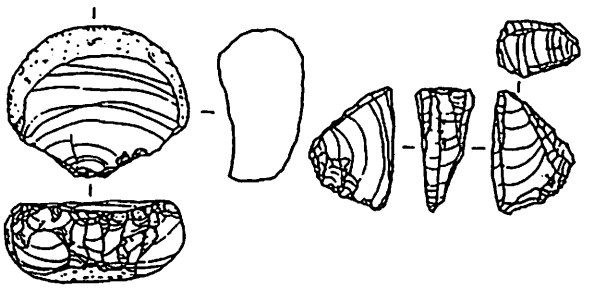


第９７図　高池木場遺跡（１０４）

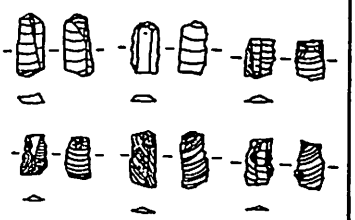
0　(1:2)　5cm



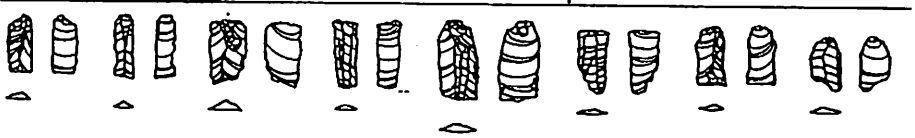
第９８図　生石遺跡（１０５）



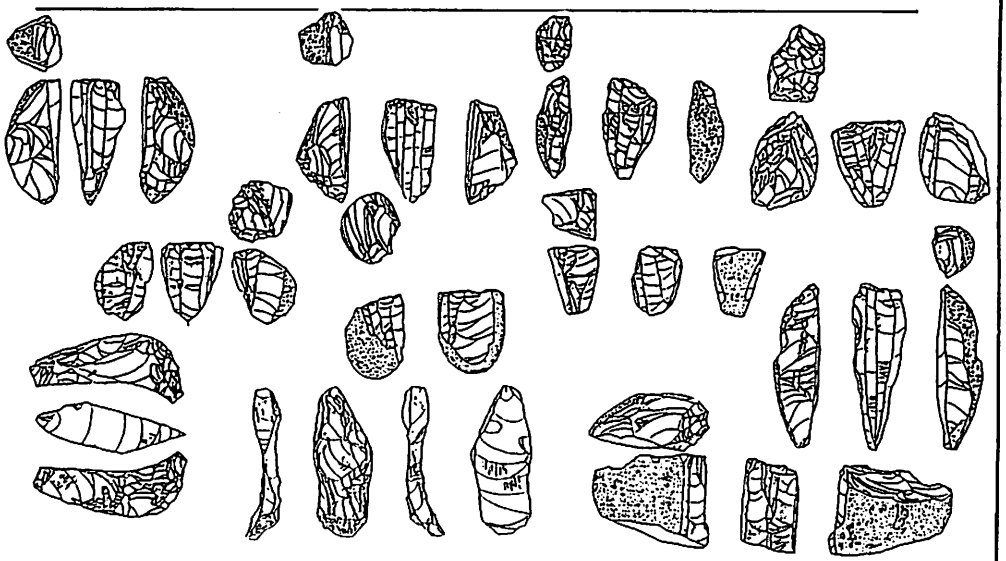
第９９図　押川遺跡（１０６）



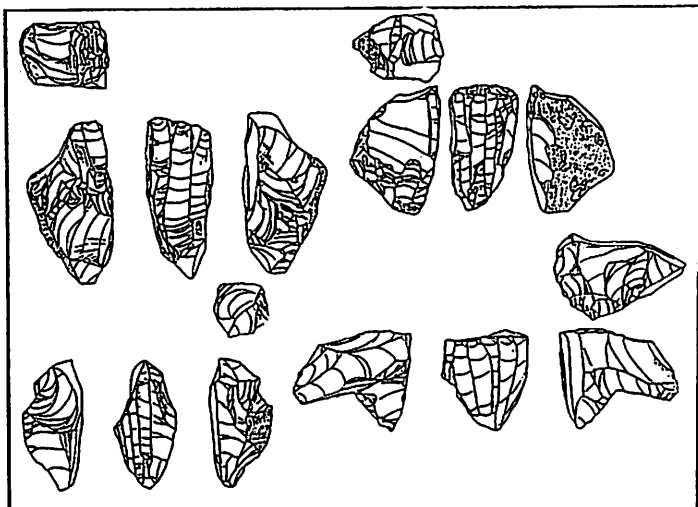
第１００図　池ノ田１遺跡（１０７）



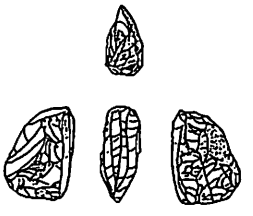
第１０１図　小平遺跡（１０８）



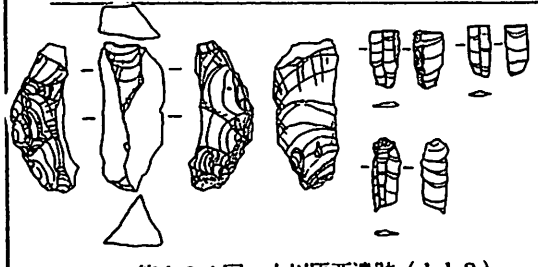
第１０２図　大浦溜遺跡（１０９）　0　(1:2)　5cm　0　(1:3)　5cm



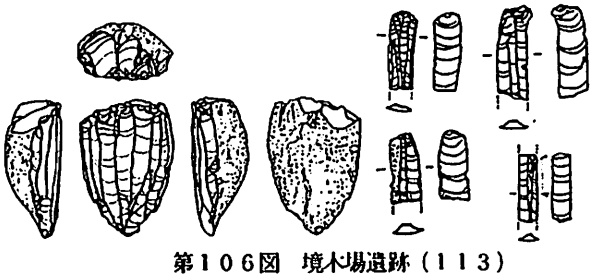
第１０３図　サカセ溜西方遺跡（１１０）



第１０５図　楠谷遺跡（１１１）



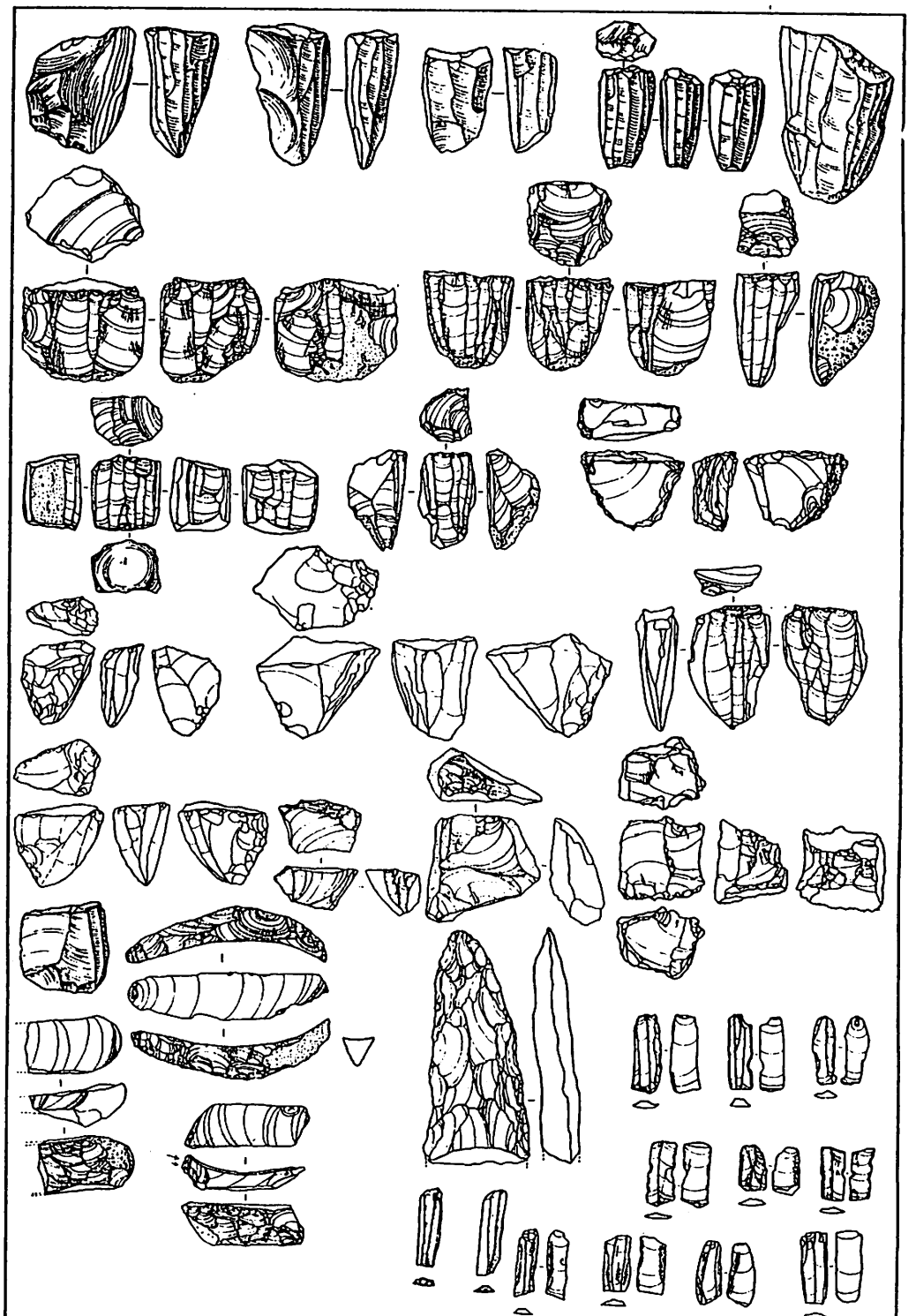
第１０４図　中川原西遺跡（１１２）



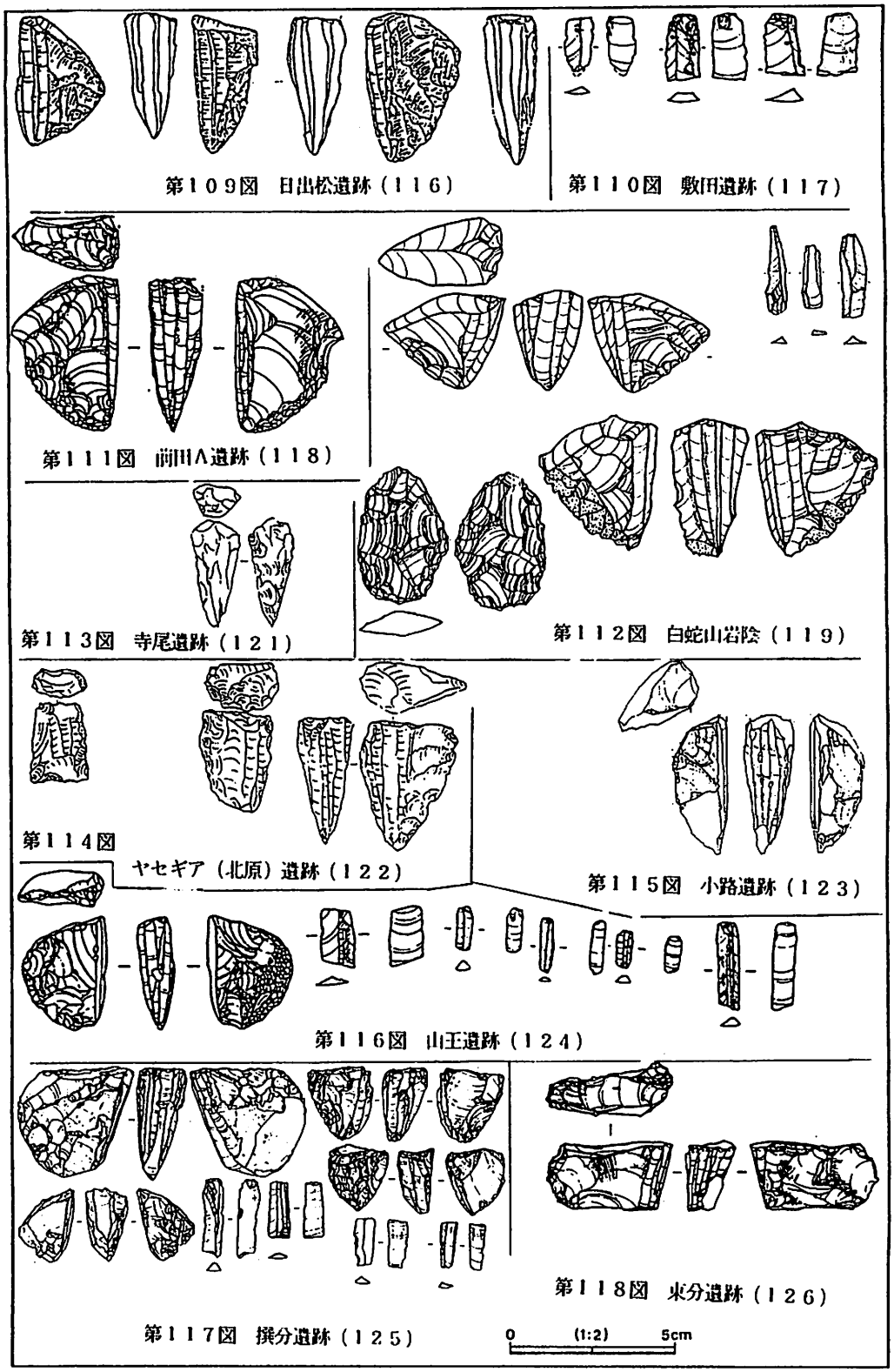
第１０６図　境木場遺跡（１１３）

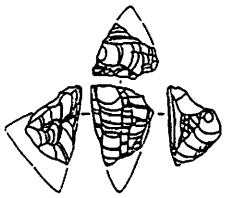
第１０７図　畦木場遺跡（１１４）

0　(1:2)　5cm

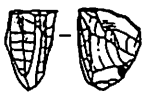


第108図　原遺跡（115）


第１０９図　日出松遺跡（１１６）
第１１０図　敷田遺跡（１１７）
第１１１図　前田Ａ遺跡（１１８）
第１１２図　白蛇山岩陰（１１９）
第１１３図　寺尾遺跡（１２１）
第１１４図
ヤセギア（北原）遺跡（１２２）
第１１５図　小路遺跡（１２３）
第１１６図　山王遺跡（１２４）
第１１７図　撰分遺跡（１２５）
第１１８図　東分遺跡（１２６）
0　(1:2)　5cm

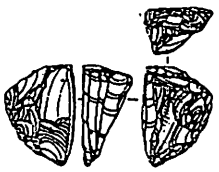


第１１９図　浦尻池遺跡（１３１）

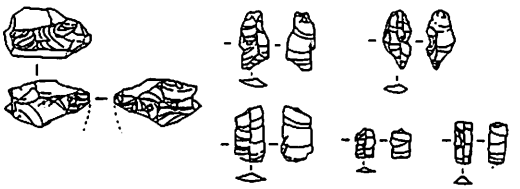


第１２０図
鹿部東町遺跡（１３３）

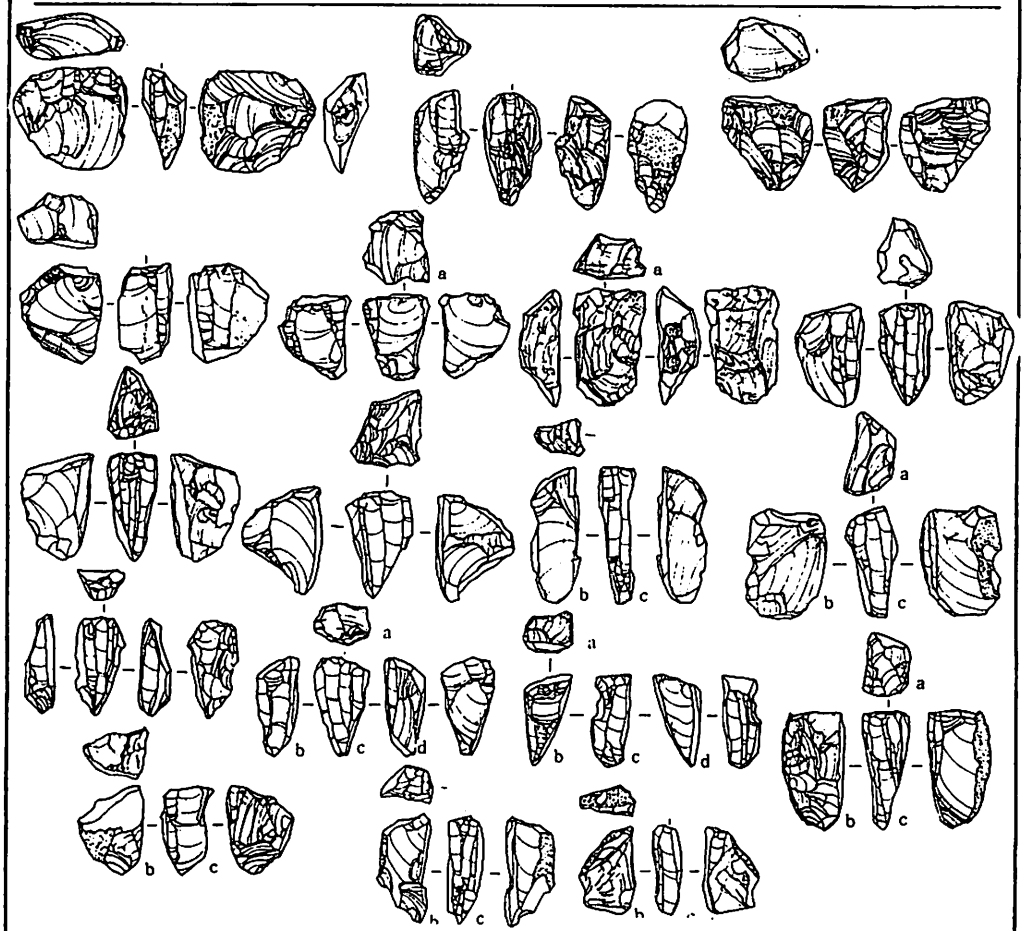
第１２１図
蒲田池遺跡（１３４）



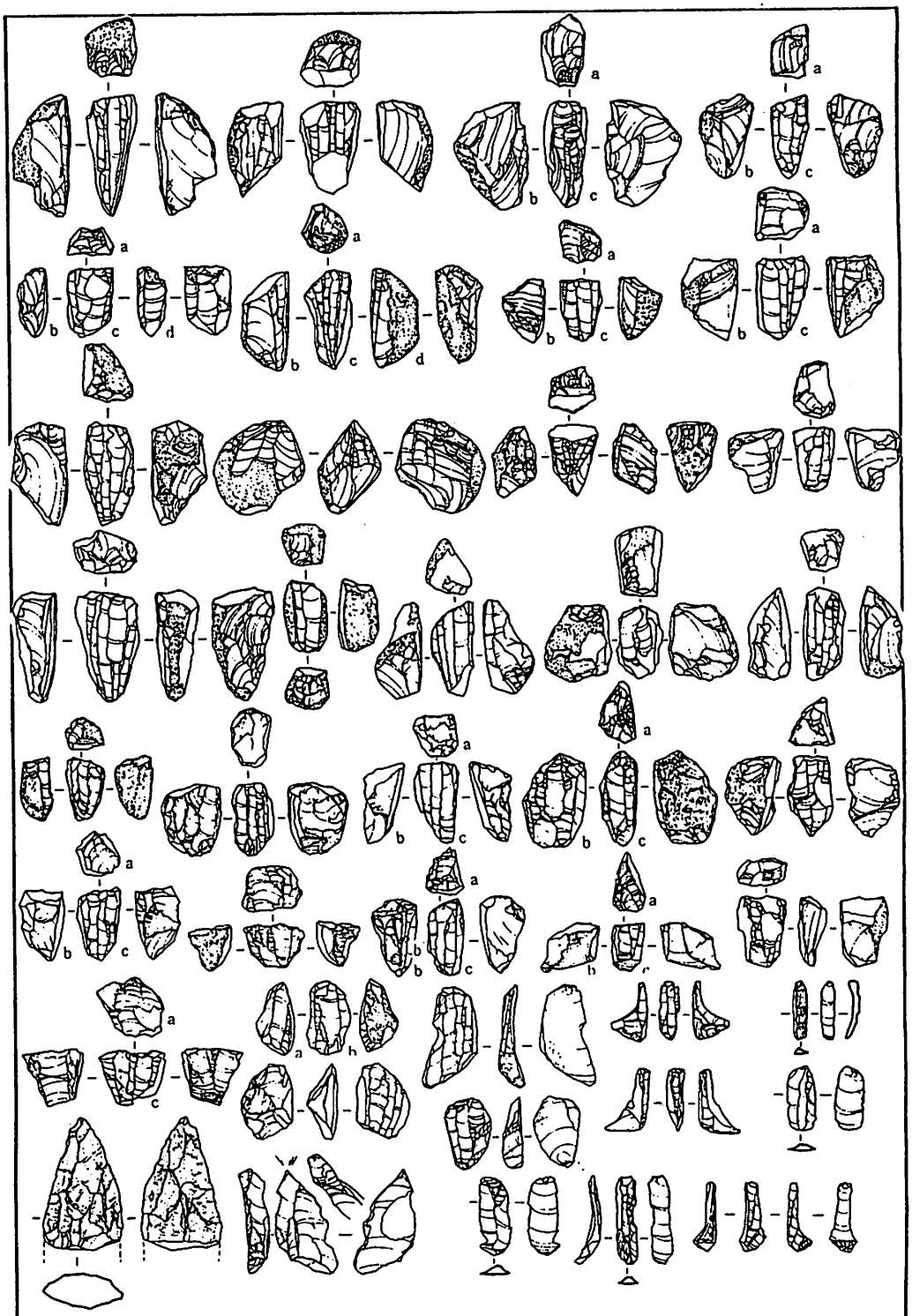
第１２２図　赤石池遺跡（１３６）



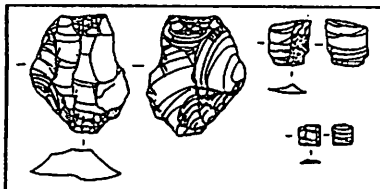
第１２３図　乙植木遺跡（１３７）



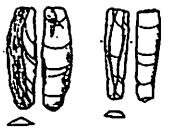
第１２４図　戸原遺跡（１３９）　0　(1:2)　5cm



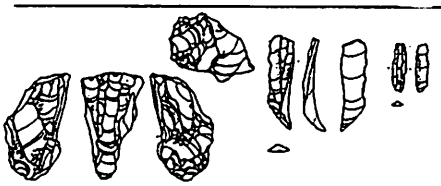
第125図　戸原遺跡（139）　0　(1:2)　5cm



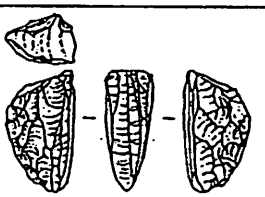
第１２６図　西尾山遺跡（１４０）



第１２７図　羽根戸古墳群遺跡（１４２）

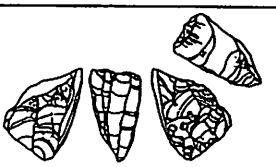


第１２８図　笠間谷古墳群（１４３）

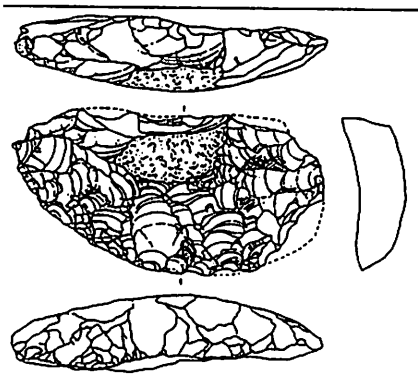


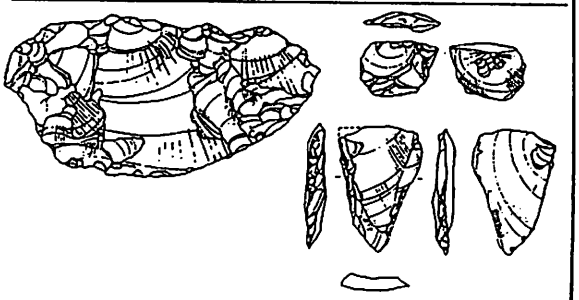
第１２９図　湯納遺跡（１４５）

第１３０図　野方勧進原遺跡（１４７）

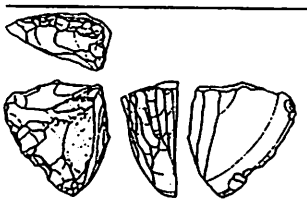


第１３１図　有田遺跡１５２次（１４９）

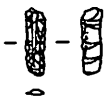




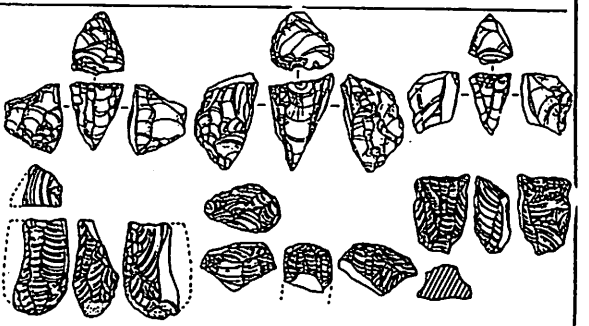
第１３２図　有田遺跡１０７次（１５０）



第１３３図　脇山Ａ遺跡（１５１）

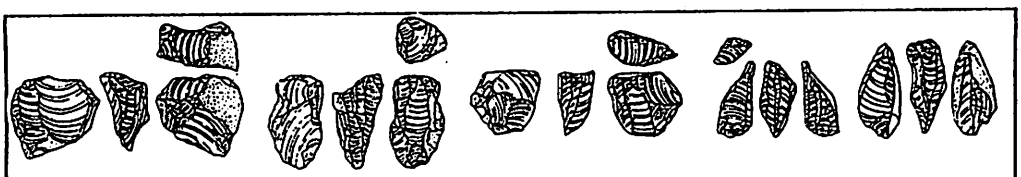


第１３４図　唐原遺跡（１５２）



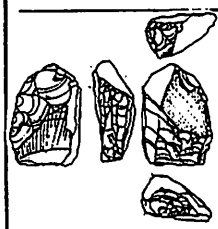
第１３５図　蒲田（部木）遺跡（１５３）

0　(1:2)　5cm

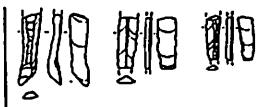


第136図　蒲田（部木）遺跡（153）

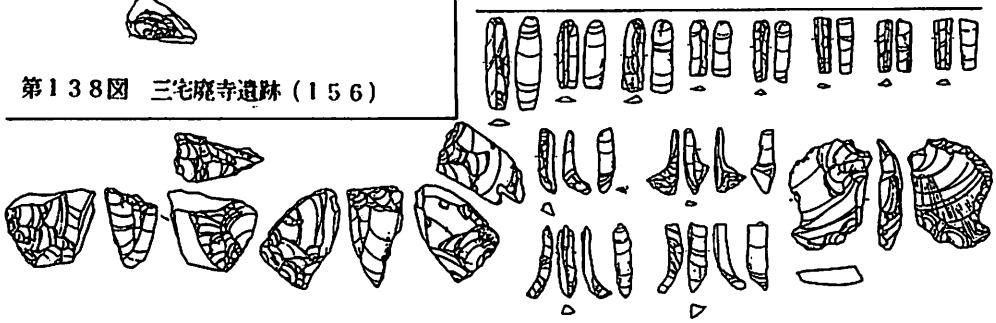
第137図　井尻B遺跡（155）



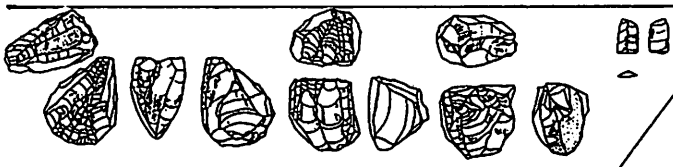
第138図　三宅廃寺遺跡（156）



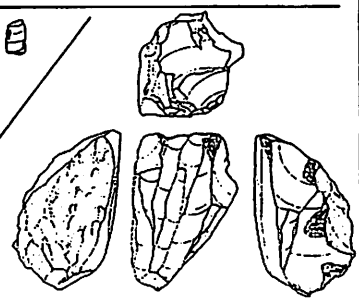
第139図　柏原K遺跡（157）



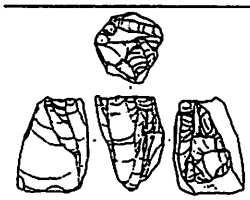
第140図　柏原N遺跡（158）



第141図　諸岡遺跡G区（160）

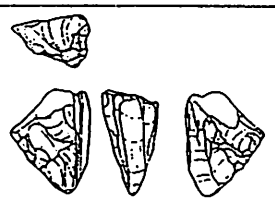


第143図　高畑遺跡10次（162）

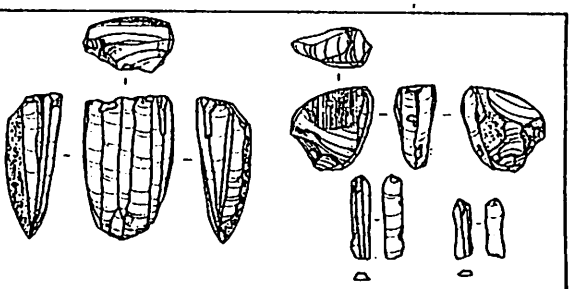


第142図　板付遺跡A2区（161）

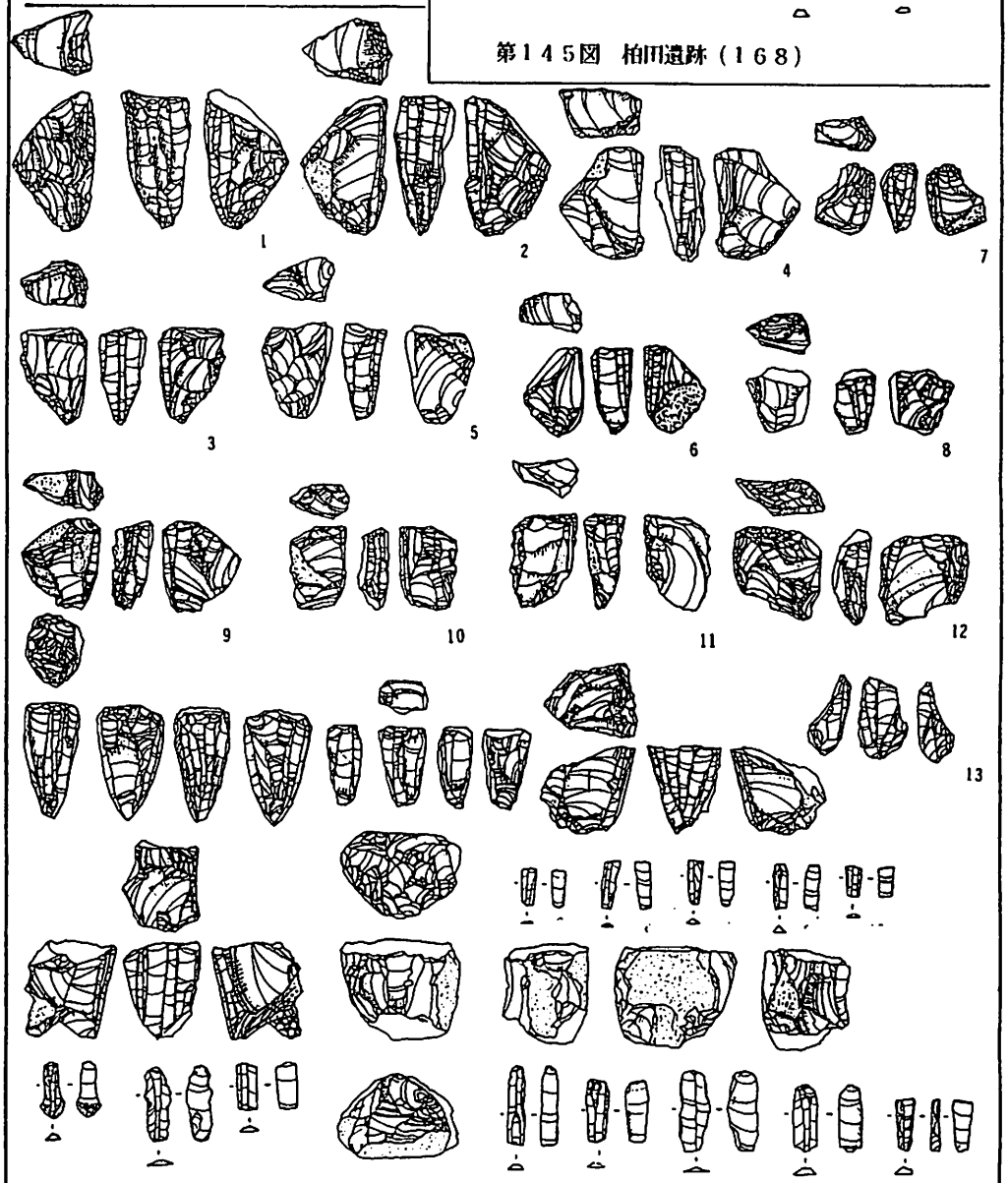
0　(1:2)　5cm



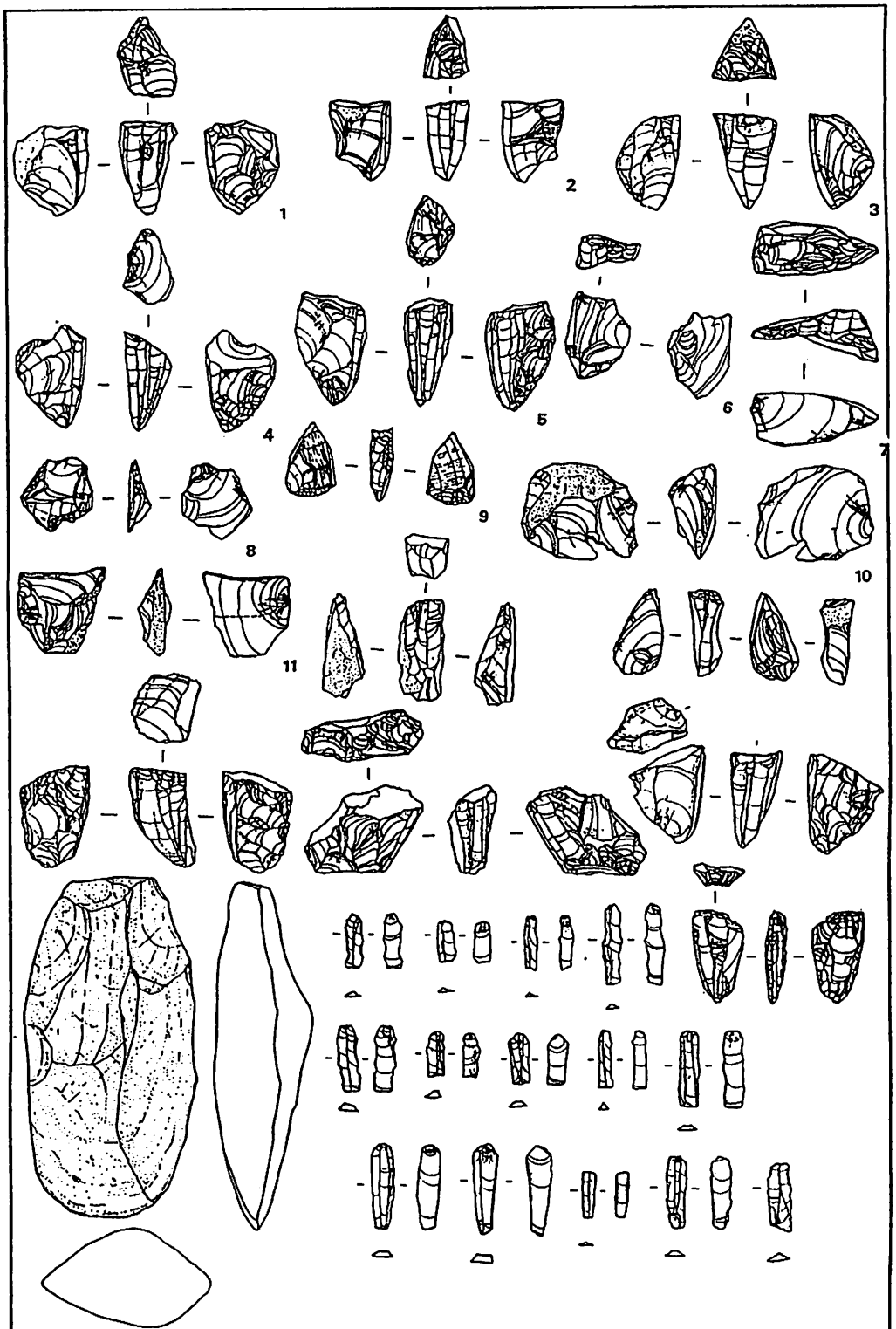
第１４４図　天神池前遺跡（１６７）



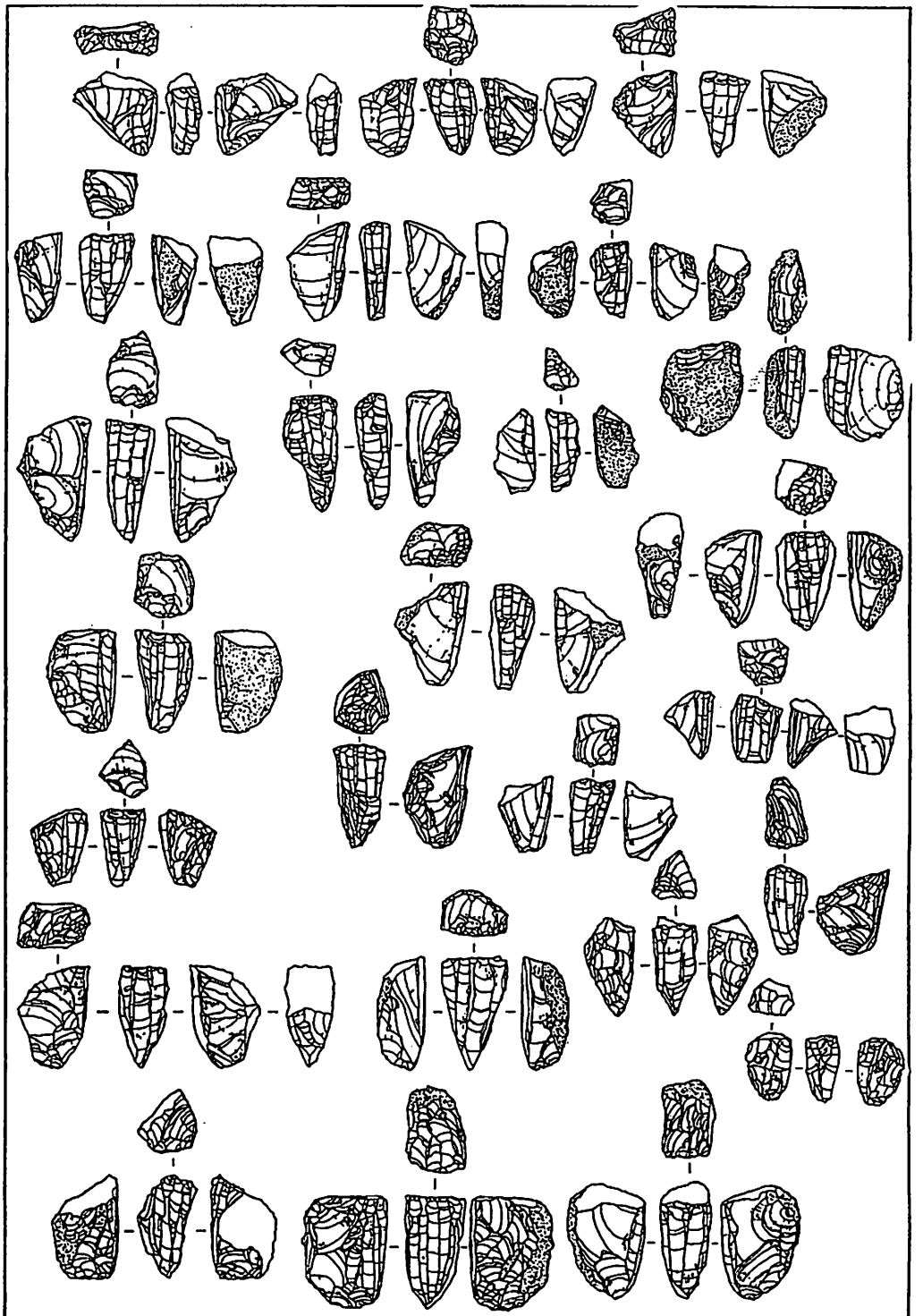
第１４５図　柏田遺跡（１６８）



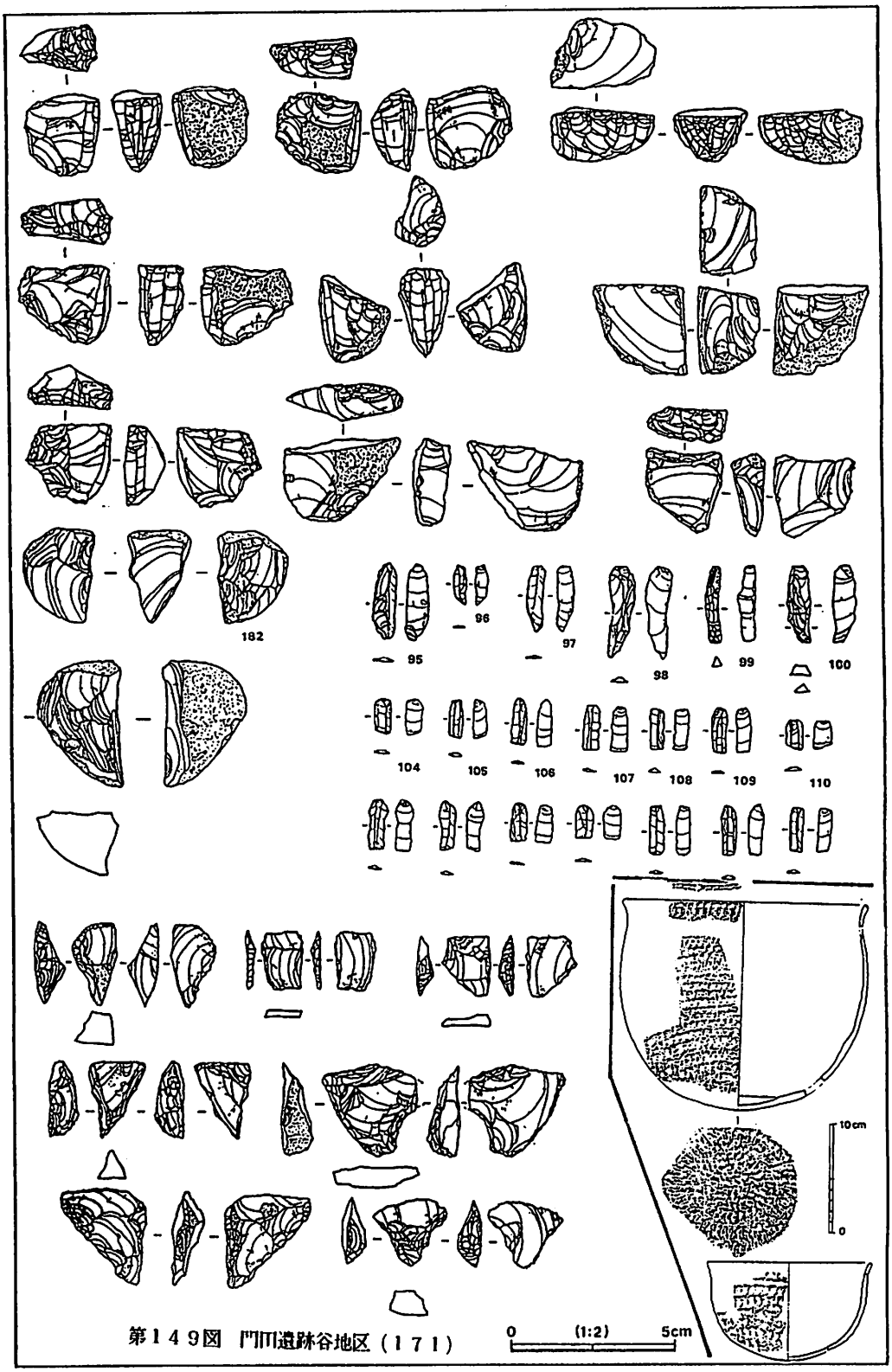
第１４６図　門田遺跡辻田地区（１６９）　0　(1:2)　5cm　0　(1:3)　5cm



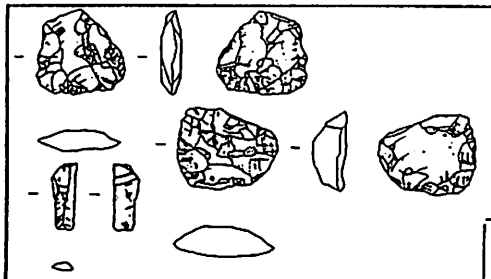
第147図 門田遺跡門田地区（170）



第１４８図　門田遺跡谷地区（１７１）　0　(1:2)　5cm　0　(1:3)　5cm

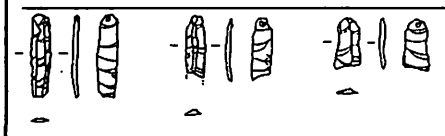


第149図 門田遺跡谷地区（171）

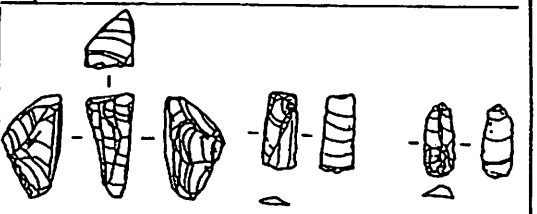


第１５０図　釜蓋原遺跡（１７２）

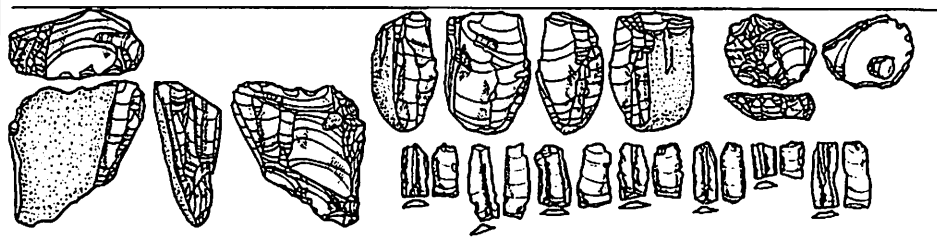
第１５１図　前田１遺跡（１７３）



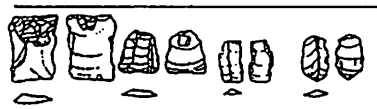
第１５２図　太宰府６６条（１７６）



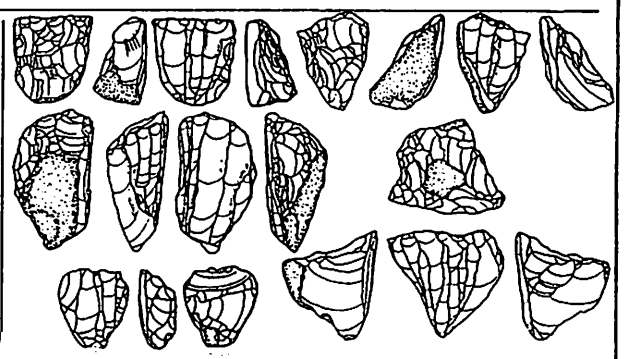
第１５３図　深原遺跡（１７７）



第１５４図　峠山遺跡（１７８）



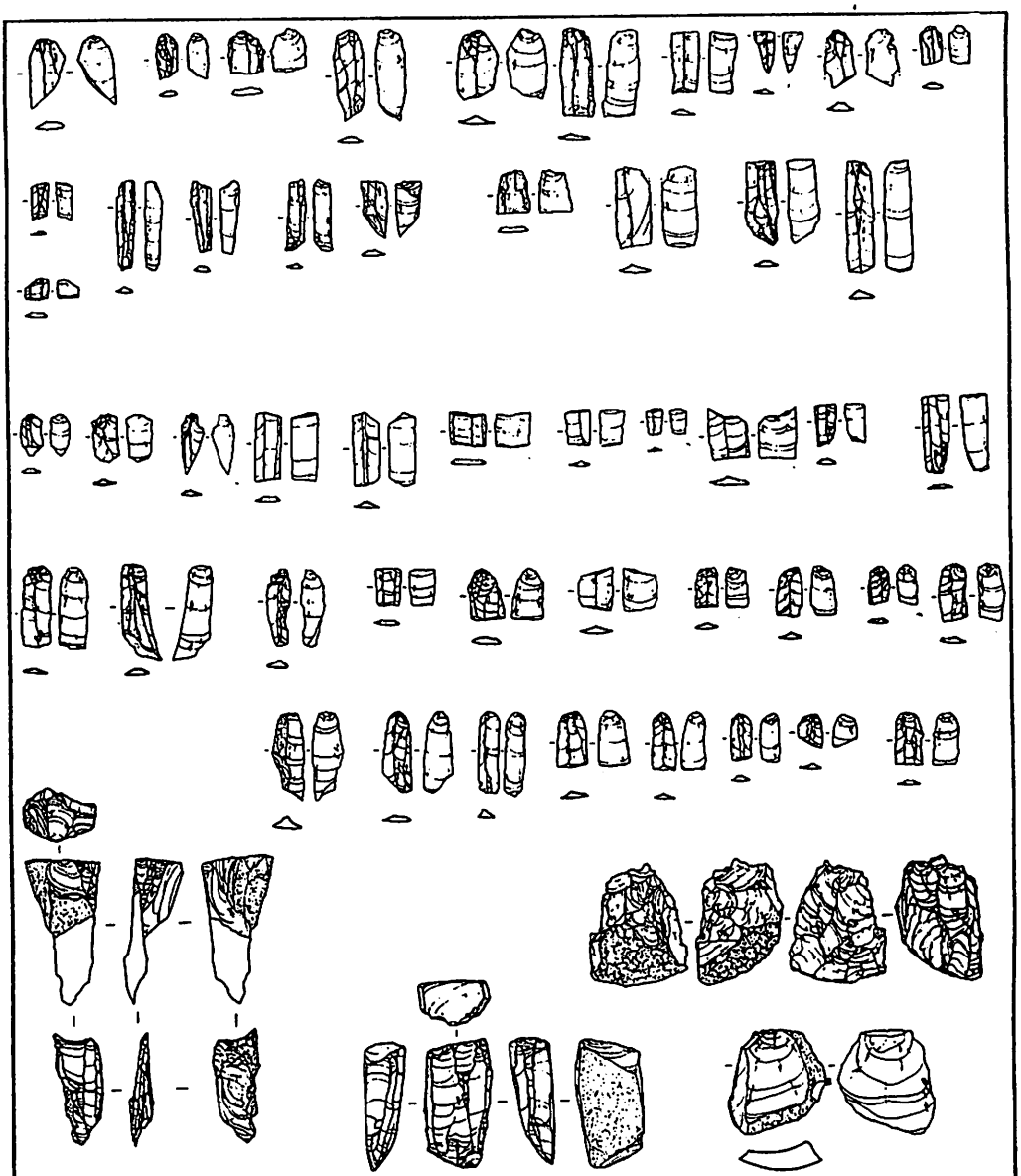
第１５５図　若江遺跡（１７９）



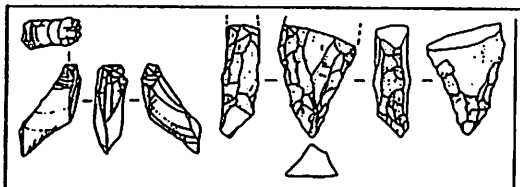
第１５６図　野黒坂遺跡（１８０）

第１５７図　萩原遺跡（１８１）

0　(1:2)　5cm

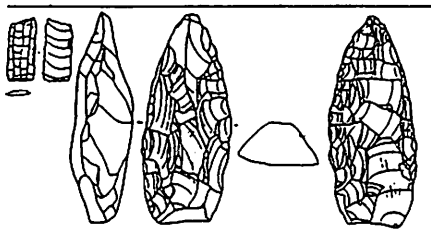


第158図　春園遺跡（189）　0　(1:2)　5cm

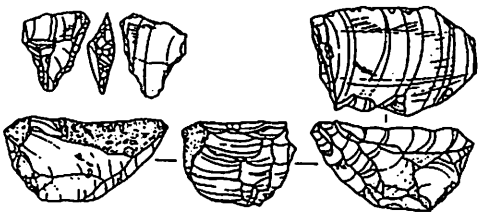


第１５９図　道場山遺跡（１８２）

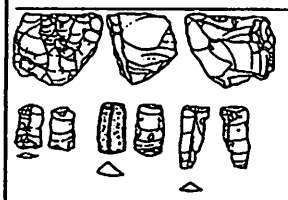
第１６０図　牧の池遺跡（１８４）



第１６１図　福島鎖ノ神遺跡（１８５）

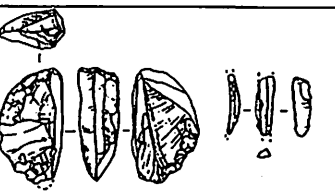


第１６２図　中島堤遺跡（１８７）

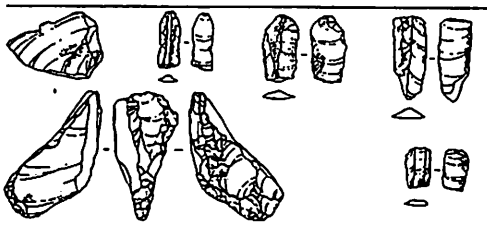


第１６３図　津古上ノ原遺跡１８８）

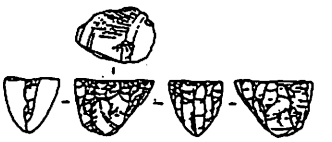
第１６４図　庄屋野遺跡（１９０）



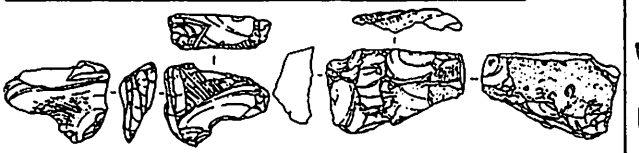
第１６５図　穴口遺跡（１９１）



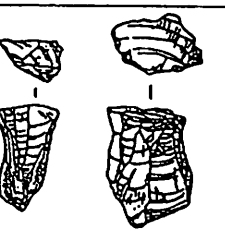
第１６６図　ひょうたん山遺跡（１９２）



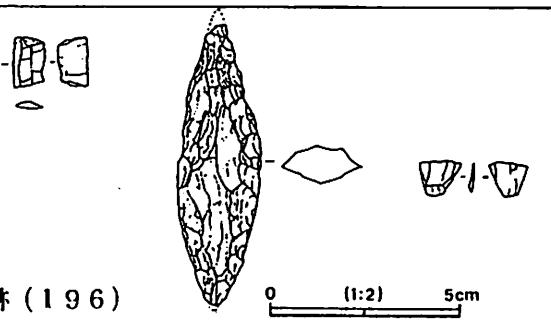
第１６７図　赤坂遺跡（１９３）



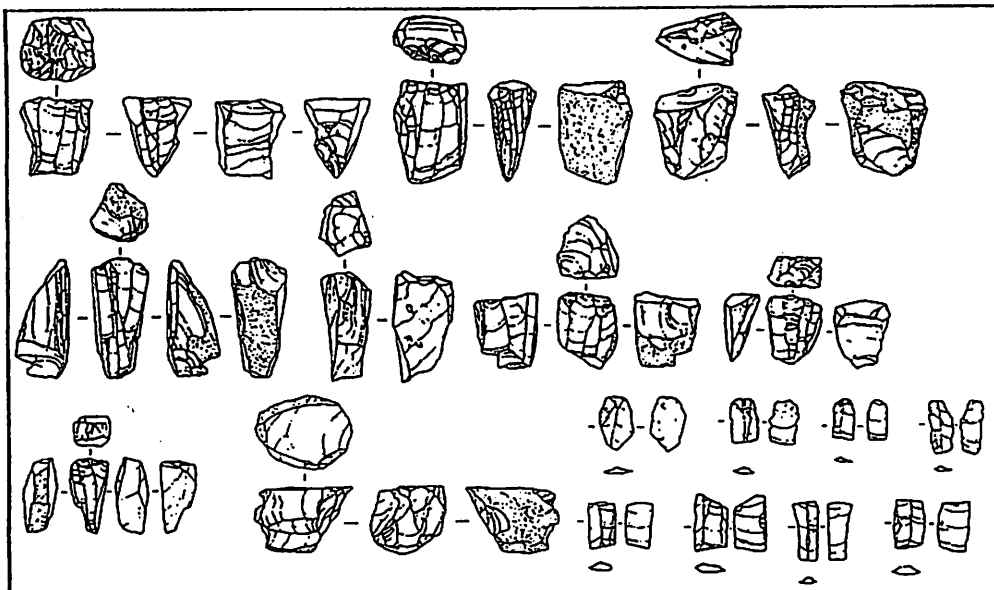
第１６８図　野口遺跡（１９４）



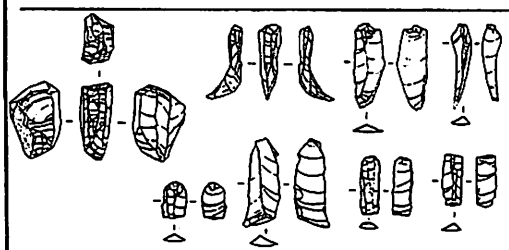
第１６９図　甲塚遺跡（１９５）



第１７０図　一木遺跡（１９６）

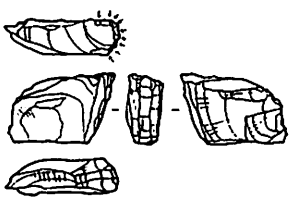


第171図　大草平遺跡（197）

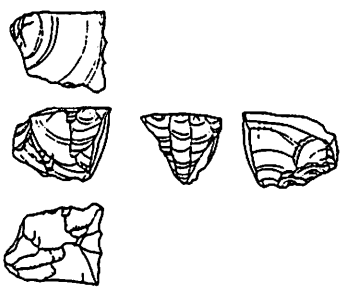


第172図　汐井掛遺跡（199）

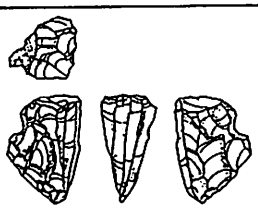
第173図　都地遺跡（200）



第174図　長行遺跡（203）

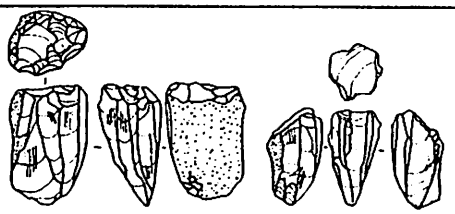


第175図　新池遺跡（205）

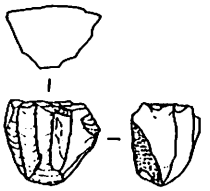


第176図　原池遺跡（206）

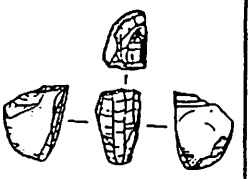
0　(1:2)　5cm



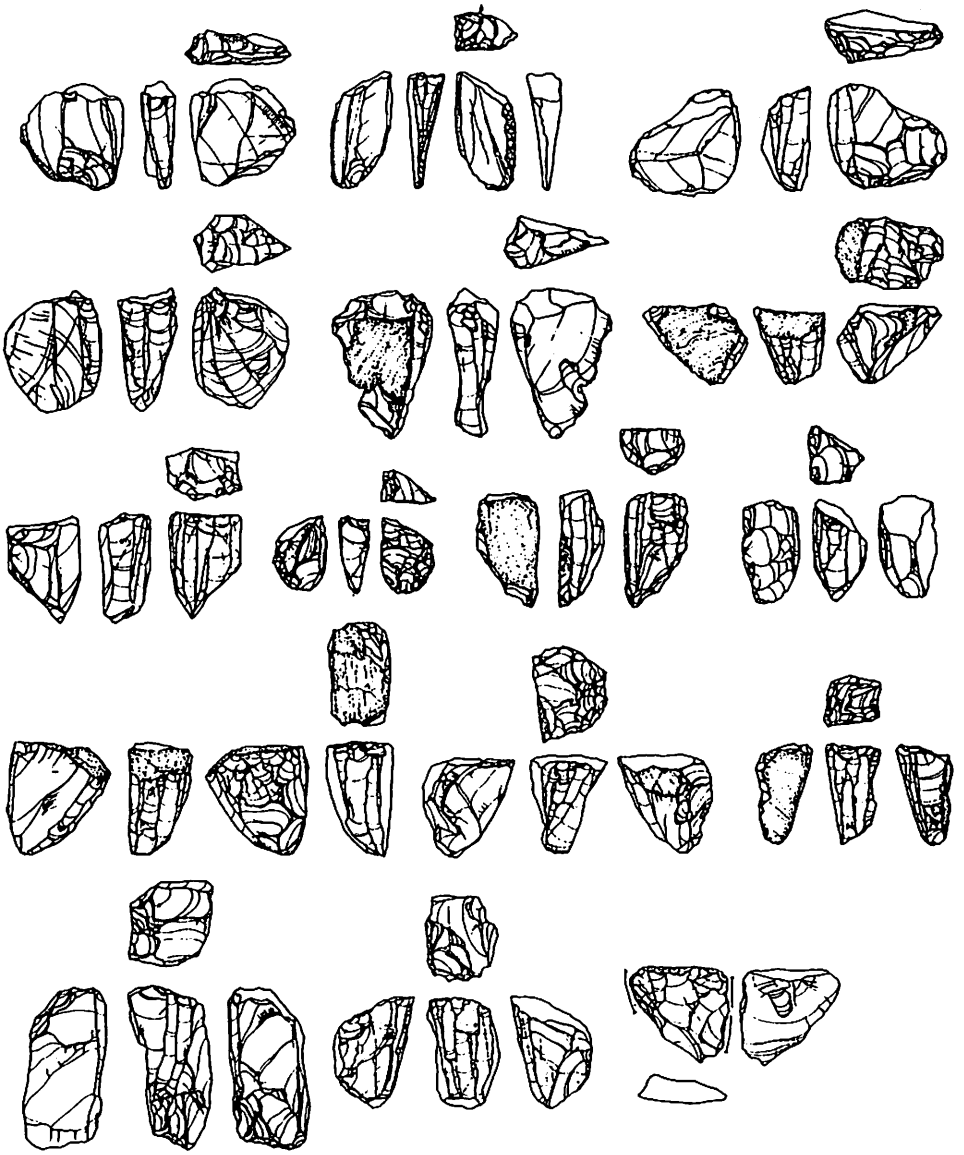
第１７７図　中原遺跡（２０８）



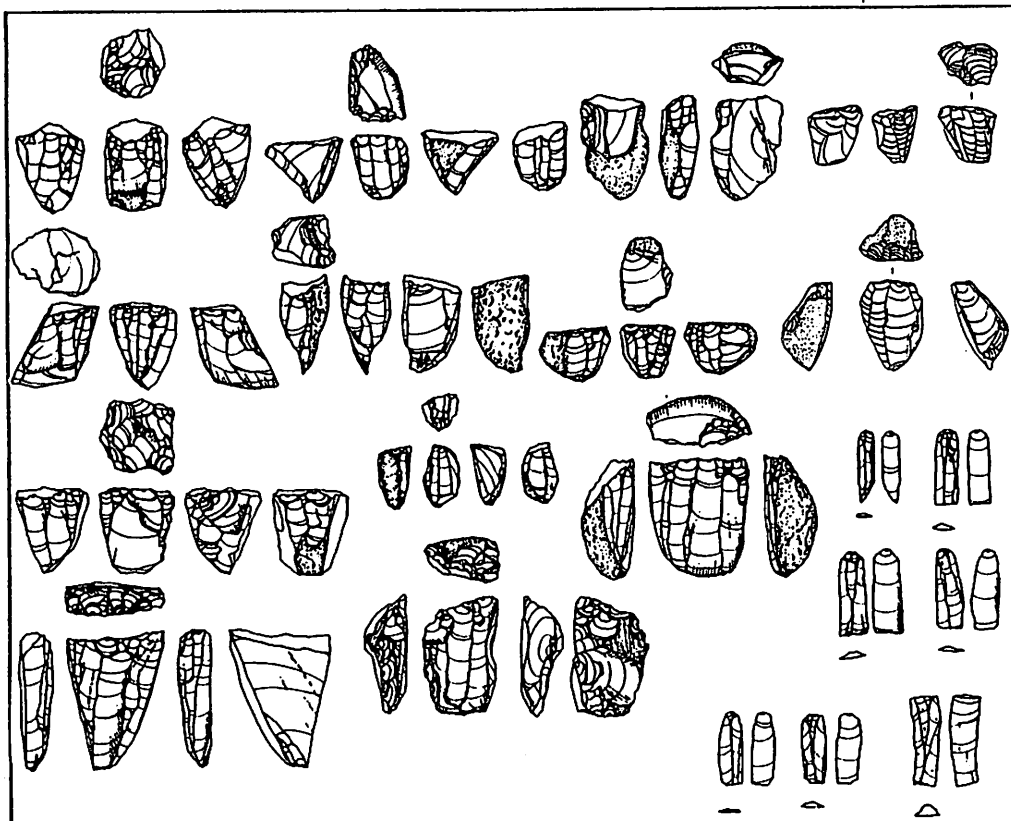
第１７８図長沖遺跡（２０９）



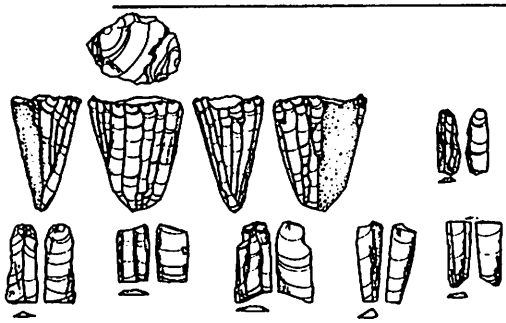
第１７９図
蒲生下原遺跡（２１０）



第１８０図　松島・小野崎遺跡（２１１）0　(1:2)　5cm



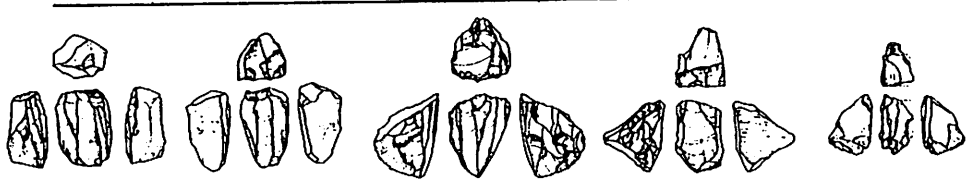
第１８１図　伊野遺跡Loc.A（２１２）



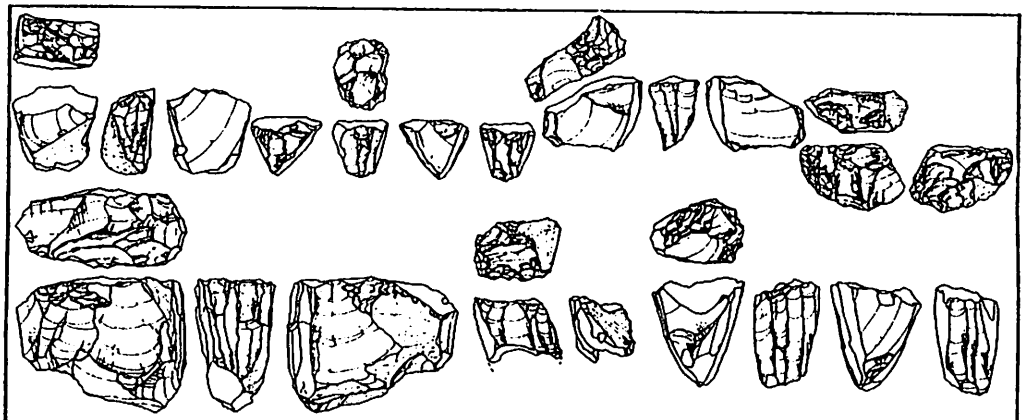
第１８２図　伊野遺跡Loc.B（２１３）

第１８３図　湯ノ浦遺跡（２１４）

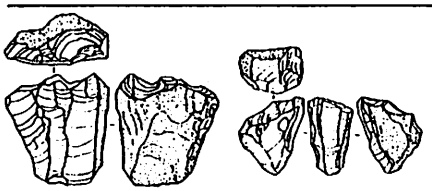
第１８４図
化園・柿原遺跡
（２１６）



第１８５図　谷尾崎遺跡（２１７）0　(1:2)　5cm

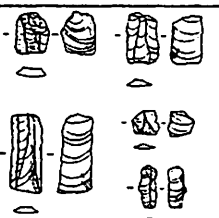


第１８６図　谷尾崎遺跡（２１７）

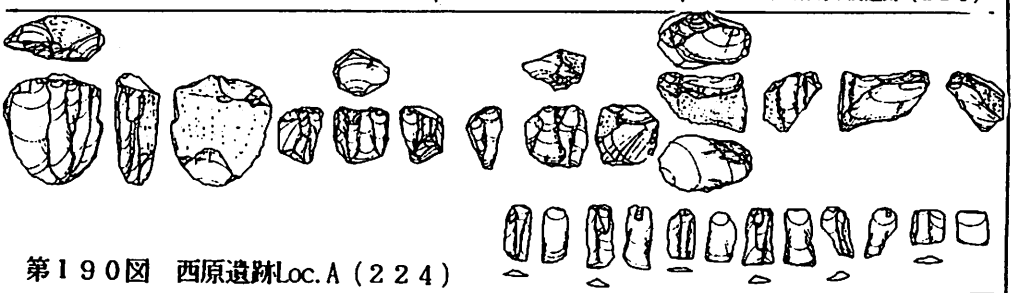


第１８７図　葉山遺跡（２１８）

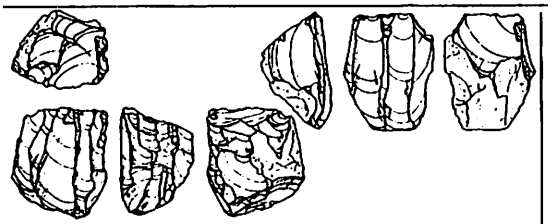
第１８８図　谷頭遺跡（２１９）



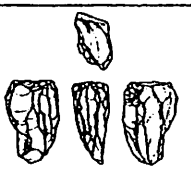
第１８９図　桑鶴土橋遺跡（２２０）



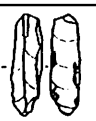
第１９０図　西原遺跡Loc.A（２２４）



第１９１図　西原遺跡Loc.B（２２５）

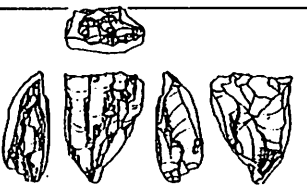


第１９２図
吉無川端原遺跡（２２９）



第１９３図　久保遺跡
（２３１）

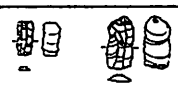
第１９４図　小火器射場遺跡（２３３）



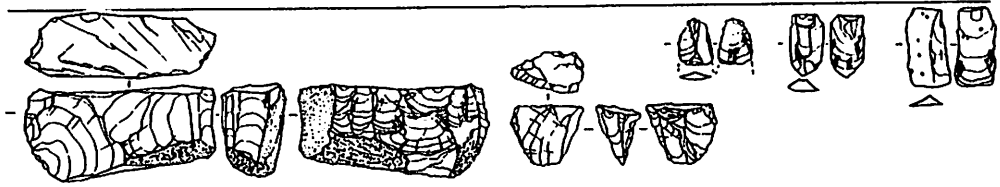
第１９５図　牧原遺跡Loc.B（２３４）

0　(1:2)　5cm

第１９６図　もみじ台遺跡（２３５）



第１９７図　後田遺跡（２３９）

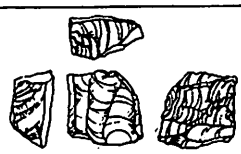


第１９８図　立神ドトク遺跡（２４１）

第１９９図　岩立遺跡Loc.C（２４２）

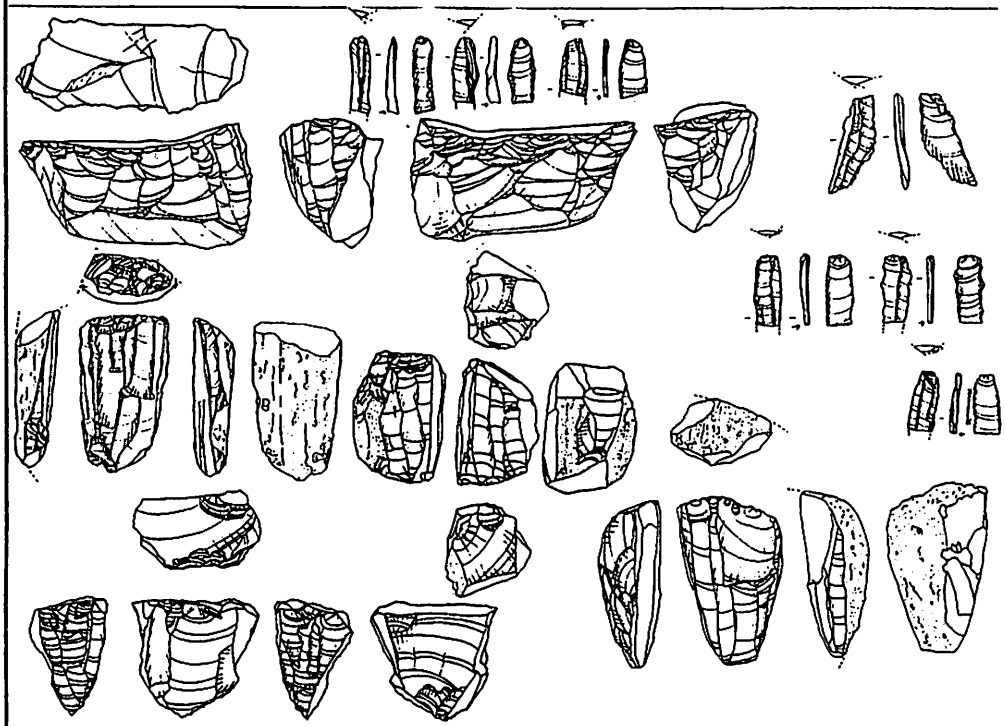
第２００図　桑鶴・小森遺跡（２４３）

第２０１図　大分県田代遺跡Loc.A（２４４）



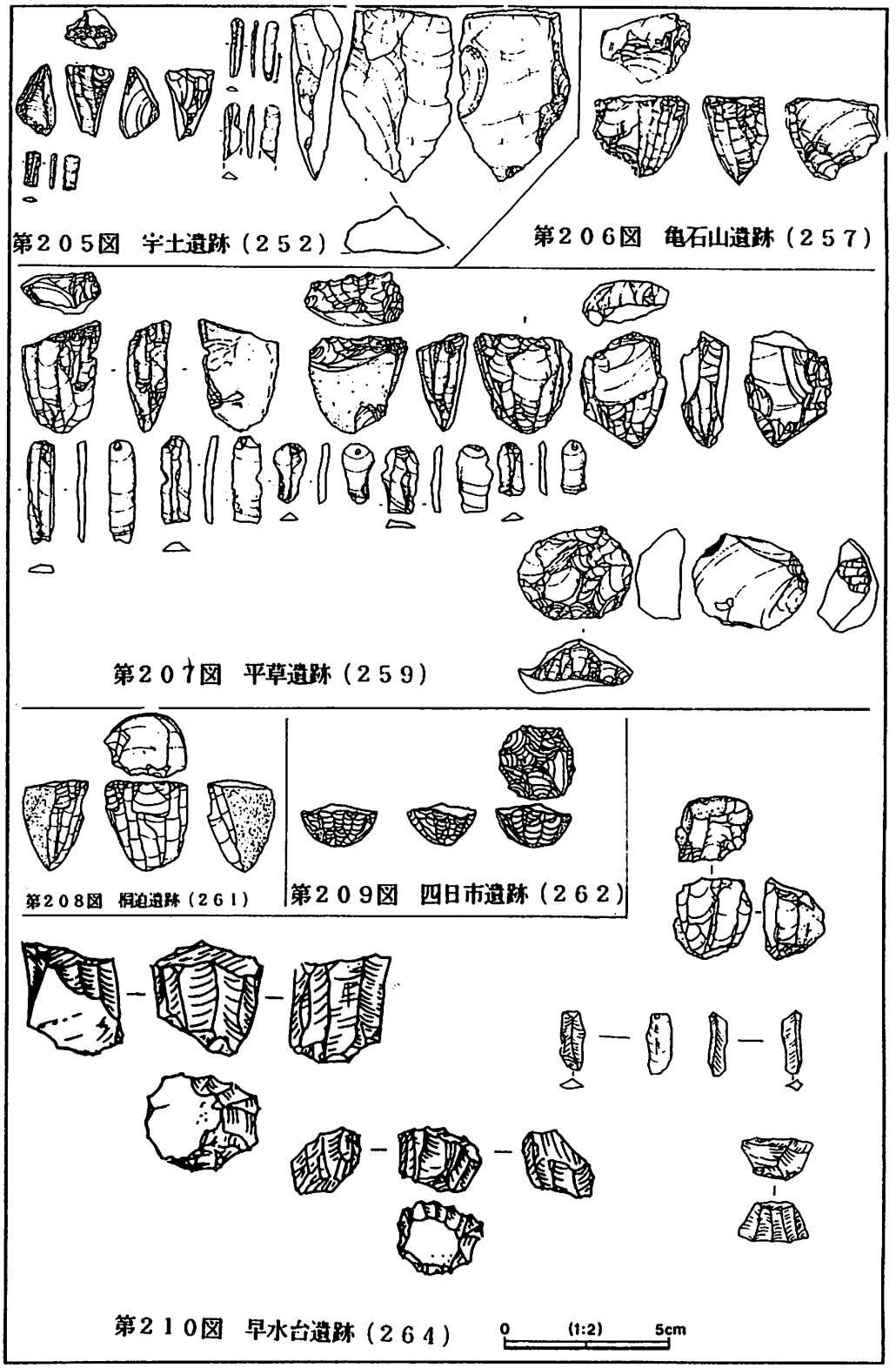
第２０２図　萩尾遺跡（２４７）

第２０３図　一尺八寸山遺跡（２５０）



第２０４図　五馬大坪遺跡（２５１）

0　(1:2)　5cm



第２０５図　宇土遺跡（２５２）

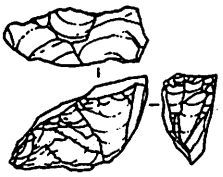
第２０６図　亀石山遺跡（２５７）

第２０７図　平草遺跡（２５９）

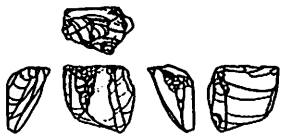
第２０８図　桐迫遺跡（２６１）

第２０９図　四日市遺跡（２６２）

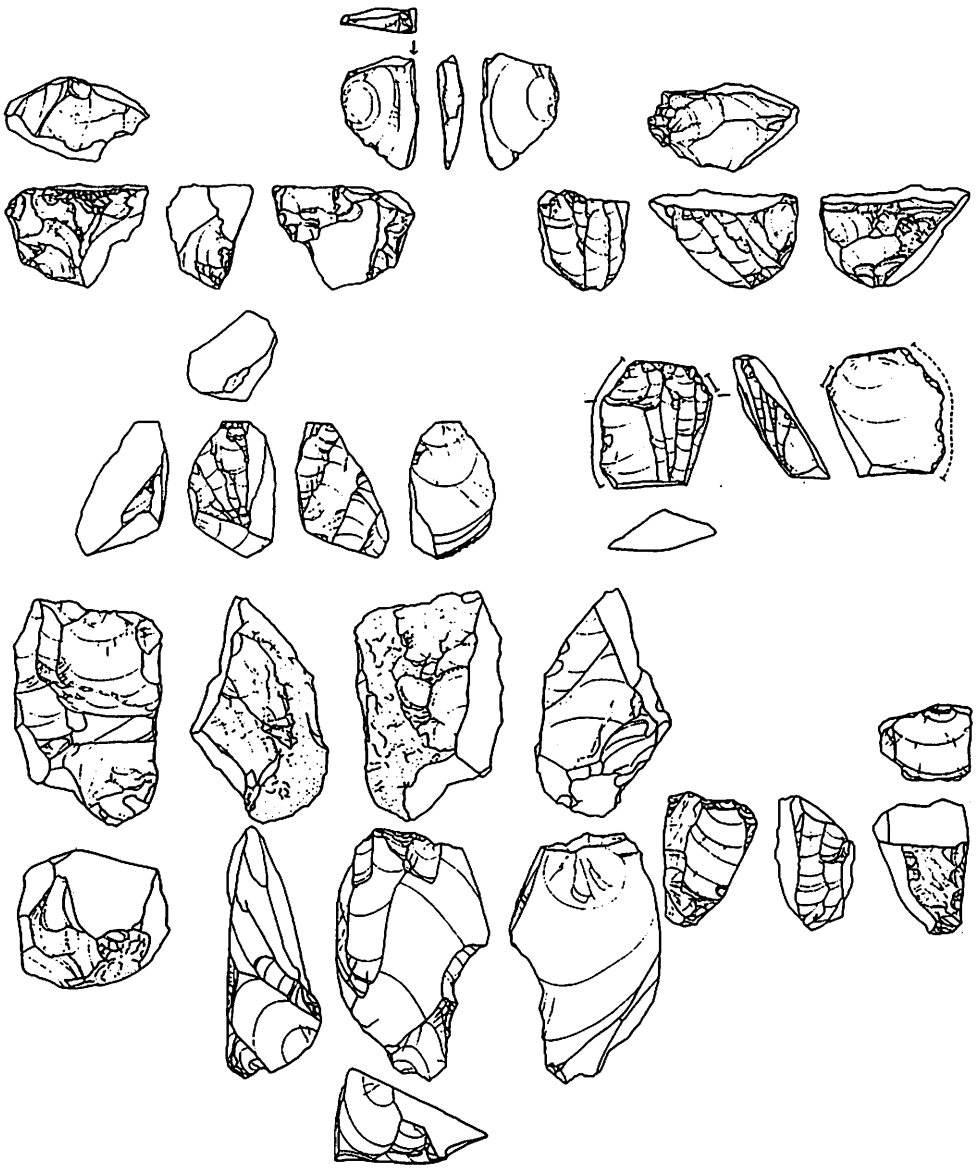
第２１０図　早水台遺跡（２６４）



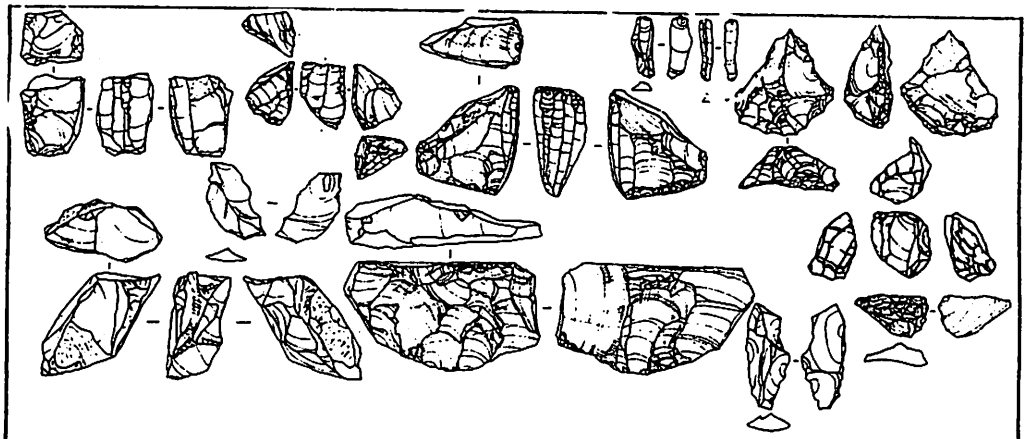
第２１１図　雄城台遺跡（２６９）



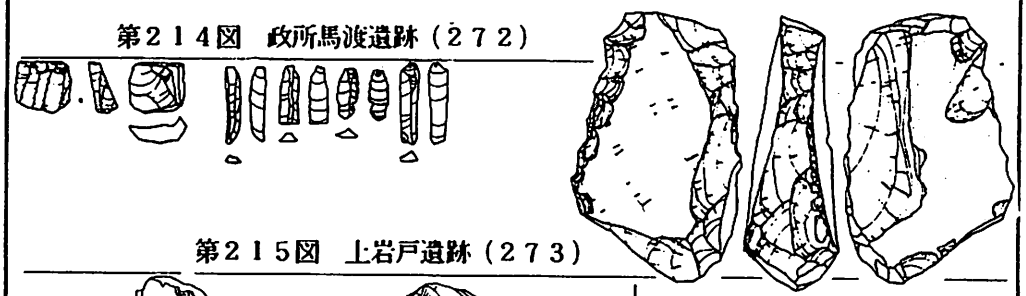
第２１２図　丹生遺跡群II-H（２７０）



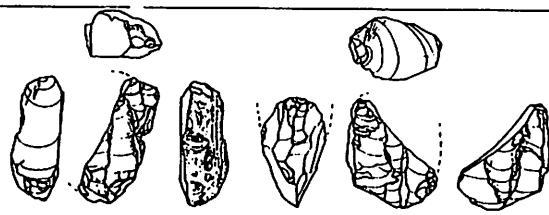
第２１３図　丹生遺跡群VII-D（２７１）　0 (1:2) 5cm



第２１４図　政所馬渡遺跡（２７２）

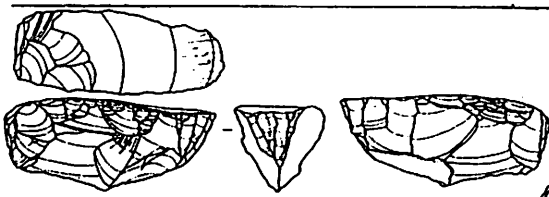


第２１５図　上岩戸遺跡（２７３）

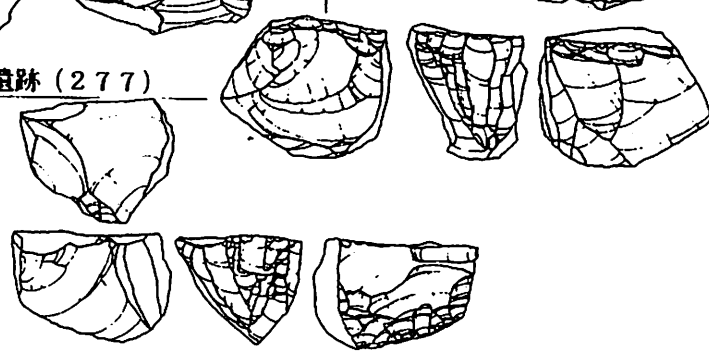


第２１６図　三反田遺跡（２７４）

第２１７図　前田III遺跡（２７５）

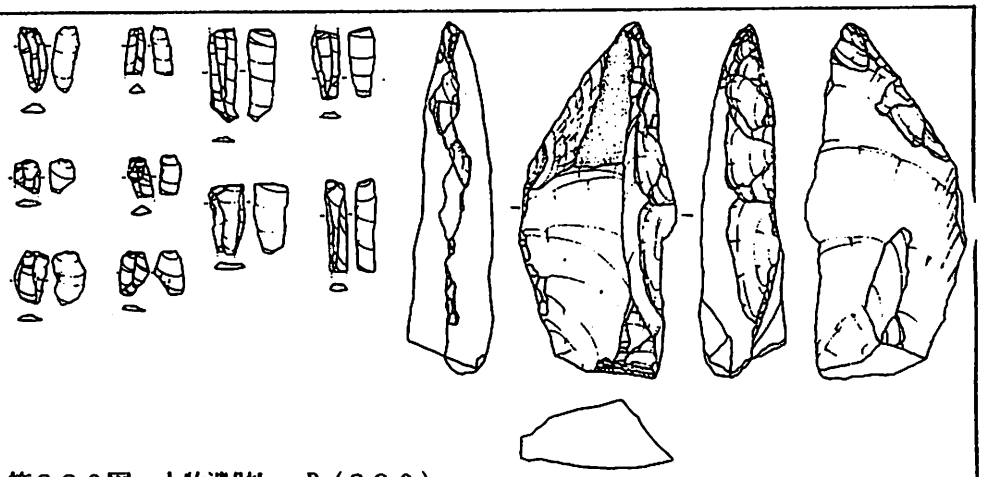


第２１８図　松木遺跡（２７７）

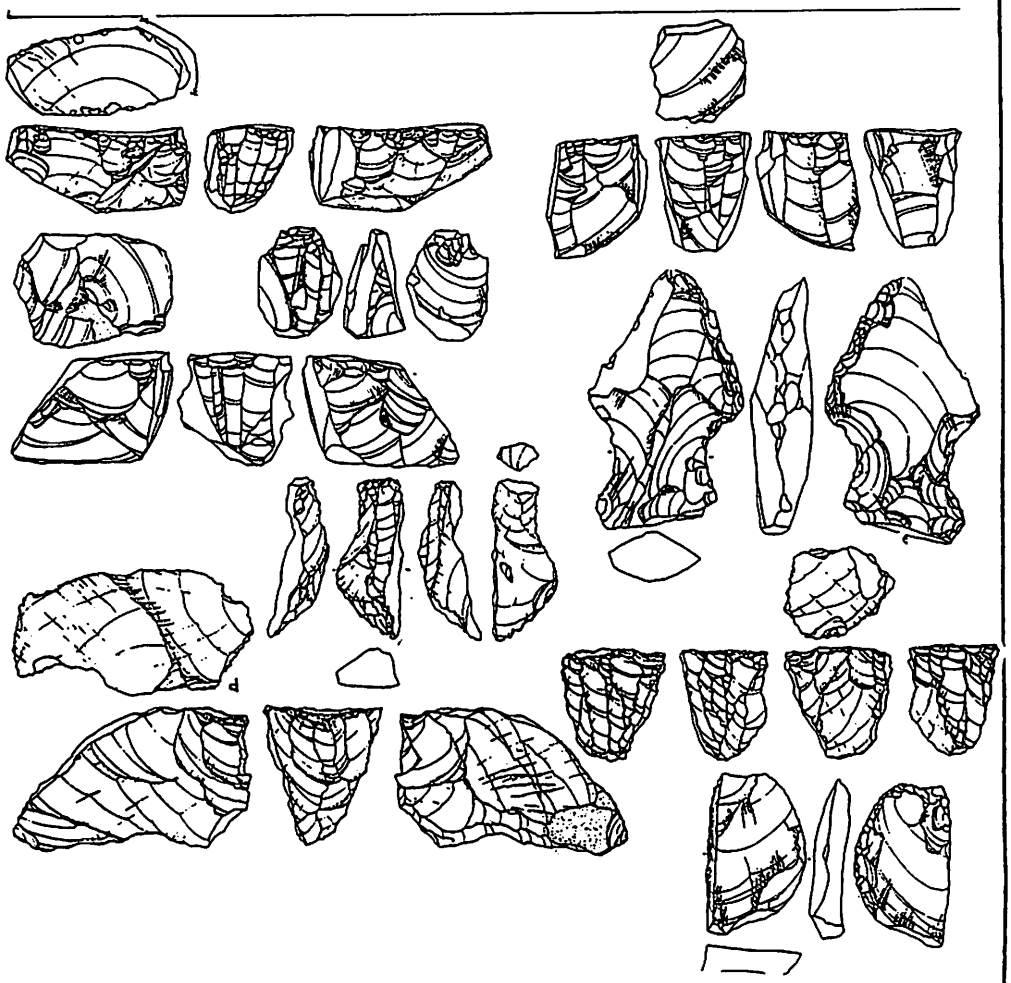


第２１９図　小牧遺跡Loc.B（２８０）

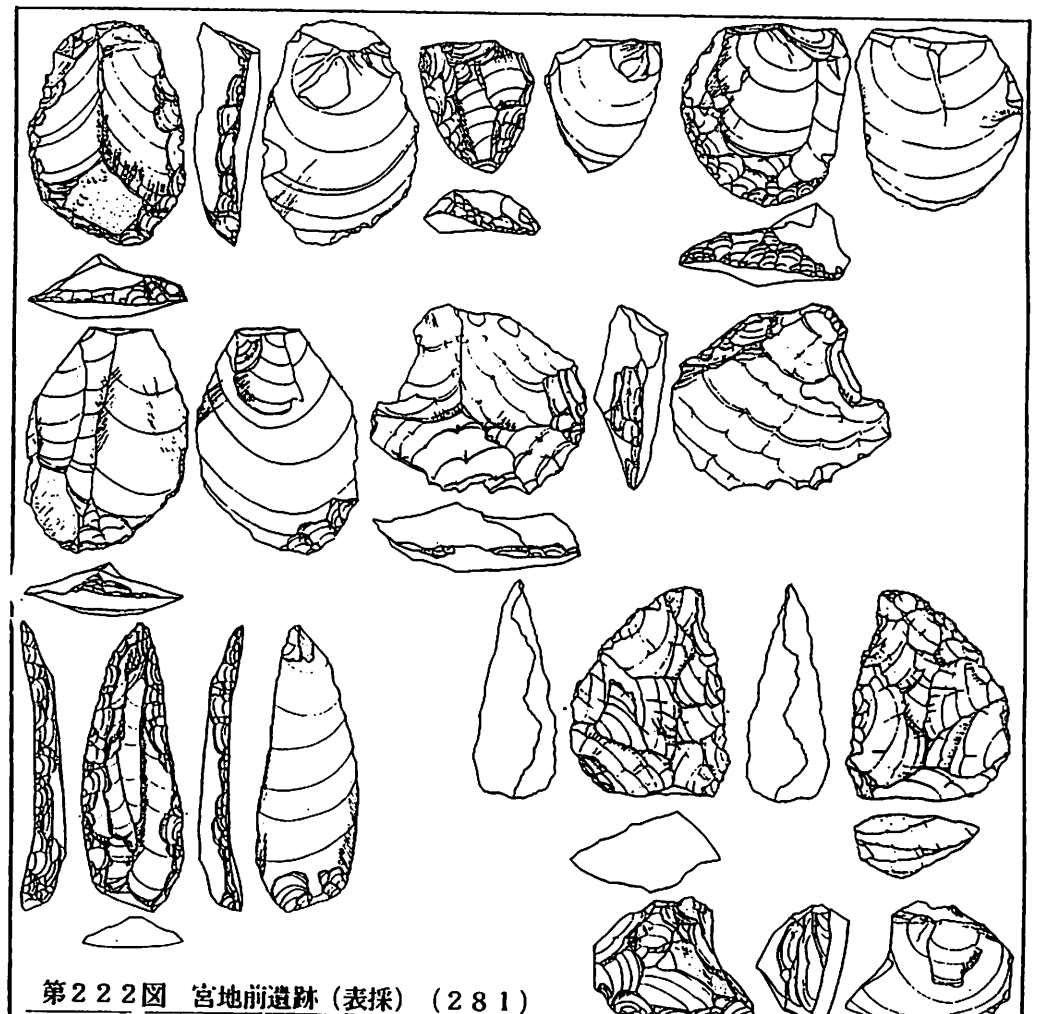
0　(1:2)　5cm



第２２０図　小牧遺跡Loc.B（２８０）

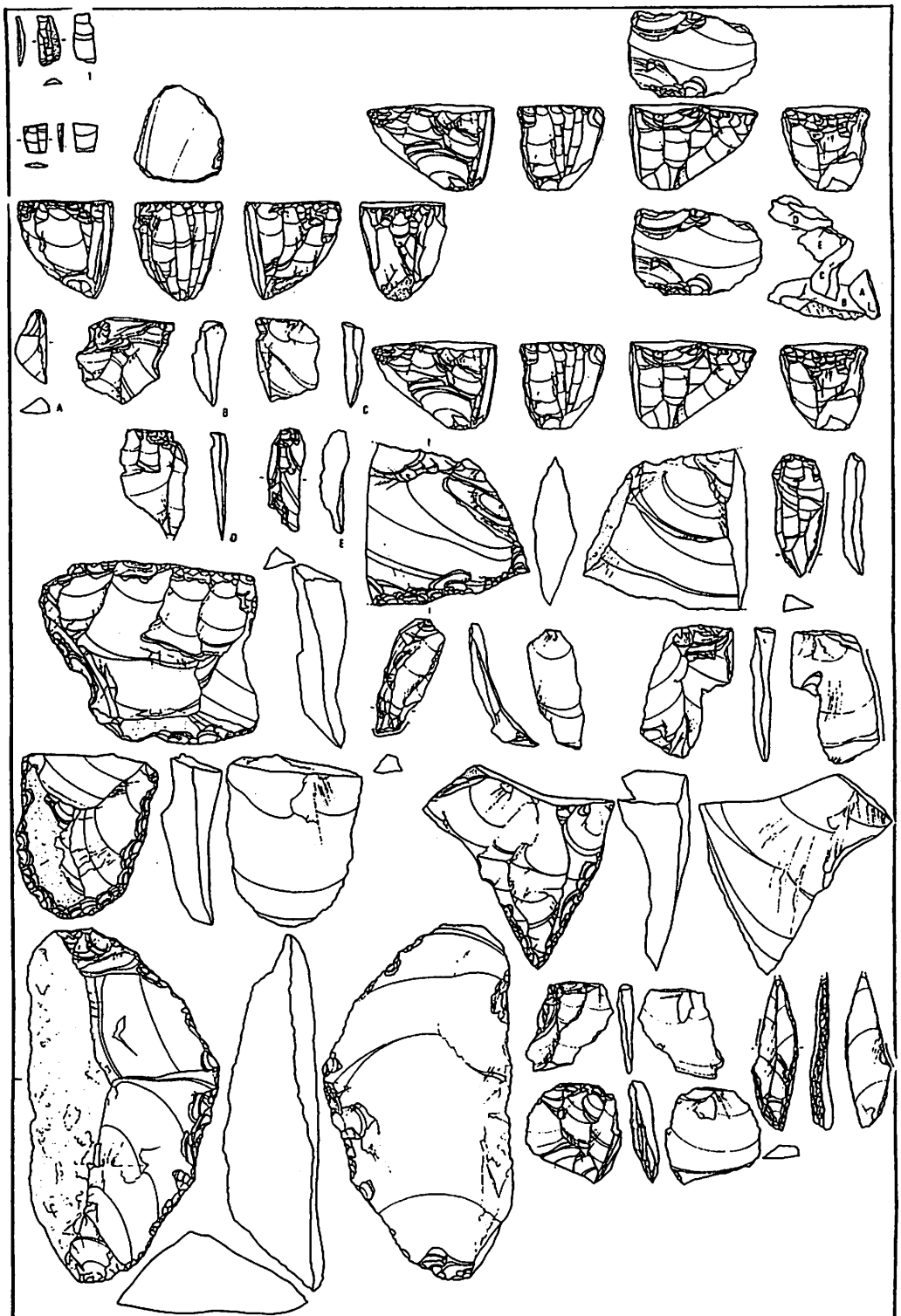


第２２１図　宮地前遺跡（表採）（２８１）　0　(1:2)　5cm

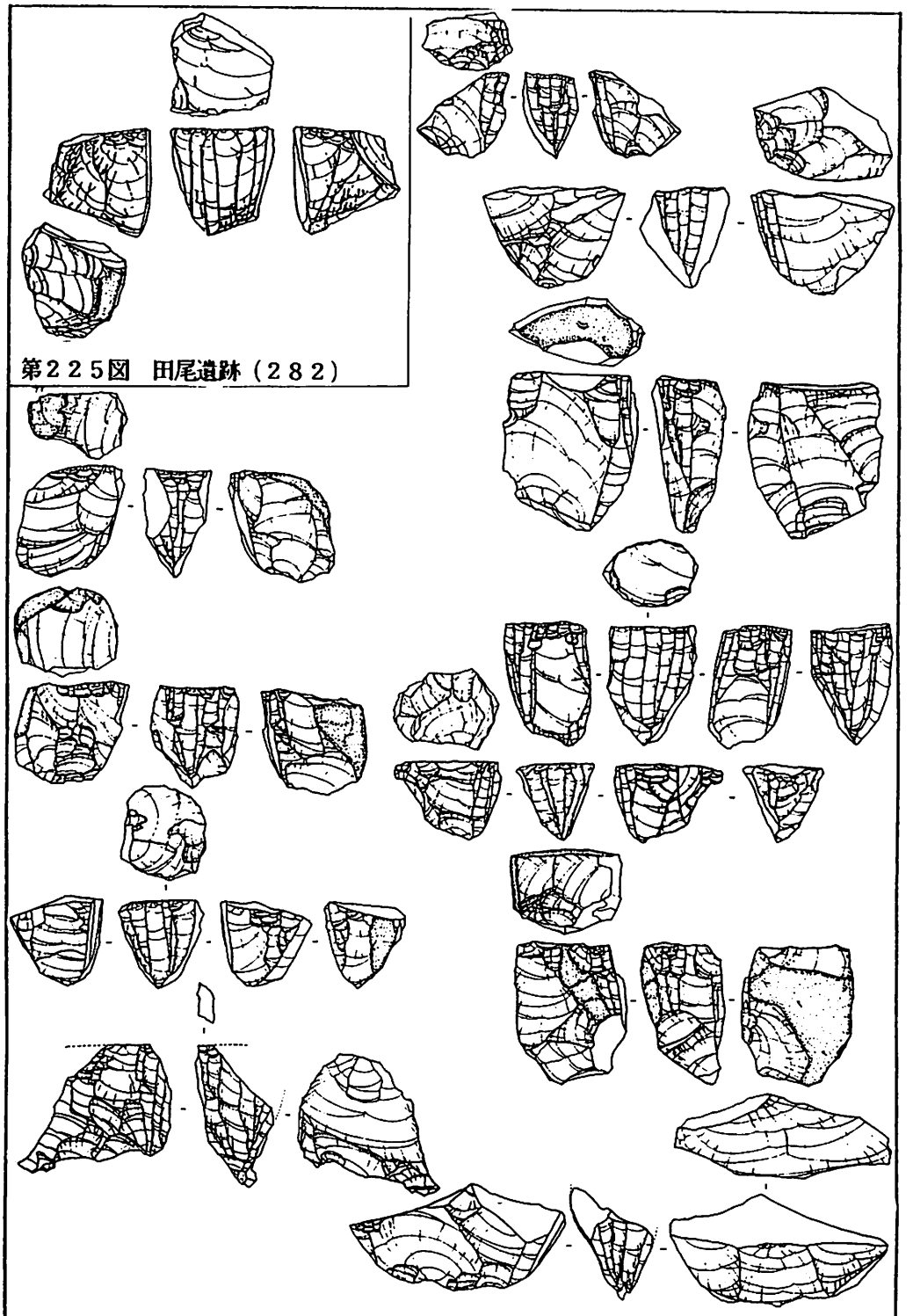


第２２２図　宮地前遺跡（表採）（２８１）

第２２３図　宮地前遺跡（２８１）　0　(1:2)　5cm



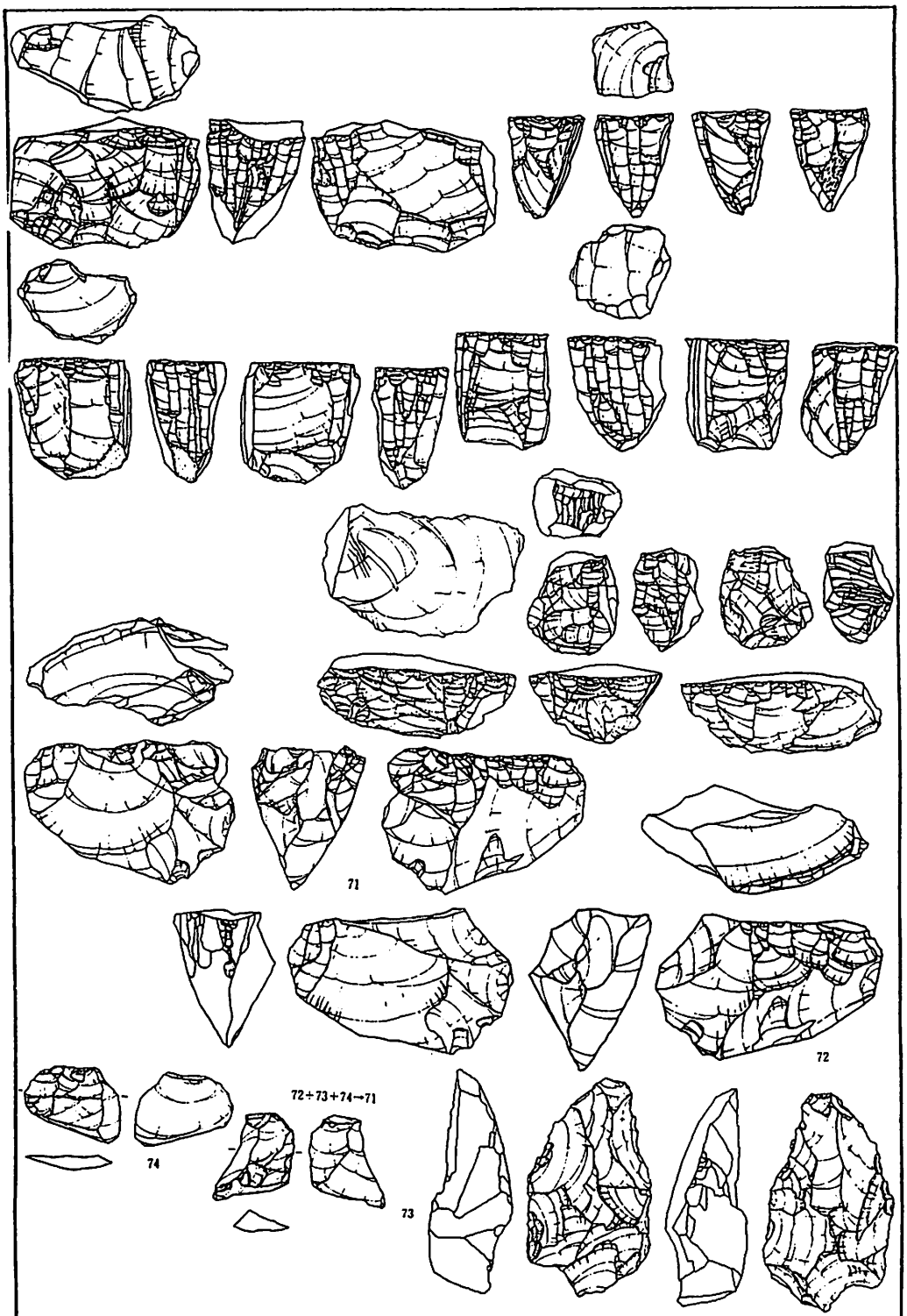
第２２４図　宮地前遺跡（２８１）



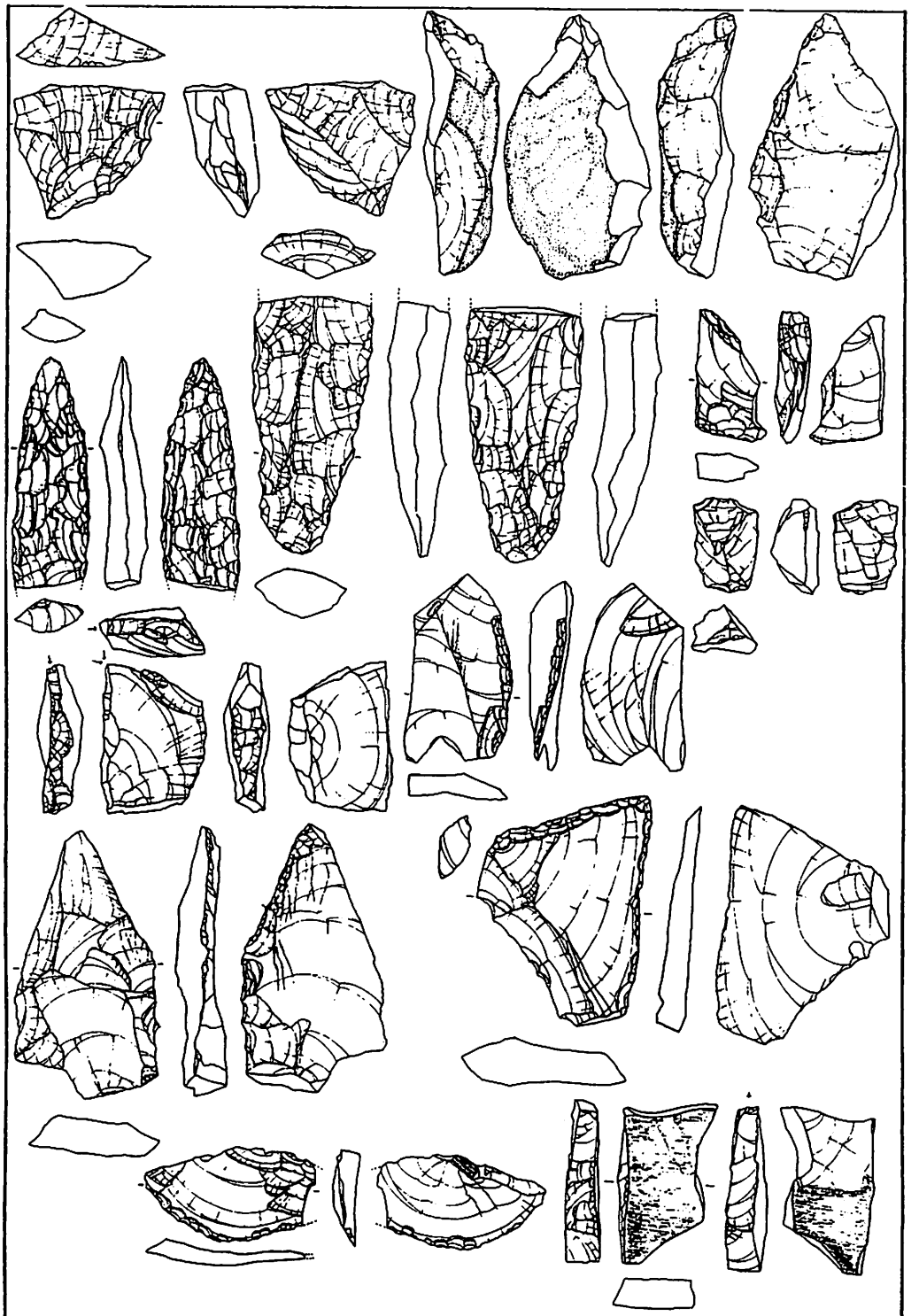
第２２５図　田尾遺跡（２８２）

第２２６図　上下田遺跡（２８６）

0　(1:2)　5cm

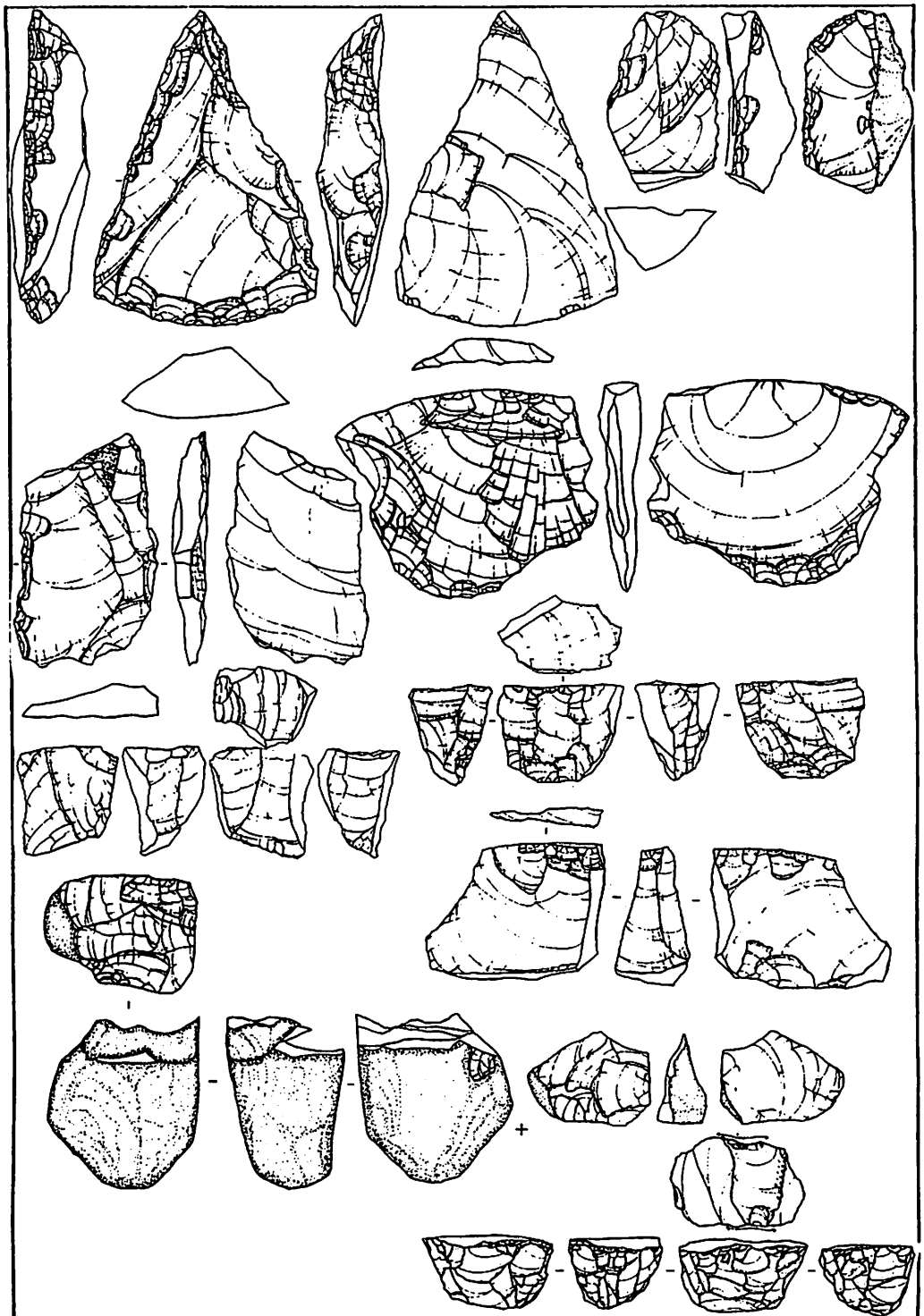


第２２７図　上下田遺跡（２８６）

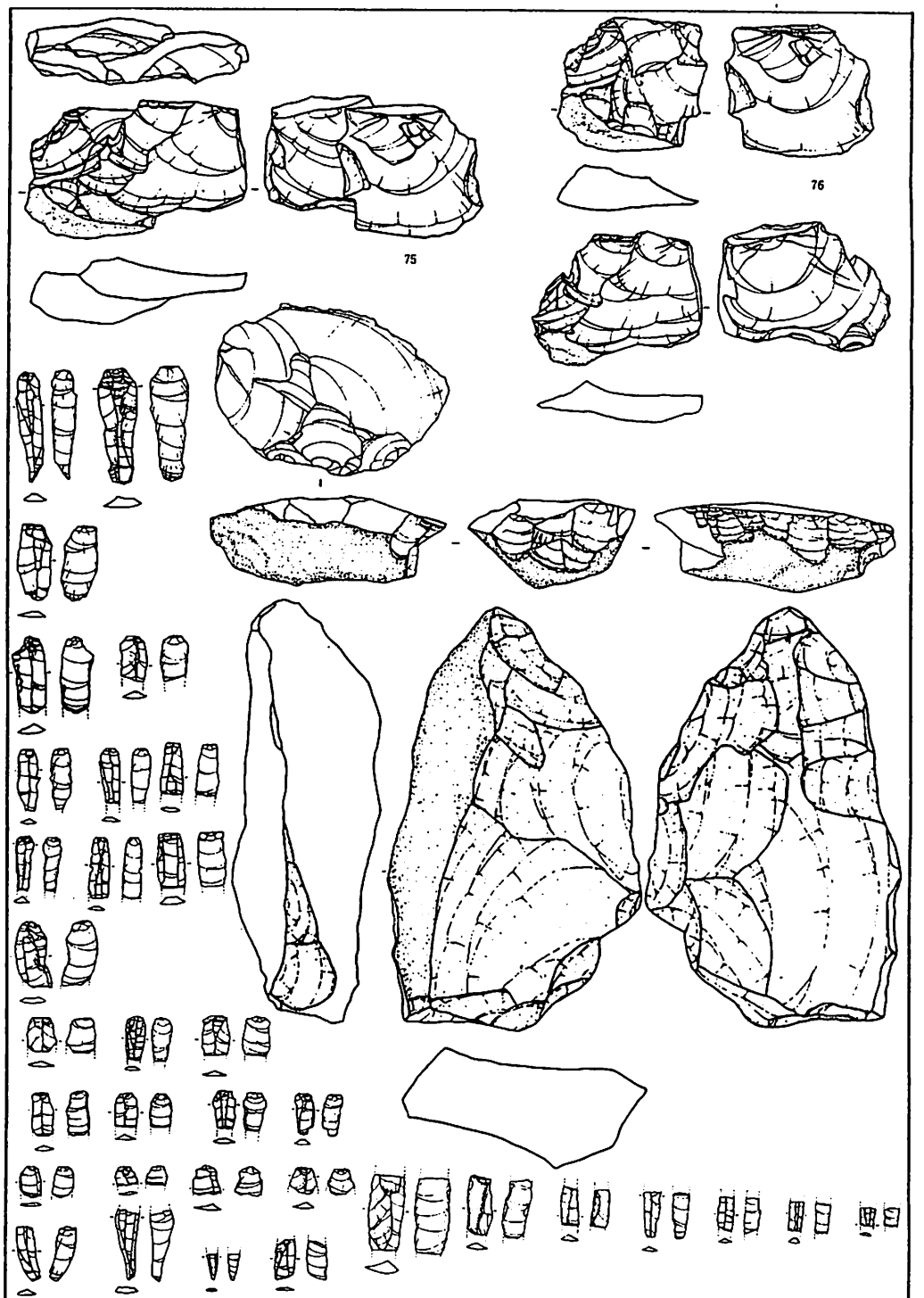


第２２８図　上下田遺跡（２８６）

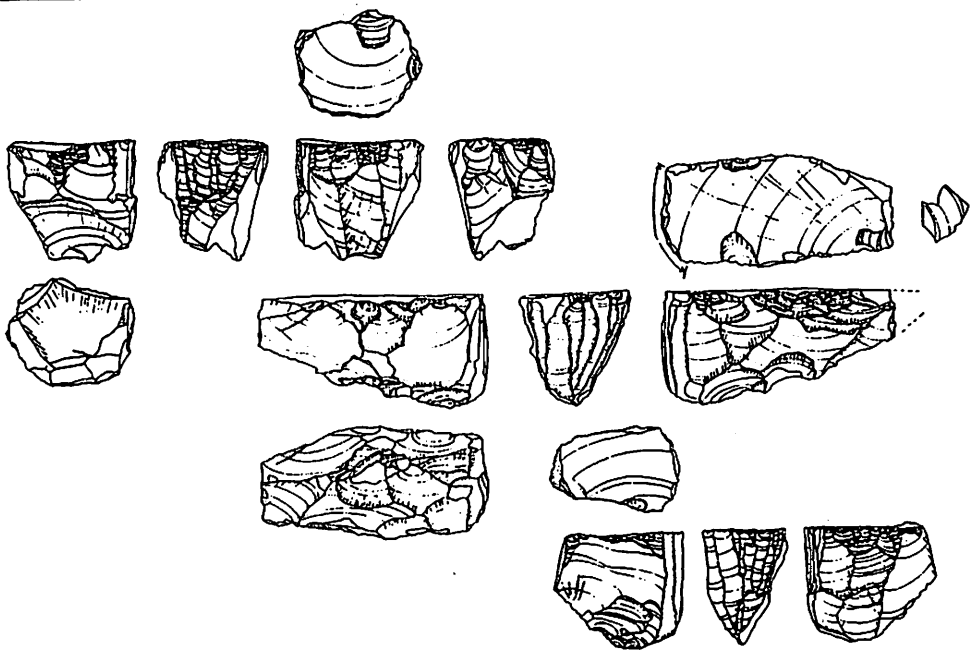
0　(1:2)　5cm



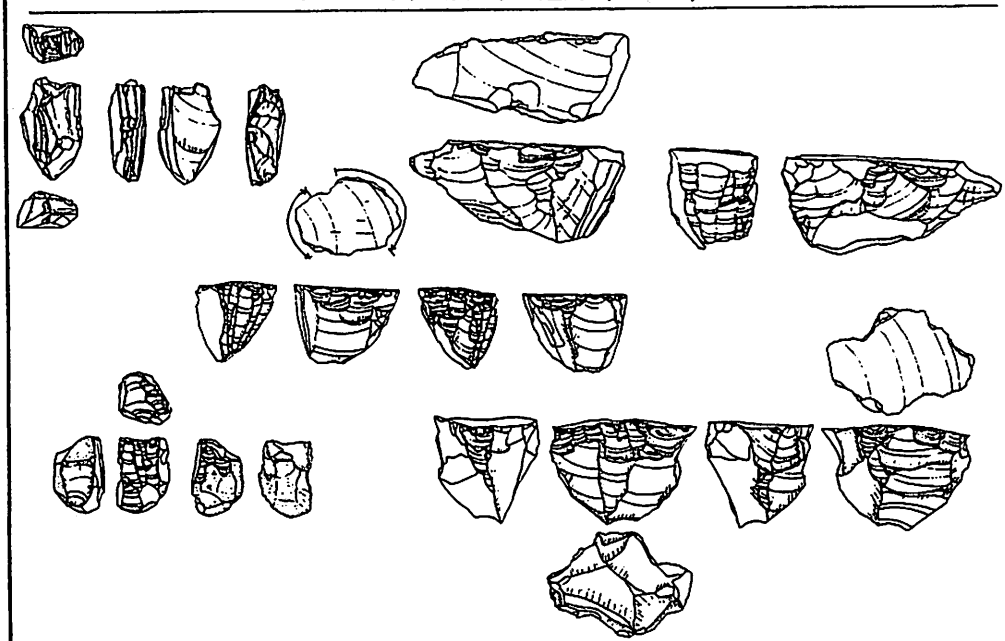
第２２９図　上下田遺跡（２８６）



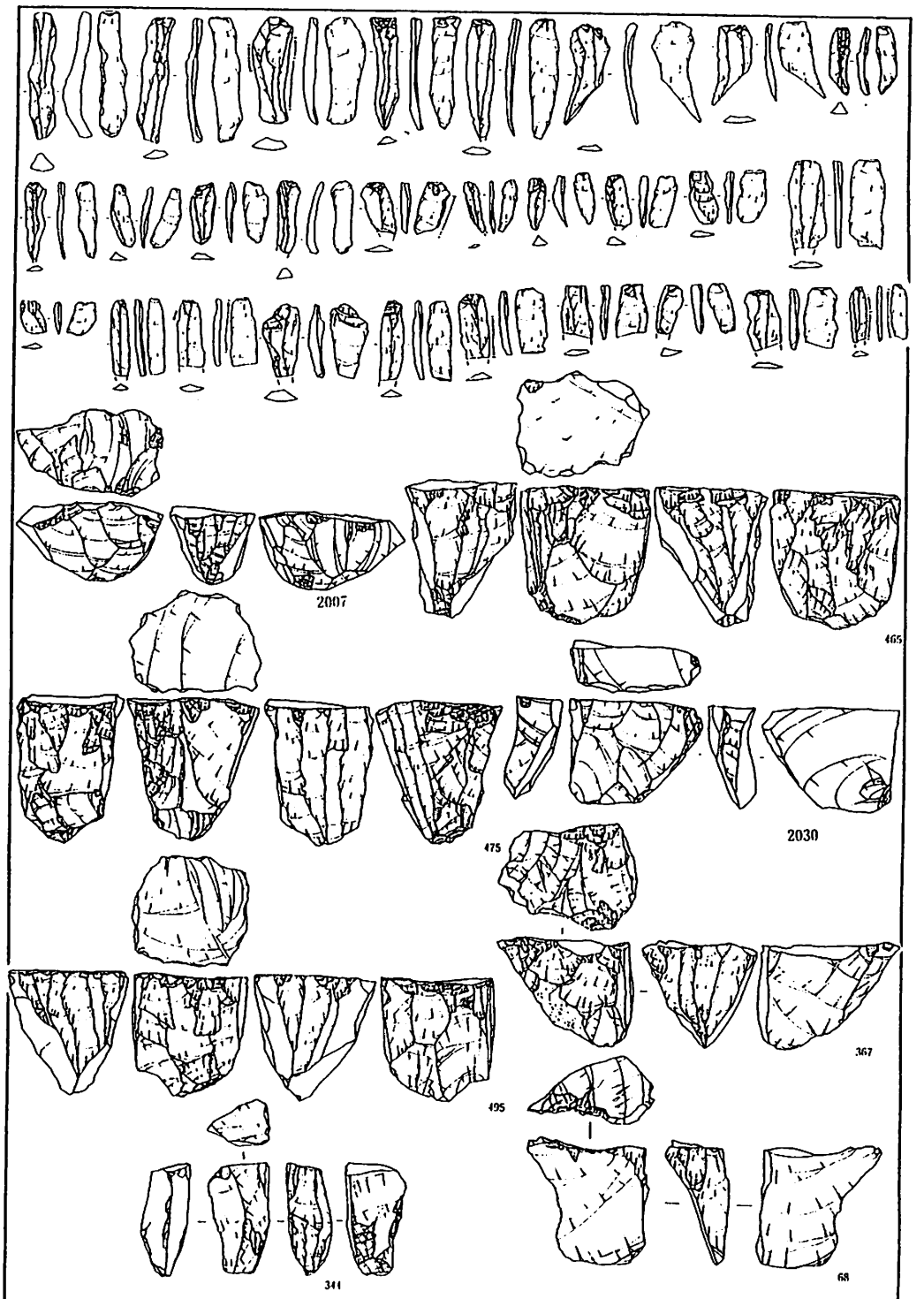
第２３０図　上下田遺跡（２８６）　0　(1:2)　5cm



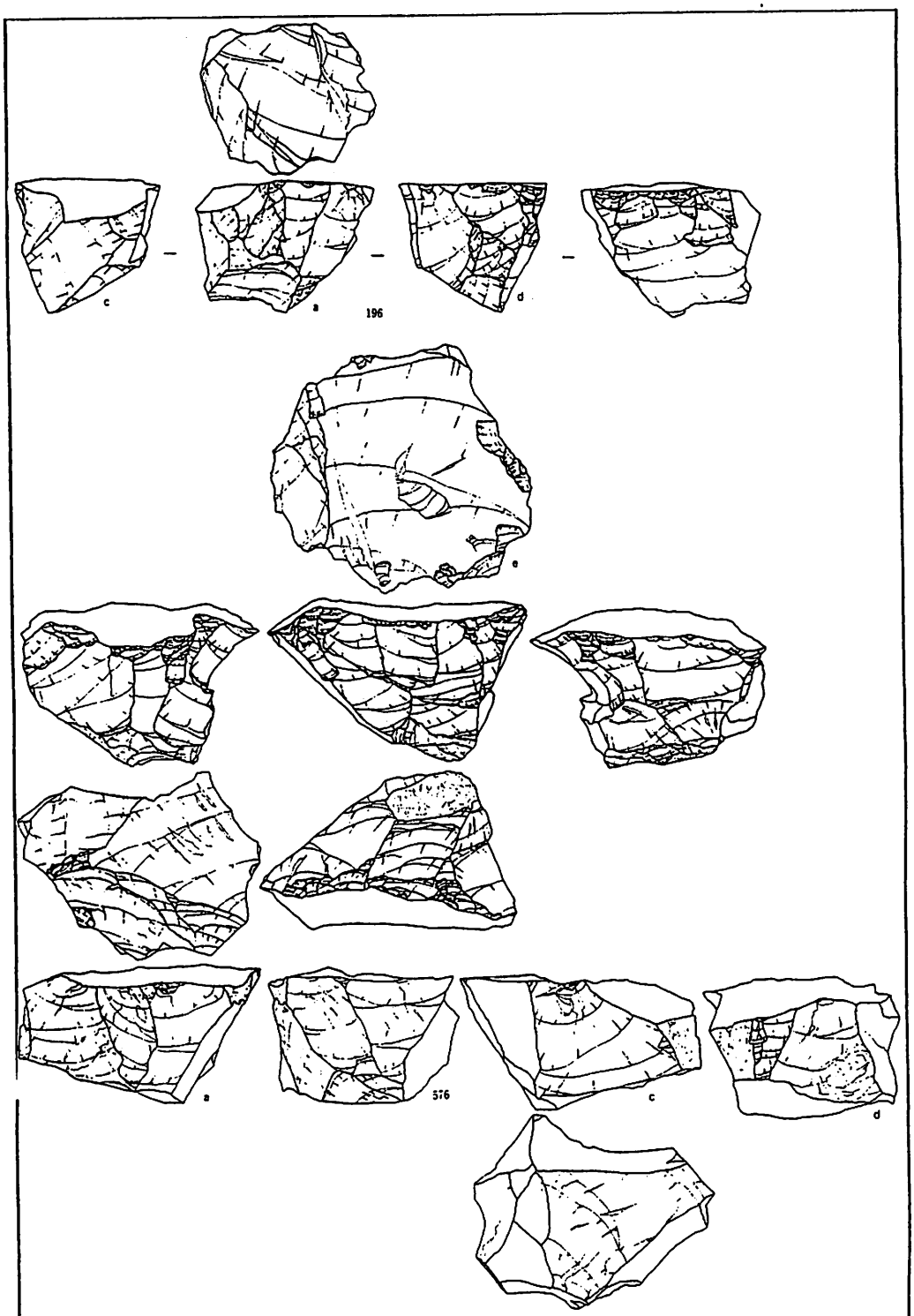
第２３１図　原田第１遺跡（２８８）



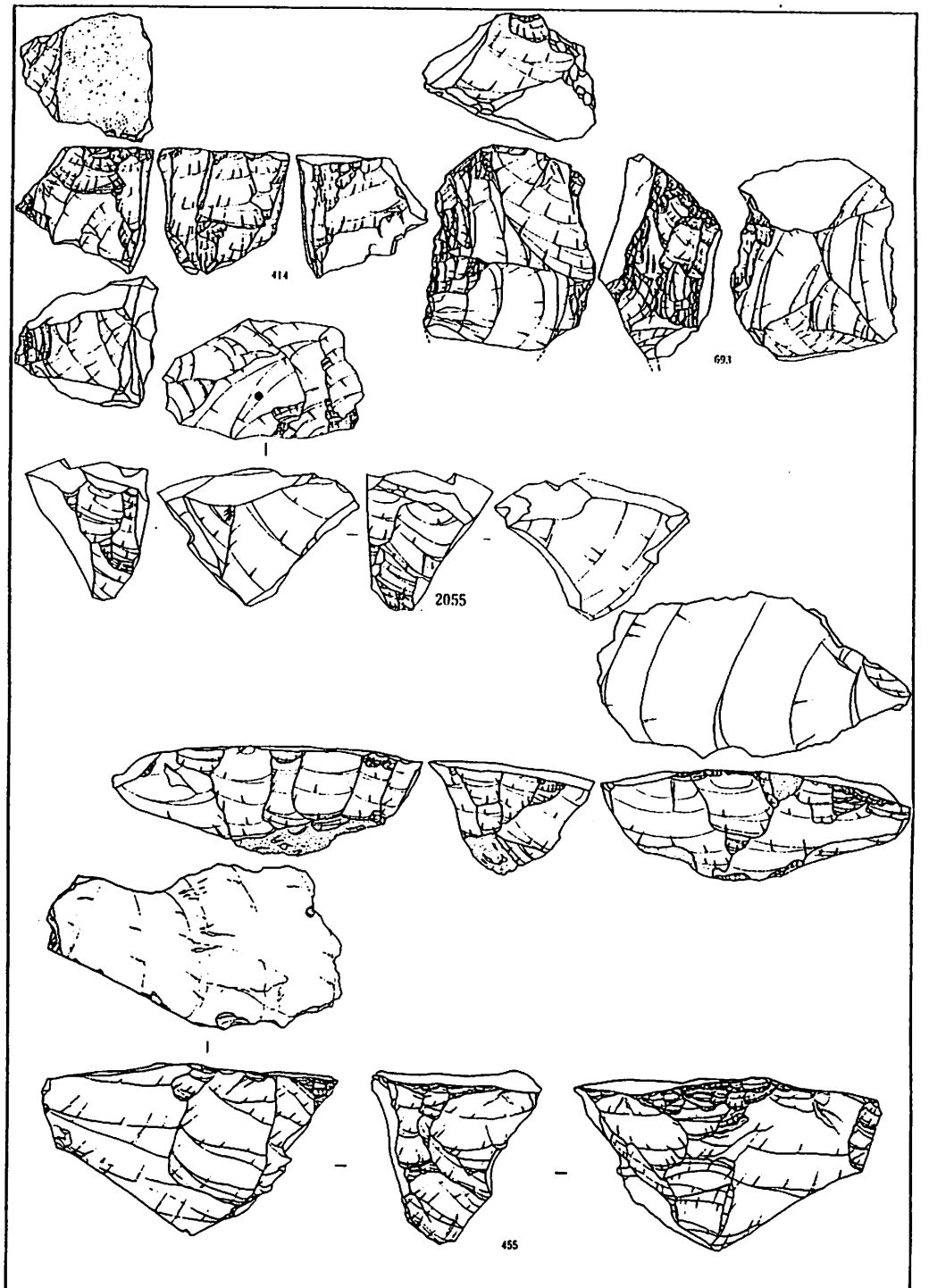
第２３２図　高畑遺跡（２８９）　0　(1:2)　5cm



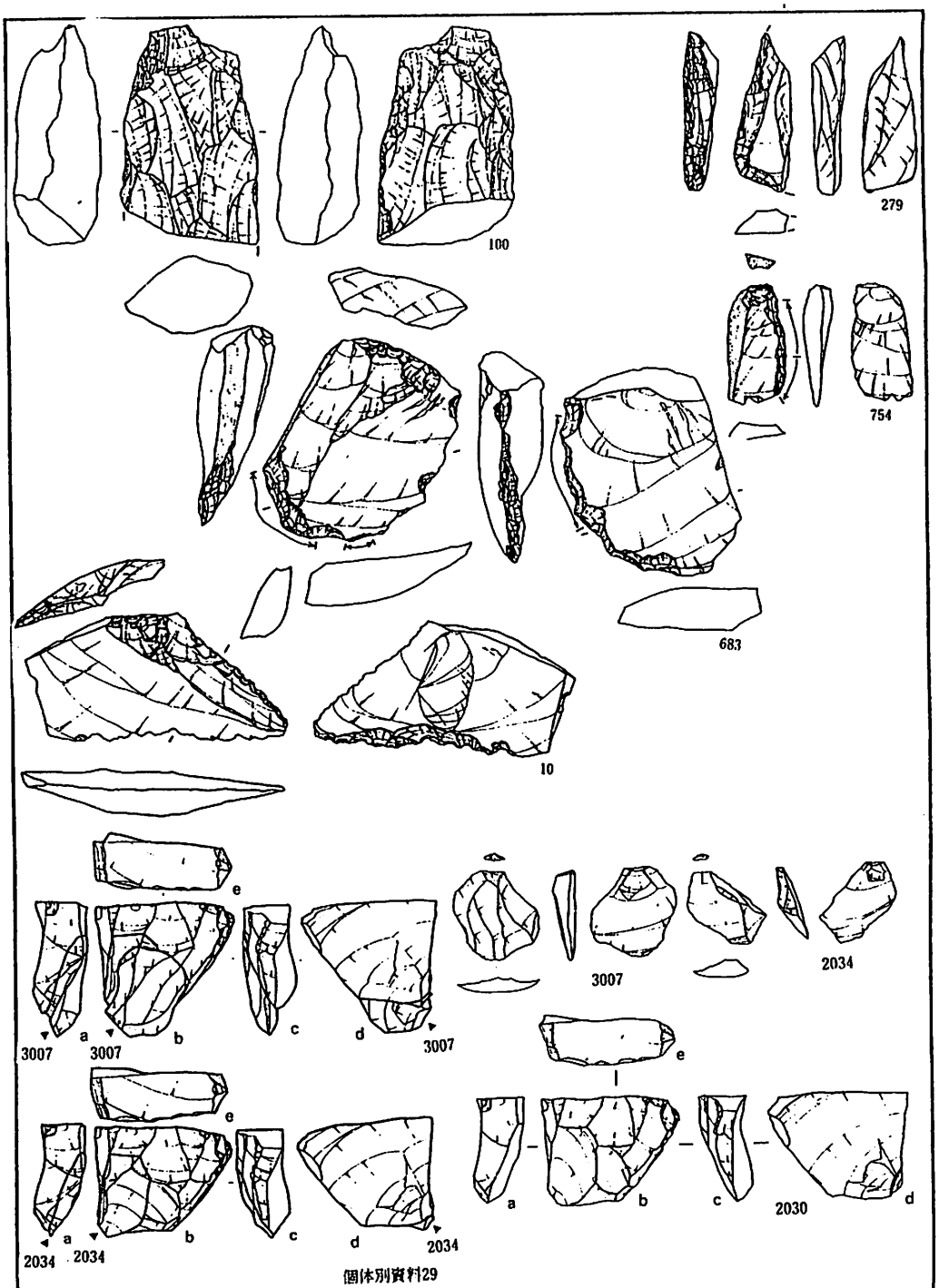
第２３３図　松山遺跡（２９０）



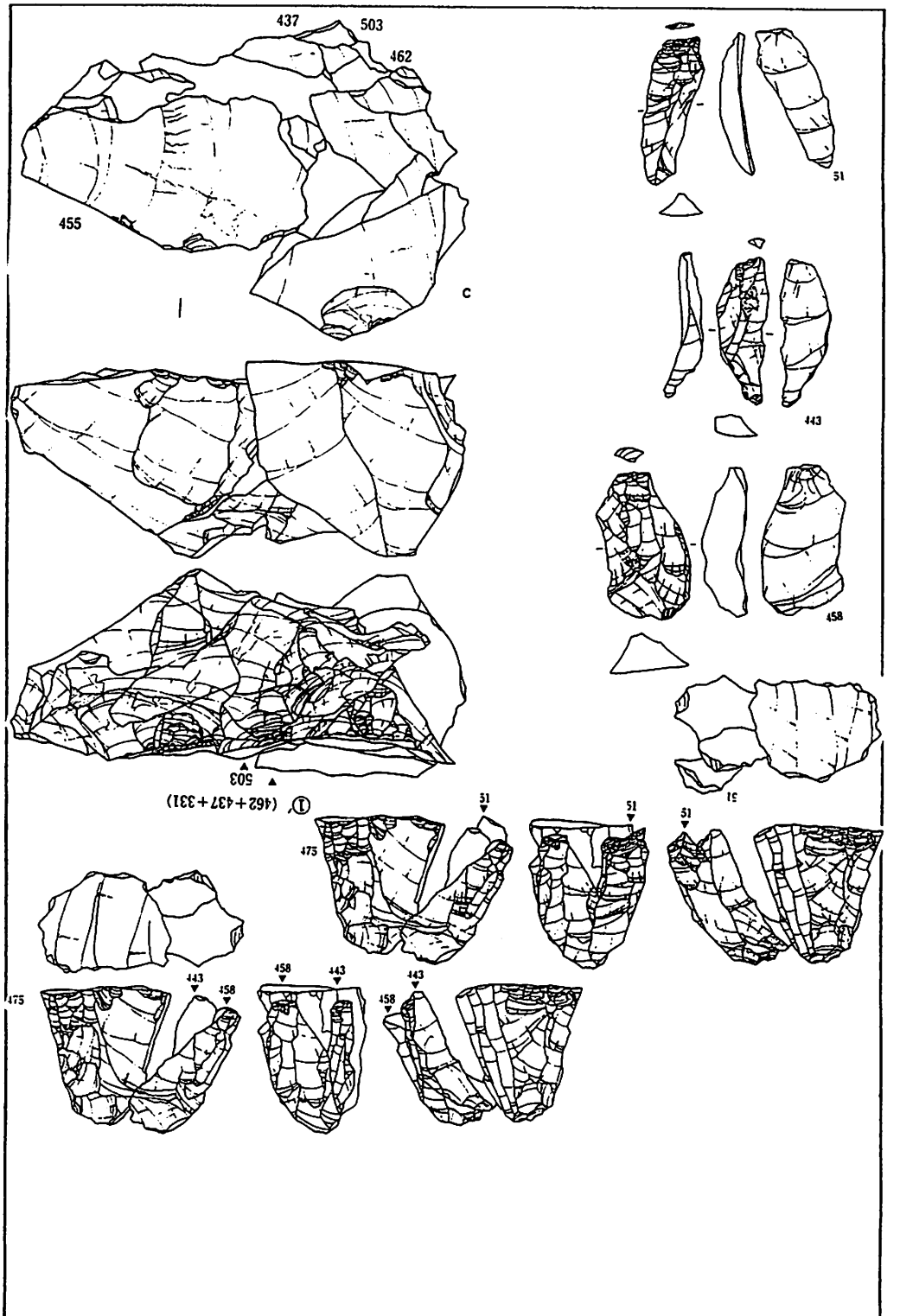
第２３４図　松山遺跡（２９０）　0　(1:2)　5cm



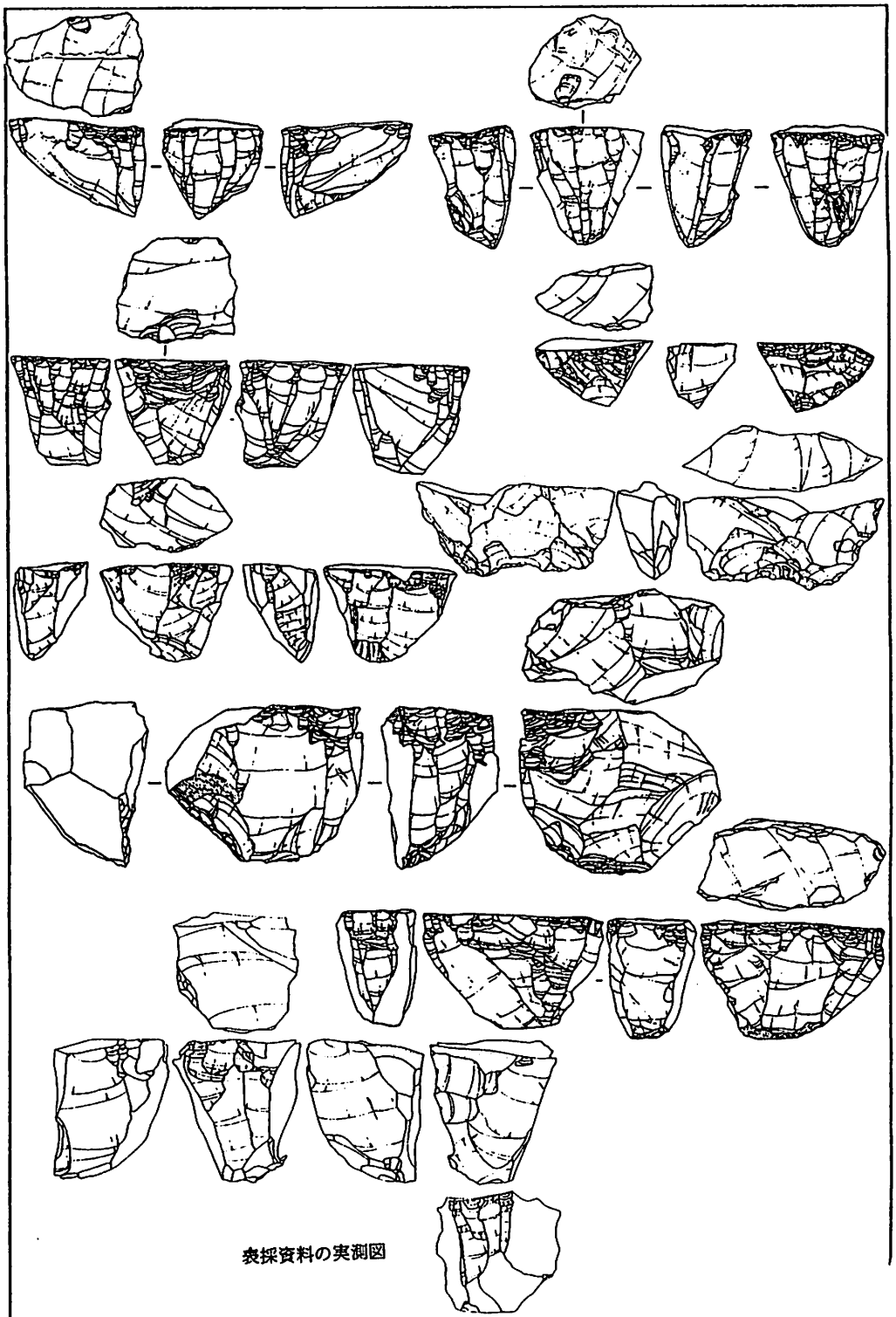
第２３５図　松山遺跡（２９０）　0　(1:2)　5cm



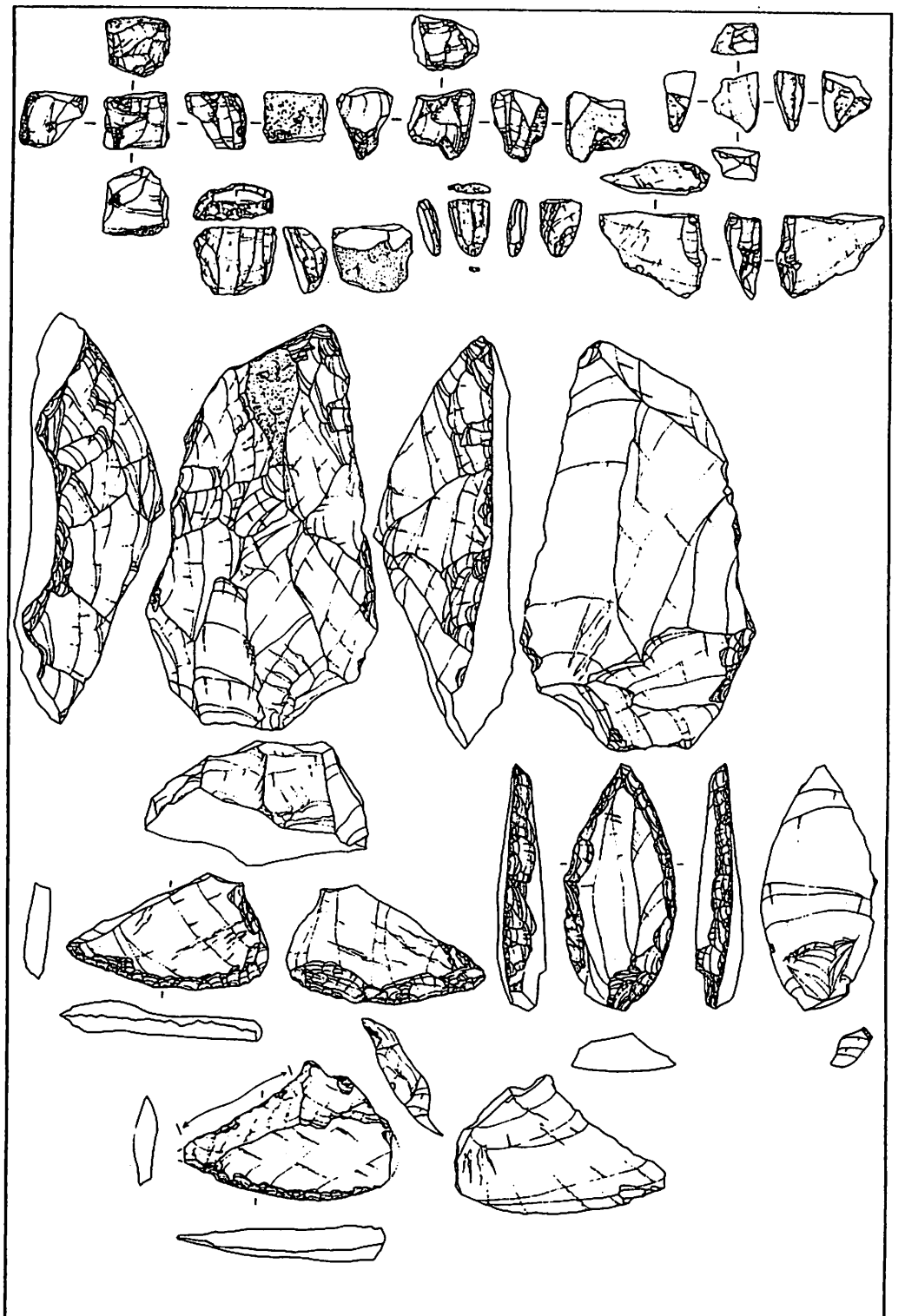
第２３６図　松山遺跡（２９０）　0 (1:2) 5cm



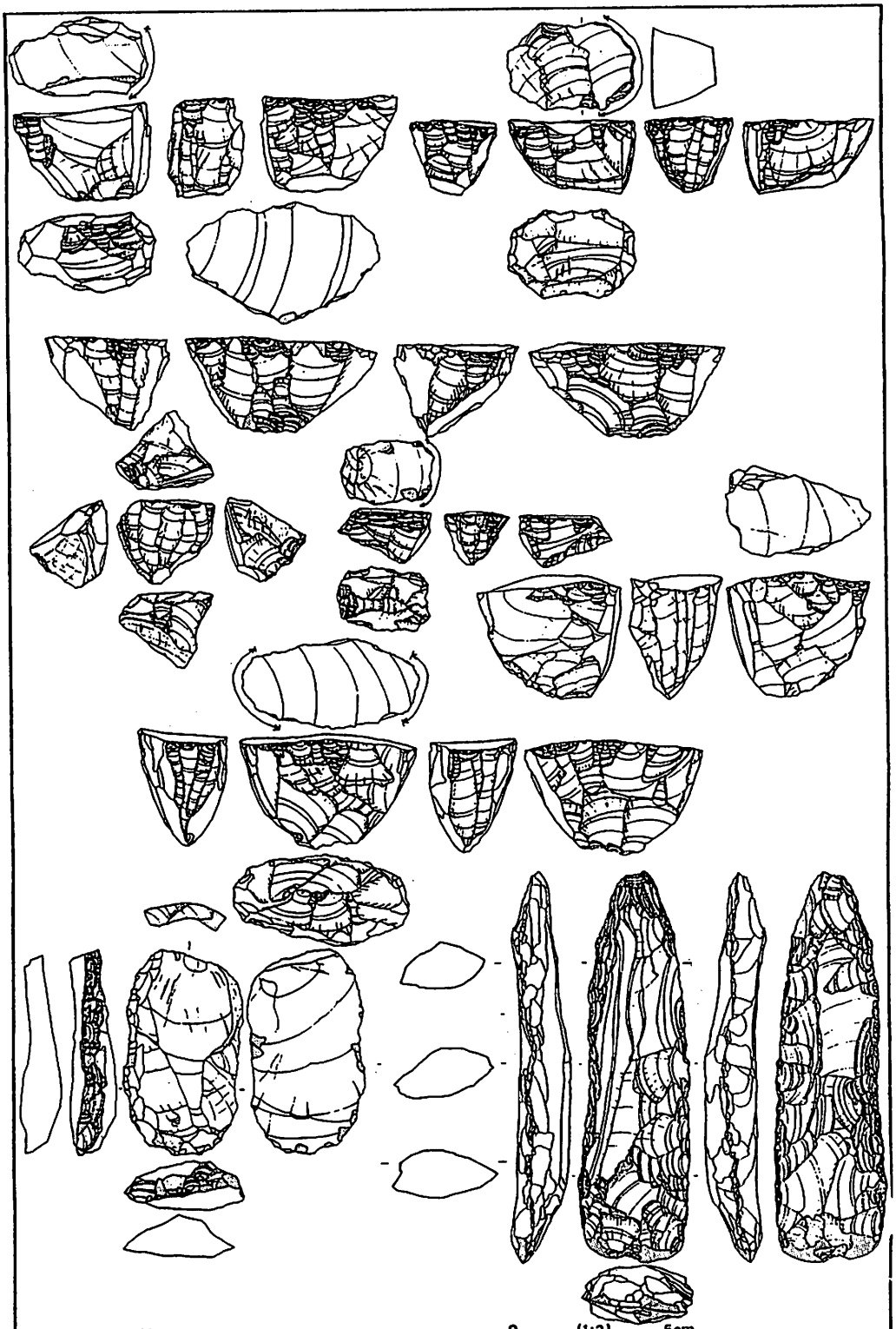
第２３７図　松山遺跡（２９０）　0 (1:2) 5cm



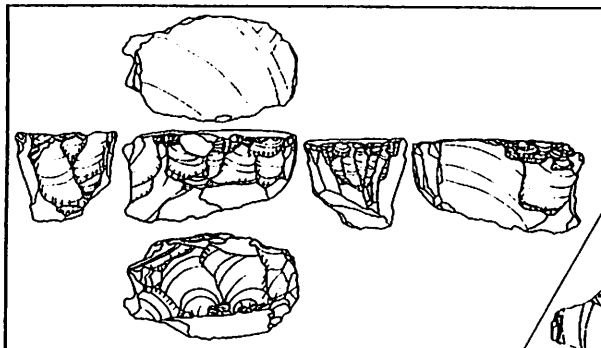
第２３８図　松山遺跡（表採）（２９０）



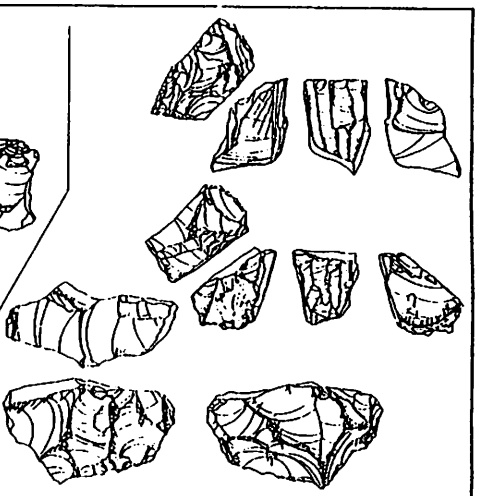
第２３９図　松山遺跡（２９０）



第２４０図　市ノ久保遺跡（２９１）

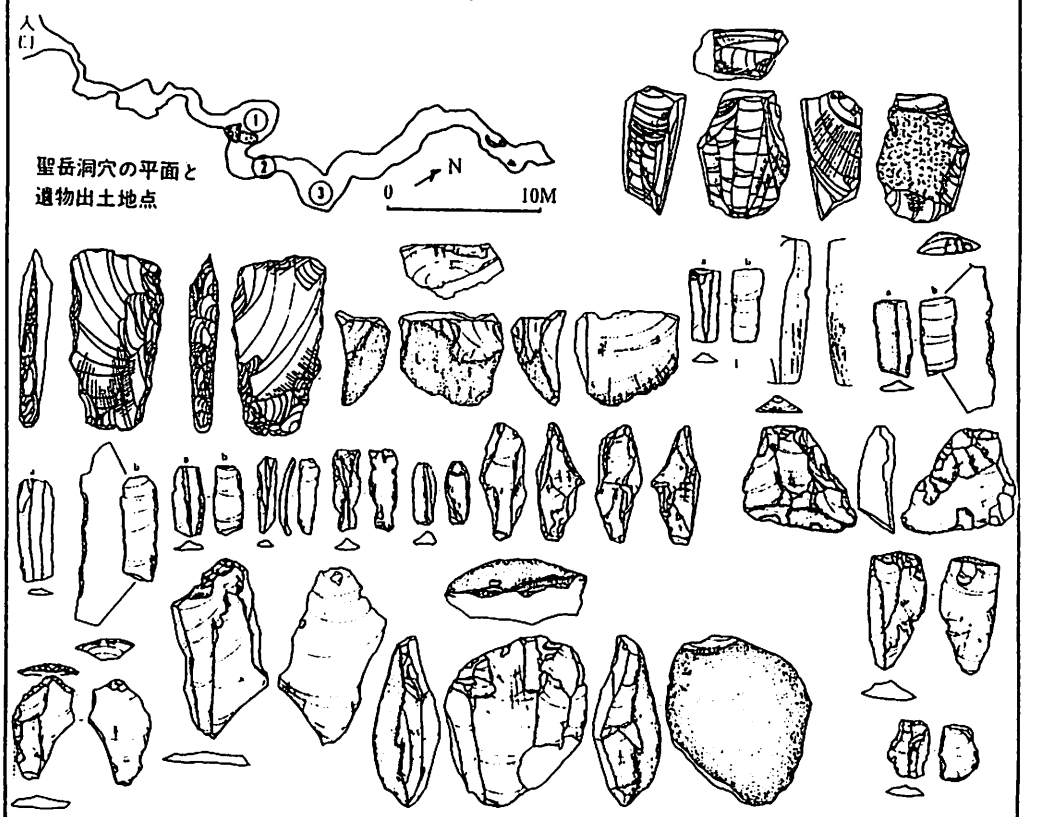


第２４１図　長谷遺跡（２９２）



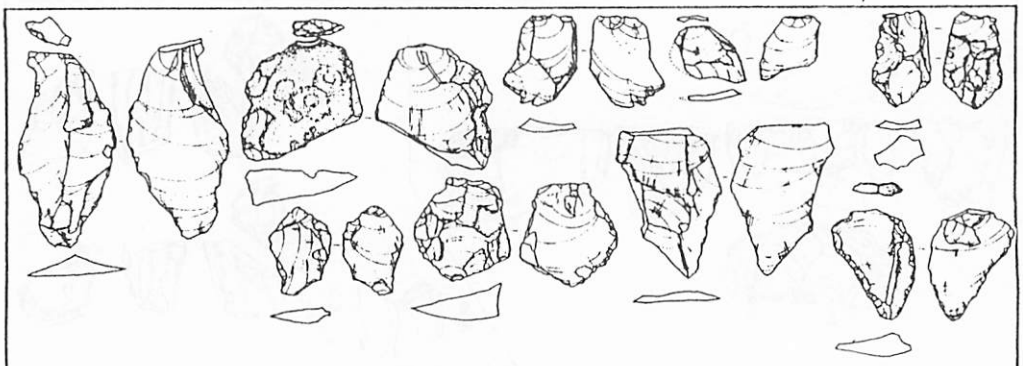
第２４２図　奥畑遺跡（２９３）

第２４３図　田良原遺跡Loc.B（２９４）

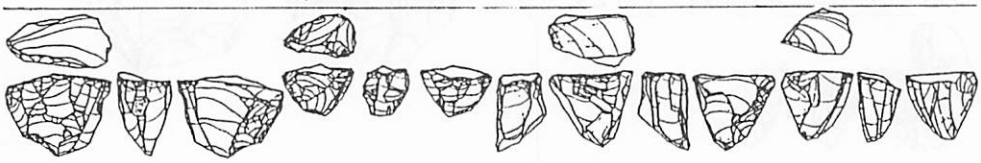


第２４４図　聖嶽洞窟（２９５）

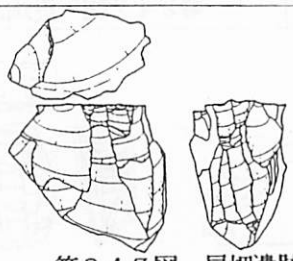
0　(1:2)　5cm



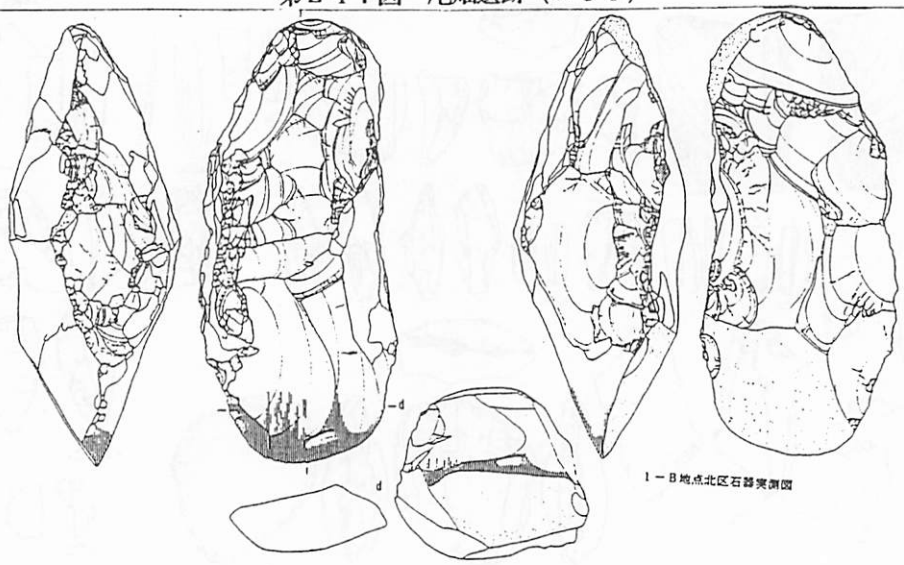
第２４５図　聖嶽洞窟（２９５）



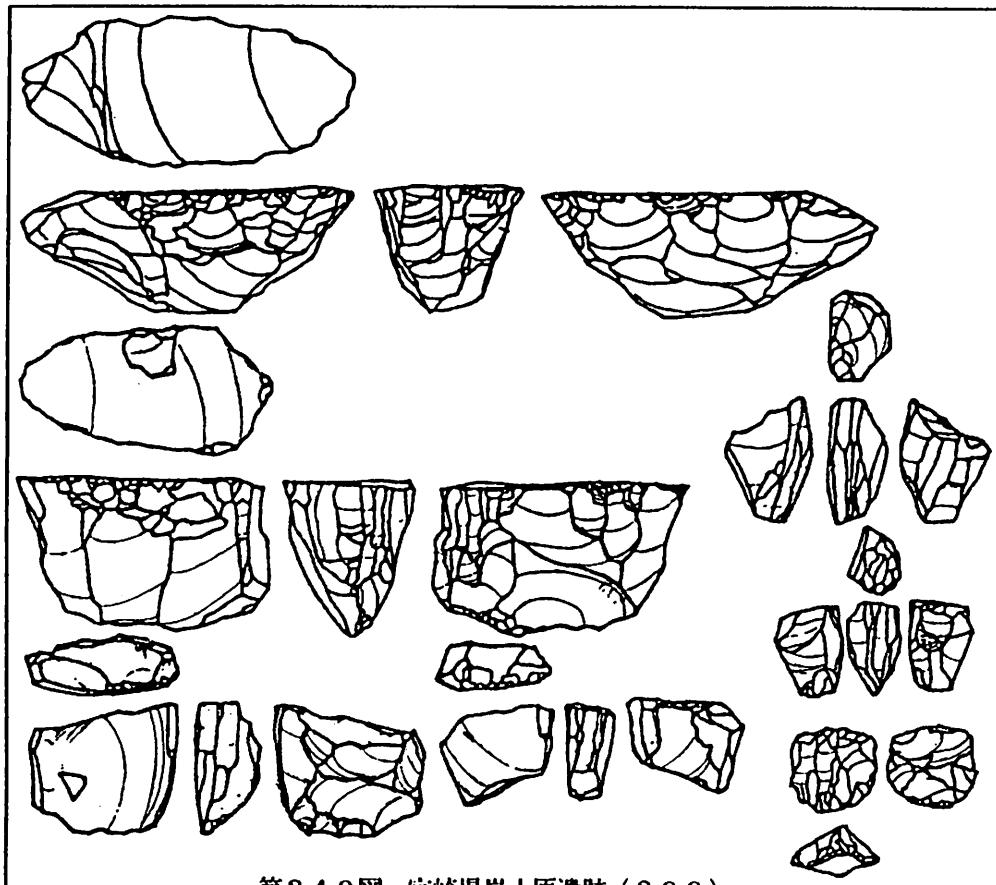
第２４６図　本城野遺跡（２９７）



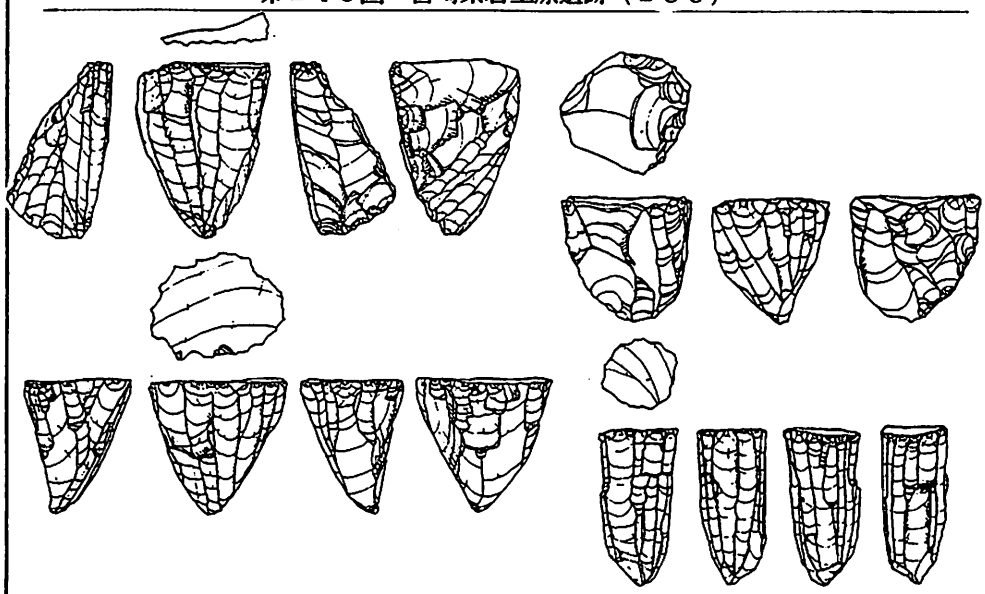
第２４７図　尾畑遺跡（２９８）



第２４８図　（参考例）丹生遺跡群Ⅰ－Ｂ　0　(1:2)　5cm



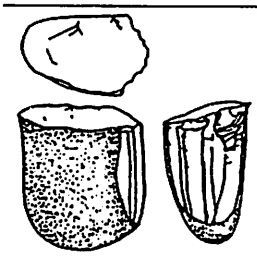
第２４９図　宮崎県岩土原遺跡（２９９）



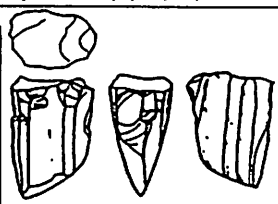
第２５０図　赤木遺跡（３００）

0　(1:2)　5cm

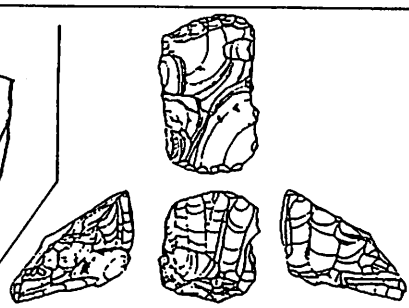
第２５１図　赤木遺跡（３００）



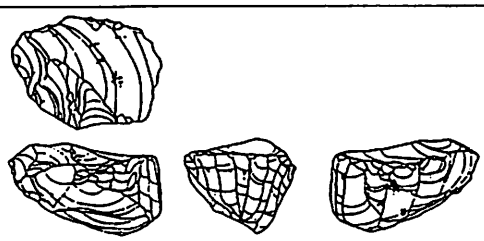
第２５２図　寺迫遺跡（３０３）

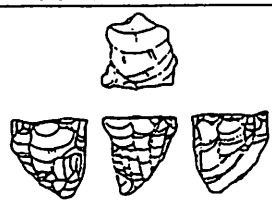


第２５３図　椎原遺跡（３０５）



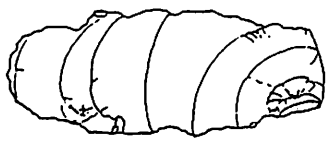
第２５４図　住吉遺跡Loc.B（３０７）

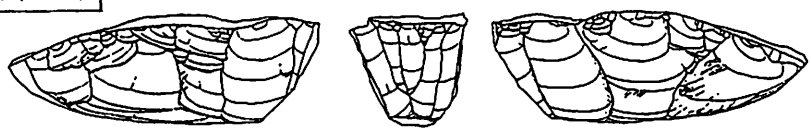




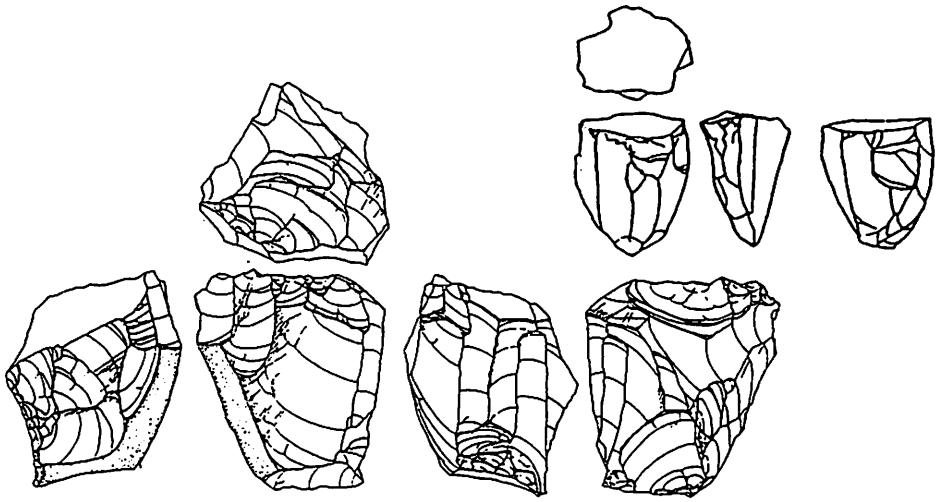
第２５５図　谷の口遺跡（３０８）

第２５６図　白尾遺跡（３０９）

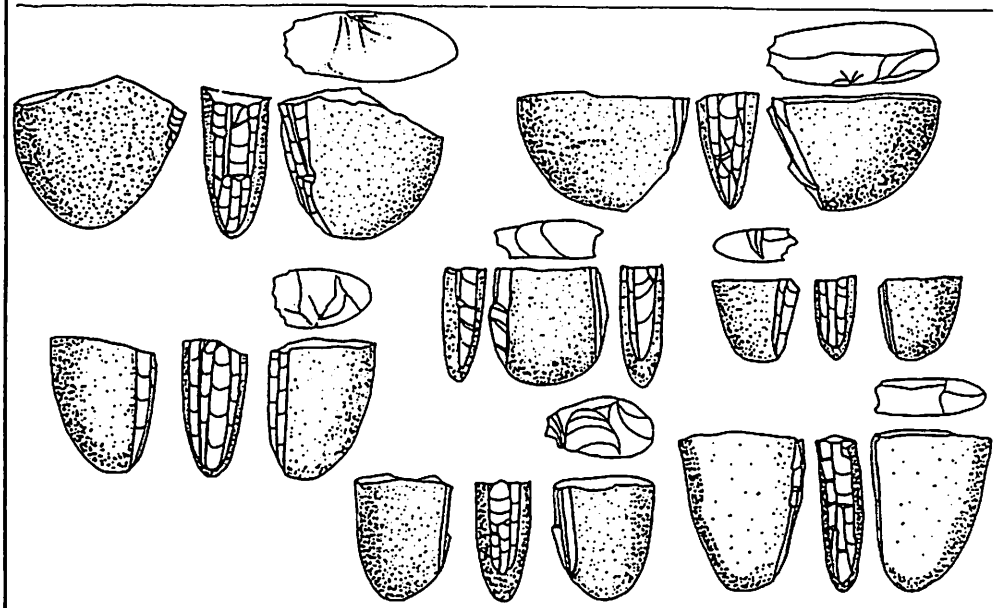




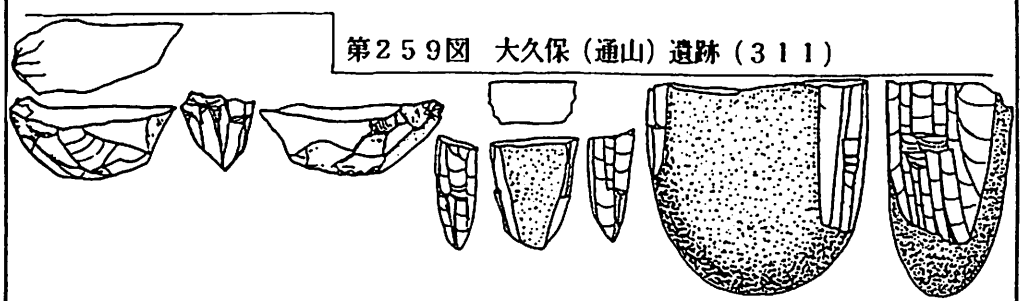
第２５７図　番野池遺跡（３１０）　0　(1:2)　5cm



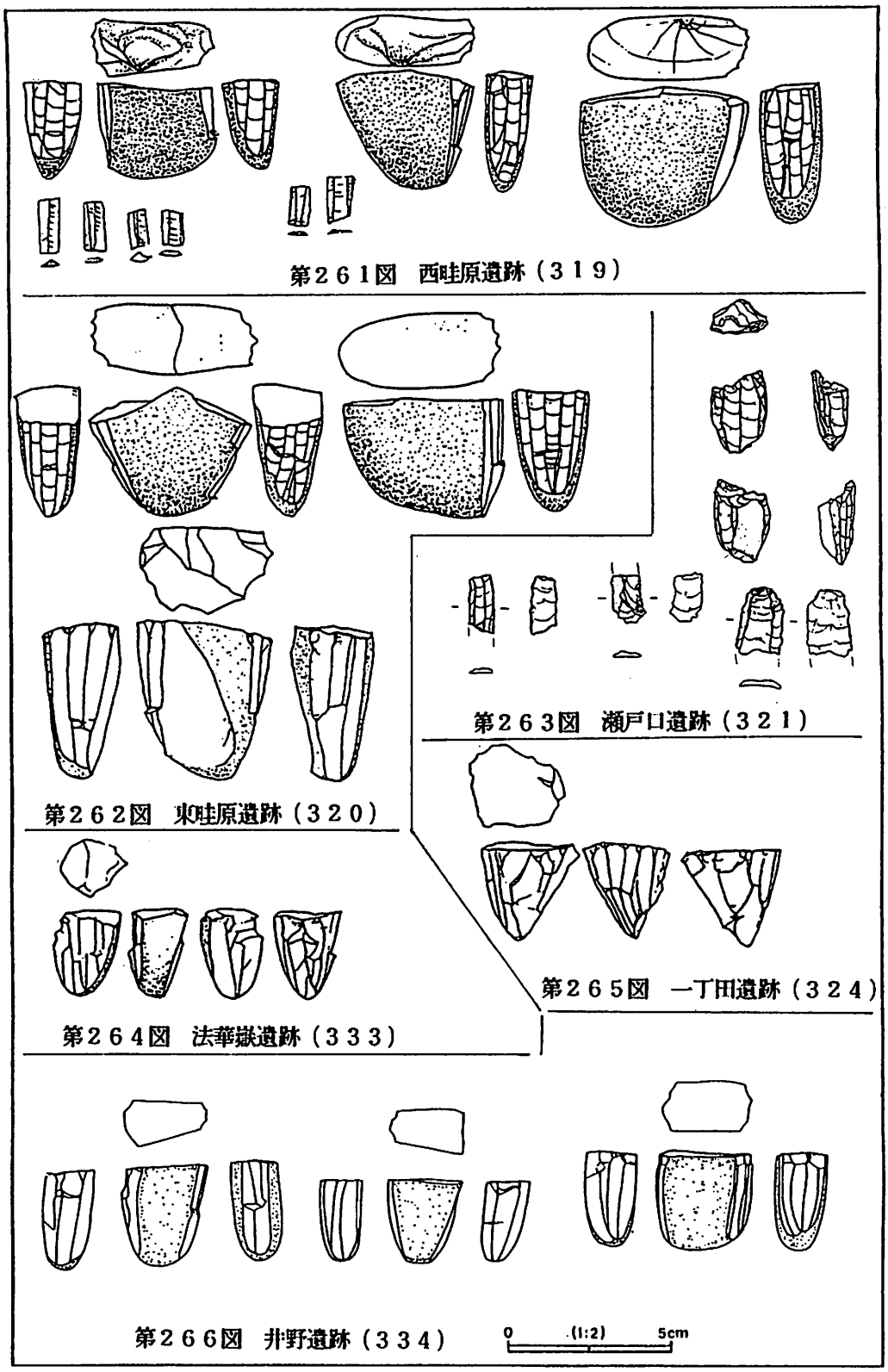
第２５８図　番野池遺跡（３１０）



第２５９図　大久保（通山）遺跡（３１１）



第２６０図　松本遺跡（３１６）　0　(1:2)　5cm



第２６１図　西畦原遺跡（３１９）

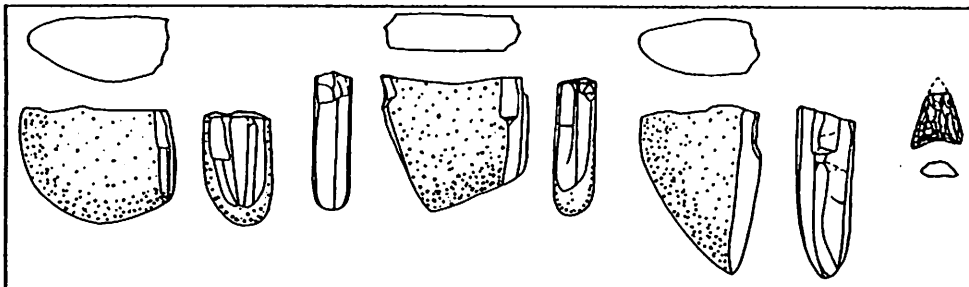
第２６２図　東畦原遺跡（３２０）

第２６３図　瀬戸口遺跡（３２１）

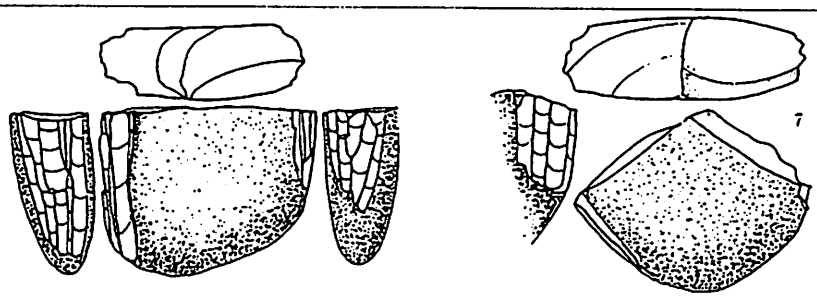
第２６４図　法華嶽遺跡（３３３）

第２６５図　一丁田遺跡（３２４）

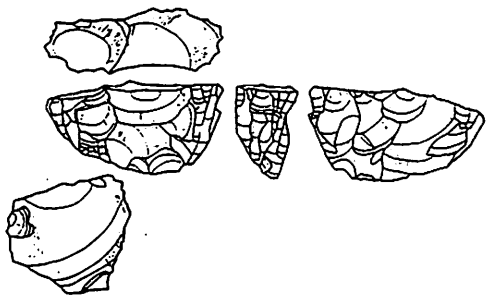
第２６６図　井野遺跡（３３４）

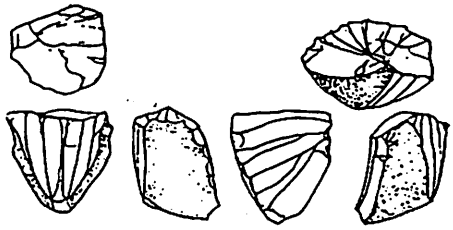


第２６７図　井野遺跡（３３４）

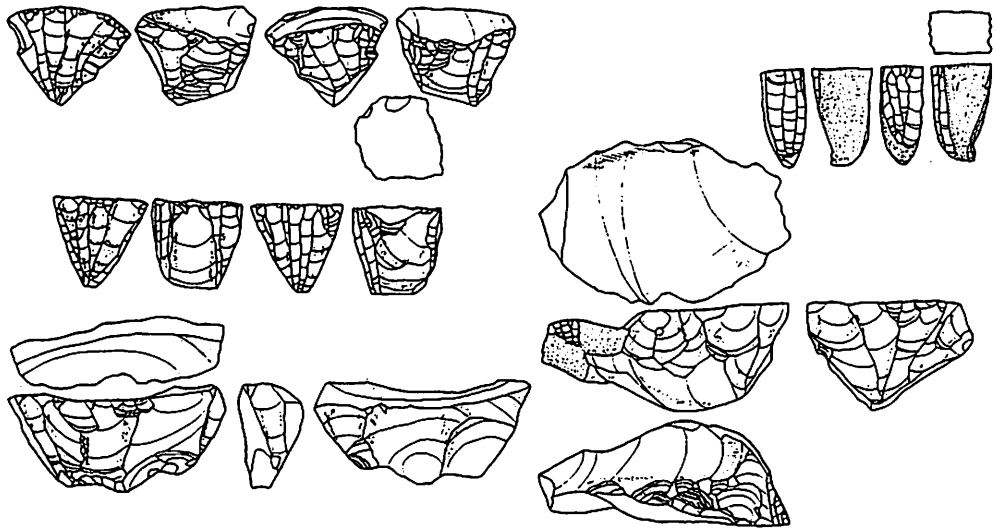


第２６８図　六野原遺跡（３３５）



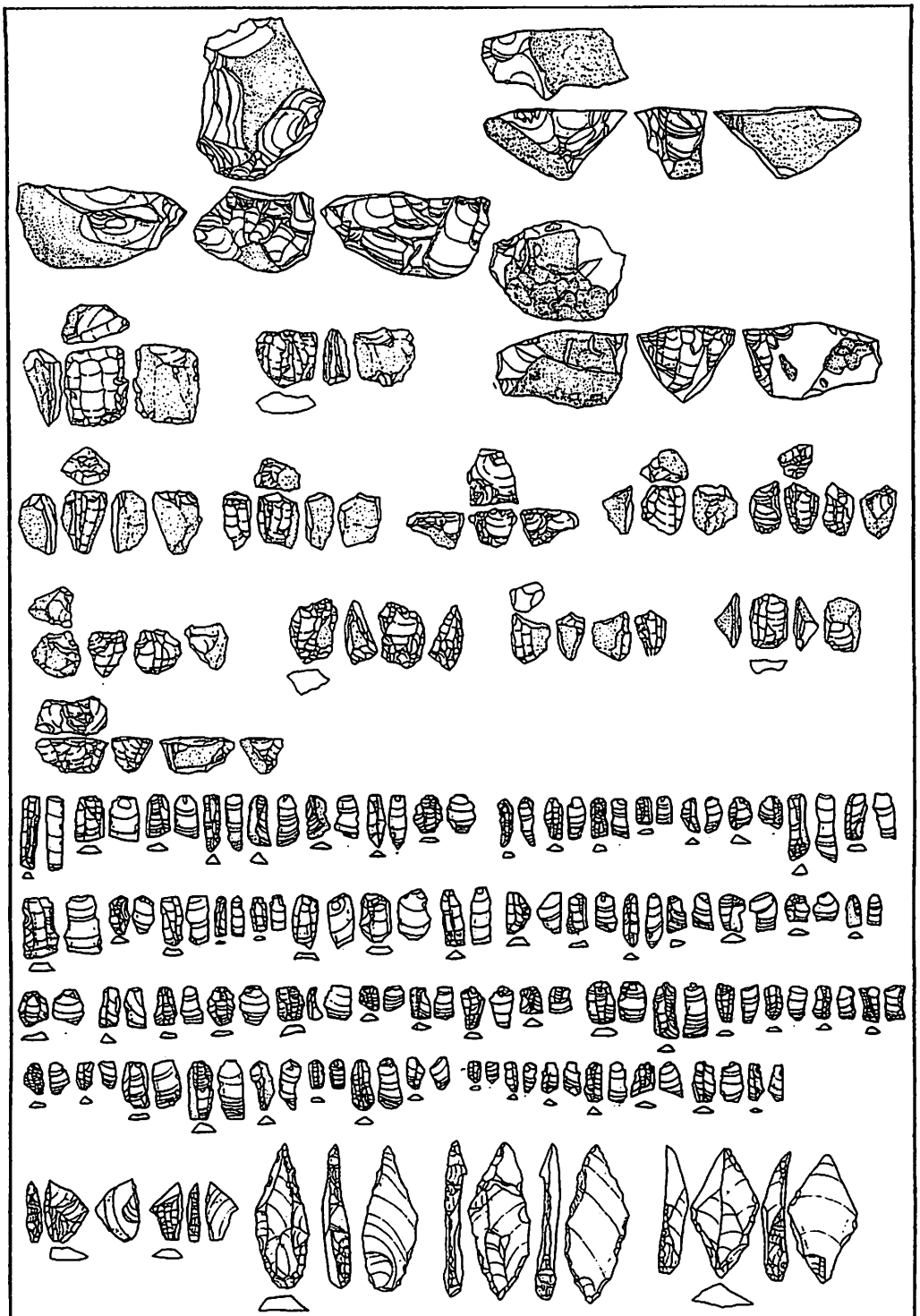


第２６９図　開拓遺跡（３３８）

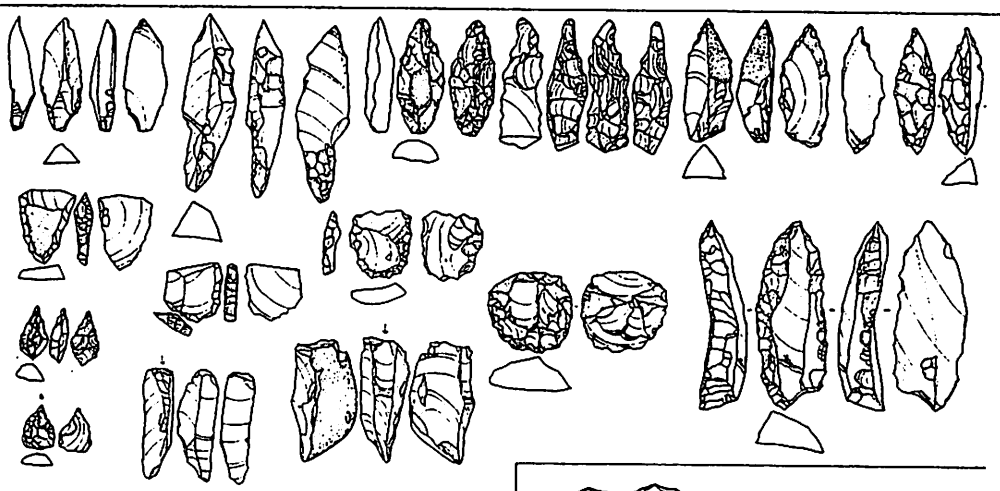


第２７０図　船野遺跡Loc.1（３３９）

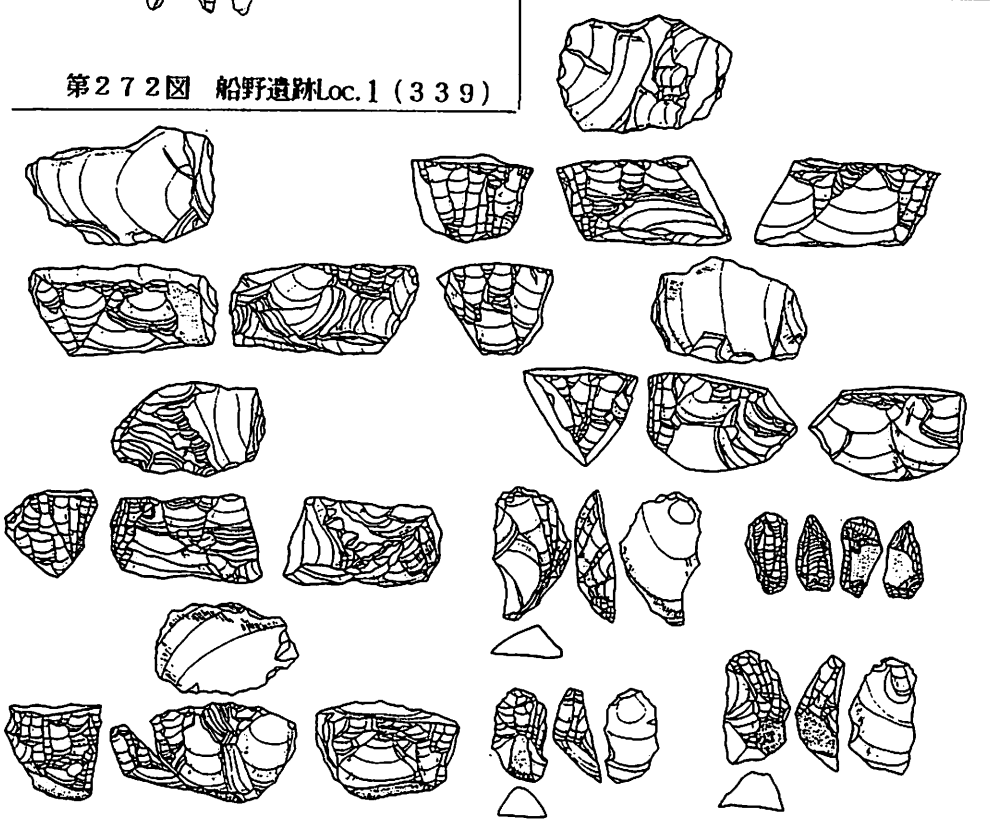
0　(1:2)　5cm

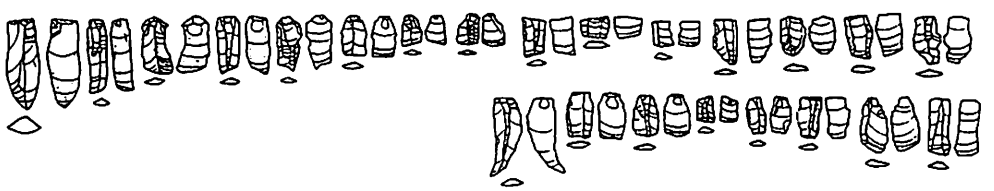


第２７１図　船野遺跡Loc.１（３３９）　0　(1:2)　5cm

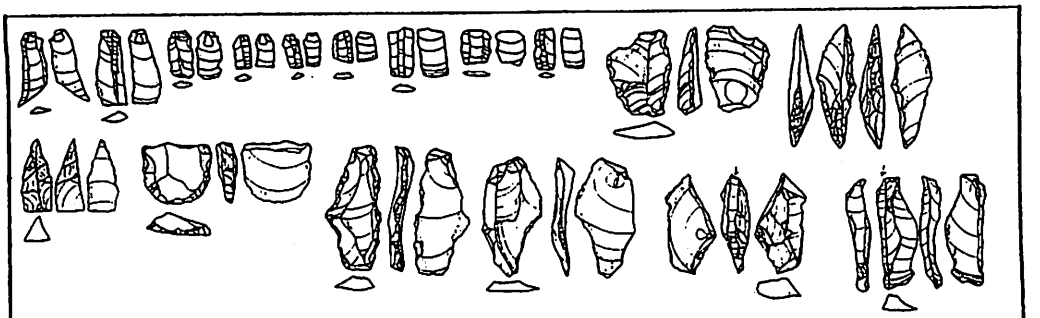


第２７２図　船野遺跡Loc.1（３３９）



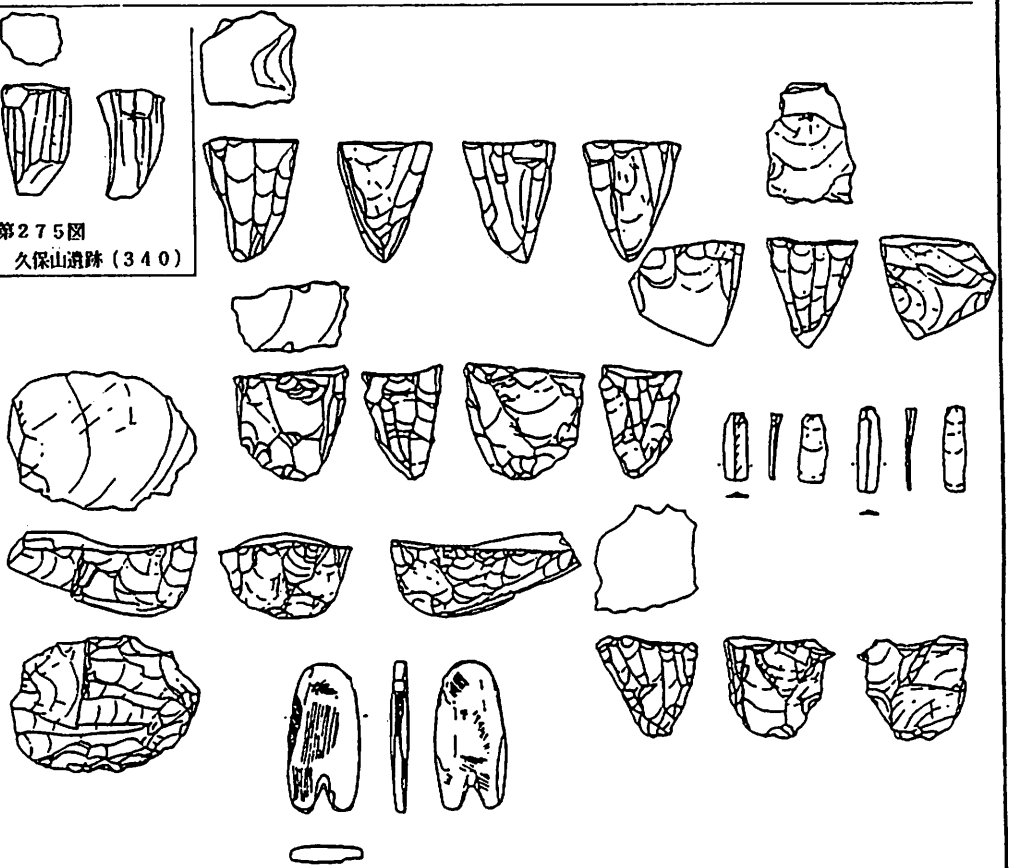


第２７３図　船野遺跡Loc.2（３３９）　0　(1:2)　5cm



第２７４図　船野遺跡Loc.２（３３９）

第２７５図
久保山遺跡（３４０）



第２７６図　東城原第２遺跡（３４１）

0　(1:2)　5cm

第 3 表　九州北半　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磨	土	発掘	所在	所属	備考
1	城ケ岳平子	98	28 (7)	3		1		1	1						○	有	長崎県北松浦郡宇久町	長崎県立美術博物館	
2	ヌゲ																長崎県北松浦郡小値賀町	小値賀町教委	
3	矢種																長崎県北松浦郡小値賀町	小値賀町教委	
4	殿崎																長崎県北松浦郡小値賀町	小値賀町教委	
5	丸尾		(1)														長崎県南松浦郡新魚目町		
6	西ノ股																長崎県南松浦郡新魚目町		
7	釣道																長崎県南松浦郡上五島町		
8	赤尾	(1)	(1)														長崎県南松浦郡有川町		
9	岐宿	(1)	(3)														長崎県南松浦郡岐宿町		
10	岡触																長崎県壱岐郡芦辺町湯岳岡触		
11	原の辻		(2)														長崎県壱岐郡芦辺町or石田町	長崎県教委	
12	長田池		(1)			○						○					長崎県北松浦郡大島村		
13	崎瀬第２	3										○				有	長崎県平戸市度島町	平戸市教委	
14	中山															有	長崎県平戸市度島町字中山	平戸市教委	
15	金柑茶屋第２															有	長崎県平戸市大久保町字山頭	平戸市教委	
16	神の池	4										○				有	長崎県平戸市朶ノ原町	平戸市教委	
17	津吉	12	2													有	長崎県平戸市津吉町	平戸市教委	作業面側のファーストスポール1 芯あり
18	田崎	15	1	7		4							2(2)			有	長崎県平戸市津吉町	平戸市教委	
19	日ノ岳																北松浦郡田平町大久保免大池		
20	中瀬																北松浦郡田平町大久保免中瀬		
21	野田																北松浦郡田平町		
22	長畑																北松浦郡鷹島町	鷹島町教委	
23	友尻																北松浦郡鷹島町	鷹島町教委	
24	大筌	(1)	(2)														松浦市星鹿町岳崎免字堤田	松浦市教委	
25	牟田																松浦市星鹿町牟田		
26	寺ノ尾A																松浦市御厨町上登木免大野谷	松浦市教委	
27	桜畑田		(2)			○						○				有	長崎県松浦市志佐町	松浦市教委	
28	辻ノ尾																長崎県松浦市志佐町		
29	寺田																長崎県松浦市志佐町浦免寺田	松浦市教委	
30	宮ノ下り															有	長崎県松浦市志佐町高野面	松浦市教委	
31	白岳池		(1)														長崎県北松浦郡江迎町鹿尾免		
32	ナンゴラ池					○						○					長崎県北松浦郡江迎町鹿尾免		スポール

第 4 表　九州北半　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鐵	土	発掘	所在	所属	備考
33	直谷岩陰	○	○													有	長崎県北松浦郡宮井町		
34	福井岩陰															有	長崎県北松浦郡宮井町	東北大学砂	2層 $^{14}C_{12,400}$ ±300 3層 $^{14}C_{12,700}$ ±500
	第2 層瓜形文土器文化層	○	○	○															
	第3 層隆起線文土器 〃	○	○	○															有孔円板1 点
	第4 層	○	30以	○				○					○						
35	岩谷口															有	長崎県北松浦郡世知原町		
36	牟田頸		(1)														長崎県北松浦郡世知原町		福井型
37	板山		(2)														長崎県北松浦郡世知原町		石ケ元型
38	平河原		(1)														長崎県北松浦郡世知原町		野岳型
39	岩下洞穴		(1)														長崎県佐世保市松瀬町	佐世保市教委	石ケ元型
40	耳切		(1)														長崎県佐世保市		石ケ元型
41	相当原		(1)														長崎県佐世保市		野岳～船野型
42	牟田境	○	(1)									○					長崎県佐世保市		
43	泉福寺洞穴															有	〃 佐世保市瀬戸越1591	島瀬英術センター	
	(Ⅰ) 細石器文化層	51	15	42					1	5	1					有			
	(Ⅱ) 豆粒文土器文化層	3098	307	173			7		6	19	2	4				835	有	長崎県	
	(Ⅲ) 隆線文土器文化層	9556	341	197			9		4	19	1	2				997	有	長崎県	
	(Ⅳ) 瓜形文土器文化層	525	28	47			6		1	3				5		77	有	長崎県	
	(Ⅴ) 押引文土器文化層	812	30	34			5		1	2		2		4		284	有	長崎県	
44	福田		(1)															長崎県佐世保市	野岳型
45	中屈敷		(1)															長崎県佐世保市	福井型
46	古里下		(1)										○					〃 〃 針尾東町黒見・茅場	
47	ケイマンゴー	5		○	○								○				有	〃 西彼杵郡西海町横瀬	長崎県教委 ﾌﾞﾗﾝｸ2
48	小迎																	〃 西彼杵郡西彼町	
49	大久保																有	〃東彼杵郡東彼杵町駄他郷駄他	長崎県教委
50	里郷	12											○				有	〃東彼杵郡東彼杵町金平	長崎県教委
51	遠目	(4)	(2)										○					〃東彼杵郡東彼杵町	
52	綿打池																	〃東彼杵郡東彼杵町一ツ石郷	
53	野岳	○	(24)	(3)										(1				長崎県大村市	
54	鍋山																	長崎県大村市東野岳町鍋山	長崎県教委
55	野岳平																	長崎県大村市野岳町野岳平	長崎県教委

第 5 表　九州北半　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磨	土	発掘	所在	所属	備考
56	大似田堤																長崎県大村市竹松町大似田	長崎県教委	
57	野田															有	長崎県大村市鬼橋町野田	長崎県教委	
58	葛城															有	長崎県大村市鬼橋町葛城	長崎県教委	
59	盆崎	○	27	○		○						○				有	長崎県西彼杵郡長与町	長与町教委	
60	位牌塔		○													有	長崎県諫早市	長崎県立美術博物館	
61	東大久保																長崎県諫早市貝津町東大久保	長崎県教委	
62	舌ノ倉															有	長崎県諫早市貝津町	長崎県教委	
63	鷹野	643	5													有	長崎県諫早市貝津町	長崎県教委	
64	平	29	1			3						○	1			有	長崎県諫早市湯久保町	長崎県教委	
65	西峰久道	381	24	○								○				有	長崎県諫早市湯久保町	長崎県教委	
66	平山															有	長崎県諫早市栗面町	諫早市教委	
67	平木場		1													有	長崎県長崎市中里町	長崎県教委	
68	平床B																長崎県長崎市	長崎市教委	
69	竿ノ浦																長崎県長崎市竿ノ浦		
70	百花台S地点	(16)	(15)									○					長崎県南高来郡国見町	長崎県教委ほか	
71	百花台Ⅲ層	20	17	2													長崎県南高来郡国見町		
72	魚洗川D	○														有	長崎県南高来郡国見町魚洗川	長崎県教委	
73	礫石原																長崎県島原市礫石原町		
74	今福	6														有	長崎県南高来郡南有馬町今福		
75	松山A	150	5	○	○							○	49			有	〃 東彼杵郡東彼杵町彼杵西郷	長崎県教委	
76	辻田池		1									○					〃 北松浦郡吉井町草ノ尾免		
77	鳴山池																〃 北松浦郡田平町		
78	焼野		(1)														佐世保市針尾中町丸田・焼野		
79	古里C		(1)									○					〃 〃東町雨池・鯨網代・大名倉		
80	雨池		(1)		○							○					〃 針尾東町雨池		
81	小園	4	2									○					〃 針尾東町		
82	牟田原		(1)														〃 針尾東町		
83	郷奥谷		(3)														〃 針尾東町		
84	牟田池	(5)	(1)														〃 針尾東町		

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝楔器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝磨器、GS＝磨石、H＝凹石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
磨＝石磨、土＝土器

佐賀県　　第 6 表　九州北部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鏃	土	発掘	所在	所属	備考
85	菅牟田風穴	33	1	4	1	○										有	唐津市菅牟田字風穴	唐津市教委	
86	石ケ元下道															有	唐津市浪川内字石ケ元	唐津市教委	
87	湊中野		1													有	唐津市湊町字中野	唐津市教委	
88	コクダシ	9	1													有	唐津市町田字コクダシ	唐津市教委	
89	馬郡甚殿山	47	5	○								○				有	唐津市枝去木字甚殿山	唐津市教委	
90	枝去木山中	52		○	○							○				有	唐津市枝去木字山中	唐津市教委	
91	枝去木上山田		1														唐津市枝去木字上山田		
92	枝去木分校入口		(2)									○					唐津市枝去木字平山		
93	中尾二ツ枝	128	15			6										有	唐津市大良字二ツ枝	唐津市教委	
94	竹木場前田		1										1			有	唐津市竹木場字前田	唐津市教委	船野型
95	馬場のゴルフ場		1														唐津市見借字馬場		
96	唐ノ川丸尾	7	1													有	唐津市唐ノ川字丸尾	唐津市教委	
97	一本松		(3)														唐津市佐志字一本松		
98	笹の尾	(6)	(4)									○					唐津市佐志字笹の尾		
99	磯道	58	2	○		○						○				有	東松浦郡肥前町入野磯道	肥前町教委	
100	丹土	3	1													有	〃肥前町入野乙二ツチ	佐賀県教委	
101	尾山	1	1													有	東松浦郡肥前町入野尾山	佐賀県教委	
102	川原田	135	3	6								○				有	〃 肥前町新木場川原田	肥前町教委	
103	新木場東	20														有	〃 肥前町新木場字東	肥前町教委	打面再生剥片
104	高地木場	2				○						○				有	〃肥前町新木場高地木場	佐賀県教委	
105	生石	176	1	○		○						○				有	〃肥前町大浦字生石	佐賀県教委	
106	押川		2													有	〃肥前町納所字押川	佐賀県教委	
107	池ノ田 I	11		○		○		3				○				有	〃肥前町納所字池ノ田	肥前町教委	
108	小平	20										○				有	〃肥前町瓜賀字小平	肥前町教委	
109	大浦溜岡辺		(9)														〃肥前町万賀里川甚手田		
110	サカセ溜西方		(5)														〃肥前町万賀里川平石		
111	桐谷（東山桐谷）		(3)														〃肥前町切子桐谷		
112	中川原西	14														有	〃鎮西町加倉中川原	鎮西町教委	稜つきスポール?
113	境木場	73 (8)	(1)	2		1						○				有	〃鎮西町石宮境木場	鎮西町教委	
114	畦木場	(2)															〃鎮西町石宮畦木場		
115	原		(5) 11									○	1 1			有	〃鎮西町高野字原 唐津市枝去木字猿口	明治大学 佐賀県教委ほか	

佐賀県

第 7 表　九州北部　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磯	土	発掘	所在	所属	備考
116	日出松		(3)									○					東松浦郡玄海町有浦ノ上日出松		
117	敷田	7														有	〃　玄海町替恩寺上の口	佐賀県教委	
118	前田A		1													有	〃　北波多村下平野前田	佐賀県教委	
119	白蛇山岩陰	16	2		1											有	伊万里市東山代町脇野	佐賀県立博物館	11層と13層から出土.13層はM18点のみ他は11層
120	大光寺																伊万里市桃川町大光寺	伊万里市教委	
121	寺尾		(1)														西松浦郡西有田町大木乙寺尾		
122	ヤセギア（北原）		(3)														西松浦郡西有田町山谷乙北ノ原		
123	小路		(1)														武雄市若木町川古小路		
124	山王	5	1													有	多久市多久町字山王	多久市教委	
125	猟分	(4)	(4)										11			有	多久市多久町字瀬町・湯町	多久市教委	
126	東分		(1)										○				小城郡三明町鍋島字東分		
127	磯附E	1														有	佐賀市久保泉町川久保字磯附	佐賀県教委	
128	吉野ケ里（志波屋三の坪甲）															有	神埼郡神崎町志波屋三の坪甲	佐賀県教委	
129	山古賀	1														有	神崎郡東脊振村石動西一本杉	佐賀県教委	

福岡県

130	山ノ内																粕屋郡宇美町		遺物現存せず
131	浦尻池		(1)														粕屋郡宇美町宇美浦尻	宇美町歴民	
132	原下池																粕屋郡古賀町	高橋・松尾氏	
133	鹿部東町		1													有	粕屋郡古賀町鹿部東町	九州大学	
134	蒲田池		(1)														粕屋郡篠栗町和田	松尾健二氏	
135	大刀洗池																粕屋郡新宮町	松尾健二氏	
136	赤石池		(1)														粕屋郡須恵町植木		
137	乙植木	(5)										○				有	粕屋郡須恵町植木山城戸	須恵町歴民	
138	内橋																粕屋郡粕屋町		遺物現存せず
139	戸原	○	(48)			1							1				粕屋郡粕屋町戸原	日高・伊藤氏	
140	西尾山	2														有	粕屋郡粕屋町大字西尾		
141	野方古墳群	(2)															福岡市西区	福岡市埋文センター	
142	羽根戸古墳群	(2)															福岡市西区羽根戸		
143	笠間谷古墳群	(2)	(1)													有	福岡市西区字笠間谷		
144	吉武大石	○	○	○												有	福岡市西区大字吉武字大石	福岡市埋文センター	
145	湯納		1													有	福岡市西区大字拾六町		

福岡県　　第 8 表　九州北部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磨	土	発掘	所在	所属	備考
146	飯氏第３次															有	福岡市西区飯氏字鍋山・馬場		
147	野方勧進原	1										○				有	福岡市西区野方字勧進原388		
148	重留																福岡市早良区		
149	有田152 次		1													有	福岡市早良区		
150	有田107 次		1									○				有	福岡市早良区		
151	脇山Ａ		1													有	福岡市早良区脇山川原・会田		
152	唐原	1														有	福岡市東区	福岡市埋文ｾﾝﾀｰ	
153	蒲田（部木）		11			1						○				有	福岡市東区大字蒲田		
154	奈多砂丘																福岡市東区奈多		
155	井尻Ｂ	24	3	5		1					2	2				有	福岡市南区井尻5 丁目175-1	福岡市埋文ｾﾝﾀｰ	KN 2例は台形石器 1例を含む
156	三宅屍寺		1													有	福岡市南区三宅字ｺｶ71170		
157	柏原Ｋ	3										○				有	福岡市南区柏原字ｺﾀﾝ	福岡市埋文ｾﾝﾀｰ	
158	柏原Ｎ	22	3													有	福岡市南区柏原字上原田	福岡市埋文ｾﾝﾀｰ	
159	弥永Ｂ地点		1													有	福岡市博多区		
160	諸岡Ｇ区	○	3													有	福岡市博多区諸岡		
161	板付Ａ２区		1													有	福岡市博多区板付	福岡市埋文ｾﾝﾀｰ	
162	高畑10次		1													有	福岡市博多区板付6 丁目		
163	志登Ｂ地点															有	前原市志登	前原市教委	
164	ウトロ																春日市		
165	原																春日市上白水・原	九州歴史資料館	
166	赤井手																春日市小倉・赤井手		
167	天神池前		1														春日市上白水・天神池前		
168	柏田	2	2														春日市上白水・柏田		
169	門田（辻田地区）	16	23			1						○				有	春日市上白水門田・辻田	九州歴史資料館	
170	門田（門田地区）	35 192	9 5	1		1		1				○ ○				有	春日市上白水門田・辻田	九州歴史資料館	上段が 発掘資料 下段は 採集資料
171	門田（谷地区）	103	97			1						○				有	春日市上白水門田・辻田	九州歴史資料館	
172	釜蓋原	1														有	大野城市瓦田釜蓋原	大野城市教委	
173	小貫谷																太宰府市		
174	前田	1														有	太宰府市大字向佐野字前田		
175	太宰府67条															有	太宰府市大字通古賀		
176	太宰府66条	3														有	太宰府市大字通古賀		
177	深原	2	1													有	筑紫郡那珂川中原・深原		

福岡県　　第 9 表　九州北部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	縄	土	発掘	所在	所属	備考
178	岬山	56 (2)	4	○		○						○				有	筑紫野市		
179	若江	4															筑紫野市若江		
180	野黒坂		5									○				有	筑紫野市大字針摺字野黒坂		
181	萩原		3									○				有	筑紫野市大字萩原		旧石器出 採集品○
182	道場山		4													有	筑紫野市大字武蔵		
183	上の宿															有	朝倉郡朝倉町大字山田		
184	牧の池	(1)															朝倉郡夜須町		
185	福島銀ノ神	(1)											(1)				朝倉郡夜須町		
186	八並																朝倉郡夜須町		
187	中島堤		(1)														朝倉郡夜須町中島堤		
188	津古上ノ原	(3)	(1)									○					小郡市津古字上ノ原		
189	春園	140	2	3												有	三井郡大刀洗町山隈		
190	庄屋野	1	1													有	久留米市安武町安武本2819-1		
191	穴口		1													有	〃　安武町安武本穴口2803-9		
192	ひょうたん山	4	1										○			有	久留米市高良町字宮ノ浦		
193	赤坂		(1)														久留米市山川町字赤坂		
194	野口		2									○				有	久留米市山川町字野口		
195	甲塚		1													有	久留米市鷹山町甲塚		
196	一木	(2)											(1				八女郡星野村		
197	大草平	8	9									○				有	八女郡星野村字大草		
198	立山															有	八女市大字本字立山		
199	汐井掛	6	1													有	鞍手郡若宮町		
200	郡地	1														有	鞍手郡若宮町沼口郡地		
201	尾崎天神																遠賀郡遠賀町		
202	御花畑																北九州市小倉南区	日高氏	
203	長行		1													有	北九州市小倉南区大字長行		
205	新池		(1)														筑上郡大平村	村上久和氏	
206	原池		(1)														筑上郡椎田町	筑上西高校	

熊本県

207	平山宿																荒尾市		
208	中原		(2)														玉名郡菊水町	菊水町資料館	
209	長沖		(1)														山鹿市十三部	山鹿市博物館	

熊本県　　第 10 表　九州北部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土	発掘	所在	所属	備考
210	蒲生下原		(1)														山鹿市十三部		
211	松島小野崎	○	50以上														菊池郡七城町	熊本市博物館	
212	伊野A	4(300)以上	2(11)														菊池市原	福田正文氏	
213	伊野B	(4)	(1)														菊池市原	福田正文氏	
214	湯の浦		(1)														阿蘇郡阿蘇町	熊本商大	
215	長倉坂																阿蘇郡阿蘇町		
216	花園柿原	(1)															熊本市花園町	福田正文氏	
217	谷尾崎		(1)														熊本市花園町	福田正文氏	
218	葉山		2													有	熊本市戸島市	熊本市教委	
219	谷頭		(1)														阿蘇郡西原村	西原村資料館	
220	桑鶴土橋	(5)															阿蘇郡西原村	熊本大学	
221	桑鶴本屋敷																阿蘇郡西原村	西原村資料館	
222	桑鶴古屋敷																阿蘇郡西原村	西原村資料館	
223	共同牧場Loc.A																阿蘇郡西原村	福田正文氏	
224	西原A	○	(4)														阿蘇郡西原村	福田正文氏	
225	西原B	(11)	(3)														阿蘇郡西原村	福田正文氏	
226	千人塚																阿蘇郡西原村	西原村資料館	
227	別辻																阿蘇郡西原村	西原村資料館	
228	蘇陽																阿蘇郡蘇陽町		
229	吉無田高原		(1)														上益城郡御船町	福田正文氏	
230	南小池																上益城郡御船町	熊本大学	
231	久保	1	1													有	上益城郡御船町	熊本県教委	
232	大矢野原																上益城郡矢部町	福田正文氏	
233	小火器射場		(1)														上益城郡矢部町	福田正文氏	
234	牧原B		(1)														上益城郡矢部町	福田正文氏	
235	もみじ台	(16)															上益城郡矢部町	福田正文氏	
236	下横田																上益城郡甲佐町	熊本大学	
237	大峯															有	上益城郡甲佐町	熊本大学	
238	搭ノ平																上益城郡嘉島町		
239	後田	(2)															上益城郡城南町	豊崎晃一氏	
240	馬立																上益城郡豊野村	野田英治氏	

熊本県

第 11 表　九州北部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土	発掘	所在	所属	備考
241	立神ドトク	3	2													有	八代市宮原町	熊本県教委	
242	岩立C	(1)															八代市宮原町	熊本県教委	
243	桑鶴小森	(1)															阿蘇郡西原村大字桑鶴小森	西原村資料館	

大分県

244	田代A		(1)														日田市大鶴大字田代	日田市博物館	
245	田代B																日田市大鶴大字田代	日田市博物館	
246	二串西原															有	日田市大字二串	大分県教委 日田市立博物館	
247	萩尾		(1)														日田市大字北友田字萩尾	原田勝宏氏 日田市立博物館	
248	長者原B																日田市石井町大字原	原田勝宏氏	
249	松野原																日田市東有田町大字町野	原田勝宏氏	
250	一尺八寸山		(1)														日田市東羽田町	原田勝宏氏	
251	五馬大坪		5													有	日田郡天瀬町大字五馬市	天瀬町教委	船野型の 2 例は地点を異とする。
252	宇土	20	3	2							2					有	日田郡天瀬町大字桜竹	天瀬町教委	全て黒曜石
253	平作台																日田郡天瀬町大字出口	河津修吉氏	
254	烏ケ塚																日田郡天瀬町大字出口	河津修吉氏 原田勝宏氏	
255	見竹																日田郡天瀬町大字出口	〃	
256	曽田台																日田郡天瀬町大字出口	〃	
257	亀石山		(1)														日田郡天瀬町大字出口		
258	ノウサン																日田郡天瀬町大字塚田	大分県教委	
259	平草	32	3		1							○				有	日田郡天瀬町大字塚田	大分県教委	
260	塚田																日田郡天瀬町大字塚田	大分県教委 梶原出男氏	
261	桐ケ迫		(1)													有	宇佐市大字糸口山	大分県教委	他時期の包含層より
262	四日市		(1)														宇佐市大字四日市	宇佐市教委 子倉正五氏	
263	須山																宇佐郡院内町樋野字畑	院内町教委	
264	早水台	2	4(1)													有	速水郡日出町大字川崎早水	別府大学付属博物館蔵	
265	エコノグチ															有	速水郡日出町大字南畑	大分県教委	
266	天堤C		2													有	速水郡日出町大字藤原百合野	日出町教委	
267	山下ノ池																大分郡湯布院町大字湯平		

大分県　　第 12 表　九州北部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土	発掘	所在	所属	備考
268	下黒野															有	大分郡挾間町大字吉野下黒野	大分県教委	
269	雄城台		1													有	大分市大字玉沢字宮迫	大分県教委	弥生O 包含層より
270	丹生Ⅱ-H		1													有	大分市大字丹川字辻山	(財) 古代学協会・平安博物館	野岳型
271	丹生Ⅶ-D		2			1			2							有	大分市大字丹川字辻山	〃	作業面再生剥片2
272	政所馬渡	3	3		3										○	有	直入郡荻町大字政所	別府大学付属博物館	土器共伴 福井型MC
273	上岩戸	4	1	1													直入郡荻町大字桑木	〃	断面採集
274	三反田	(5)	(2)													有	直入郡直入町大字長湯字胡原	直入町教委	縄文O 包含層より全て黒曜石
275	前田Ⅲ		1												1	有	直入郡直入町大字長湯字胡原	直入町教委	土器は瓜形文土器
276	一丁田		(1)														大野郡大野町大字北園	佐藤勇治氏	
277	松木		(1)													有	大野郡大野町大字中原字松木	大野町教委	
278	花立	(2)															大野郡大野町大字宮迫字花立	綿貫俊一氏	
279	小牧A		○														大野郡大野町大字後田字牧原	〃　安藤英治氏	
280	小牧B	○	○	○						○						有	大野郡大野町大字後田字小牧	綿貫俊一氏	
281	宮地前	24 (0)	2 (5)	4 (2	1 (6							○	(2			有	大野郡大野町大字片島宮地前	綿貫俊一氏	
282	田尾		(1)														大野郡大野町大字片島字田尾	綿貫俊一氏	
283	安面		(5)										○				大野郡大野町大字後田	綿貫俊一氏	
284	木南切(榎津留)		(2)						(1)								大野郡清川村左右知榎津留(木南切)	別府大学付属博物館	
285	岩戸	3														有	大野郡清川村大字臼尾岩戸	清川村教委	
286	上下田	77	17	7	2	2				1	1	7		2		有	大野郡三重町大字川辺上下田	別府大学付属博物館	
287	百枝小学校		1													有	大野郡三重町大字百枝	大分県教委	
288	原田第Ⅰ		(3)													有	大野郡千歳村大字原田	別府大学付属博物館	
289	高畑	○	(5)														大野郡千歳村大字高畑	中野宏一氏	
290	松山	124	10 (14)	11					1			5	○			有	大野郡犬飼町大字大寒字松山	別府大学付属博物館	
291	市ノ久保	○	約 120	○	○				3	○	○	○	○			有	大野郡犬飼町大字大寒市ノ久保	犬飼町教委	
292	長谷		(1)													有	大野郡犬飼町大字大寒字長谷	大分県教委	
293	奥畑Ⅰ		(2)														大野郡野津町大字東谷字奥畑	別府大学付属博物館	この他ブランクあり
294	田良原B		(1)														大野郡野津町八里合田良原	綿貫俊一氏	

大分県

第 13 表　九州北部　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土	発掘	所在	所属	備考
295	聖岳洞窟	6	2	2												有	南海郡本庄村大字字津々	別府大学付属博物館	全て 黒曜石
296	田村	1														有	大野郡朝地町大字一万田	朝地町教委	
297	本城野		(4)																
298	尾畑		(1)													有		大分県教委	他時期の 包含層より

宮崎県

299	岩土原	○	6													有	東臼杵郡北方町笠下	南九州短期大	
300	赤木	24	6													有	延岡市舞野町	延岡市教委	
301	吉野		2													有	延岡市吉野町	延岡市教委	
302	百町原															有	日向市美々津町	日向市教委	
303	寺迫		(1)														東臼杵郡東郷町大字山陰田	県総合博物館	
304	鳳秩																児湯郡都農町大字川北	県総合博物館	
305	椎原		(1)														児湯郡川南町大字川南	県総合博物館	
307	住吉B		(1)														児湯郡川南町大字川南	川南町教委	
308	谷の口		(2)														児湯郡川南町大字川南	川南町教委	
309	白髭		(1)														児湯郡川南町大字川南	県総合博物館	
310	番野地		(1)														児湯郡川南町大字川南	県総合博物館	
311	大久保（通山）		(7)														児湯郡川南町大字平田	県総合博物館	
312	宝財原																西都市大字南方	県総合博物館	
313	東原																西都市大字穂北	県総合博物館	
314	田木																西都市大字穂北	県総合博物館	
315	鍛冶																西都市大字上三財	県総合博物館	
316	松本		(3)														西都市大字清水	県総合博物館	
317	大口川																西都市大字右松	県総合博物館	
318	鳳坂																児湯郡新富町大字新田	県総合博物館	
319	西畦原	(4)	(3)														児湯郡新富町大字別府	県総合博物館	
320	東畦原		(3)														児湯郡新富町大字音明寺	県総合博物館	
321	瀬戸口	3	1													有	児湯郡新富町大字音明寺	新富町教委	
322	迫分																児湯郡新富町大字穂ケ 牟田	県総合博物館	
323	川床																児湯郡新富町大字新田上深田	県総合博物館	
324	一丁田		(1)														児湯郡新富町大字新田字大溝	県総合博物館	
325	湯ノ宮																児湯郡新富町大字新田	県総合博物館	

第 14 表　九州北部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土	発掘	所在	所属	備考
326	湯風呂																児湯郡新富町大字新田字城田	県総合博物館	
327	溜水															有	児湯郡新富町大字新田	県埋文ｾﾝﾀｰ	
328	陣ノ内																児湯郡木城町大字椎木	県総合博物館	
329	新山																児湯郡高鍋町大字上江	県総合博物館	
330	中尾原																児湯郡高鍋町大字上江	県総合博物館	
331	雲雀山																児湯郡高鍋町大字上南高鍋	県総合博物館	
332	二反ノ原																東諸県郡高岡町五町	県総合博物館	
333	法華岳		(1)														東諸県郡国富町大字深年	県総合博物館	
334	井野		(6)													有	東諸県郡国富町大字八代北俣	県埋文ｾﾝﾀｰ	畦原型
335	六野原		(2)														東諸県郡国富町大字八代北俣	県総合博物館	
336	六日町																東諸県郡国富町大字本庄	県総合博物館	
337	亀ノ甲																東諸県郡国富町大字三名	県総合博物館	
338	開拓		(2)														東諸県郡国富町大字三名	県総合博物館	
339	船野		26													有	宮崎郡佐土原町大字西上那珂	別府大付博物館	
340	久保山		(1)														宮崎郡佐土原町大字上田島	県総合博物館	
341	東城原第２	(2)	(5)													有	西諸県郡野尻町大字紙屋	野尻町教委	

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝楔器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝礫器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
磁＝石磁、土＝土器

佐賀県　補遺

第 15 表　九州北半　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土	発掘	所在	所属	備考
ホ1	雲透Ａ		○									○		○			唐津市尾形石字前田	県教委	
2	兎田	○										○					唐津市枝去木野中兎田		
3	猿口	○		○								○					唐津市枝去木馬岳字猿口		
4	黒龍	○	○									○					唐津市枝去木字黒竜		
5	八幡溜中島		○									○					唐津市佐志字八幡		
6	辻		○									○					唐津市枝去木矢倉		
7	笹の尾南	○	○	○								○		○			唐津市佐志字笹野尾		
8	一本柿	○		○										○			唐津市佐志字日焼		
9	一本松南		○									○					唐津市佐志田佐志南一本松		
10	横掛田	○												○			唐津市佐志字横掛田		
11	炮烙溜	○										○		○			唐津市佐志字横掛田		
12	犬の馬場	○															唐津市佐川内字犬の馬場		
13	熊ノ峰北	○	○									○		○			唐津市熊ノ峰		
14	殿の浦岡Ａ	○										○					東松浦郡呼子町字殿の浦岡		
15	井樋田Ｃ		○														東松浦郡鎮西町波戸字大平		
16	古里	○										○		○			東松浦郡鎮西町名護屋方柄		

佐賀県　補遺　　第 16 表　九州北半　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	礫	土	発掘	所在	所属	備考
ホ17	中川原	○		○						○		○					東松浦郡鎮西町加倉字中川原	湖戸内俊春氏	
18	中川B		○														東松浦郡鎮西町加倉字中川原		
19	鹿原	○	○									○		○			東松浦郡鎮西町葛籐字早田	湖戸内俊春氏	
20	丸林	○												○			東松浦郡鎮西町石宮字丸林	県教委	
21	八床入口	○										○		○			東松浦郡鎮西町葛籐字広田		
22	畦木場B	○		○								○					東松浦郡鎮西町石宮畦木場	湖戸内俊春氏	
23	早田	○										○		○			東松浦郡鎮西町葛籐字早田	原口●春氏 湖戸内俊春氏	
24	曽原	○	○			○						○					東松浦郡鎮西町高野字原	湖戸内俊春氏	
25	花の木	○										○		○			東松浦郡玄海町石田字花の木		
26	日の出松溜A	○												○			東松浦郡玄海町有浦上日出松		
27	三枚溜北北	○				○						○		○			東松浦郡玄海町牟形字稗田		
28	大島溜東	○		○													東松浦郡玄海町田代字水谷		
29	大島東第3	○		○		○											東松浦郡玄海町牟形字大島		
30	納所小北部遺跡群	○															東松浦郡肥前町大字納所硝気		
31	納所小北部	○		○										○			東松浦郡肥前町大字納所杉山		
32	入野東部	○												○			東松浦郡肥前町入野コッ鼓		
ホ33	犬頭溜北部周辺		○	○								○					東松浦郡肥前町畑賀字大野		
34	犬頭溜北部周辺	○												○			東松浦郡肥前町入野字新田辻		
35	塔木池西	○	○											○			東松浦郡肥前町新木場字山頭		
36	サカセ溜1	○	○											○			東松浦郡肥前町万賀里川平石	湖戸内俊春氏 小野博氏・県教委	
37	八折栄		○											○			東松浦郡肥前町万賀里川八折	湖戸内俊春氏	
38	小萬1	○		○								○		○			東松浦郡肥前町新木場字小萬	湖戸内俊春氏	
39	サカセ溜4	○	○											○			東松浦郡肥前町万賀里川上ノ川	湖戸内俊春氏 小野博氏・県教委	
40	上倉溜周辺	○										○					東松浦郡肥前町新木場萬田代	小野博氏・県教委	
41	小太郎	○										○					東松浦郡肥前町万賀里川小太郎		
42	八斗蒔溜南部第II	○				○								○			東松浦郡肥前町新木場高地木場		
43	八斗蒔溜南部第I	○		○										○			〃		
44	八斗蒔III	○		○								○		○			東松浦郡肥前町新木場八斗		

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝磨器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
礫＝石礫、土＝土器

（　）内は、表面採集点数をあらわす。

中国地方の細石刃文化

光石鳴巳

1　研究の経過

1949･50年　豊　元国・桑田五郎、広島県宮脇遺跡の資料を報告。中国地方ではじめて細石器遺跡の可能性を指摘する。

1954年　鎌木義昌らによる岡山県鷲羽山遺跡の調査。

1965年　鎌木義昌らがそれまでの研究の到達点を総括（『日本の考古学』など）。

1978年　山口県下の研究者の採集資料が『周陽考古学研究所報』Ⅰとして報告される。

1983年～　山口県旧石器文化研究会により、宇部台地を中心とした旧石器時代遺物が報告される（『古代文化』誌上）。

1984年～　岡山県恩原遺跡群の発掘調査。湧別技法による細石核、荒屋型彫器などを指標とする北方系の細石刃石器群が確認される。

2　遺跡の分布

A　日本海沿岸　宍道湖周辺の出雲平野に４遺跡が点在する。いずれも単独の出土である。

B　中国山地　吉井川源流域の恩原遺跡群、旭川上流の蒜山高原の遺跡群など、中国脊梁山脈の南に広がる高原地形に占地する傾向が強い。上の両者については安定した層序に恵まれ、ＡＴ降灰以前から細石刃文化期にわたる各期の石器群が層位的に知られるという共通点もある。石器群の内容については、恩原遺跡を除いて表面採集あるいは単独出土が主であり、不明な点が多い。

C　備讃瀬戸沿岸　海岸近くに位置する遺跡、島嶼部の遺跡、やや内陸に位置するものの三者を含む。立地については、いずれも山頂あるいは丘陵・台地上である。しかし、当時の海水面が現在より低く、備讃瀬戸が陸化していた可能性の高いこと、内陸部の遺跡についても沖積平野に臨む位置を占めることを考え併せると、いずれの場合も本来は旧河道を望む山塊・丘陵等に位置したものと考えられる。この地域では９遺跡をあげることができ、中国地方にあっては宇部台地に次ぐ分布密度となっている。

D　宇部台地　西日本有数の海岸段丘が発達しており、こうした段丘上、標高10～30mに多くの遺跡が立地する。宇部台地及びその周辺に位置する遺跡は22箇所にのぼり、中国地方随一の遺跡数である。いずれも数百点の細石刃、数十点の細石核が採集されている南方遺跡、長桝遺跡第１地点などが台地南部の沢波川流域に位置しており、東の浜田川流域とともに、この地域の分布の中心を占めるといって良い。

３　細石刃石器群

A　日本海沿岸　いずれも単独資料であり、詳細は不明である。上神(かずわ)出土のものはホロカ型、あるいは船野型の範疇でとらえられる舟底形細石核である。また出雲平野のものは、タテチョウ遺跡のものが野岳・休場型、その他は船野型に含まれるものと思われる。石材については首谷遺跡、勝木谷(かつぎだに)遺跡のものが玉髄製、その他は黒曜石製である。

B　中国山地

恩原遺跡群　沢を隔てた第１地点、第２地点の双方で、湧別技法による細石核、荒屋型彫器などで構成される石器群が確認されている。両地点の内容は基本的に共通したものであるが、第１地点にのみ、いわゆる「角二山型」の掻器（第５図９）と周辺加工尖頭器（第５図８）を含む。細石刃、細石核、削片、および彫器は玉髄、瑪瑙を主とし、削器に珪質頁岩製のものが多い。

C　備讃瀬戸沿岸

鷲羽山遺跡　備讃瀬戸沿岸地域に特有の、剥片を素材とする板状の細石核を主とする。大部分はハリ質安山岩製であるが、一部に黒曜石製のものが含まれる。包含層の遺存の悪さから、細石刃、細石核以外の共伴遺物は不明である。

D　宇部台地

南方遺跡　全て表面採集であるが細石核46点が報告されており、細石刃も約350点に達する。細石核の形態は野岳・休場型に属するものが多く、他に船野型、井島Ⅱ型とされるものがある。細石核の５～６割、細石刃の約８割を黒曜石が占め、次いで水晶、ハリ質安山岩が多く、頁岩、安山岩も少数ながら使用されている。野岳・休場型に黒曜石を、船野型、井島Ⅱ型に黒曜石以外の石材を用いる傾向が強いことが指摘される。細石核に使用された黒曜石

の原産地推定の結果では、29点のうち腰岳産12点、淀姫系７点、松浦産２点など、北部九州産が主体である。

長桝遺跡第１地点　15点の細石核が報告されており、細石刃も約400点にのぼる。黒曜石が多用されており、細石刃の９割以上を占めるほか、安山岩、ハリ質安山岩、水晶、チャートなどが使用されている。表面採集資料は野岳・休場型細石核を主とするが、1984年に行われた発掘調査においては分割礫を素材にすると思われるやや特殊な形態の細石核（第21図48）が得られている。黒曜石製細石核の原産地推定の結果、８点のうち腰岳系６点、大崎産１点などとなっている。

４　細石刃文化の様相

中国地方における細石刃文化期の資料は、その多くが表面採集、あるいは単独の出土であり、石器群の全体像の把握できる資料は極めて限られている。この限られた条件の中で細石核の形態について概観すると、野岳・休場型細石核を主体とし、これに船野型細石核が加わるという状況である。しかし、日本海沿岸、中国山地、備讃瀬戸沿岸、そして宇部台地というそれぞれの地域別に見た場合、様相は必ずしも一様ではない。

まず日本海沿岸であるが、出雲平野の４点の細石核については、野岳・休場型が１点、他は船野型、あるいはそれに近似するものと考えられる。玉髄・黒曜石という在地石材の利用が特徴的と言えようか。また、唯一鳥取県で採集されている上神の細石核は、ホロカ型、船野型のいずれの範疇で理解すべきものか決し難いが、ホロカ型として位置づける方が妥当なように思われる。

中国山地についても、良好な出土状況に恵まれた恩原遺跡群を除くと資料数が限られており、不確定要素が多い。その恩原遺跡群のものは、明らかに北方系の、いわば外来の石器群で異質なものである。これについては次節で詳述したい。蒜山高原の遺跡群では船野型が優勢のようであり、野原早風Ａ遺跡では円錐形に近い野岳・休場型細石核が認められ、いずれも黒曜石製である。樽床（たるとこ）遺跡群のものについては他に類例を求め難く、細石刃文化に属するものかどうかも不明確な資料である。さらに冠遺跡Ｃ地点のものは、剥片を素材とするいわゆる井島Ⅱ型に類するもので安山岩製。このように中国山地の資料は、他地域との関連の中で点々と遺跡が残された状況を示しており、交通ルート上の遺跡としての意味合いが強いといえよう。

備讃瀬戸地域は、ハリ質安山岩を主要な石材とする点で他の地域とは全く様相を異にする。細石核は大多数が剥片素材で、石核調整を施した上で、板状の原形の小口面側から細石刃剥離作業を行うものが主体である。岡山県側に属する諸遺跡では内容不詳のものが多く、これらについては、香川県側の島嶼部の遺跡群との関連の中で論ずる必要のあることは言うまでもない。

中国地方で最も遺跡の集中する宇部台地では、大部分が野岳・休場型細石核と船野型細石核である。南方遺跡に代表されるように、前者には黒曜石が多用され、それ以外のものには安山岩、水晶などその他の石材が使用される傾向にある。安山岩を多用するナイフ形石器文化期に対し、細石刃文化期に至って黒曜石の使用頻度が急激に増加する傾向にあるという指摘もあり、南方遺跡、長桝遺跡第１地点における黒曜石の産地同定結果も考慮すると、この地域の細石刃石器群が北部九州との強い関連をもって成立、展開したものと考えて良いであろう。

中国地方の細石刃文化の様相を地域ごとに述べてきたが、いずれの場合においても、その資料の大部分は表面採集によるものであるか、発掘調査による場合でも、大半は単独の出土、もしくはナイフ形石器など明らかに時期を異にする遺物と混在する形で出土しているという資料の限界がある。このことは、多くの遺跡の集中する宇部台地についても例外ではなく、実質的に細石刃、細石核の他は打面再生剥片などごく一部の器種を抽出できるに留まり、器種組成などについては全く不明というのが実情である。

５　細石刃文化研究の課題

断片的な資料が多いこと、層位的条件に恵まれないことなどから、その様相が充分に把握できない中国地方の細石刃文化資料の中にあって、恩原遺跡群の資料の重要性は言うまでもないであろう。繰り返しになるが、その内容は、湧別技法による細石核、荒屋型彫器などで構成されるものであり、北方系細石刃文化の脈絡の中で議論すべきものであることは明らかである。

ここでは、この恩原遺跡群での使用石材に注目したい。第１地点・第２地点の双方で極めて似通った内容を持ち、瑪瑙・玉髄と、一部に珪質頁岩、黒曜石が用いられている。細石刃、細石核、および削片類といった細石刃生産に関わる器種と彫器には瑪瑙・玉髄が主に用いられており、さらに両面調整素材の製作工程に対応する剥片が多数残されていて、頻繁な接合関係が認められる。一方、珪質頁岩製のものには大形剥片を用いた削器が特徴

的に認められる他、細石刃、細石核がある場合にも、母岩としてはそれ単独か、あるいは極めて少数の個体に限定される。黒曜石については、この石器群に伴うことの確実なものが細石核１点のみのため、ここでは除外しておく。

さて、これらの石材の原産地が特定できるわけではないが、珪質頁岩については、山間部を含め中国地方ではその産地は知られておらず、東北・北陸などとの関連が想起される。そうした目で改めて珪質頁岩製の削器を観察すると、稜線の摩耗したものがいくつかあり、これらの石材が製品の状態で携行され、搬入されたものであることは容易に推定できる。一方、瑪瑙・玉髄の産地としては出雲平野が比較的有名であるし、日本海沿岸、中国山地などの何箇所かで採取できるようである。すなわち、恩原の石器群を残した集団は、比較的消耗度の低い削器類は当初製作した珪質頁岩製のものを一定期間保持しながら、絶えず消耗する細石刃や彫器の製作には、ある時点からルート上もしくはその近在で採取できる、珪質頁岩に類似した石材で補完しながら移動生活を行っていたものと考えてよいであろう。もちろんここで言う「類似」とは岩石学的な意味合いであろうはずがなく、「てざわり」のようなものであったに違いない。

こうした使用石材のあり方を、湧別技法を持つ他の北方系細石刃石器群と比較した場合、頁岩の原産地から遠隔地に位置するという条件は同じくしながらも、９割以上を珪質頁岩が占める北関東の石器群とは対照的である。しかし、そうした近在の石材に転換しながらも、中部高地の石器群と異なり、石器製作技術、器種組成などの面で本来備えていたであろう要素はほとんど失われていない。つまり恩原の石器群は、在地石材に依存する中部高地の石器群よりも、東北地方の石器群本来の姿に近い様相を示しているといえるであろう。

さらに周辺に目を転じると、近畿西部の誉田白鳥（こんだはくちょう）遺跡、南大塚、備讃瀬戸の羽佐島（わさじま）遺跡など、北方系石器群の波及を示す資料が点在する。そこにみられる製作技術はむしろバリエーションとして理解されるものと思われるが、誉田白鳥の玉髄、南大塚の黒曜石といった石材の選択は恩原でのあり方に通じるものを感じさせる。近在で安山岩以外の石材の入手の困難になる羽佐島に至って、ついに在地石材への依存に傾くが、これについては、むしろ在地集団による技術の受容、模倣という状況も考慮する必要があろうか。こうした状況からは、これらの石器群を残した集団の珪質頁岩への指向性の強さが再認識でき、また、それに少しでも近い石材を用いようとする意図が見て取れるのである。また、そもそも近畿地方は細石刃文化期の資料に乏しい傾向にあることからすると、誉田白鳥、南大塚の資

料をより積極的に評価しても良いであろう。そうしてみると、北方系の集団が近畿・中国といった地方に、意外に頻繁にその足跡を記していたのではないかとの推定も可能かもしれない。

それでは、こうした外来系の石器群に対置できる在地の石器群とは、はたしてどのような石器群であろうか。野岳・休場型細石核を主体とし、一部に船野型を含むあり方が宇部台地で指摘でき、中国山地、日本海沿岸も同じ枠組みで認識できるかもしれない。この細石核の二型式が共伴関係にあるのか、時間差を持つものなのかについては、こと中国地方においては全く決め手に欠けるというのが実情である。一方、備讃瀬戸の石器群が、ハリ質安山岩という特定の石材との結び付きもあってか独自の様相を示すようにも見えるが、その位置づけは不確定である。備讃瀬戸は層位的条件には恵まれず、宇部台地でも現状でみる限り良好な発掘資料には乏しい。そうした中で、中国山地は良好な条件下での石器群検出の可能性があり、北方系石器群の波及の様相を評価する上でも、ここでの在地系石器群の実態の解明が期待されるところである。

6　主要文献

稲田孝司・絹川一徳・光石鳴巳 1992「西日本の湧別技法」『岡山大学文学部紀要』第18号

鎌木義昌・高橋　護 1965「瀬戸内地方の先土器時代」『日本の考古学』Ⅰ 先土器時代

木村元浩 1988「先土器時代の山口地方　一遺跡の分布と立地一」『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅵ

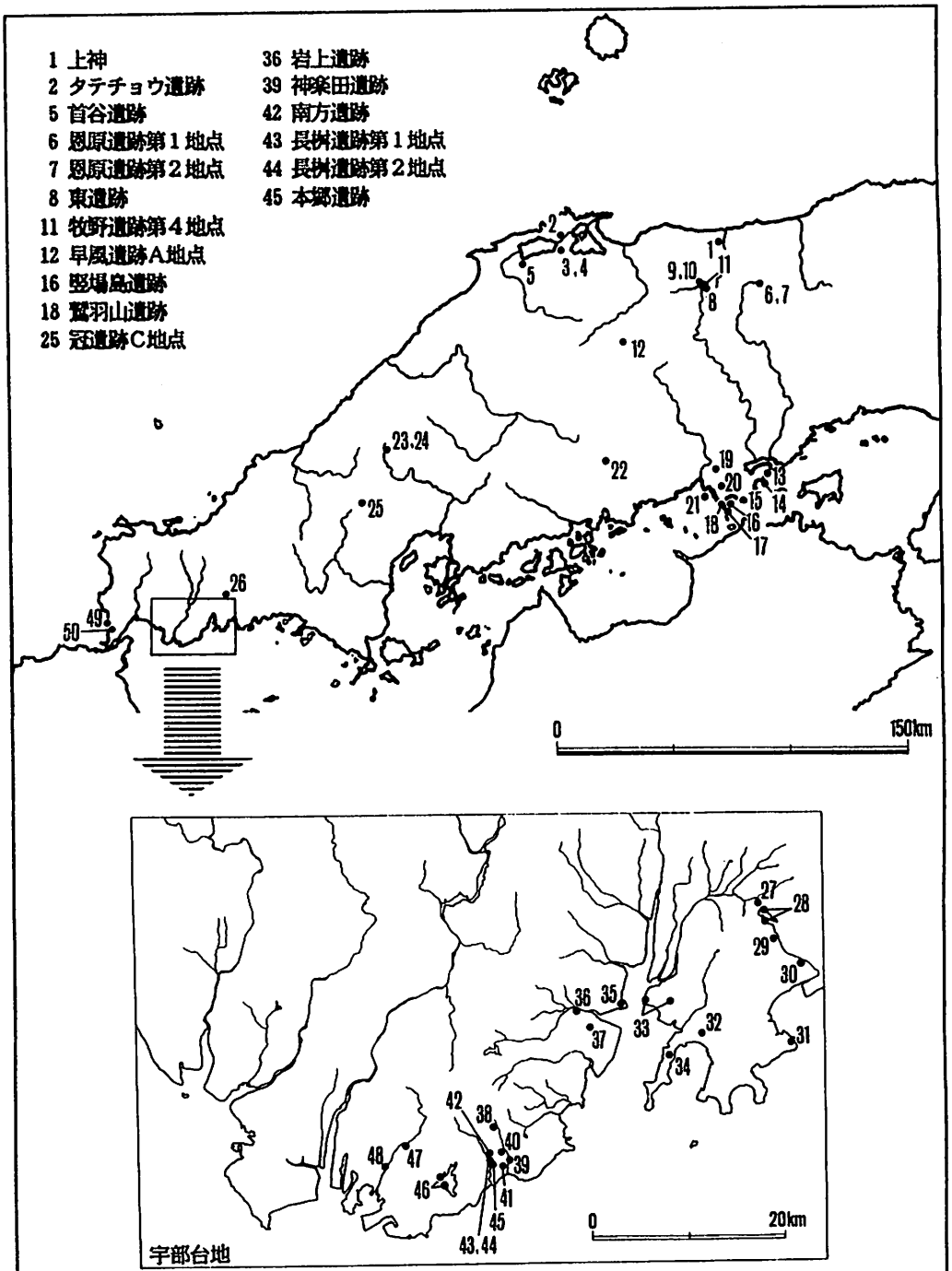
西村尋文 1983「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術の検討」『旧石器考古学』26

松浦五輪美 1993「西南日本の細石刃文化について　一特に「野岳・休場型」，「船野型」細石核を中心に一」『考古論集　一潮見 浩先生退官記念論文集一』

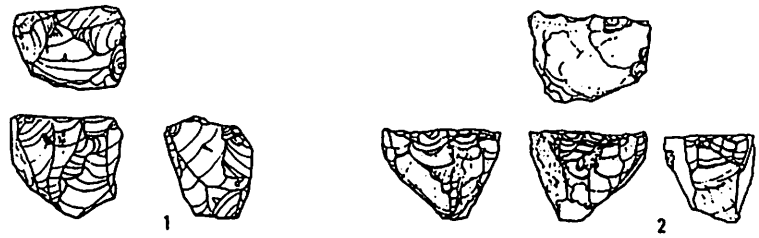
安川豊史 1987「先土器時代」『岡山県の考古学』

山口県旧石器文化研究会 1983「宇部台地における旧石器時代遺跡(1)」『古代文化』第35巻第12号

湯村　功 1992「島根県内の旧石器時代・縄文時代草創期資料について」『旧石器考古学』44

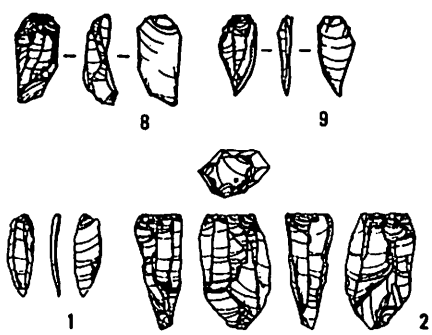


第１図　中国地方の細石刃文化遺跡



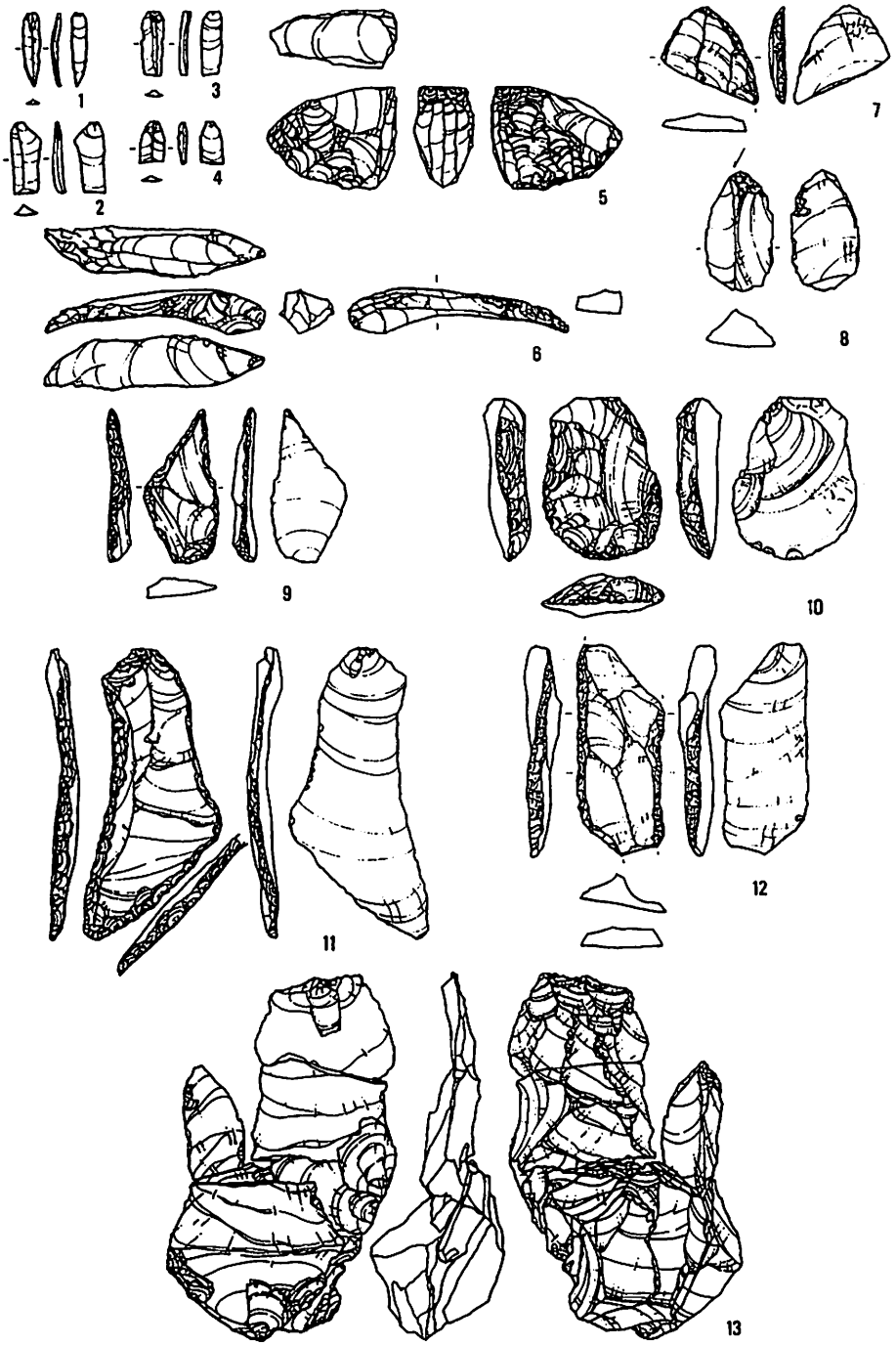
第2図　出雲平野　1:タテチョウ遺跡(2)　2:首谷遺跡(5)

第3図　中国山地　蒜山高原
1～3:東遺跡(8)
4～7:牧野遺跡第4地点(11)
8・9:戸谷遺跡第2地点(9)



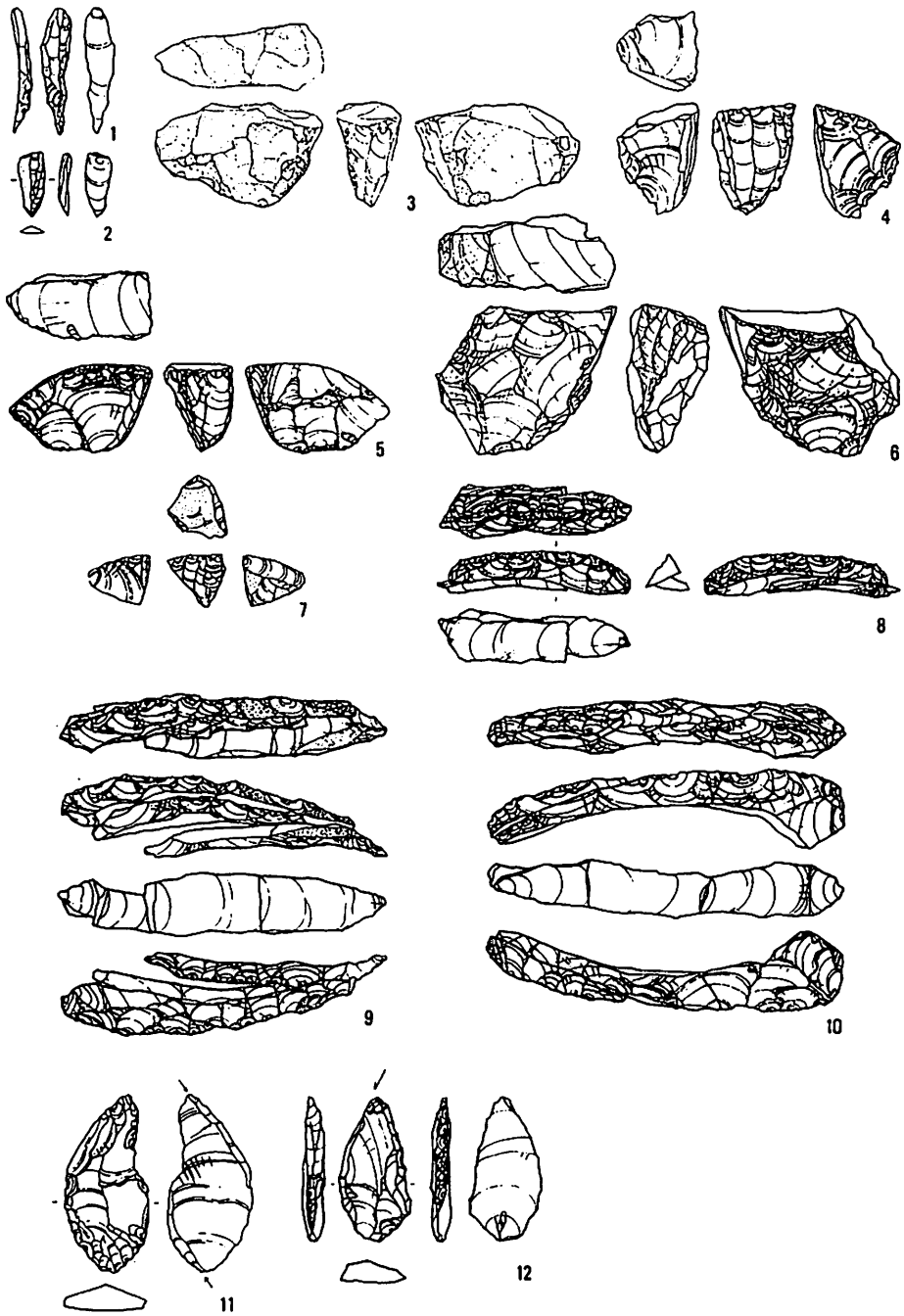
第4図　中国山地　野原遺跡群早風遺跡A地点(12)

0　(1:2)　5cm



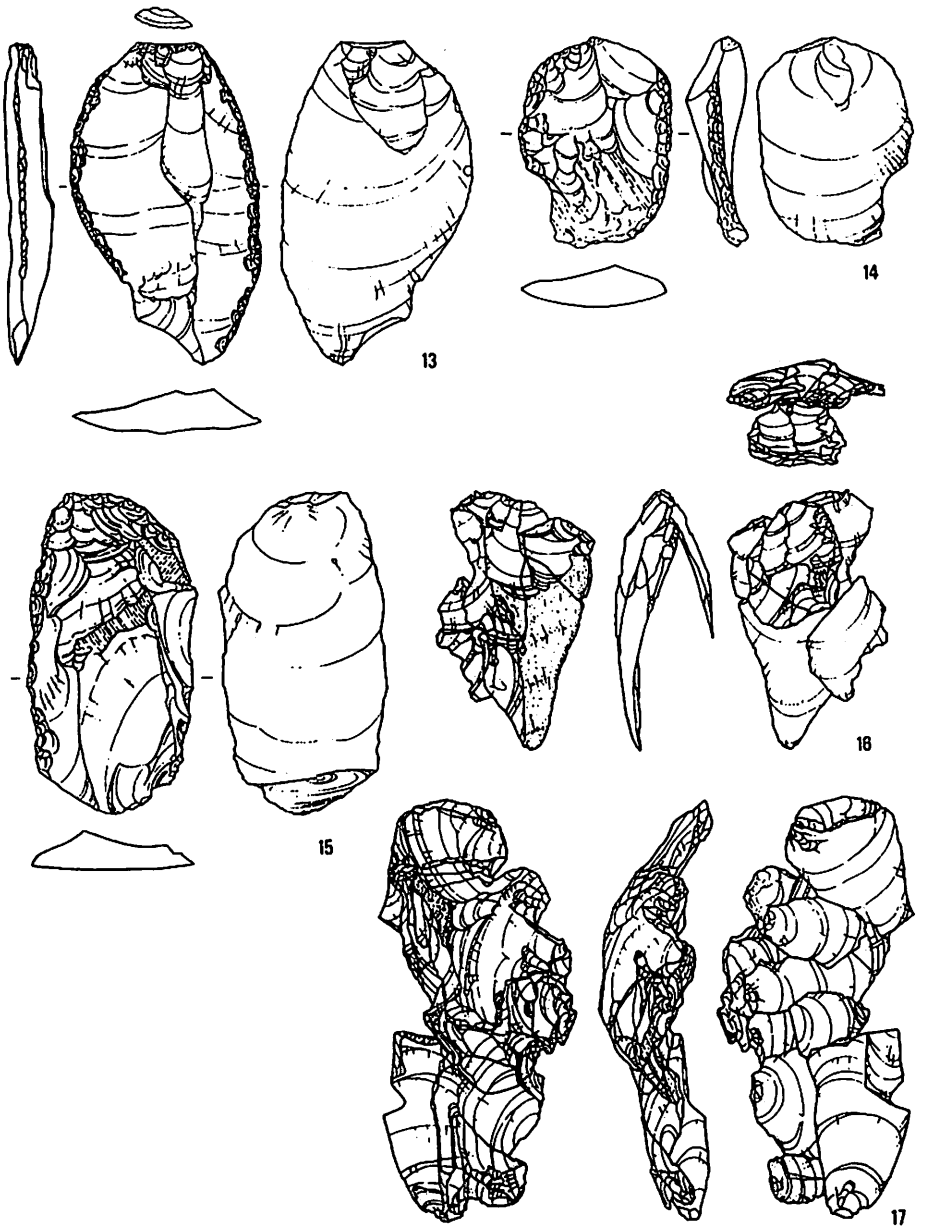
第5図　中国山地　恩原遺跡第1地点(6)

0　(1:2)　5cm



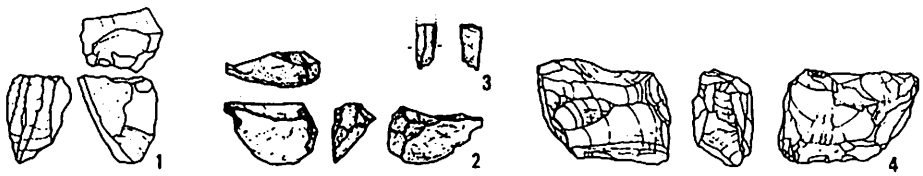
第6図　中国山地　恩原遺跡第2地点(7)　－その1－

0　(1:2)　5cm

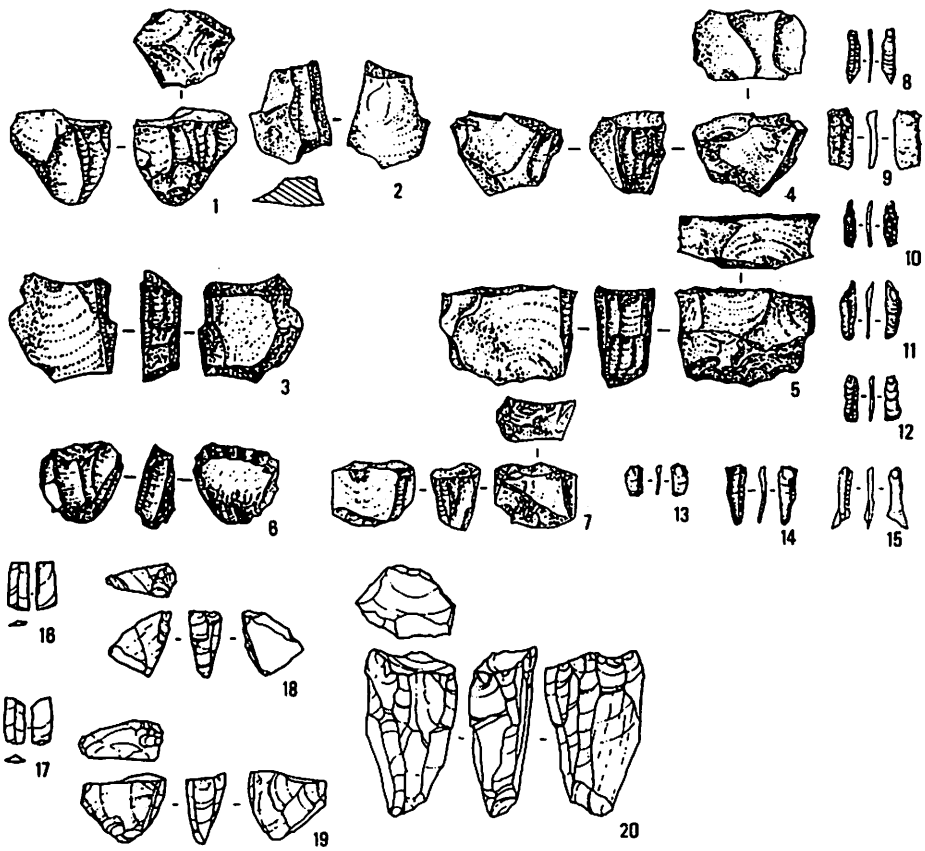


第7図　中国山地　恩原遺跡第2地点(7)　ーその2ー

0　(1:2)　5cm



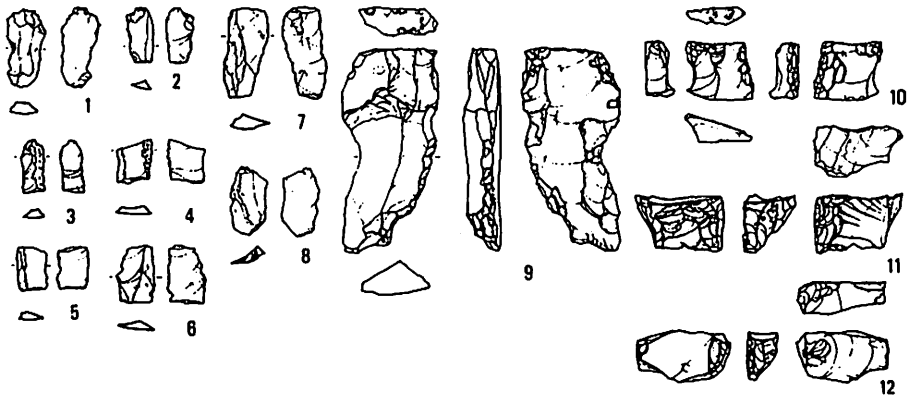
第8図　備讃瀬戸沿岸
1:出崎遺跡(14)　2・3:竪場島遺跡(16)　4:釜島遺跡(17)



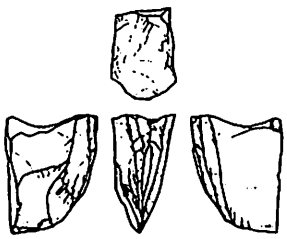
第9図　備讃瀬戸沿岸　鷲羽山遺跡(18)
1～5,8～12:B地点　7・15:B北地点　6・13・14:C北地点

第10図　備讃瀬戸沿岸　曽原西(20)

0　(1:2)　5cm

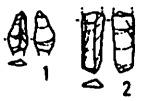


第11図　中国山地　樽床遺跡群
1～6：C地点(23)　7～11：G地点(24)
12：地点不明

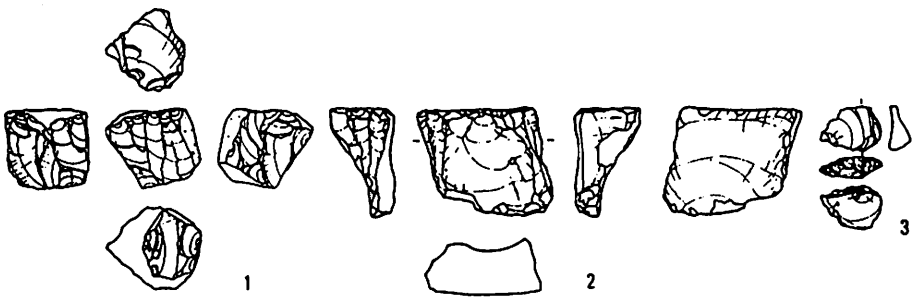


第12図　中国山地　冠遺跡C地点(25)

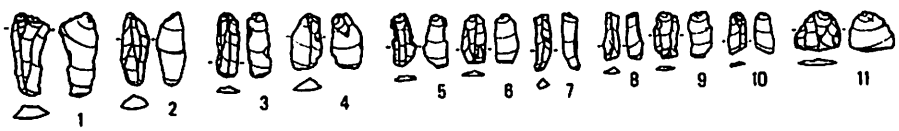
第13図　吉田遺跡(26)



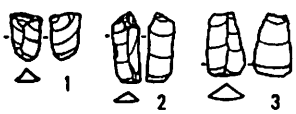
第14図　宇部台地　西吉沢遺跡(38)



第15図　宇部台地　神楽田遺跡(39)

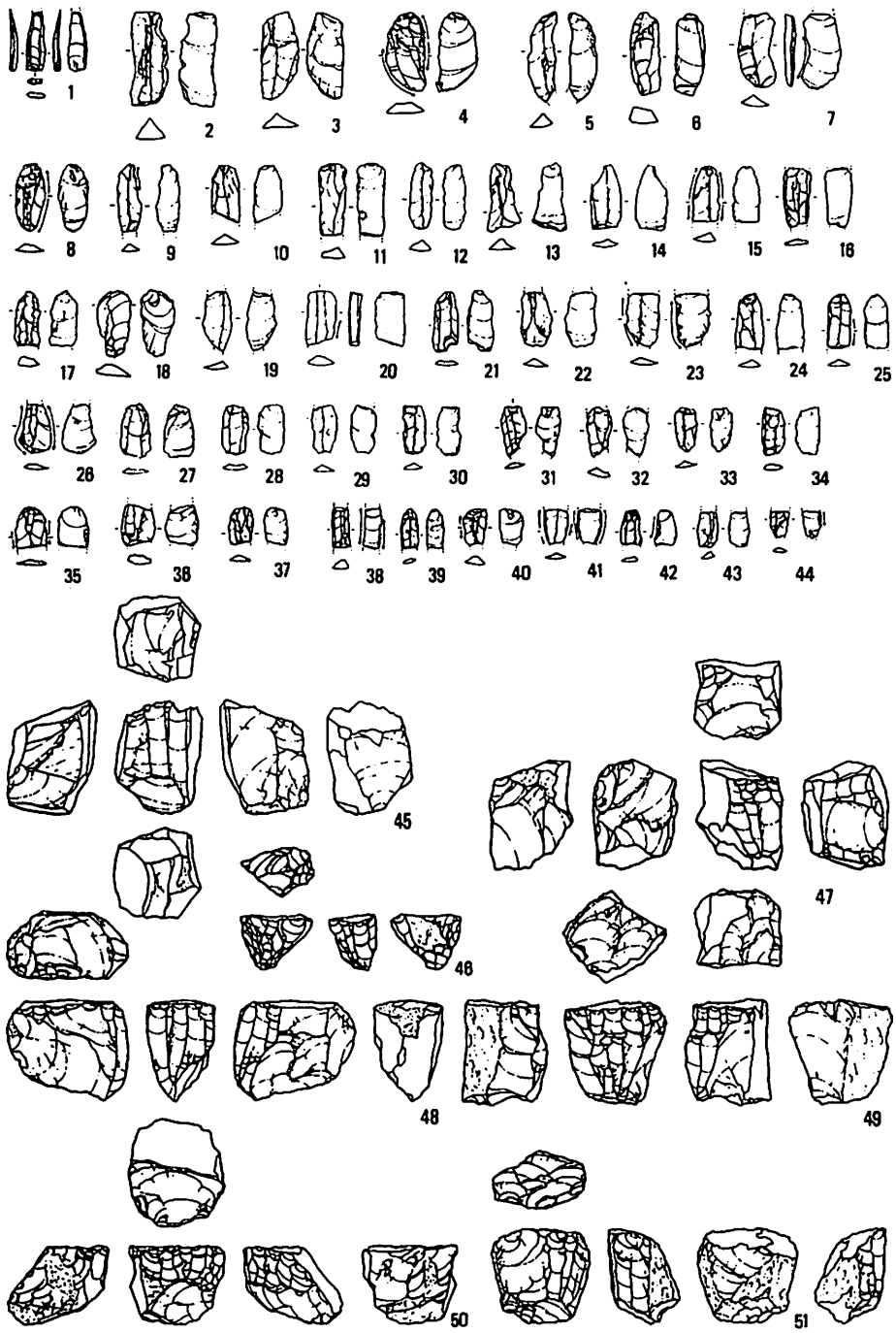


第16図　宇部台地　上ノ原遺跡(40)



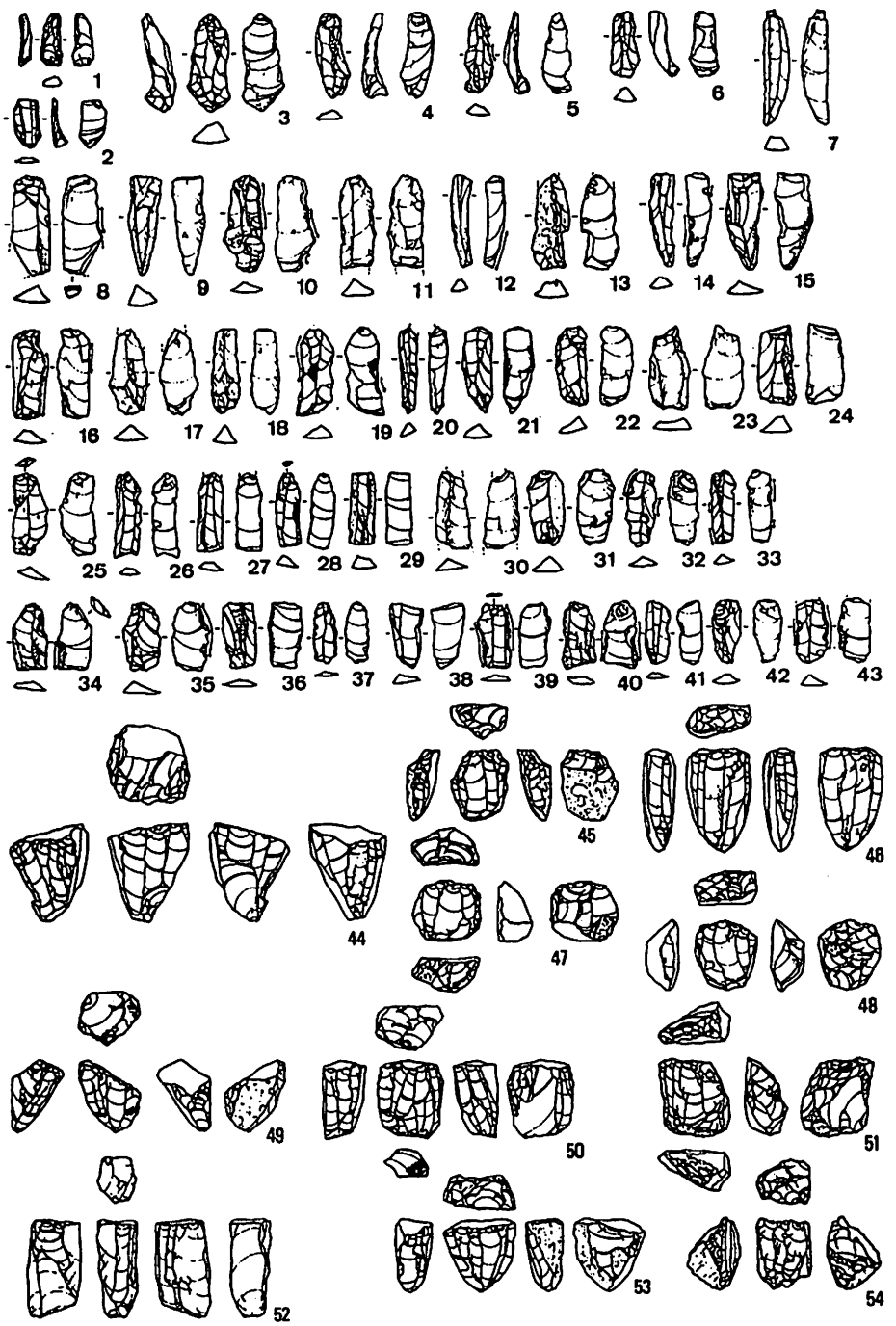
第17図　宇部台地　白土遺跡(41)

0　(1:2)　5cm



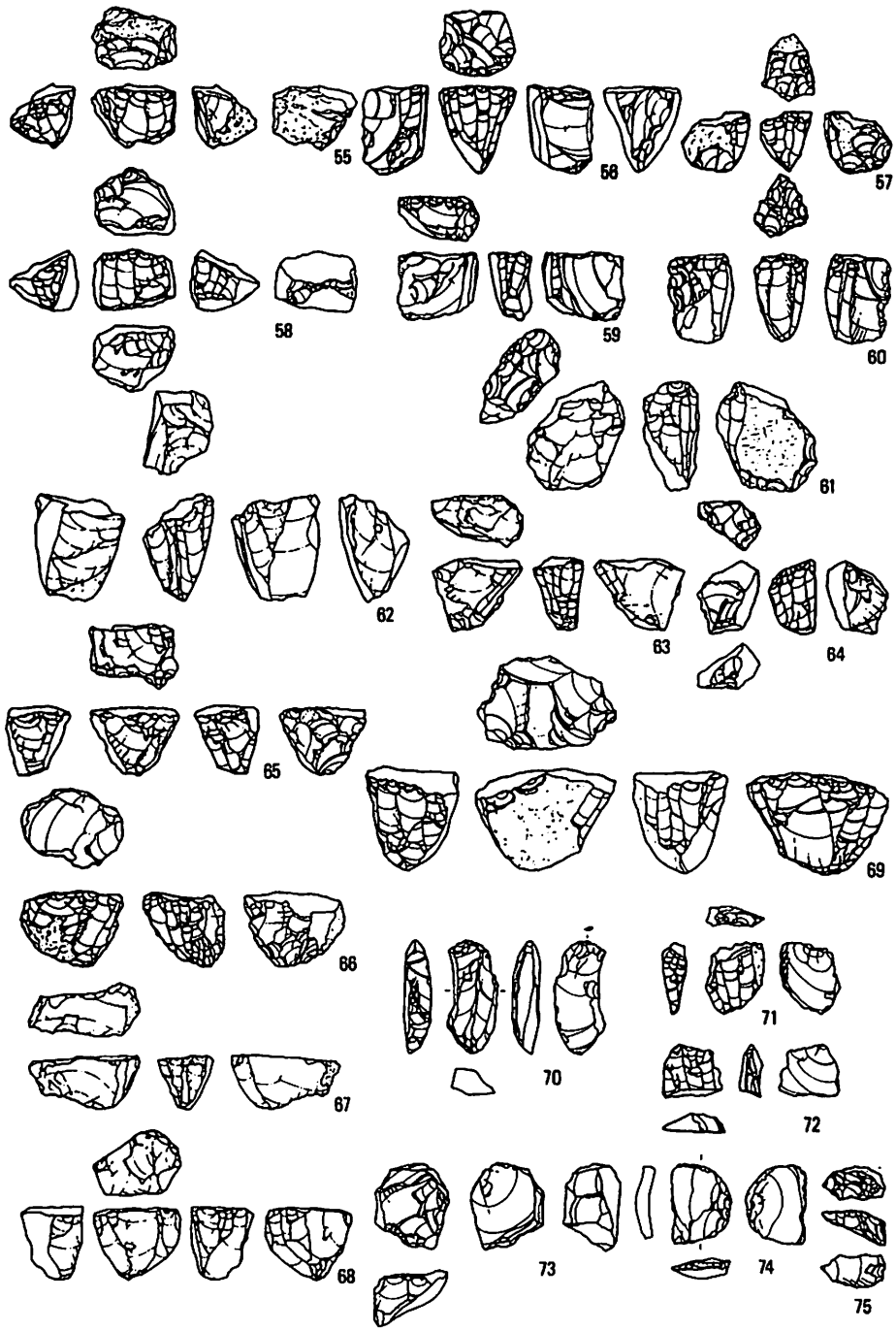
第18図　宇部台地　岩上遺跡(36)

0　(1:2)　5cm



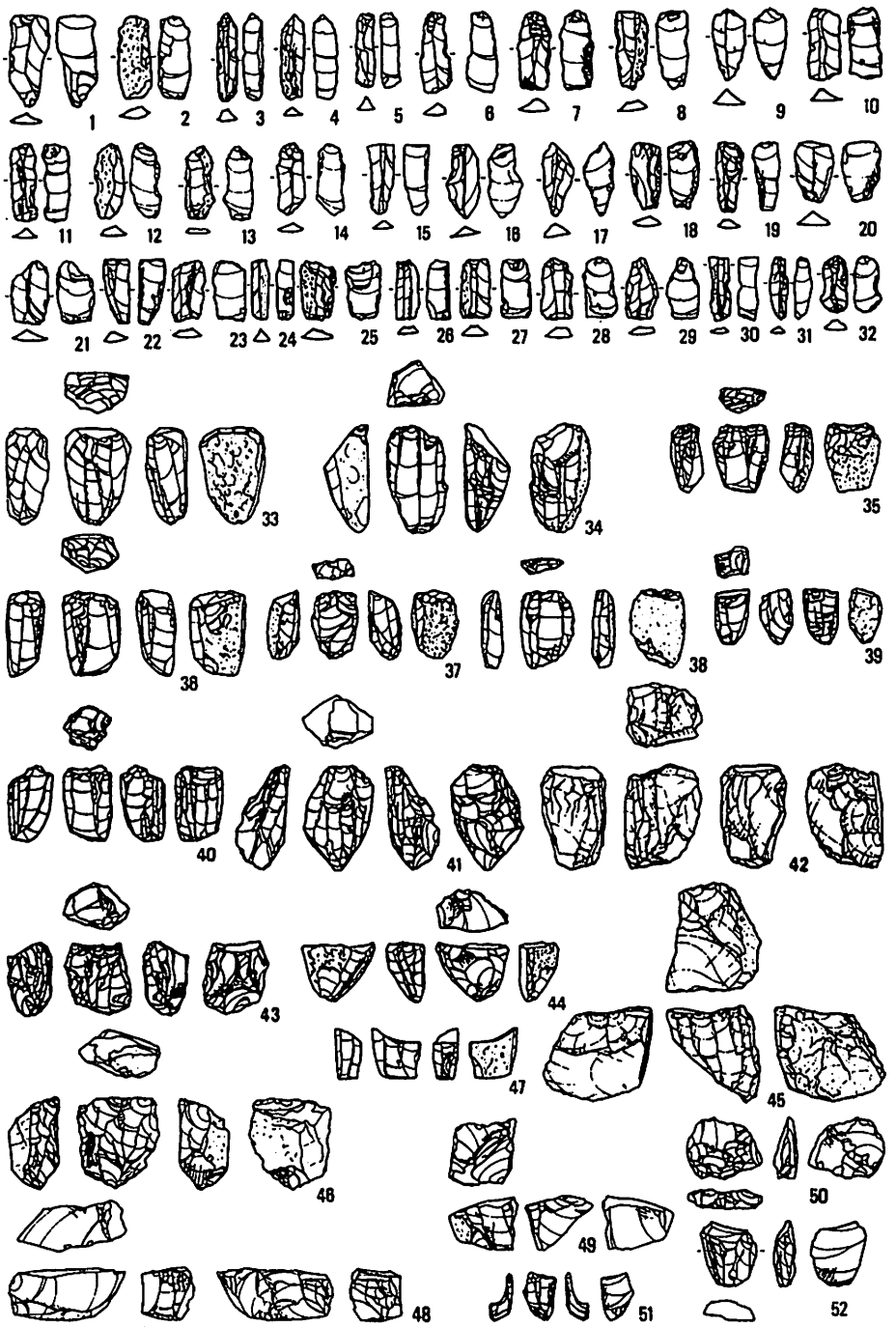
第19図　宇部台地　南方遺跡(42)　－その１－

0　(1:2)　5cm

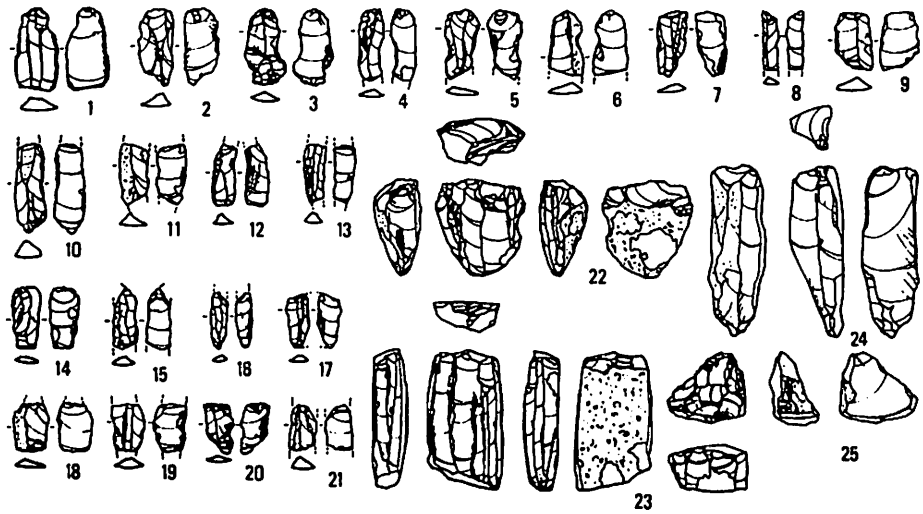


第20図　宇部台地　南方遺跡(42)　ーその２ー

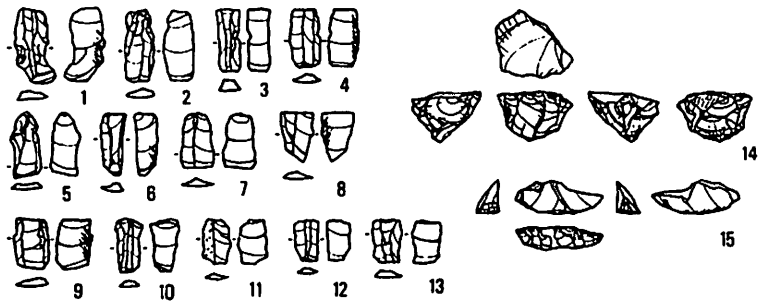
0　(1:2)　5cm



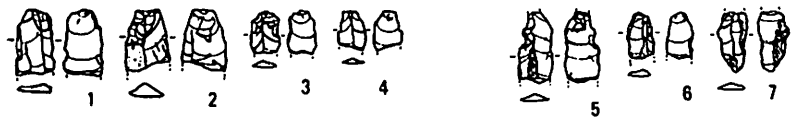
第21図　宇部台地　長樹遺跡第1地点(43)



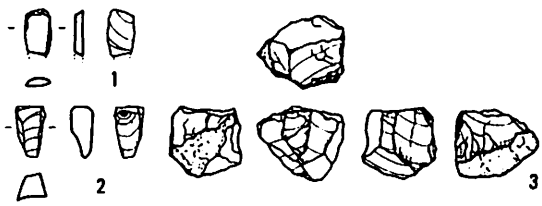
第22図　宇部台地　長樹遺跡第２地点(44)



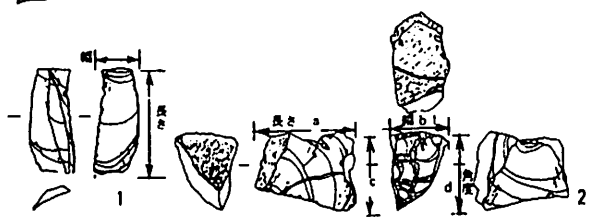
第23図　宇部台地　本郷遺跡(45)



第24図　宇部台地　1～4:常盤池遺跡(46)　5～7:川津遺跡(47)



第25図　山口大学医学部構内(48)



第26図　綾羅木郷台地遺跡（上ノ山地区）(50)

0　(1:2)　5cm

第 1 表　　中国地方　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磨	土				
1	上神(かずわ)		1														鳥取県倉吉市上神		根鈴(1991)
2	タテチョウ		1													有	島根県松江市西川津町	出雲平野	島根県教育委員会1…
3	勝木谷(かつきだに)		1														島根県松江市佐草町勝木谷	出雲平野	丹羽野(1991)
4	市場		1														島根県松江市山代町市場	出雲平野	湯村(1992)
5	曽谷		1														島根県八束郡宍道町佐々布	出雲平野	丹羽野(1991)
6	恩原第1地点	25	2	2	1	3										有	岡山県苫田郡上斎原村恩原	中国山地	稲田・胡川・光石1…
7	恩原第2地点	57	4	4		6										有	岡山県苫田郡上斎原村恩原	中国山地	稲田　編(1988)
8	東	○	3													有	岡山県真庭郡八束村下長田	中国山地蒜山高原	鎌木・小林(1985)
9	戸谷第2地点																岡山県真庭郡八束村下長田	〃　〃	堀川(1983)
10	戸谷第5地点	○	○													有	岡山県真庭郡八束村下長田	〃　〃	鎌木・小林(1984)
11	牧野第4地点	2	2														岡山県真庭郡八束村下長田	〃　〃	堀川(1984)
12	早風A地点	1	1													有	岡山県阿哲郡神郷町高瀬野原	〃野原遺跡群	平井(1979)
13	大入崎		○														岡山県玉野市大入崎	備讃瀬戸沿岸	安川(1987)
14	出崎		○														岡山県玉野市出崎	備讃瀬戸沿岸	鎌木・高橋(1965)
15	王子岳東方	○															岡山県倉敷市児島引網	備讃瀬戸沿岸	安川(1987)
16	竪場島	1	1													有	岡山県倉敷市田ノ口	備讃瀬戸沿岸	鎌木・小林(1986)
17	釜島		1														岡山県倉敷市大畑釜島	備讃瀬戸沿岸	安川(1987)
18	鷺羽山	○	16													有	岡山県倉敷市大畑久須英鼻	備讃瀬戸沿岸	鎌木(1956)
19	育英高校裏山		○														岡山県倉敷市羽島	備讃瀬戸沿岸	安川(1987)
20	曽原西		1														岡山県倉敷市曽原	備讃瀬戸沿岸	藤原(1992)
21	上水島	5	1													有	岡山県倉敷市上水島	備讃瀬戸沿岸	藤原好二氏教示
22	宮脇	>20	>5													有	広島県芦品郡新市町常		豊・桑田(1949・50)
23	梅床C地点	6															広島県山県郡芸北町東八幡原	中国山地　梅床遺跡群	梅本・三枝郎(1986)
24	梅床G地点	2	3														広島県山県郡芸北町東八幡原	〃　〃	梅本・三枝郎(1986)
25	冠C地点	1	1													有	広島県佐伯郡吉和村	〃　冠遺跡群	藤野(1982)
26	吉田(山口大構内	1														有	山口県山口市吉田		木村(1989)
27	河原(こうら)	○															山口県山口市鋳銭司河原	宇治台地	木村(1988)
28	長沢池	○															山口県山口市鋳銭司今宿	宇治台地	木村(1988)
29	宮ノ前	○	○														山口県防府市台道大原	宇治台地	木村(1988)
30	柴山裏	○															山口県防府市台道且東	宇治台地	木村(1988)
31	小浜	○															山口県吉敷郡秋穂町大海	宇治台地	木村(1988)
32	天田	○															山口県吉敷郡秋穂町秋穂西	宇治台地	木村(1988)

第 2 表　中国地方　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	礫	土				
33	幸崎	○	○														山口県山口市秋穂二島幸崎	宇治台地	
34	長浜	○	○														山口県山口市秋穂二島長浜	宇治台地	木村(1988)
35	鹿尾	○	○													有	山口県山口市佐山西鹿	宇治台地	木村(1988)
36	岩上	47	7													有	山口県吉敷郡阿知須町岩倉	宇治台地	山口県旧石器文化研究会(1991)
37	丸塚	○															山口県吉敷郡阿知須町丸塚山	宇治台地	木村(1988)
38	西宮沢	2															山口県宇治市西岐波区上片倉	宇治台地	山口県旧石器文化研究会(1983)
39	神楽田		2														〃　〃　〃　白土	宇治台地	〃　(1985)
40	上ノ原	11															〃　〃　〃　上ノ原西迫	宇治台地	〃　(1983)
41	白土	3															〃　〃　〃　白土後	宇治台地	〃　(1983)
42	南方	*350	46														〃　〃　〃　山村	宇治台地	〃　(1988)
43	長桜第1地点	*400	16													有	〃　〃　〃　山村長桜	宇治台地	藤野・山本(1985)
44	長桜第2地点	32	3													有	〃　〃　〃　山村長桜	宇治台地	藤野・山本(1985)
45	本郷	13	3														〃　〃　〃　本郷	宇部台地	山口県旧石器文化研究会(1983)
46	常盤池	4															〃　〃　常盤池	宇部台地	〃　(1989)
47	川津	3															〃　〃　上宇部中村川津	宇部台地	〃　(1989)
48	山口大学医学部構内	2	1													有	山口県宇部市小串		木村(1989)
49	荻野	○															山口県下関市安岡		
50	綾羅木郡台地	1?	1?													有	山口県下関市大字綾羅木		山口県教育委員会……

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝磨器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
礫＝石礫、土＝土器

四国・瀬戸内の細石刃文化

西村　尋文

1　研究の経過

１９５４年　鎌木義昌等により、井島遺跡、鷲羽山遺跡の調査を実施する。当該地の細石器文化の遺跡としては初の発掘調査である。

１９６０年　高橋邦彦等により、西方遺跡、東方遺跡の発掘調査を実施する。

１９７０～　長井数秋等により芸予諸島の分布調査

１９７６年　香川県教育委員会により、瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財の調査を開始する。この調査により花見山遺跡、大浦遺跡、長崎通り遺跡、初田遺跡、羽佐島遺跡、西方遺跡等の旧石器時代の諸遺跡について発掘調査が実施される事になる。

１９７９～　香川県教育委員会により、花見山遺跡の調査。多量の細石器関連の資料が出土する。

2　遺跡の分布

A　北四国・瀬戸内

岡山県の児島半島より香川県にかけて分布する塩飽諸島及び直島諸島のうち、児島半島、井島、櫃石島、釜島遺跡、竪場島、岩黒島、羽佐島、与島　等の島々には約15遺跡が分布する。中でも児島半島及び櫃石島周辺は、最も遺跡が密集する地域である。また、遺跡の立地する箇所は、いずれも、島の丘陵上の見晴らしの良い地点を占地しているのが一般的である。

今治市の沖合より広島県にかけて分布する芸予諸島では、分布調査により旧石器時代の遺跡が約20遺跡確認されている。そのうち細石器関連の資料が採集されている遺跡は、弓削島の楡田遺跡、佐島の百山遺跡、伯方島の金崎遺跡　等 3遺跡で確認されている。

他に愛媛県の陸上部では、微量であるが伊予市の平松遺跡、土居町の平坂Ⅱ遺跡　等の遺跡より細石刃核が確認されている。

B　南四国

徳島、高知両県合わせて僅か 4遺跡しか確認されていない。徳島県の廿枝遺跡、桜ノ岡遺跡、高知県の高間原古墳、八足遺跡　等である。

3　細石刃石器群

A　北四国・瀬戸内

《児島半島周辺》

鷲羽山遺跡

鷲羽山遺跡からは、ハリ質安山岩製の細石刃 8点・細石刃核16点が報告されている。出土した細石刃核は、①福井型細石刃核（橋　1979）　②野岳・休場型細石刃核（鈴木　1971）に二分される。（第 2図 1，鎌木　1956）

出崎遺跡

微量だが、野岳・休場型細石刃核 1点が報告されている。（第 2図 2，鎌木・高橋　1965）

釜島遺跡

微量だが、ハリ質安山岩製の野岳・休場型細石刃核 1点が報告されている。（第 2図 3，小林　1978）

《香川県》

井島遺跡

井島遺跡からは、ハリ質安山岩製の細石刃12点・細石刃核 3点が報告されている。出土した細石刃核には、福井型細石刃核が確認できる。（第 2図 4，鎌木　1957）

花見山遺跡

花見山遺跡では、細石刃 524点・細石刃核 277点・調整剝片 136点・原形60点等の多量の細石器関連の資料が出土した。一括資料がないので明確に他の石器との供伴関係を示せないが、使用される石材の共通性より、ナイフ形石器・槍先形石器・削器　等が供伴する可能性が高い。（第 3～ 6図，西村　1989）

細石刃核の石材は、約 9割がハリ質安山岩で占められ、サヌカイト・黒曜石・流紋岩・チャート等が残りの１割を占めている。

細石刃核は、①福井型細石刃核　②野岳・休場型細石刃核　③船野型（橘　1975）に類似した舟底形細石刃核　等に分けられる。

福井型細石刃核は、全体の中で約 4割を占める。この石核群は、(a)定形的な両面加工（片面加工）の楔形原形（第 5図 5・ 6）より形成された細石刃核と、(b)剝片素材で、軽度の石核調整を施した後に打面を形成した細石刃核とに分けられる。数量的には後者が主体を占める。なお、(a)に伴うスポール類（第 5図 7～ 9）も出土している。

野岳・休場型細石刃核は、全体の中で約 5割を占める。花見山遺跡の代表的な細石刃核の一群である。素材は剝片素材の細石刃核が主体を占め、角柱・角錐・板状等、様々な形態を呈する。なお、この石核群中には、羽佐島遺跡で出土している様なサヌカイト製の細石刃核が少量含まれる。（第 4図13・14）

舟底形細石刃核は、全体の中で約 1割を占める。

大浦遺跡

大浦遺跡からは、細石刃 315点・細石刃核 45点・調整剝片 60点・原形 6点等の細石器関連資料が出土した。一括資料がないので明確に供伴関係を示せないが、使用される石材の共通性よりナイフ形石器が供伴する可能性が高い。（第 7～ 8図，藤好　1984）

細石刃核の石材は、黒曜石・水晶製の細石刃核が各 1点、残り全てハリ質安山岩製である。

細石刃核は、①野岳・休場型細石刃核　②船野型に類似した舟底形細石刃核等に分けられる。なお、主体を占めるのは野岳・休場型細石刃核である。

長崎通り遺跡

長崎通り遺跡からは、細石刃13点・細石刃核13点・原形 6点等の細石器関連資料が報告されている。（第 9図，林・野中・坂口　1985）

石材はハリ質安山岩が主体を占めるが、少量サヌカイト製の資料が出土している。

細石刃核は、①福井型細石刃核　②野岳・休場型細石刃核　③船野型に類似した舟底形細石刃核　等に分けられる。

初田遺跡

初田遺跡からは、ハリ質安山岩製の細石刃 1点・細石刃核 7点・調整剝片 1点

・原形 1点等の細石器関連資料が報告されている。（第10図，藤好・玉城・中本 1985）

細石刃核は、①福井型細石刃核　②野岳・休場型細石刃核　等に分けられる。なお、主体を占めるのは野岳・休場型細石刃核である。

羽佐島遺跡

羽佐島遺跡からは、細石刃 188点・細石刃核73点・調整剝片21点・原形 9点等の細石器関連資料が出土した。一括資料がないので、明確に供伴関係を示せないが、使用される石材の共通性より、ナイフ形石器・槍先形石器・削器・楔形石器等が供伴する可能性が高い。（第11～12図，秋山・渡部　1984）

細石刃核の石材は、約 8割がハリ質安山岩で、残り 2割はサヌカイトが占めている。なお、微量であるが黒曜石製の細石刃核が 2点出土している。

細石刃核は、①湧別技法に類似した楔形細石刃核　②福井型細石刃核　③野岳・休場型細石刃核　④船野型に類似した舟底形細石刃核　等に分けられる。

湧別技法に類似した細石刃核は 1点だけ確認された。サヌカイト製であり、スポール類も出土している。（第12図 9～12）

福井型細石刃核は、全体の中で約 1割を占める。剝片素材で、軽度の石核調整を施したものである。

野岳・休場型細石刃核は、全体の中で約 8割を占め、羽佐島遺跡の中では代表的な細石刃核群である。なお、この石核群中には、サヌカイト製の板状の細石刃核群が約 2割確認できる。（第12図 4～ 6）

船野型に類似した舟底形細石刃核は、約 1割弱を占める。なお、羽佐島遺跡からは同石核群の原形が、比較的多数出土している。

西方遺跡（Ａ地区）

微量だが細石刃 2点・細石刃核 3点が出土している。一括資料がないので、明確に供伴関係を示せないが、使用される石材の共通性より、ナイフ形石器・削器等が供伴する可能性が高い。（第13図，藤好　1985）

細石刃核は、①福井型細石刃核 1点　②野岳・休場型細石刃核 2点　等が確認できる。なお、石材は前者がハリ質安山岩製、後者がサヌカイト・黒曜石製である。

西方遺跡（Ｃ地区）

西方遺跡C地区からは、細石刃22点・細石刃核12点・原形 1点　等が出土している。（第14図，藤好　1985）

細石刃核の石材は全てハリ質安山岩であるが、細石刃の半数はサヌカイト製で占める。細石刃核は、①福井型細石刃核　②野岳・休場型細石刃核　等に分けられ、主体を占めるのは野岳・休場型細石刃核である。なお、両面加工の原形 1点が出土している。

《愛媛県》

楡田遺跡

表採資料で供伴関係はつかめないが角錐状石器と伴に、細石刃 2点・細石刃核 2点が表採されている。

細石刃・細石刃核伴に石材は水晶製である。細石刃核は角柱状を呈し、野岳・休場型の範疇で捉えられる細石刃核である。（第16図 1，十亀　1988）

百山遺跡

表採資料で供伴関係はつかめないがナイフ形石器と伴に、細石刃核原形 1点が表採されている。細石刃核原形の石材はチャート製で、板状を呈し、野岳・休場型の範疇で捉えられる可能性が高い。（十亀　1988）

金崎遺跡

表採資料で供伴関係はつかめないが、ナイフ形石器・角錐状石器・削器　等の石器類と多量の剝片と伴に、細石器関連の遺物が表採されている。報文中には 8点の細石刃核と 2点の石核調整剝片が報告されている。（第15図，十亀　1988）

報告されている細石刃核は、①野岳・休場型細石刃核　②船野型に類似する舟底形細石刃核　等に分けられる。石材は 2点のチャート製の細石刃核を除いて他は全て流紋岩製である。

平松遺跡

サヌカイト製の細石刃核が 1点出土している。他に同時期と考えられる遺物はみいだせない。報告されている細石刃核は、野岳・休場型の範疇で捉えられる細石刃核である。（小林・多田ほか　1993）

平坂Ⅱ遺跡

弥生時代の竪穴住居跡内よりサヌカイト製の細石刃核が 1点出土している。（第16図 2，中野ほか　1991）報告されている細石刃核は、図面を見る限り福井型

細石刃核の可能性が高い。

B　南四国

《徳島県》

廿枝遺跡

表採資料で供伴関係はつかめないが、ナイフ形石器・角錐状石器・掻器・削器・石錐・槍先形石器・石鏃等と伴に、4点の細石刃及び3点の細石刃核が報告されている。（天羽　1976，高橋　1984）

報告されている細石刃核は、野岳・休場型の範疇で捉えられる細石刃核で、石材は1点の酸性凝灰岩の細石刃を除いて他は全てチャート製である。

桜ノ岡遺跡（Ⅲ）

チャート製の細石刃が1点出土している。他に供伴遺物は見出せない。（高岡・池渕　1989）

《高知県》

高間原古墳

古墳の調査の際に、チャート製の細石刃核が1点出土している。細石刃核は半円錐状の形態で、野岳・休場型の範疇で捉えられる細石刃核である。（第17図 1，山口　1990）

八足遺跡

表採資料で供伴関係はつかめないが、削器・縦長剥片と伴に、1点の細石刃核が表採されている。細石刃核は、野岳・休場型の範疇で捉えられる細石刃核である。（第17図 2，山口　1990）

4　細石刃文化の様相

福井型細石刃核は、鷲羽山、井島、花見山、長崎通り、初田、羽佐島、西方、平坂Ⅱ　等の諸遺跡で出土している。その分布の傾向をみれば、北四国、特に備讃瀬戸内地域を中心として分布する。この細石刃核は、(a)定形的な両面加工（片面加工）の楔形原形より形成された石核群と、(b)剥片素材で、軽度の石核調整を施した後に打面を形成した石核群とに分けられるが、両者を区分するのは難しく、明確に(a)の石核とわかるものは、両面加工（片面加工）の原形を供伴した花見山、

西方C両遺跡出土の細石刃核の一部だけである。そのため、当該地の福井型細石刃核は、剝片素材で、軽度の石核調整を施した石核群が主体を占めるものと考えられる。

野岳・休場型細石刃核は、鷲羽山、出崎、釜島、花見山、大浦、長崎通り、初田、羽佐島、西方、楡田、百山、金崎、平松、廿枝、高間原、八足　等の遺跡で出土している。そのため、四国・瀬戸内地域に広範囲に分布していることがわかる。また、数量的にも全体の約 6割程度を占め、分布的にも数量的にも当該地の主体を占める細石刃核と理解できる。

羽佐島、花見山出土の石核中には、サヌカイト製の板状の細石刃核群が確認できる。この石核群は、板状素材の広口面を石核側面にあて、分割・折断により打面・作業面等を形成し、小口面より細石刃を剝取っている細石刃核である。打面調整は原則として施さない。また、少量下縁調整を施している例があり（第12図 6）、福井型細石刃核の影響を受けたものと考えられる。これらの石核は広義の野岳・休場型細石刃核の範疇に含まれる石核群と考えられるが、今後再評価が必要となろう。

船野型に類似した舟底形細石刃核は、花見山、大浦、長崎通り、羽佐島、金崎等の遺跡で出土している。そのため、北四国・瀬戸内地域に分布していることがわかる。今後とも注意したい一群である。

以上の点を踏まえ、四国・瀬戸内地域の細石刃核を概観すれば、西南日本に広く認められる野岳・休場型細石刃核が普遍的に存在する。その素地のもと瀬戸内地域では、福井型細石刃核及び船野型に類似した舟底形細石刃核が少量認められる傾向が窺える。なお、僅か 1点であるが、羽佐島遺跡より湧別技法に類似した楔形細石刃核が出土しているのは、北方系の細石刃生産技術の伝播が考えられ、今後とも検討課題にあげられるだろう。

次に編年に付いての問題であるが、一括資料がないので、検討材料は少ない。そこで、各遺跡の石核構成のうえで検討したい。

各遺跡出土細石刃核の類型別の組合せを整理すれば、①福井型（井島、平坂Ⅱ）②野岳・休場型（出崎、釜島、楡田、平松、廿枝、高間原、八足）　③福井型＋野岳・休場型（鷲羽山、初田、西方C）　④野岳・休場型＋舟底形（大浦、金崎）　⑤福井型＋野岳・休場型＋舟底形（花見山、長崎通り、羽佐島）以上の関

係に整理できる。

①②の類型は、該当する各遺跡の遺物点数が極端に少なく、積極的に単一時期を設定するには現状では無理がある。また、⑤の類型は時期差を含むものと考えたほうが妥当であろう。残りの③④の関係で時期差が表れているものと考えられる。周辺地域の調査成果を踏まえ、あえて新旧を付けるとすれば、③を新相④を古相と考える。

最後に石器組成に付いての問題であるが、備讃瀬戸内地域では細石刃核との石材の共通性より、ナイフ形石器・槍先形石器・削器・楔形石器　等が細石刃と供伴する石器の候補としてあげられるが、これらの石器が時期的・地域的にも、全て一様に供伴するとは考えにくく、詳細な点は今後の課題としたい。

5　細石刃文化研究の課題

備讃瀬戸内地域では、香川県教育委員会が実施した調査により、多量の資料が得られ、資料を分析する上での数量的な問題は無くなった。しかし、得られた資料は劣悪な堆積状況を示す花崗岩風化土壌からなる遺物包含層中からの資料であり、純粋に一括資料といえるものは皆無といえる。そのため、編年及び石器組成等の分析を実施するには無理があり、良好な層位的出土状態を示す新たな遺跡の探索こそが今後の課題といえる。この地域は石材の原産地が隣接している地域のため、特に陸上部の遺跡には注意したい。

備讃瀬戸内地域を除くその外の地域では、遺跡数及び遺物数伴に少ない。そのため今後の資料の備蓄を待つ事になるのだが、特に芸予諸島及び松山平野の資料には注意したい。

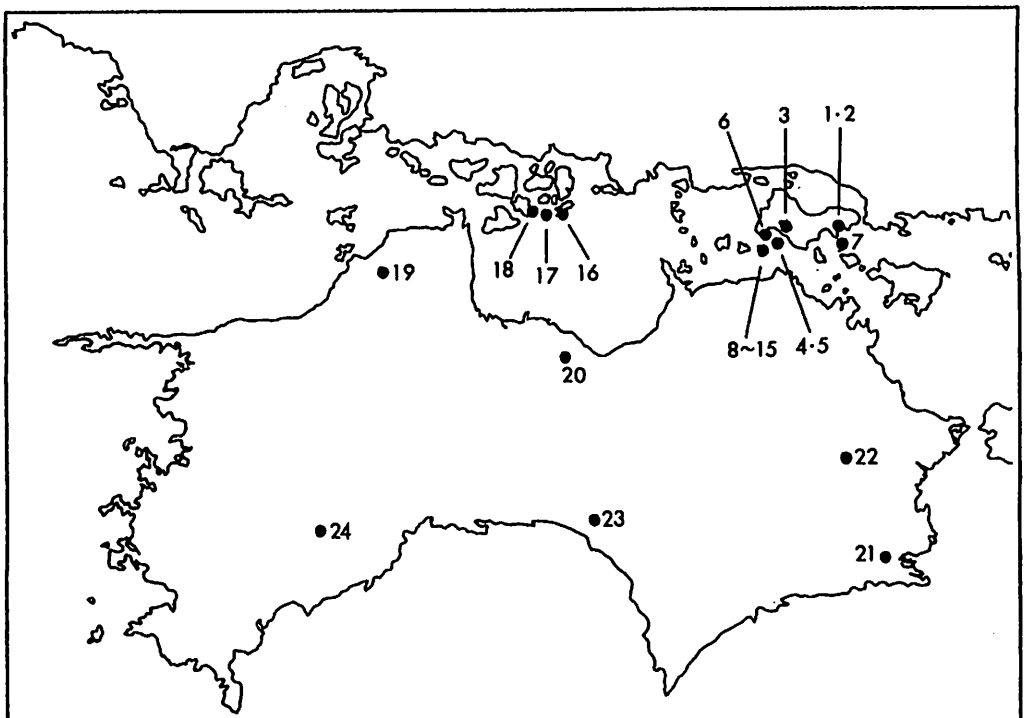
最後に本稿の執筆にあたり編集の堤　隆氏には、何かと御手数をおかけした。また、織笠　昭、藤好史郎、宮田栄二、多田　仁、渡部明夫　等の諸氏には御教示を受けた、深く感謝したい。

6　主要文献

秋山忠・渡部明夫　1984『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ－羽佐島遺跡（Ⅰ）－』香川県教育委員会

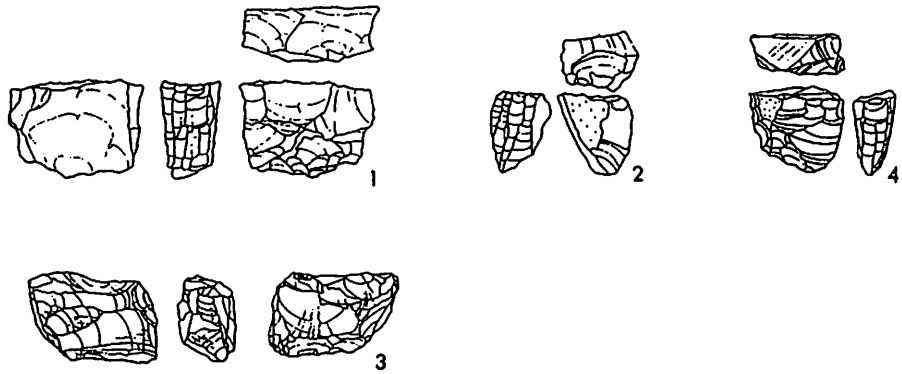
天羽利夫　1976「 3中国・四国の遺跡－徳島県－」『日本の旧石器文化第 3巻』雄山閣
安蒜政雄　1979「日本の細石核」『駿台史学　47』明治大学文学部
稲田孝司・山本誠・大谷輝彦・絹川一徳　1988『恩原遺跡』恩原遺跡発掘調査団
小野　昭　1979「瀬戸内沿岸地方の細石器文化」『駿台史学47』明治大学文学部
小畑弘己　1983「九州の細石刃文化」『物質文化41』物質文化研究会
鎌木義昌　1956「岡山県鷲羽山遺跡調査略報」『石器時代 3』
鎌木義昌　1957「香川県井島遺跡－瀬戸内における細石器文化－」『石器時代 4』
鎌木義昌・高橋　護　1965「瀬戸内地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ－先土器時代－』河出書房
鎌木義昌　1980「竪場島」『岡山県大百科事典－下巻－』
鎌木義昌・小林博昭　1985「近畿・中国・四国地域の細石刃研究」『考古学ジャーナル 243』ニューサイエンス社
小林博昭　1978「瀬戸内の細石刃・細石刃核に関する覚え書き（一）」『瀬戸内考研 9』
小林一郎・多田　仁ほか　1993「平松遺跡」『県道伊予－川内線関連埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
鈴木忠司　1971「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化 23-8』古代学協会
高岡裕・池渕茂　1989「桜ノ岡遺跡（Ⅲ）」『徳島県埋蔵文化財センター年報 1』財団法人徳島県埋蔵文化財センター
高橋邦彦　1961『香川県文化財協会報特別号 5－坂出市与島・西方及び東方遺跡の調査報告－』
高橋正則　1984「徳島県阿南市・廿枝遺跡採集の石器再考」『旧石器考古学　29』旧石器文化談話会
橘　昌信　1975「宮崎県船野遺跡における細石刃文化」『考古学論業 3』別府大学
橘　昌信　1979「九州における細石器文化」『駿台史学47』明治大学文学部
多田　仁　1992「松山平野の石器文化」『松山市文化財調査報告書第25集－祝谷

アイリ遺跡ー』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
堤　　隆　1987「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究 13 』
十亀幸雄　1978「愛媛県祝谷丸山遺跡の細石刃剝離技術」『古代学研究第88号』
十亀幸雄　1988「芸予諸島の先土器時代資料」『遺跡第31号』
中野良一ほか　1991「平坂Ⅱ遺跡」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書ーⅢー』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
西村尋文　1983「中部瀬戸内地域における細石刃生産技術の検討」『旧石器考古学 26』旧石器文化談話会
西村尋文ほか　1989『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵー花見山遺跡ー』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
橋本勝雄　1983「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について」『考古学論叢Ⅰ』
林　正弘・野中寛文・　坂口淳子　1985「長崎通り遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅵ）』香川県教育委員会
藤好史郎　1984『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ－大浦遺跡ー』香川県教育委員会
藤好史郎・玉城一枝・中本雅之　1985「初田遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅵ）』香川県教育委員会
藤好史郎　1985『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ－西方遺跡ー』香川県教育委員会
真壁葭子　1968「香川県坂出市櫃石島採集の石器」『倉敷考古館研究集報 4』
宮田栄二　1988「南九州の細石器文化－福井形細石刃核の波及について－」『鹿児島考古22号』鹿児島考古学会
安川豊史　1987「第二章　先土器時代」『岡山県の考古学』吉川弘文館
山口将仁　1990「＜土佐の考古学＞高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学41』　旧石器文化談話会

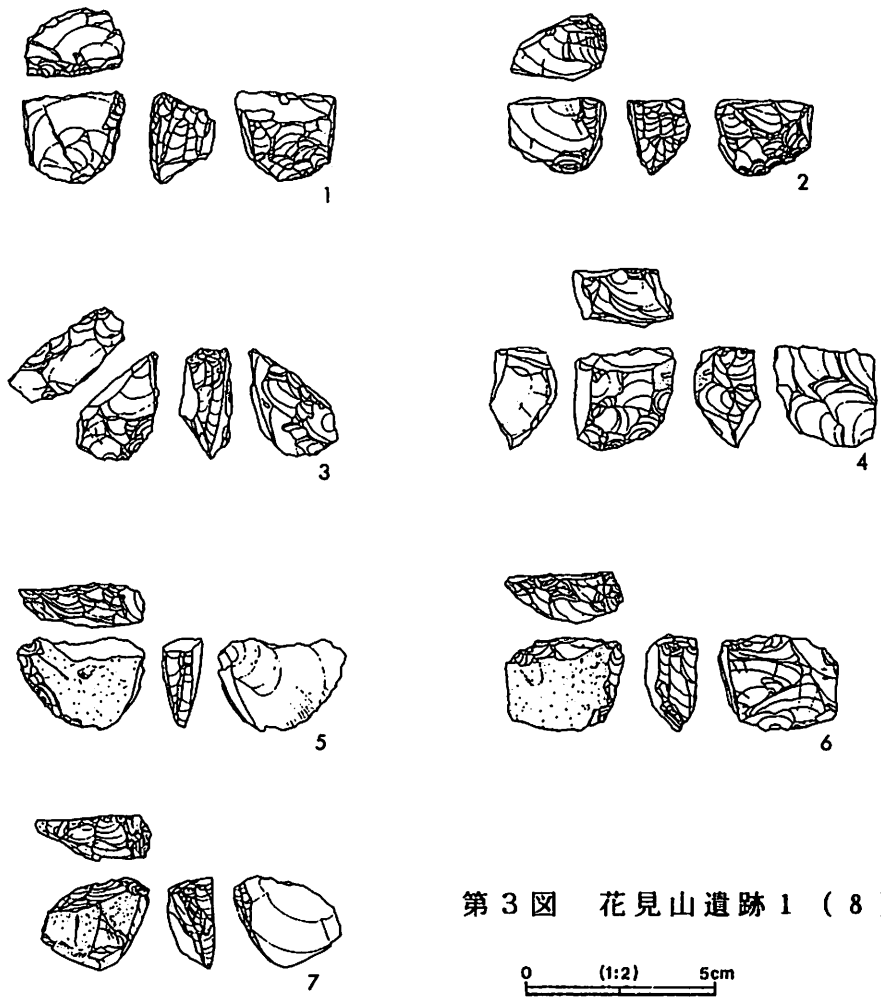


1	大入崎遺跡	13	西方遺跡Ａ地区
2	出崎遺跡	14	西方遺跡Ｃ地区
3	王子岳東方遺跡	15	東方遺跡
4	竪場島遺跡	16	楡田遺跡
5	釜島遺跡	17	百山遺跡
6	鷲羽山遺跡	18	金崎遺跡
7	井島遺跡	19	平松遺跡
8	花見山遺跡	20	平坂Ⅱ遺跡
9	大浦遺跡	21	甘枝遺跡
10	長崎通り遺跡	22	桜ノ岡遺跡（Ⅲ）
11	初田遺跡	23	高間原古墳
12	羽佐島遺跡	24	八足遺跡

第１図　四国・瀬戸内の細石器出土遺跡

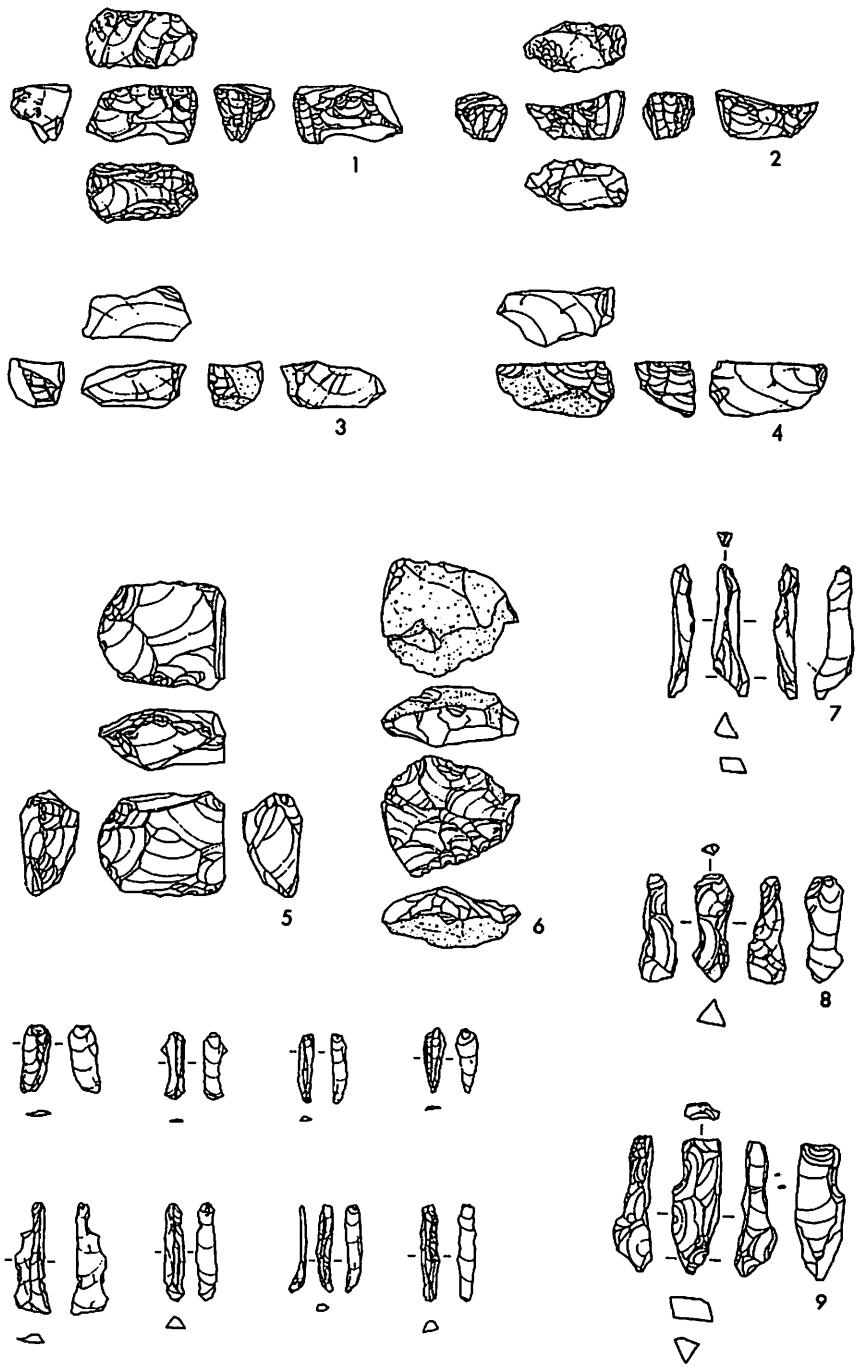


第２図　鷲羽山遺跡・出崎遺跡・井島遺跡（2･5･6･7）

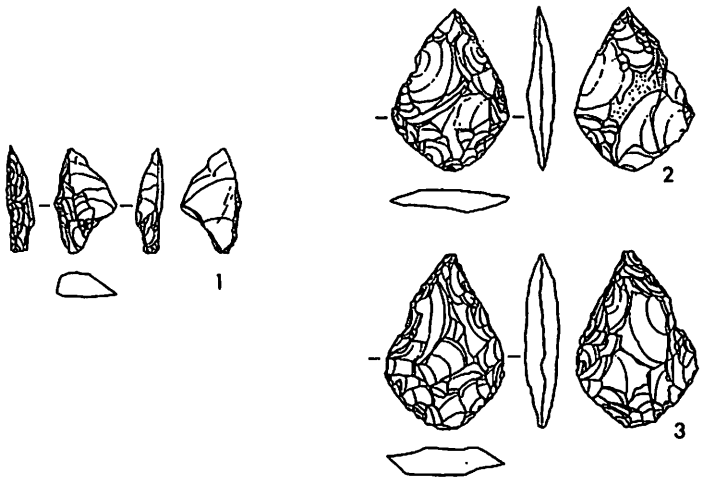


第３図　花見山遺跡１（８）

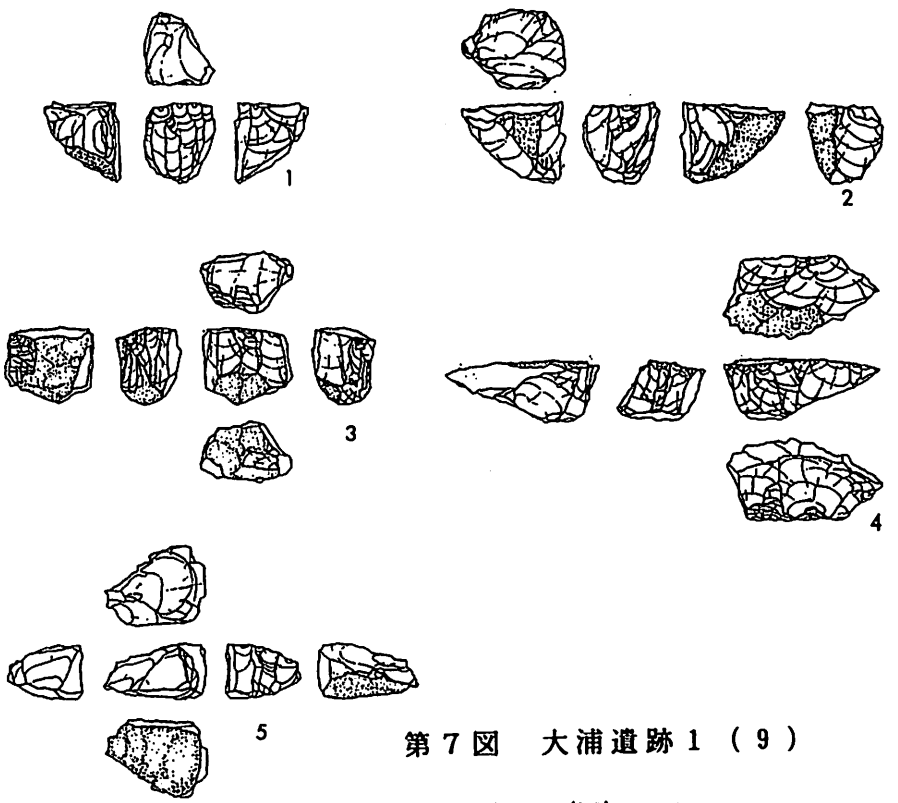
第４図　花見山遺跡２（８）



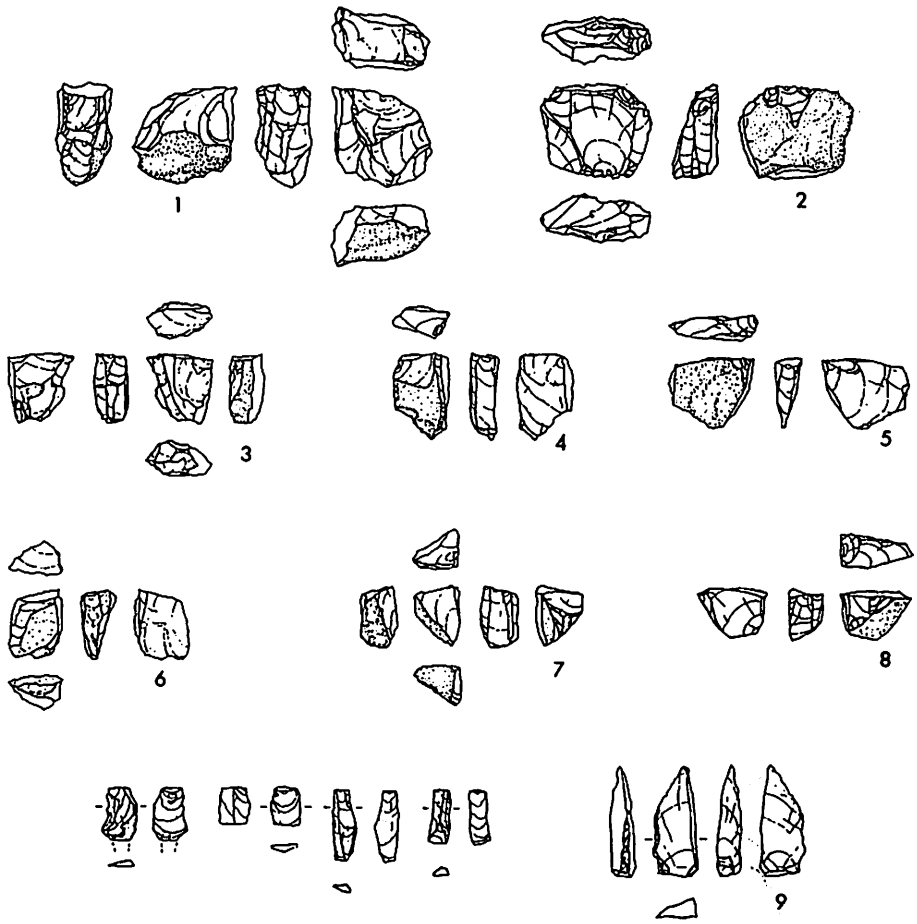
第５図　花見山遺跡３（８）



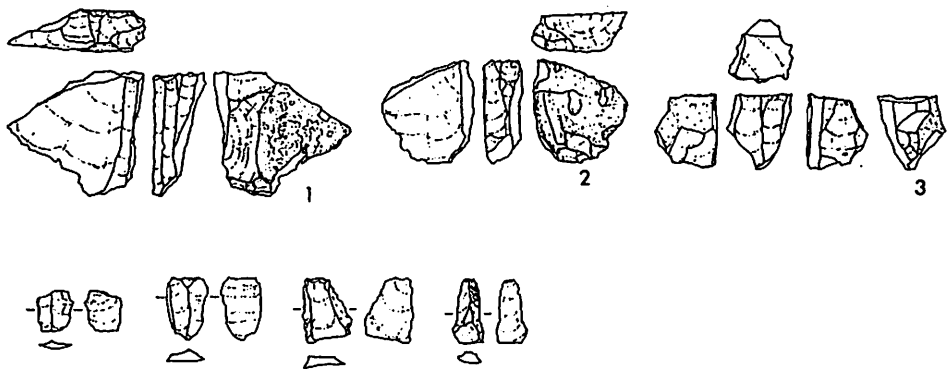
第６図　花見山遺跡４（８）



第７図　大浦遺跡１（９）

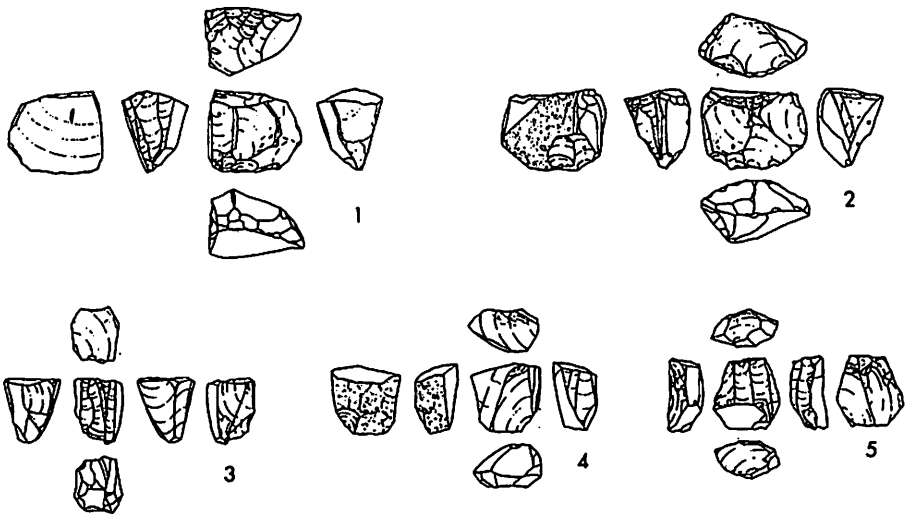


第８図　大浦遺跡２（９）

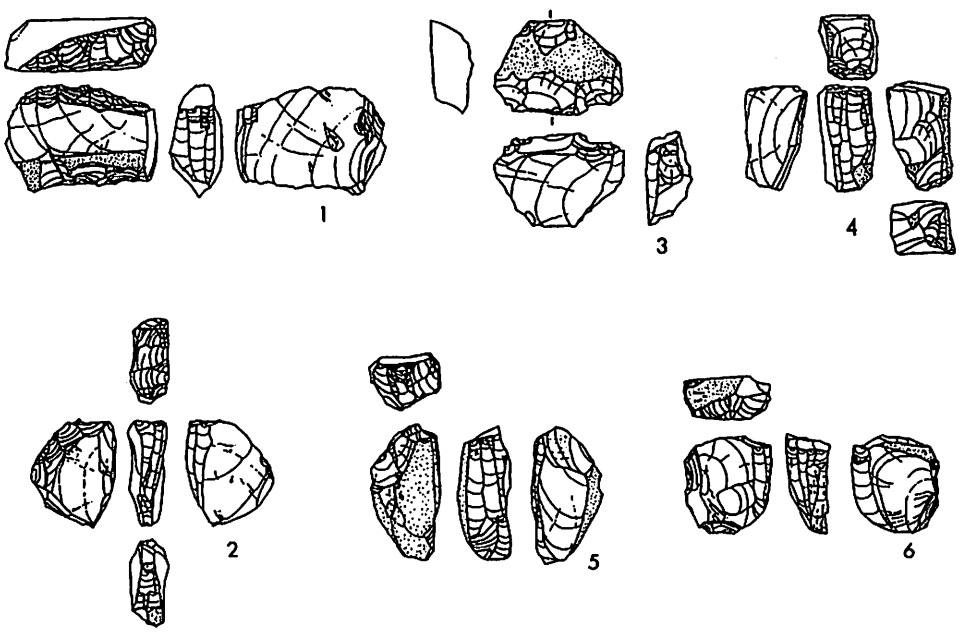


第９図　長崎通り遺跡（10）

0　(1:2)　5cm

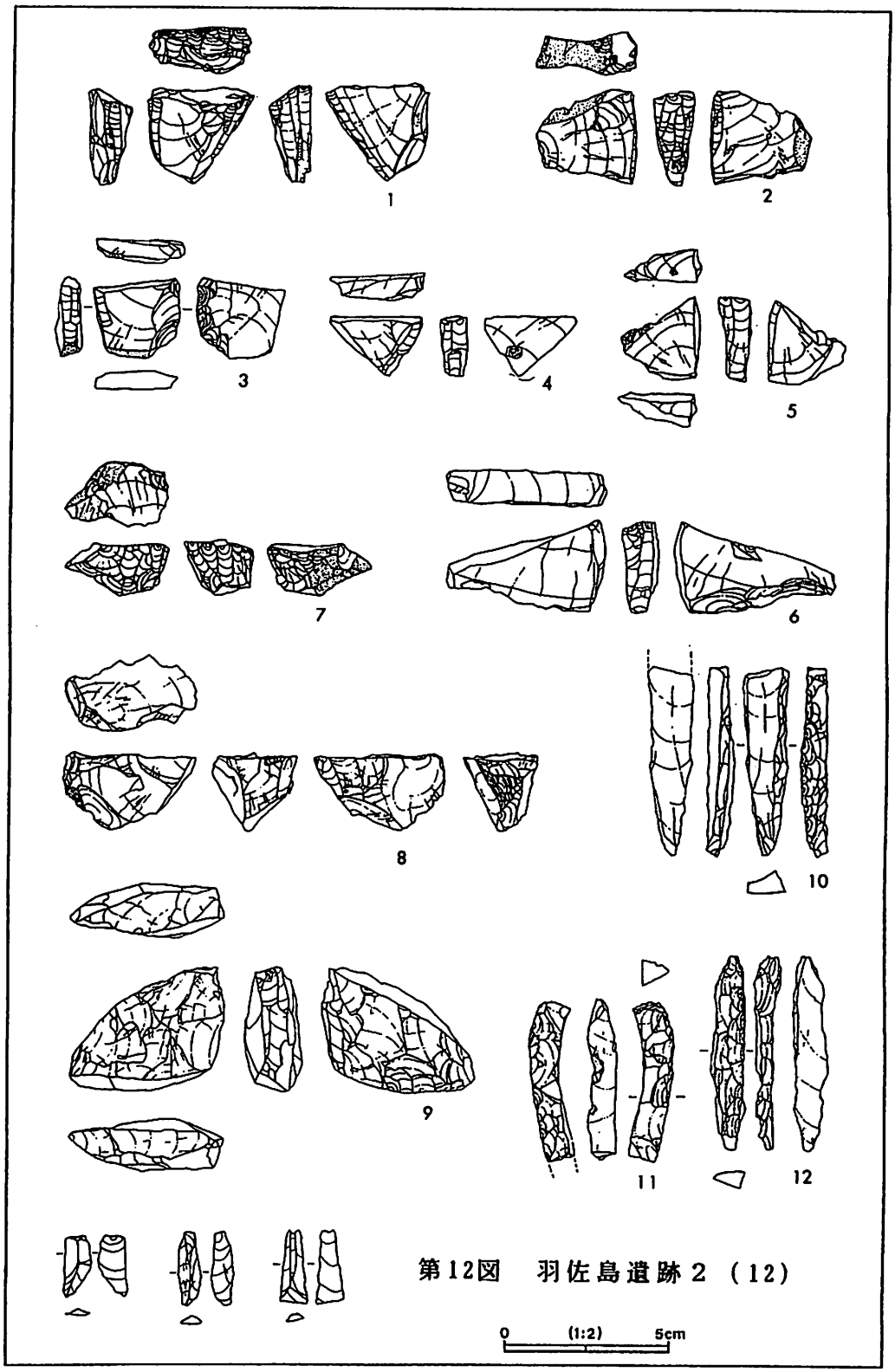


第10図　初田遺跡（11）

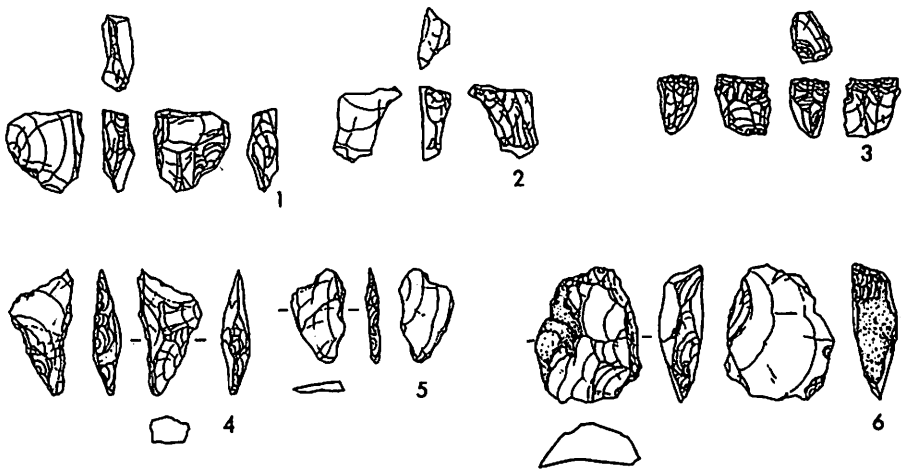


第11図　羽佐島遺跡1（12）

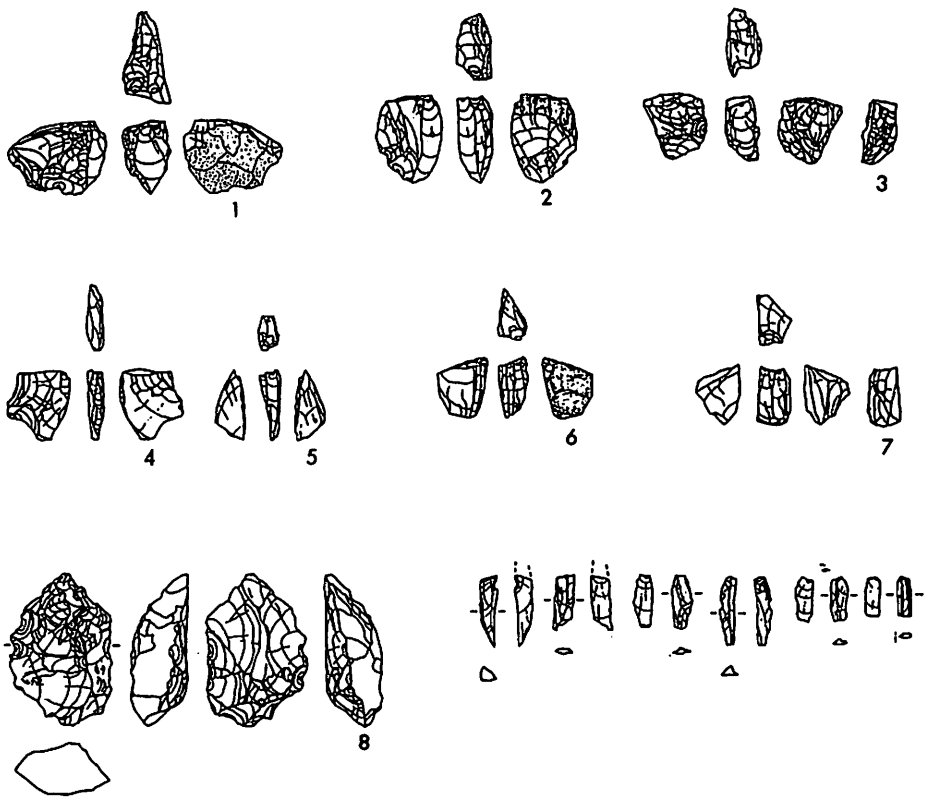
0　(1:2)　5cm



第12図　羽佐島遺跡２（12）



第13図　西方遺跡Ａ地区（13）



第14図　西方遺跡Ａ地区（14）

0　(1:2)　5cm

第15図　金崎遺跡（18）

第16図　楡田遺跡・平坂Ⅱ遺跡（16·20）

第17図　高間原古墳・八足遺跡（23·24）

0　(1:2)　5cm

第 1 表　　四国・瀬戸内　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	礫	土				
1	大入崎		○														岡山県玉野市大入崎		
2	出崎		○														岡山県玉野市沼出崎		
3	王子岳東方	○															岡山県倉敷市児島引網		
4	堅場島	○	○														岡山県倉敷市田ノ口		
5	釜島	○	○														岡山県倉敷市大畑釜島		
6	鷲羽山	○	○													有	岡山県倉敷市大畑久須奥鼻ほか		報告有
7	井島	○	○													有	香川県香川郡直島町井島鞍掛		報告有
8	花見山	524	277	○	○	○						○				有	香川県坂出市櫃石		報告有
9	大浦	315	45									○				有	香川県坂出市櫃石		報告有
10	長崎通り	13	13													有	香川県坂出市櫃石		報告有
11	初田	1	7													有	香川県坂出市岩黒		報告有
12	羽佐島	188	73	○	○							○	○			有	香川県坂出市羽佐島		報告有
13	西方Ａ地区	2	3	○								○				有	香川県坂出市与島町西方		報告有
14	西方Ｃ地区	22	12													有	香川県坂出市与島町西方		報告有
15	東方	○														有	香川県坂出市与島町東方		報告有
16	檢田	2	2														愛媛県越智郡弓削町		
17	百山		1														愛媛県越智郡弓削町		
18	金崎	○	○														愛媛県越智郡伯方町		
19	平松		1													有	愛媛県伊予市大字上三谷		報告有
20	平坂Ⅱ		1													有	愛媛県宇和郡土四町大字入野		報告有
21	甘枝	4	3														徳島県阿南市桑野町字甘枝		報告有
22	桜ノ岡Ⅲ	1														有	徳島県阿波郡阿波町桜ノ岡		報告有
23	高間原古墳		1														高知県高知市		
24	八足		1														高知県幡多郡大正町大奈路		

近畿・東海西部の細石刃文化

松浦　五輪美

1　研究の経過

近畿地方

１９６０年代以前	踏査、採集活動によって細石刃・細石核が発見されているが、未公表のものあり。
１９７０年代	羽曳野台地周辺・出張遺跡等、発掘調査によっても細石刃文化の遺物が出土。湧別技法系、野岳・休場型、船野型等各種の細石核が確認される。
１９８０年以降	過去の表採資料が整理・公表されはじめる。
１９８５年	鎌木義昌・小林博昭によって近畿の細石刃文化研究について、初めて概説される。
１９９２年	松藤和人によって近畿地方の細石核出土（発見）遺跡が紹介され、近畿における細石刃文化の様相について論及される。

東海西部

１９６０年代以前	踏査、採集活動によって細石刃・細石核が発見され、紹介される（海老山遺跡、五本松遺跡等）。
１９７９年	鈴木忠司によって東海地方の細石刃文化の整理・研究がなされ、海老山技法の提唱がなされる。
１９８５年	岐阜県寺田・日野１遺跡の発掘調査によって、細石刃文化期の抽出がなされる。
１９８９年	岐阜県池の原遺跡の発掘調査によって、湧別技法系統の細石刃文化の存在を確認。

2　遺跡の分布

A　加古川流域

各遺跡とも１～２点の細石核が発見されているのみで遺跡としての性格は不明。南大塚

採集品のような湧別技法系も存在する。遺跡の立地は低・中位段丘上。

B　羽曳野台地

各遺跡とも１～２点の細石核が出土しているのみ。誉田白鳥遺跡のものは湧別技法系、青山遺跡のものは瀬戸内に多いタイプである。資料は少ないが、形態は様々である。羽曳野丘陵先端部の中位段丘に分布する。

C　宮川流域

チャートを利用した角錐形、船形の細石核が多いようであるが、内容的に不明なものが多い。

D　各務原台地

チャート製の細石核が多く、角錐形、船形のものが散在する。木曽川北岸に広がる中位段丘に分布。

E　矢作川流域

チャート、流紋岩を利用する角錐形、船形のものが多く、豊川流域では流紋岩が主体となる。

３　細石刃石器群

表採資料が多く、石器群として捉えられるものは皆無といってよい。寺田・日野１遺跡の発掘調査において唯一細石刃文化として抽出された石器群も、細石刃生産に関わる資料以外では加工痕のある剥片が１点あるのみで定形的な石器は伴っていない。

細石刃の生産技法に関しては大きく４つの技法が認められる。

１　湧別技法（札滑型）：　南大塚、誉田白鳥等。

２　野岳・休場型、矢出川型：　日岡山等。

３　船野型：　壁川崎、海老山等。

４　瀬戸内系（福井型）：　青山、桜ケ丘１等。

この他、細石核として扱われていないがブランクまたはスポールの可能性があるものとして、北岡や新池の資料がある。

利用石材について地域的に見ると、二上山周辺から以北のサヌカイト、紀伊半島中部から岐阜県にかけてのチャート、紀伊半島南部の頁岩、愛知県東部の流紋岩といった石材利用の姿はナイフ形石器文化期から変わってないようである。問題はそれぞれの地域に見られる細石刃技法である。サヌカイト地域には瀬戸内系、チャート・頁岩・流紋岩地域には

船野型、という図式が描ける。湧別技法系、野岳・休場型のものはサヌカイト地域において石材を異にして（黒曜石、チャート）点在するという状況である。

4　細石刃文化の様相

当地域においては純粋な層位的検出例が皆無であるため、細石刃文化の編年的位置付けおよび存続期間は不明である。

当地域は横長剥片を素材としたナイフ形石器文化が続いてきたところであり、現在のところそれらとの関連を追求していくのは困難な状況である。しかし細石核個々の形態をみていくとかなりのバラエティーがあり、前段階の文化との関係を探るうえで非常に興味深い資料も認められる。

当地域の細石核の形態は、前述したように大きく４つに分けられる。これらのうち注目すべきは瀬戸内系（福井型）の細石核である。この細石核の素材となるのはやや厚めの横長もしくは幅広の剥片であり、前段階の剥片剥離技術と最も近い距離に位置しているといえる。また剥片の小口にあたる狭い面を作業面として縦長剥片を剥離する技法は瀬戸内のサヌカイト地域で認められるものである。しかもほか３形態の細石核が主にサヌカイト以外の石材を利用するのに対し、板状のものはサヌカイトを利用する。以上のことから考えると、近畿地方で本来展開した細石刃文化は板状の細石核を持つ石器群であったろうと推測されるのである。そしてさらに、この細石刃文化は恐らく福井型の細石核を持つ一群の広がりによってもたらされたものと思われる。この細石核形態はもともと両面調整されたブランクから作り出されるものであったが、それが徐々に簡略化された作りとなっていく様子が、福岡県、山口県、瀬戸内の資料によって窺うことができる。したがって二上山以北で主体をなすのは福井系の文化であったと考えられる。

これとは別に紀伊半島から太平洋岸にかけて分布する細石核は船野型である。この地域では前段階のナイフ形石器文化期から利用石材はチャートもしくは頁岩が主体である。細石刃文化期においてもその状況は変わっていない。黒曜石以外の石材を選択的に利用する船野型の細石核の文化圏は東九州から瀬戸内・太平洋岸を通って関東まで及んでおり、近畿の太平洋側も産出石材（＝利用石材）の関係から船野型細石核を持つ一群の文化を受容していったものと思われる。

また資料的には少ないが、北方からの湧別技法の流れを窺えるものがあり恩原遺跡の状況などを理解するうえでも貴重な資料といえる。

このように当地域における細石刃文化の様相はかなり複雑であるが、基本的には細石刃文化が根付かなかった感が強い。

5　細石刃文化研究の課題

当地域における最大の問題点は資料の貧弱さと層位的発掘の困難さである。現段階では資料の広範囲にわたる蓄積を急務とするが、他地域の細石刃文化研究と比較するとかなりギャップがある。最近細石刃文化研究においても遺構・遺跡を対象とした研究が行なわれるようになってきたが、当地域ではそこへ到達するまでにはかなりの時間を必要とするであろう。

このような状況の中で等地域の細石刃文化を解明していく手立てとしては、まず隣接地域との比較、そして細石刃製作技法の検討があげられる。この２点は表採資料からでもある程度研究が可能な分野である。また同一地点で採集された石器との母岩別資料の検討も、石器群を復元していくためには有効な手段となり得るかもしれない。次に、細石刃文化そのものについての究明も行なっていかなければならないが、例えば前段階・後段階の石器群との共通性・相違性については、技術的なことだけでなく分布・立地・利用石材などの面からの追求も欠かせないであろう。その他、細石刃文化の展開についての要因または衰退・移行の過程など、可能なかぎりアプローチしていかなければならない。

以上、研究の方向性について述べたが、このような研究は等地域に限らず資料の豊富な地域でこそすすめていくべき課題でもある。

日本の細石刃文化について論じられるとき、常に空白地として扱われてきた、特に近畿地方において、やっと細石刃文化研究が始まろうとしているのが現状である。

参考文献

麻生　優・岡本東三　１９９０　「岐阜県・池の原遺跡発掘調査概要」『第３回　長野研究石器文化研究交流会　発表要旨』

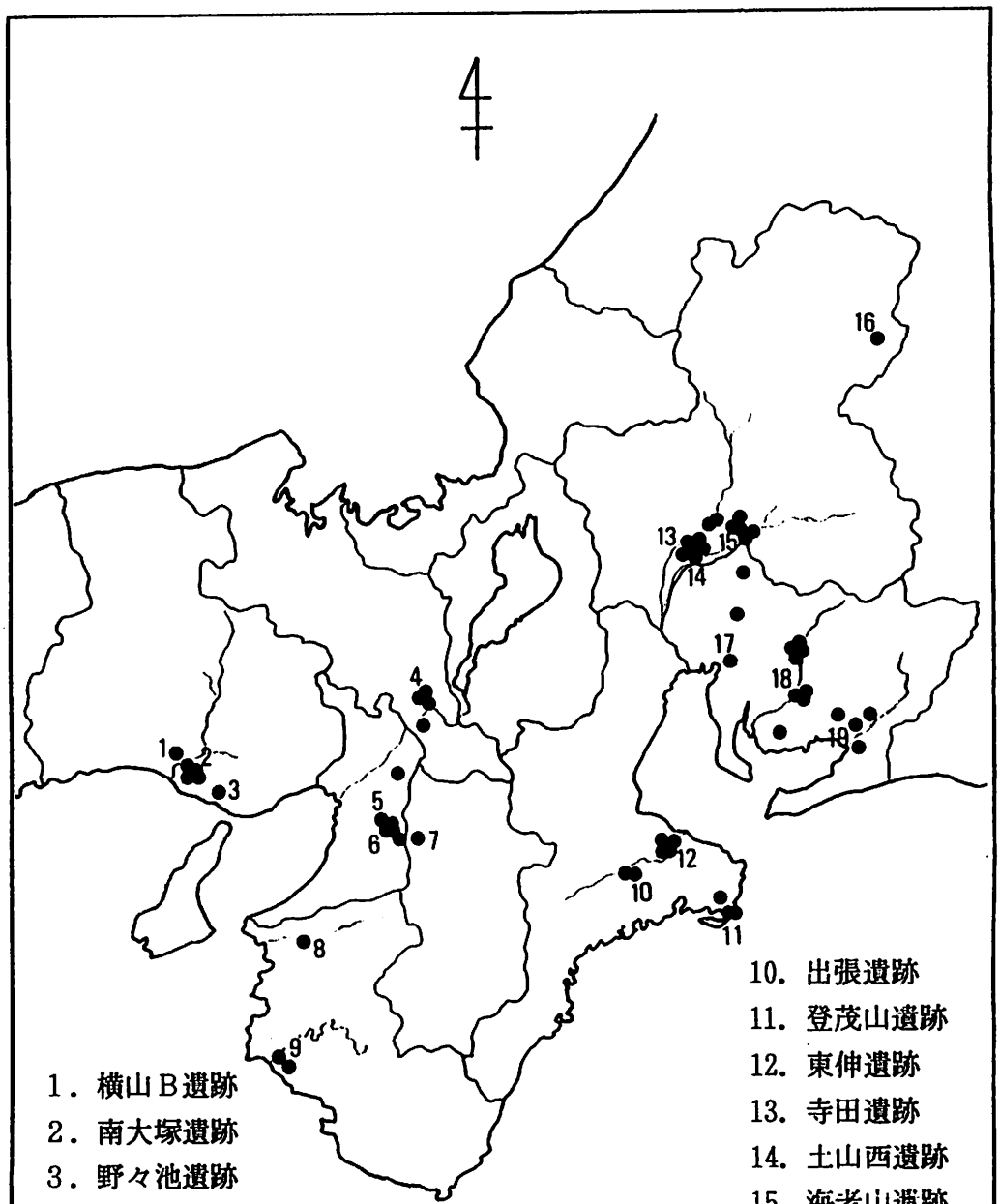
稲田孝司他　１９９２　「西日本の湧別技法」『岡山大学文学部紀要』１８

鎌木義昌・小林博昭　１９８５　「近畿・中国・四国地域の細石刃研究」『考古学ジャーナル』２４３

（財）大阪文化財センター　１９９０　『南河内における遺跡の調査Ｉ』

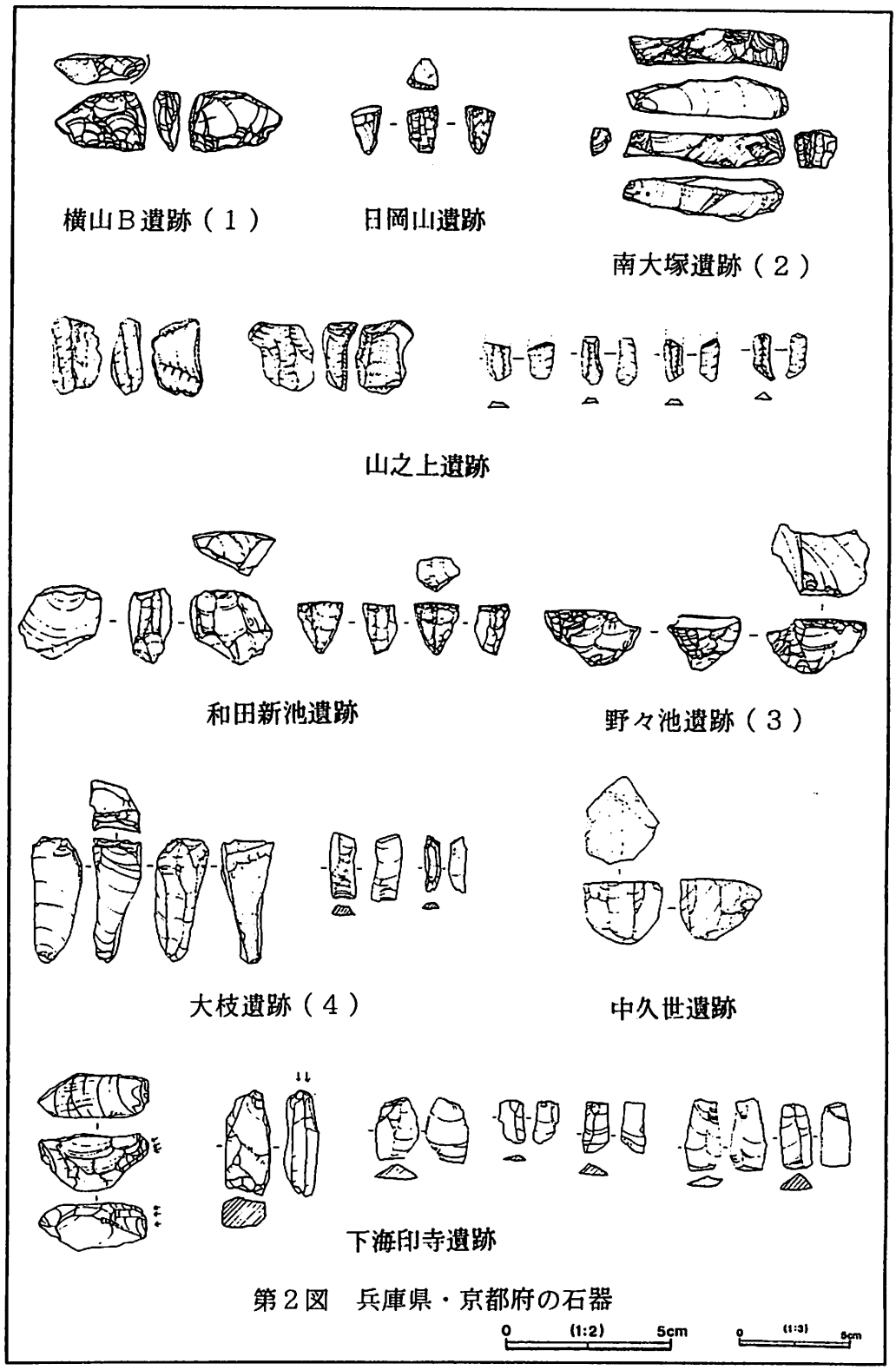
酒井泰子　１９９２　『西大井遺跡発掘調査概要　１９９０年度』　大阪府教育委員会

佐藤良二　１９８０　「志方町・加西市および周辺の旧石器」『旧石器考古学』２１
沢田伊一郎　１９９２　「各務原台地とその周辺の旧石器（１）」『旧石器考古学』
鈴木忠司　１９７９　「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』
都出比呂志他　１９７１　『京都府乙訓地方の石器ー資料編ー』乙訓の文化遺産を守る会　第１日曜部会
中原正光　１９８８　「和歌山県における先土器時代の地域色」『旧石器考古学』３６
松藤和人　１９９２　「２　火山灰の降るなかで」『新版　古代の日本⑤　近畿Ｉ』
松藤和人　１９７８　「第二章　第一節　土器以前の文化」『大阪府史　第一巻』
松本正信他　１９８２　「播磨南部採集の旧石器」『旧石器考古学』２４
４４
吉田英敏他　１９８７　『寺田・日野１』建設省・岐阜県・岐阜県教育委員会

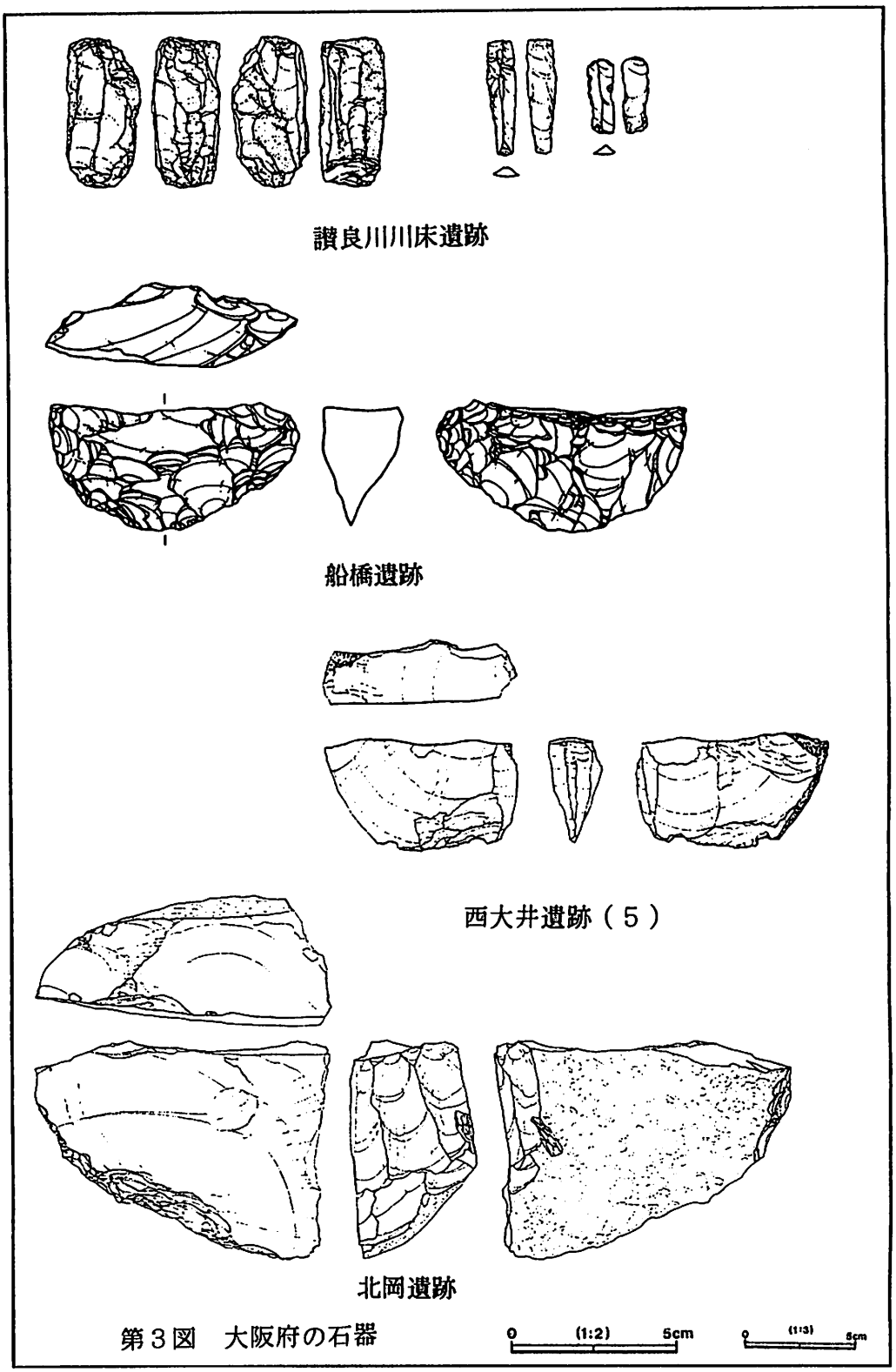


1．横山Ｂ遺跡
2．南大塚遺跡
3．野々池遺跡
4．大枝遺跡
5．西大井遺跡
6．誉田白鳥遺跡
7．桜ケ丘１遺跡
8．平池北岸遺跡
9．壁川崎遺跡
10．出張遺跡
11．登茂山遺跡
12．東伸遺跡
13．寺田遺跡
14．土山西遺跡
15．海老山遺跡
16．池の原遺跡
17．平野遺跡
18．五本松遺跡
19．鏈水遺跡

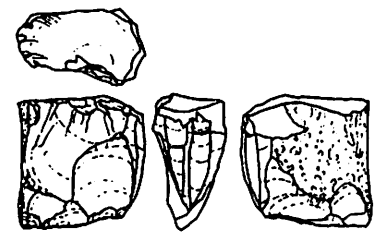
第１図　近畿・東海西部の細石器出土遺跡



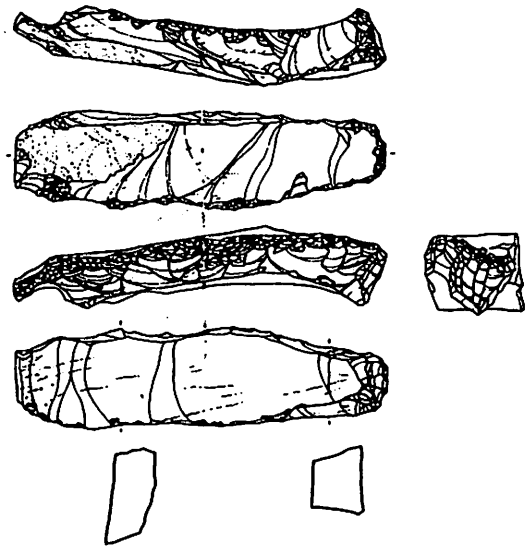
第２図　兵庫県・京都府の石器



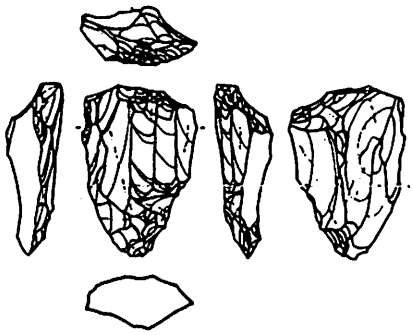
第３図　大阪府の石器



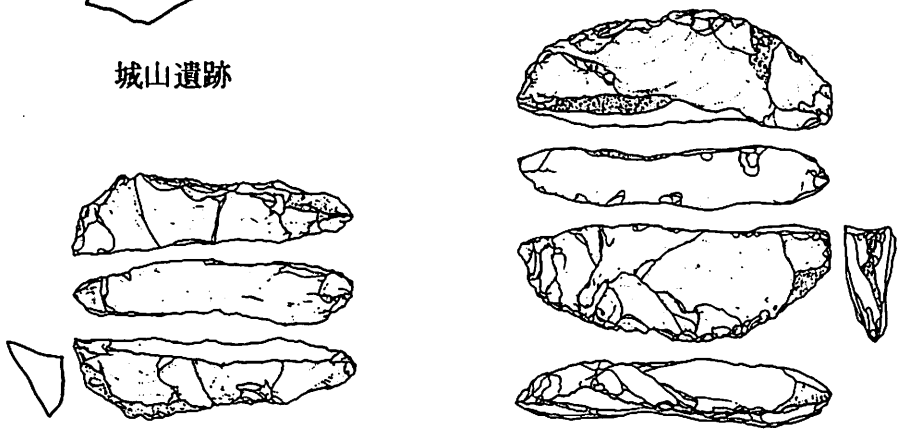
青山遺跡



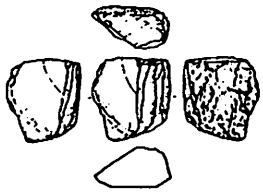
誉田白鳥遺跡（６）



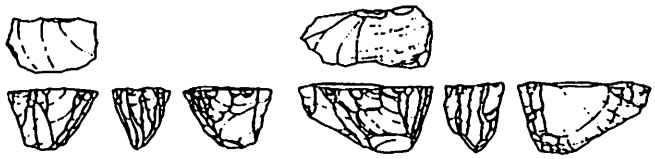
城山遺跡



新池遺跡



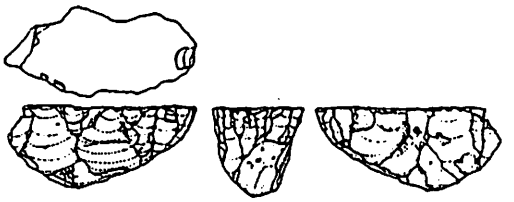
桜ケ丘１遺跡（７）

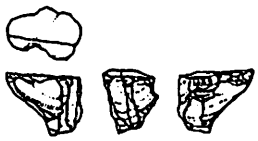


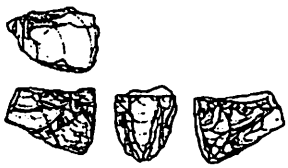
平池北岸遺跡（８）

第４図　大阪府・奈良県・和歌山県の石器

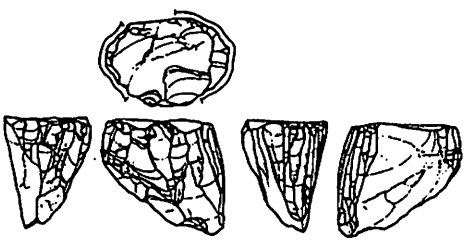
0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm





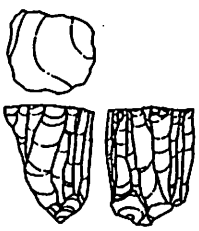


壁川崎遺跡（９）

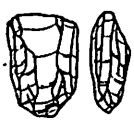


出張遺跡（10）

中野遺跡

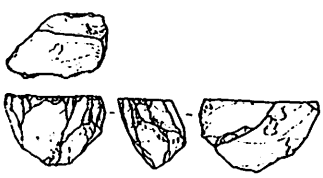


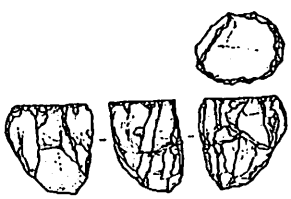
東伸遺跡（12）

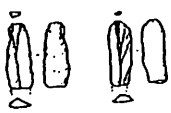


登茂山遺跡（11）

日野１遺跡



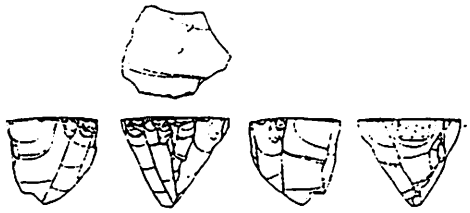




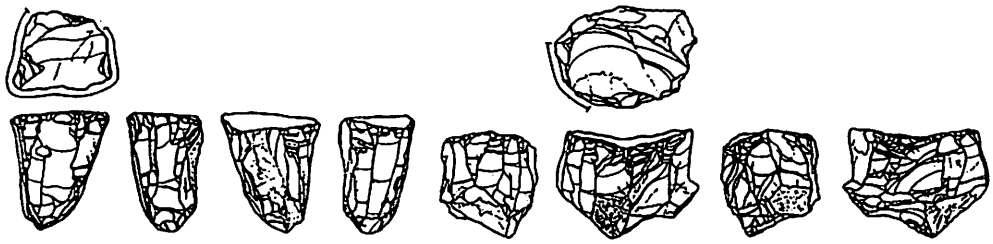
寺田遺跡（13）

第５図　和歌山県・三重県・岐阜県の石器

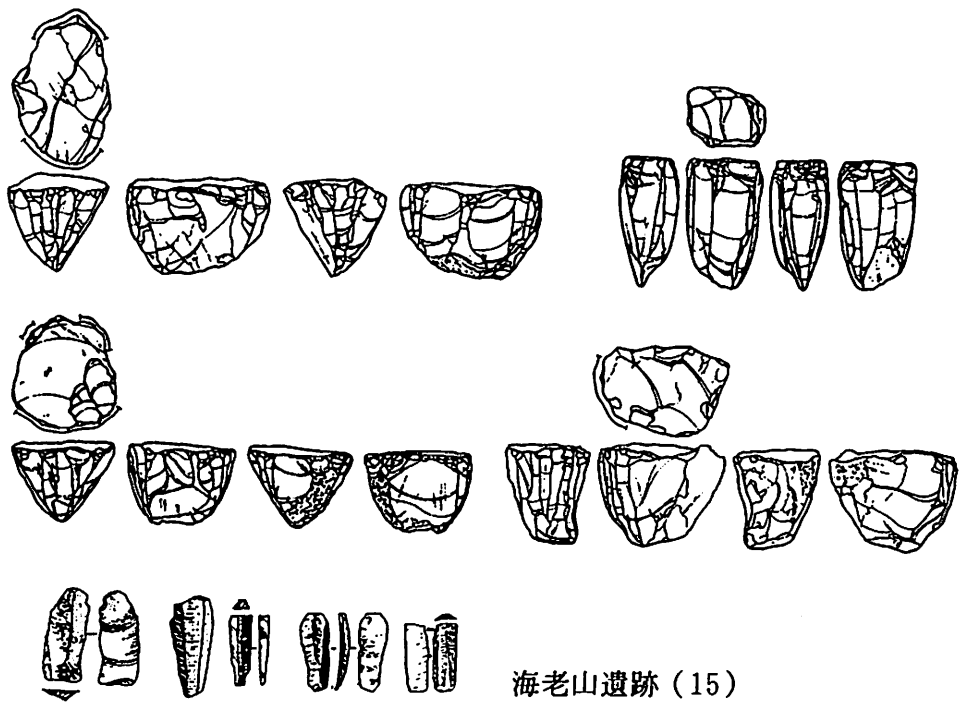
0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



土山西遺跡（14）



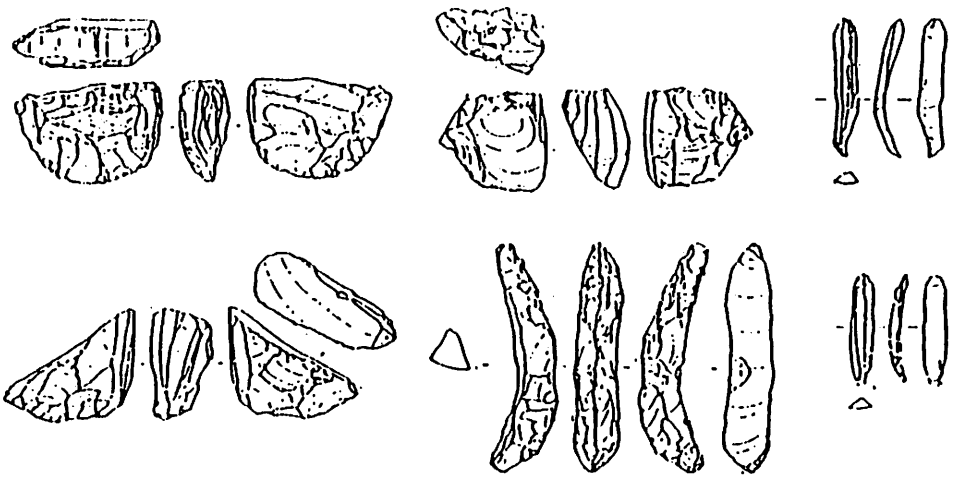
北野遺跡



海老山遺跡（15）

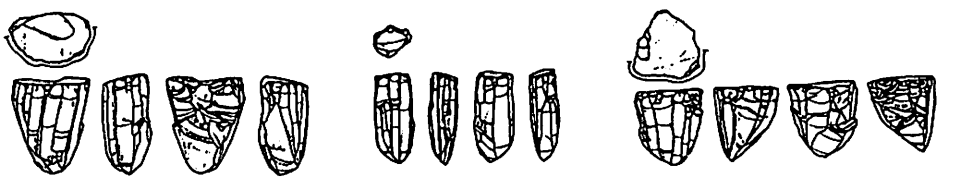
第６図　岐阜県の石器

0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm

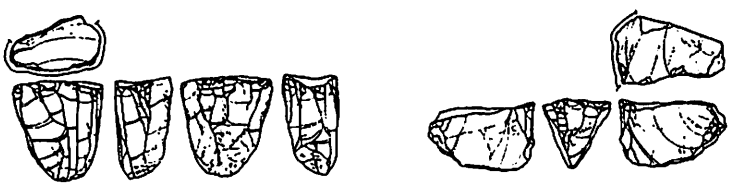


池の原遺跡（16）

平野遺跡（17）　霊岩寺Ｂ遺跡　長興寺遺跡



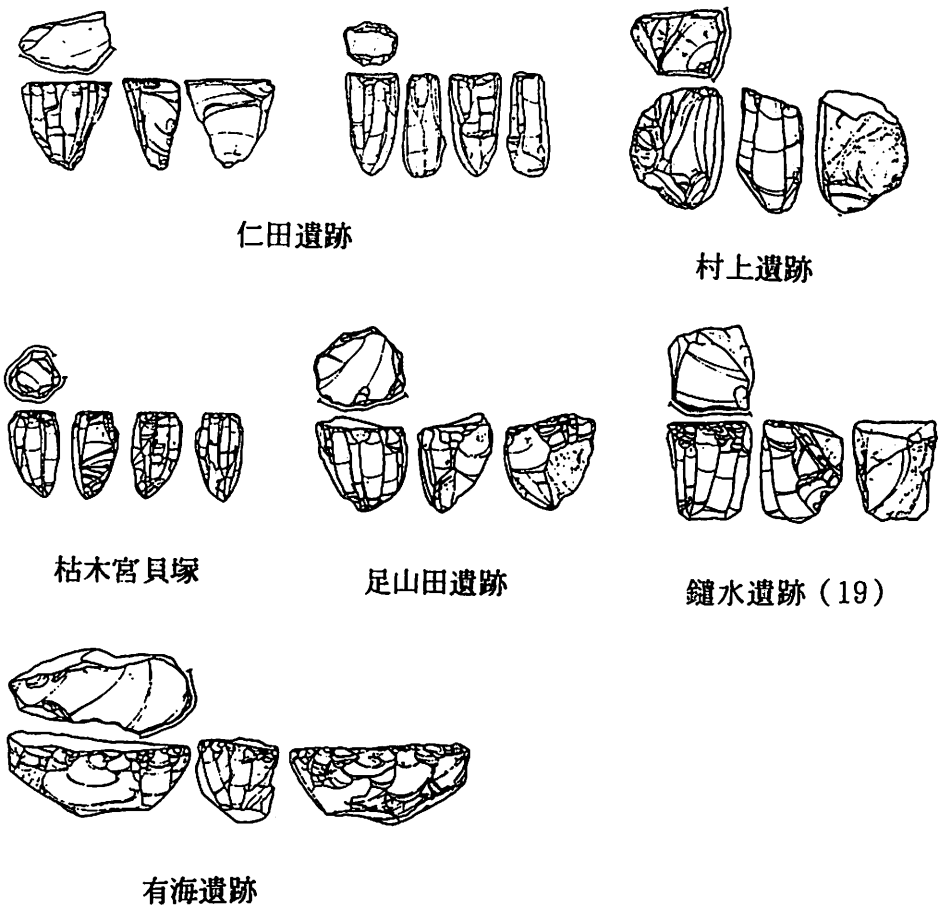
大明神Ｂ遺跡



五本松遺跡（18）

第７図　岐阜県・愛知県の石器

0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



第８図　愛知県の石器

第 1 表　近畿・東海西部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	敲	土	発掘	所在	所属	備考
1	横山B地点		1														兵庫県加古川市志方町横山	加古川流域	
2	日岡山		1														兵庫県加古川市神野町大野	加古川流域	
3	南大塚		1														兵庫県加古川市神野町大野	加古川流域	
4	山之上	○	○														兵庫県加古川市平岡町山之上	加古川流域	
5	和田新池		2														兵庫県加古郡稲美町和田	加古川流域	旧野原池
6	野々池		1														兵庫県明石市鳥羽野々池	明石川流域	
7	大枝	2	1														京都府京都市左京区大枝		
8	相国寺		○														京都府京都市上京区柳原南半町		
9	中久世		1														京都府京都市南区中久世四丁目		
10	下海印寺	○	2														京都府長岡京市下海印寺		
11	讃良川川床	○	1													有	大阪府四条畷市	枚方台地	再堆積
12	船橋		1													有	大阪府藤井寺市惣社1 丁目	羽曳野台地	ブランクのみ
13	西大井		1													有	大阪府藤井寺市西大井1 丁目	羽曳野台地	
14	北岡		1													有	大阪府藤井寺市岡1 丁目	羽曳野台地	
15	青山		1													有	大阪府藤井寺市青山2 丁目	羽曳野台地	
16	誉田白鳥		1													有	大阪府羽曳野市白鳥2 丁目	羽曳野台地	
17	城山		1													有	大阪府羽曳野市古市6 丁目	羽曳野台地	
18	新池		2														大阪府羽曳野市上ノ太子飛鳥	二上山北麓遺跡群	スポールのみ
19	桜ケ丘1		1													有	奈良県香芝市大字穴虫	〃	
20	平池北岸		6														和歌山県那賀郡貴志川町	紀ノ川流域	
21	尾ノ崎		1														和歌山県御坊市塩野町	日高川流域	
22	豊川崎	4	7														和歌山県御坊市名田町	日高川流域	
23	中野		1														三重県多気郡大台町新田	宮川流域	
24	出張		○													有	三重県多気郡大台町大字栃原	宮川流域	
25	東伸		○														三重県度会郡玉城町	宮川流域	
26	カリコ		○														三重県度会郡玉城町世古	宮川流域	
27	ママ田		○														三重県度会郡小俣町	宮川流域	
28	上村池		○														三重県多気郡明和町	宮川流域	
29	登茂山		1														三重県志摩郡大王町船越	志摩半島	旧称　大清戸
30	立神		○														三重県志摩郡阿児町立神	志摩半島	
31	次郎六郎		1														三重県志摩郡大王町	志摩半島	打面再生剥片のみ
32	守田	7	5													有	岐阜県岐阜市日野	各務原台地	

第 2 表 近畿・東海西部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成															発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	礫	土					
33	日野1	3	1														有	岐阜県岐阜市日野	各務原台地	
34	緑苔		○															岐阜県各務原市鵜沼	各務原台地	
35	内野前		○															岐阜県各務原市	各務原台地	
36	土山西		1															岐阜県各務原市	各務原台地	
37	横野		○															岐阜県各務原市	各務原台地	
38	植野	○																岐阜県各務原市鵜沼	各務原台地	
39	向中野		○															岐阜県関市	長良川流域	
40	松原		○															岐阜県関市	長良川流域	
41	小竹原		○															岐阜県加茂郡富加町	長良川流域	
42	北野		○															岐阜県加茂郡	長良川流域	
43	大山北野		○															岐阜県加茂郡	長良川流域	
44	海老山	○	○														有	岐阜県美濃加茂市富加	木曽川流域	MCは 100 以上
45	境松		○															岐阜県美濃加茂市	木曽川流域	
46	池の原	10	6														有	岐阜県大野郡高根村		
47	平野		○															愛知県名古屋市緑区		
48	樹木		○															愛知県名古屋市守山区		
49	入鹿池		○															愛知県犬山市		
50	千鳥		○															愛知県豊田市	矢作川流域	
51	大笹		○															愛知県豊田市	矢作川流域	
52	篁岩寺B		1															愛知県豊田市	矢作川流域	
53	長興寺		1															愛知県豊田市	矢作川流域	
54	大明神B		6															愛知県豊田市	矢作川流域	
55	五本松	59	8															愛知県岡崎市三合町	矢作川流域	
56	仁田	29	5															愛知県岡崎市	矢作川流域	
57	村上	1	1															愛知県岡崎市丸山町	矢作川流域	
58	枯木宮貝塚		1														有	愛知県西尾市		
59	足山田		3															愛知県宝飯郡足山田	豊川流域	
60	雄水		4															愛知県宝飯郡一宮町	豊川流域	
61	有海		1															愛知県新城市大高町	豊川流域	
62	大清水		○															愛知県豊橋市	豊川流域	

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝掻器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝磨器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
礫＝石礫、土＝土器

東海地方東部（静岡県）の細石刃文化

笹原　芳郎

1　研究の経過

１９４０年代～１９５０年代	各地域の高等学校郷土研究部等による分布調査。鈴木幸朗・池端利雄・永井匡次等による磐田原台地の分布調査
１９６２年・１９６４年	明治大学考古学研究室・沼津女子商業高等学校による休場遺跡の調査（２基の石囲炉の検出）
１９６８年	秋本真澄「伊豆の後期旧石器文化図録」刊行（愛鷹南・箱根西麓の集成）
１９７７～７９年	磐田市寺谷遺跡の調査（静岡県内の遺跡構造論的調査の端緒）
１９７８年	沼津市中沢田円丸遺跡の調査
１９８１年	磐田市京見塚遺跡の調査
１９８１年	豊田町広野北遺跡の調査
１９８３年以降	愛鷹運動公園建設等、開発行為に伴う大規模発掘の進展

2　遺跡の分布

A　箱根西麓　箱根外輪山より放射状にのびる丘陵状の尾根上に、標高にあまり関係なく散漫に分布する。分布図の元となった資料のほとんどは表採品のため拠点的な遺跡は判別できない。調査例では函南町大奴田場Ａ遺跡が規模が大きく拠点的であり、近接する柳沢Ｃ遺跡でもまとまった資料が出土しているので、これら遺跡の立地する冷川・来光川流域が細石器文化の遺跡の集中する地帯かもしれない。現在調査中であるが、この流域の上原遺跡でも十点以上の細石刃核と千点以上の細石刃を出土しており、規模の大きな遺跡が多く存在するらしい。三島市内の近年の大規模調査では、冷川・来光川流域のようなまとまった細石器文化の石器群はみつかっていないので、拠点的な細石器文化の遺跡はこの流域に集中する傾向

があるかもしれない。なお、現在知られている資料はすべて「休場型」の細石刃核である。

B　愛鷹山南麓　愛鷹山南東麓の巨大な三角形を呈する、緩斜面地域の要の部分、標高約２８０mに休場遺跡が立地する。この休場遺跡を最高度として中見代第III遺跡で約１８５m、中沢田円丸遺跡で約４０mと標高差は著しい。この三角形の右辺あたりに遺跡は集中する。ここでも資料は全て「休場」型である。

C　富士川流域　実際には富士川の支流である芝川の流域である。現在のところ小塚遺跡のみしられている。標高約２００mに位置する。静岡県東部地域で唯一の船底形細石刃核（船野型）を出土している。

D　大井川流域　島田市吹木原西原遺跡で１点の細石刃核類似の石核が表採されている。

E　磐田原台地　天竜川東岸の段丘縁に、南北帯状に集中して分布する。ナイフ形石器や槍先形尖頭器などと同じ遺跡から出土することから、他の旧石器時代遺跡と分布の差はないようであり、素材の中心となる頁岩・シルト岩も他の時期の石器素材と同一である。この頁岩は天竜川で採集されたと考えられる。

F　三方原台地　梔池遺跡、前原VIII遺跡がある。台地北東部に集中しているが、発見されている遺跡が少ないため集中して分布するか不明である。石器は頁岩・シルト岩を主体としており、磐田原台地との類似性が注目される。

3　細石刃石器群

A　箱根西麓

大奴田場Ａ遺跡　「休場」型の細石刃核のみと石斧あるいは削器と掻器、磨石から構成される。また、尖頭削器的な剥片を含む。２点のブランクと考えられる石器もある。石材は細石刃核の全てが黒耀石である。産地同定では試料４５点中３５点が和田峠産である。

柳沢Ｂ遺跡　「休場」型の細石刃核と細石刃が出土している。剥離された細石刃は他の遺跡に比べて大きめである。

柳沢Ｃ遺跡　「休場」型の細石刃核と細石刃が出土している。ほとんどは黒耀石であるが、２点の黒色緻密安山岩製の細石刃が、他の細石刃に比べ

て大型である。伊藤恒彦氏は船野型の細石刃核の存在を想定している。

山中城三の丸遺跡　第１地点から「休場」型の細石刃核と細石刃が出土している。全て黒耀石である。

中村Ｃ遺跡　「休場」型の細石刃核と細石刃が出土している。すべて黒耀石である。休場層中よりナイフ形石器や槍先形尖頭器など他の石器群と混在して出土しており、組成は不明確である。剥離された細石刃は小型である。

B　愛鷹山南麓

野台遺跡　「休場」型の細石刃核と細石刃が出土している。遺構として砂川期の石囲炉が検出されているが、細石器文化の所産である可能性もある。やはり、ナイフ形石器や槍先形尖頭器など砂川期の石器群と混在して出土しており、石器組成は不明確である。

中尾遺跡　「休場」型の細石刃核と細石刃が出土している。野台遺跡に隣接した遺跡である。野台遺跡同様、砂川期の石器群と混在して出土しており、石器組成は分離されていない。

中見代第II遺跡　「休場」型の細石刃核と細石刃が出土しているが、細石刃核は１点のみであり、隣接する中見代第III遺跡は、細石刃核の量の多さに比べて細石刃の量が少ない。そのことから調査者の高尾好之氏は、谷を隔てて東側の広合遺跡で細石刃のみ出土している点と合わせて、中見代第III遺跡を細石刃の生産地遺跡とし、中見代第II遺跡と広合遺跡を消費地遺跡と捉えている。石材は全て黒耀石である。

中見代第III遺跡　「休場」型の細石刃核と細石刃が出土している。前記したように細石刃核の数が３０点なのに比し細石刃が１５８点と少ない点が特徴である。石材は全て黒耀石である。

休場遺跡　「休場」型の細石刃核とホロカ技法的な上下接合する石核（細石刃核ブランク？）が検出されている。発掘調査では「休場」型の細石刃核のみが出土しており、ホロカ技法的な石核は全て表採されたものであるため、この二者の関係は未だ不明なままである。

細石刃核の石材は黒耀石が主体を占めるが、頁岩や水晶も含んでいる。なおホロカ技法的な石核は珪質頁岩製である。発掘調査で出土した資料では、細石刃核の量に比べて細石刃の量が非常に多い。遺構として２基の石囲炉が有名であるが、愛鷹南・箱根西麓では、ナイフ形石器文化の所産がほとんどであり、細石刃文化では当遺跡のみである。

円丸遺跡　「休場」型の細石核と細石刃が出土している。遺跡は休場層に削平が達している部分が多く、細石刃関係は攪乱層より出土したという。石器組成としては茎を持つようなナイフ形石器やブランティングで尖頭部をつくるような削器など、特徴的な石器があり、細石刃も小型で古い傾向が感じられる。しかし、調査時の所見からも愛鷹上部ロームＢＢ０層中の石器群の可能性もあり、組成は不明確である。細石刃関係はすべて黒耀石である。

Ｃ　富士川流域

小塚遺跡　細石刃核は船野型のみで、細石刃は２点検出されている。細石刃が少ないのは、石材の頁岩がローム中で腐食しやすく、検出が困難だったためと考えられる。出土状況の写真をみると計１２点の細石刃核とブランクがデポのように集中して検出されている。伴出されたとされるナイフ形石器や槍先形尖頭器は分布を異にしているようであるし、槍先形尖頭器は有樋尖頭器を含み、ナイフ形石器類は典型的な砂川期であることを考えると細石刃関係の石器との共伴の可能性は低い。石器組成はブランティングで尖頭部をつくるような削器がみられるが、その他の石器は砂川期の石器群であると考えられる。なお、石材はすべて在地の頁岩である。

Ｅ　磐田原台地

広野北遺跡　細石刃核は船野（海老山）型と稜柱形からなる。石器組成としては、形態の不明なナイフ形石器と磨製石斧を有している。石材は磐田原台地の旧石器時代に普遍的な頁岩、シルト岩である。

寺谷遺跡　細石刃核は船野（海老山）型と稜柱形である。広野遺跡と同様、石材は頁岩、シルト岩である。

4　細石刃文化の様相

愛鷹南・箱根西麓の細石刃文化は、ほとんどがナイフ形石器などと混在して、休場層中より検出されるため、層位的には、他の休場層中の石器群との分離が難しい。個体別資料操作のうえではナイフ形石器などと共有するものはほとんどないため分離は可能であるが、石器組成はほとんど判らない状況である。

細石核の形態では、尾尻遺跡のチャート製の細石刃核が細かい頭部調整を施しており、船野（海老山）型の最終形態の可能性が高いが、それ以外の細石刃核はすべて「休場」型である。基本的には稜柱形を呈し、打角（打面と剥離面の角度）は鋭角になるものと、直角に近くになるものがある。鋭角になるものは石材の極限まで剥離した結果によるものもあるが、最初から鋭角で剥離されるものも多い。打面調整は顕著にみられ、打面再生や打面転移されるものも多い。剥離される細石刃の大きさは円丸遺跡の小型のものから、大奴田場Ａ遺跡の長さ５ｃｍ近い大型のものまである。これらの差異が時期差を示すものかどうかは判らない。なお、石材は、どの遺跡においても黒耀石が主体で他の石材は非常に少ない。

富士川流域の遺跡は小塚遺跡のみであるが、静岡県東部地域で唯一の船野型石核を出土している。磐田原台地の船野（海老山）型石核に比べて大型扁平であり、頭部調整もほとんど見られないのが特徴である。石材は愛鷹南・箱根西麓で普遍的な頁岩のみで構成される。

磐田原台地では、愛鷹南・箱根西麓で主体を占めた黒耀石はほとんどみられず、在地系の頁岩、シルト岩によって細石刃がつくられている。細石刃核は船底形、稜柱形と形態はバラエティに富んでいるが、どの形態も、打角は直角に近いものばかりであり、頭部調整が顕著で打面調整は行なわない。これらのことから、鈴木忠司氏や松井一明氏は、これらの形態が同一技法上での細石刃剥離（及び分割・再生）の進行状況による差異であると捉えられている。

5　細石刃文化研究の課題

愛鷹南・箱根西麓は良好なテフラの堆積によって、その編年研究が進展している。しかし細石刃文化の含まれる休場層内は、ロームという性質から遺物の上下移動が大きく、他の文化段階と層位的に分離が難しい。それゆえ、その先後関係はよく判っていない。さらに、愛鷹南・箱根西麓と磐田原台地では、静岡県中部地域の広い空白地を挟んで、その様

相がまったく異なっている。そのため両者の比較が重要であるが、両地域の様相を備えた遺跡が存在しないことがその比較を不可能にしている。この点で重要な資料である小塚遺跡の船野型細石刃核は、愛鷹南・箱根西麓で使用される頁岩なので、愛鷹南・箱根西麓で類例が検出されることを期待したい。

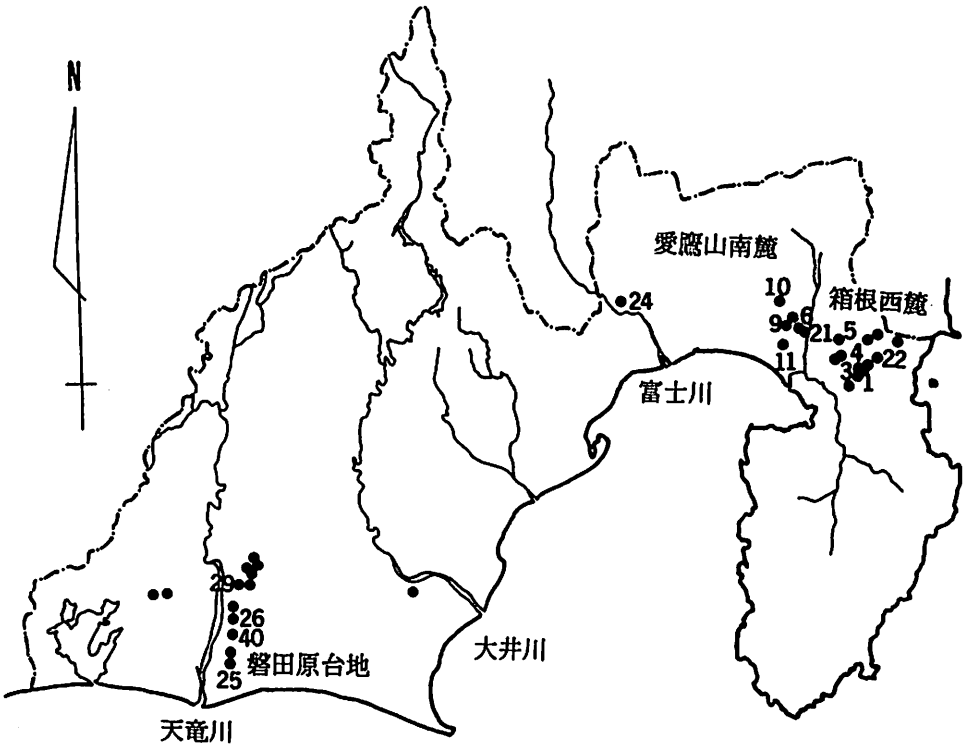
また、現在のところ当地域では削片系細石刃核がみつかっておらず、他の細石刃石器群との関連は不明確である。縄文時代草創期の古い段階では、島田市旗指遺跡で微隆起線文土器が検出されているのみであるが、近年になって草創期の遺跡の検出例が増えつつあるので、今後の調査で出土する可能性に期待したいと思う。

愛鷹南・箱根西麓では函南町上原遺跡が現在調査中で、細石刃核十点以上、細石刃千点以上出土している。磐田原台地では磐田市勾坂中地区遺跡で、他の時期を含め、広大な面積を調査中である。これらの遺跡調査の進展によって、上記の課題が徐々に解決していくことになると思う。

最後に、今回の資料作成で、下記の方々にご協力を得た、感謝いたします。
瀬川裕市郎　鈴木忠司　須磨満　山崎克巳　澁谷昌彦　伊藤恒彦　鈴木敏中
長野康敏　高尾好之　松井一明　太田好治　贄元洋　竹花和晴　竹内直文
進藤貴和子　小野千賀子

6　主要文献

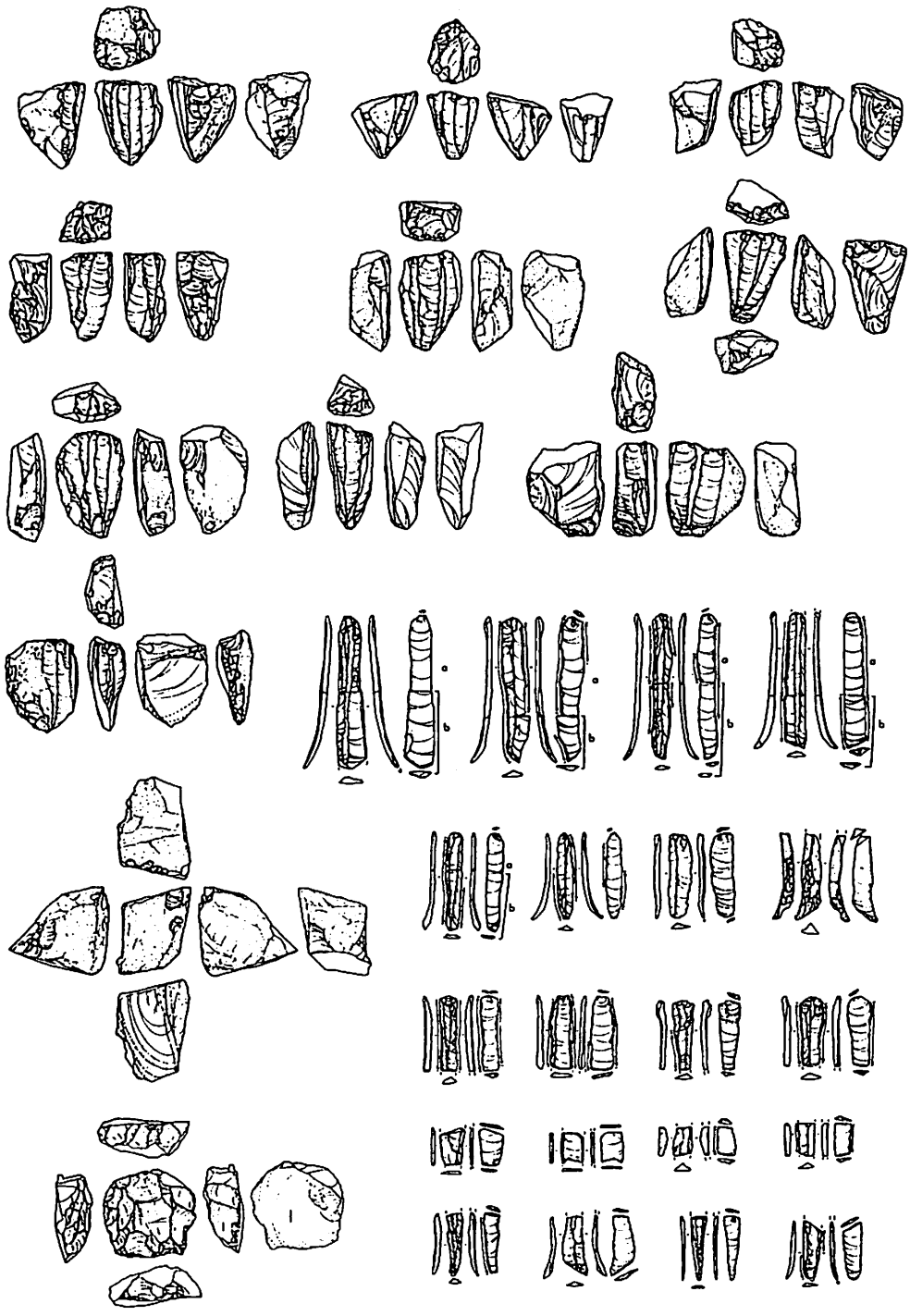
秋本真澄　１９６８　『伊豆の後期旧石器文化図録』
秋本真澄　１９７２　『駿河小塚－静岡県における先土器文化の研究－』
安蒜政雄　１９８４　「日本の細石器文化」　『駿台史学６０』
伊藤恒彦　１９８９　『函南スプリングスゴルフ場用地内
埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』
鈴木忠司他　１９８０　『寺谷遺跡発掘調査報告書』
１９８５　『広野北遺跡発掘調査報告書』
高尾好之　１９８１　「駿河小塚出土の舟底形」『静岡県考古学研究１０』



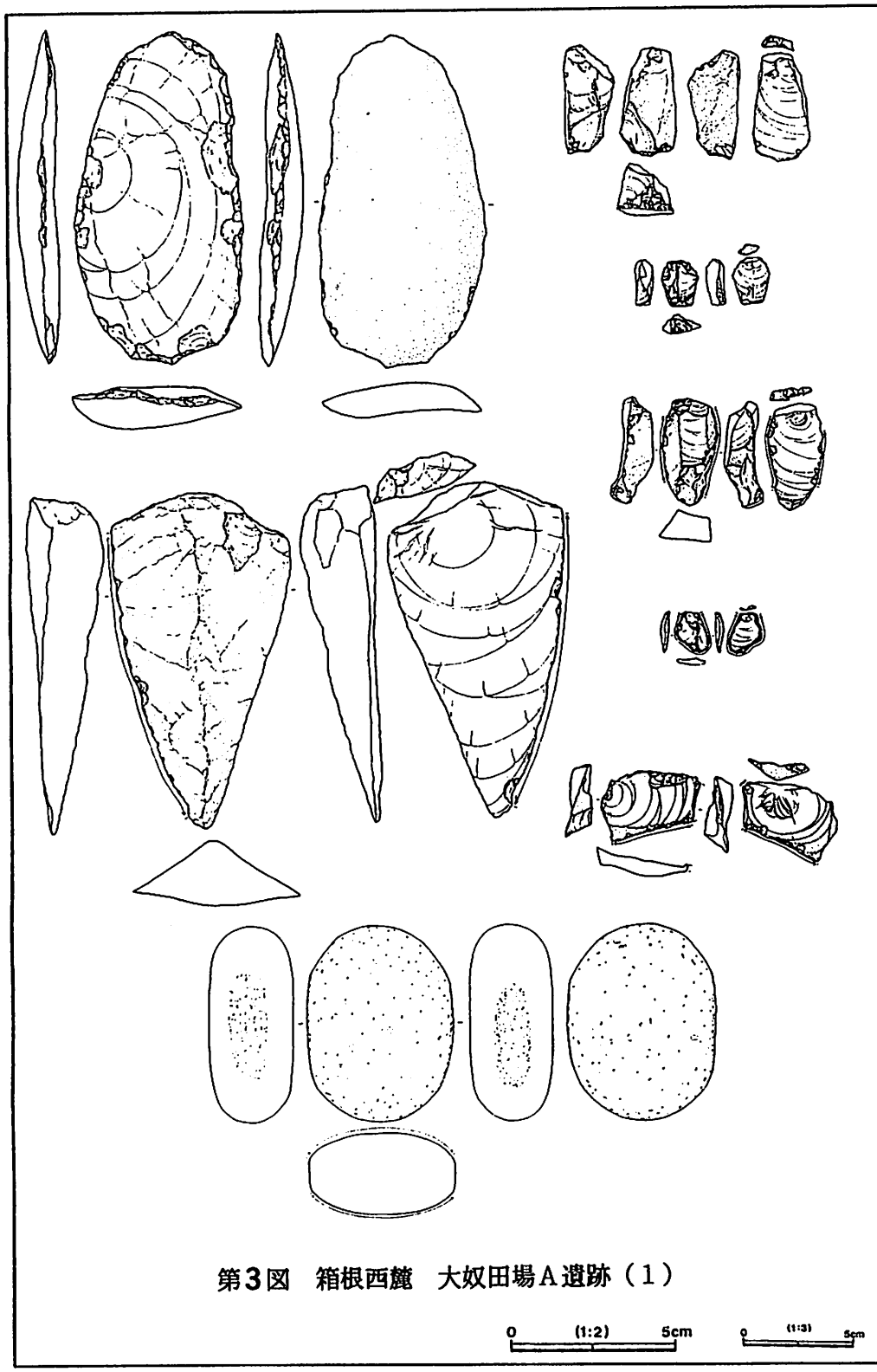
1	大奴田場Ａ遺跡	11	円丸遺跡
3	柳沢Ｃ遺跡	21	尾尻遺跡
4	山中城三の丸遺跡	22	上原遺跡
5	中村Ｃ遺跡	24	小塚遺跡
6	野台遺跡	25	広野北遺跡
9	中見代第Ⅲ遺跡	26	寺谷遺跡
10	休場遺跡	40	勾坂中地区遺跡

＊近接した遺跡は１ドットになっている場合もある。
番号は一覧表の数字に準拠している。

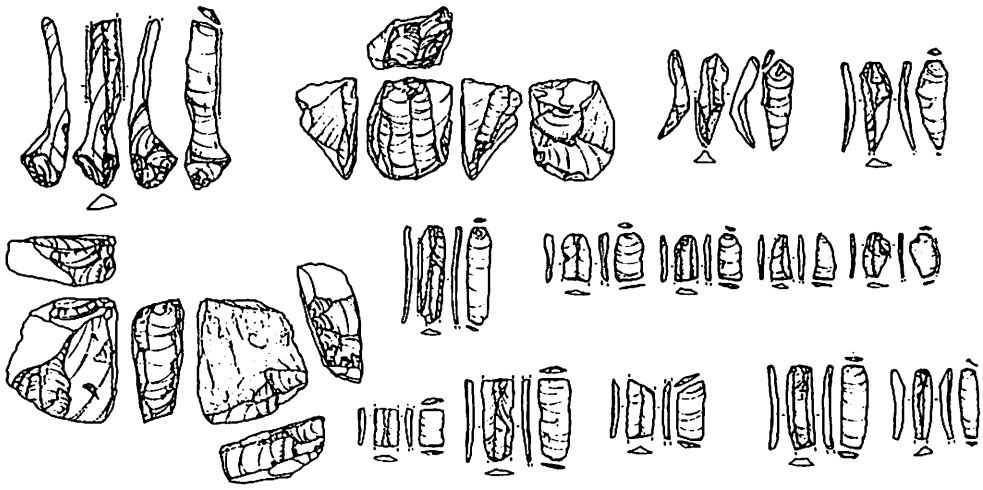
第１図　東海地方東部（静岡県）の細石刃文化遺跡



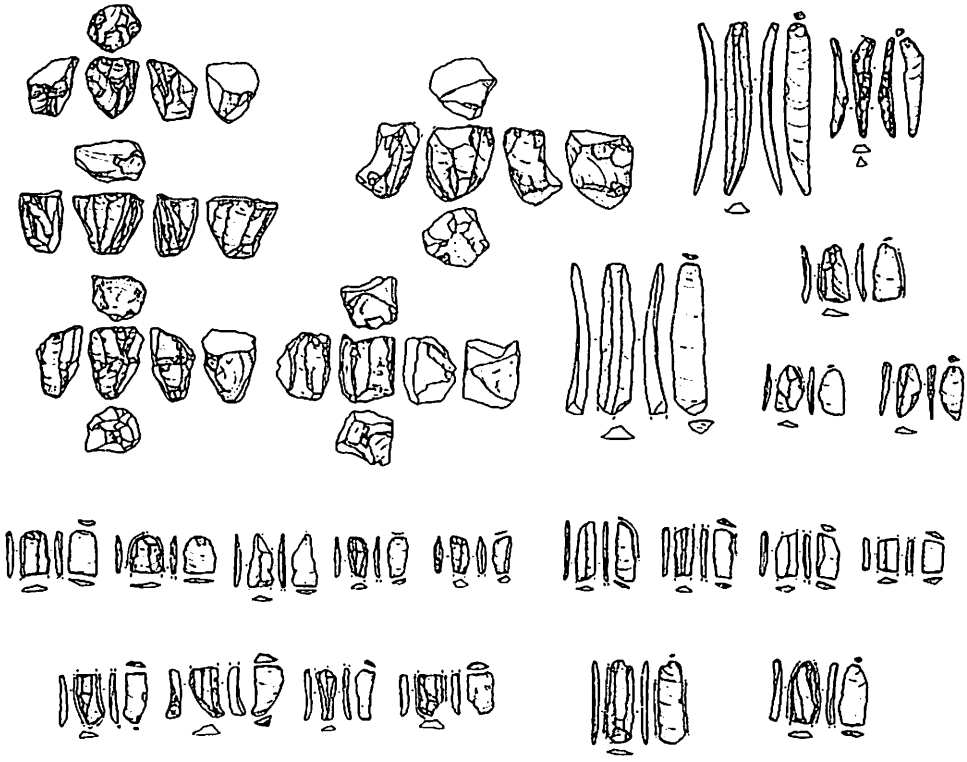
第2図　箱根西麓　大奴田場A遺跡（1）



第3図　箱根西麓　大奴田場A遺跡（1）

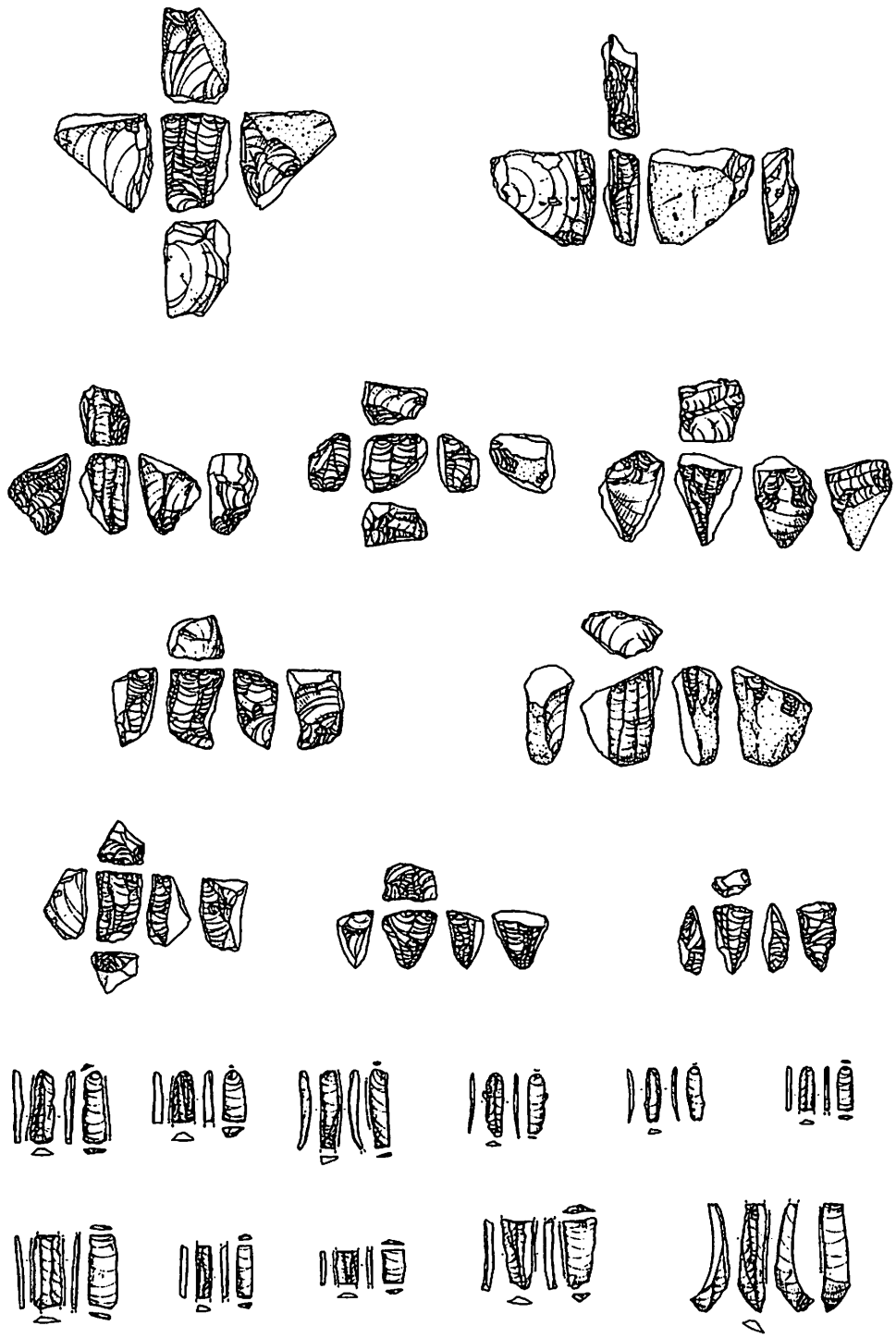


第4図　箱根西麓　柳沢B遺跡（2）

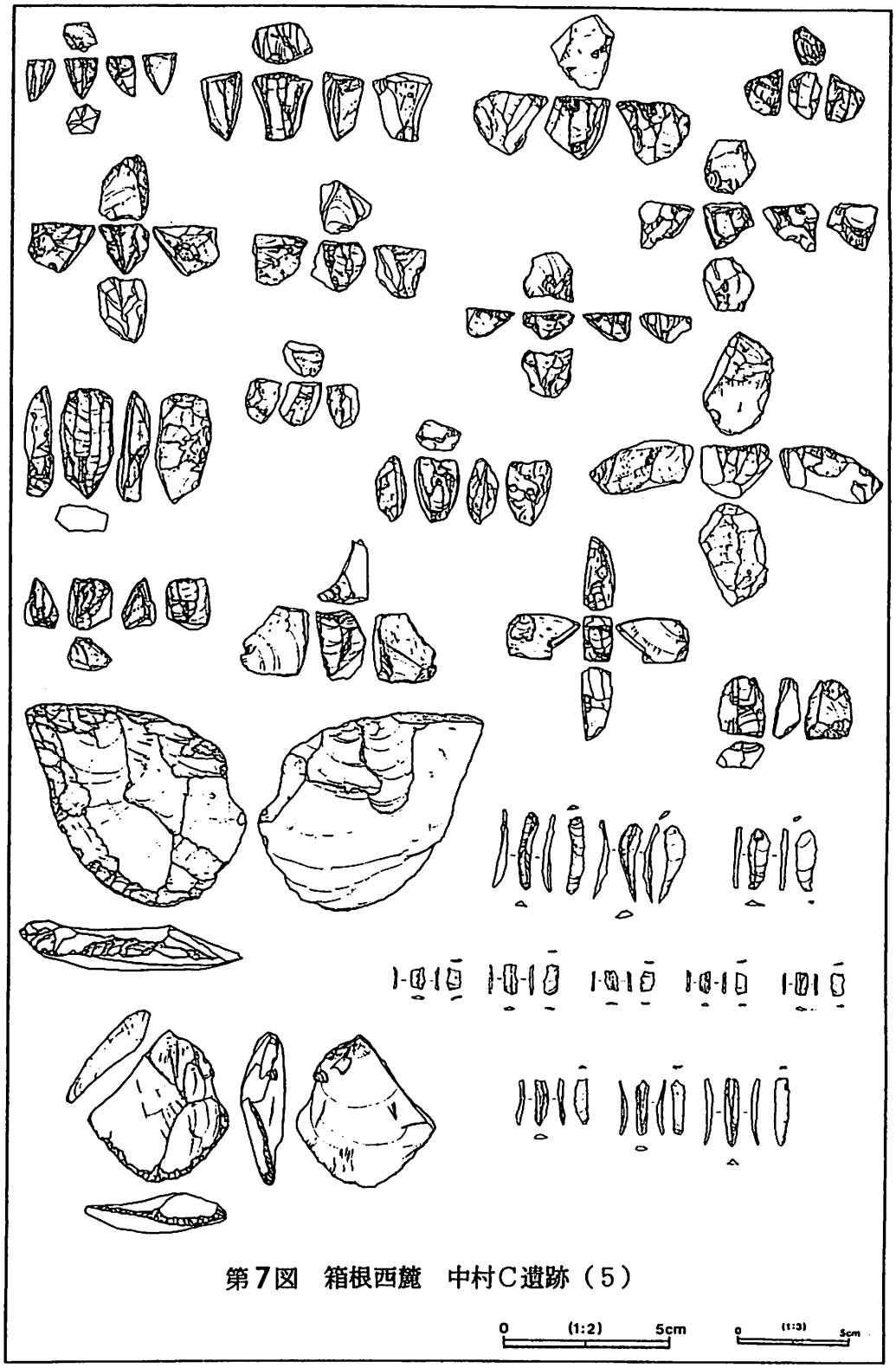


第5図　箱根西麓　柳沢C遺跡（3）

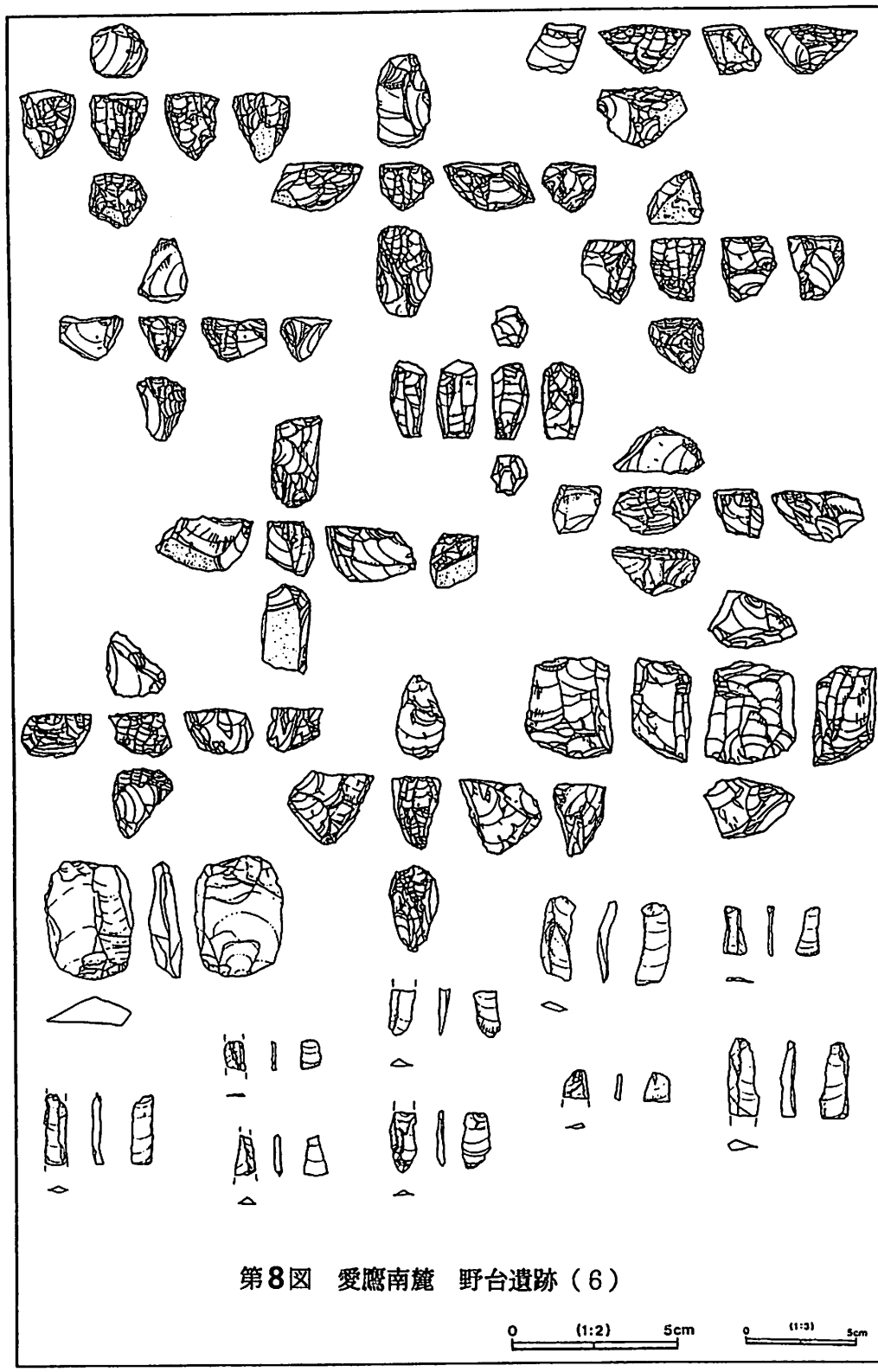
0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm



第6図　箱根西麓　山中城三の丸第1地点（4）



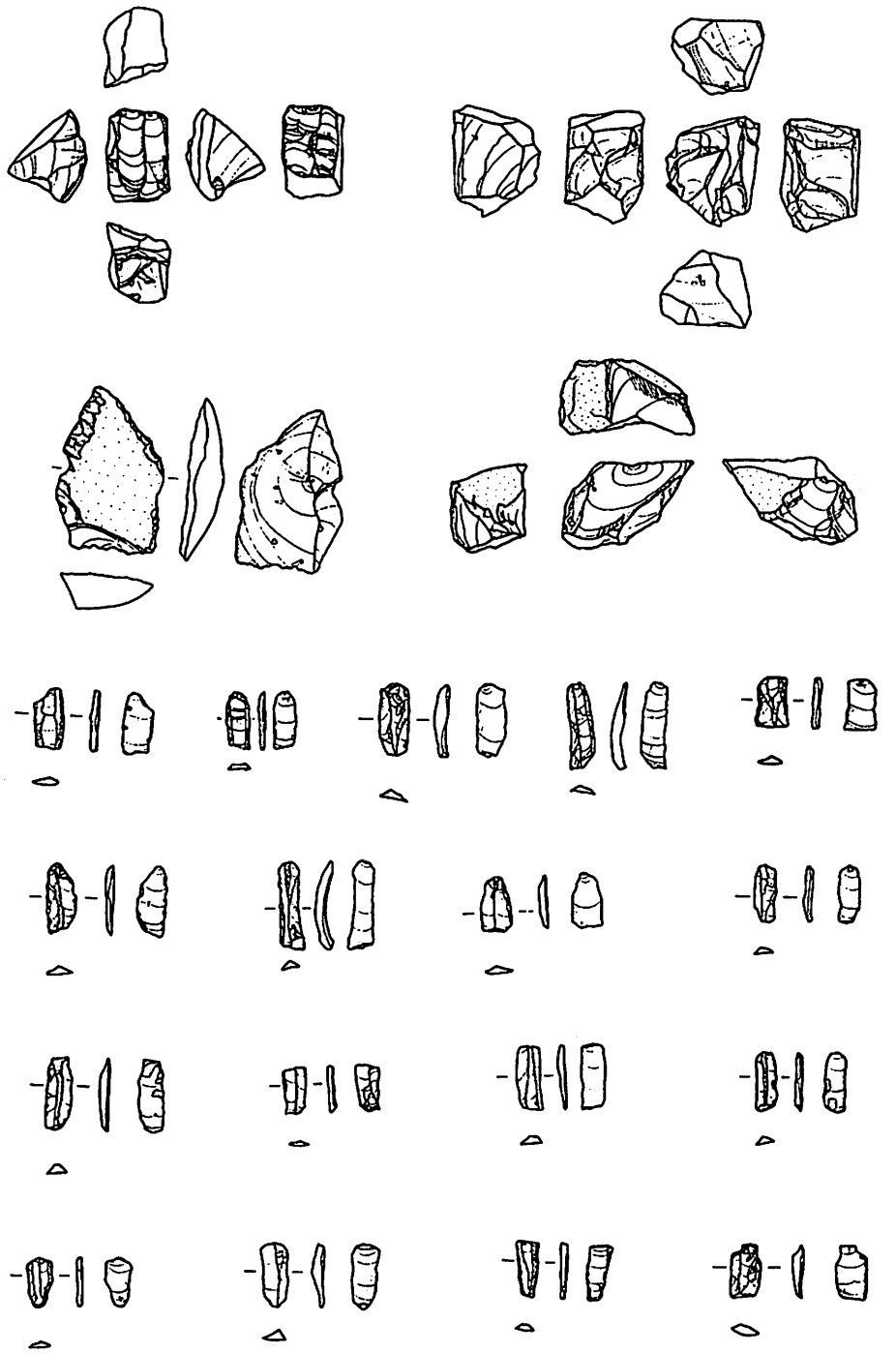
第7図　箱根西麓　中村C遺跡（5）



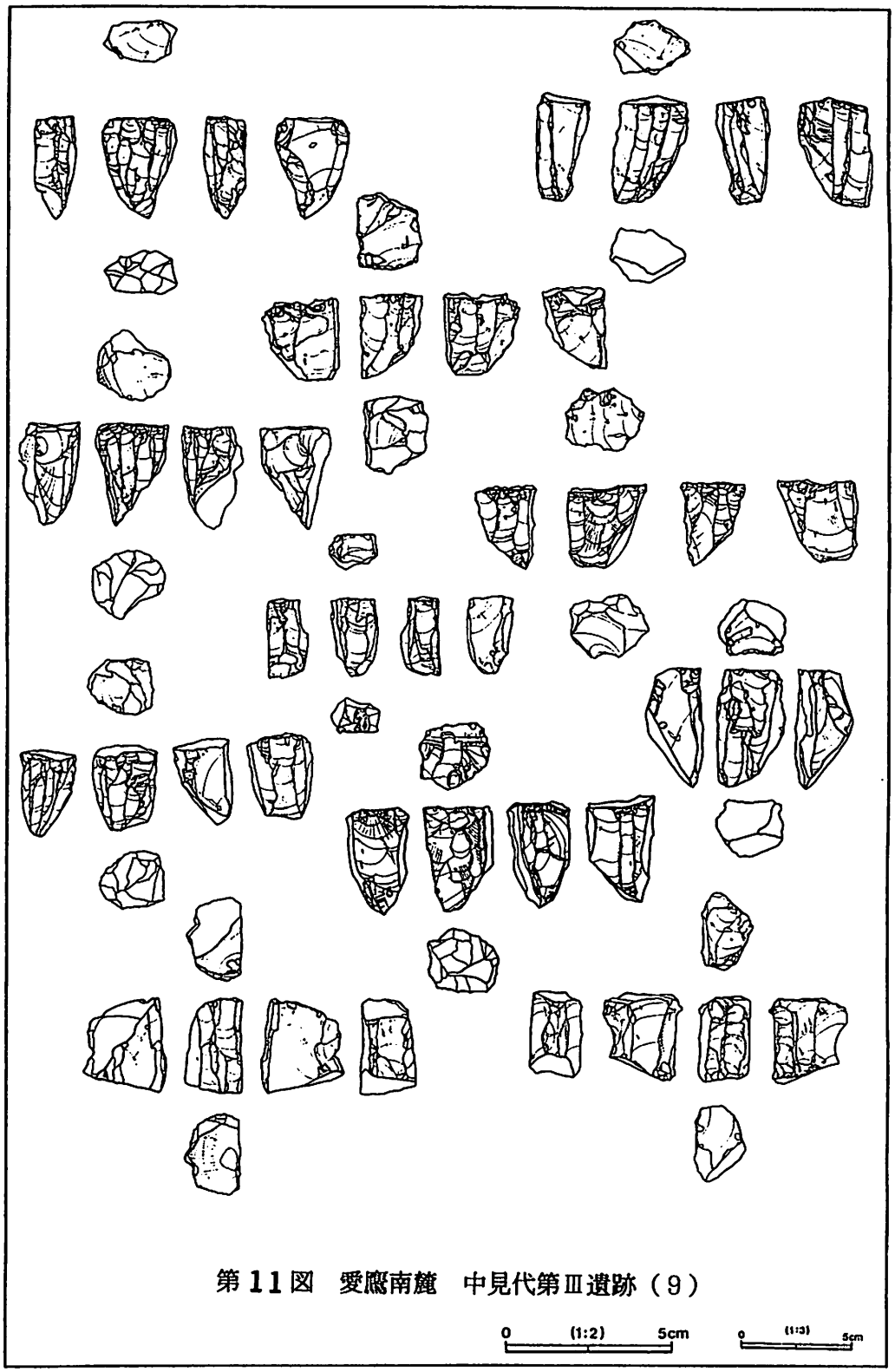
第8図　愛鷹南麓　野台遺跡（6）

第9図　愛鷹南麓　中尾遺跡（7）

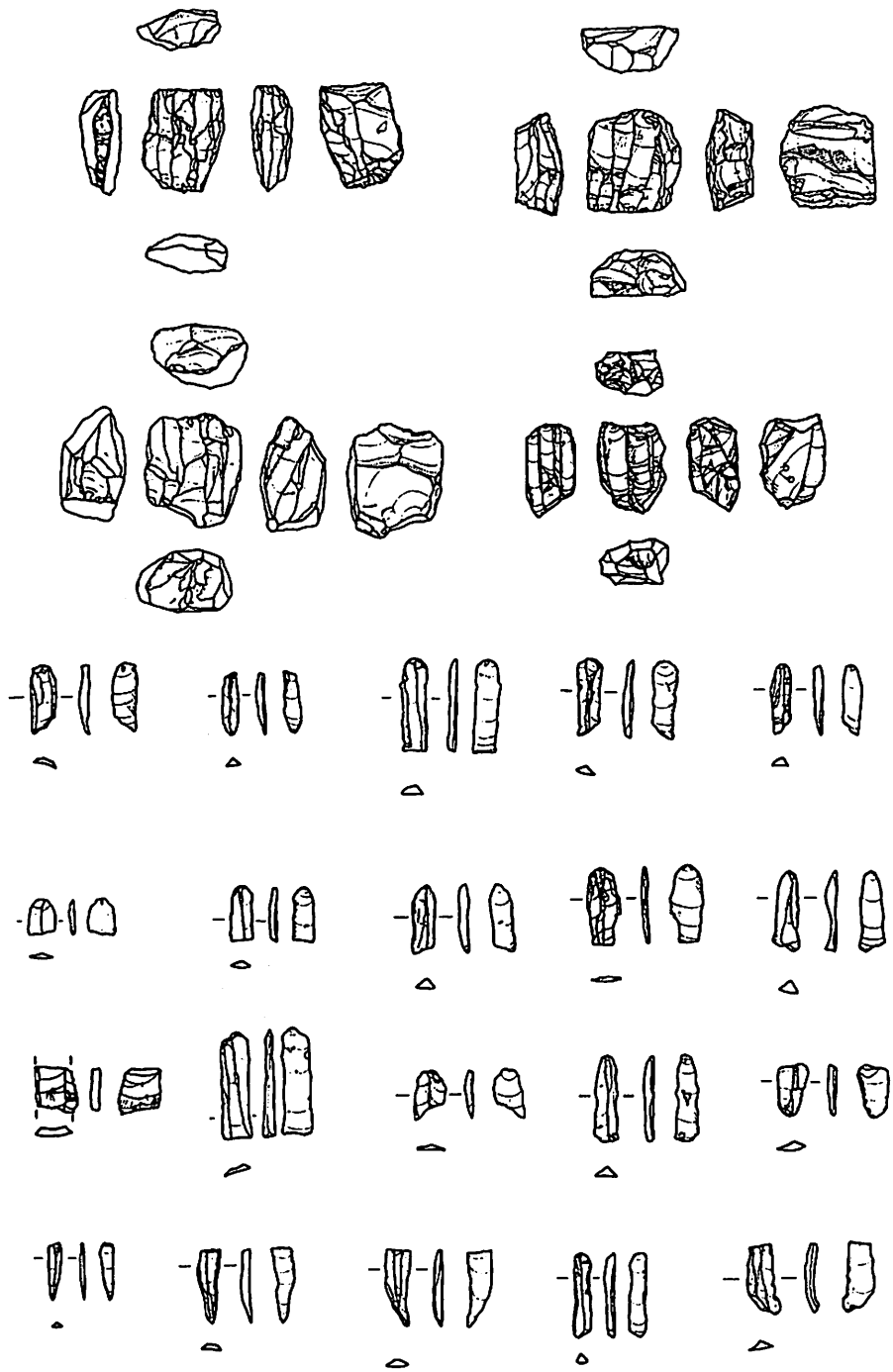
0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm



第10図　愛鷹南麓　中見代第Ⅱ遺跡（8）

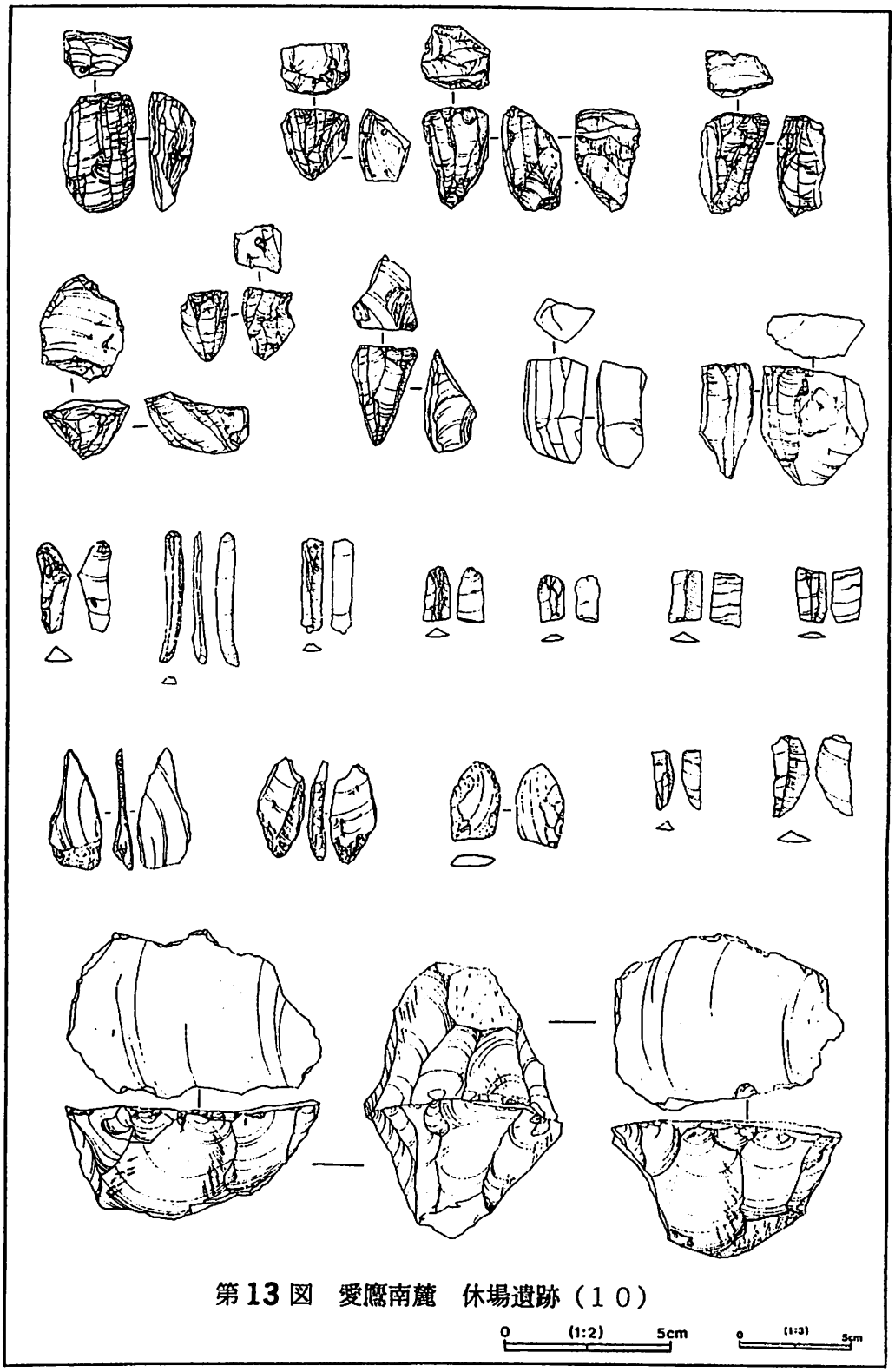


第11図　愛鷹南麓　中見代第Ⅲ遺跡（9）

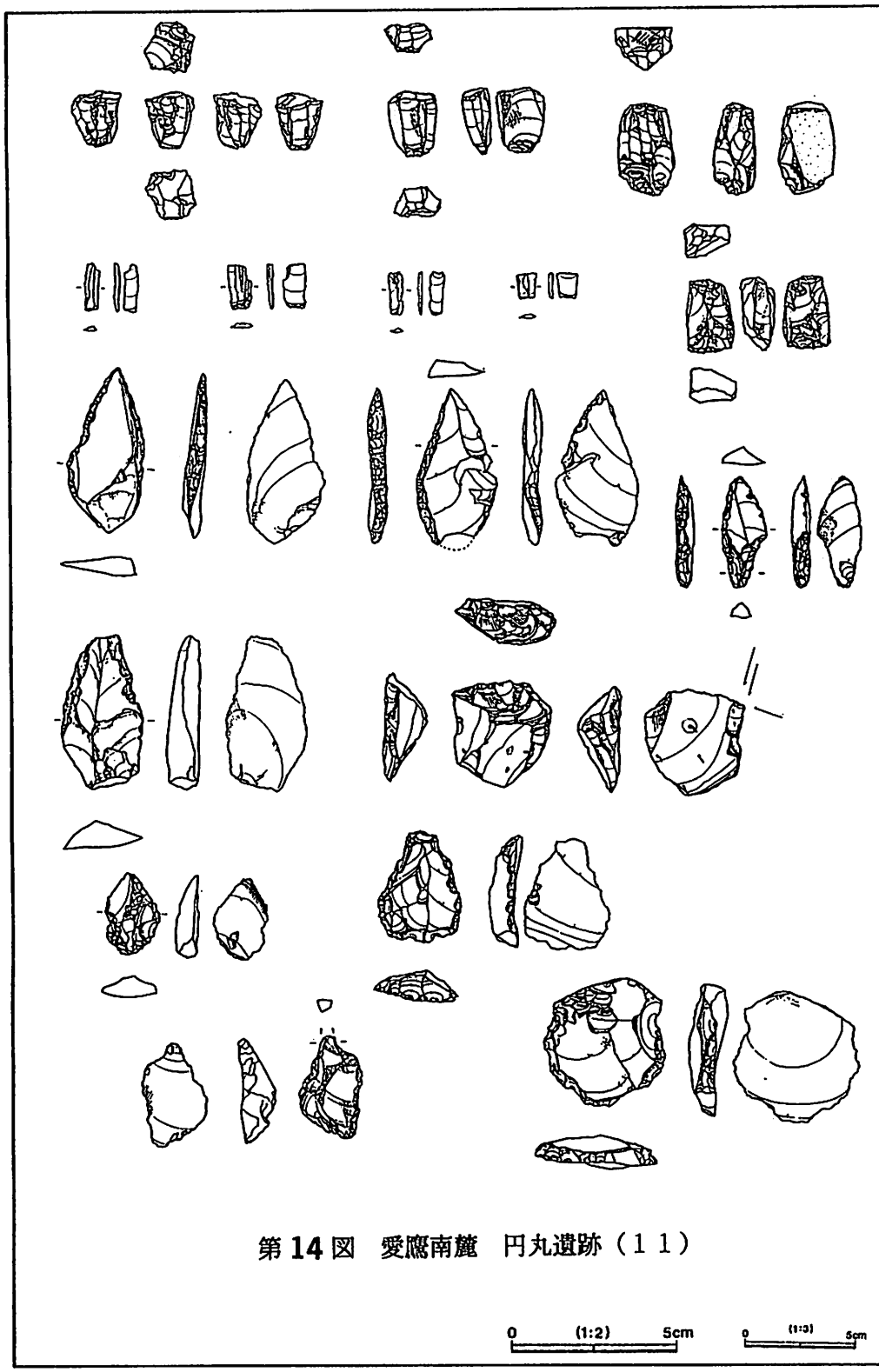


第 12 図　愛鷹南麓　中見代第Ⅲ遺跡（9）

0　(1:2)　5cm　0　(1:3)　5cm



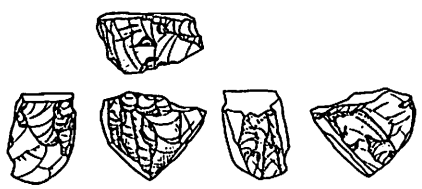
第13図　愛鷹南麓　休場遺跡（１０）



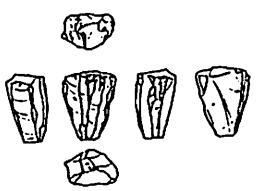
第14図　愛鷹南麓　円丸遺跡（１１）

小平C遺跡

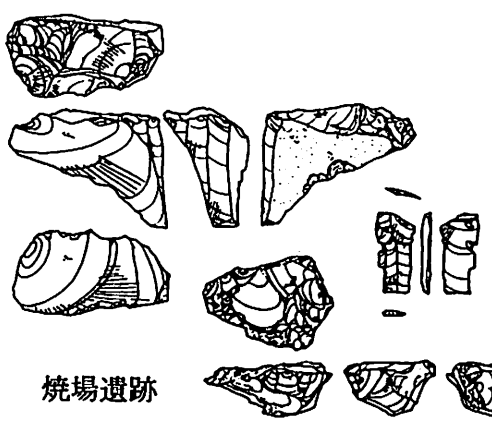
観音洞G遺跡



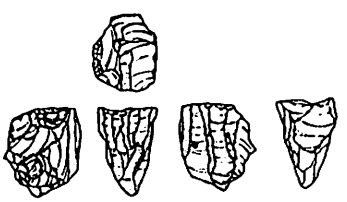
中村分遺跡



五輪遺跡



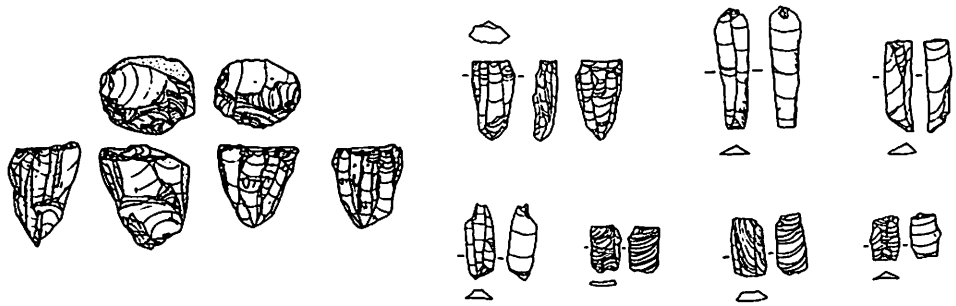
焼場遺跡



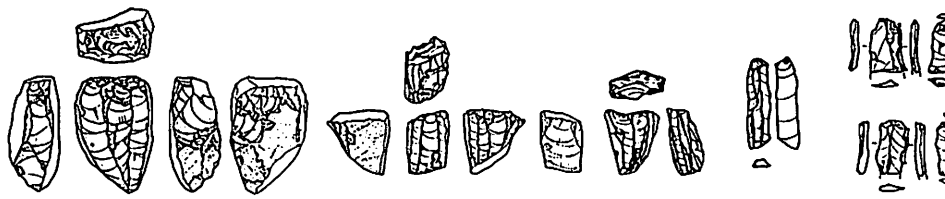
十石洞遺跡

第15図　箱根西麓各地

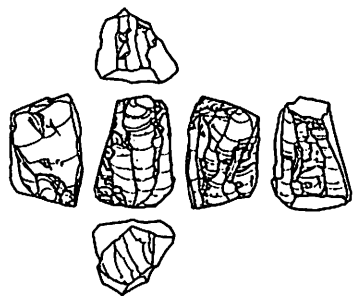
0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm



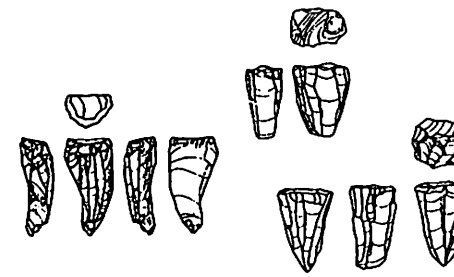
庚申松遺跡



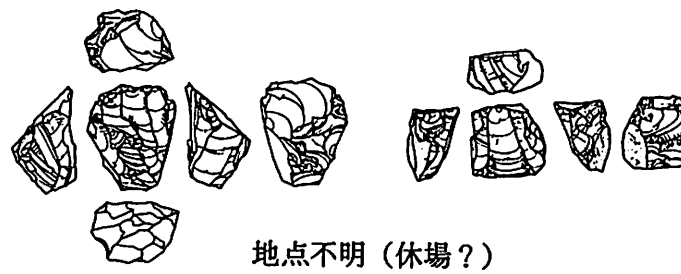
下人原遺跡



台崎遺跡



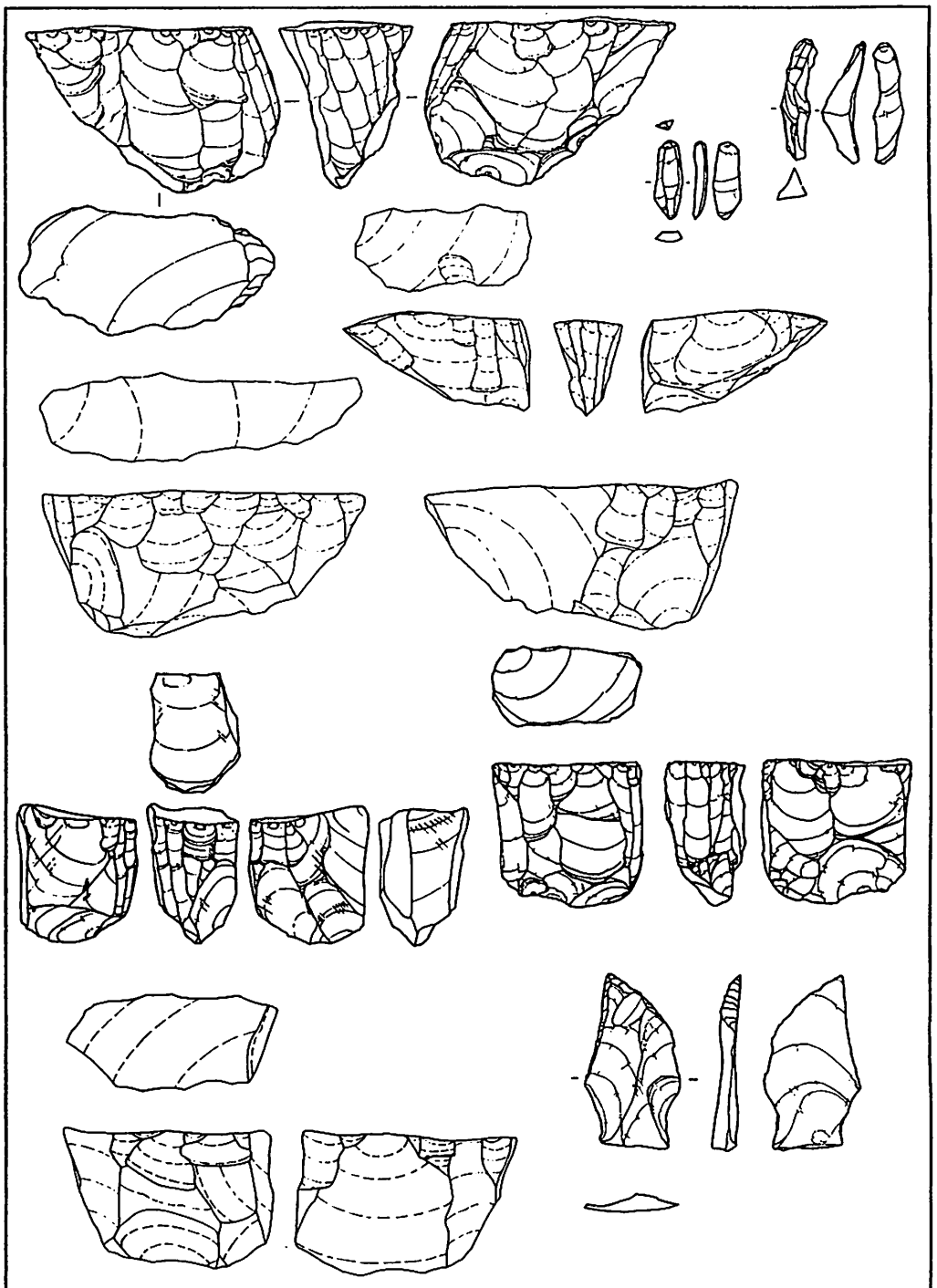
尾尻遺跡



地点不明（休場？）

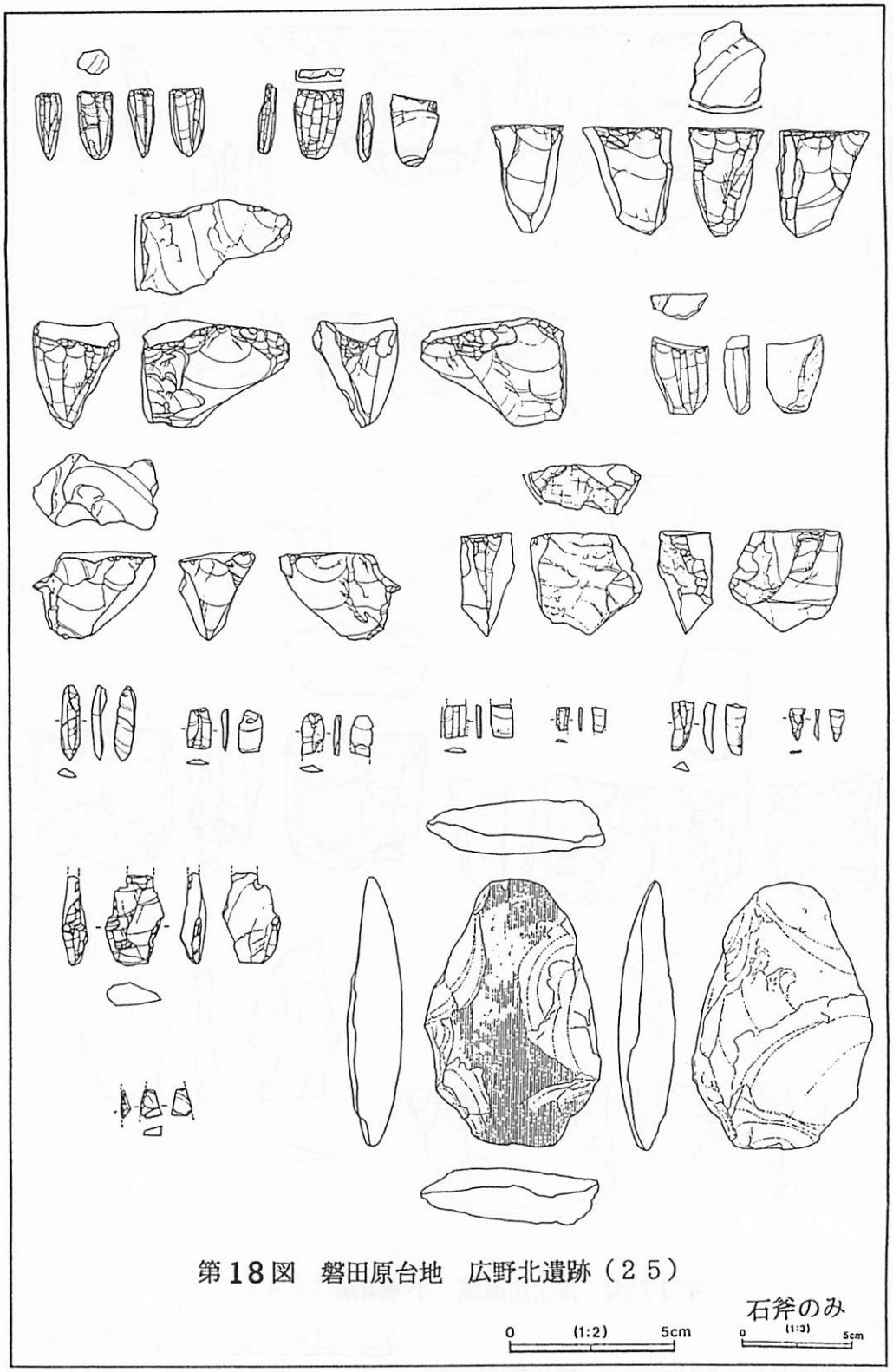
第16図　愛鷹・箱根各地

0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm

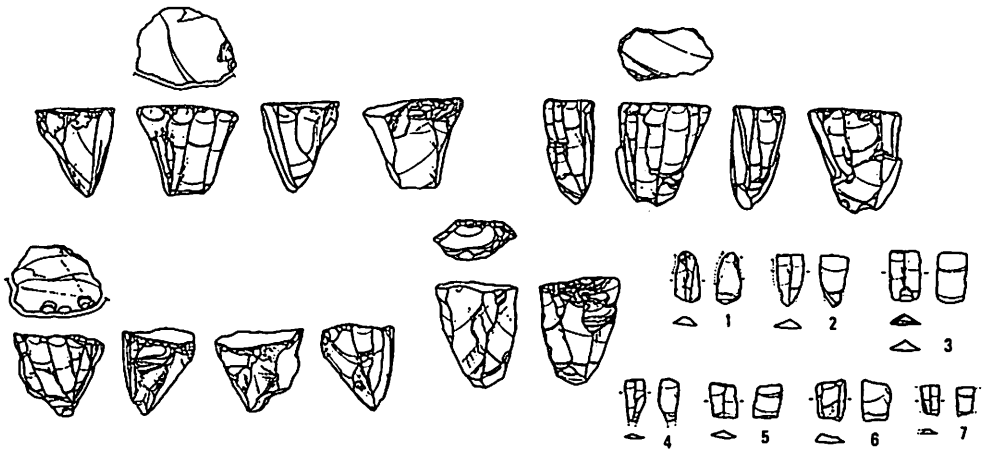


第17図　富士川流域　小塚遺跡（２４）

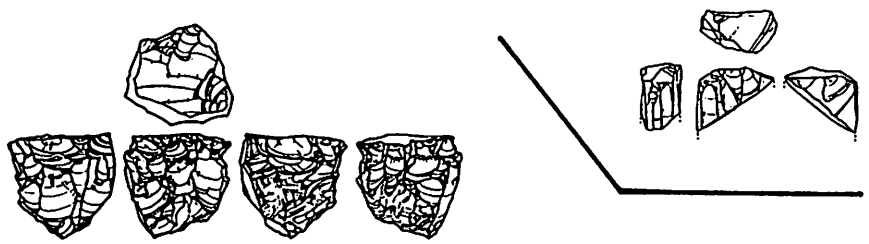
0　(1:2)　5cm　0　(1:3)　5cm



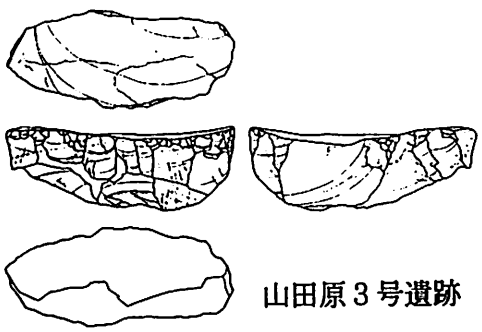
第18図　磐田原台地　広野北遺跡（２５）



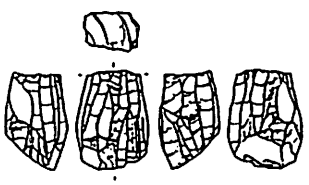
第19図　磐田原台地　寺谷遺跡（２６）



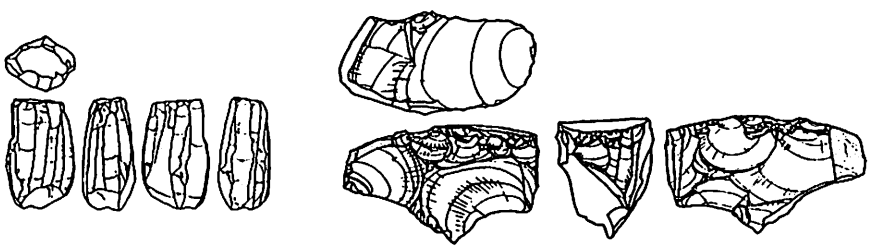
大井川流域　吹木原西原遺跡



山田原３号遺跡



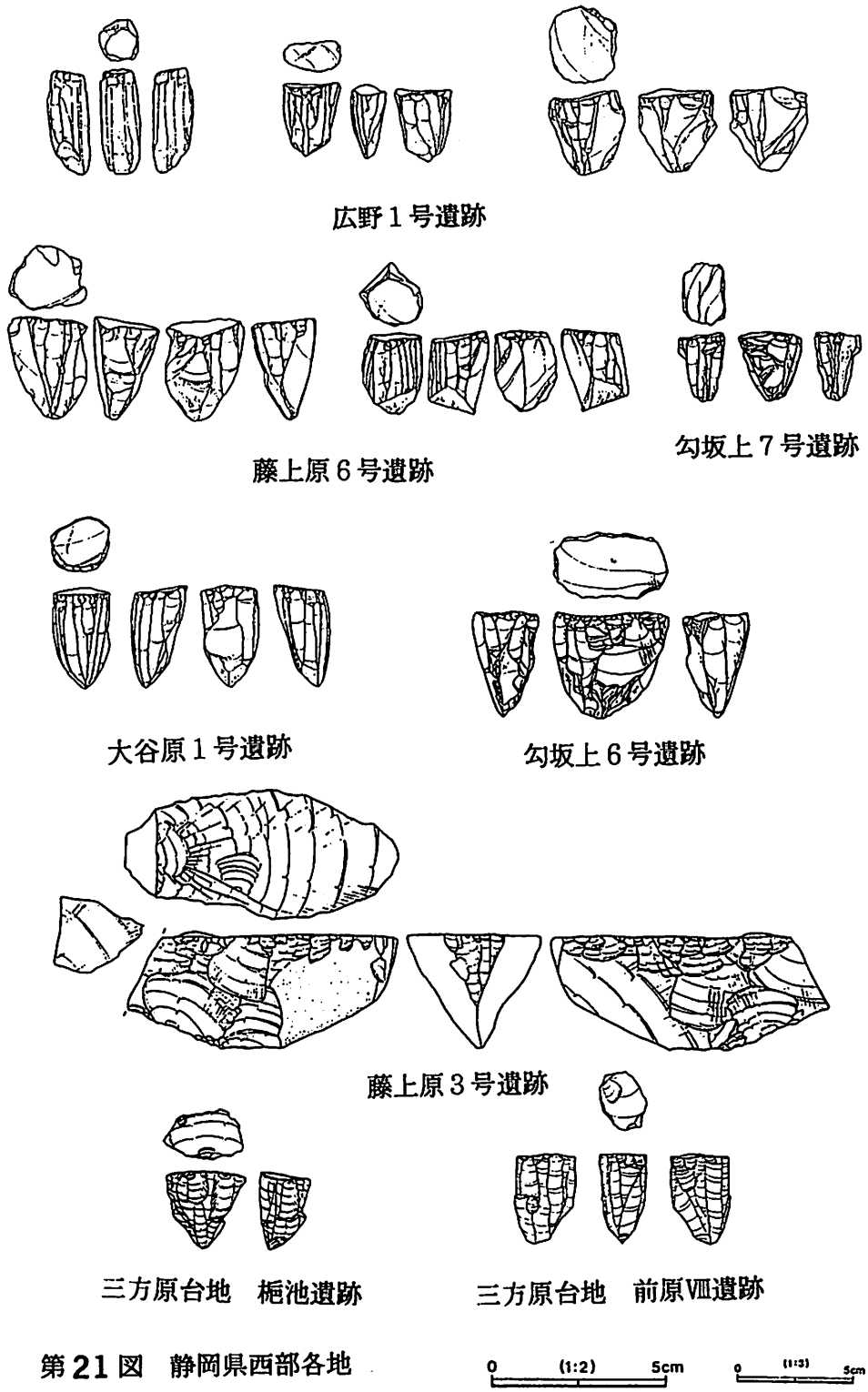
山田西原遺跡



池端前遺跡

第20図　静岡県中・西部各地

0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm



第21図　静岡県西部各地

第 1 表　　東海東部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鐵	土	発掘	所在	所属	備考
1	大奴田場A	750	13	1	4	1	2	?		1		1				有	静岡県田方郡函南町桑原	函南町教委	削器は 石斧の 可能性アリ
2	柳沢B	42	2													有	静岡県田方郡函南町桑原	函南町教委	
3	柳沢C	23	5													有	静岡県田方郡函南町桑原	函南町教委	
4	山中城三の丸第一地点	?	?	?												有	静岡県三島市山中新田	三島市教委	整理中にて組成未定
5	中村C	342	17	?												有	静岡県三島市徳倉字片平山	三島市教委	ナイフ 形石器、槍先形尖頭器などと 混在して出土
6	野台	27	11													有	〃　駿東郡長泉町元長窪野台	長泉町教委	〃
7	中尾	16	5													有	〃　駿東郡長泉町元長窪中尾	長泉町教委	〃
8	中見代第Ⅱ	25	1													有	静岡県沼津市足高字尾上	沼津市教委	〃
9	中見代第Ⅲ	158	30													有	静岡県沼津市足高字尾上	沼津市教委	〃
10	休場	891	19													有	静岡県沼津市足高平家洞?	明治大学 加藤学園	表採資料（分割された石核）は沼津市歴民館保管
11	円丸	4	3		3	1	1					16	2			有	静岡県沼津市中沢田字田丸	沼津市教委	ナイフ 形石器などと 伴出した か 不明
12	小平C	?	?													有	静岡県三島市谷田字葛蒲沢	三島市教委	整理中にて組成未定
13	観音洞G	?	?													有	静岡県三島市観音洞	三島市教委	整理中にて組成未定
14	中村分		?													有	静岡県三島市谷田字台崎	三島市教委	整理中にて組成未定
15	五輪		?													有	静岡県三島市観音洞	三島市教委	整理中にて組成未定
16	十万洞		1													有	静岡県三島市川原ケ谷十石洞	三島市教委	調査中表採
17	焼場	1	27													有	静岡県三島市川原ケ谷	（財）静岡県埋文調査研究所	
18	庚申松	6	2													表	静岡県三島市玉沢	秋本真澄 喜多重介	
19	下人原	3	3													表	静岡県田方郡函南町大竹	三島市教委 秋本真澄	
20	台崎		1													表	静岡県三島町玉沢	沼津市歴史民俗資料館	
21	尾尻	?	3													有	静岡県駿東郡長泉町下長窪	須磨満 秋本真澄	
22	上原	?	10以上													有	静岡県田方郡函南桑原	函南町教委	現在調査中
23	大越	?	5～67													有	〃　熱海市泉元宮上分大ゴウシ	熱海市教委	現在調査中
24	小塚	2	6	17												有	静岡県富士郡芝川町西山小塚	芝川町教委	細石核ブランク 6
25	広野北	153	13	1				1			4	17				有	静岡県磐田郡豊田町高見丘	豊田町教委	
26	寺谷	7	4													有	静岡県磐田市岩田寺谷	磐田市教委	

第 2 表　東海東部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	礫	土				
27	山田原３号		1													表	静岡県袋井市三川山田原	鈴木久雄	
28	山田西原		1													表	静岡県袋井市三川山田原		
29	池端前		2													表	静岡県磐田市大藤12区	池端利雄 磐田市教委	
30	広野１号		3													表	静岡県磐田郡豊田町広野	兼子善夫・鈴木久雄・磐田市教委	
31	藤上原６号		2													表	静岡県磐田市大藤12区	磐田市教委 池端利雄	
32	匂坂上７号		1													表	静岡県磐田市岩田匂坂上	鈴木忠一	
33	大谷原１号		1													表	静岡県磐田市大藤13区	池端利雄	
34	匂坂上６号		1													表	静岡県磐田市岩田匂坂上	鈴木忠一	
35	藤上原３号		1													表	静岡県磐田市大藤12区	松井一明	
36	蛇池		1													表	静岡県浜北市		
37	前原Ⅶ		1													有	静岡県浜松市都田	浜松市教委	
38	広野中安前		2													表	静岡県磐田郡豊田町広野	磐田市教委	
39	広野２号		3													表	静岡県磐田郡豊田町広野	磐田市教委	
40	匂坂中地区	42	35													有	静岡県磐田市岩田匂坂	磐田市教委	現在調査・整理中
41	願合寺		1													表	静岡県三島市山中新田	秋本真澄	
42	海老ノ木平		1													表	静岡県三島市山中新田	秋本真澄	
43	日本平		1													表	静岡県清水市日本平	?	
44	湯ケ洞山		17													有	静岡県田方郡伊豆長岡町南江間地先	伊豆長岡町教委	細石刃核としてはゆ 不明

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝磨器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
礫＝石錘、土＝土器

南関東の細石器文化

西井幸雄

1　研究の経過

１９５４年 芹沢「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」最初の細石器遺跡の報告（根ノ上遺跡）

１９６２年 小田「東京都練馬区中村南町発見のマイクロ・コア」

１９６５年 『日本の考古学（先土器時代）』で「細石刃文化に属するたしかな石器文化はいまだに検出されたいな」

１９７０年 東京：狭山遺跡Ｂ地点報告、舟底形・野岳•休場形・尖頭器が出土

１９７４～ 千葉ニュータウン遺跡群で細石器の遺跡が調査・報告される（向原遺跡・木苅峠遺跡・復山谷遺跡等）

１９７９年 報恩寺遺跡の報告で、細石器に伴う礫器状の石器に対し、がそれ自体礫器なのか、石核かであるのか問題提示。

１９８０～ 大和市で上草柳遺跡他細石器の遺跡が多数調査報告される。野岳•休場形・舟底形等異なるタイプの細石核が複数の文化層から検出され、細石器石器群が層位的に細分可能になった。

１９８６年 代官山遺跡報告。野岳•休場形の細石核が２枚の文化層から検出される。
上野遺跡報告。削片系細石核と尖頭器・石斧、土器等が共伴して検出される。

１９８７年 木戸場遺跡報告。削片系細石核と荒屋型彫器・角二山型掻器が検出される。

１９８９年 大林遺跡報告。多数の野岳•休場形細石核が検出される。

１９９１年 中堀北遺跡報告。削片系細石核と削片、尖頭器が検出される。

１９９３年 白草遺跡報告。削片系細石核と荒屋型彫器・角二山型掻器が検出される。スキー状削片に剥片、彫器に削片等の接合が観られた。

2　遺跡の分布

A 下総台地　　印旛沼周辺に先土器時代の遺跡が密集している。細石器石器群も本地域に多くの遺跡が観られる。野岳•休場形細石核を有する遺跡が多いが、近年木戸場遺跡の報告、高岡大山遺跡・大網山田台遺跡と削片系細石器の調査例が確実に増えている。この二者の遺跡は近接して検出されるが石器組成・石材等

でまったく異なり、遺跡内での共伴例は現段階では観られない。

B　大宮台地　近年本地域の先土器時代遺跡の調査が進んだが、細石器石器群の良好な遺跡は検出されていない。水村氏の論文で多くに遺跡が取り上げられているが、発掘調査で石器集中として確認されたのは大和田高明遺跡だけである。

C　櫛引台地　白草遺跡から削片系の細石器と荒屋型彫器がまとまって検出されている。本地域は縄文草創期の遺跡が多数報告されているが、先土器時代遺跡の調査は端緒についたところである。今後、土層の堆積・先土器時代終末期等と多くの課題を有する。

D　武蔵野台地　最も多くの先土器時代遺跡の調査進んでいる地域であるが、細石器石器群の内容は貧弱で、細石核が4点以上検出されて遺跡は数えるほどで有る。小規模の遺跡は各小河川流域に観られる。

E　多摩丘陵　多摩ニュータウン関連で多くの遺跡が調査報告されている。№769遺跡では野岳・休場形細石核20点と多数検出され、武蔵野台地と異なる様相を呈する

F　相模野台地　相模野台地の境川・引地川・寥川の流域に先土器時代遺跡が密集する。本地域は恵まれた堆積層によって細石器石器群が層位的に検出されており、細石器石器群の編年的細分の寄与する。また、野岳・休場形細石器と舟底形細石器が遺跡内で層位的に検出され、関東地方における細石器文化の波及の実態研究に重要な意味をなす地域である。

3　細石器石器群

A 下総台地

木戸場遺跡　近接する2つの石器集中から、削片系舟底形細石核2点と荒屋型彫器・角二山型掻器・掻器・削器によって構成されている。細石核は削片系と思われるが、削片は検出されていない。

石材は剥片類の9割以上を頁岩が占める。

大林遺跡　第Ⅰ文化層として細石器石器群を含む石器集中が4箇所検出された。野岳・休場形の細石核34点と削器・掻器・彫器・礫器状の石核によって構成されたいる。

石材は細石器関連のものはチャート・凝灰岩・珪質頁岩が用いられ、黒耀石はまったく観られない。その他の剥片石器は黒色緻密安山岩を主体とし珪質粘板岩等が用いられ、礫器状の石器は砂岩・ホルンフェルス等が用いられている。

C 櫛引台地

白草遺跡　削片系船底形細石核原形１点と、スキー状削片３点及びそれに接合する剥片数点が検出されている。石器は荒屋型彫器・削器・掻器・ナイフ形石器・礫器等が出土し、角二山型掻器、荒屋型彫器21点が特徴的な組成をなしている。石材は珪質頁岩が99%を占める。

D 武蔵野台地

根ノ上遺跡　1985年度の発掘調査では細石器の文化層は検出されなかった。採集された細石核２点の石材は黒耀石とチャートである。

中村南遺跡　1972年度の発掘調査では細石器の文化層は検出されなかった。採集された細石核10点の石質は黒耀石・硅岩・瑪瑙である。

狭山遺跡B地点　野岳・休場形細石核と舟底形細石核、尖頭器が検出された。遺物分布ではこの三者を分離できない。
石材は野岳・休場形細石器は黒耀石、舟底形細石核は頁岩、尖頭器は安山岩を主にチャート砂岩等が用いられている。

下里本邑遺跡　河成低地部かの礫床上より、野岳・休場形細石核と細石刃が出土している。平面分布で撚糸文土器群・ナイフ形石器等が重複しており、細石器の石器構成を抽出することは難しい。
石材は細石刃の２点にチャートが観られるが、全体の９割以上が黒耀石である

E 多摩丘陵

多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo.388遺跡　石器集中２箇所が検出され、野岳・休場形細石核と打製石斧１点が出土。また、礫器状の石器に剥片が接合している。
石材は細石核は黒耀石、打製石斧はホルンフェルス、礫器状の石器及び接合資料は砂岩を用いている。

多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo.769遺跡　石器集中８箇所が検出されたいる。野岳・休場形細石核20点は本地域で最大級の遺跡である。細石器とナイフ形石器の共伴等の問題が在るようであるが、報告書に全容が提示されていない為、不明である。
石材は細石核・細石刃に関し黒耀石が主体を占めているようだ。

F 相模野台地

勝坂遺跡　削片系の舟底形細石核と尖頭器・有茎尖頭器・削器・土器が出土しており、等該期の住居跡状遺構が検出されている。
石材は凝灰岩・安山岩を主に用いている。

長堀北遺跡　削片系舟底形細石核原形・舟底形細石核とファースト削片・スキー状削片と多数の大形尖頭器・打製石斧で構成されている。

石材は細石器関連は安山岩を中心に凝灰岩・チャート、尖頭器は凝灰岩を主に用いている。

上野遺跡　本遺跡では細石器石器群を含む文化層が２枚検出さ、その内容は大きく異なった。第Ⅱ文化層（L1S層）：舟形底細石核と削片、尖頭器・打製石斧・磨製石斧・ナイフ形石器？・削器・掻器・土器等が検出されている。

石材は細石核及び細石刃は玄武岩を主に凝灰岩・粘板岩・黒耀石が用いられている。また、他の石器群においても同様の傾向を示す。

第Ⅲ文化層（B.B0層）：分布は大きく２群に別れる。野岳•休場形細石核と石錐・削器・掻器・礫器状の石核によって構成される。

石材の９割以上を黒耀石で占め、礫器状の石核は砂岩・凝灰岩等である。

上草柳遺跡第１地点　近接しＡ・Ｂ二つの石器集中が検出されている。Ａは野岳•休場形細石核と尖頭器。Ｂは野岳•休場形細石核と舟底形細石核、その細石核素材、尖頭器で構成されている。

石材は野岳•休場形細石核は黒耀石、舟底形細石核等は凝灰岩・頁岩を用いている。

かしわ台駅前遺跡　石器集中がL1H層とB.B0層にそれぞれ１箇所検出された。

BB0層からは野岳•休場形細石核１点、L1H層では野岳•休場形細石核と石錐・削器・礫器状の石器によって構成されている。細石器石器群が遺跡内で分層された例であるが、石器群の特色からはL1H層とB.B0層の石器を分ける積極的根拠が観られない。

石材は主に黒耀石を用いている。

下鶴間長堀遺跡　細石核は舟底形と角柱状に分られ削器・礫器によって構成される。近接して尖頭器を主体とした石器集中が観られる。

石材は凝灰岩を主に用いている。

上和田城山遺跡　本遺跡では細石器石器群を含む文化層が２枚検出さた。第Ⅰ文化層（L1S層）規格性の弱い舟底形細石核が主体をなす。第Ⅱ文化層（B.B0層）野岳•休場形細石核と尖頭器・削器で構成される。遺跡内における分層によって異なる細石核の様相が捉えられた。

石質は第Ⅰ文化層では凝灰岩を主に用い、第Ⅱ文化層では黒耀石を主体としている。

報恩寺遺跡　野岳・休場形細石核と鋸歯状で粗い加工の削器・掻器・石錐・礫器状の石器が多数検出された。本遺跡によって細石器段階に伴う礫器状の石器が、それ自体が石器なのか、石核なのか問題点とし提示された。

石質は細石核及び細石刃が黒耀石と珪岩が主体。その他の石器（削器・掻器・石錐）は黒耀石・珪岩・砂岩・安山岩と多岐にわたり、礫器状の石器は凝灰岩・砂岩を用いている。

代官山遺跡　本遺跡では細石器石器群を含む文化層２枚が検出された。第Ⅱ文化層（L1S層）からは野岳・休場形細石核と尖頭器・ナイフ形石器。

第Ⅲ文化層（B.B0層下半部からL1H層）からは多数の細石核と尖頭器・掻器・削器で構成されている。細石核が36点とまとまっているのに対し、その他の器種・礫器類が殆ど観られず単純な石器組成を占めてしている。また、尖頭器は細石器の遺物集中と約20m離れて出土している。豊かな接合資料によって代官山細石刃製作工程が復原されている。

石材は第Ⅱ・Ⅲ文化層共に黒耀石が主体をなし、特に第Ⅲ文化層では漆黒で小形の角礫状を呈する黒耀石を特徴的に用い、石材組成の中で黒耀石の比率は93%をとなっている。

4　細石器文化の様相

野岳・休場形細石核は複数の剥片剥離技術が共存している。細石器関連の剥片剥離は千葉県でチャート、凝灰岩、珪質頁岩等、非黒耀石主導型。武蔵野台地・相模野台地等では黒耀石主導型である。その他の剥片石器関連は石材は多岐にわり、当該地域でよくみられる石材が用いられている。石器組成は彫器の占める割合が低く、掻器・削器等特徴的なものはみられない。報恩寺遺跡の報告で注目された礫器状の石器をどのように捉えるか問題は大きい。また、細石器関連の石器群がみられなくとも、層位的に礫器状も石器がまとまって検出された場合その遺跡をいかに評価すべきか問題になる。

野岳・休場細石器と尖頭器・ナイフ形石器の共伴に関しては、上草柳第１地点遺跡で２箇所の石器集中内で尖頭器と細石器が検出されている。また、下向山遺跡・清橋遺跡等で細石器の集中と接するように尖頭器の含む石器集中が観られた。ナイフ形石器が細石器と一緒に検出された例は幾例か報告されている。

削片系舟底形細石核で石材に珪質頁岩を用い荒屋型彫器・特徴的な掻・削器を組成する遺跡が利根川流域で検出されている（白草・木戸場遺跡）。当遺跡では石核の調製剥片を素材に各種石器（荒屋型彫器・掻器・削器）を作成するなど一つの製作工程で石器構造を形成している。

その為か、珪質頁岩と言う地域を越えた均一な石材が占める割合が非常に高い。石器組成の特徴も荒屋遺跡・角二山遺跡と緊密な関連が伺える。

削片系船底形細石核と尖頭器を伴う遺跡が、武蔵野台地・相模野台地で複数調査されている（狭山遺跡Ｂ地点・長堀北遺跡他）。また土器を伴う遺跡例（上野遺跡・勝坂遺跡）も増えている。当該遺跡は前者と異なり、荒屋型彫器を含まず、石材も凝灰岩等の在地のものを用いている。

非削片系舟底形細石核は相模野台地特に大和市周辺で多数報告されている。それを観ると石材は在地のものを用い、彫器は貧弱である。また、各種石器の製作は荒屋型彫器を有する削片系細石器群でみられる石材までを含めた強い規範はみられない。

5　細石器文化研究の課題

細石器の編年的細分。相模野台地の恵まれた堆積層によって、細石器石器群が複数の文化層・自然層から検出されている。遺跡内で複数文化層が検出された細石核を観ると、代官山遺跡では野岳•休場形→野岳•休場形、上野遺跡では野岳•休場形→削片系舟底形細石核、上和田城山遺跡では野岳•休場形→舟底形細石核となる。

狭山遺跡Ｂ地点で舟底形・野岳•休場形細石核と尖頭器が検出されている。この三者の解釈が編年的細分を行うなかで意味をもつと考えられる。

野岳•休場形細石核と尖頭器・ナイフ形石器の共伴関係が問題となっている。細石核・尖頭器・ナイフ形石器が、それぞれどの段階のどのような形態をしているのか、遺物分布でどのような状況にあるのか、当該石器文化層の上下にある石器群との関連、石材・母岩の関係等々解決しなければならない問題が多い。

利根川流域から削片系舟底形細石核を含む石器群が検出されている。近接して観られる野岳•休場形細石器とは石材・石器組成・剥片剥離等で大きく異なる。現段階で各遺跡内での二者の共伴例が無いため、編年的前後関係等の解明は今後の課題である。

削片系舟底形細石核は利根川流域と大和市周辺から検出されている、前者が珪質頁岩を用い荒屋型彫器と特徴的な掻器・削器を組成するのに対し、後者は在地系の石材を用い尖頭器・土器を共伴する場合が多い。この二者の分布の違い、編年的前後関係等が問題となる

6　主要文献

芹沢長介　1954　「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」『駿台史学 4』駿台史学会

鈴木次郎・矢島國雄　1979　「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群」『神奈川考古第6号』神奈川考古同人会

千葉県文化財センター　1984　『房総ライブラリー1 先土器時代』千葉県文化財センター

大和市　1986　『大和市史 7 資料編考古』大和市

神奈川県立埋蔵文化財センター　1986　『代官山遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター

堤　隆　1987　「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究 第13号』大和市

砂田佳弘1988　「相模野の細石器 －その発生と展開に向けて－」『神奈川考古第24号』神奈川考古同人

西井幸雄　1988　「関東地方細石器文化小考」『転機 2号』

水村孝行　1988　「埼玉の細石刃文化に関する覚書」『紀要-15』埼玉県立博物館

橋本勝雄　1989　「東日本の細石器文化－東北・北陸・中部地方・関東・東海地方の研究動向－」『考古学ジャーナル №306』

千葉県文化財センター　1989　『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』千葉県文化財センター

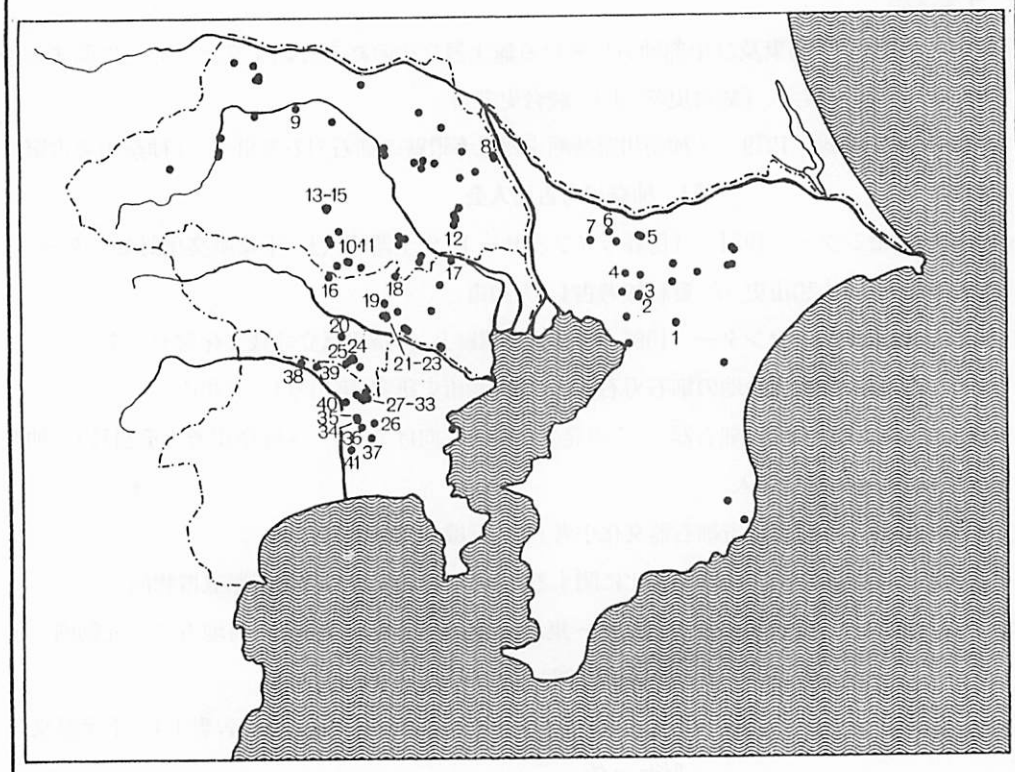
川口 潤　1990　「埼玉県白草遺跡の細石刃文化 －北方系細石刃文化の拡散－」『考古学ジャーナル №324』

堤　隆　1991　「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究 第17号』大和市

佐藤宏之　1992　「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学 大学院紀要 第29号』法政大学

桜井美枝　1992　「細石刃石器群の技術構造 －山形県角二山遺跡の分析－」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会編

栗島義明　1993　「湧別技法の波及 －削片系と在地系の細石刃核について－」『土曜考古 第17号』土曜考古学研究会



千葉県

1 星谷津遺跡
2 大割遺跡
3 木戸場遺跡
4 大林遺跡
5 向原遺跡
6 木苅峠遺跡
7 復山谷遺跡

埼玉県

8 風早遺跡
9 白草遺跡
10 中砂遺跡
11 清橋遺跡
12 打越遺跡
13 横田遺跡
14 新山遺跡
15 柳戸遺跡

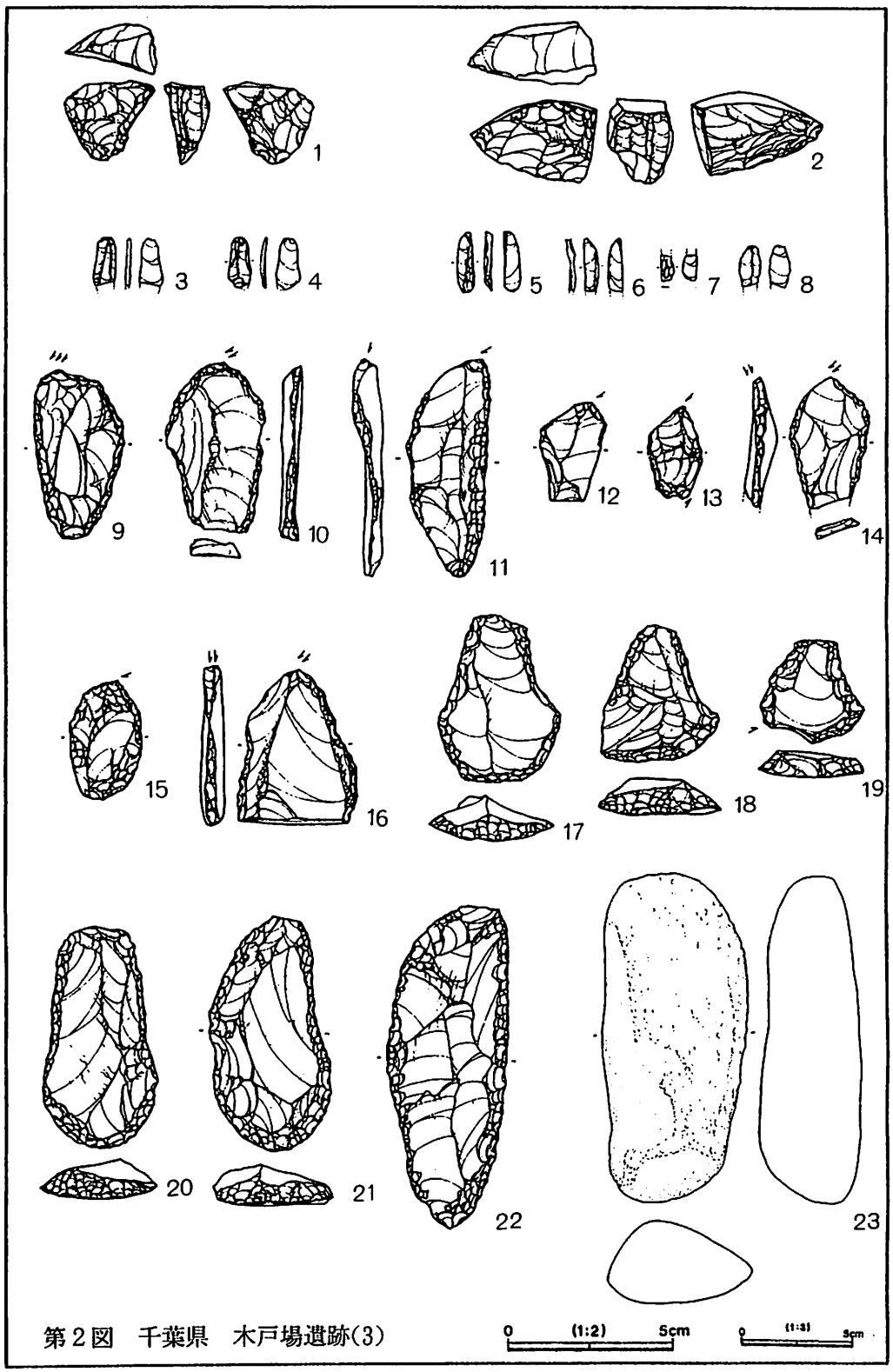
東京都

16 狭山遺跡Ｂ地点
17 根ノ上遺跡
18 下里本邑遺跡
19 鈴木遺跡
20 中村南遺跡
21 はけうえ遺跡
22 西之台遺跡Ｂ地点
23 新橋遺跡
24 多摩ニュータウンNo.769遺跡
25 多摩ニュータウンNo.388遺跡

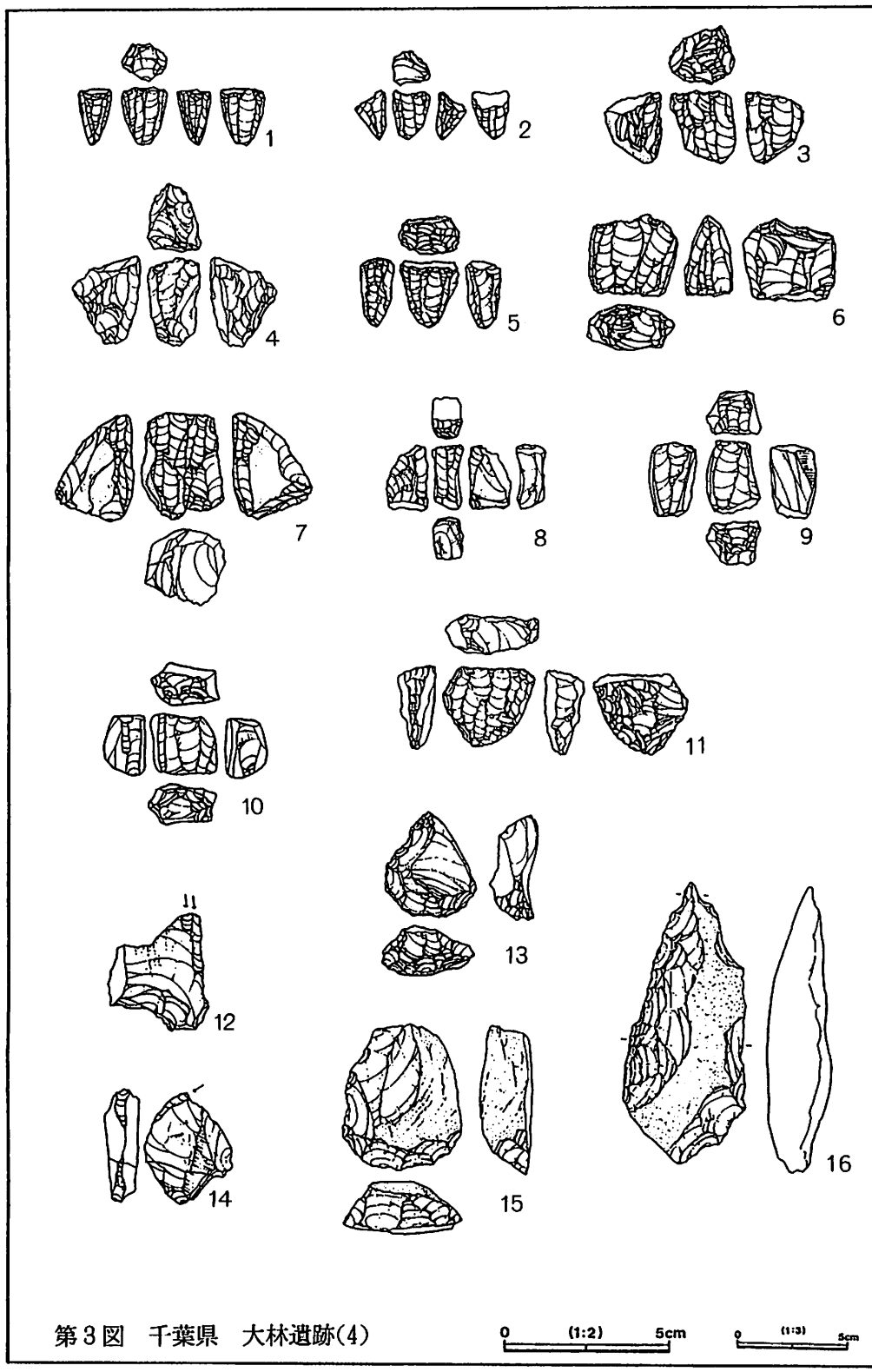
神奈川県

26 上和田城山遺跡
27 深見諏訪山遺跡
28 上野遺跡
29 長堀北遺跡
30 上草柳第１地点遺跡
31 上草柳第３地点(東・中央)遺跡
32 下鶴間長堀遺跡
33 台山遺跡
34 かしわ台駅前遺跡
35 柏ヶ谷長ヲサ遺跡
36 報恩寺遺跡
37 代官山遺跡
38 風間遺跡群
39 中村遺跡
40 勝坂遺跡
41 寺尾遺跡

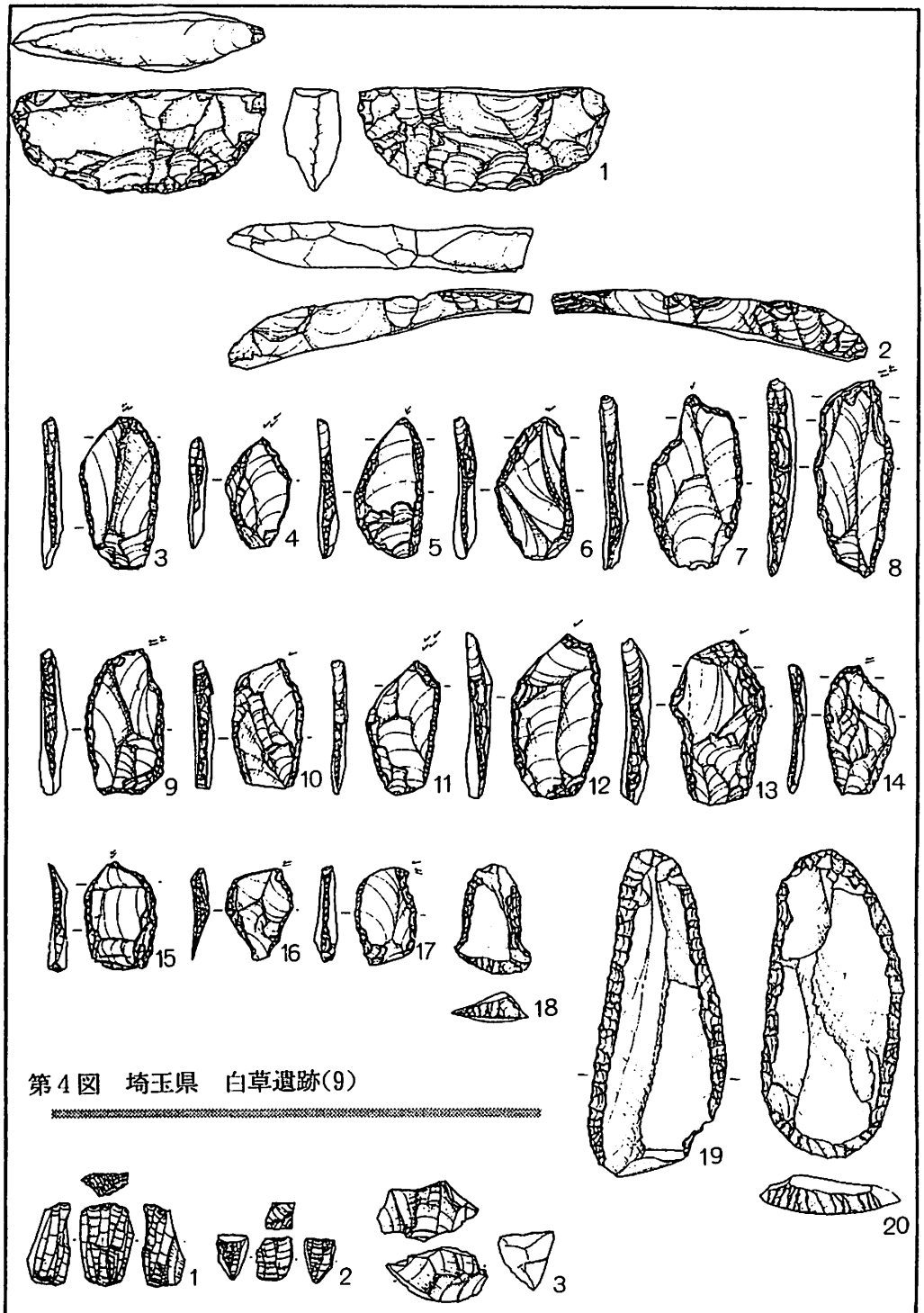
第１図　南関東の細石器出土遺跡



第２図　千葉県　木戸場遺跡(3)



第３図　千葉県　大林遺跡(4)

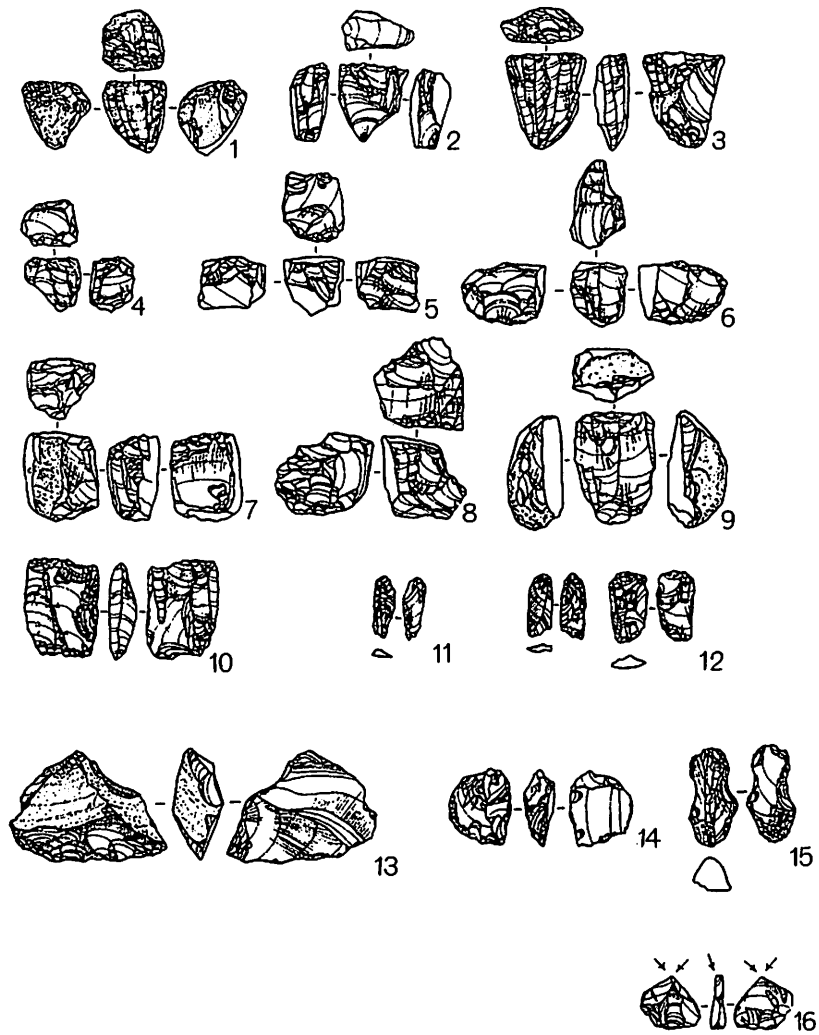


第４図　埼玉県　白草遺跡(9)

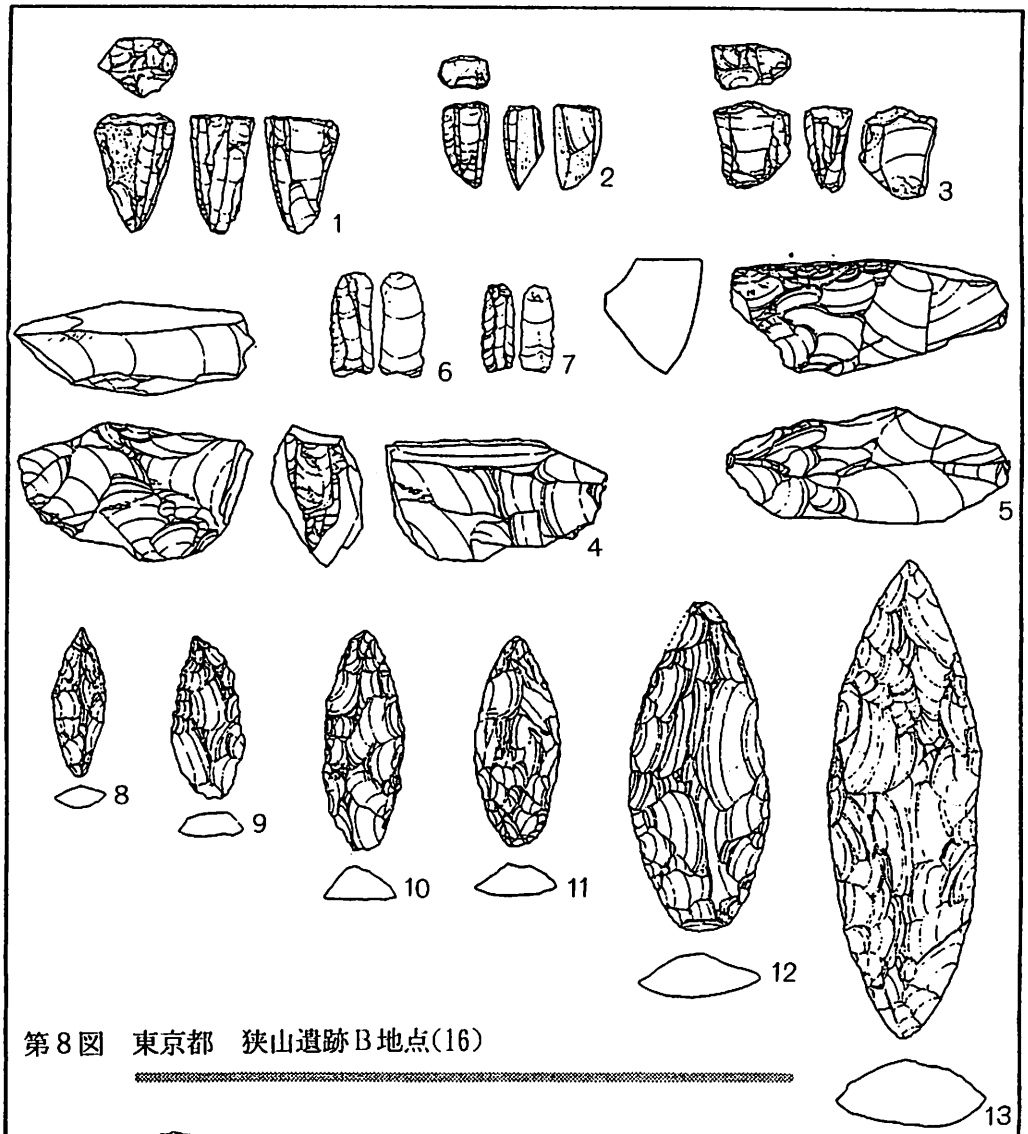
第５図　埼玉県　中砂遺跡(10)

0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm

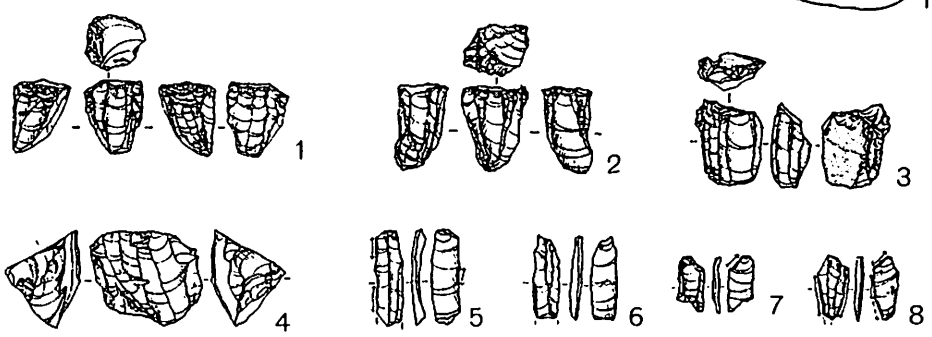
第６図　東京都　根ノ上遺跡(17)



第７図　東京都　中村南遺跡(20)

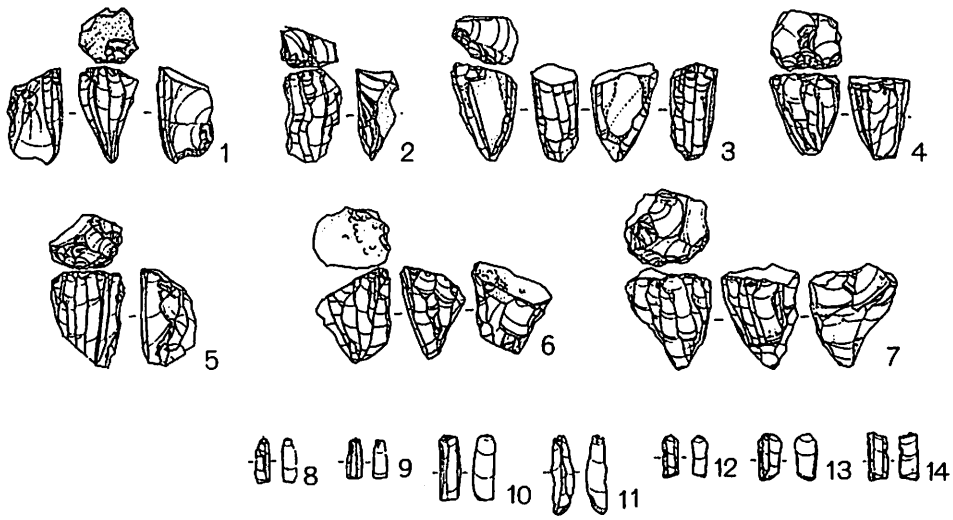


第８図　東京都　狭山遺跡Ｂ地点(16)

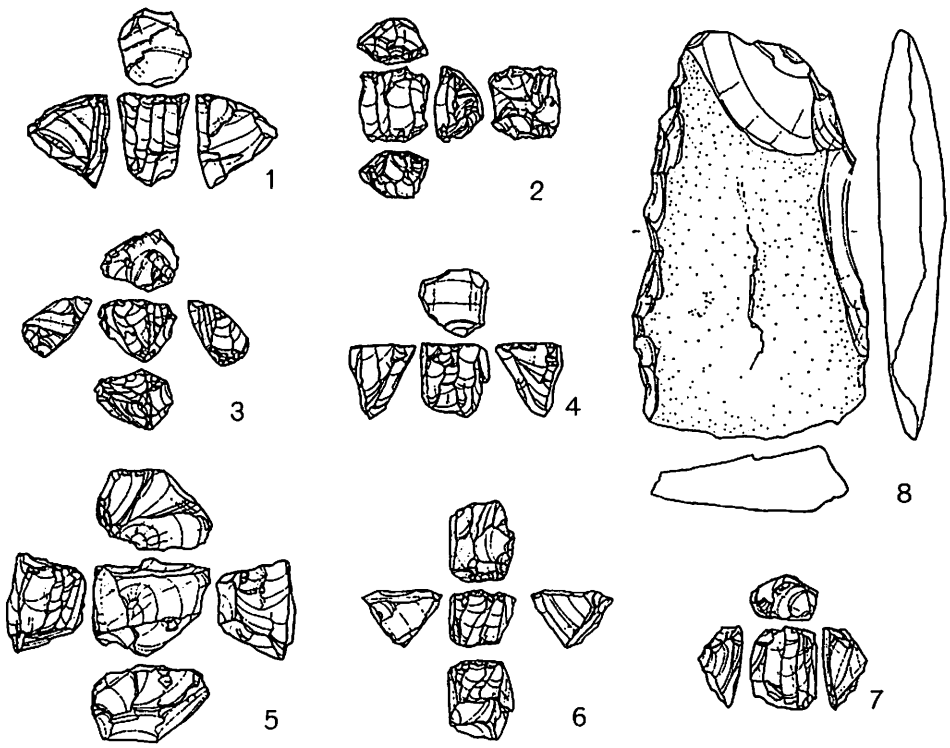


第９図　東京都　下里本邑遺跡(18)

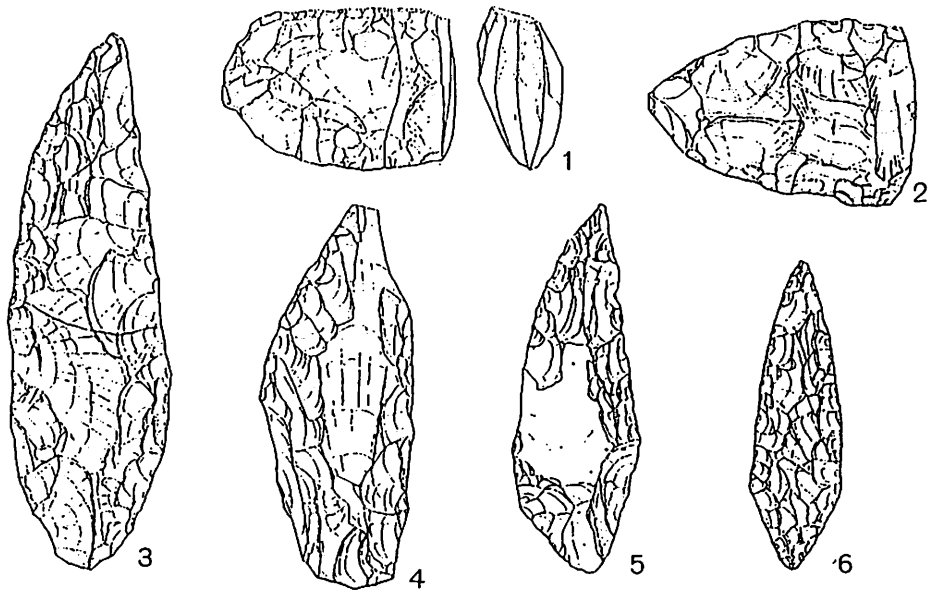
0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



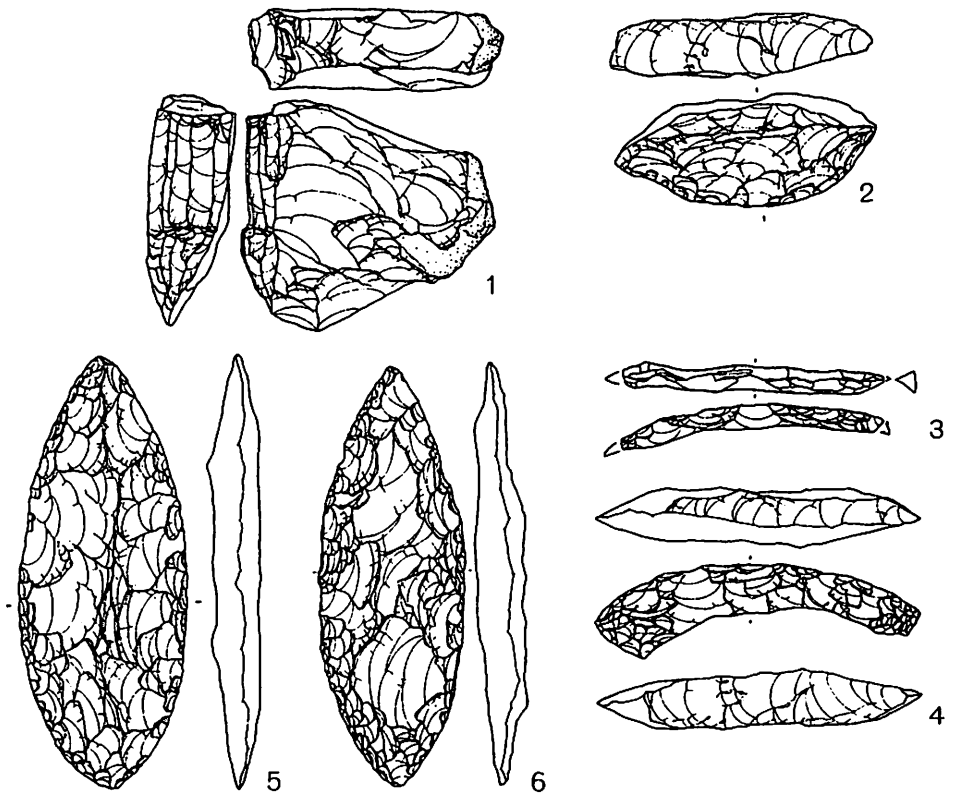
第10図　東京都　多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo. 769遺跡(24)



第11図　東京都　多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo. 388遺跡(25)　0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm

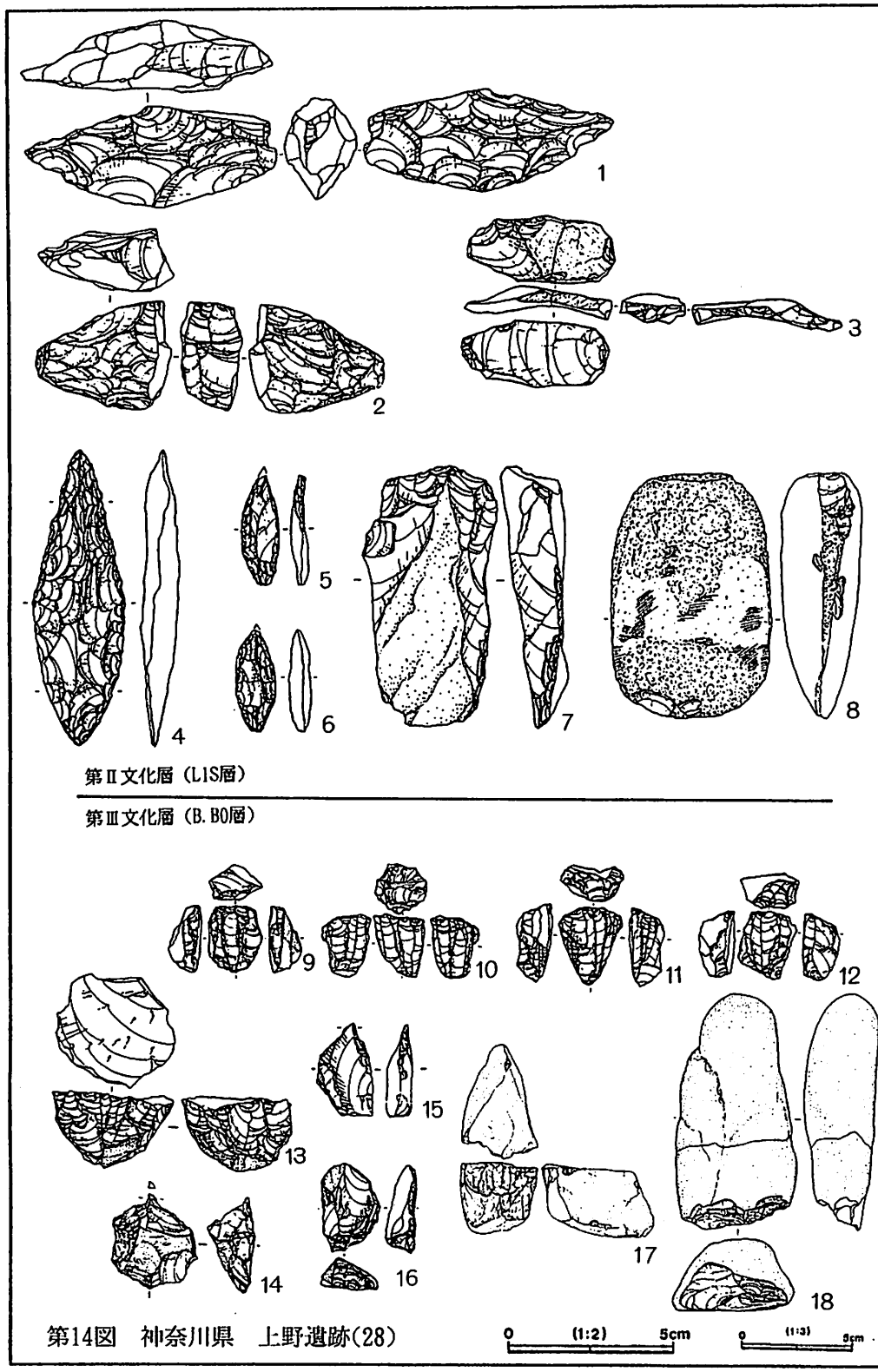


第12図　神奈川県　勝坂遺跡(40)

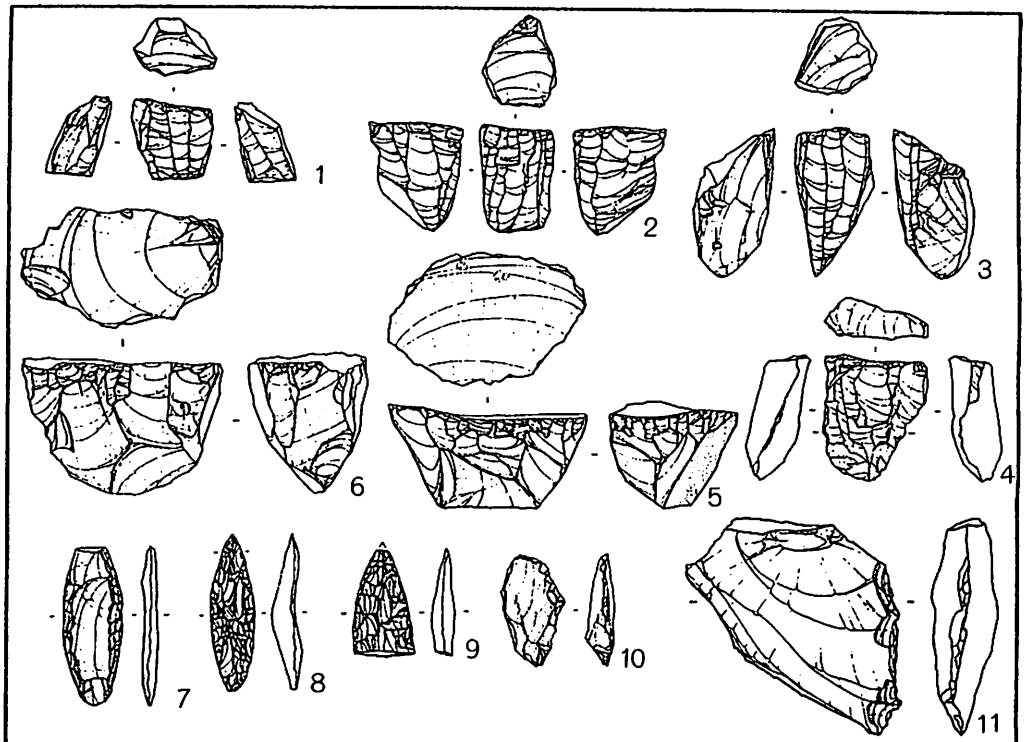


第13図　神奈川県　長堀北遺跡(29)

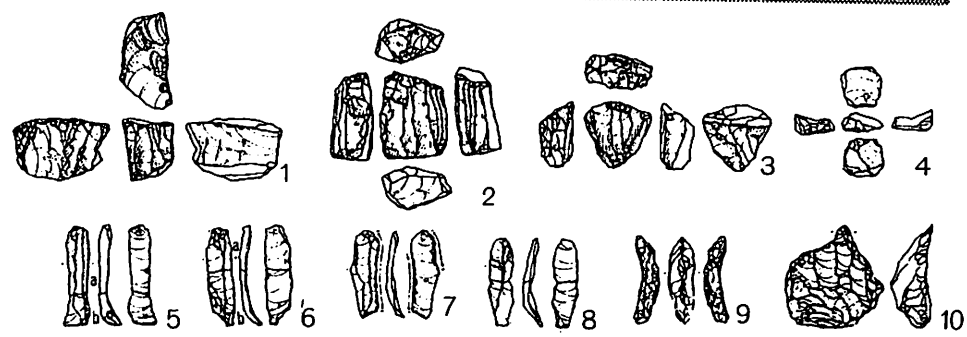
0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



第14図　神奈川県　上野遺跡(28)

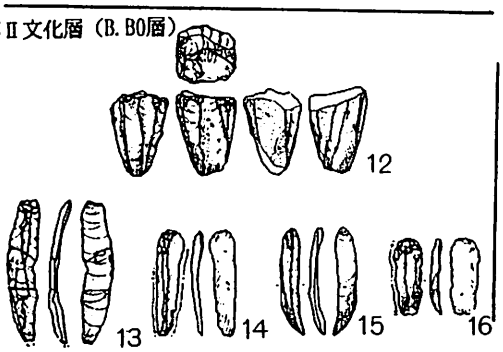


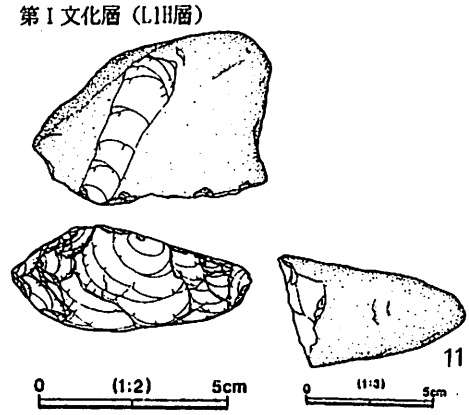
第15図　神奈川県　上草柳第１地点遺跡(30)



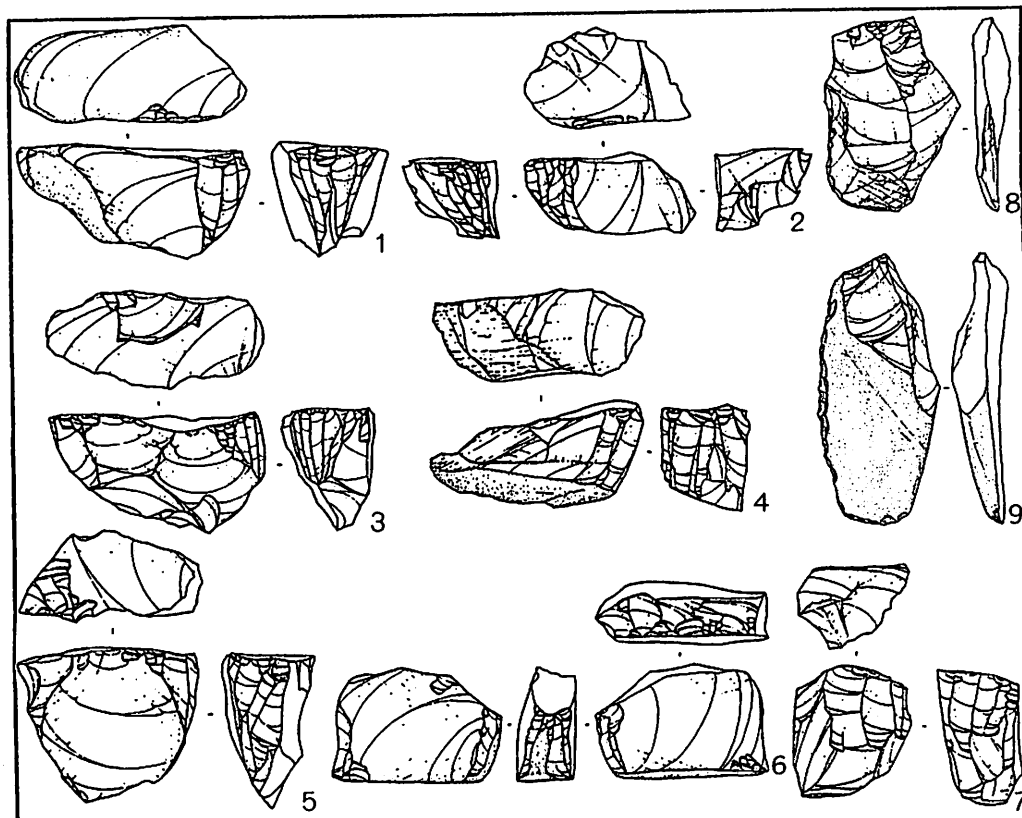
第Ⅰ文化層（L1H層）

第Ⅱ文化層（B.B0層）

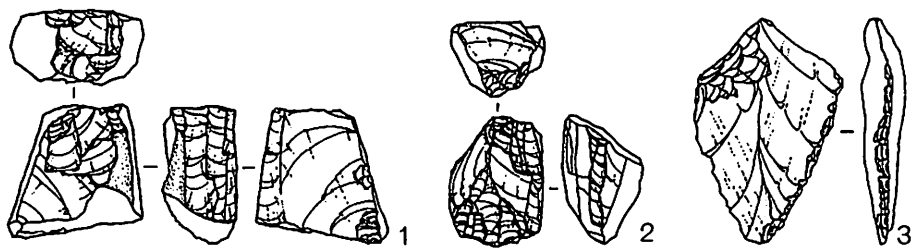




第16図　神奈川県　かしわ台駅前遺跡(34)

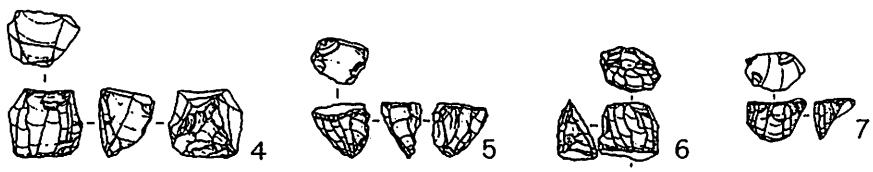


第17図　神奈川県　下鶴間長堀遺跡(32)



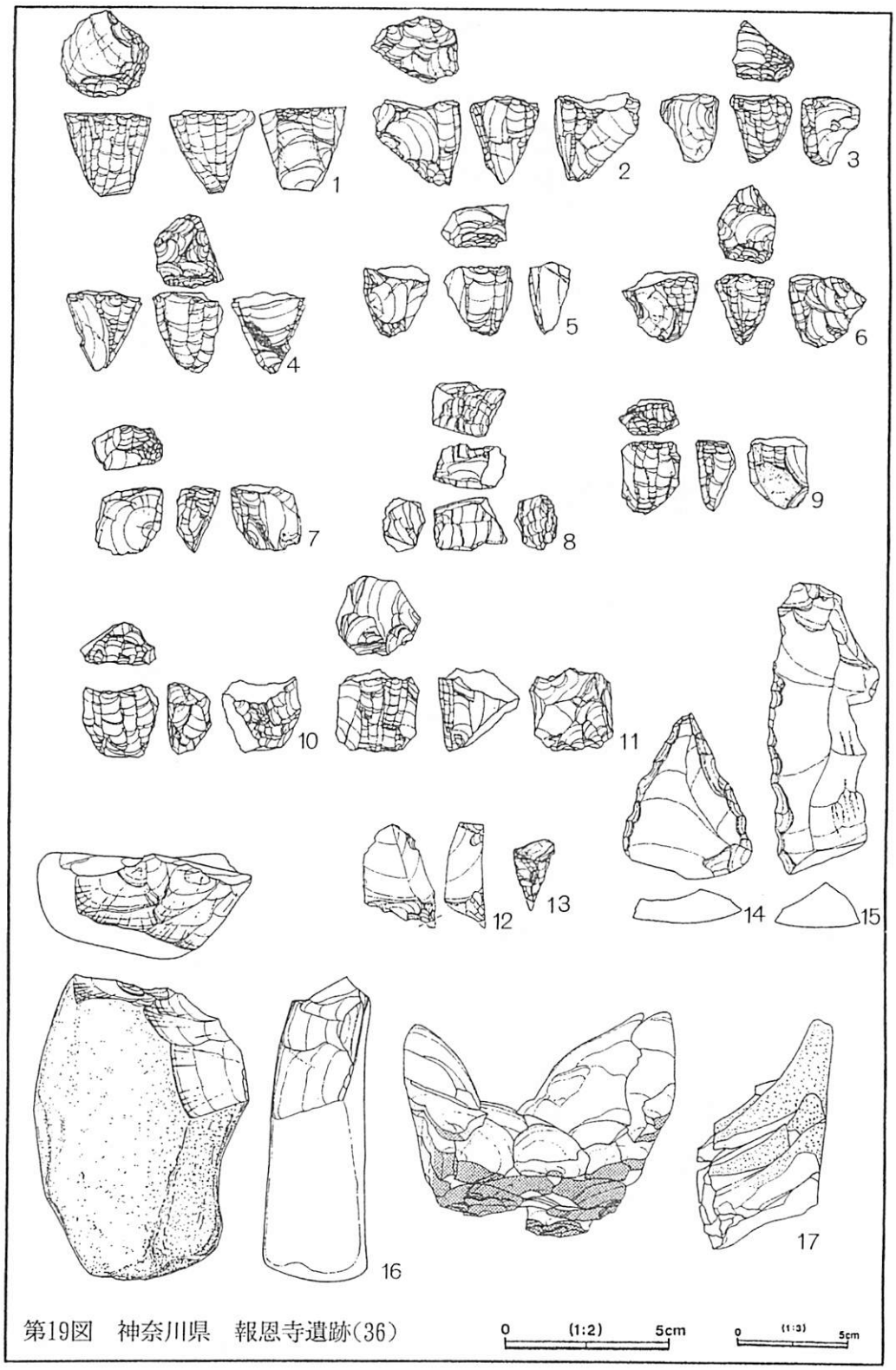
第Ⅰ文化層（L1S層上部）

第Ⅱ文化層（B.B0層下部）

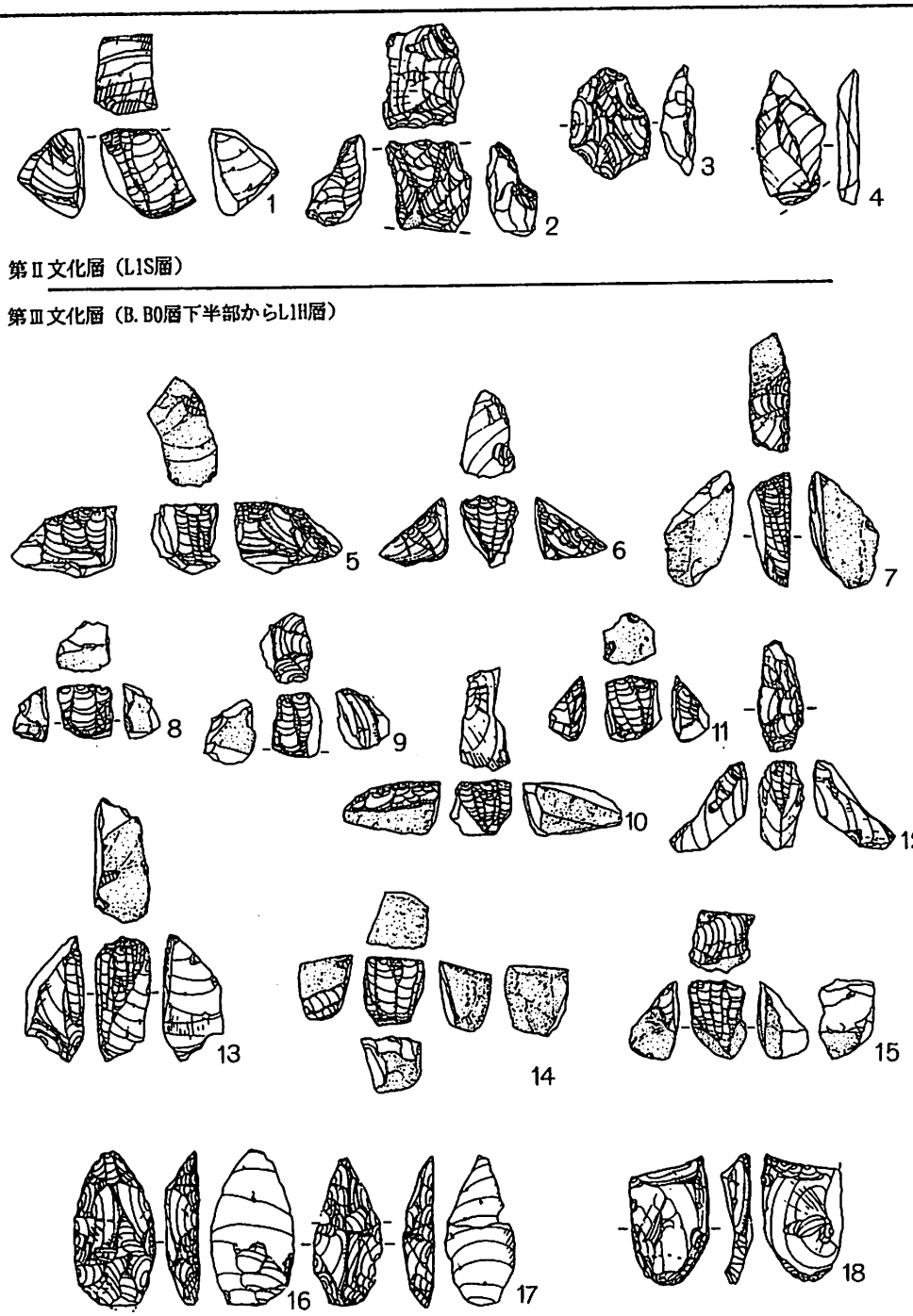


第18図　神奈川県　上和田城山遺跡(26)

0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm



第19図　神奈川県　報恩寺遺跡(36)



第20図　神奈川県　代官山遺跡(37)

第 1 表　　南関東　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鐵	土				
1	木戸場	2	2	10	7	9					1					有	千葉県佐倉市岩富	下総台地	報告書有
2	三里塚馬場	21	1	1	[illegible]							2				有	千葉県成田市三里塚字馬場	下総台地	報告書有
3	新東京国際空港No.10	2	1	3	[illegible]	1						7	3			有	千葉県山武郡芝山町香山新田字新山	下総台地	報告書有
4	虱谷津	39	3									1	1			有	千葉県佐倉市岩富字虱谷津	下総台地	報告書有
5	荒久	19					1					1				有	千葉県千葉市青葉町	下総台地	報告書有
6	大割	29	16	3	2		1	1					1			有	千葉県四街道市内黒田字立野	下総台地	報告書有
7	御塚山		1													有	千葉県佐倉市上志津御塚山	下総台地	報告書有
8	大林	44	33	15		1						1				有	千葉県佐倉市井野町大林	下総台地	報告書有
9	向原	59	15		1				4				1	2		有	〃　印旛郡本埜村竜腹寺向原	下総台地	報告書有
10	復山谷	53	19	1					2			3				有	千葉県印旛郡白井町	下総台地	報告書有
11	新東京国際空港No.52	7	2	1								2				有	千葉県成田市三里塚	下総台地	報告書有
12	南大溜袋	○		○					○				○	○		有	千葉県印旛郡富里村	下総台地	考古学ライブラリー
13	夷隅群大原町No.244		○	○												有	千葉県夷隅郡大原町根	下総台地	考古学ライブラリー
14	夷隅群大原町No.251		○													有	千葉県夷隅郡大原町新田野	下総台地	考古学ライブラリー
15	地国穴台		1													有	〃印旛郡印西町草深地国穴台	下総台地	報告書有
16	大苅峠	35	2	5	[illegible]	6						6	3			有	千葉県印旛郡印西町浦幡新田木苅峠	下総台地	報告書有
17	船尾白幡	○	○			○										有	千葉県印旛郡印西町船尾白幡	下総台地	報告書有
18	臼井南	○	○			○										有	千葉県佐倉市臼井	下総台地	報告書有
19	大網山田台No.8	○	○			○		○				○	○			有	千葉県山武郡大網白里町	下総台地	山武郡年報8
20	高岡大山	○	○		○											有	千葉県佐倉市高岡	下総台地	印旛郡年報3
21	油作第1	17	5			1										有	千葉県印旛郡印旛村平賀油作	下総台地	報告書有
22	和良比		1	1	19							2	1			有	千葉県四街道市和良比	下総台地	報告書有
23	大和田高明	1	3													有	埼玉県大宮市大和田町	大宮台地	報告書有
24	中砂	2	3						1				1			有	埼玉県所沢市北野字中砂	武蔵野台地	報告書有
25	清橋	16	1						1				1			有	埼玉県所沢市北野	武蔵野台地	報告書有
26	下向山	7	1										2			有	日高市大字大谷沢字下向山	武蔵野台地	報告書有
27	白草	478	1	2	2	21			1			1				有	埼玉県大里郡川本町	櫛引台地	報告書有
28	風早	2	2	6	[illegible]	1			2							有	〃　北葛飾郡庄和町西金野井	下総台地	報告書有
29	新開		○													有	〃　入間郡三芳町竹間沢新開	武蔵野台地	報告書有
30	池田	○														有	埼玉県新座市池田	武蔵野台地	報告書有

第 2 表　　南関東　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鏃	土	発掘	所在	所属	備考
31	本目		○													有	埼玉県富士見市大字鶴見本目	武蔵野台地	報告書有
32	打越遺跡第２地点	○	○													有	埼玉県富士見市大字水子打越	武蔵野台地	報告書有
33	勝田		○													有	埼玉県所沢市大字山口字勝田	武蔵野台地	報告書有
34	宮丸	○	○	○												有	埼玉県秩父郡皆野町宮丸	秩父山地	考古学雑誌
35	柳田	○	○													有	埼玉県秩父市柳田	秩父山地	埼玉県要覧
36	井ノ尻	○														有	埼玉県秩父市中村字井ノ尻	秩父山地	日本考古学年報10
37	薬師堂	○														有	〃　秩父郡両神村薄字薬師堂	秩父山地	報告書有
38	如来堂Ａ		○													有	埼玉県児玉郡美里町甘粕東山	櫛引台地	報告書有
39	東山	○	○													有	埼玉県児玉郡美里町甘粕東山	櫛引台地	報告書有
40	将監塚		○													有	埼玉県本庄市共栄字共和	本庄台地	報告書有
41	宮川端	○		○												有	埼玉県本庄市栗崎字宮川端	櫛引台地	
42	安光寺	○														有	埼玉県児玉郡美里町古郡石神	櫛引台地	報告書有
43	鶴巻		○													有	埼玉県大里郡寄居町鶴巻	櫛引台地	報告書有
44	雷原	○	○													表	埼玉県東松山市大谷字雷原	武蔵野台地	
45	中野	○	○													表	埼玉県入間市高倉字中野	武蔵野台地	
46	宮地	○	○													有	埼玉県狭山市笹井字宮地上	武蔵野台地	
47	市場坂	○														有	埼玉県新座市片山・朝霞市子ノ神	武蔵野台地	報告書有
48	明花向遺跡Ｃ地点	○														有	埼玉県浦和市大谷口字明花	大宮台地	報告書有
49	井沼方	○		○												有	埼玉県浦和市大字井沼方	大宮台地	報告書有
50	馬場北	○														有	埼玉県浦和市三室字馬場	大宮台地	報告書有
51	えんぎ山					○										有	埼玉県浦和市大崎猫井	大宮台地	第２回遺跡発表会
52	原市遺跡第一地点	○	○	○												表	埼玉県上尾市原市	大宮台地	埼玉県大宮台地の先土器文化
53	丸山遺跡第２地点	○							○							表	〃　北足立郡伊奈町小室丸山	大宮台地	〃　〃
54	下郷	○														表	埼玉県北足立郡伊奈町下郷	大宮台地	〃　〃
55	柏原遺跡第２地点	○														表	埼玉県桶川市柏原八幡原	大宮台地	〃　〃
56	狐塚	○														表	埼玉県桶川市川田谷	大宮台地	〃　〃
57	久台	○														有	埼玉県蓮田市東	大宮台地	報告書有
58	山崎北		○													有	埼玉県南埼玉郡宮代町山崎	大宮台地	埼玉の先土器文化
59	騎西城武家屋敷跡		○													有	〃北埼玉郡騎西町根古屋字前	大宮台地	
60	足利	○														有	埼玉県久喜市字馬場	大宮台地	報告書有
61	長野中学校校庭		○			○										表	埼玉県行田市桜町	大宮台地	行田のむかし

第 3 表　　南関東　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鏃	土	発掘	所在	所属	備考
62	須黒神社		○													有	埼玉県浦和市西堀上の宮	大宮台地	報告書有
63	米島		○													有	埼玉県北葛飾郡庄和町米島	下総台地	報告書有
64	お伊勢山	○	○													有	埼玉県所沢市三ケ島	武蔵野台地	報告書有
65	天神前		○													有	埼玉県蓮田市大字黒浜天神前	大宮台地	報告書有
66	下里本邑	45	4	3	玄曲を ふくむ				4		1	1		4		有	東京都東久留米市野火止	武蔵野台地	報告書有
67	中村南		○			○										有	東京都練馬区中村南町	武蔵野台地	発掘調査では確認できず
68	根ノ上		○													有	東京都板橋区根ノ上町	武蔵野台地	発掘調査では確認できず
69	はけうえ	45	1	2			1					1				有	東京都小金井市貫井南町	武蔵野台地	報告書有
70	武蔵野公園	2	1													有	東京都府中市多摩町	武蔵野台地	報告書有
71	西之台遺跡B地点	65	1										1	1		有	東京都小金井市中町	武蔵野台地	報告書有
72	新橋	33	2										1			有	東京都小金井市中町	武蔵野台地	報告書有
73	狭山遺跡B地点	28	6	1	2			1				6	48			有	東京都西多摩郡瑞穂町	武蔵野台地	報告書有
74	中山谷	○	○													有	東京都小金井市中町	武蔵野台地	報告書有
75	鈴木	17	2													有	東京都小平市鈴木町	武蔵野台地	報告書有：D地点のみ
76	高井戸東	3														有	東京都杉並区高井戸東	武蔵野台地	報告書有
77	東京天文台構内	5		2	玄曲を ふくむ	1			2			18	4			有	東京都三鷹市大沢	武蔵野台地	報告書有
78	下山遺跡II	1	2	2					1							有	東京都世田谷区瀬田	武蔵野台地	報告書有
79	多摩ニュータウンNo.301	4	46		4											有	東京都八王子市鑓水	多摩丘陵	報告書有
80	多摩ニュータウンNo.769	300	20									1				有	東京都多摩市乞田久保谷	多摩丘陵	報告書有
81	多摩ニュータウンNo.388	4	7					1								有	東京都八王子市松木	多摩丘陵	報告書有
82	〃 No.271-452	1										1				有	東京都多摩市落合上根	多摩丘陵	報告書有
83	出山遺跡II	9	4													有	東京都三鷹市大沢	多摩丘陵	報告書有
84	御殿山遺跡第1地区D地点	80	5	6	2	3						12	27			有	東京都武蔵野市御殿山	武蔵野台地	報告書有
85	野川中洲北	20	4	17	玄曲を ふくむ				3			20	47			有	東京都小金井市中町	武蔵野台地	報告書有
86	堂ケ谷戸遺跡III	6										3	1			有	東京都世田谷区岡本	武蔵野台地	報告書有
87	下耕地	2	3													有	東京都八王子大谷町	武蔵野台地	報告書有
88	小山高町	○	○													有	東京都町田市小山	武蔵野台地	第13回東京都遺跡発表会
89	報恩寺	68	12	12	玄曲を ふくむ	4			10							有	神奈川県綾瀬市寺尾報恩寺	相模野台地	神奈川考古第 6号

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝礫器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
鏃＝石鏃、土＝土器

第 4 表　南関東　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鏃	土	発掘	所在	所属	備考
90	長堀北	59	1	1	[illegible]			1								有	神奈川県大和市下鶴間乙	相模野台地	報告書有
91	代官山（第Ⅱ文化層）	12	4							2		1	1			有	神奈川県藤沢市長後	相模野台地	報告書有
91	代官山（第Ⅲ文化層）	461	36		1						1		4			有	神奈川県藤沢市長後	相模野台地	報告書有
92	かしわ台駅前（第Ⅰ文化層）	141	4				1									有	神奈川県海老名市柏ケ谷	相模野台地	報告書有
93	かしわ台駅前（第Ⅱ文化層）	85	1													有	神奈川県海老名市柏ケ谷	相模野台地	報告書有
94	台山	328	12	6	[illegible]	4			4		2					有	神奈川県大和市下鶴間乙	相模野台地	報告書有
95	風間遺跡群	19	1	15	[illegible]				6	8	20	1	6			有	神奈川県津久井郡城山町	相模野台地	報告書有
96	上草柳第1地点	147	6	3	1				1		1		3			有	神奈川県大和市上草柳	相模野台地	報告書有
97	上草柳第3地点東	3	1									5	2			有	神奈川県大和市上草柳	相模野台地	報告書有
98	上草柳第3地点中央	96	7	3								2				有	神奈川県大和市上草柳	相模野台地	報告書有
99	下鶴間長堀	321	27	15					3		1	1				有	神奈川県大和市下鶴間	相模野台地	報告書有

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鏃	土	発掘	所在	所属	備考
100	中村	10	5	2					1							有	神奈川県相模市鶴間	相模野台地	報告書有
101	柏ケ谷長ヲサ	2	5													有	神奈川県海老名市柏ケ谷	相模野台地	報告書有
102	栗原中丸	117	1						44							有	神奈川県座間市栗原	相模野台地	報告書有
103	深見諏訪山	17	1													有	神奈川県大和市深見	相模野台地	報告書有
104	上和田城山（第Ⅰ文化層）	14	19													有	神奈川県大和市上和田	相模野台地	報告書有
105	上和田城山（第Ⅱ文化層）	15	3	4								2				有	神奈川県大和市上和田	相模野台地	報告書有
106	上野遺跡第1地点（第Ⅰ文化層）	19	2	2	2			3			1	5	10		○	有	神奈川県大和市つきみ野	相模野台地	報告書有
107	上野遺跡第1地点（第Ⅱ文化層）	325	10	5	1				16							有	神奈川県大和市つきみ野	相模野台地	報告書有
108	勝坂遺跡第45次調査	1	1	2					1		1		9		○	有	神奈川県相模原市磯部	相模野台地	考古学ジャーナル
109	福田札ノ辻	○														有	神奈川県大和市福田	相模野台地	大和市史
110	相模野第149	69	9	7												有	神奈川県大和市つきみ野	相模野台地	大和市史
111	相模野第146		○													有	神奈川県大和市つきみ野	相模野台地	大和市史
112	寺尾	11	1	5	[illegible]			3			2		56			有	神奈川県綾瀬市寺尾字代官	相模野台地	報告書有
113	サザランケ	○	○						○		○					有	神奈川県愛甲郡清川村宮ケ瀬	丹沢山地	神奈川年報7

北関東の細石刃文化

桜井美枝

1　研究の経過

１９５１年　相沢忠洋による群馬県宮城村桝形遺跡の第一次調査。後の補完的な調査により石器出土層位などが確認される。

１９５６年　相沢忠洋による群馬県赤城山南麓における細石刃核発見の報告。

１９６３年　宇都宮大学史学教室による那須町逊室遺跡の調査。

１９６６年　栃木県内の旧石器時代遺跡（逊室遺跡を含む）の石器出土層位と、各遺跡の新旧関係について述べられる。

１９７３年　群馬県宮城村教委による桝形遺跡の第二次調査。

１９７５年　茨城県勝田市教委による後野遺跡の調査。関東地方で初めて湧別技法と荒屋型彫刻刀形石器を持つ北方系の細石刃石器群が確認される。

１９７７年　茨城県那珂町史編纂委員会による額田大宮遺跡の調査

１９８０～　栃木県内で発掘調査によって細石刃石器群の発見相次ぐ（益子町星の宮Ａ、鹿沼市坂田北、小山市乙女不動原北浦遺跡など）。

１９８７年　群馬県前橋市教委による頭無遺跡の調査。後野遺跡などとともに、北方系の細石刃石器群として注目される。

１９８９年　群馬県宮城村教委による市之関前田遺跡の調査。矢出川タイプの細石刃核を持つ石器群が発見される。

2　遺跡の分布

Ａ　茨城県　特に遺跡分布に片寄はみられない。いずれも沖積地を臨む標高20～30ｍ程の台地もしくは低丘陵上に位置する。

Ｂ　栃木県　県南東部の標高200ｍ以下の地域に遺跡が多い。県北部には、那須岳の裾野の標高約400ｍ程の丘陵上に位置する逊室遺跡が唯一所在するのみである。いずれの遺跡も、河川を臨む丘陵もしくは台地上にある。

Ｃ　群馬県　現在までのところ、赤城山南麓に遺跡の分布が集中している。赤城山南麓の

扇状地地形が大小の河川によって開析され、馬背状もしくは舌状を呈する台地上に立地するものが多い。標高はおおむね150～450m程の比較的高い地域に位置する。赤城山南麓は調査例が比較的多い地域ではあるが、近年県西部地域において高速道路建設に伴う大規模な調査が行われたにもかかわらず、概期の遺跡がほとんど発見されなかった。このことから、遺跡分布の片寄は、何らかの意味付けを必要とする可能性がある。

3　細石刃石器群

A　茨城県

後野遺跡　B地点より細石刃石器群が検出されている。細石刃核は湧別技法によるが、スポールを素材としているものがある。他に彫刻刀形石器・スクレイパー・尖頭器・大形の礫器を含む。彫刻刀形石器は荒屋型に分類できる。石材は、礫器とその破片を除いて、全て珪質頁岩である。またB地点からは、細石刃石器群よりも上の層位から、尖頭器や大形の石刃を素材としたスクレイパー・エンドスクレイパー・彫刻刀形石器などとともに無文の土器が発見されている。

額田大宮遺跡　石器石材として珪質頁岩を使用するものと安山岩を使用するものとの二者が検出された。平面および垂直分布からは両者を積極的に分離できないが、珪質頁岩製の石器群のほうが若干下位から出土しているようである。珪質頁岩を石材とするものは、細石刃核・彫刻刀形石器・エンドスクレイパーがある。細石刃核は幌加型に分類され、打面側および下縁からの調整がみられる。

沖餅遺跡　細石刃核・スクレイパー・エンドスクレイパーが出土している。細石刃核は船底形を呈し幌加型に分類できるが、石核調整は打面からのものに限られ下縁からの調整はみられない。石材は頁岩が主体となる。

B　栃木県

逊室遺跡　細石刃核・彫刻刀形石器・エンドスクレイパーで構成される。細石刃核は平坦面を打面とし、打面側からの調整によって整形されており、円錐もしくは円筒形を呈する矢出川タイプのものである。また報告ではキルドスクレイパーとされているが、船底形に近い形態の細石刃核が採集されている。

これらは平坦な打面から側面に調整を加えて船底形に整形したもので、下縁からの調整はみられない。石材は流紋岩・チャートなどが用いられている。

C　群馬県

桝形遺跡　細石刃核とエンドスクレイパー・スクレイパー・彫刻刀形石器と大形の礫器を持つ。細石刃核は船底形の形状を呈し、幌加型に含まれるものであるが、石核調整には精粗の差がみられ、かなりのバラエティーがある。石材は、黒色頁岩・黒色安山岩などの在地の石材が多いが、1割ほどではあるが珪質頁岩も利用されている。

頭無遺跡　湧別技法による細石刃核が検出されている。他に彫刻刀形石器・スクレイパー・エンドスクレイパーを持つ。彫刻刀形石器は荒屋型である。またエンドスクレイパーは、基部を細身に作り出し刃部が広がる角二山型に分類できる。石材は珪質頁岩が約8割を占め、残りは黒曜石・黒色安山岩・黒色頁岩・チャートなどである。黒曜石の産地は、箱根系畑宿産と分析されているという。

市之関前田遺跡　細石刃核・スクレイパー・エンドスクレイパー・礫器などからなる。細石刃核はいわゆる矢出川タイプであるが、細石刃の剥離が進んだ結果、薄く偏平な形状を呈する。石材は、細石刃核や細石刃のほとんどが黒曜石であるが、他は黒色安山岩を主体としている。出土層位は、近隣の桝形や頭無遺跡などと比較して、より古い段階に位置付けられる。

4　細石刃文化の様相

当該地域においては、三類系の細石刃石器群が見られる。第Ⅰ類はいわゆる矢出川タイプの細石刃核を持つもので、群馬県市之関前田・峯岸遺跡などがこれにあたる。市之関前田では石器石材として黒曜石を多用しているが、峯岸では在地の頁岩を利用している。また、前者の細石刃核には打面調整がみられるのに対し、後者の細石刃核は平坦な単一の剥離面を打面としている。この類型に含まれると考えられるものは、他に茨城県新地・五平・鴻巣C・花輪台、栃木県坂田北・坂田・上の原、群馬県栗原東・広間地・下淵名塚越遺跡などであるが、多くは表面採集や後世の遺構覆土中からの出土であって、石器群の全容が推測できる資料は少ない。

第Ⅱ類は船底形の細石刃核を持つもので、茨城県額田大宮・沖餅、栃木県逊室・群馬県桝形遺跡などがこれにあたる。これらの細石刃核は幌加型に分類できるが、遺跡によって石核調整に精粗がみられる。特に下縁からの調整は、桝形においては比較的多いのに対し、沖餅・逊室では全く見られない。石材は額田大宮で珪質頁岩が用いられているほかは、おおむね在地の石材を利用しているようである。トゥールの素材として、石刃がかなり利用されている。他に群馬県龍ノ口・芳見沢・稲荷山・和田遺跡がこの類型に含まれる。また逊室・稲荷山では、第Ⅰ類に特徴的な矢出川タイプの細石刃核と共伴している。

第Ⅲ類は湧別技法による細石刃核を持つもので、茨城県後野、群馬県頭無遺跡などである。他の器種としては荒屋型彫刻刀形石器が安定して組成され、それにスクレイパー・エンドスクレイパーなどが加わり、比較的定形的な器種を豊富に組成する。エンドスクレイパーは、基部を細く作り出し、刃部が撥形もしくは扇形に広がる角二山型のものが含まれる。これらの石器群は、石材のほとんどを東北地方の日本海側に産出する珪質頁岩が占め、単独で出土している群馬県押手遺跡の細石刃核や落合遺跡の荒屋型彫刻刀形石器も珪質頁岩製である（注１）。トゥールの素材としては剥片の比率が高く、その多くは湧別技法による細石刃核のブランクとなる両面体石器製作段階の剥片が利用されている。

これら三者の石器群の出土層位は、群馬県において火山灰層との関連がとらえられている。市之関前田では浅間―板鼻黄褐色軽石（以下As―YP）と浅間―板鼻褐色軽石（以下As―BP）の間の浅間―白糸軽石（以下As―SP）を含むローム層中から、桝形と頭無ではAs―YPとAs―SPの間からそれぞれ出土している。群馬県内の他の遺跡でも、おおむねAs―YPとAs―SPの間が出土層位となっている。以上のことから、群馬県内においては、As―SPの降下（約15,000年前）からAS―YPの降下（約13,500年前）までの間に、異なる類型の細石刃核を持つ石器群が展開していたことがわかる。茨城・栃木県の細石刃石器群についても、この時期に位置づけられよう。

これら三者の新旧関係については、現在までのところ層位的な検出例はない。ただし群馬県では、市之関前田の出土層位が桝形・頭無よりも下位になるようである。したがって、第Ⅰ類がより古い段階に位置づけられよう。また第Ⅰ類の細石刃核は、前述したように、打面調整を持つ黒曜石製のものと、平坦打面の在地石材製のものとの二者におおよそ区分できる。この二者の違いは、第Ⅱ類に含まれる逊室や稲荷山で平坦打面のものが船底形の細石刃核と共伴すると見られることから、時期差による可能性が考えられる（ただし、稲荷山の細石刃核は黒曜石製である）。調整打面を持つものがほとんど遠隔地石材の黒曜石

製であることから、貴重な石材からの細石刃剥離が進んだ結果として調整打面となった可能性も否定できないが、現段階では、調整打面の黒曜石製細石刃核有するグループ→平坦打面の在地石材製細石刃核有するグループという変遷を考えたい。また第Ⅱ類の細石刃核には、下縁からの調整を持つものと持たないものがみられる。第Ⅱ類と系統関係を有すると考えられる東北地方の越中山S遺跡などの幌加型細石刃核が下縁からの調整を持つことから、下縁からの調整を持つ一群が本来的な形であるのに対し、調整を持たないものはより在地化が進んだものと考えたい。また、下縁からの調整を持つ稲荷山では、平坦打面を持つ黒曜石製の矢出川タイプの細石刃核と共伴し、また調整を持たない逃室では、平坦打面の在地の流紋岩製の細石刃核と共伴するものと見られる。この矢出川タイプの細石刃核の石材の違いが、第Ⅰ類における黒曜石から在地石材へという変化に呼応したものとすれば、先に示した変遷観をより補強するものとなろう。第Ⅲ類は他の類型との関係をほとんど持たず、他の地域の同類系に含まれる石器群との強い類似性を示している。特に石材における選択性は非常に強い。したがって、この類型は東北地方（特に日本海側）との強い結びつきを有したまま、関東から中部地方へ展開していったものと考えられる（注２）。

以上のことから、この三類系の前後関係を示す。まず群馬県内の石器出土層位の事例から、第Ⅰ類を最古期に位置づける。第Ⅰ類の中では、市之関前田にみられる調整打面を持つものが、峯岸などの平坦打面の在地石材からなる細石刃核を持つものに先行する。ついで、第Ⅱ類が位置づけられよう。これは、第Ⅱ類に含まれる石器群の中に、第Ⅰ類に特徴的な矢出川タイプの細石刃核と共伴するものがあることを主な根拠とする。共伴する細石刃核が、第Ⅰ類の中では後出の平坦打面のものであることも、上記の編年観を裏付けよう。また、第Ⅱ類の中では、下縁調整を有するものが持たないものに先行する。第Ⅲ類の位置付けは、現在のところ、第Ⅰ類に後続するものではあるが、第Ⅱ類との前後関係は不明である。第Ⅲ類に後続するものとして、南関東では削片を剥離する細石刃核を有する一群が位置付けられることから、細石刃段階の末期よりは新しい段階に置けるものと考える。新潟県荒屋遺跡では、第Ⅱ類にみられる幌加型の細石刃核と、第Ⅲ類に特徴的な湧別技法による細石刃核が共伴する。湧別技法による細石刃核のみを有する山形県角二山遺跡を荒屋よりも前に位置付ける筆者の編年観に従えば、第Ⅲ類が第Ⅱ類に先行するものと思われる。ただし、荒屋での共伴例から、二つの類型が同時に存在した可能性は十分に考えられるであろう。

5　細石刃文化研究の課題

北関東地方の細石刃石器群の特徴として、まず第一に中部・南関東に多い矢出川タイプの細石刃核を持つ石器群が少ないことが上げられる。東北地方でこのタイプの細石刃核が非常に少ないことを考えると、分布の北限に近いため遺跡数が少なくなるからとも考えられる。ただし、表採などによる断片的な報告はかなりの数にのぼり、今後発見される可能性も否定できない。矢出川タイプの細石刃核の分布範囲を考える上でも重要な問題となるため、今後の調査例の増加を待って判断したい。

また第Ⅲ類に関しては、サケ・マスの捕獲を中心とする内水面漁労と結び付ける説がある。比較的遺跡数の多い群馬県内について遺跡の立地をみてみると、第Ⅰ・Ⅱ類の石器群は、赤城山南麓の標高150～450m程の比較的小規模な河川によって開析された台地や丘陵上に位置する。これに対し、第Ⅲ類の石器群は、利根川や碓氷川などの大規模な河川を臨むなだらかな台地上に所在し分布域を異にすることがわかる。この遺跡の立地の違いも、第Ⅲ類と内水面漁労との関連を示すものであろうか。今後植物・動物相ともあわせた遺跡周辺の自然環境の違いを明らかにすることによって、両者の遺跡分布の差が主な生業の違いを表すのかについて、重要な手懸かりを与えることとなろう。

注１：栃木県赤羽根遺跡でも湧別技法によると見られる細石刃核が出土しているが、石材はより珪化の弱い頁岩である。この細石刃核は、打面がブランク長軸よりもかなり短く、南関東にみられる削片を剥離する細石刃核に近いものと思われる。

注２：ただし、茨城県内については、久慈川・那珂川流域に珪質頁岩の原産地が想定されており、どちらの産地の石材が使われているか検討を要する。

6　主要文献

相沢忠洋　1956　「北関東赤城山麓におけるマイクロ・コアの発見」　『貝塚』58

相沢忠洋・関矢晃他　1988　『群馬県史　資料編１』　群馬県

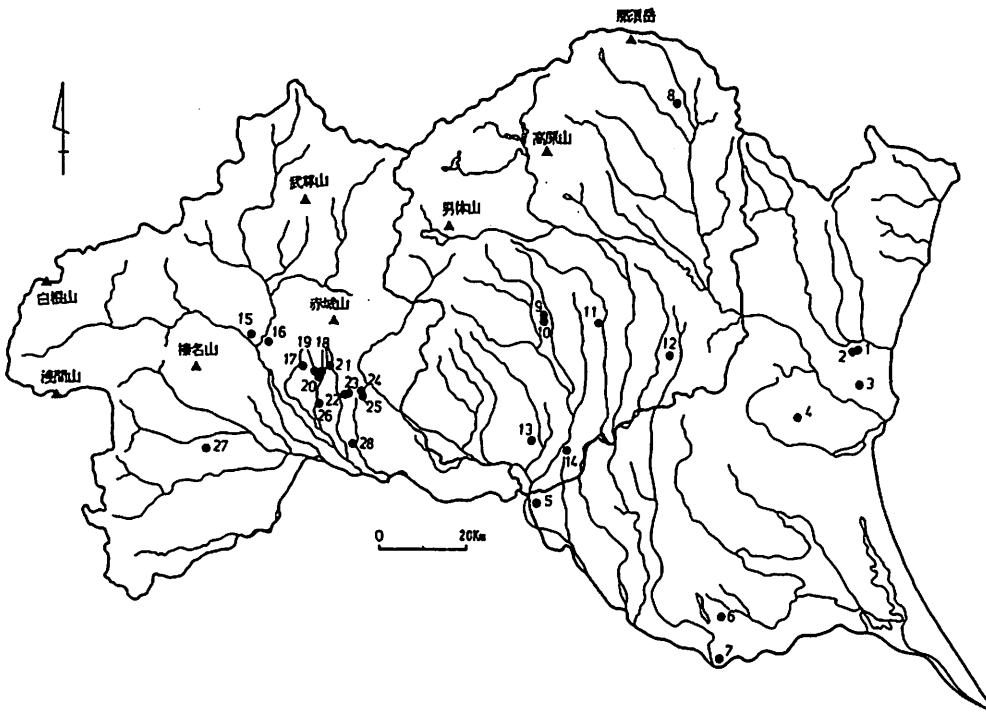
岩崎泰一　1991　「第13節　遺構外の遺物　(1)旧石器～縄文時代の石器」　『下淵名塚越遺跡』　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第114集

上野川勝　1990　「栃木県旧石器文化研究史―昭和時代の文献から―」　『唐沢考古』９

後野遺跡調査団　1976　『後野遺跡』　勝田市教育委員会

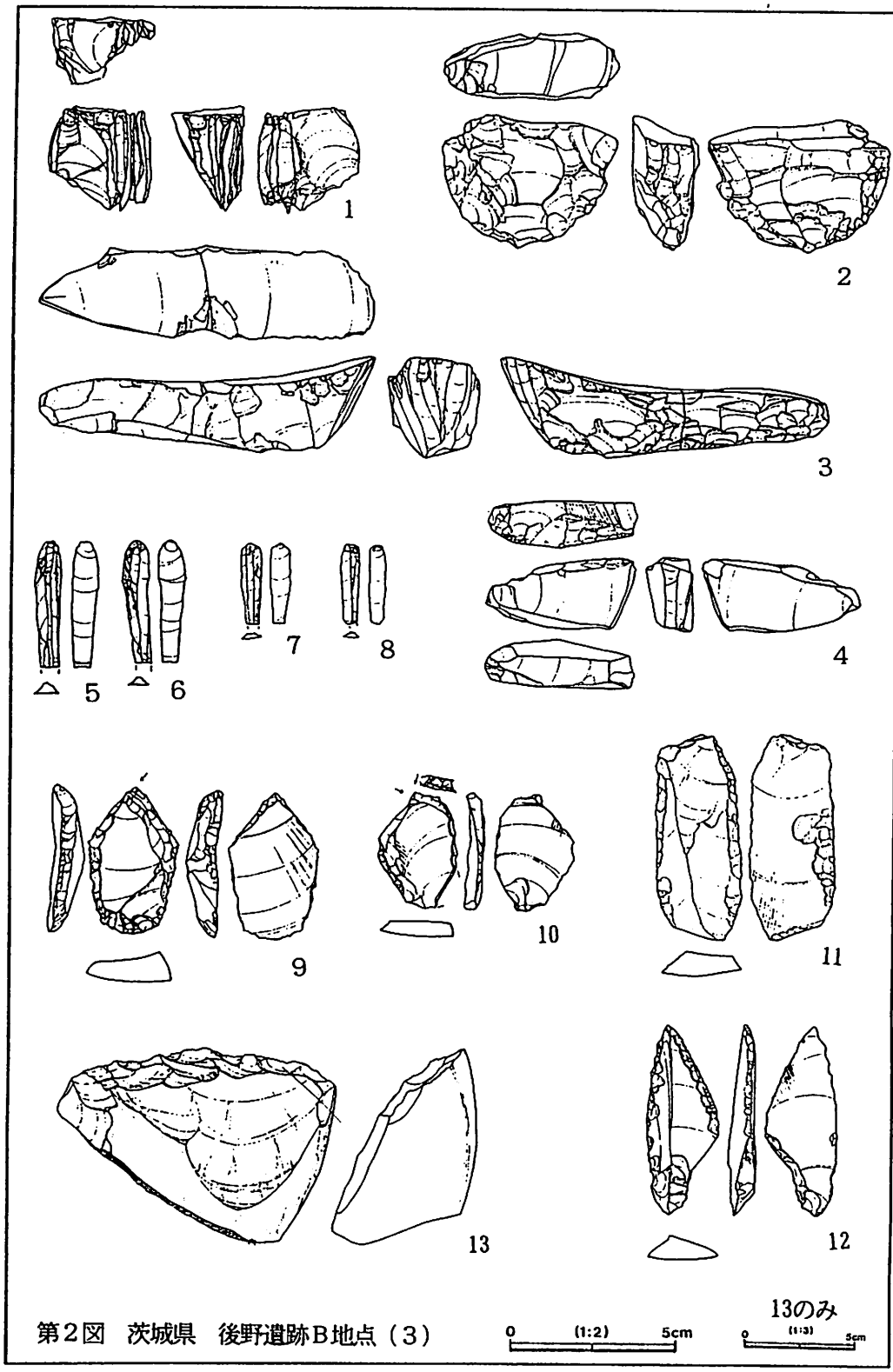
宇都宮大学考古学研究会　1981　「鹿沼市坂田北遺跡発掘調査概報」　『峰考古』３

大塚昌彦・白石典之　1985　「Ⅱ溜井遺跡　1．先土器時代」　『見立溜井・見立大久保遺跡』　赤城村教育委員会
川崎純徳・渡辺明・星山芳樹　1978　『額田大宮遺跡』　那珂町史編纂委員会
川崎純徳　1980　「茨城県における細石刃核について」　『婆良岐考古』1
古河市史編さん委員会　1986　『古河市史　資料　原始・古代編』
子持村誌編さん室　1987　「1，狩猟・採集と農耕の開始　(1)旧石器時代」　『子持村誌上巻』
斉藤弘道　1991　「第５章　五平遺跡」　『一般県道友部内原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』　茨城県教育財団文化財調査報告第67集
桜井美枝　1991　「北方系細石刃文化の南下」　『考古学ジャーナル』No.341
佐藤宏之　1992　『日本旧石器文化の構造と進化』　柏書房
関矢晃　1981　『桝形遺跡調査報告書』　群馬県勢多郡宮城村教育委員会
大工原豊　1990　『三本木遺跡・落合遺跡』　安中市教育委員会
田代隆　1984　『赤羽根』　栃木県埋蔵文化財調査報告第57集
辰巳四郎他　1963　『栃木県那須町脇沢遺跡・逃室遺跡調査報告書』　那須町教育委員会
栃木県史編纂委員会　1976　『栃木県史　資料編　考古１』
栃木県史編纂委員会　1979　『栃木県史　資料編　考古２』
橋本勝雄　1989　「東日本の細石器文化一東北・北陸・中部高地・東海地方の研究の動向一」　『考古学ジャーナル』No.306
原田恒弘・中束耕志　1985　「勢多群富士見村龍ノ口遺跡試掘調査報告書(1)」　『群馬県立歴史博物館調査報告』1
細野高伯　1990　「市之関前田遺跡の細石刃文化」　『第３回長野県旧石器文化研究交流会　発表要旨』
前原豊・関根吉晴　1988　「柳久保遺跡群頭無遺跡」　『第２回 東北日本の旧石器文化を語る会』
若月省吾　1983　「稲荷山遺跡、和田遺跡」　『笠懸村史 別巻１』
渡辺俊夫　1980　『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書３一沖餅遺跡』　茨城県教育財団

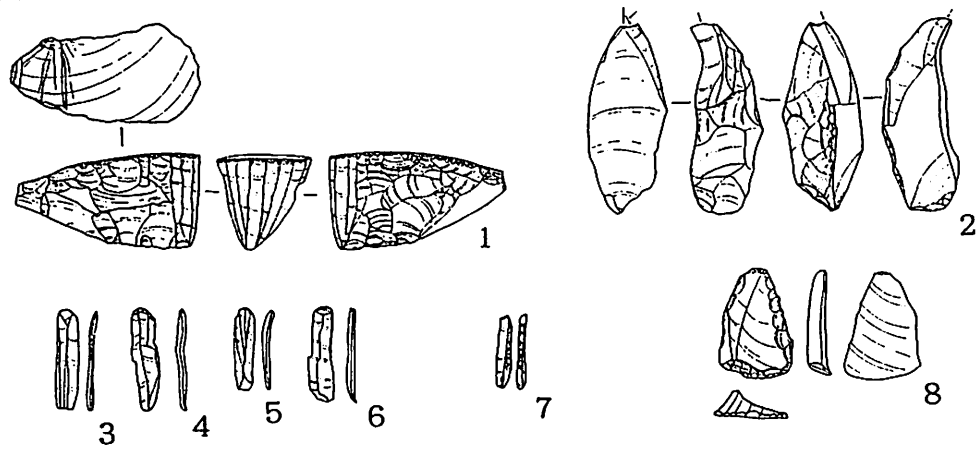


1　額田大宮遺跡
2　新地遺跡
3　後野遺跡Ｂ地点
4　五平遺跡
5　鴻巣Ｃ遺跡
6　沖餅遺跡
7　花輪台遺跡
8　逃室遺跡
9　坂田北遺跡
10　坂田遺跡
11　上の原遺跡
12　星の宮Ａ遺跡
13　赤羽根遺跡
14　乙女不動原北浦遺跡
15　押出遺跡
16　見立溜井遺跡第Ｉ文化層
17　龍ノ口遺跡
18　桝形遺跡
19　芳見沢遺跡
20　市之関前田遺跡
21　栗原東遺跡
22　峯岸遺跡
23　広間地遺跡
24　稲荷山遺跡
25　和田遺跡
26　頭無遺跡
27　落合遺跡
28　下淵名塚越遺跡

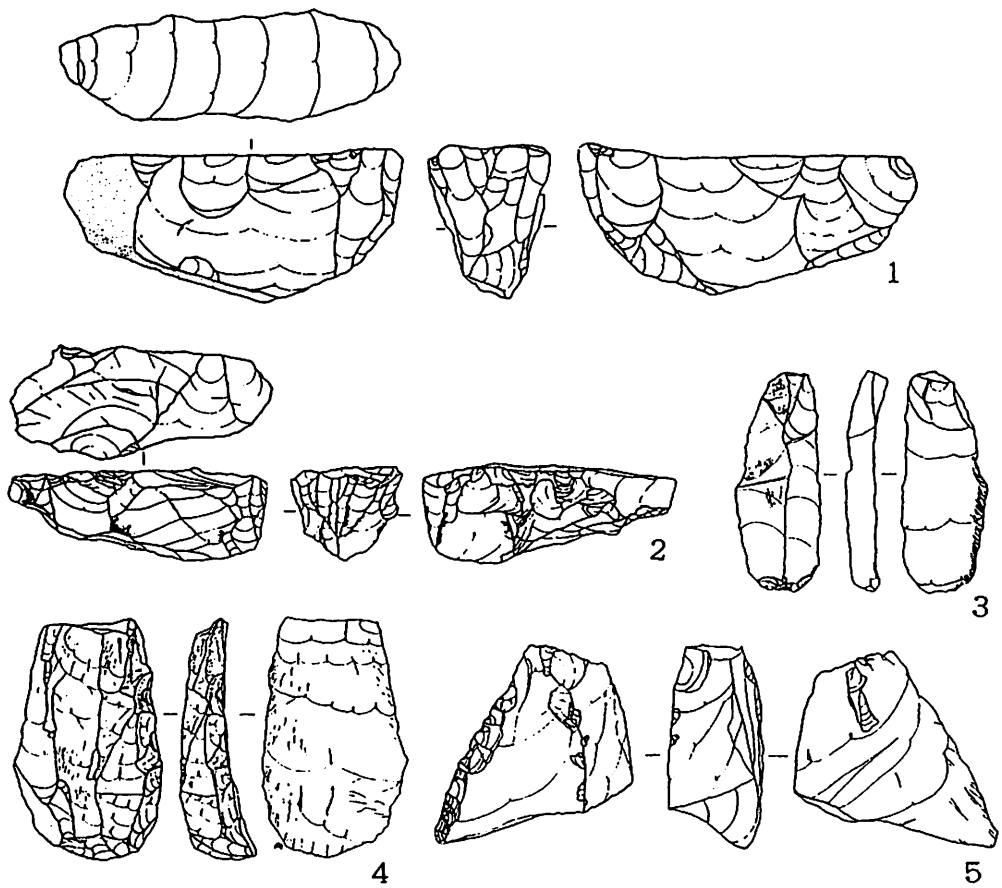
第１図　北関東の細石刃出土遺跡



第２図　茨城県　後野遺跡Ｂ地点（３）

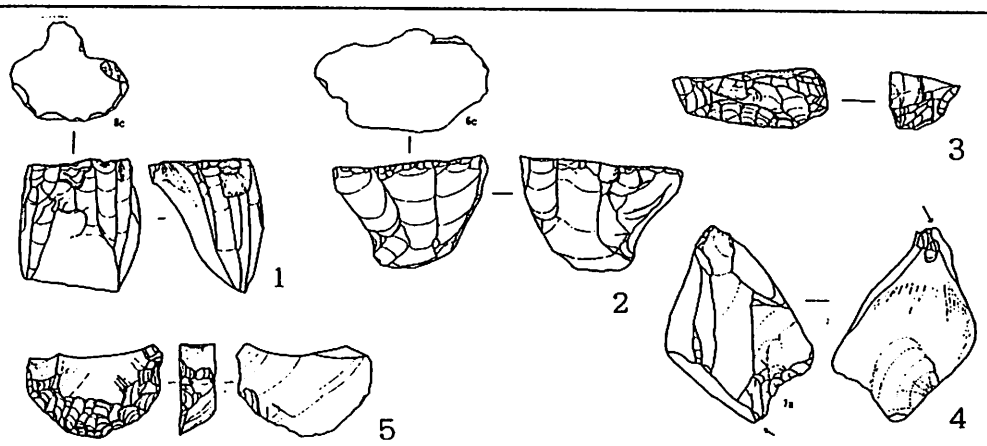


第3図　茨城県　額田大宮遺跡（1）

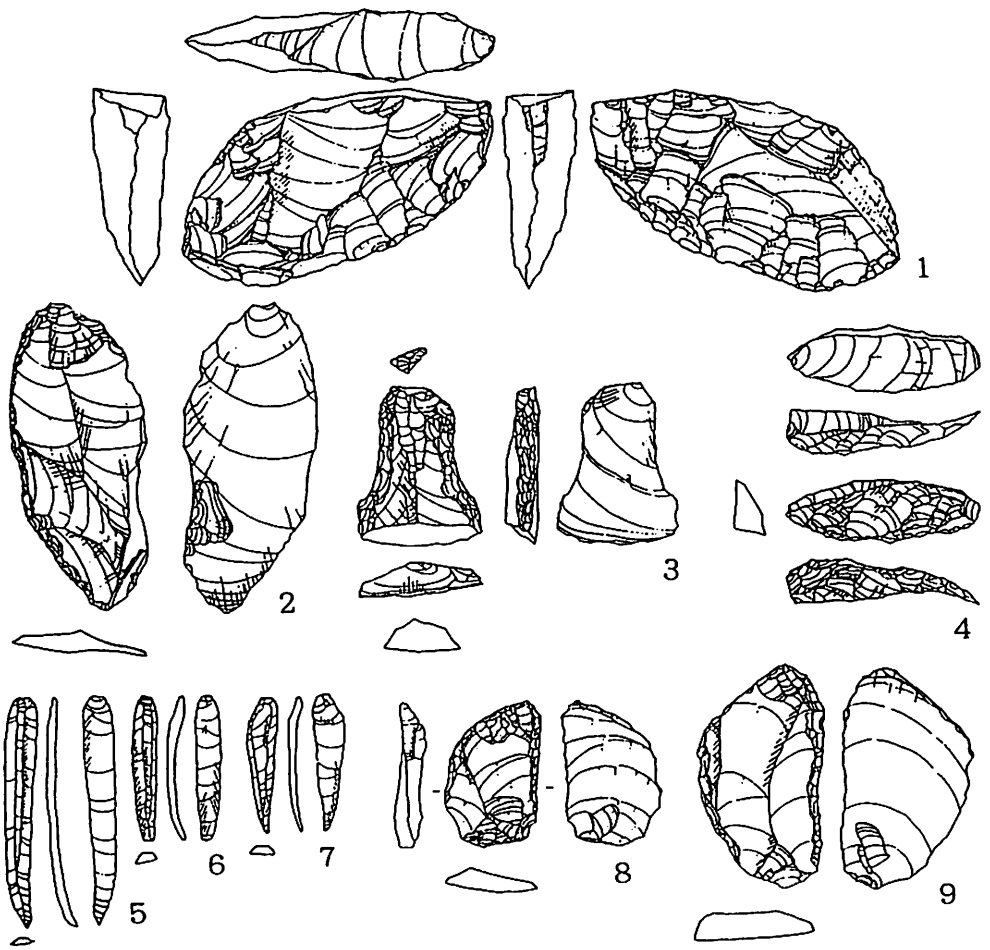


第4図　茨城県　沖餅遺跡（6）

0　(1:2)　5cm

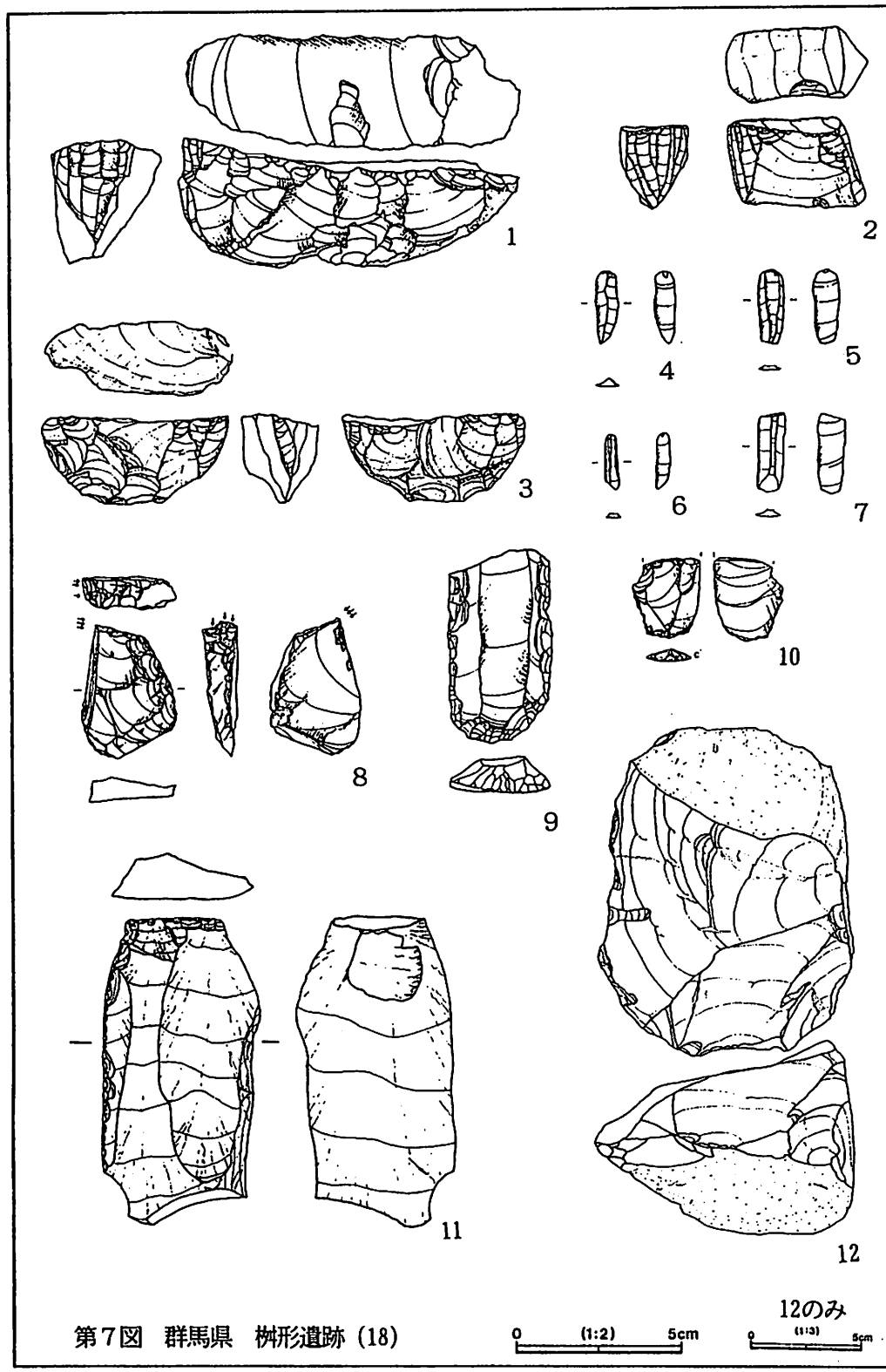


第5図　栃木県　迯室遺跡（8）

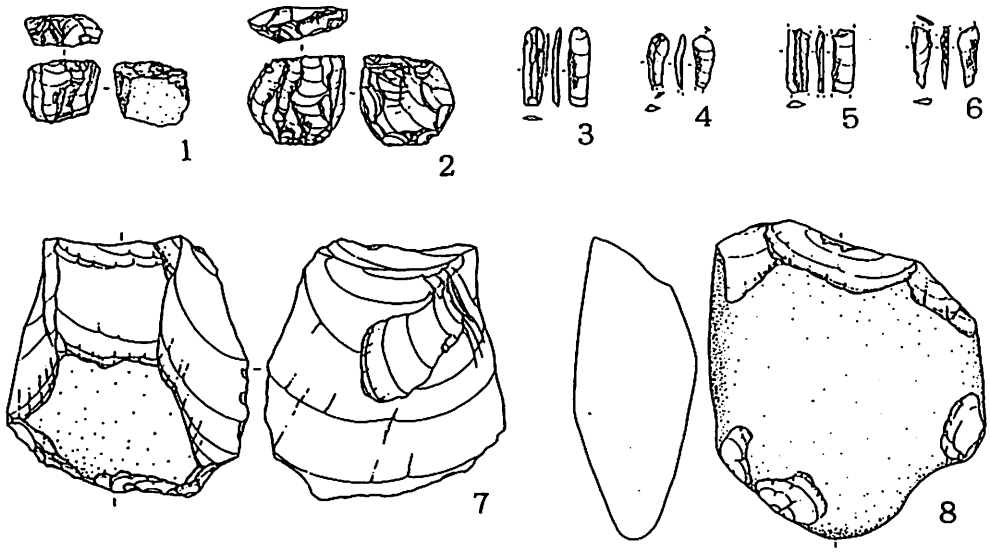


第6図　群馬県　頭無遺跡（26）

0　(1:2)　5cm



第7図　群馬県　桝形遺跡（18）



第8図　群馬県　市之関前田遺跡（20）

8のみ

0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm

第 1 表　北関東　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	礫	土	発掘	所在	所属	備考
1	頴田大宮	204	1	○	○	1			○							有	茨城県那珂郡那珂町頴田大宮	頴田台地	報告有
2	新地	○	1														茨城県那珂郡那珂町頴田新地	頴田台地	表採資料
3	後野B地点	167	4	3		7			2				1			有	茨城県勝田市中根字後野	那珂川流域	報告有
4	五平		1													有	茨城県東茨城郡内原町	東茨城台地	報告有
5	鴻巣C		1														茨城県古河市鴻巣字出口南	渡良瀬川流域	表採資料
6	沖餅		6	20	17						2		2			有	茨城県竜ヶ崎市	稲敷台地	報告有
7	花輪台		1														茨城県北相馬郡利根町花輪台		花輪台貝塚からの出土か？
8	逆富上東畑地点		3	○	1	1										有	栃木県那須郡那須町豊原		遺物は表面採集によるものが多い　報告有
9	坂田北	○	2													有	栃木県鹿沼市西鹿沼町		報告有
10	坂田		1													有	栃木県鹿沼市千手町		報告有
11	上の原		1				1										栃木県宇都宮市戸室		
12	星の宮A	3														有	栃木県宇都宮市益子町星の宮		報告有
13	赤羽根	1	1		1											有	栃木県下都賀郡岩舟町静和		表土遺構覆土中より出土　報告有
14	乙女不動原北溜	3											1?			有	栃木県小山市乙女		報告有
15	押手		1													有	群馬県北群馬郡子持村北牧押手	子持山南麓	縄文後・晩期の配石遺構より出土
16	見立溜井第Ⅰ文化層		1						1				2			有	群馬県勢多郡赤城村見立字溜井	赤城山南西麓	報告有
17	鶯ノ口		1	4									1?			有	群馬県勢多郡富士見村赤木山	赤城山南麓	報告有
18	樹形	39	17	15	2	1			3	1	5					有	群馬県勢多郡宮城村苗ケ島	赤城山南麓	報告有
19	柏倉芳見沢	3	3	9					2				1			有	群馬県勢多郡宮城村柏倉	赤城山南麓	
20	市之関前田	○	2	○	○				○		○	?				有	群馬県勢多郡宮城村市之関	赤城山南麓	
21	梨原東		1													有	群馬県勢多郡粕川村	赤城山南麓	
22	峯岸	3	3													有	群馬県勢多郡新里村武井	赤城山南麓	
23	広間地		3														群馬県勢多郡新里村広間地	赤城山南麓	
24	稲荷山		1													有	群馬県新田郡笠懸町西鹿田稲荷	鹿田山丘陵	報告有
25	和田		1													有	群馬県新田郡笠懸町西鹿田和田	鹿田山丘陵	報告有
26	頴無	121	1	10	1	9					1					有	群馬県前橋市荒子町	利根川流域	
27	落合					1										有	群馬県安中市中野谷字落合	碓氷川流域	報告有　荒屋型彫刻刀形石器が単独で出土
28	下淵名塚越		1													有	群馬県佐波郡境町下淵名	大間々扇状地	報告有

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝礫器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
礫＝石礫、土＝土器

本州中央部の細石刃文化

－　長野県中南部・岐阜県東北部を中心として　－

堤　　隆

1　研究の経過

○　野辺山原

１９５３年　　矢出川で芹沢長介らにより国内で初めて細石刃文化の存在が確認される。

１９５４年　　芹沢長介による矢出川遺跡の第一次調査。芹沢・杉原による第二次調査

１９６３年　　明治大学考古学研究室による矢出川遺跡の第三次調査。

１９７３～　　京都女子大考古学研究会による野辺山原の分布調査。数多い旧石器時代遺

１９８３年　跡の分布が明らかにされる。

１９７９～　　明治大学考古学研究室による矢出川遺跡群総合調査。考古学と自然科学の

１９８１年　学際的な調査により、遺跡群の成り立ちや石器文化・古環境の解明が進む。

１９９０年　　八ケ岳旧石器研究グループによる中ッ原５Ｂ地点の調査。北方系削片系の細石刃文化の様相が明らかにされる。

１９９２年　　同グループによる中ッ原１Ｇ地点の北方系削片系細石刃文化の調査。

○和田峠周辺

１９５７年　　信州ローム研究会男女倉Ⅲ地点調査。翌年Ⅳ地点調査。稜柱形細石核出土

１９６４年　　尖石考古館鷹山第Ⅰ遺跡調査。稜柱形細石刃石核・細石刃が出土。

１９７５年　　森嶋ら男女倉Ｈ地点調査。稜柱形細石刃石核数点が出土。

○　開田高原・日和田高原

１９５９～　　樋口昇一・森嶋稔・小林達雄による柳又遺跡Ａ・Ｂ地点の調査。いわゆる

１９６２年　「柳又ポイント」のほか、細石刃文化の存在が層位的に把握される。

１９８９～　　村道工事による柳又遺跡Ｃ地点の調査。矢出川タイプの稜柱形細石刃石核

１９９０年　と削片系細石刃石核が層位的に出土（前者が下層）。

１９８９～　　国学院大学考古学研究室による柳又遺跡Ａ地点の継続的な学術調査。北方

現在　系削片系細石刃文化の様相が構造的に明らかにされつつある。

１９８９年　　千葉大学麻生優らによる日和田高原池の原遺跡の調査。北方系削片系細石刃文化の様相の一端が明らかにされる。

2　遺跡の分布

A野辺山原　矢出川流域に稜柱形細石刃石核をもつ遺跡が20遺跡ほど密集（矢出川遺跡群）（第２図1~15）。矢出川第Ｉ遺跡では細石刃石核五百個以上が出土し（第５～８図）、国内でも有数の出土量をほこる。あるいは拠点的な遺跡の性格も考えられる。そのほか若干量の細石刃が遺跡が、矢出川にのぞむ低い丘陵に多く分布する。

中ッ原遺跡群では、北方系削片系細石刃文化の遺跡二か所が段丘上の微高地で確認されている（中ッ原５Ｂ地点と中ッ原１Ｇ地点、第２図16·17 ）。

削片系と稜柱系細石刃文化の遺跡は明確にその分布を異にしている。

B和田峠周辺　黒曜石原産地の和田峠周辺における細石刃文化遺跡は比較的貧弱である。男女倉遺跡群Ｈ・Ｊ・第Ⅲ・第Ⅳ地点（第３図22～25）と和田峠頂上遺跡で稜柱形細石刃石核が散発的に出土しているにすぎない（第３図26）。

鷹山第Ｉ遺跡では、ややまとまって稜柱形を含む細石刃石器群が認められている。鷹山第Ⅳ遺跡でも細石刃石器群が確認される（第３図27~29 ）。

C開田高原　細石刃石器群は、現在、柳又Ａ地点（第４図31）・Ｃ地点（第４図32）で確認されているのみであるが、むろんこれ以外にも細石刃文化遺跡は存在しているものと考えられる。

D日和田高原　池の原・槍柄原遺跡（第４図32・33）で細石刃石器群が確認されている。むろんこ以以外にも細石刃文化遺跡は存在しているものと考えられる。

3　細石刃石器群

A野辺山矢出川石器群　矢出川技法による稜柱形細石刃石核（第５～８図）と削器・礫器で構成される。彫器は含まずナイフ形石器や尖頭器は共伴しない（第29図）。一部は舟底形細石刃石核を含む（第10・11図）。

細石刃の石材は九割以上が黒曜石で、わずかにチャートがみられる。

B野辺山中ッ原石器群　削片系の楔形細石刃石核と（第14～16図）、荒屋型を含む彫刻刀形石器・削器・掻器・錐状石器・礫器などを含む（第29図）。また、削片系のみでなく、任意作出打面の細石刃石核も含む。

細石刃の石材は黒曜石主体でわずかにチャートがある。

C開田高原　削片系の楔形細石刃石核がある（第23～25図）。また任意作出打面の細石

柳又Ａ石器群　刃石核も含む。これとともに彫刻刀形石器・削器・掻器・尖頭器・石斧・礫器・敲石が出土しているが（第29図）、ことに尖頭器の共伴については問題が残る。細石刃関係の石材は、黒曜石が５割、ハリ質安山岩４割強、チャートは近隣に原産地があるが、その使用は１割に満たない。

Ｄ開田高原柳又Ｃ石器群　ハリ質安山岩削片系の楔形細石刃石核と黒曜石稜柱形細石刃石核が出土してるが（第26図）、両者は層位的上下関係をもって出土したことが指摘されている。すなわち前者がより上層に、後者がより下層において検出されたという（谷口1991）。この地点ではナイフ形石器・尖頭器の文化層も含め４文化層が確認されており、通時的な石器群の変遷を追うことが可能である。反面、各文化層にともなう石器組成の抽出には苦慮する。

４　細石刃文化の様相

長野県中南部・岐阜県東北部における細石刃文化の様相の要点を列記する。

1　当該地域における、細石刃石器群の内容（石器組成・細石刃技法）とその変遷過程は細部ではその内容を異にするものの、全体的にはほぼ等質な様相を呈している。

2　すなわち内容的には、①矢出川技法（安蒜1979）による稜柱形細石刃石核と、削器・礫器等で構成され、彫器を欠落する細石刃石器群（仮に稜柱系細石刃石器群とする）と、②湧別技法の流れを汲むと考えられる削片系の楔形細石刃石核と、荒屋型を一部に含む彫刻刀形石器・削器・掻器・錐状石器・礫器などをもつ細石刃石器群（仮に削片系細石刃石器群とする）の二者が認められる点で共通する（ただし削片系は和田峠周辺では現在のところ検出されていない）。

3　その変遷過程では、柳又Ａにおいて層位的にとらえられたように、稜柱系細石刃石器群が先行し、削片系細石刃石器群が後行するという流れが追える。野辺山地域では層位的には追えないもののそれと同一の変遷過程がたどれるものとみてよい。

4　開田高原と野辺山高原の細石刃石器群の差異は、利用石材の点であらわれている。

すなわち両地域では、稜柱系細石刃石器群においては双方とも信州系黒曜石にその石材利用が偏るが、削片系細石刃石器群にあっては、黒曜石に加え、野辺山（中ッ原）がチャート、開田（柳又）がハリ質安山岩やチャートと、それぞれの地域のいわば在地系石材を用いている点において注意される。

5　削片系細石刃における利用石材のおよその比率は、中ッ原で黒曜石９：チャート１、柳又で黒曜石５：安山岩とチャートで５となる（うちチャートは１割未満）。

黒曜石原産地から離れた柳又で、削片系がいわば在地系石材への高い依存をみせることはある意味では当然かもしれないが、同じ柳又で稜柱系が遠距離とはいえ黒曜石にこだわる点と比較すると、両者の石材利用の違いが浮き彫りにされて興味深い。

6　この地域ではただ１点であるが、珪質頁岩の削片系の楔形細石刃石核が柏垂遺跡で認められている（第12図）点は注意しておく必要がある。これはダイレクトな北方系細石刃文化の流れをみせるものであり、この要素がそれまでのものを、やがて黒曜石や他の在地石材による削片系細石刃石器群へと変質させたことが予測できる。

7　舟底形の細石刃石核は矢出川遺跡群でいくつか認められているが（第10･11 図）、これは稜柱系細石刃石器群の一部に加わるものと考えられる。

8　以上を整理すると、第30図に示した細石刃石器群の変遷が追えよう。かつて諏訪間順が提示したその段階変遷試案（諏訪間1991）と筆者の見解は同一である。

5　細石刃文化研究の課題

ここでは次の三点を主な研究の課題としておく。第一点は他の石器群との関連性や編年の問題、第二点は細石刃文化期の石材利用や活動領域の問題、第三点は細石刃文化遺跡の立地とそこから派生するセトルメントシステムの問題である。

1　まず、先行する尖頭器石器群と細石刃石器群との共存の問題がある。

野辺山地域では、両者はその分布をまったく異にしており、それをもって筆者は両者が基本的には共存しない（過渡期のごく短い時間を除く）と解釈しているが、分布の違いが時間の違いとイコールではないこともむろんで、その共存におけるセトルメントの差として解釈する考えも成り立とう。

ひるがえって柳又をみると、尖頭器と細石刃は同一層内から出土している。谷口は楔系の細石刃と稜柱系の細石刃との微妙な層位的上下関係を明らかにしたが、もし尖頭器と細石刃が時間的前後関係をもって存在していたとするなら、二者の細石刃よりさらに顕著に層位的上下関係がとらえらえてよいはずである。ヴィーナスライン等による石器群の詳細な層位的分離が、今後刊行される柳又Ｃ地点の報告書等に望まれよう。

もうひとつは神子柴系文化と細石刃石器群との時間的関連である。筆者は削片系細石刃石器群の最終段階に神子柴系文化の波及があったとみているが、佐久市下茂内遺跡第

Ⅱ文化層の最古の土器をともなう尖頭器石器群に13000-14000 年前をさかのぼるという年代観があたえられており（近藤編1992）、これを神子柴系の尖頭器石器群として扱うとなると年代上の齟齬をきたすことになる。

筆者は、下茂内遺跡第Ⅱ文化層の尖頭器を頁岩の真正な神子柴型尖頭器に後出するものとしてとらえている。ここで型式学的な編年観を優先すると、理化学的な年代観に支障をきたすことになるが、考古学研究者がとる立場とは前者と考える。

以上の問題を含めたうえで、さらに細石刃文化内部でのより細かな変遷をとらえられ前後の文化などとのかかわりあいから、細石刃文化の生成と消滅の動態がより明瞭にされることが望まれよう。

2　つぎに石材利用の様相とそこから導き出される活動領域の問題である。

たとえば中ッ原と柳又の細石刃石器群がほぼ等質な内容をみせ、両者が信州系の黒曜石を共通石材として用いている点と、中ッ原においていわゆる下呂石（ハリ質安山岩）を用いた細石刃がみられる点において、相互の共通性は興味深い。

ビンフォードのいうように埋め込み戦略的な石材確保を考えた場合、両地域がひとつの集団の活動領域であった可能性から、相互の地域に共通石材が認められるとも想定されよう。一方、相互の地域にそれぞれの集団がいたと考えた場合、石材の確保や交換などについて、双方の接触がありえた可能性は十分に残ろうし、相互集団の活動領域が問題ともなろう。

石材確保の実態と、その利用のありかたから導きだされる集団の活動領域の問題は、追及すべき重要なテーマである。

3　遺跡の立地論的分析やセトルメントシステムの分析も重要な課題であろう。

たとえば鈴木忠司は細石刃文化遺跡を高原型と平地型に区分しているが（鈴木1985）野辺山や開田は高原型の立地を示すものであり、その環境とあいまって生産獲得活動の内容的把握が今後の課題といえるだろう。一方、桜井準也は河川次数の分析から細石刃文化遺跡と川とのかかわりを見出し内水面漁撈の可能性を追及しているが（桜井1989）、こうした地理的分析手法を用いた分析も有効だろう。むろん遺跡群におけるセトルメントシステムは、活動領域と活動内容を含めたかたちで把握されなければなるまい。

これ以外にもいくつかの研究課題は山積しているが、以上をもって今後の研究の課題としておこう。

6　引用・参考文献

麻生優　1991　『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』

安蒜政雄　1979　「日本の細石核」　『駿台史学』47

国学院大学考古学研究室　1990～1993　『柳又遺跡A地点』Ⅰ～Ⅲ

近藤尚義ほか　1992　『下茂内遺跡』　長野県埋蔵文化財センター

信州ローム研究会　1972　『男女倉』

桜井準也　1989　「遺跡立地と河川次数分析」　『考古学の世界』

鈴木忠司　1985　「再論日本細石刃文化の地理的背景」『論集日本原始』

諏訪間順　1991　「細石刃石器群を中心とした石器群の変遷に関する予察」　『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』

芹沢長介・柳澤和明　1982　「矢出川遺跡」　『長野県史考古資料編』東北信編

谷口康浩　1991　「木曽開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『国学院雑誌』1007

堤　隆　1991　「野辺山原における細石刃文化の様相」『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』

堤　隆　1992　「中ッ原第１遺跡Ｇ地点における細石刃文化の調査」『第五回長野県旧石器研究交流会発表要旨』

堤　隆　1993　「ホＡ２７地点」　『男女倉遺跡群詳細分布調査報告書』Ⅲ

尖石考古館　1966　『蓼科』

戸沢充則　1964　「矢出川遺跡」　『考古学集刊』２－下

中村龍雄　1977･1978　『黒曜石』上・下

明治大学考古学研究室編　1980～1982　『報告野辺山シンポジウム』1979～1981

森嶋稔　1975　『男女倉』

森嶋稔　1983　「柳又遺跡」　『長野県史考古資料編』中南信編

八ケ岳旧石器研究グループ　1991　『中ッ原第５遺跡Ｂ地点の研究』

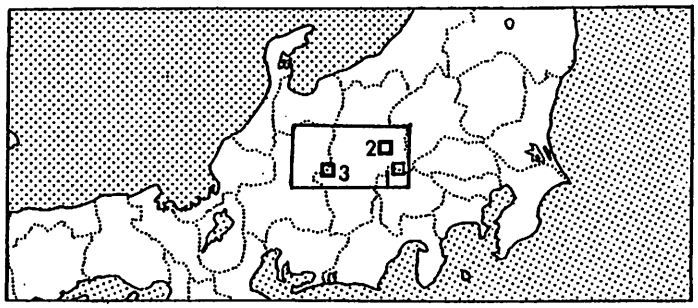
柳澤和明　1985　「中部高地における後期旧石器時代石器群の構造変化」『東北大学考古学研究報告』1

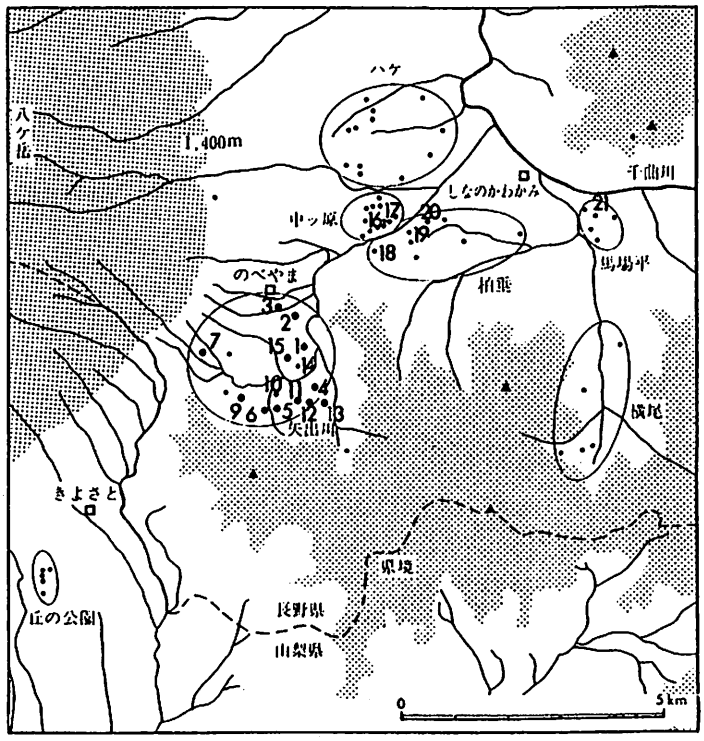
由井一昭・堤隆　1985　「長野県南佐久郡川上村柏垂遺跡採集の細石刃石核」　『古代文化』37-6

由井茂也・吉沢靖・堤隆　1990　「信濃野辺山原の細石刃文化」『古代文化』42-11

吉朝則富　1985　『飛騨の考古学遺物集成』Ⅰ　高山市教育委員会

第1図



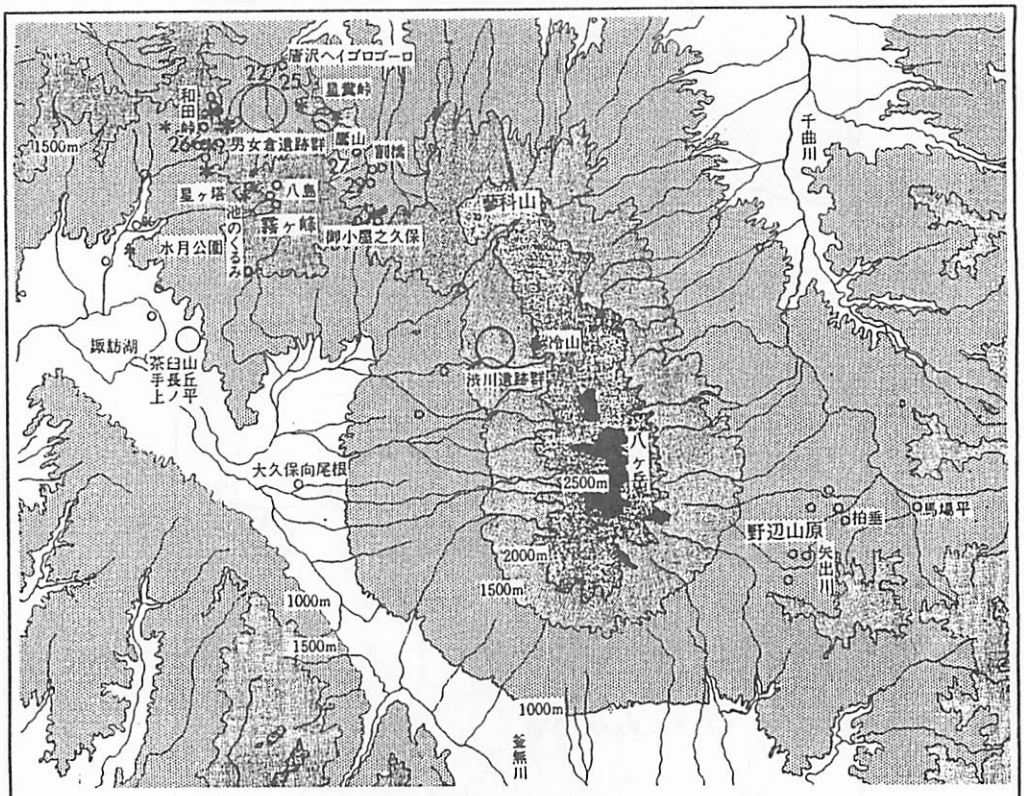


第2図　野辺山における旧石器時代遺跡と細石刃文化遺跡（番号付のもの）の分布

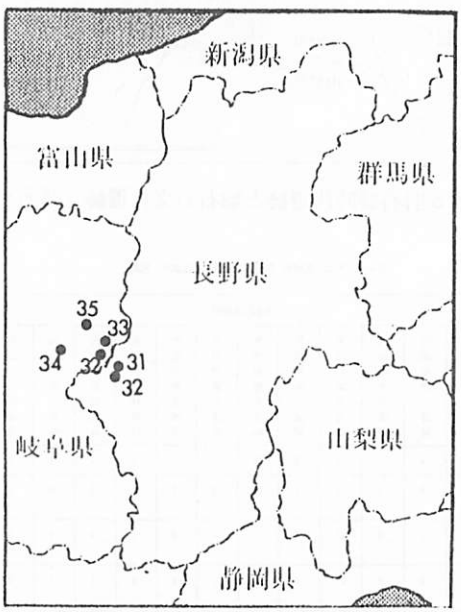
第1表　矢出川遺跡群　細石刃文化資料出土遺跡一覧表

遺跡名および地点名	矢出川遺跡群																			
	矢出川第1遺跡	矢出川第II遺跡	矢出川第III遺跡	矢出川第IV遺跡	矢出川第V遺跡	矢出川第VI遺跡	矢出川第VII遺跡	矢出川第VIII遺跡	矢出川第IX遺跡	矢出川第X遺跡	矢出川第XI遺跡	矢出川第2地点	矢出川第19地点	矢出川第59地点	矢出川第64地点	矢出川第65地点	矢出川第67地点	矢出川第32数布地	丸山山頂	三沢
細石刃	5000>	4	0	152	0	0	0	3	0	64	0	1	1	2	1	1	0	0	20>	0
細石刃石核	644	0	1	68	0	0	1	1	0	16	0	0	0	0	0	0	1	1	5>	0
尖頭器	3	5	0	1	0	2	0	83	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
ナイフ形石器	23	16	1	7	0	2	2	17	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	8

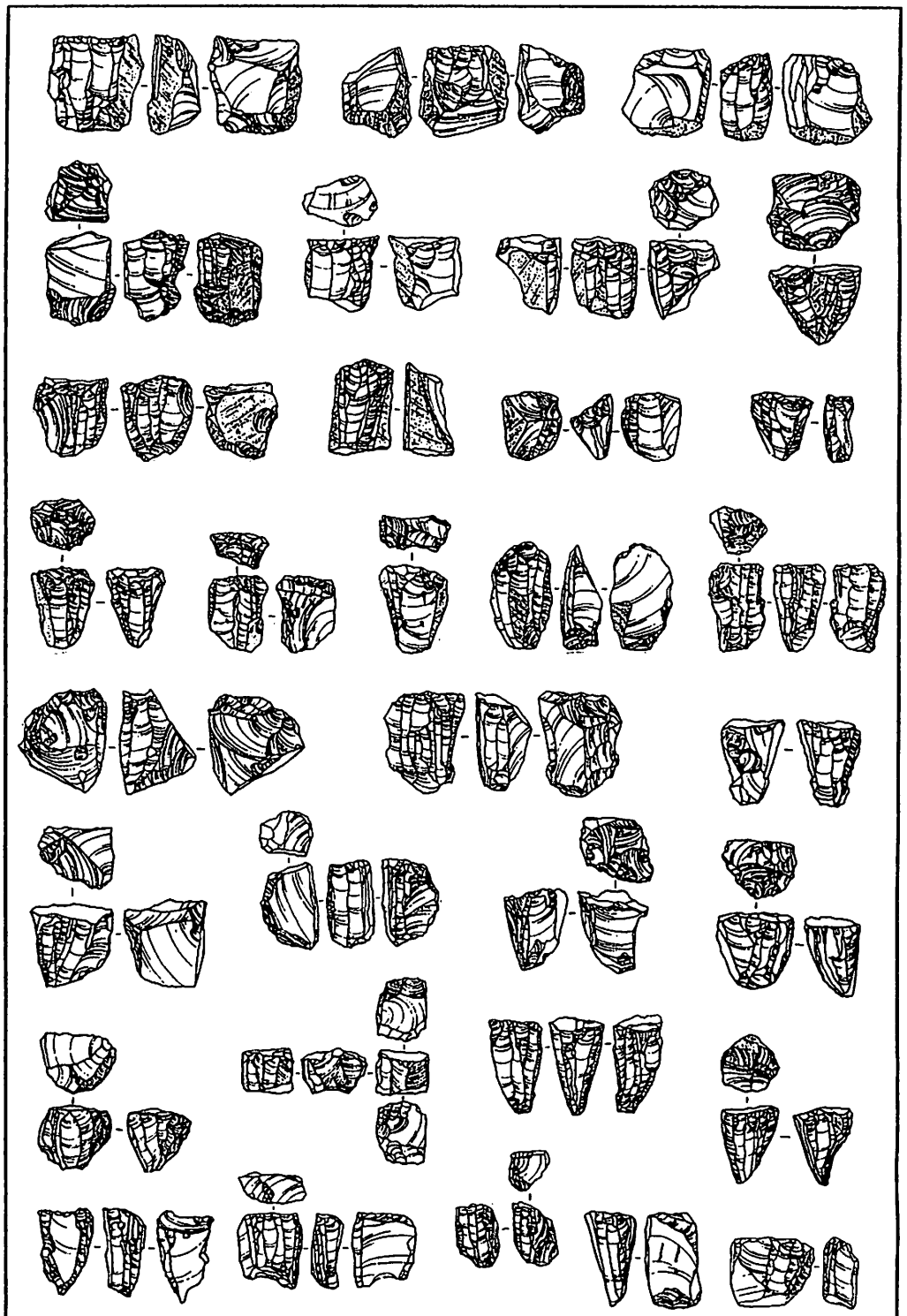
出土点数は、発掘資料、分布調査資料、個人蔵（由井茂也・吉沢晴・由井一昭・由井明・堤　隆・土屋忠芳・中島芳栄氏等）の計である。
>は、数字以上の点数の出土を表わす。



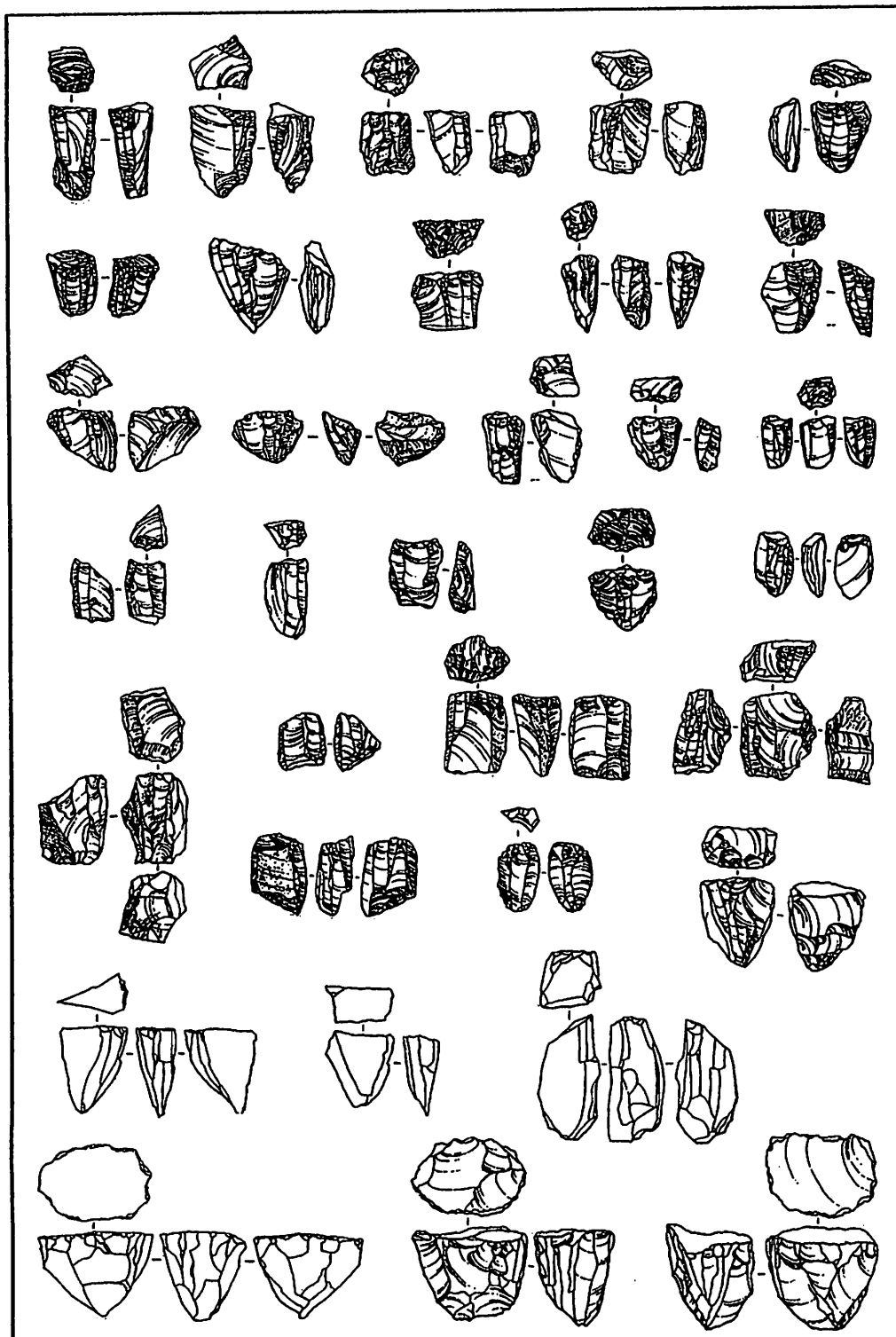
第３図　八ヶ岳周辺の旧石器時代遺跡の分布（柳澤1985より）



第４図　御嶽山北部の細石刃文化遺跡



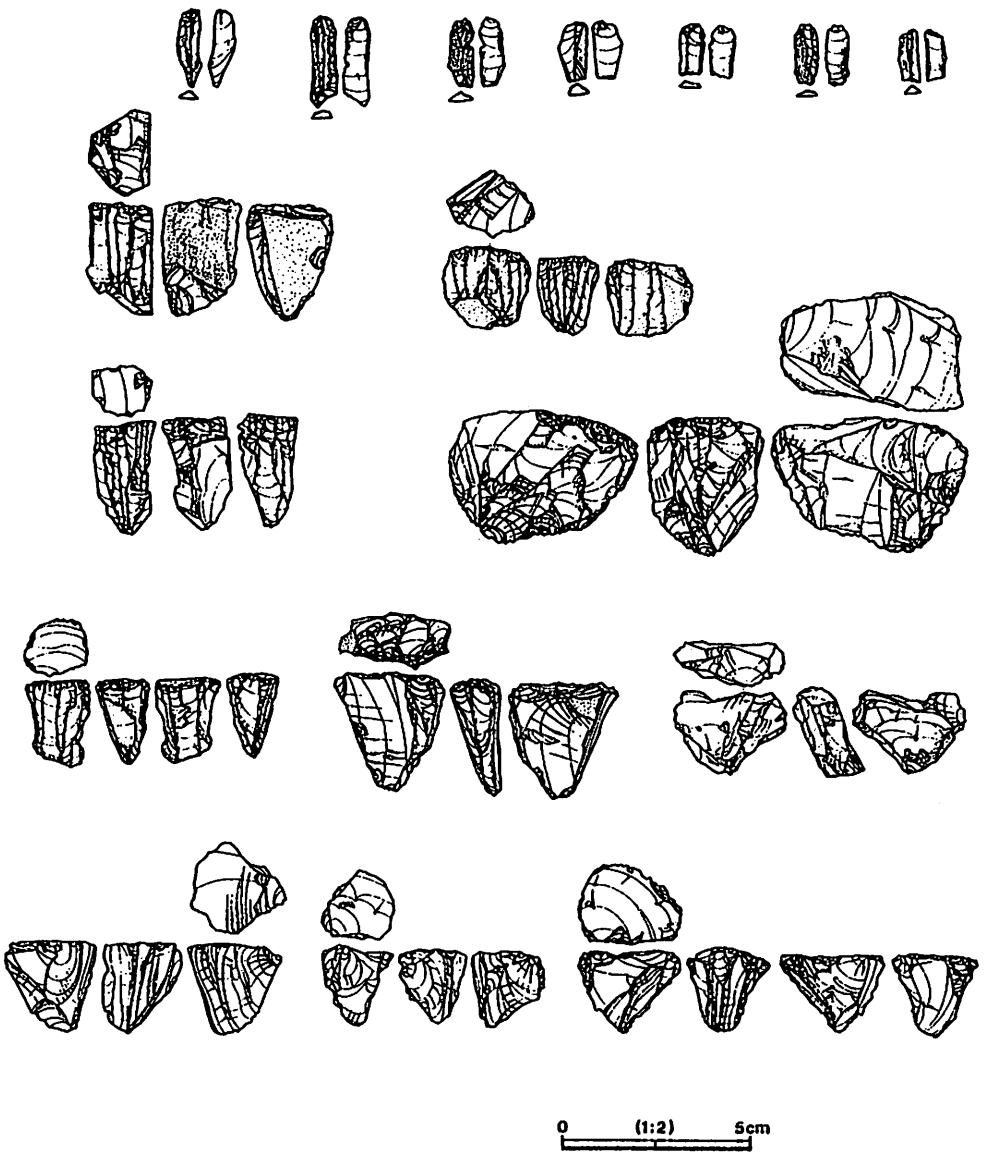
第5図　矢出川第1遺跡の細石刃石核（戸沢1964）　0　(1:2)　5cm

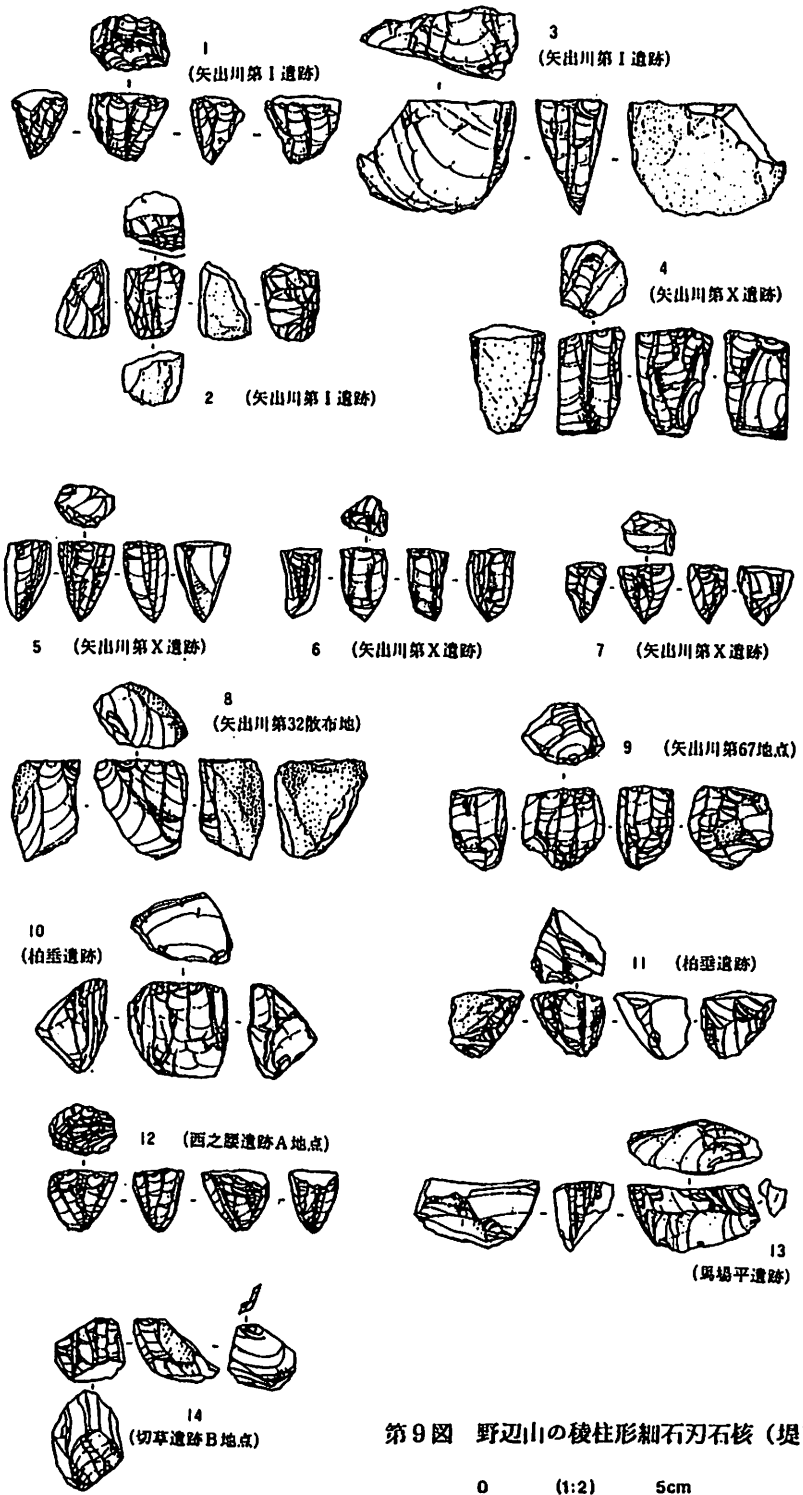


第6図　矢出川第Ⅰ遺跡の細石刃石核（戸沢1964）　0　(1:2)　5cm

第７図　矢出川第Ⅰ遺跡の打面再生剥片（戸沢1964）

第８図　矢出川第Ⅰ遺跡の細石刃・細石刃石核・細石刃石核素材（芹沢・柳澤1982）





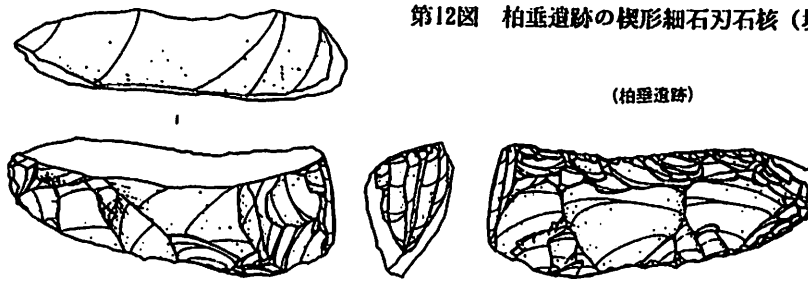
第9図　野辺山の稜柱形細石刃石核（堤1991）

第10図　矢出川第１遺跡の舟底形細石刃石核（堤1991・戸沢1964）

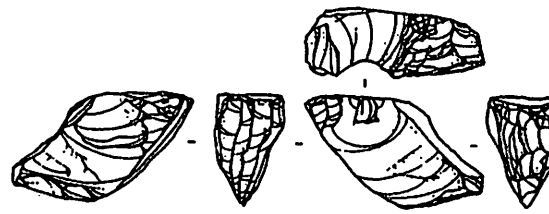
第11図　矢出川第Ⅳ遺跡の舟底形細石刃石核（堤1991）

0　(1:2)　5cm

第12図　柏垂遺跡の楔形細石刃石核（堤1991）



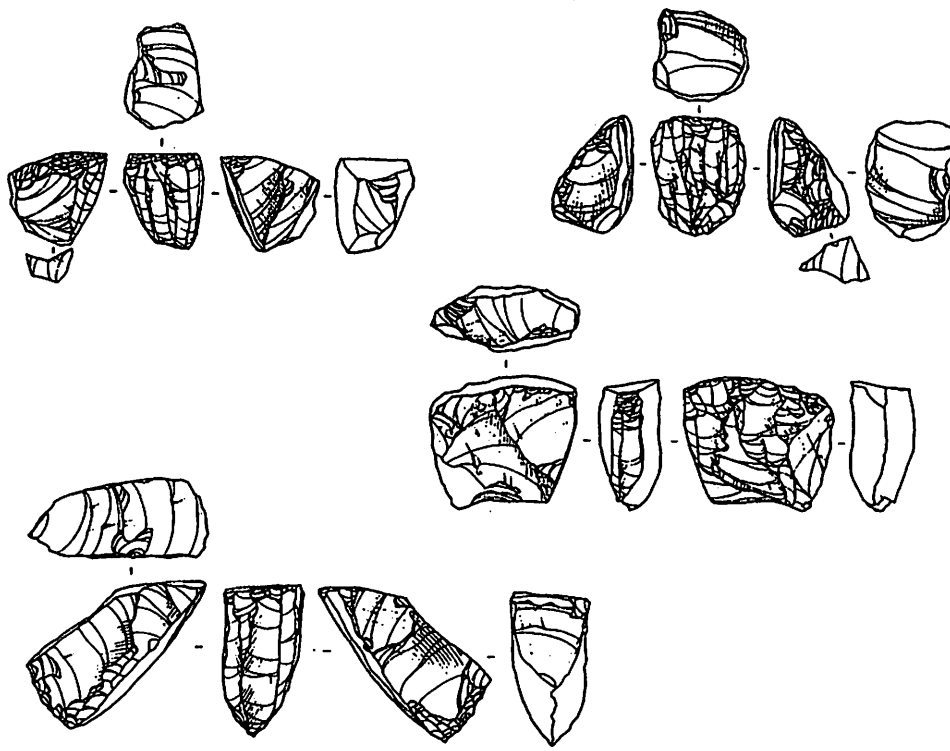
（柏垂遺跡）



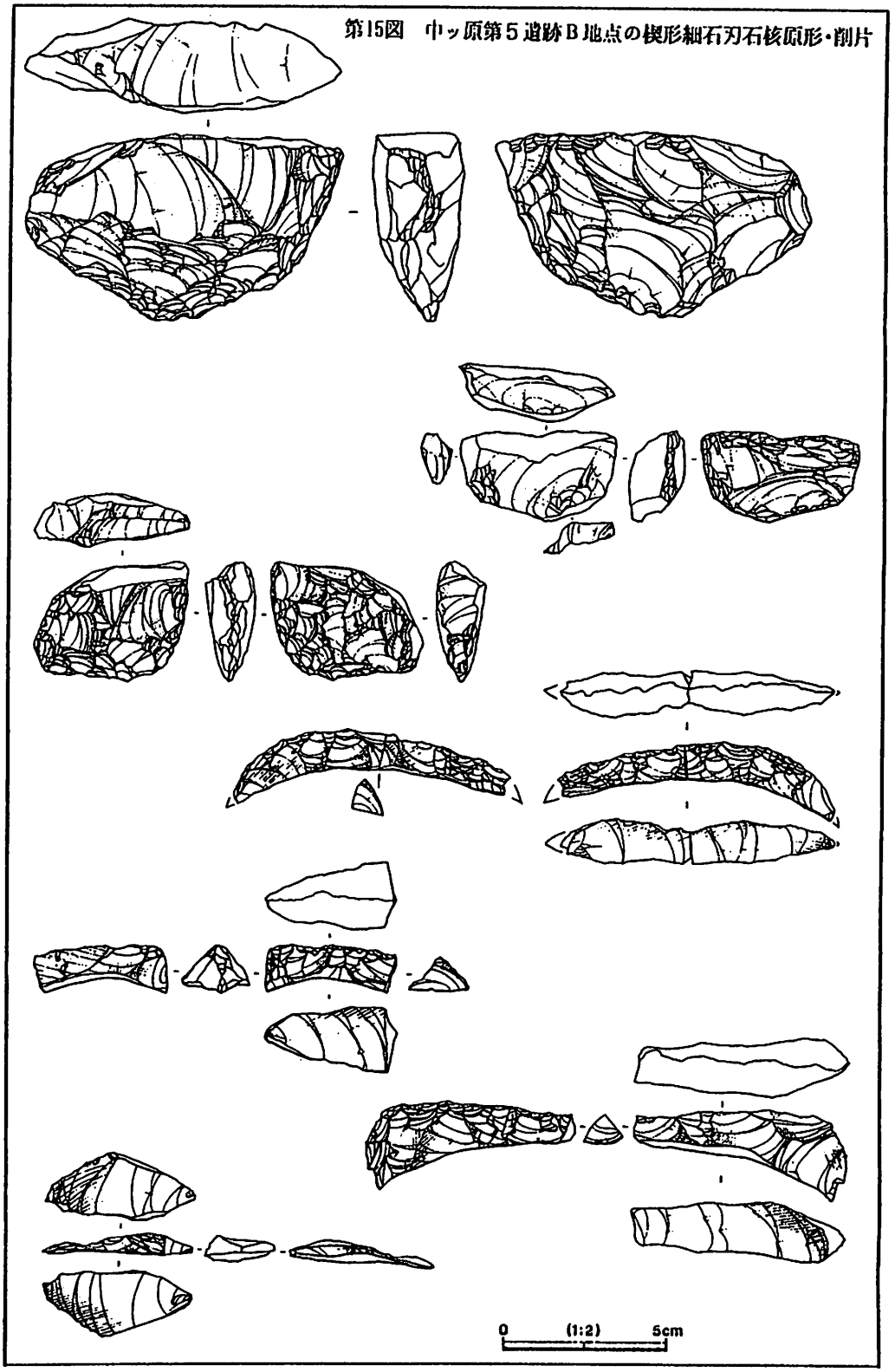
（矢出川第１遺跡）

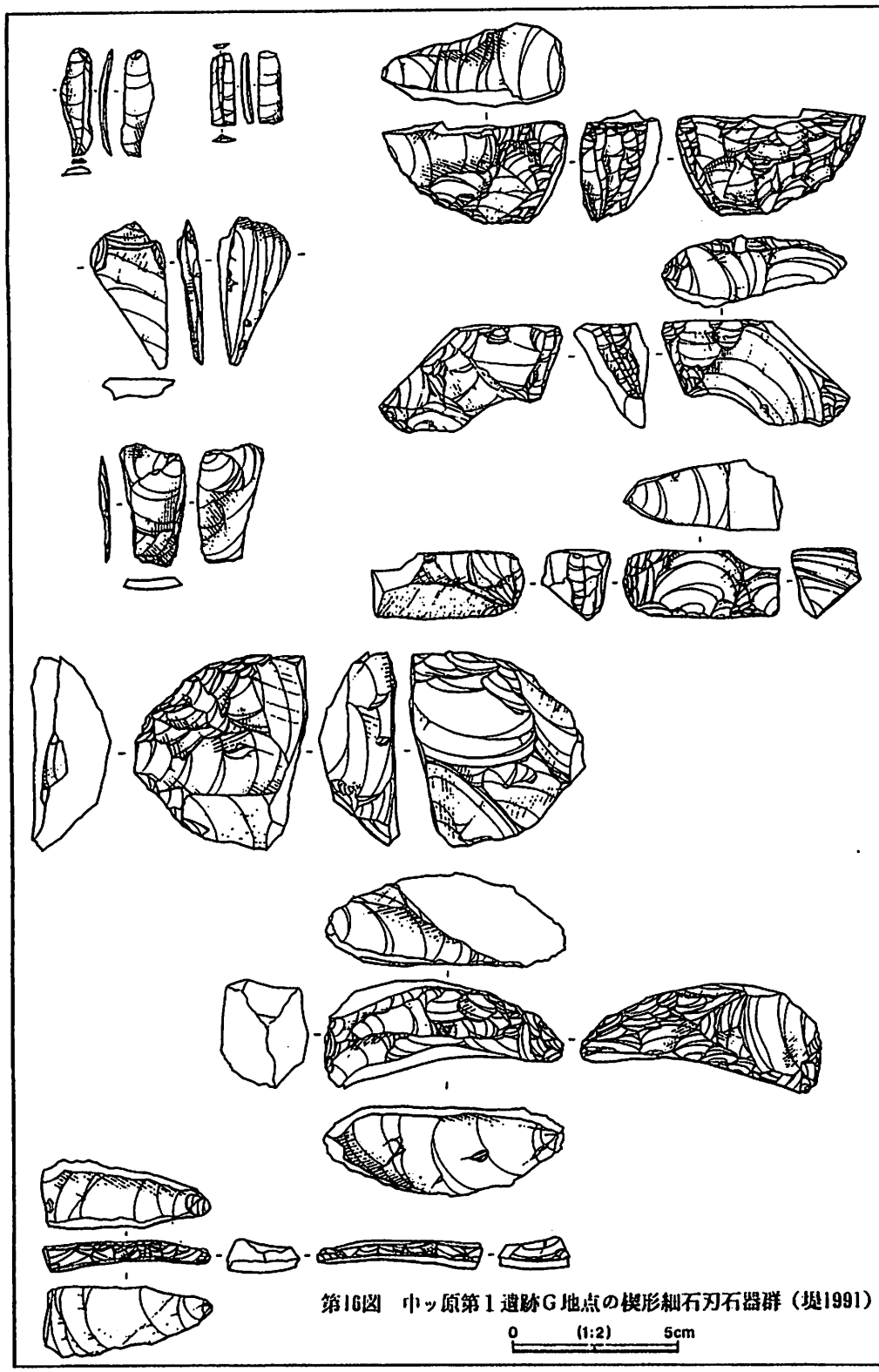
第13図　矢出川第１遺跡の楔形細石刃石核（堤1991）

第14図　中ッ原第５遺跡Ｂ地点の楔形細石刃石核（八ヶ岳旧石器研究グループ1991）

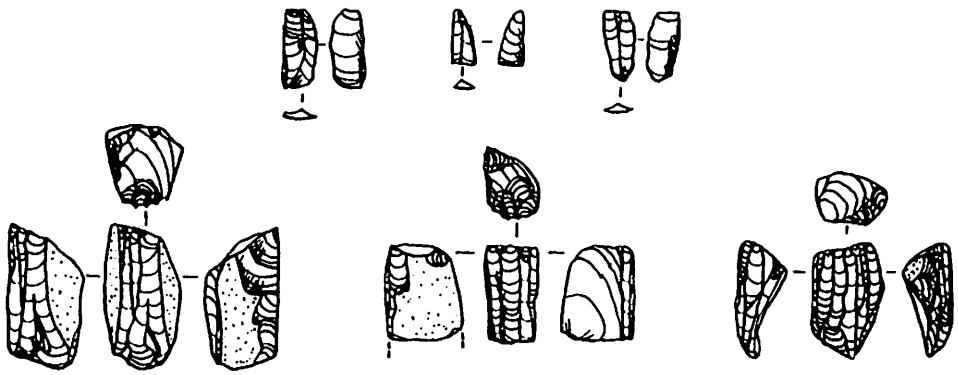


第15図　中ッ原第５遺跡Ｂ地点の楔形細石刃石核原形・削片

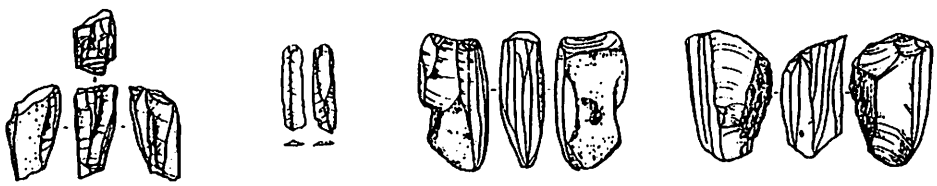




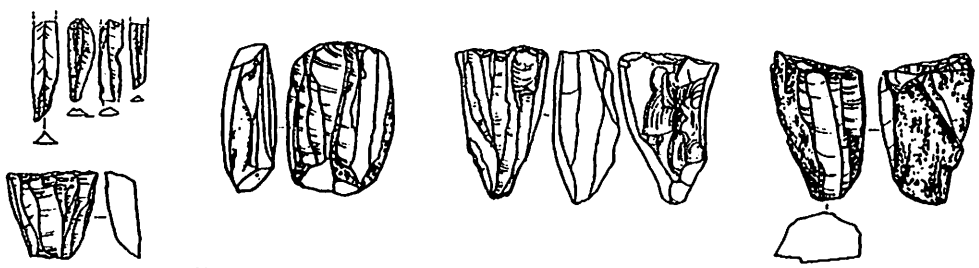
第16図　中ッ原第1遺跡G地点の楔形細石刃石器群（堤1991）



第17図　男女倉遺跡H地点の細石刃石器群（森嶋1975）



第18図　男女倉遺跡J地点（左1点）と第III地点の細石刃石器群（信州ローム研究会1975）



第19図　男女倉遺跡第IV地点の細石刃石器群（信州ローム研究会1975）

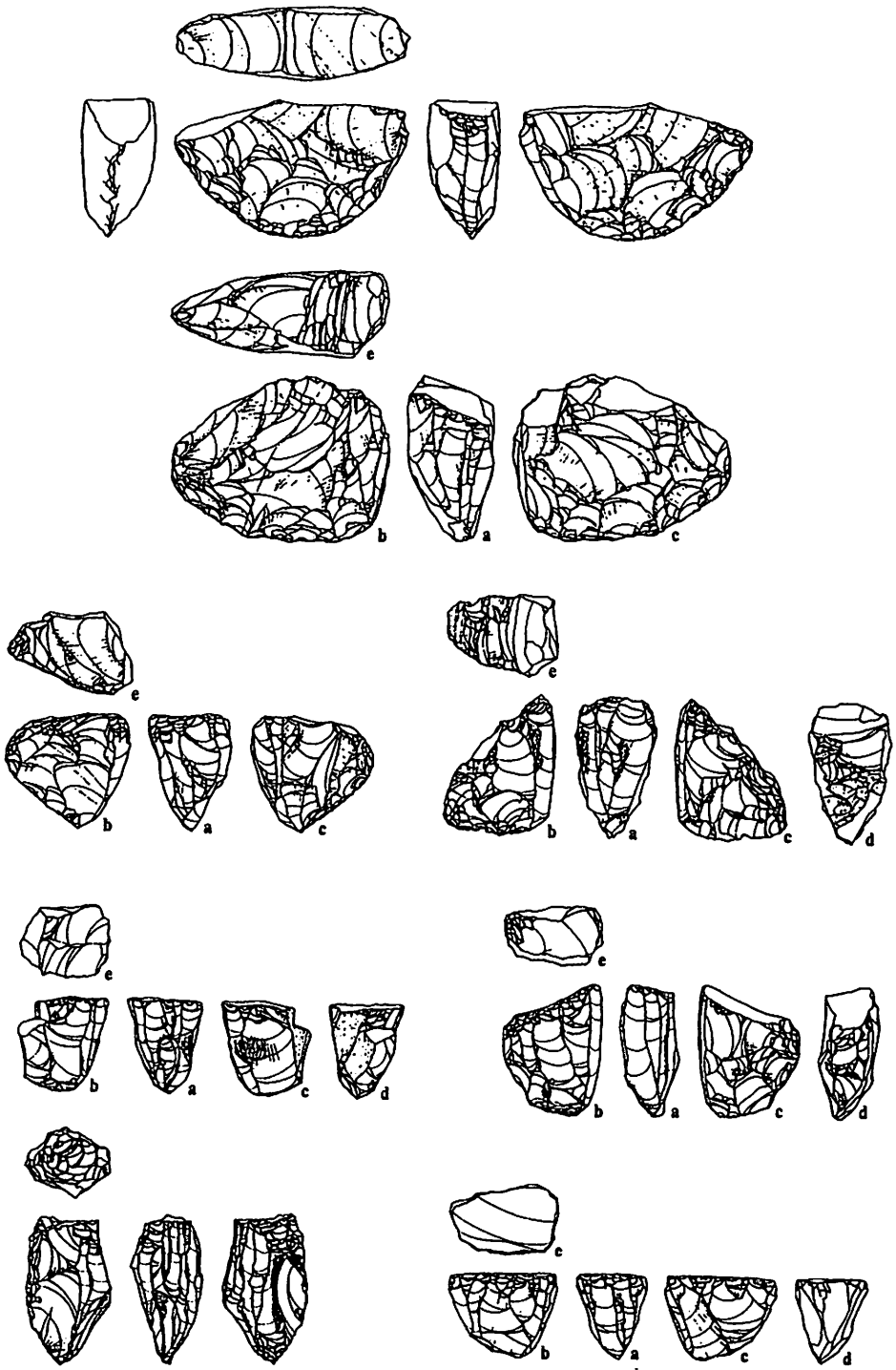
第20図　和田峠頂上遺跡の細石刃石器群（中村1977）

0　(1:2)　5cm

第21図　鷹山第Ⅰ遺跡の細石刃石器群（尖石考古館1966・堀川1983）

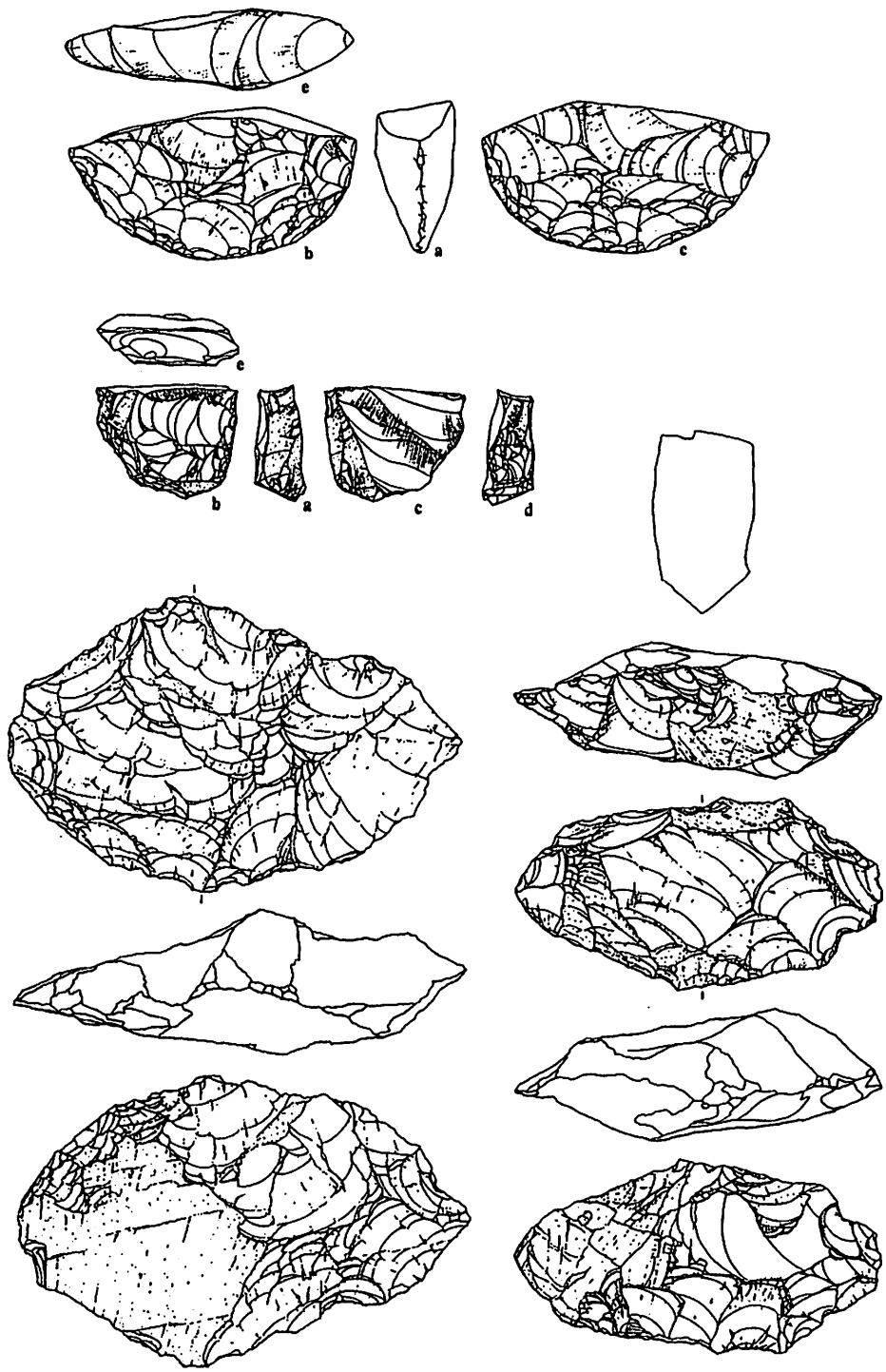
第22図　鷹山第Ⅳ遺跡と標木平遺跡(右1点)細石刃石核（中村1978）

0　(1:2)　5cm



第23図　柳又遺跡A地点の細石刃石核（国学院大学考古学研究室1990~93）

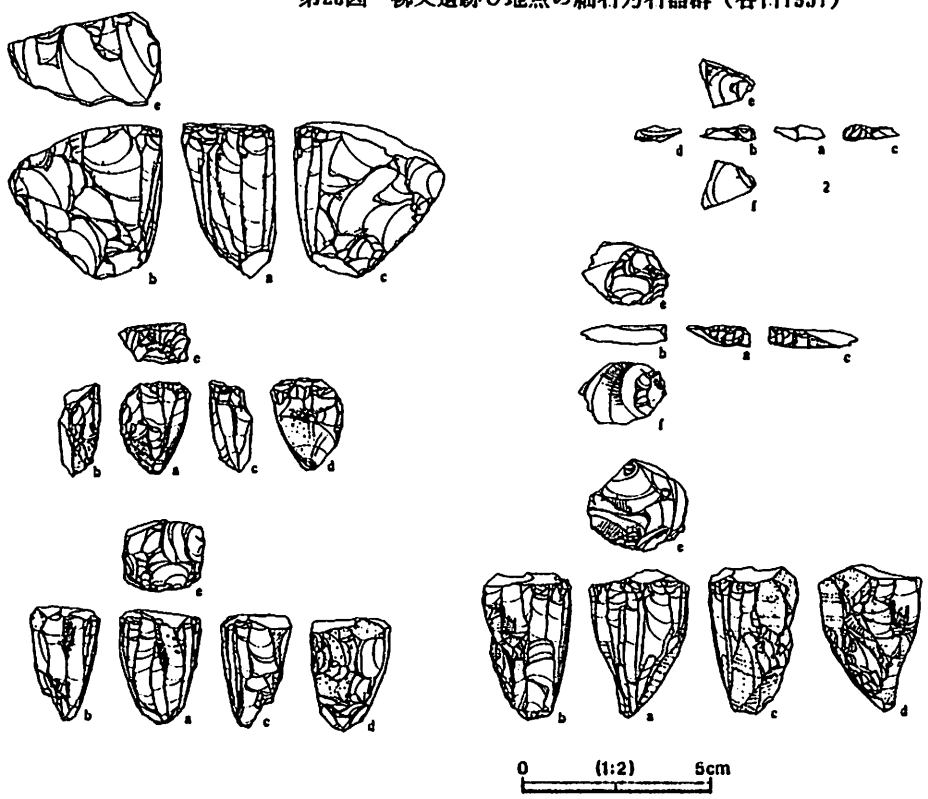
0　(1:2)　5cm

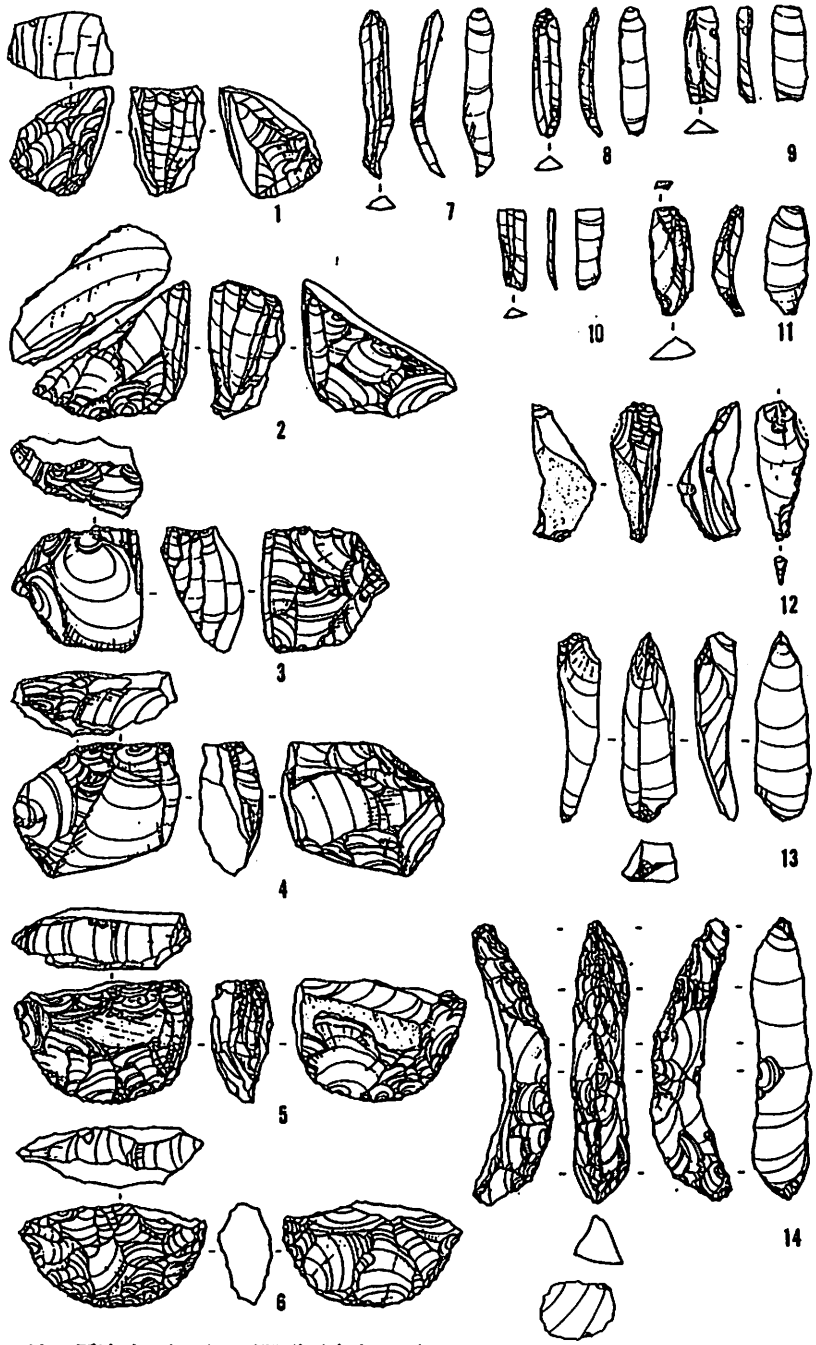


第24図　柳又遺跡A地点の細石刃石核素材（国学院大学考古学研究室1990~93）

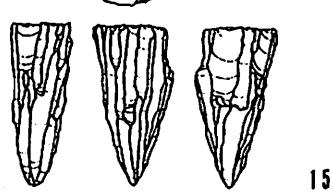
第25図　柳又遺跡A地点の細石刃石核削片・再生剥片

第26図　柳又遺跡C地点の細石刃石器群（谷口1991）

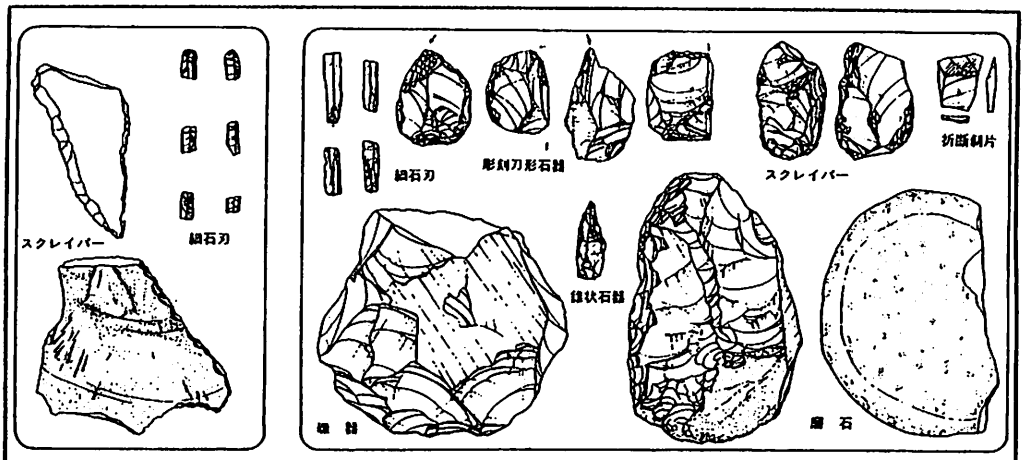




第27図　池の原遺跡の細石刃石器群（麻生1991）

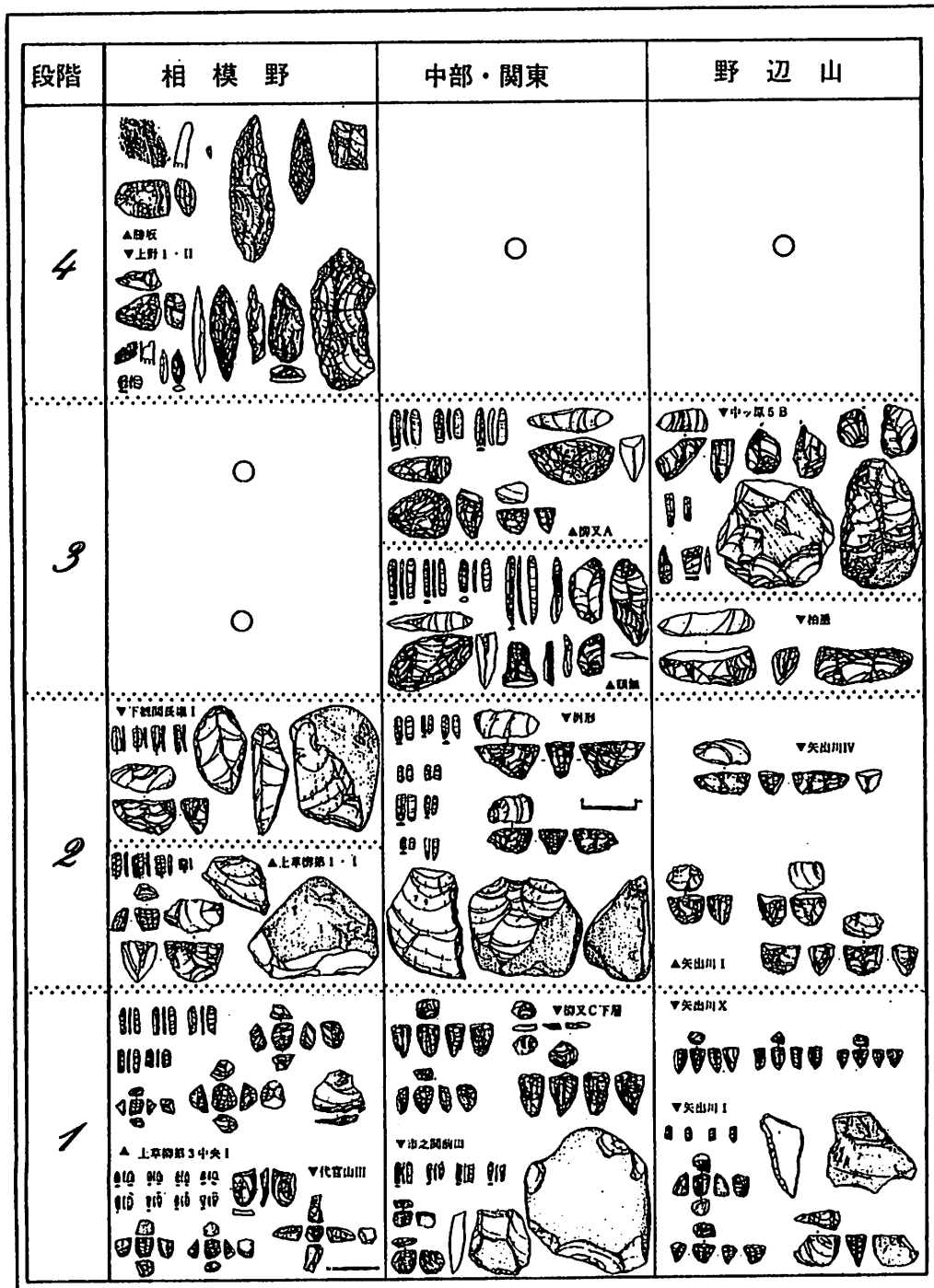


第28図　槍柄原遺跡の細石刃石核（15・吉朝1985）



矢出川第Ⅰ細石刃石器群（左）と中ッ原５Ｂ細石刃石器群（右）の石器装備（１：３）

第29図　細石刃石器群の共伴関係



第30図　南関東・野辺山における細石刃石器群の段階変遷（諏訪間1991より）

第 2 表　　中部地方南半　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	鏃	土	発掘	所在	所属	備考
1	矢出川第Ⅰ遺跡	250	145	17	9	47						47				○	長野県南佐久郡南牧村野辺山	明治大学	(戸沢1964)
	〃	4750	499	○					○								〃	個人表採集計	
2	矢出川第Ⅱ遺跡	4															〃		表採集計
3	矢出川第Ⅲ遺跡		1														〃		〃
4	矢出川第Ⅳ遺跡	152	68														〃		〃
5	矢出川第Ⅵ遺跡		1														〃		〃
6	矢出川第Ⅶ遺跡	3	1														〃		〃
7	矢出川第Ⅹ遺跡	68	16														〃		〃
8	矢出川第２地点	1															〃		〃
9	矢出川第19地点	1															〃		〃
10	矢出川第59地点	2															〃		〃
11	矢出川第64地点	1															〃		〃
12	矢出川第65地点	1															〃		〃
13	矢出川第67地点		1														〃		〃
14	矢出川第32散布地		1														〃		〃
15	丸山山頂	20	5														〃		〃
16	中ッ原５Ｂ地点	160	4	9	3	5	1		1	1						○	長野県南佐久郡南牧村野辺山	八ケ岳旧石器グ	発掘・表採集計
17	中ッ原１Ｇ地点	30	6	1	1					1						○	〃	八ケ岳旧石器グ	発掘・表採集計
18	柏垂遺跡		3														〃		表採集計
19	西ノ原遺跡Ａ地点		1														〃		〃
20	切耳遺跡Ｂ地点		1														〃		〃
21	馬場平遺跡		1														〃		〃
22	男女倉遺跡Ｈ地点	4	3													○	長野県小県郡和田村男女倉	和田村教委	
23	男女倉遺跡Ｊ地点		1													○	〃	〃	(堤1993)
24	男女倉遺跡Ⅲ地点	1	2													○	〃	信州大	信州ローム研1972
25	男女倉遺跡Ⅳ地点	4	4													○	〃	〃	〃
26	和田峠頂上遺跡	2	2														〃	中村龍雄	(中村1977)
27	鷹山第Ⅰ遺跡	78	9													○	長野県小県郡長門町鷹山	尖石考古館	尖石考古館1966
28	鷹山第Ⅳ遺跡		2													○	〃	中村龍雄	(中村1978)
29	樹木平遺跡		1														〃	中村龍雄	(中村1978)
30	柳又遺跡Ａ地点	271	8	19	3	15		1	5		1		8			○	長野県木曽郡開田村西野	國學院大	國學院1990~1993
31	柳又 Ｃ地点 第一集中	39	5		○											○	〃	國學院大調査団	(谷口1991)
	第二集中	87	3	○												○			
32	池の原遺跡	10	5	○	○								○			○	岐阜県大野郡高根村日和田	千葉大	(千葉大1991)
33	槍柄原遺跡		1														〃	上田薫三	(吉朝1985)
34	平畑遺跡		1														岐阜県大野郡高根村中洞平畑	田林一夫	〃
35	百峰Ａ遺跡		1			1											岐阜県大野郡久々野山梨	高山考古研究会	〃

中部北半・北陸地方の細石刃文化

高橋春栄・沢田　敦・立木宏明
菅沼　亘・吉井雅勇

1　研究の経過

１９５７年　星野義郎・井口通泰が新潟県川口町荒屋遺跡を発見。

１９５８年　荒屋遺跡第１次発掘調査が行われる。大量の彫刻刀形石器が出土し、「荒屋型彫刻刀」と命名される。

１９６４年　長岡市立科学博物館により新潟県下田村中土遺跡の発掘調査が行われる。

１９６８年　大塚和義が「荒屋技法」を提唱する。

１９６８年　星野義郎が新潟県堀之内町月岡遺跡を発見、同年長岡市立科学博物館により発掘調査が行われる。

１９８２年　野尻湖発掘調査団により「野尻湖陸上発掘」の一環として、仲町遺跡・向新田遺跡の調査が行われる。

１９８６～　荒川台遺跡の調査開始。１次調査は法政大学により、２次（1989）・３次（1991）・４次（1993）調査は帝京大学によって行われ、石刃石器群と細石刃石器群の共存が問題になる「荒川台技法」の提唱。

１９８８～　荒屋遺跡の第２次発掘調査、翌年第３次発掘調査が東北大学によって行われる。この結果、①削片系とホロカ型２種の細石刃石核が存在すること、②荒屋型彫刻刀形石器の全体の組成に対する割合が非常に高いこと、③炉を持つ住居跡をはじめ当該期の遺構の存在が明らかになったことなど、１次調査の結果が再認識・再確認され、また新しい事実も明らかになった。

１９９０　長野県上ノ原遺跡が調査され、稜柱形石器群に伴って石囲い炉が検出される。

（吉井雅勇）

2　遺跡の分布

A　三面川流域　上流域１遺跡と中流域１遺跡が確認されている。上流域の樽口遺跡は河口の合流点に立地しており、特徴的である。　（立木宏明）

B　荒川流域　「荒川台技法」による細石刃石器群と石刃石器群からなる荒川台遺跡は、飯豊山地と朝日山地から発せられる荒川が越後平野に抜ける段丘上に位置する。荒川流域では石刃石器群の遺跡は幾つか立地するが、細石刃石器群は現在までのところ荒川台遺跡のみである。

C　加治川流域　ホロカ型細石刃石核が採集された上車野G遺跡と削片系細石刃石核が採集された上ノ山C遺跡は、加治川右岸に形成されたなだらかな開折扇状地上にあり、一方、稜柱形細石刃石核が採集された田家池ノ平遺跡は、五頭山麓から北東に延びる馬の背状尾根上に立地する。

D　阿賀野川流域　珪質頁岩の削片系細石刃石核のある中道・大平遺跡と、同じく珪質頁岩を石材に用いた荒屋型彫刻刀型石器のある行塚遺跡B地区は、阿賀野川右岸に集中して立地している。　（高橋春栄・吉井雅勇）

E　五十嵐川流域　刈谷田川流域　円錐形の細石刃石核が出土する遺跡が２遺跡、削片系細石刃石核が出土する遺跡が３遺跡である。５遺跡とも河川を臨む段丘及び丘陵上に立地する。　（立木宏明）

F　魚野川流域　必ずしも遺跡数が多くないために遺跡立地の詳細は不明であるが、本地域で現在知られている遺跡はすべて段丘面上に位置しており、段丘面の縁辺付近に遺物集中地点が認められることが多い。

G　信濃川中流域　荒屋型彫器が採集された天上原遺跡と、細石刃のみの千石原遺跡が信濃川左岸に位置する。　（沢田　敦）

H　信濃川上流域　ホロカ型細石刃石核が単独出土している遺跡（干溝遺跡）と荒屋型彫器が採集されている遺跡（屋敷田・釜堀川東遺跡）が、信濃川右岸の河岸段丘上に分布する。干溝・屋敷田遺跡は、信濃川とその支流である清津川の合流点に位置する。

I　千曲川下流域　削片系細石核と矢出川型細石核が採集されている千苅遺跡は千曲川右岸の河岸段丘上に位置し、削片系細石核が採集されている小野平遺跡は上述の遺跡と立地が異なり、千曲川左岸の丘陵上に位置する。

J　野尻湖周辺　矢出川型細石核が出土・採集されている遺跡（上ノ原・向新田・仲町・町裏C遺跡）は、湖に面する丘陵の緩斜面上に分布している。荒屋型彫器が採集されている杉久保C遺跡とホロカ型細石刃石核が採集されている樅ヶ崎遺跡は、湖岸に位置している。

K　小矢部川流域　削片系細石核が単独出土している日の宮遺跡が、小矢部川左岸の河岸段丘上に位置している。（菅沼　亘）

3　細石刃石器群

A　三面川流域

中原野北遺跡　細石刃石核２点と細石刃が３点採集されている（第５図14・15）。ともに厚手の剥片を素材とした円錐形の細石刃石核である。石材は珪質頁岩を用いている。他に荒屋型彫器が採集されている。

（高橋春栄・立木宏明）

樽口遺跡　現在調査中（1993年９月現在）で詳細は不明である。試掘調査の結果、湧別技法で作製され、打面に擦痕を残す黒曜石製の白滝型細石刃石核が２点出土している。石材は黒曜石、珪質頁岩、玉髄が確認されている。（立木宏明）

B　荒川流域

荒川台遺跡　下縁部調整を施すことによって細石刃石核原形をU字形に整形する荒川台技法による細石刃石核のほか、同原形、細石刃、ナイフ形石器、スクレイパー、尖頭器、ピエス・エスキーユ、石刃石核、石刃等が出土した。石材は比較的粗粒の頁岩が主体で、若干玉髄、黒曜石、流紋岩がある。また黒曜石の稜柱形細石刃石核１点が採集されている（阿部・高橋1986、阿部1992ほか）。

C　加治川流域

上車野G遺跡　頁岩のホロカ型細石刃石核が採集されている。分割礫を素材にし、一方の側面は一枚の旧剥離面、他方は甲板面からの調整加工によって舟底形に仕上げられている。当遺跡から沢を挟んで南西約150mのところに尖頭器・掻器が採集された上車野D遺跡がある。

上ノ山C遺跡　削片系細石刃石核のほか、ナイフ形石器、彫刻刀形石器、掻器、石刃石核が採集されている（高橋1990）。最低２回の削片を剥離して打面が設定されている。石材は数百点中、ナイフ形石器の玉髄が１点のみで、他は頁岩である。なお当遺跡のナイフ形石器群は、別個に存在するものと考えられる。

田家池ノ平遺跡　小石刃石核ともいうような稜柱形細石刃石核が２点採集されている。両設打面で、石材には玉髄を用いている。他にナイフ形石器、彫刻刀形石器、掻器、石刃石核が採集されており、玉髄と頁岩が使用されている。

D　阿賀野川流域

中道遺跡　珪質頁岩の削片系細石刃石核１点が採集されている（菅沼1991）。剥離痕から、２枚以上の削片が剥離されていることがわかる。

行塚遺跡Ｂ地区　珪質頁岩の荒屋型彫刻刀形石器１点、細石刃２点が採集されている。荒屋型彫刻刀形石器は周縁調整のほか背面彫刀部にフラット・グレイバー剥離が、また腹面には樋状剥離痕にそって、数回の調整剥離が加えられている。　（高橋　春栄・吉井　雅勇）

大平遺跡　1988年に新潟大学考古学研究室が行った発掘調査では細石刃７点、剥片数点が出土した。（小野1989、小野他1991）。その他の出土遺物は分布調査時の資料である。細石刃石核は湧別技法に類似する技法により作製されている。報告によれば、掻器・角形彫器との伴出は現状では積極的な証拠があげられないとしている。石材は珪質頁岩、玉髄、チャートが用いられている。

E　五十嵐川流域

吉野屋遺跡　船底形の細石刃石核が１点採集されている（三条ジュニア考古学クラブ1973）。

藤平遺跡　発掘資料はＡ地点より黒曜石製の細石刃５点と珪質頁岩製の楕円形状の細石刃石核の母型（報告では「小型握斧」）が１点確認されている。Ｂ地点からは珪質頁岩及び黒曜石製の細石刃が20数点出土している（中村他1972）。また同地点からは荒屋型彫器が数点採集されている（三条商業高校社会科クラブ考古班1971）。中村氏の報告によれば藤平遺跡には、円錐形の細石刃石核を含む石器群と、船底形の細石刃石核を含む石器群の二者の存在が想定されている。

中土遺跡　湧別技法に類似する技法で作製された細石刃石核と掻器・削器・尖頭器・礫器等が発掘調査により確認された（中村1965）。発掘担当者の中村孝三郎氏は報文中、ナイフ形石器・角錐状石器（報告では

「小型尖頭石器」）を層位的に分離できないことを根拠に細石刃石器群との伴出を認めている。しかし筆者は否定的な見解を持っている。また角形彫器等の彫器類の伴出も今後の検討課題である。石材には珪質頁岩・凝灰岩・チャート・黒曜石が使用されている。

御淵上遺跡　長岡市立科学博物館による発掘地点（中村1971）より南に80mの地点で珪質頁岩製の円錐形の細石刃石核１点が採集されている（立木1988）。

田井遺跡Ａ地区　矢出川技法の細石刃石核と細石刃石核素材、細石刃が確認調査により出土している（田中ほか1988）。石材は黒曜石と珪質頁岩が使われている。細石刃石核の石材は黒曜石である。

小戸谷遺跡　珪質頁岩製の荒屋型彫器１点が採集されている。　（立木宏明）

Ｆ　魚野川流域

月岡遺跡　1968年の長岡市立科学博物館（中村・小林ほか1983）、1989年の堀之内町教委（鈴木・田海・山田1990）による発掘がある。細石刃、湧別技法による細石刃石核、細石刃石核母型、細石刃石核スポール、荒屋型10点を含む彫刻刀形石器、エンドスクレイパー、両面加工石器、石刃、石刃石核が出土した。細石刃石核スポールには断面不等辺三角形のものが認められる。なお、1968年調査地点と1989年調査地点は約20mほど離れた別地点である可能性が高い。石材は珪質頁岩が大部分を占める。

荒屋遺跡　細石刃、削片系および非削片系の細石刃石核、細石刃石核母型、細石刃石核スポール、彫刻刀形石器、エンドスクレイパー、サイドスクレイパー、ドリル、鏃形石器、両面加工尖頭器、舟底形石器などが出土している。細石刃技法は湧別技法、ホロカ技法が認められるほかに、断面不等辺三角形や断面不等辺四角形細石刃石核スポールを剥離するものが認められる。また合計19基の遺構が重複しあって検出されている。石器石材は、大部分が珪質頁岩である。

大刈野遺跡　細石刃石核、細石刃、サイドスクレイパー、彫刻刀形石器が出土している。石材は、珪質頁岩、頁岩を主体とするが、チャート、安山岩も認められる。

上ノ台Ｉ遺跡　細石刃石核、細石刃、彫刻刀形石器、エンドスクレイパー、サイドスクレイパーが表採されている。細石刃石核は削片系によるもので石材には珪質頁岩を用いている。

Ｇ　信濃川中流域

千石原遺跡　細石刃が発掘及び表採によって得られている。石材は黒曜石を主体としている。

天上原遺跡　珪質頁岩の荒屋型彫刻刀形石器が１点採集されている。(沢田　敦)

Ｈ　信濃川上流域

干溝遺跡　細石核が単独で出土している（佐藤1992）。珪質頁岩製のホロカ型細石核であり、半割円礫が素材となっている。

屋敷田遺跡　細石刃３点と荒屋型彫器１点が採集されている。玉髄製の細石刃１点を除き、他は珪質頁岩製である。荒屋型彫器にはフラットグレイバー剥離が観察される。

釜堀川東遺跡　珪質頁岩製の荒屋型彫器が１点採集されている（第12図１）。調整剥片を素材としており、フラットグレイバー剥離が観察される。

Ｉ　千曲川下流域

千苅遺跡　大量の尖頭器・掻器と共に、削片系細石核と矢出川型細石核が採集されている（中島1982）（第12図２・３）。２に関しては、ホロカ型細石核とされているが（森嶋1985）、ほかに分厚い尖頭器状の両面加工品が採集されていることから（中島前掲）、実測図から判断して、両面調整素材のブランク・残核の欠損品を利用した削片系細石核であろう。

Ｊ　野尻湖周辺

樅ヶ崎遺跡　珪質頁岩製ホロカ型細石核が採集されている（森嶋前掲）（第13図１）。分割礫を素材とし、片側面のみ加撃面からの側面調整が見られる。

杉久保Ｃ遺跡　荒屋型彫器と先刃掻器が採集されている（森嶋1976）（第13図２～５）。石材は全て、輝緑凝灰岩である。

仲町遺跡　水道工事立合調査の際、珪質頁岩製の矢出川型細石核が出土している（中村ほか1978）（第13図６）。分厚い縦長剥片を素材とし、その

分割面を加撃面に当てている。その背面側にのみ、90°前後の下縁調整が施されている。側面形がU字形を呈し、荒川台遺跡例に類似する。

町裏C遺跡　　珪質頁岩製の矢出川型細石核が採集されている（吉松・小林1975）（第13図７）。分割剥片を素材とし、片側面のみ下縁調整が見られる。加撃面には側面方向からの打面調整が施されている。仲町遺跡例と同様に、石核素材・下縁調整の点で荒川台遺跡例に類似する。

向新田遺跡　　矢出川型細石核と共に、尖頭器・彫器・礫器・大量の削器などが出している（野尻湖人類考古グループ1987）（第14図１～８）。石材は無斑晶質安山岩・流紋岩が主体を占めるが、細石核には黒曜石・珪質頁岩が多用されている。

上ノ原遺跡　　矢出川型細石核と共に、スクレイパー、彫器、局部磨製石斧、敲石磨石などが出土している（中村1992）。石材は、細石核には黒曜石その他の器種には無斑晶質安山岩、凝灰岩などが利用されている。スクレイパーは、ラウンド・サイド・尖頭状と多様である。また、石囲い炉が検出されている。

K　小矢部川流域

日の宮遺跡　　削片系細石核が単独出土している（山本1992）（第15図９）。頁岩製であり、ファースト・スポールを利用している。加撃面からの側面調整も見られる。　（菅沼　亘）

4　細石刃文化の様相

中部北半・北陸地方の細石刃石器群は、三面川・荒川・阿賀野川・信濃川の中・上流域もしくは、それらの支流域に分布している。これらの石器群の使用石材は、そのほとんどが珪質頁岩であり、特に削片系細石核をもつ石器群が特徴的である。当該地域における珪質頁岩の原産地については、未だ解明されていないが、これらの河川流域が原産地である可能性が強く、上述の河川は珪質頁岩の供給ルートとして機能し、削片系細石核をもつ石器群と有機的に結びついていたものと考えられる。湧別技法・荒屋型彫器に特徴づけられる北方系細石刃石器群は、東北地方日本海側→三面川・荒川・阿賀野川→信濃川と南下しそして、北陸地方日本海側→西日本、信濃川→千曲川→中部地方、信濃川→魚野川→関東

地方へと拡散して行ったのだろう。

当該地域における細石刃石器群は、保有する細石刃製作技術・使用石材により、以下のように類型化される。

Ⅰ群：矢出川技法をもつ。使用石材によって細分される。

ａ群：石材が黒曜石主体。（田井Ａ・上ノ原）

ｂ群：石材が珪質頁岩主体。（荒川台・中原野Ｂ・田家池ノ平・御淵上・向新田・仲町・町裏Ｃ）

Ⅱ群：湧別技法をもつ。細石核によって細分される。

ａ群：札滑型をもち、石材は珪質頁岩主体。（上ノ山Ｃ・中道・大平・中土・荒屋・月岡・上ノ台Ⅰ・大刈野・千苅・小野平・日の宮Ａ）

ｂ群：白滝型をもち、石材は黒曜石主体。

Ⅲ群：ホロカ技法をもつ。石材は珪質頁岩主体。（干溝・縦ヶ崎）

当該地域における細石刃石器群の編年は、周辺地域の編年との対比に頼らざるをえないのが現状である。北海道での編年（千葉1985）、長野県柳又遺跡Ｃ地点での層位的出土（谷口1991）、相模野台地での編年（堤1987）に従えば、大略「Ⅰａ→Ⅰｂ→Ⅱａ→Ⅱｂ→Ⅲ群」という変遷になる。しかし、Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅲ群に関しては、三者が時間的に併行していた可能性もある。

また、荒川台・仲町・町裏Ｃ遺跡の細石核に特徴的に見られる下縁調整が後出的要素であるならば、Ⅰｂ群の中で「向新田→荒川台・仲町・町裏Ｃ」という時間的前後関係が指摘できる。さらに、中土遺跡に荒屋型彫器がみられないことから、Ⅱａ群の中でも「荒屋・月岡・大刈野→中土」という前後関係が指摘できよう。　（菅沼　亘）

5　細石刃文化研究の課題

当該地域の研究は1950～60年代の荒屋・中土・月岡遺跡の調査、1970年代の荒屋・中土・月岡と周辺地域の対比及びそれらの日本列島内での時間的・空間的位置付け、そして1980年代以降の調査研究に大きく分けられる。更に現在でも、それぞれ個々に関しての研究はもちろん、両者を含めての研究が行われ、当該期の研究も新たなる展開を見せ始めている。反面、列島各地においても調査増加に伴って多くの研究成果が出されている今日、当該地域の問題点・課題点が浮き彫りになってきているとも言える。このような背景を考え、以下問題点を幾つかに絞って、今後の研究課題として提示したい。

1986年から実施されている荒川台遺跡の調査・研究から「荒川台技法」が提唱された（阿部前掲）。それは、下縁部及び側縁調整を施すことによって細石刃石核原形をU字形に整形するもの、という。この「荒川台技法」は荒川台の他に、当該地の数遺跡に見られることは前述したとおりであるが、これは一部地域の細石刃剥離技術の１個性なのか、それとも安定した技法として他地域・他遺跡にも見られるのかという問題がある。またこれに関して、削片形・舟底形（ホロカ型）以外の細石刃石核を、これまで「矢出川型」「稜柱形」と一枠に囲んできたが、素材確保・大きさ・調整・石材などの点から、所謂、稜柱形細石刃石核をもう一度見直してみる必要があるであろう。本州における荒川台技法提唱をきっかけに、稜柱形細石刃石核を再検討する必要がある。

次に細石刃石器群と石刃石器群、分割系舟底形細石刃石核（ホロカ型）と削片系細石刃石核の共伴関係の問題があげられる。ナイフ形石器・尖頭器との共存関係については、相模野台地を中心に盛んに討論されてきた（伊藤1988･198、鈴木1989）。しかし層位的上下関係把握が不可能な当地域では、それらの分離・統合の見極めが困難である。更にこれを発展させれば、当地域における細石刃編年研究の問題が浮かび上がってくる。本稿の編年試案は先に示したが、これについては研究者によってかなり見解の差があることは否めない。石材供給地もしくはそれに近く、東北と関東並びに北陸・西日本を結ぶという、細石刃文化を解明するに当たって重要な位置にある当地域においては、この編年作業は大きな課題である。このためには単に細石刃・細石刃石核製作技術だけにとどまらない、同石器群における他器種の素材確保（剥片剥離技術）との関連、使用石材の異同など、石器製作技術構造の本質まで見極める研究（山田1986、桜井1992）が今後必須となるであろう。

このように、新しい資料の増加・別視点からの研究等、細石刃文化研究が新しい局面を迎えている現在、過去に調査された遺跡・資料の再整理・再検討の必要性も感じられる。

以上、幾つかの問題点を羅列してきたが、これらは当地域に限ったことではなく、今後の細石刃文化研究を発展される上で、これらは重要な課題と考えられる。　（吉井雅勇）

（注）本稿は多数で分担執筆したために、用語は不統一である。それぞれの考え・意見等を反映させるために原稿をそのまま用いた。ご了承願いたい。

本稿を書くにあたり、以下の方々から文献の提供・実測の許可・実測図掲載許可・ご教示・ご協力をいただきました。末筆ではありますが、記して謝意を呈します。
小野　昭氏・小林高範氏・中村由克氏・広田永二氏・増子正三氏・佐藤雅一氏・川村三千

男氏・田海義正氏・富樫秀乃氏・小熊博史氏・広井　造氏・石川智紀氏・朝日村教育委員会・長岡市立科学博物館

6　主要文献

阿部朝衛　1992　「新潟県関川村荒川台遺跡第１次調査報告」『法政考古学』18

阿部朝衛・高橋春栄　1986　「新潟県関川村荒川台遺跡の細石刃核」『考古学雑誌』71-4

伊藤恒彦　1988　「相模野台地の２種類の尖頭器石器群」『大和のあけぼの』Ⅱ

伊藤恒彦　1989　「細石刃石器群の成立と尖頭器石器群の関連について－相模野台地の場合－」『長野県考古学会誌（中部高地の尖頭器文化）』59･60

小野　昭　1989　「大平遺跡の調査結果（予報）」『水原郷土誌料』21水原町教育委員会

小野　昭ほか　1991　「水原町大平遺跡の調査」『水原郷土誌料』22水原町教育委員会

織笠　昭　1979　「中部地方北部の細石器文化」『駿台史学』47

桜井美枝　1992　「細石刃石器群の技術構造－山形県角二山遺跡の分析－」『東北文化論のための先史学歴史学論集』

佐藤雅一　1981　「五十嵐川流域の先土器時代遺跡」『三条考古学研究会機関誌』２

佐藤雅一　1986　「六日町上ノ原地区採集の石器」『魚沼文化』26

佐藤雅一　1988　「第Ⅳ層検出の遺構と遺物」『大刈野遺跡』湯沢町教育委員会

佐藤雅一　1992　「干溝遺跡（中林Ｂ遺跡）」『新潟県埋蔵文化財調査だより』８

三条ジュニア考古学クラブ　1973　「三条周辺の無土器時代の石器」『三条ジュニア考古学クラブ機関誌』1

三条商業高校社会科クラブ考古班　1971　『五十嵐川流域における先史遺跡』

芹沢長介　1959　「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について（予報）」『第四紀研究』1-5

芹沢長介・須藤　隆・会田容弘・山田しょう　1990　『荒屋遺跡－第２・３次発掘調査概報－』東北大学文学部考古学研究室・川口町教育委員会

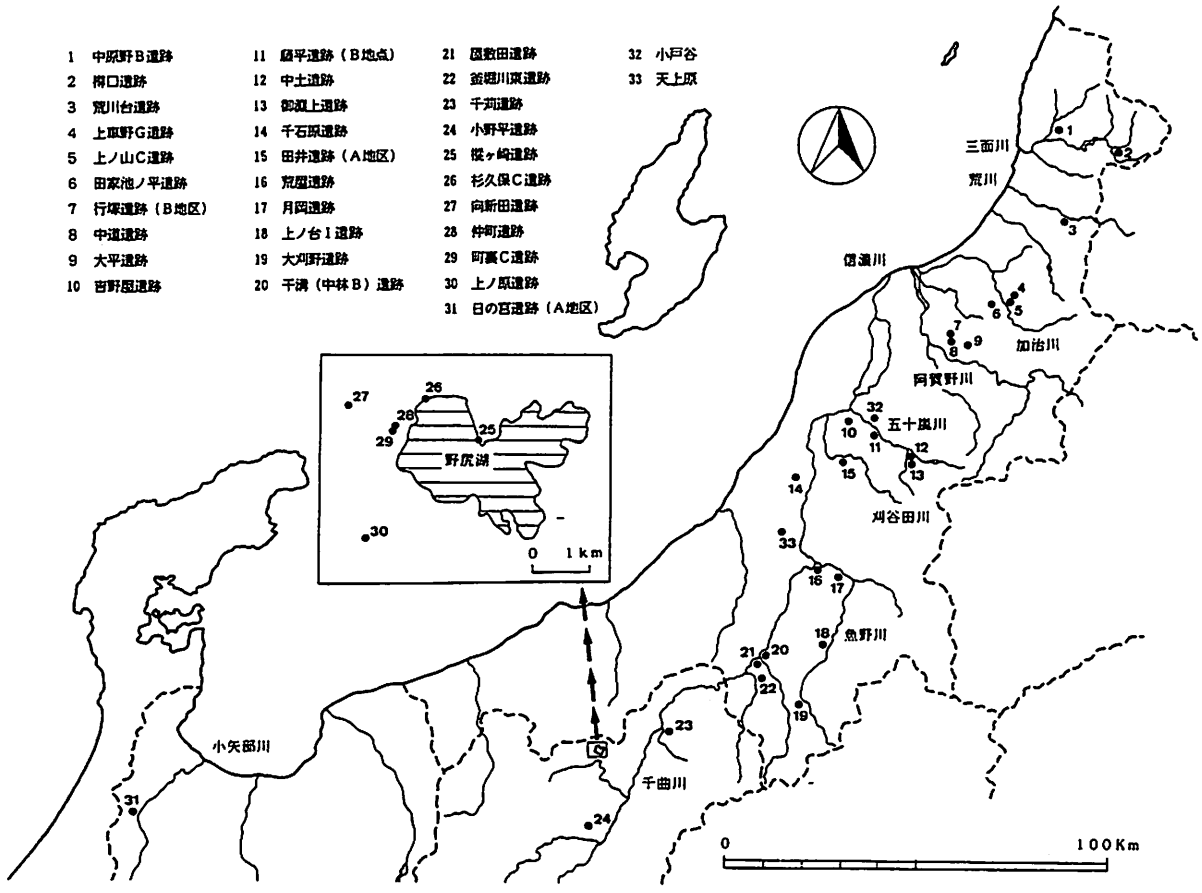
菅沼　亘　1991　「北蒲原郡安田町中道遺跡の細石核」『北越考古学』４

鈴木次郎　1989　「槍先形尖頭器石器群と細石刃石器群の時間的関係」『長野県考古学会誌（中部高地の尖頭器文化）』59･60

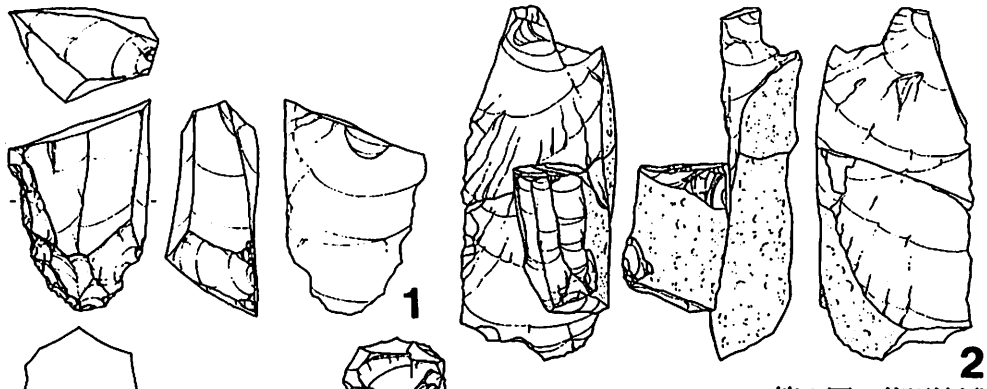
鈴木俊成・田海義正・山田　清　1990　『月岡遺跡・古長沢遺跡』堀之内町教育委員会

津南町役場　1984　『津南町史』資料編　上巻

高橋春栄　1990　「新発田市上ノ山C遺跡採集の舟底形細石刃核」『北越考古学』3
田中　靖ほか　1988　『耳取遺跡等範囲確認調査報告』見附市教育委員会
谷口康弘　1991　「木曽開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『國學院雑誌』92-2
千葉英一　1985　「日本の旧石器文化－第２回－北海道(2)」『考古学ジャーナル』248
立木宏明　1988　「2.資料紹介　(2)旧石器時代の遺跡」『ＦＩＥＬＤ　ＮＯＴＥ』５
堤　　隆　1987　「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』13
中島庄一　1982　「北信地域における尖頭器を伴出した石器群について－千苅遺跡出土の石器群を中心に－」『信濃』34-4
中村孝三郎　1965　『中土遺跡』長岡市立科学博物館研究調査報告７
中村孝三郎　1971　『御淵上遺跡』長岡市立科学博物館研究調査報告10
中村孝三郎他　1972　「嵐北の考古」『嵐北－文化財総合調査報告－』新潟県教育委員会
中村孝三郎　1978　『越後の石器』学生社
中村孝三郎　1989　『千石原（第二次）発掘報告書』三島町教育委員会
中村孝三郎・小林達雄　1975　「月岡遺跡」『日本の旧石器文化』２　雄山閣
中村孝三郎・小林達雄・竹田祐司　1973　『千石原』長岡市立科学博物館研究調査報告11
中村由克ほか　1978　『野尻仲町水道工事立合調査報告』長野県上水内郡信濃町水道課
中村由克　1992　「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（Ｉ）」『考古学ジャーナル』342
中村由克　1992　「長野県上ノ原遺跡における細石器文化の遺構（II）」『考古学ジャーナル』344
野尻湖人類考古グループ　1987　『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ｉ』
森嶋　稔　1976　「第一章　旧石器時代」『長野県上水内郡誌』歴史編
森嶋　稔　1985　「中部高地の楔形細石刃核」『信濃』37-11
八木次男・佐藤雅一　1988　「旧石器時代から縄文時代草創期の遺物－魚野川流域を中心として－」『新潟県考古学談話会会報』1
山田晃弘　1986　「北海道後期旧石器時代における石器製作技術構造の変遷に関する予察『考古学雑誌』71-4
山本正敏　1992　「小矢部市日の宮遺跡Ａ地区出土舟底形細石核」『埋文とやま』40
吉松雄一・小林　孚　1975　「野尻湖畔町裏遺跡の石器について」『長野県考古学会誌』22

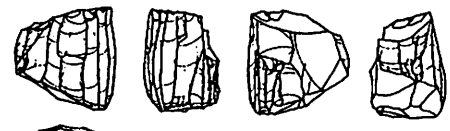


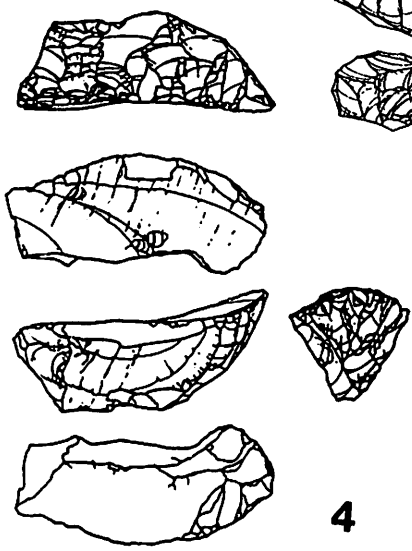
第1図　中部北半・北陸地方の細石器出土遺跡

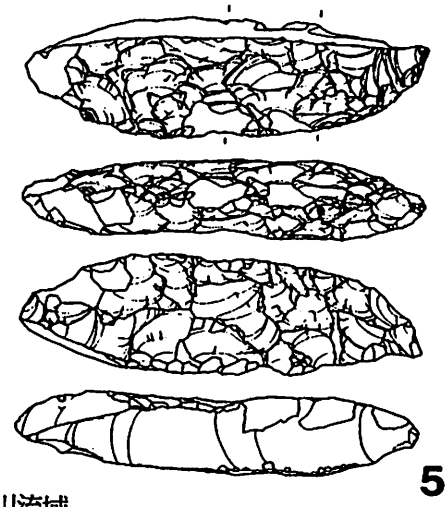


第1図　荒川流域

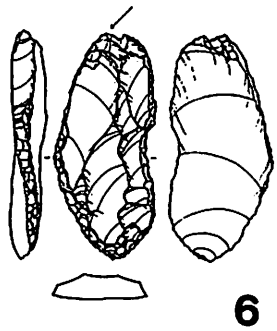
荒川台遺跡（3）

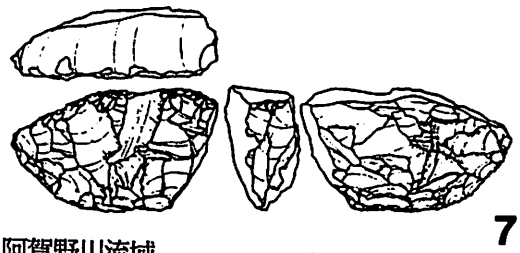






上車野G遺跡（4）　第2図　加治川流域　上ノ山C遺跡（5）

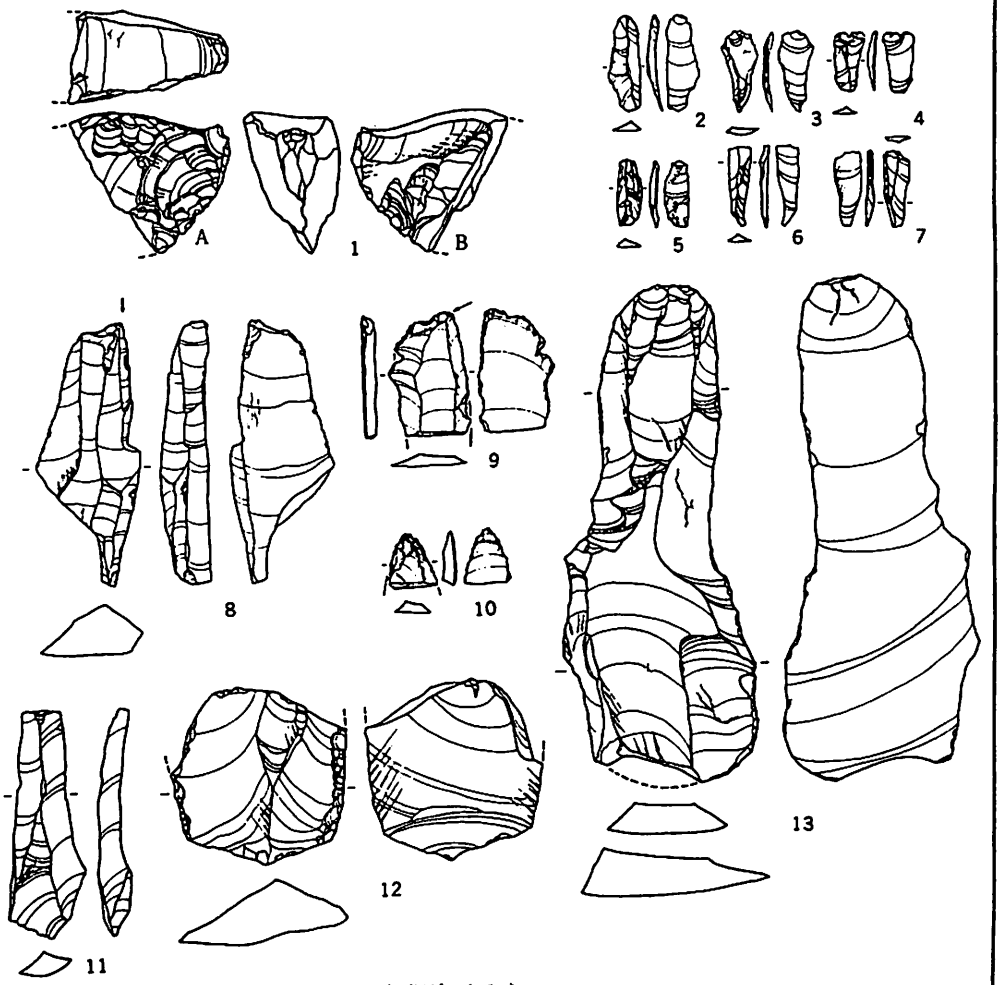




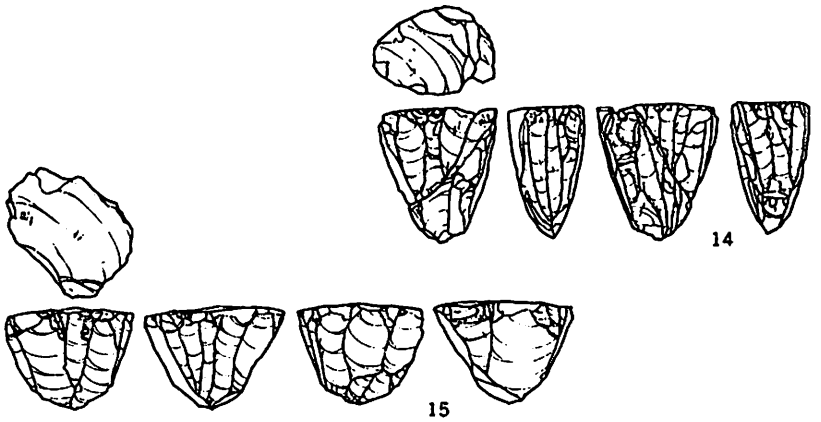
第3図　阿賀野川流域

行塚遺跡B地区（7）　中道遺跡（8）

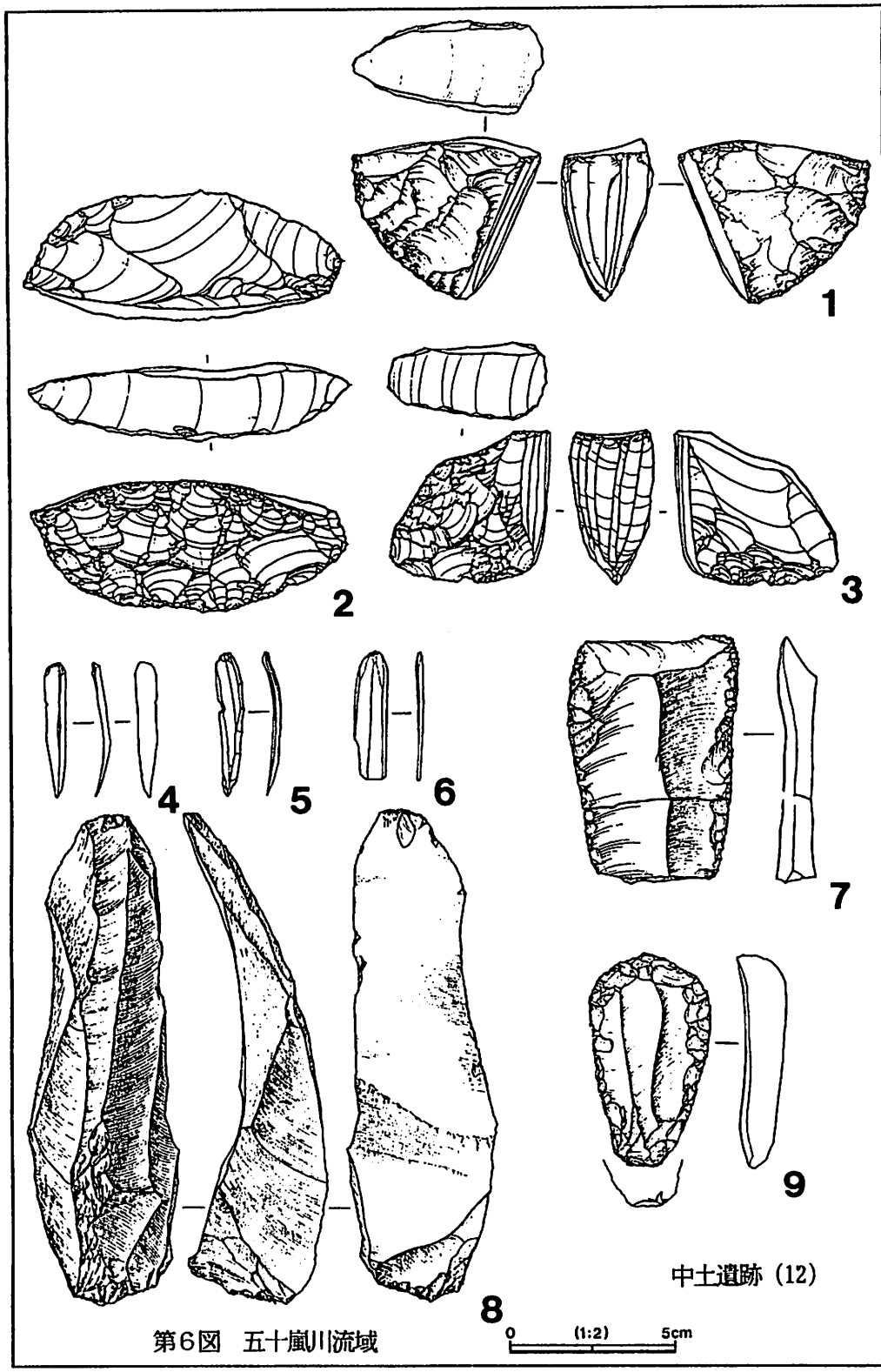
0　(1:2)　6cm



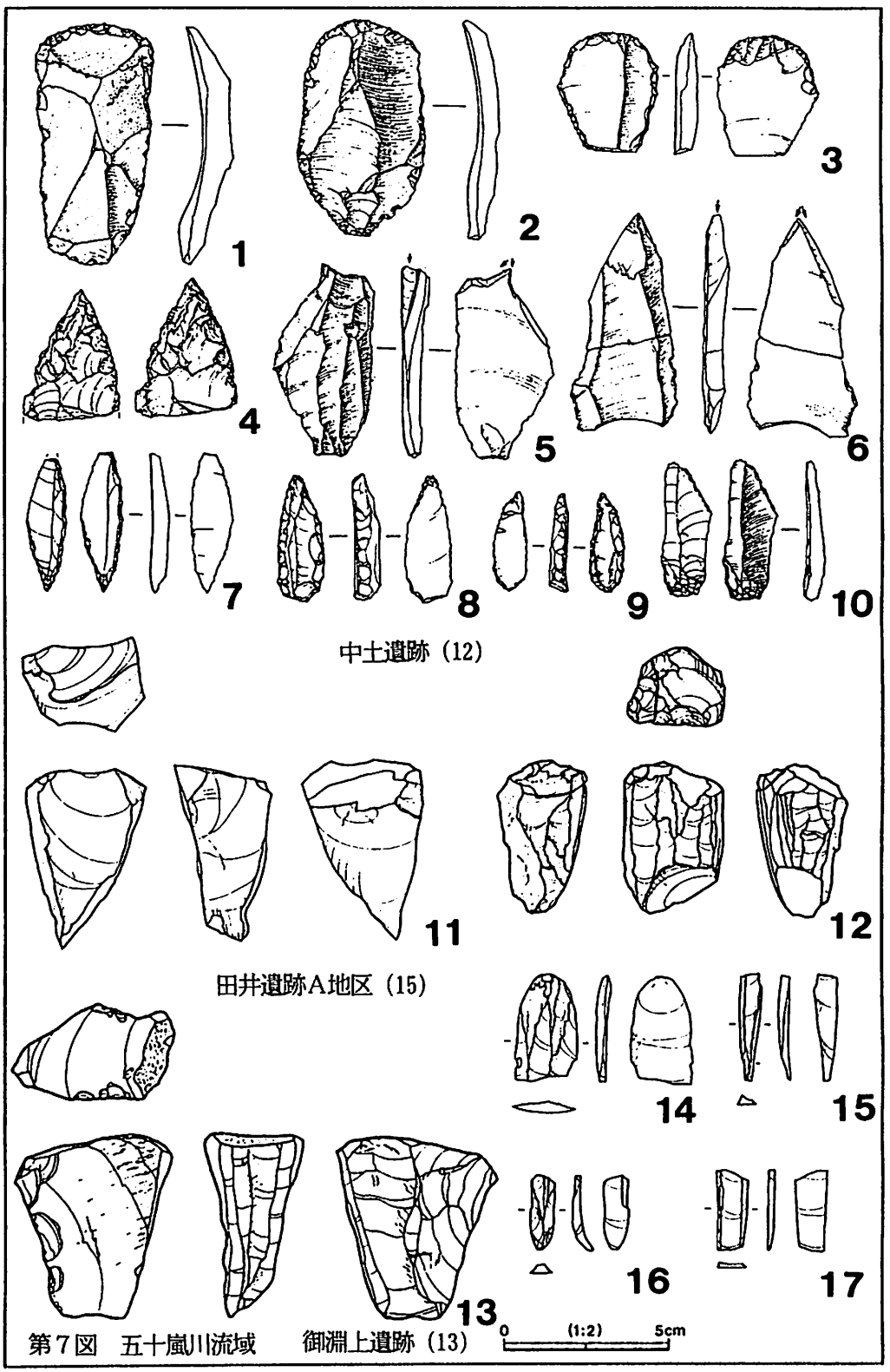
第4図　阿賀野川流域　大平遺跡（9）



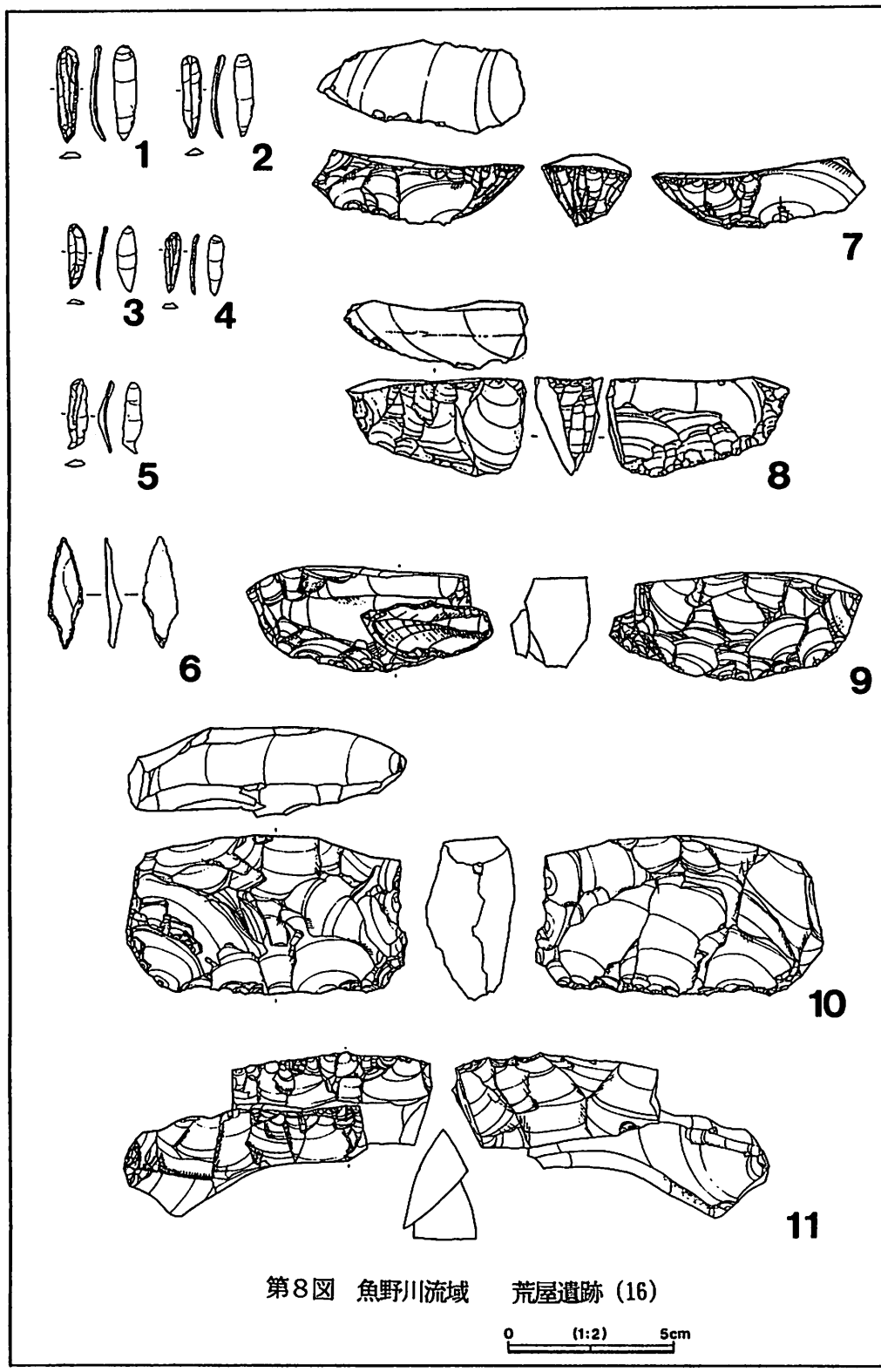
第5図　三面川流域　中原野北遺跡（1）　0　(1:2)　5cm



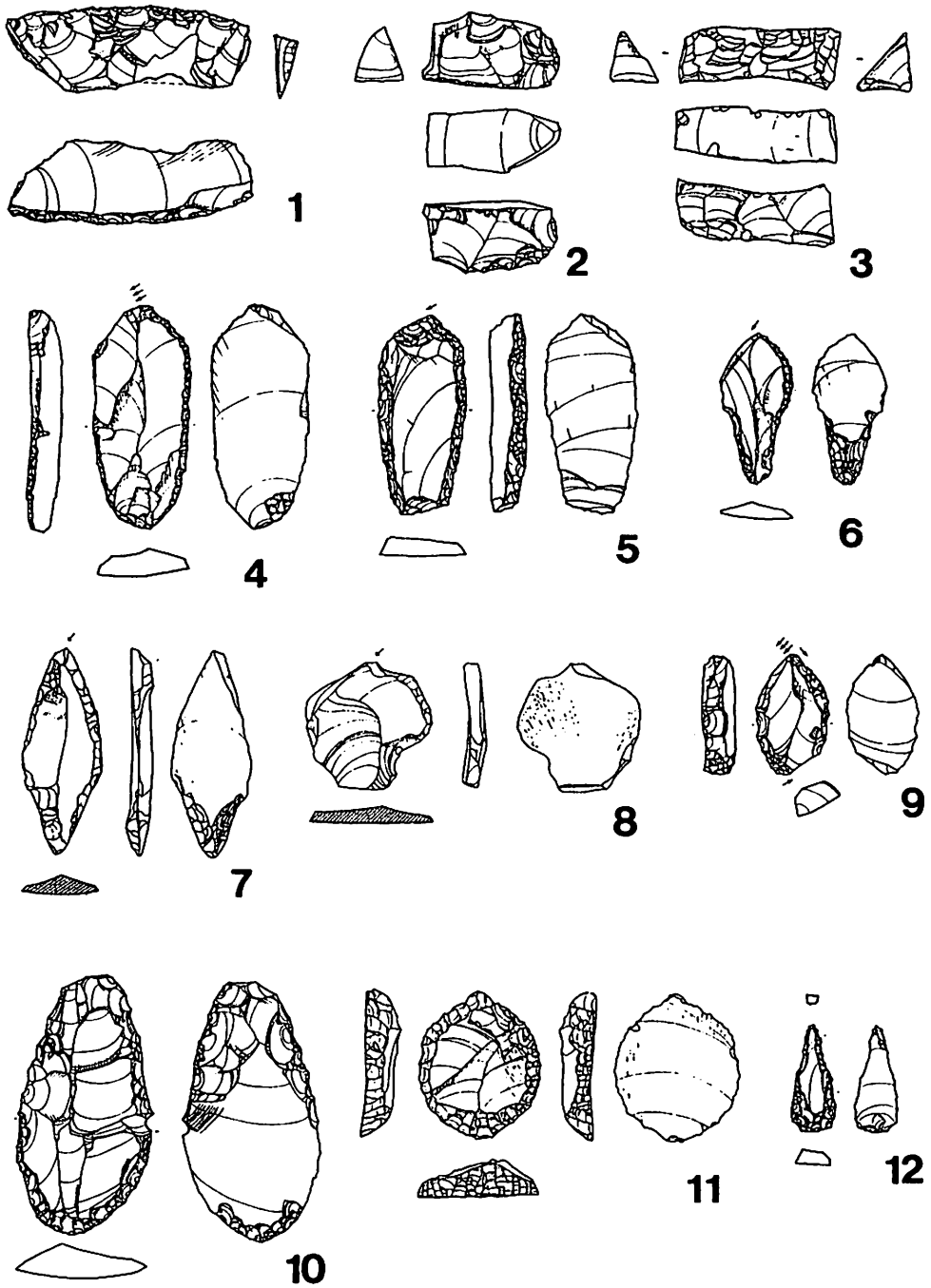
第6図　五十嵐川流域



第7図　五十嵐川流域　御淵上遺跡（13）

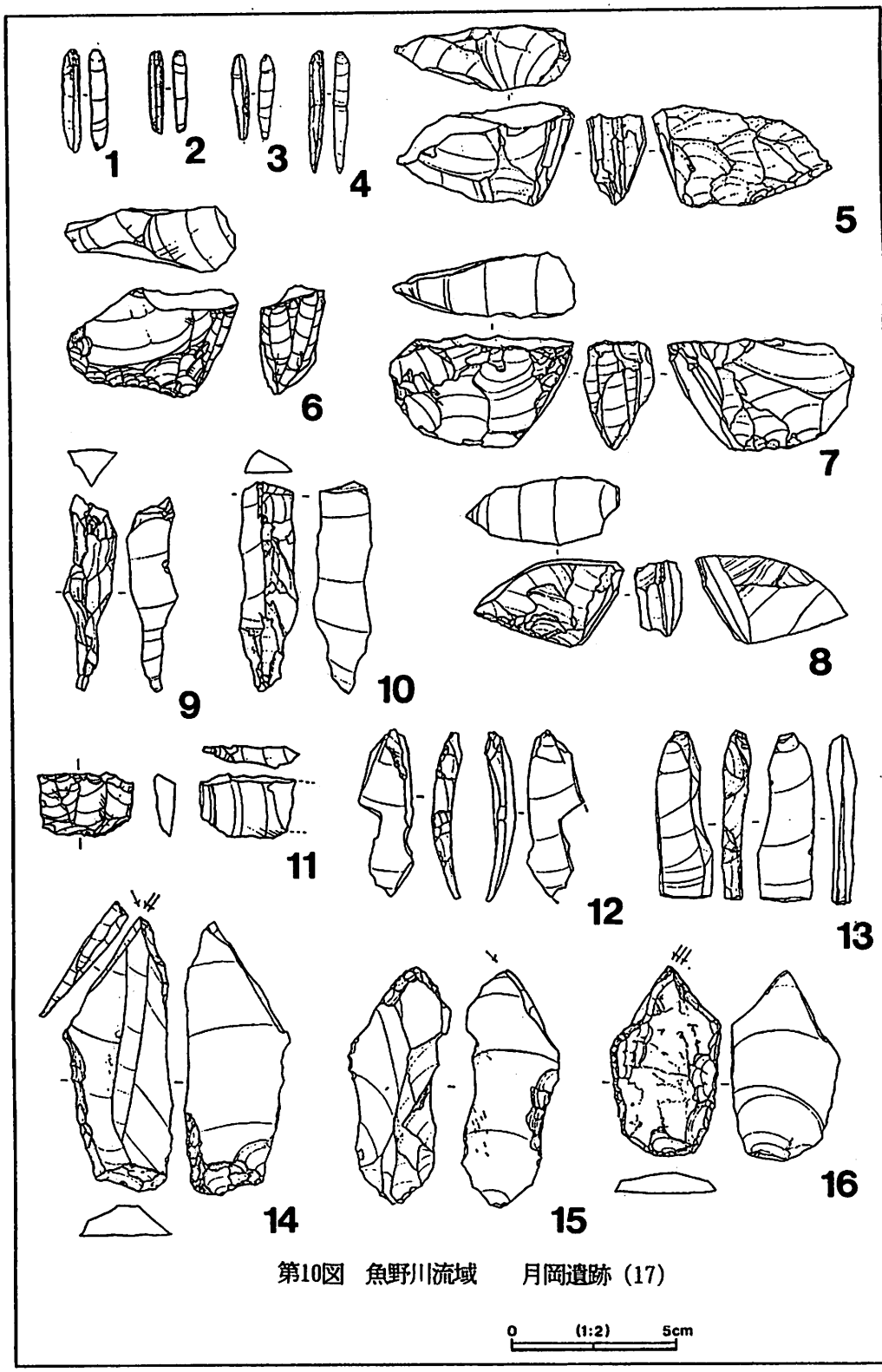


第8図　魚野川流域　　荒屋遺跡（16）

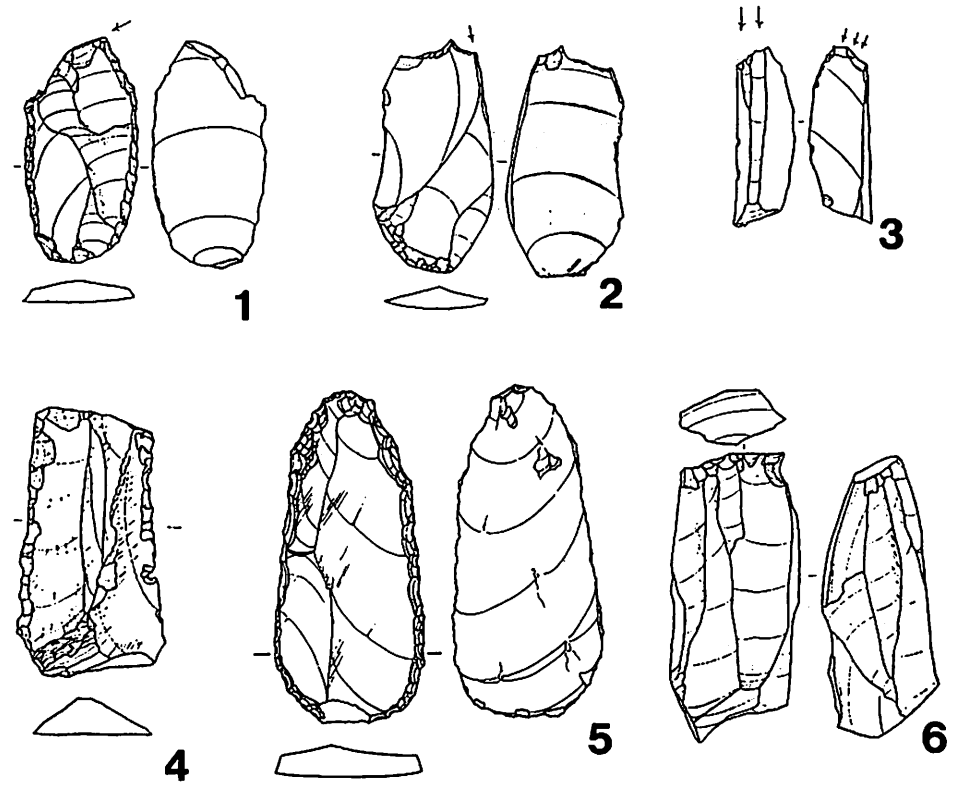


第9図　魚野川流域　　荒屋遺跡（16）

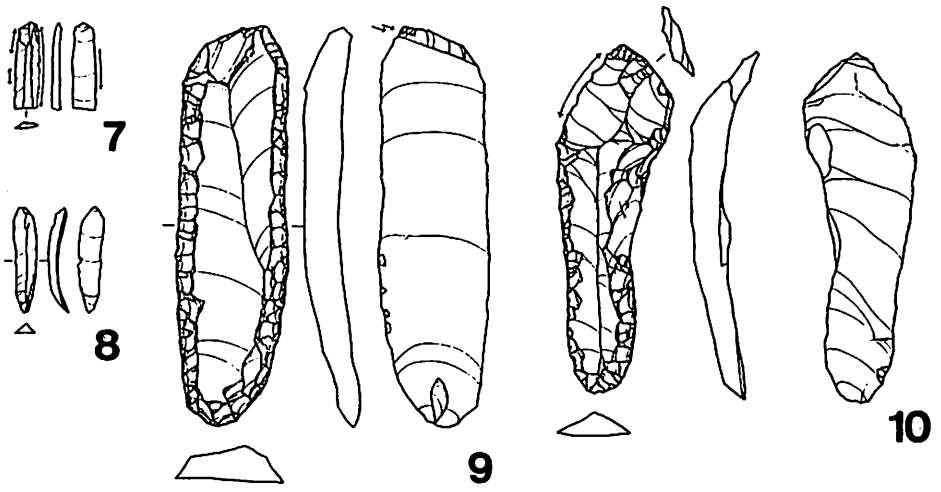
0　(1:2)　5cm



第10図　魚野川流域　　月岡遺跡（17）

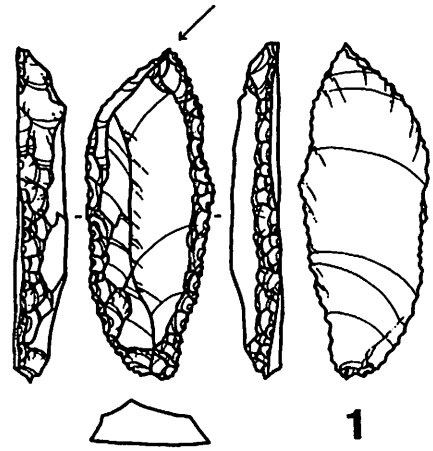


月岡遺跡（17）

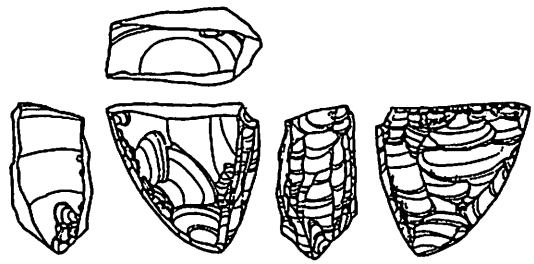


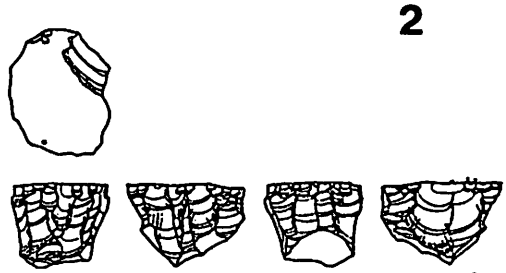
第11図　魚野川流域　　大刈野遺跡（19）

0　(1:2)　5cm

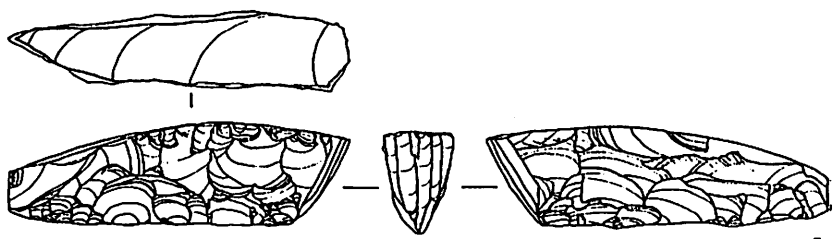


釜堀川東遺跡（22）





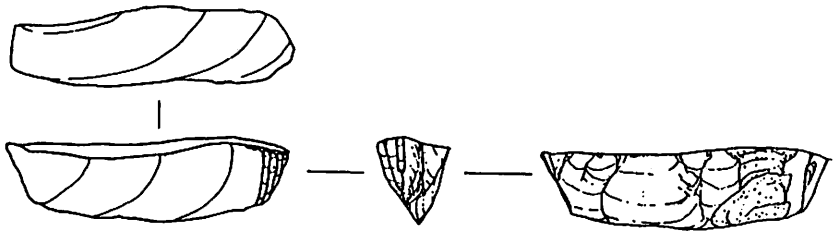
千苅遺跡（23）



小野平遺跡（24）

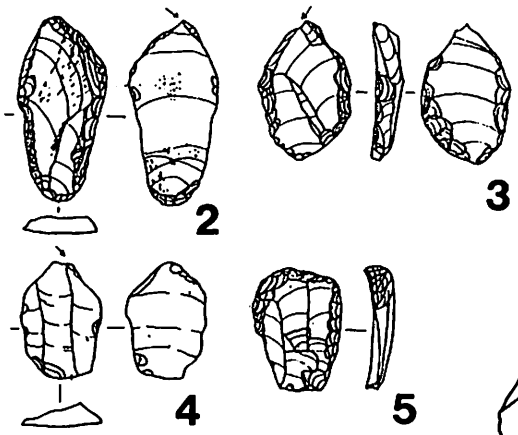
第12図　信濃川上流域・千曲川下流域

0　(1:2)　5cm　　1のみ実大



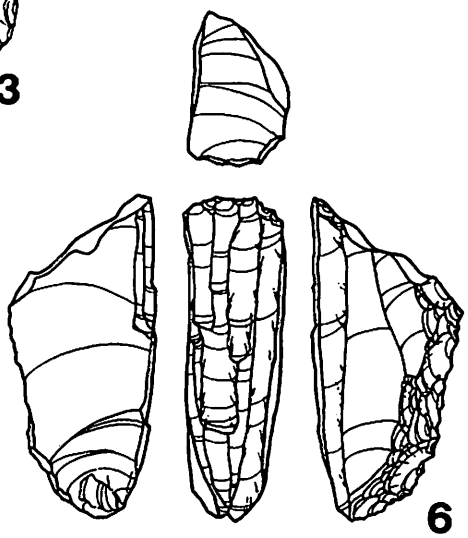
1

樅ヶ崎遺跡（25）



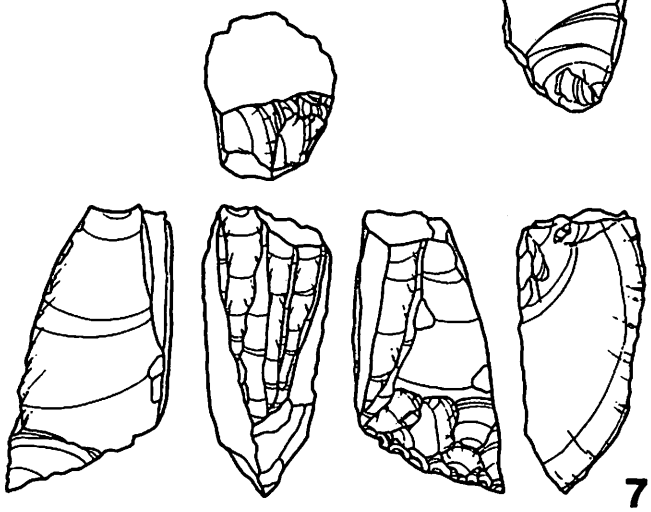
2 3 4 5

杉久保Ｃ遺跡（26）



6

仲町遺跡（28）

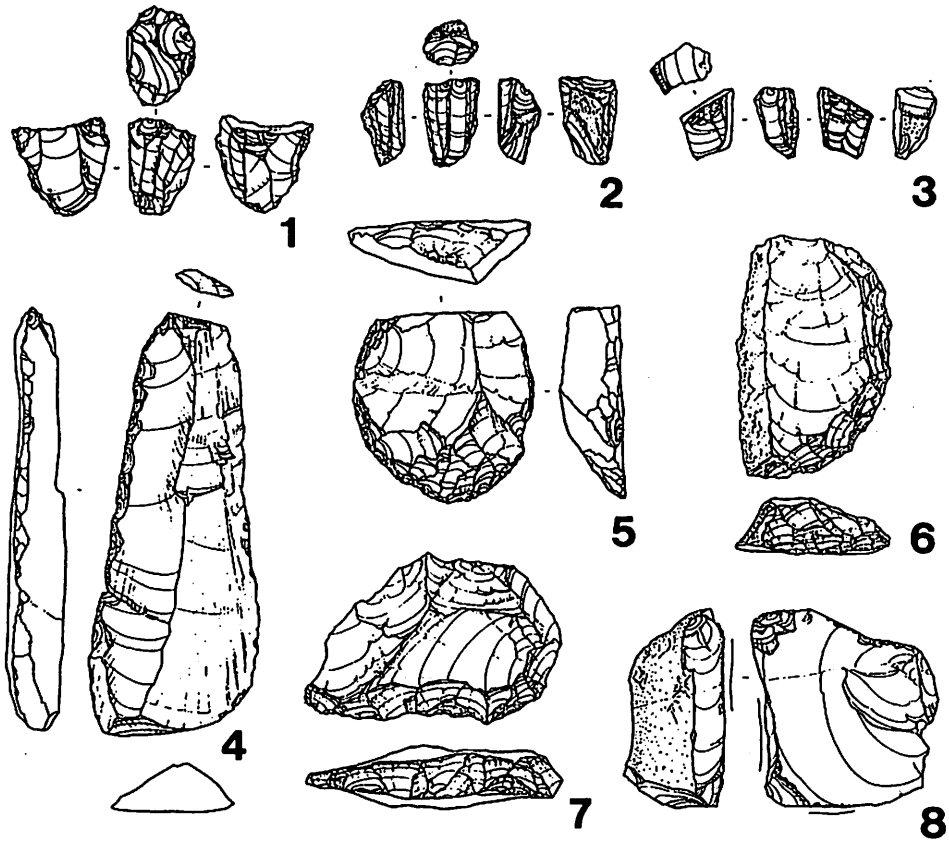


7

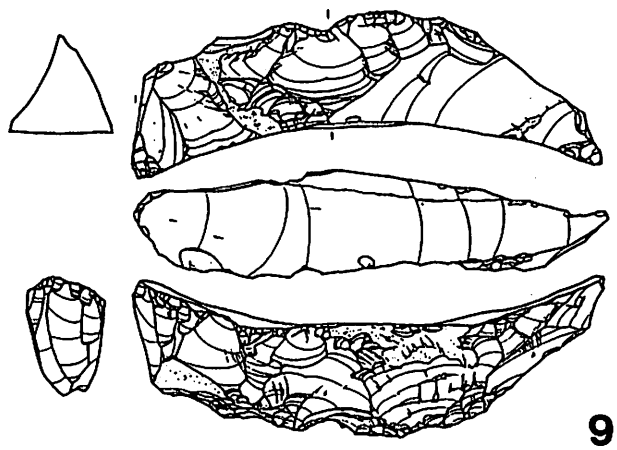
町裏Ｃ遺跡（29）

第13図　野尻湖周辺

0 (1:2) 5cm　６・７のみ実大



第14図　野尻湖周辺　　向新田遺跡（27）



第15図　小矢部川流域　日の宮遺跡（31）

0　(1:2)　5cm

第 1 表　中部北半・北陸　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土	発掘	所在	所属	備考
1	中原野北	○	○														新潟県岩船郡朝日村	三面川流域	
2	樽口	○	○													有	新潟県岩船郡朝日村	三面川流域	1993.9現在調査中
3	荒川台	○	○	○	○				○		○	○	○			有	新潟県岩船郡関川村	荒川流域	阿部・高橋1986ほか
4	上原野G		1														新潟県新発田市	加治川流域	
5	上ノ山C		1	○		○						○	○				新潟県新発田市	加治川流域	高橋1990
6	田家池ノ平		2														新潟県新発田市	加治川流域	
7	中道		1													有	新潟県北蒲原郡安田町	阿賀野川流域	曽沼1991
8	行塚B地区	2				1										有	新潟県北蒲原郡安田町	阿賀野川流域	
9	大平	9	1	5	1	2			1							有	新潟県北蒲原郡水原町	阿賀野川流域	小野1989、小野ほか1991
10	吉野屋		1														新潟県南蒲原郡栄町	五十嵐川流域	三条ジュニア考古学クラブ'73
11	廻平	○				○										有	新潟県南蒲原郡下田村	五十嵐川流域	中村ほか1972ほか
12	中土	22	3	4	12	12			7					(2)	1	有	新潟県南蒲原郡下田村	五十嵐川流域	中村1965
13	御淵上	1															新潟県南蒲原郡下田村	五十嵐川流域	立木1988
14	小戸谷					1											新潟県南蒲原郡下田村	五十嵐川流域	
15	田井A地区	10	2													有	新潟県見附市	刈谷田川流域	田中ほか1988
16	月岡	93	5	4	3	18										有	新潟県北魚沼郡堀之内町	魚野川流域	中村・小林1975ほか
17	荒屋	1163	56	○	○	574	4						○			有	新潟県北魚沼郡川口町	魚野川流域	芹沢1959、芹沢ほか1990
18	大刈野	2	1	1	2	1										有	新潟県南魚沼郡塩沢町	魚野川流域	佐藤1988
19	上ノ台I	(4)	2	○	1	1											新潟県南魚沼郡六日町	魚野川流域	佐藤1986、1988
20	千石原	15														有	新潟県三島郡三島町	信濃川中流域	中村ほか1973、中村1989
21	天上原					1											新潟県小千谷市	信濃川中流域	
22	千溝		1													有	新潟県中魚沼郡中里村	信濃川上流域	佐藤1992
23	屋敷田	3				1											新潟県中魚沼郡津南町	信濃川上流域	津南町役場1984
24	笹畑川東					1											新潟県中魚沼郡津南町	信濃川上流域	
25	千刈		2		10	2							37				長野県飯山市	千曲川下流域	中島1982
26	小野平		1														長野県長野市	千曲川下流域	森嶋1985
27	櫻ケ崎		1														長野県上水内郡信濃町	野尻湖周辺	森嶋1985
28	杉久保C				1	3											長野県上水内郡信濃町	野尻湖周辺	森嶋1976
29	向新田	29	8	45	○	1			2				1			有	長野県上水内郡信濃町	野尻湖周辺	野尻湖人類考古グループ87
30	仲町		1													有	長野県上水内郡信濃町	野尻湖周辺	中村ほか1978
31	町裏C		1														長野県上水内郡信濃町	野尻湖周辺	吉松、小林1975
32	上ノ原	46	23	○	35	3		1		1	8					有	長野県上水内郡信濃町	野尻湖周辺	中村1992
33	日の宮A地区	1														有	富山県小矢部市	小矢部川流域	山本1992

東北地方南部の細石刃文化

石井浩幸

1　研究の経過

１９５８年　山形県越中山遺跡Ａ地点の発掘調査時に同Ｄ地点から細石刃核が採集される。

１９６０～　山形県を中心に細石刃石器群の片鱗が出没し始める。

（山形県最上町月楯　新庄市山屋　朝日町小松野　秋田県東成瀬村大柳沼等）

１９６４年　山形県史考古資料篇に採集された細石刃石器群が紹介される。

１９７０年　山形県大石田町角二山遺跡の発掘調査。

１９７０年　山形県朝日村越中山遺跡Ｓ地点の１次調査

１９７１年　　同　　越中山遺跡Ｓ地点の２次調査

１９７３年　山形県小国町湯ノ花遺跡の１次調査。

１９７８　福島県会津若松市小石ガ浜遺跡出土資料の紹介

福島県東村谷地前Ｃ遺跡が福島県文化センター遺跡調査課によって調査され

１９７９　湯ノ花遺跡の２次調査が実施される。

１９８０　月山沢遺跡で槍先形尖頭器と細石刃が出土した。

１９８１　東北歴史資料館で「旧石器時代の東北」展がひらかれる。

１９８２　山形県総合学術調査報告『最上川』で県内の細石刃石器群が集成される。

１９８３　越中山遺跡Ｓ’地点１次調査

福島県石川町薬師堂遺跡が福島県文化センター遺跡調査課によって調査。

１９８５　湯ノ花遺跡の３次調査が実施される。

１９８６　山形県寒河江市高瀬山Ｌ遺跡の調査で、槍先形尖頭器と舟底形石器が出土。

１９９１　加藤　稔氏による『東北日本の細石器文化の展開』で編年案の提示

１９９２　金谷原遺跡群総合調査開始　細石刃核など採集される。

福島県学壇遺跡群の発掘調査で湧別技法による細石刃核が出土する。

１９９３　金谷原遺跡の３次調査が実施される。

２　遺跡の分布

大小の河川に沿って分布する傾向があるため、河川流域ごとに分布の概要を述べる。

宮城県

東北南部の太平洋側に位置する宮城県では、細石刃文化遺跡の発見は少ない。発掘品や採集品に細石刃の類例はあるものの、確かな細石刃核は確認されていない。阿武隈川下流域や北上川下流域に今後、発見される可能性がある。

山形県

A　寒河江川流域

朝日連峰　月山に源を発する寒河江川の周辺には、大小の段丘が発達しており、旧石器時代から縄文時代にかけて、遺跡はこれら段丘上に立地している。標高６００ｍの弓張平地区から最上川合流部にかけて８ケ所の遺跡が分布している。石材となる頁岩は寒河江川河床から容易に採集できる。

B　最上川流域

山形県を南北に貫流する最上川の流域には、数多くの旧石器時代の遺跡が分布する。中でも中流部にあたる村山盆地では、洪積世段丘面の縁辺に細石刃文化の遺跡が分布している。角二山遺跡は現在の最上川との比高３０ｍ程しかない。角二山遺跡は、大量の剥片や細石刃の出土数から見て大規模な石器製作の場と考えられる。最上川流域では、火山灰などの堆積が顕著でないために、包含層が浅いところが多い。そのため、畑などの開墾によって石器などが採集されることがあり、１０数箇所で細石刃石器群が採集されている。

C荒川流域

荒川は、山形県小国盆地を西流し、日本海にそそぐ。小国盆地は、旧石器時代の遺跡が密集している地域で、学史で有名な横道遺跡や東山遺跡、平林遺跡などが分布する。この地域で、細石刃文化の遺跡は、盆地に望む丘陵の突端や段丘上に位置する。小国盆地では湯の花遺跡において黒曜石製の細石刃核が得られている。荻生川上流で黒曜石が採集でき

D赤川流域

出羽山地、寒河江川の反対側を日本海に向かって西流するのが赤川である。赤川流域には、学史上著名な越中山遺跡群がある。十数箇所の地点分布をもつ越中山遺跡は、大鳥川と　字川の合流点に位置している。対岸の上野山段丘からも細石刃核が採集されている。庄内平野に入り、鶴岡市新山の杉ケ 沢遺跡は平野に臨むなだらかな丘陵上に位置する。

E鳥海山山麓周辺

山麓に遺跡が分布する。月光川流域に宮山坂F遺跡がある。

福島県

A　阿武隈川流域

阿武隈川は、福島県の中通り地方を北上して、宮城県南部の太平洋に流れる。郡山付近では、中小の河川が流れ込み、河岸段丘を形成している。この地域には、那須・赤城といった火山の火山灰のほか広域火山灰も堆積している。この地域には、約２０ヶ所の旧石器時代遺跡が分布している。谷地前C遺跡や薬師堂遺跡などは、いずれも河川をのぞむ段丘上に立地している。

B　阿賀野川・猪苗代湖周辺

会津盆地を通り、新潟県に入り日本海に流れ込む阿賀野川やその支流の段丘上に旧石器時代の遺跡が分布する。小石ヶ浜遺跡は猪苗代湖に近い湿原のそばに位置する。付近にはナイフ形石器を出土した笹山原遺跡群がある。

３　細石刃石器群

宮城県

A　鳴瀬川流域

鹿原D遺跡　有舌尖頭器石器群より下層から細石刃核と思われるものと打面再生剥片が出土している。細石刃の出土はなく、確証はない。

大穴遺跡　細石刃核の出土が紹介されているが、詳細は不明。

B　阿武隈川流域

小泉東山遺跡　細石刃の出土が報じられている。ナイフ形石器も出土している。

山形県

A　寒河江川流域

月山沢遺跡　湧別技法による細石刃核・スキー状スポール　細石刃とともに大小の槍先形尖頭器がある。掻器などがみられるものの荒屋型彫刻刀は見られない。石材は、大半が頁岩で一部玉髄がある。

B　最上川流域

金谷原遺跡　削片系の細石刃核とホロカ技法による細石刃核の２タイプが見られる。

荒屋型彫刻刀をふくむ。石材は、すべて頁岩である。これまで「金谷原型ナイフ形石器」の遺跡として有名であるが、細石刃関連資料が採集されていることから、関連性が注目されている。

角ニ山遺跡　細石刃約１４００点　細石刃核１５点　スポール類約４０点　彫刻刀４３点が発掘された。細石刃核は湧別技法によって製作されている。接合資料から、製作過程が明らかにされている。石材は、大半が頁岩であるが、少量、黒曜石が含まれる。

高瀬山Ｌ遺跡　ホロカ技法による舟底形石器と尖頭器・片刃石斧・掻器などで構成。

宮山坂Ｆ遺跡　湧別技法による細石刃核と荒屋型彫刻刀、掻器などで構成される。石材は、頁岩。採集品であるため、不明なところがある。

C　荒川流域

湯ノ花遺跡　湧別技法による細石刃核と剥片素材の細石刃核の２タイプが存在する。湧別技法による細石刃核には、黒曜石製のものがあり擦痕が見られる。いわゆる「白滝型」細石刃核の存在が確かめられた。そのほかナイフ形石器や尖頭器、石刃素材のエンドスクレイパーなどを含む。

D　赤川流域

越中山遺跡群　Ｓ地点　ホロカ系の細石刃核６点・彫刻刀・エンドスクレイパー　削器　細石刃約８０点。接合資料から製作工程が復元されている。隣接したＳ’地点から細石刃と槍先形尖頭器が出土している。石材はすべて頁岩である。

Ｍ地点　細石刃核、削片スポール類・彫刻刀、掻器がある。

杉ヶ沢遺跡　ホロカ系の舟底形石器、大型の削片　ナイフ形石器　石刃類がある。石材は、頁岩。

福島県

A　阿武隈川流域

薬師堂遺跡　ホロカ型の細石刃核　細石刃　掻器　礫器より構成される。石材は頁岩である。細石刃核について、報文では「円すい形」型としているが調整剥片や側片の調整痕を見る限りでは「ホロカ」型と考えられる。

学壇遺跡群　たくさんの石器群が出土している。ナイフ形石器、槍先形尖頭器、とともに湧別技法によると思われる細石刃核が出土している。スキー状スポールを細石刃核に利用している資料がある。荒屋型彫刻刀がある。

谷地前Ｃ遺跡　１２６点の石器類が出土した。ナイフ形石器、掻器　彫刻刀等がある。この中に１点、報文では「彫刻刀」他の研究者の間では「石核」、「峠下類似の細石刃核」と解釈が分かれている石器がある。同様な石器は、背戸Ｂ遺跡や湯の花遺跡にも見られる。

B　阿賀野川流域・猪苗代湖周辺

小石ヶ浜遺跡　舟底形石器　荒屋型彫刻刀　削器がある。舟底形石器は、「ホロカ」タイプであり、甲板上に先端に剥離痕（使用？調整？）が見られる。

4　細石刃文化の様相

（1）細石刃核型式と編年研究の現状

東北地方の細石刃文化の研究は、北海道で見られる細石刃核諸型式の東北での追求に重点がおかれてきた。つまり調査研究の進んだ北海道の資料との比較分析が主流であった。加藤・上野（１９７３）は、北海道と細石刃核の形態的技術的な比較を進める中で「湧別技法複合文化」と評価し、東北地域における細石刃核の型式分類を進めた。矢島国雄（１９７９）は東北の地域性を考慮し細石刃核をＡ型～Ｇ型の７型式に分類した。この視点（型式分類）は、以後各研究者の中心テーマとなっていくが、新資料が集積するにしたがって他地域との様相の違いが指摘されるようになった。加藤　稔（１９９０）は新たに新資料を加え、東北シベルの型式分類と編年案を提示した。「角二山型」「金谷原型」「谷地前Ｃ型」など細部では異論はあるものの、細石刃文化の編年研究の体系的なテキストととして評価できよう。東北南半の細石刃文化は、大きく　角二山⇨越中山Ｓ　へと変化していくと考えている。細石刃文化の初期には、荒川台遺跡にみられる円錐形の細石刃核がナイフ形石器とともに組成の一部を構成していたと考えている。細石刃文化の中心に湧別技法をはじめとする削片系細石刃核が盛行すると考える。湧別技法を持つ月山沢遺跡や湯の花遺跡、学壇遺跡群等の編年的位置づけは、なお調査の進展をもって判断されよう。

東北南部地域は、細石刃文化関連資料の発見数は多いものの、正式に発掘調査を実施した遺跡は少なく、8ヶ所に過ぎない。単発的に発見された資料を操作するには、なお思い込みや解釈の相違が大きいと言えよう。層位的に調査することの困難な地域での、型式分類には、より慨然性を高める説明が求められる。

（2）細石刃文化の出現

東北南部では、明確なかたちで出現過程をとらえていない。ただ、北方からの細石刃文化の流入あるいは南下と解釈するのが一般的である。加藤　稔（１９９１）は、「類峠下型」の本州への上陸を契機に細石刃文化が展開するとした。加藤によれば、谷地前Ｃ遺跡や米ヶ森遺跡、荒川台遺跡にみる石器群が細石刃文化の前半部に位置する。新潟県荒川台遺跡では杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀が組成する。

出現段階では、なお、前段階のナイフ形石器が形を変えながら共伴するようである。

（3）細石刃文化の終末

細石刃と土器が共伴した調査例はない。また、有舌尖頭器との共伴例もない。槍先型先

頭器との共伴例は幾つかあげられる。細石刃文化の後半には槍先形尖頭器が組成の大きな位置を占めると考える。山形県月山沢遺跡や越中山遺跡S’地点では尖頭器の割合が高い高瀬山L遺跡では、「ホロカ」型の舟底形石器と尖頭器・片刃石斧が出土している。後半には槍先形尖頭器が細石刃と比肩できる程、受容の大きな位置を占めていたと考えられる。槍先形尖頭器は連綿として存在していたのではなかろうか。

（4）石材と組成

奥羽山脈以西には頁岩を産出する女川層（相当層）が広く分布し、各水系の露頭や河原では比較的容易に頁岩の採集が容易である。したがって、日本海にそそぐ河川水系では石器時代を通して頁岩を主体とした石材利用が顕著である。一方、太平洋側にそそぐ河川流域では、在地産といわれる石材（流紋岩、黒色頁岩、凝灰岩　など）と奥羽山脈以西からの搬入品である良質の頁岩が用いられている。また、日本海側では、一部玉髄や黒曜石を細石刃核に利用する傾向がみられる。湯の花遺跡を例にとるならば、頁岩・黒曜石・玉髄製の細石刃核が出土した。中でも黒曜石は、良質の黒曜石を利用しており、擦痕を施している。黒曜石製の細石刃核は越中山遺跡E地点や角二山遺跡でも得られている。太平洋側では、頁岩のほかに流紋岩や凝灰岩系・安山岩系の石材が利用されるようであるが、宮城県小泉東山遺跡では頁岩製の細石刃が出土している。阿武隈川流域にあたる学壇遺跡群では、搬入品と思われる良質の頁岩が利用されている。

細石刃製作には、頁岩・黒曜石・玉髄が強く嗜好されたようである。

5　細石刃文化研究の課題

（1）細石刃核諸型式の再検討

細石刃核型式は、残核の形態はもちろん、その製作の過程をも含めたかたちで理解されることが多い。吉崎昌一（１９６１）の提唱した『湧別技法』は、接合資料を用いて実証的に説明されたもので名称や技術ともども一般的になった。そして、擦痕のある白滝型と擦痕のない大形の札滑型に分けられている。ところが、従来の型式観に照らしていえばその内容にあてはまらないものが注目され始めている。たとえば美利河１遺跡では、峠下型と札滑型の両方の特徴を併せ持つため仮称「美利河技法」が提唱された。このことは新道４遺跡でも確かめられている。このような新たな「技法」は、これからも増えてくることは容易に想像できる。ただ、技法内変異なのか新技法なのかは、明確な観点と実証的論拠でもって説明されなければならないだろう。

東北地域では、加藤　稔によって新たに湧別技法による「角二山型」「金谷原型」が提唱され、細石刃核の型式設定が試みられた（加藤稔１９９２）。今後、検証するかたちで研究が活発になされることが望まれる。

湧別技法はについては、その特徴とされる削片についても論議されてきた。宇野・上野（１９７５）は、「単に舟底形細石刃核の打面を作出するだけの技術ではなく、それを含めた幾つかの器種の素材をも提供する総合的な素材生産を行う技法」と述べた。鶴丸俊明（１９７９）はスキー状スポールの利用は副次的ななものと主張している。角二山遺跡の事例（桜井美枝１９９２）について見るならばトゥール素材として意図的に生産されたという考えは成立しそうである。また、北海道での研究が進み、湧別技法は石刃生産技術のひとつであったことが知られてきている。起源・発生については、今後追求される分野である。

黒曜石製で小型の擦痕を持つ細石刃核は、湯の花遺跡で見られる。加藤　稔は東北での「白滝型」として「湯の花型」の名称を与えられた。ただ、湯の花遺跡では削片の腹面にも擦痕が見られる点、擦痕の機能とも絡んで類例の増加が望まれる。

ホロカ型ついては、越中山遺跡Ｓ地点で確認することができた。１母岩から数個の細石刃核が準備されている。さらに剥片から細石刃核を作り出す工程も若干異なる。同様のことは大平山元Ⅱ遺跡の接合資料によっても確かめられており、いわゆる「ホロカ型」の製作過程の多様さが見られる。残核の形態だけでは把握説明できない。実体を持っている。ホロカ型細石刃核は、関東・中部地域にまで分布が広がっている。

東北南部では、剥片素材の細石刃核が見られる。米ケ森遺跡や湯の花、谷地前C遺跡において見られる。加藤　稔により「谷地前C型」と位置づけられた。加藤は、峠下技法の影響を受けていると解釈している。谷地前C遺跡例については、彫刻刀または石刃核としての解釈も見られ、これからさらに議論されるところである。細石刃文化の初期に位置づけられている荒川台遺跡等の細石刃石器群が北からの影響のもと成立したのか興味ある課題である。

（2）細石刃核準備工程、細石刃剥離工程の分析

角二山遺跡出土の石器群の分析（桜井美枝１９９２）によって、角二山遺跡における湧別技法の様子が明らかにされた。３個体の接合資料から、素材から両面加工品を作り出す過程、削片を剥取する過程が実証的にとらえることができた。また湧別技法が、多種の石器生産を担った技術であることが具体的に示されることとなった。越中山遺跡Ｓ地点でも接合資料の分析から細石刃核の製作工程が明らかになっている（石井浩幸１９８６）。角二山遺跡と越中山遺跡Ｓ地点の相違は、掻器類生産の石核が、母岩の分割によって別に準備される点にある。接合資料による製作技術の研究は、これからも積極的に進められる必要がある。

（3）遺跡の構造について（礫群や配石など）

角二山遺跡では、人頭大の台石と４ｍ～６ｍ範囲にわたって集礫が検出されている。台石周辺からは、大量の細石刃が出土した。石器の器種別分布からも２つの空間が想定されている。越中山遺跡Ｓ地点では、石器集中地点のそばに、拳大の礫による礫群が検出された。周辺からは掻器が数多く出土している。さらに、湯の花遺跡では、１ｍ×３ｍの礫群が見られた。大半が焼けており、焼土や炭屑もあり、炉あとと考えられる。新潟県荒屋遺跡２次３次調査でも土壙群が検出された。ともに今後研究を進めるべき分野である。

（4）展望

東北南部では、各地で関連資料の出土を耳にするが、実質的研究は停滞していると言える。第１に、これまでは、数々の資料を階梯的に、あるいは共通の型式群に分類することに重点がおかれてきたこと。第２に細石刃文化遺跡の調査件数の少なさや採集品という全体像の欠如が、研究上支障をきたしていること。第３に山形県を中心に火山灰などの堆積が顕著出なく、層位的に検出することが困難なことなどがあげられる。

現在、定量的・技術的な観点からの分析術が駆使され、構造の一部が明らかにされつつある。最終産物である細石刃核が、製品ではなく、ましてや目的物でもない以上、残核だ

けでの操作作業には不可解な不明瞭な部分が付随してくるのは当然と言える。日本全体を視野に据えた見識とより科学的な資料操作術が要求される。

６　主要文献

柏倉亮吉　１９６４　『山形県の無土器文化』山形県文化財調査報告書１４　山形県

加藤稔　１９６５　「東北地方」『日本の考古学　Ⅰ　先土器時代』　河出書房新社

加藤稔　１９６９　「旧石器時代」『山形県史　資料篇１１』考古資料　山形県

上野秀一　１９７１　「後期旧石器時代末葉における東北地方と北海道の交流について」『山大史学４号』１～２３項

加藤稔　１９７２　「越中山Ｓ遺跡の細石刃発掘」『庄内考古学１１』１～５

加藤稔

上野秀一　１９７３　「東北地方の細石刃技術とその北海道との関連について」『北海道考古学９』２５～５０

小野一彦　１９７３　「最上川・赤川流域における細石刃文化」『工藤定雄教授還暦記念論文集』山形史学研究会

加藤稔　１９７３　「東北地方の旧石器文化（後編）」『山形県立中央高等学校研究紀要３』１～２８

酒井忠一

加藤稔　１９７３　『越中山遺跡の研究序説』朝日村教育委員会

宇野修平

上野秀一　１９７５　「角二山遺跡」『日本の旧石器文化２』９６～１１１雄山閣

加藤稔　１９７５　「越中山遺跡」『日本の旧石器文化２』１１２～１３７雄山閣

加藤稔他　１９７５　「出羽三山・葉山周辺の考古学的調査」『出羽三山・葉山』山形県総合学術調査会

加藤稔　１９７６　『東北古代文化の源流』新人物往来社

渡辺光一他１９７８　「会津若松市小石ヶ浜遺跡の石器」『福島考古１９』１５～２０

矢島国雄　１９７９　「東北地方の細石器文化」『駿台史学４７』５１～６５

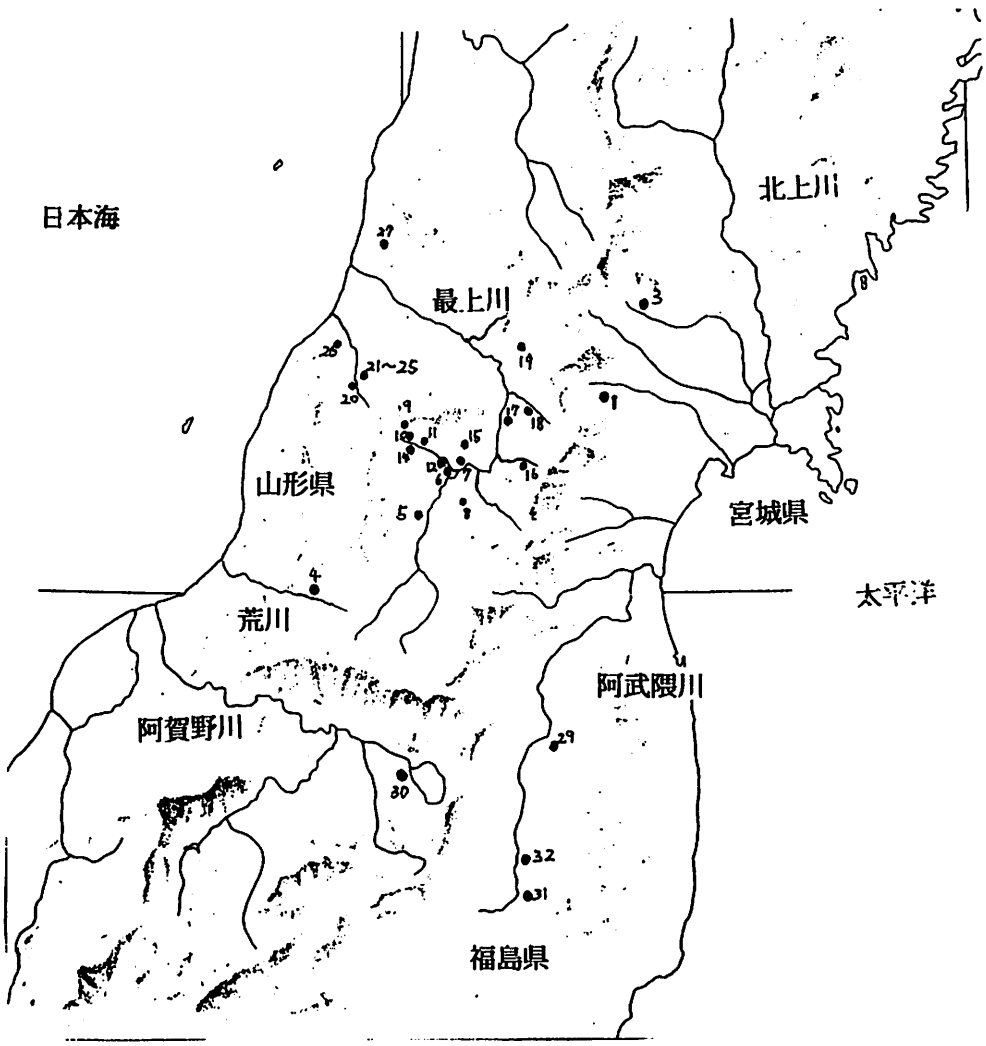
剣持みどり１９７９　「角二山細石刃石器群の構造」『山形考古３巻２号』山形考古学会

福島県教育委員会

１９８０　「谷地前Ｃ遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ』３０１～４４４

山形県教育委員会
１９８０　『月山沢遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書２９
東北歴史資料館
１９８１　『旧石器時代の東北』
加藤　稔　１９８１　「山形県角二山遺跡」『日本考古学年報２１・２２・２３』
日本考古学協会
加藤稔他　１９８２　「最上川・荒川流域の細石刃文化」『最上川』
山形県総合学術調査報告書　山形県総合学術調査会
加藤　稔　１９８２　「コメント　山形の細石刃核について」『越中山かわら版６号』
越中山スクール
佐藤嘉広　１９８２　「金谷原遺跡の細石刃石核」『越中山かわら版６号』
越中山スクール
佐藤禎宏　１９８２　「宮山坂Ｆ遺跡出土の細石器」『山形考古３巻３号』山形考古学会
藤原妃敏　１９８５　「日本の旧石器－東北」『考古学ジャーナル２５７・２５９』
ニューサイエンス社
寒河江市教育委員会
１９８６　『高瀬山Ｋ・Ｌ遺跡発掘調査報告書』
石井浩幸　１９８６　「越中山遺跡群における細石器文化の探求」『庄内考古学２０』
石井浩幸　１９８７　「細石器文化の技術基盤と展開」『山大史学６号』１４～３８
山形大学教育学部歴史学研究会
宇野修平　１９８７　「寒河江川流域の先土器文化」『西村山の歴史と文化』74~98
加藤　稔　１９８９　「東北日本の細石刃核」『伊藤信雄先生追悼記念論文集』25~49
石井浩幸　１９９０　「山形県寒河江市金谷原遺跡の細石刃石器群」『古代文化』
第４３巻１２号　３４～４０
石井浩幸　１９９１　「越中山遺跡群における細石器文化の探求Ⅱ」『山形考古』
４巻４号　山形考古学会
加藤　稔　１９９２　『東北日本の旧石器文化』雄山閣考古学選書３５
加藤　稔　１９９２　「東北日本の細石刃文化の展開」『山形県立博物館研究報告１２』
13~88　山形県立博物館
柳田俊雄　１９９２　「阿武隈川上流域における旧石器時代の石器群とその出土層位につ

いて」　『加藤稔先生還暦記念論文集』１２９～１５６
桜井美枝　１９９２　「細石刃石器群の技術構造　山形県角二山遺跡の分析」
『加　稔先生還暦記念論文集』４４１～４６２
加藤　稔
石井浩幸　１９９３　「越中山遺跡Ｓ’地点調査予報」『山形考古』　５巻１号
１２～２１　山形考古学会

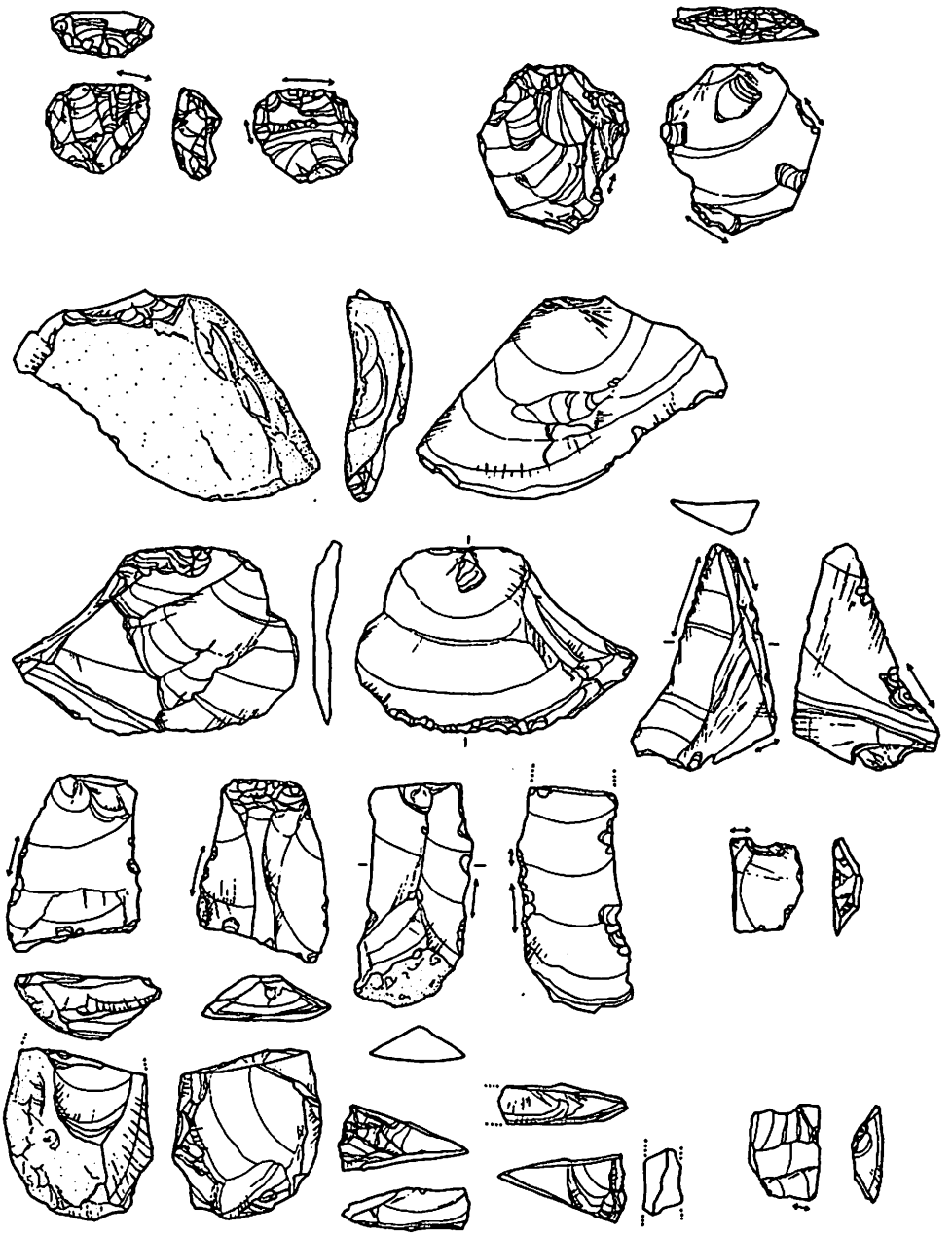


1	鹿原D遺跡	17	角二山遺跡
4	湯の花遺跡	24	越中山遺跡S地点
6	金谷原遺跡	27	宮山坂F遺跡
7	高瀬山L遺跡	29	学壇遺跡群
10	月山沢遺跡	30	小石ケ浜遺跡
16	所部遺跡	32	薬師堂遺跡

（番号は、遺跡一覧表に同じ）

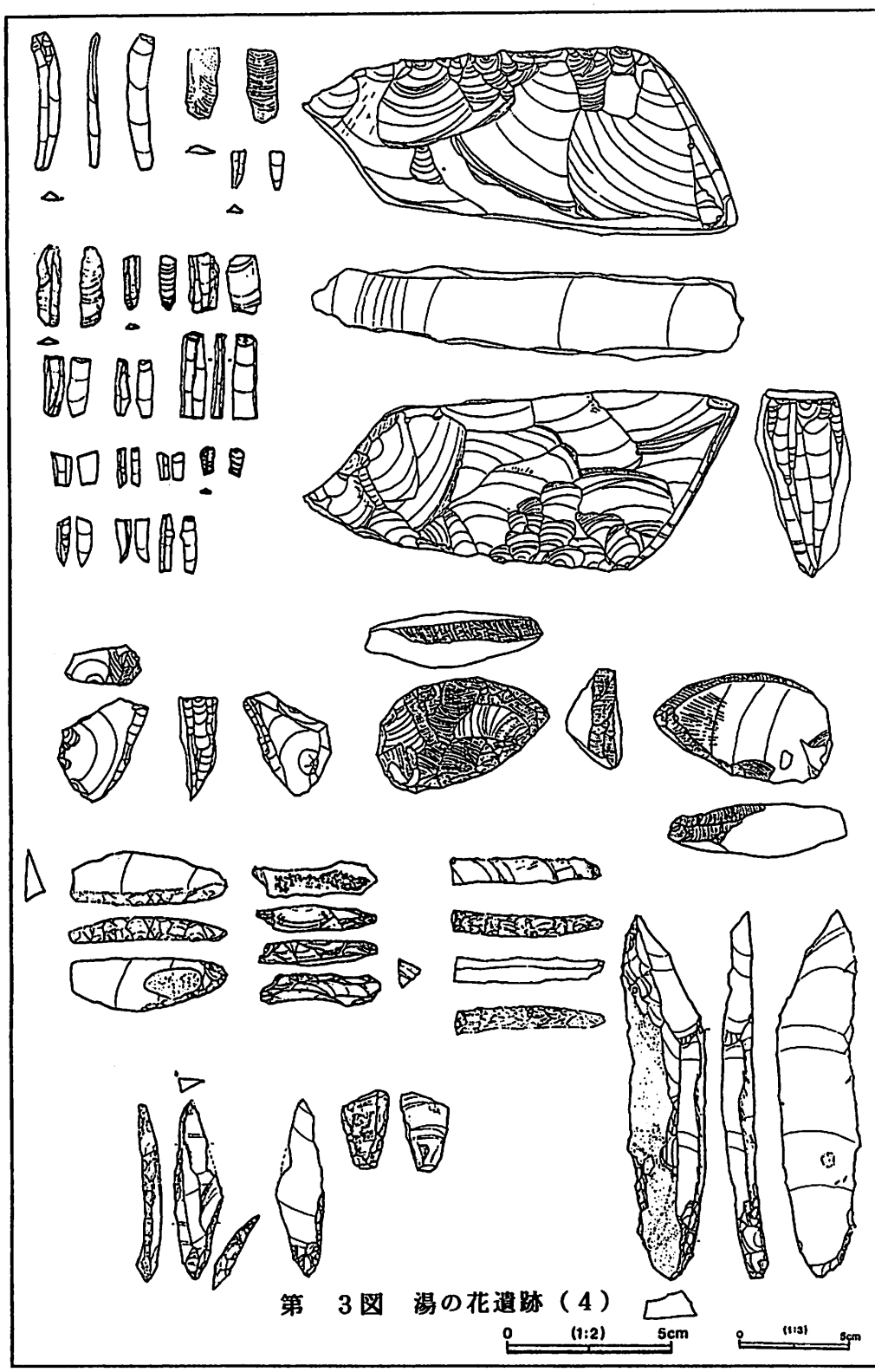
第　1図　東北南部の細石刃文化遺跡分布図

0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm

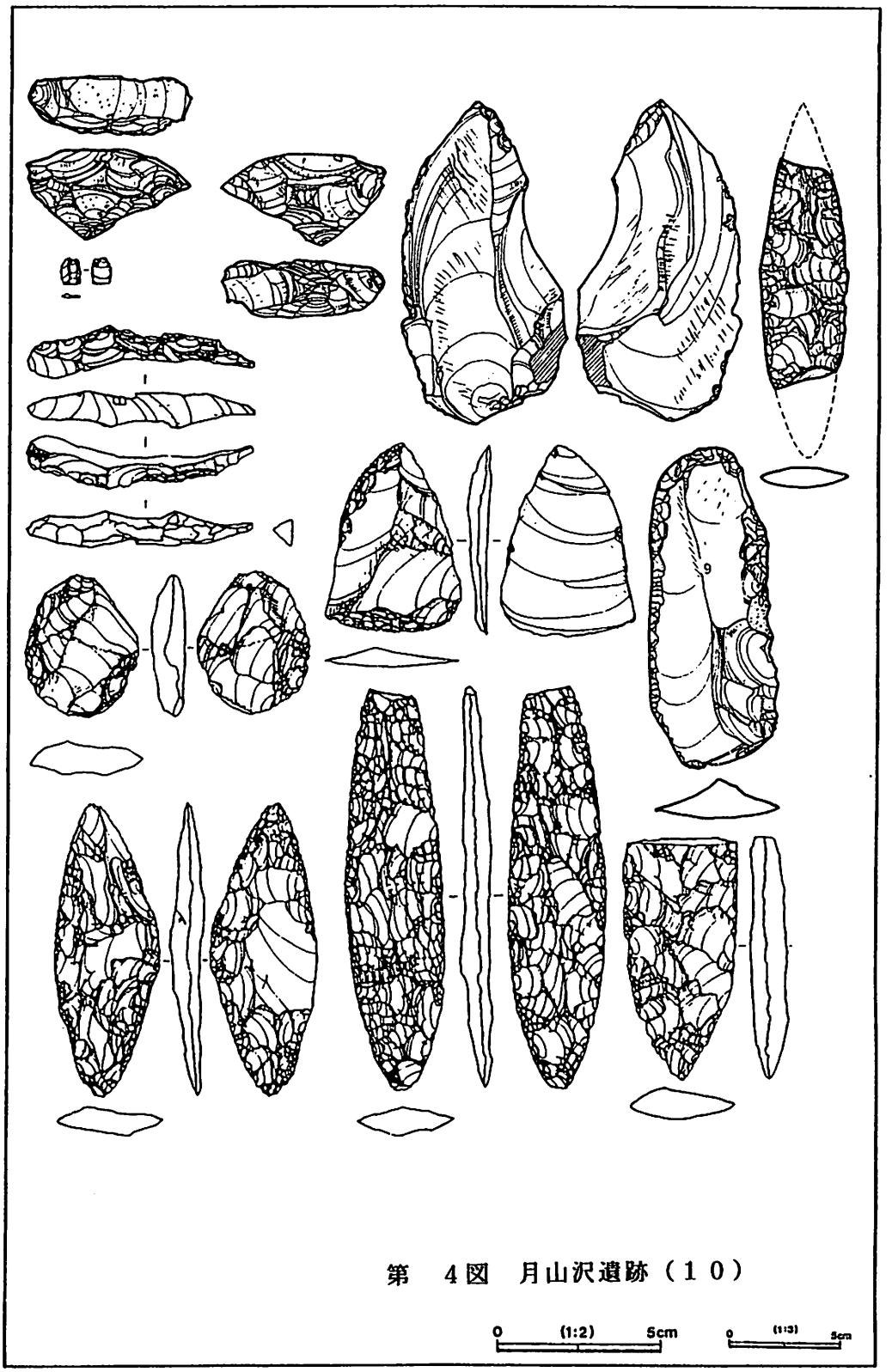


第　2図　鹿原D遺跡（1）

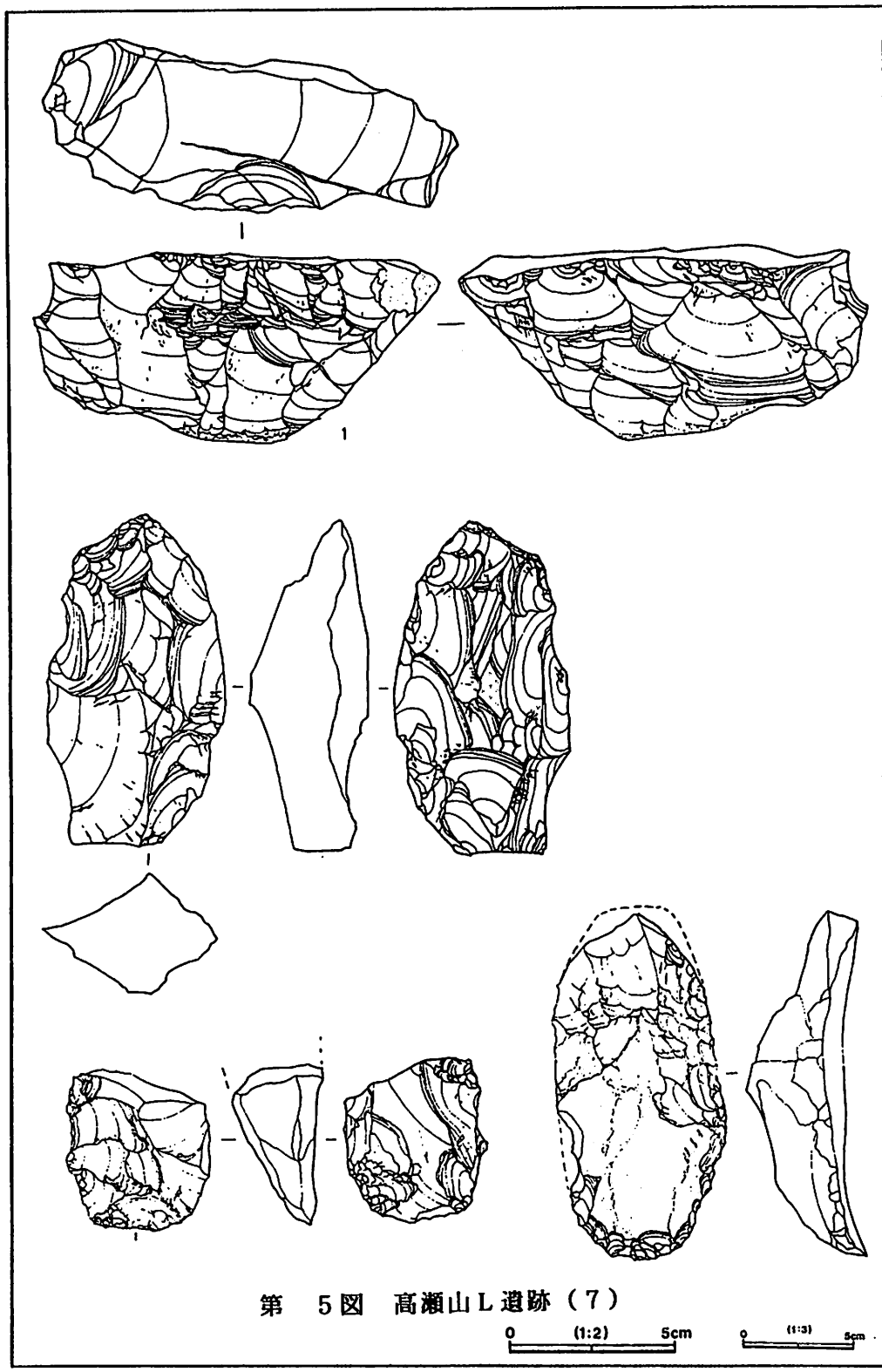
0　(1:2)　5cm　　0　(1:3)　5cm



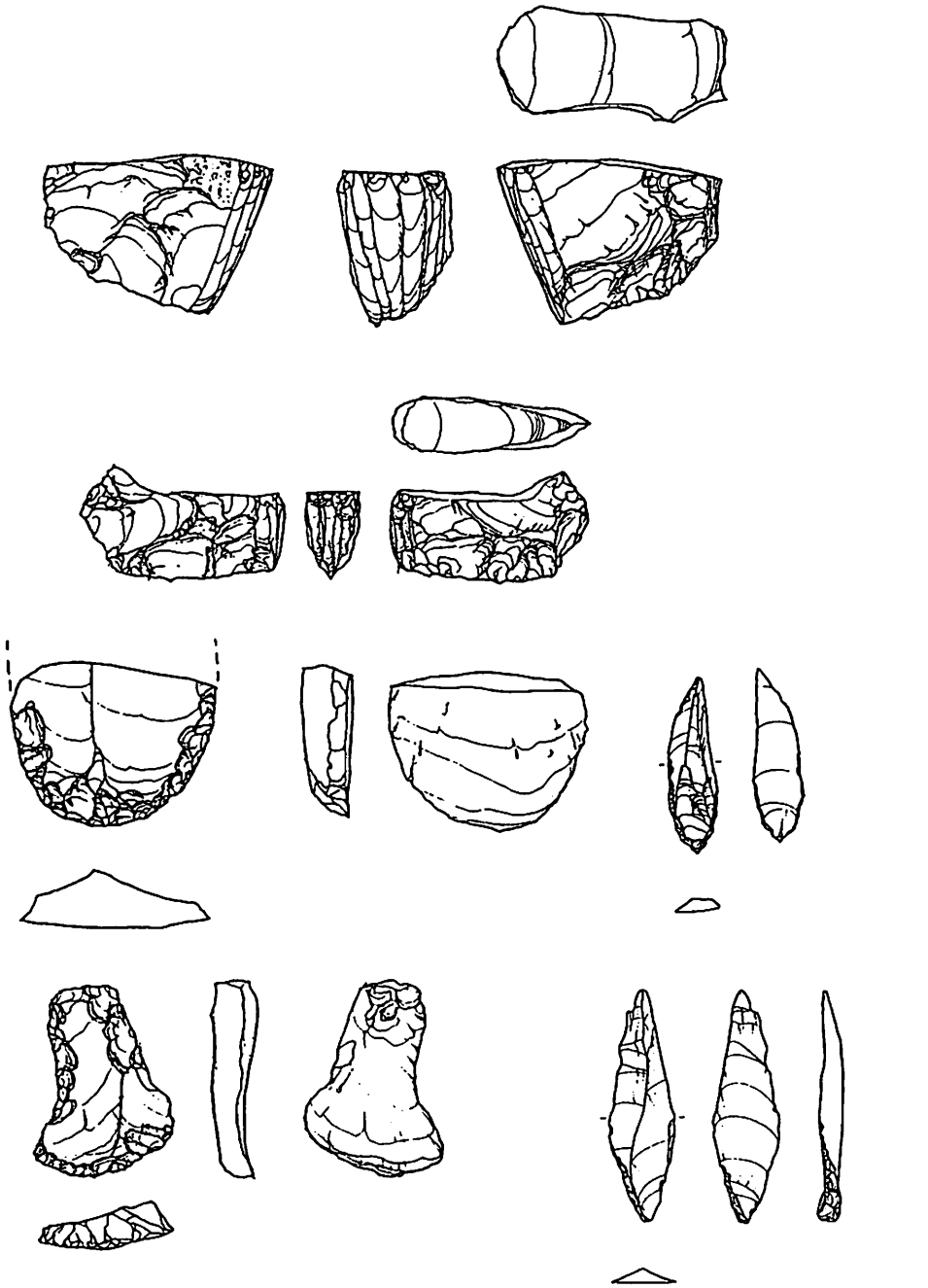
第　3図　湯の花遺跡（4）



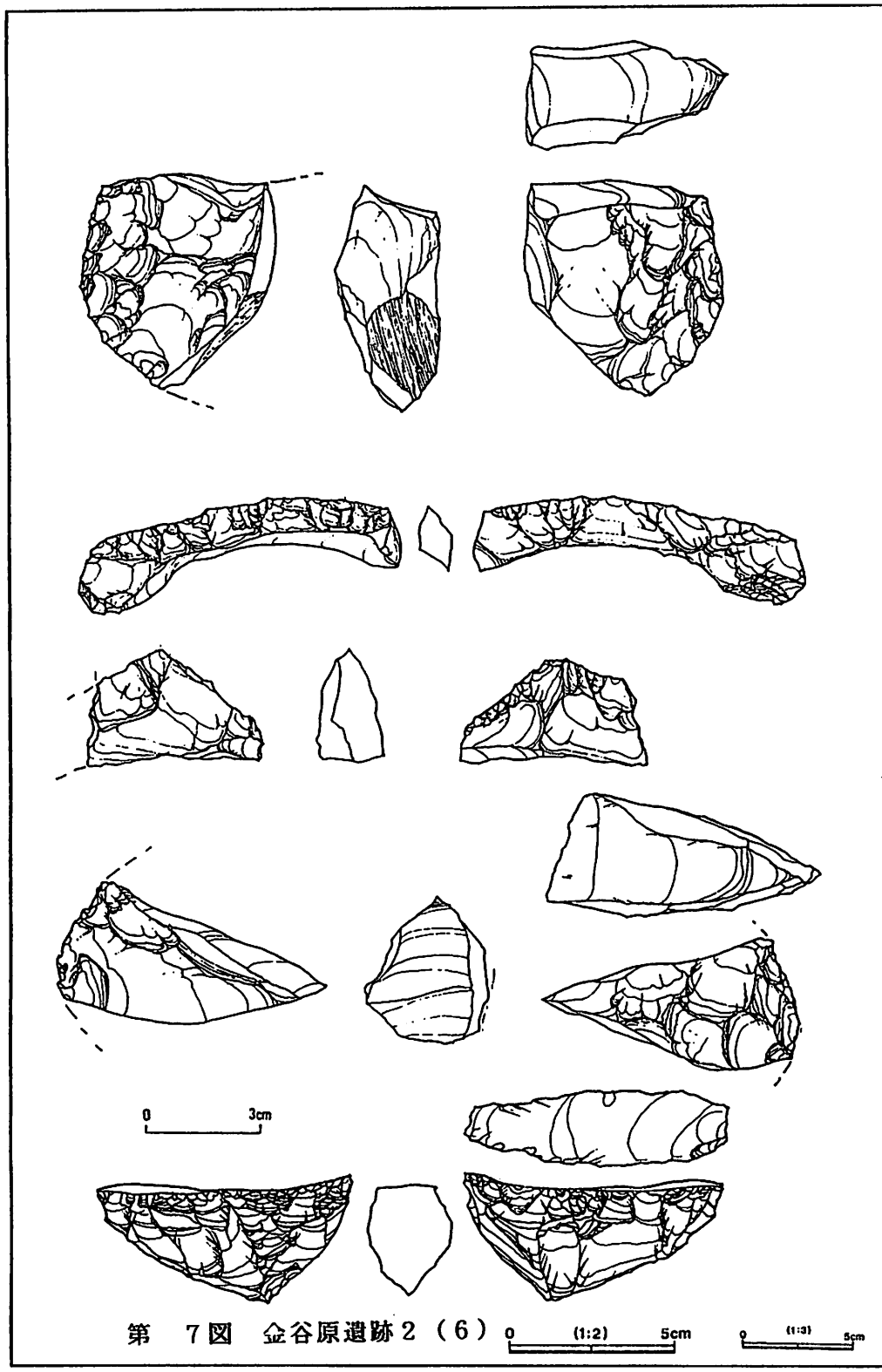
第　4図　月山沢遺跡（１０）



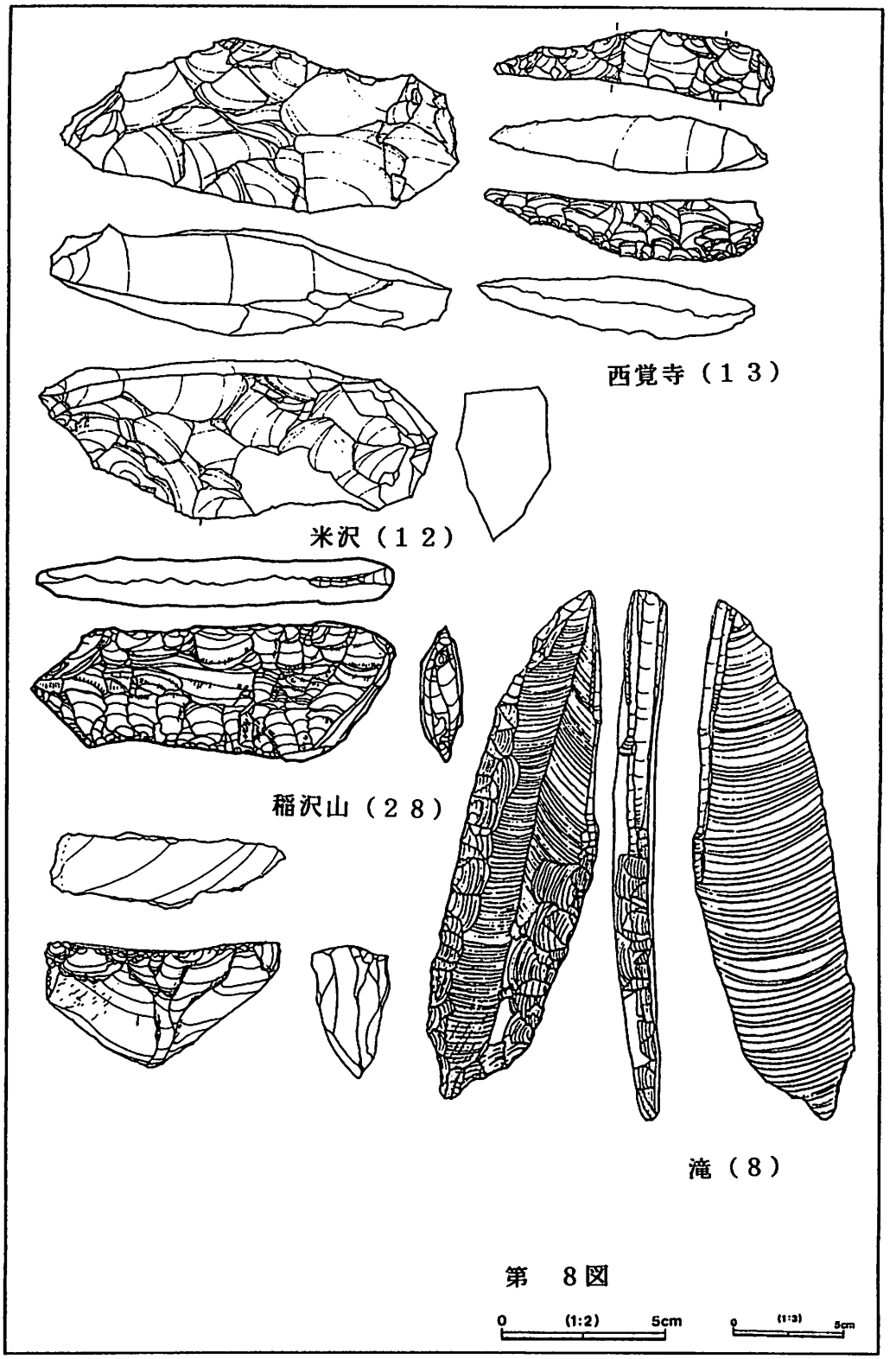
第　5図　高瀬山L遺跡（7）



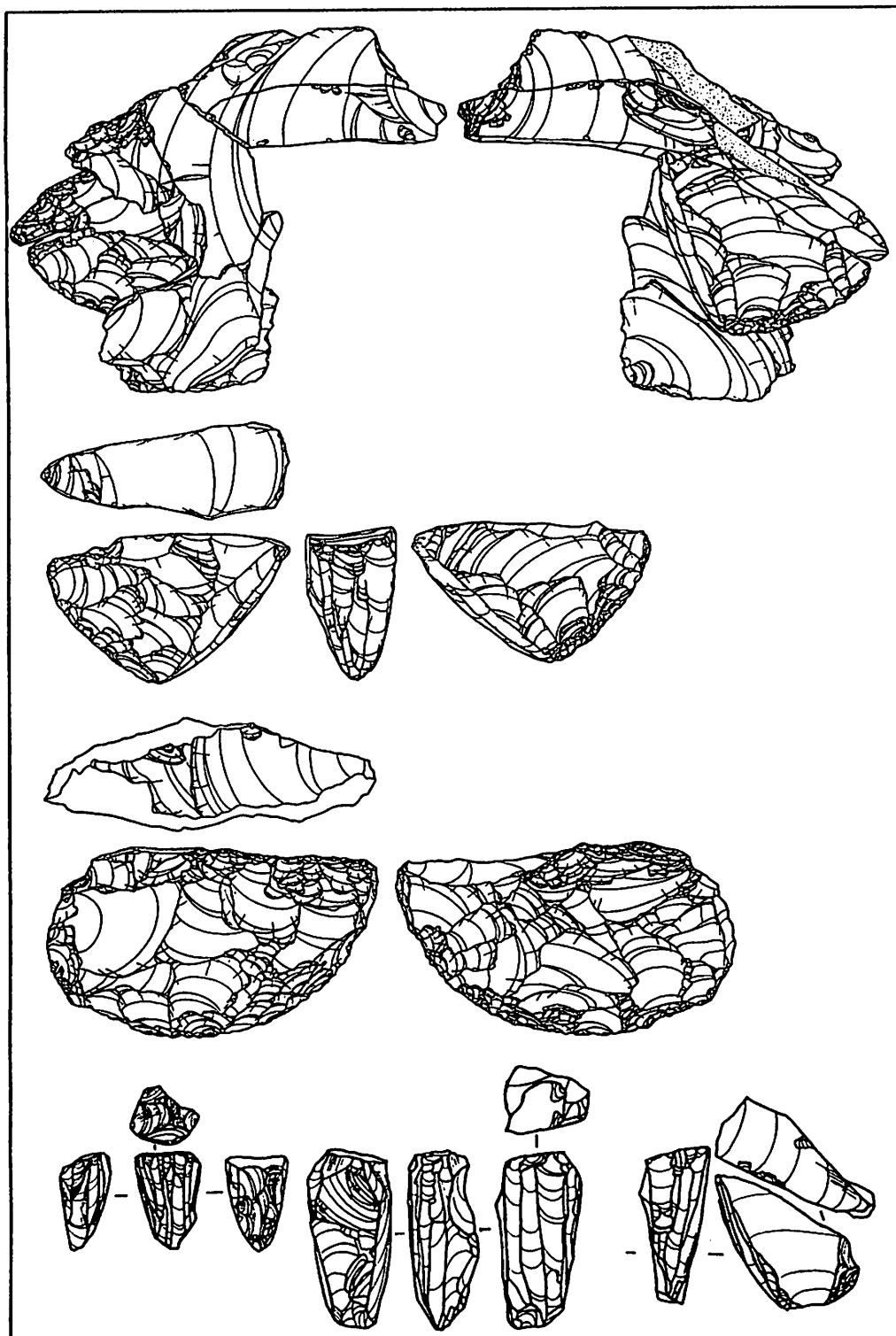
第　6図　金谷原遺跡１（６）



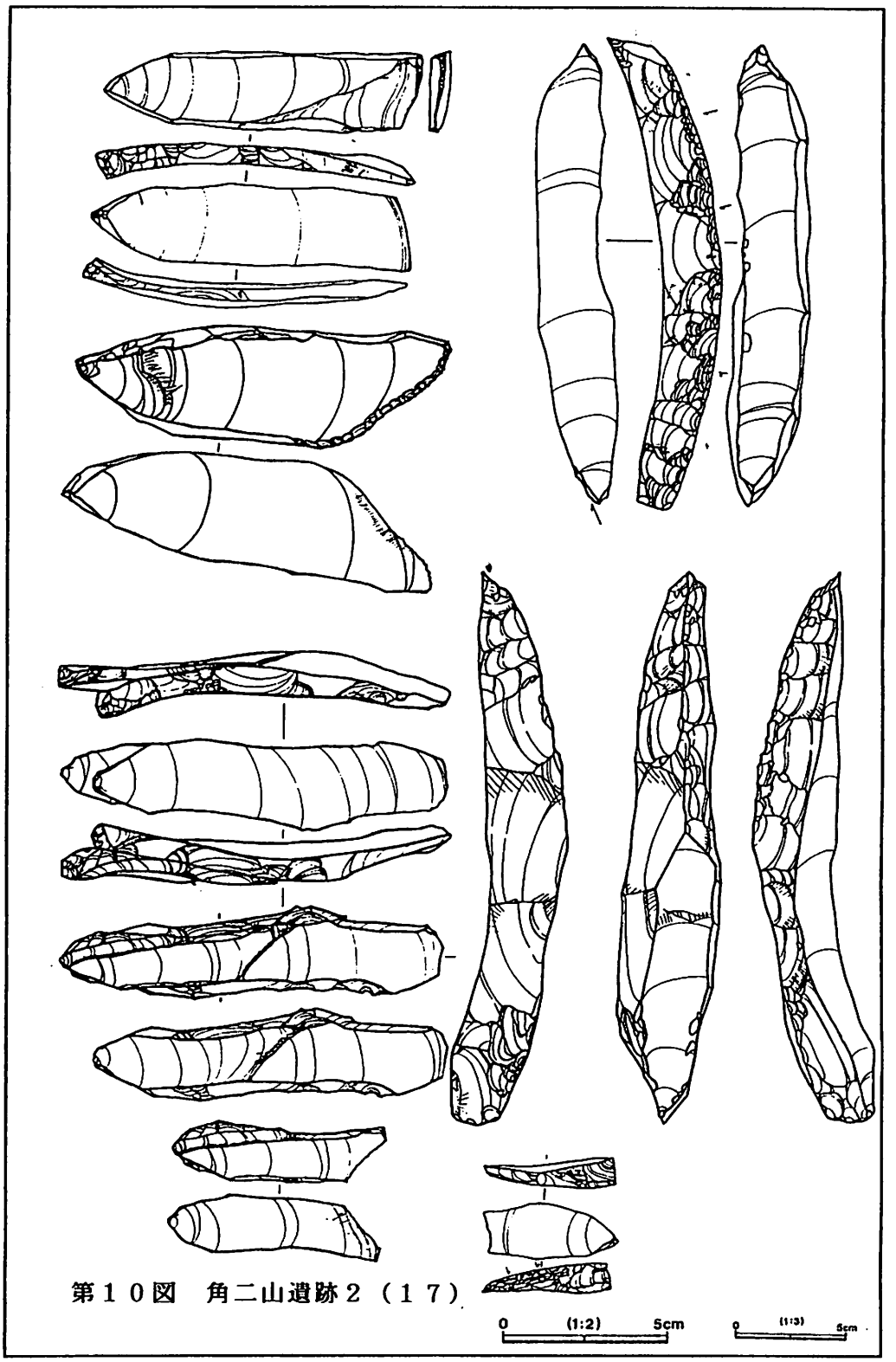
第　7図　金谷原遺跡２（６）



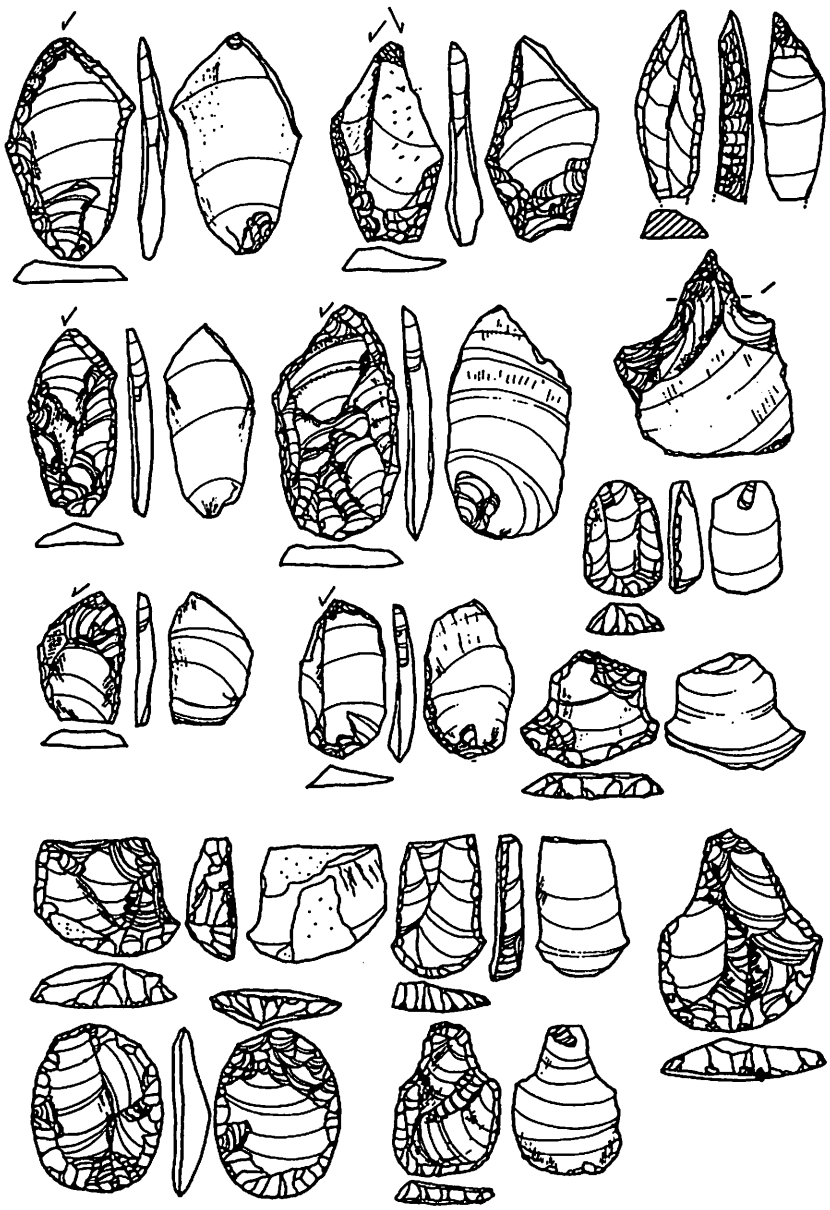
第　８図



第　9図　角二山遺跡1（17）

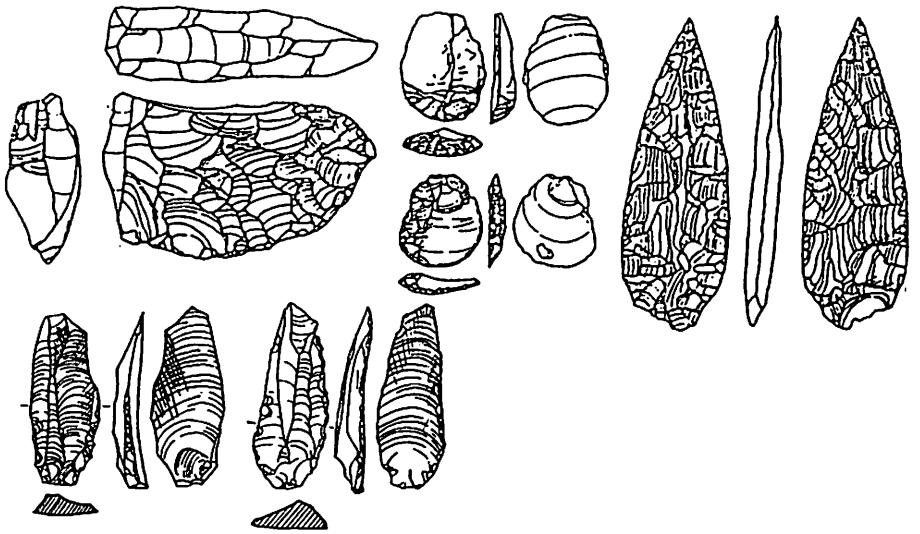


第１０図　角二山遺跡２（１７）

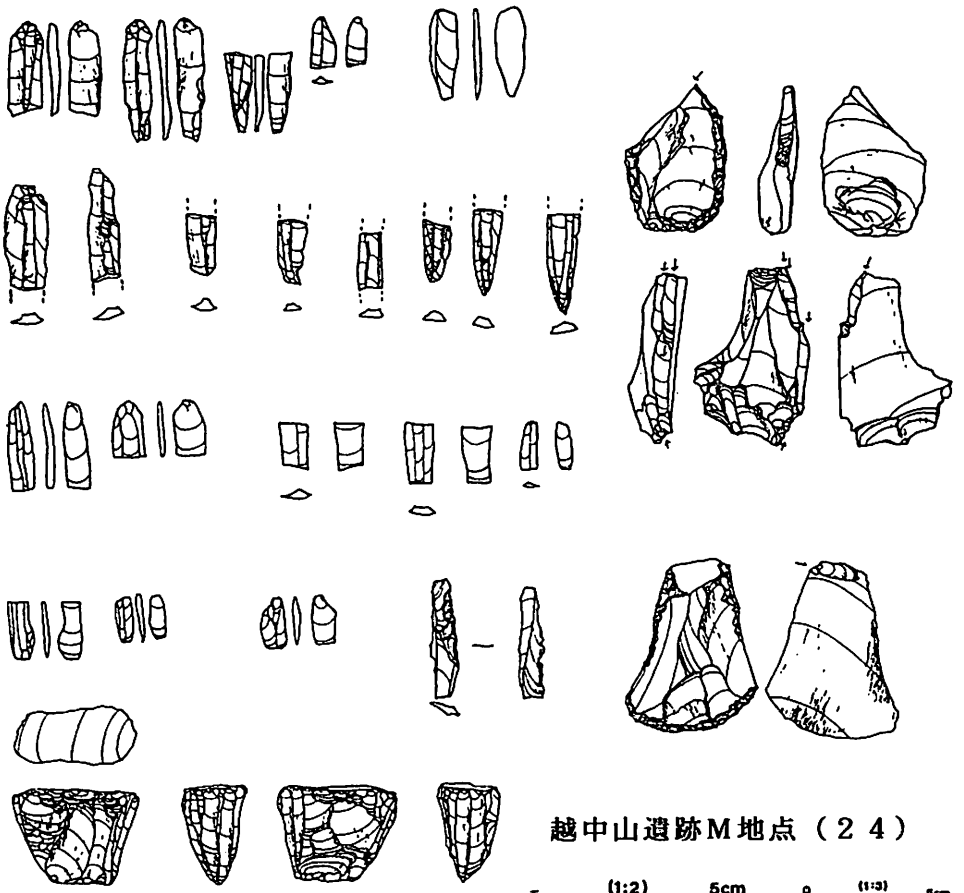


第１１図　角二山遺跡３（１７）

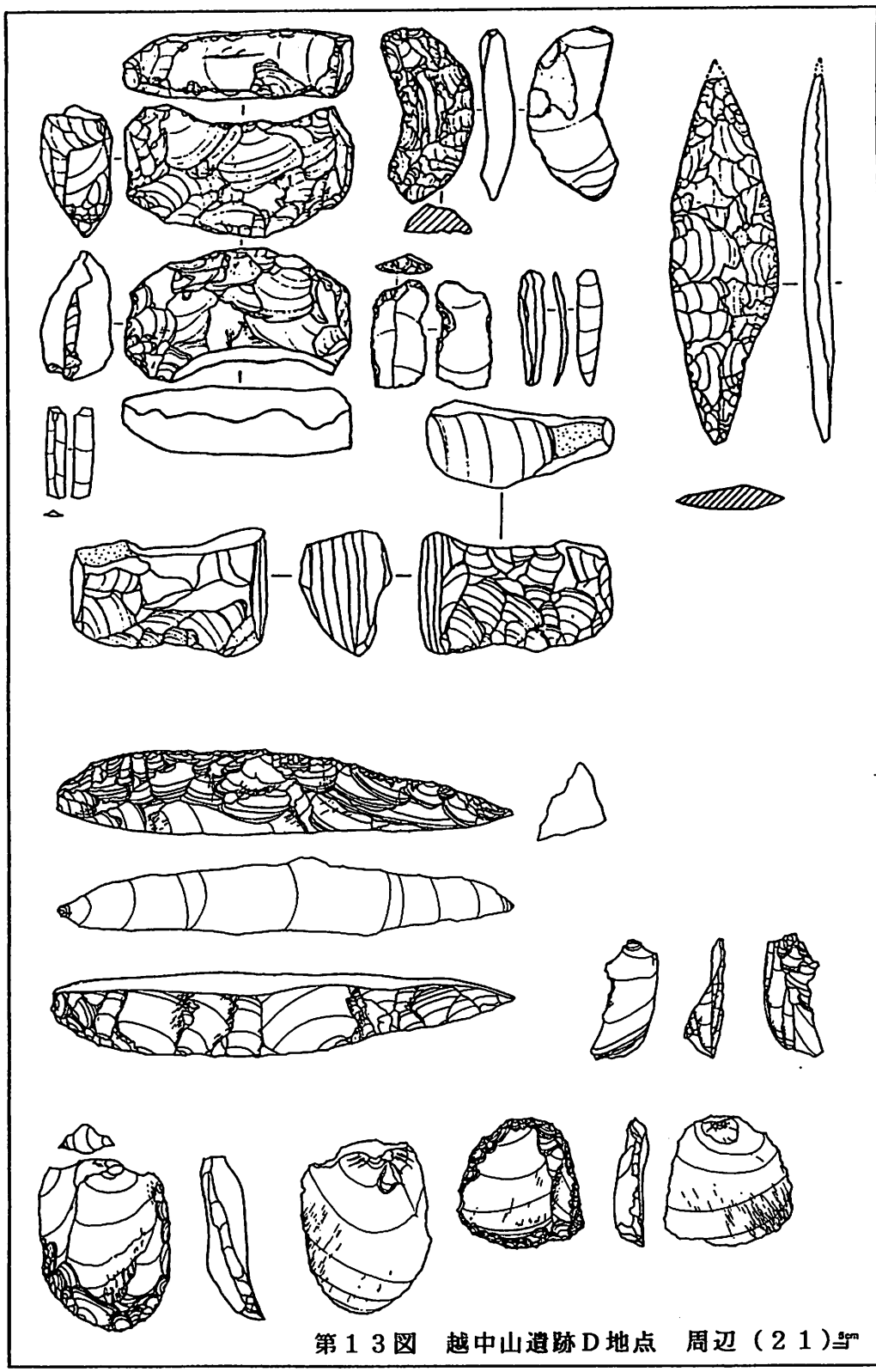
0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



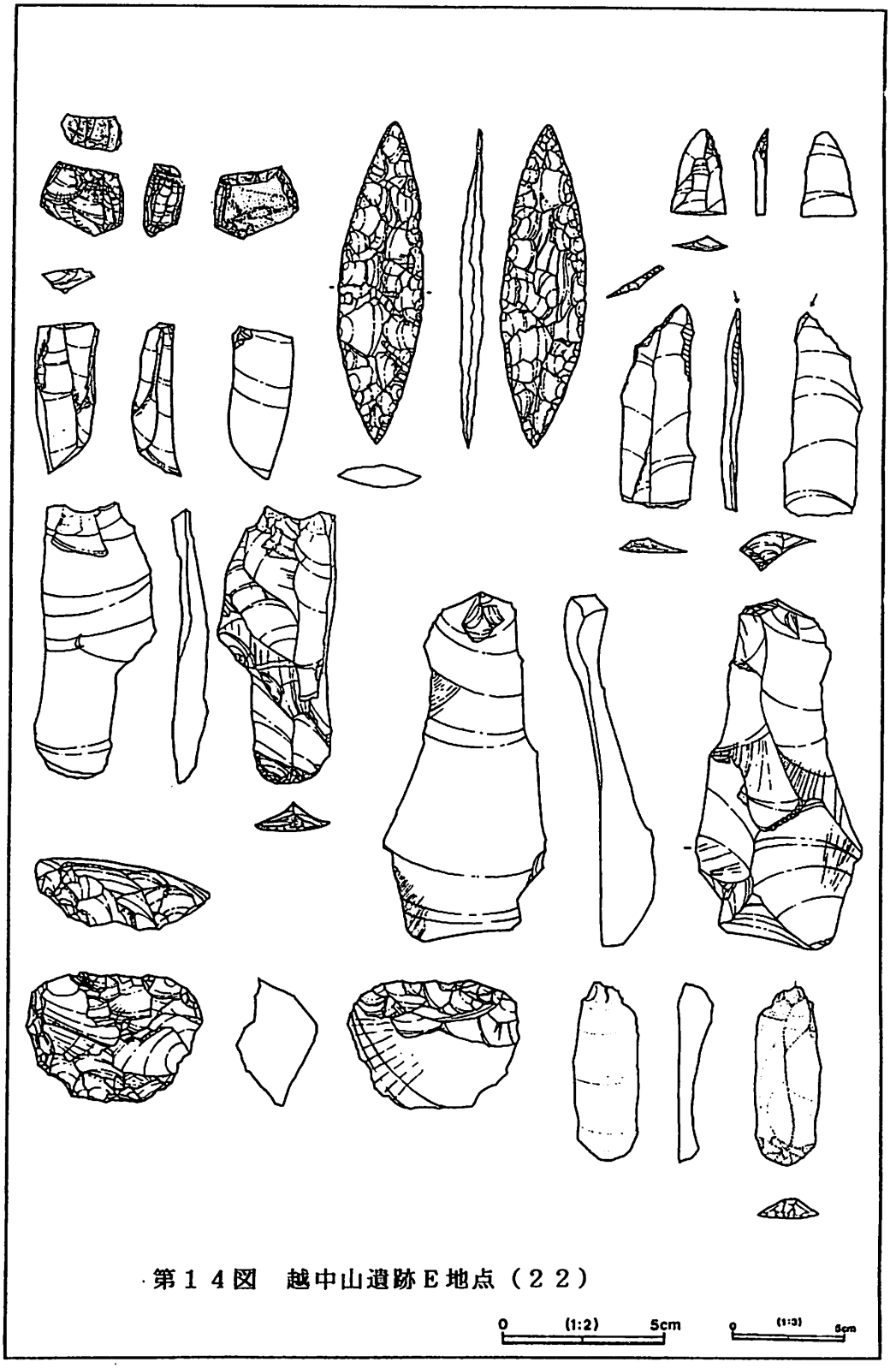
第１２図　山屋（１９）



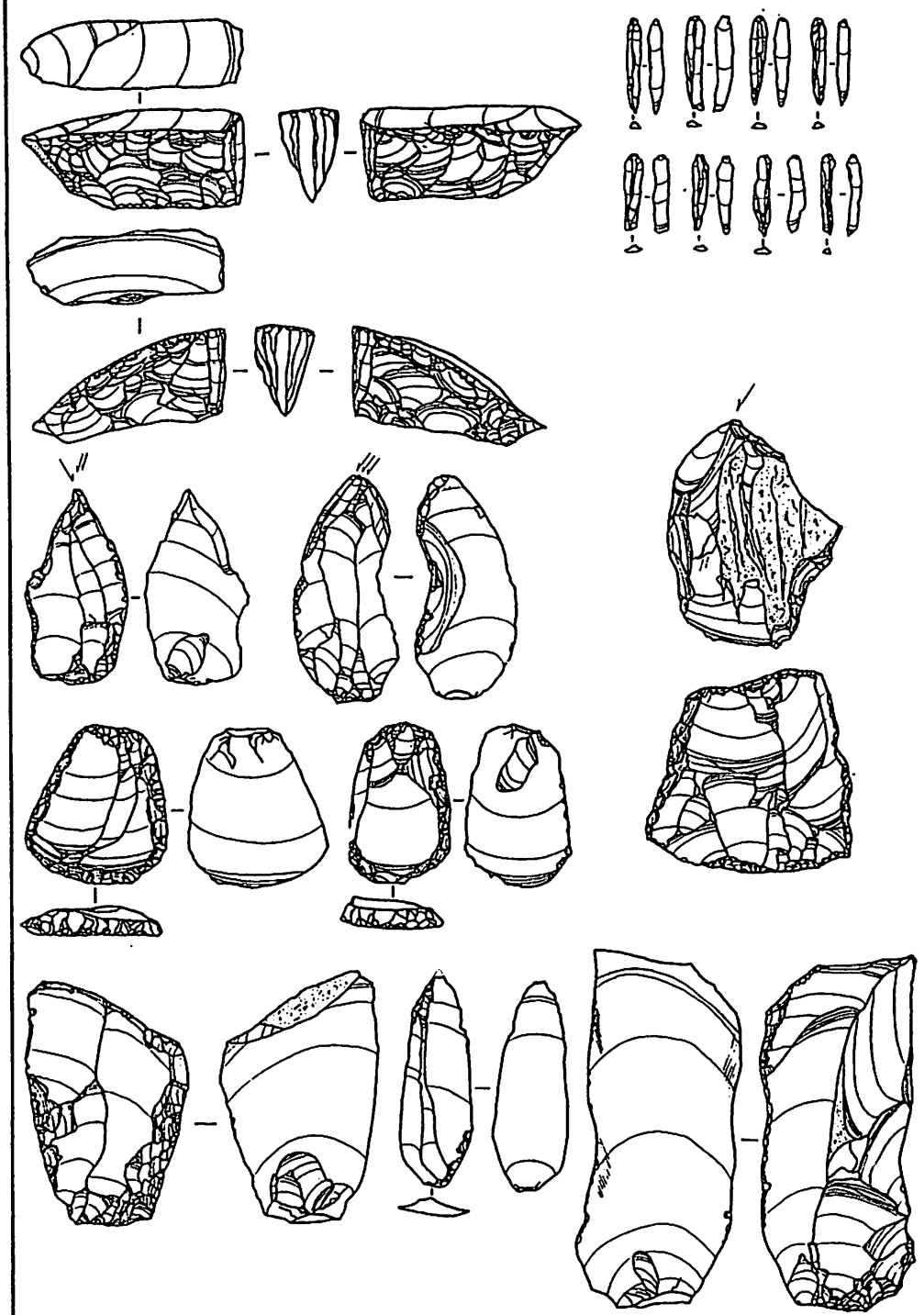
越中山遺跡Ｍ地点（２４）



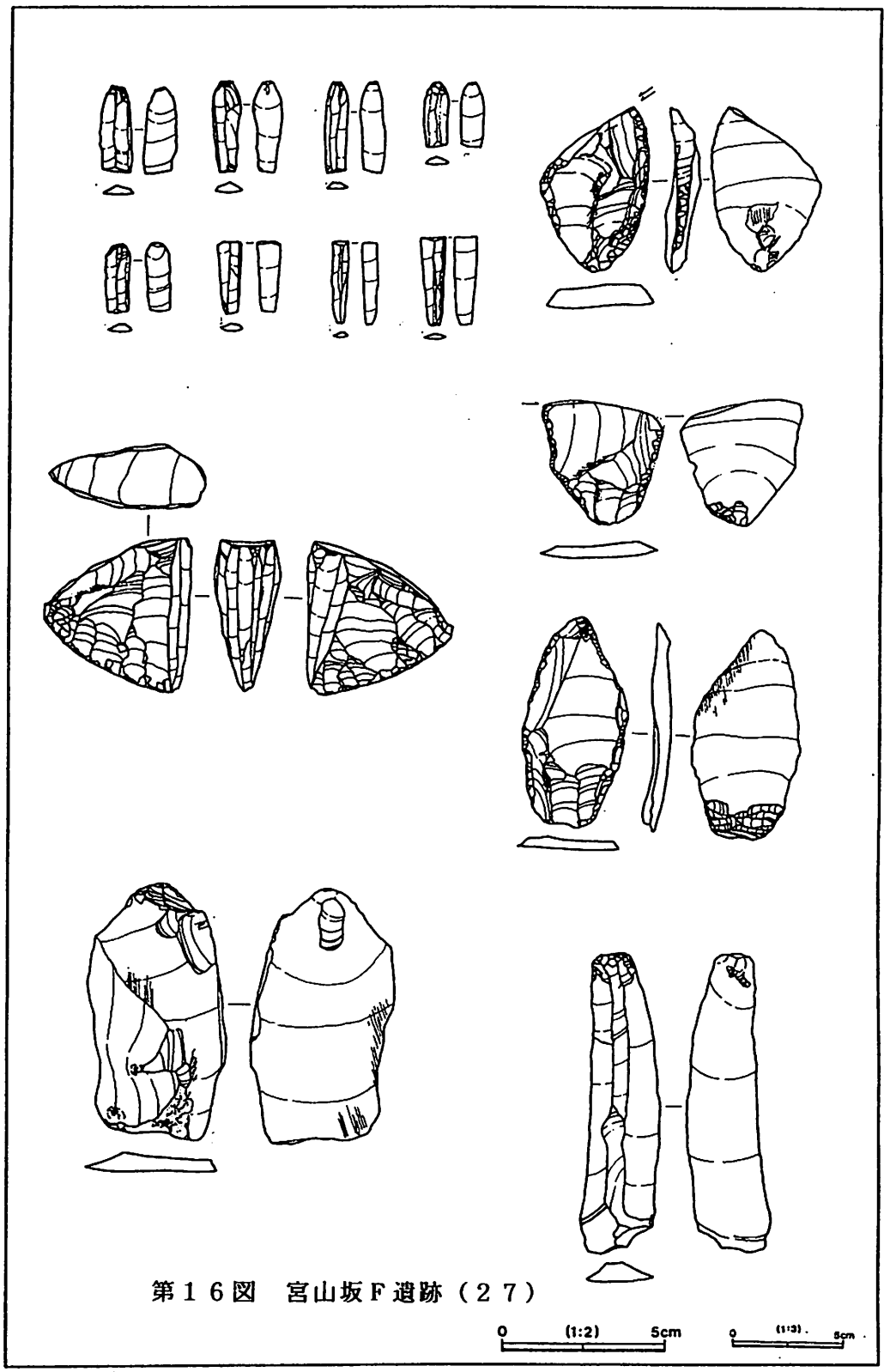
第１３図　越中山遺跡Ｄ地点　周辺（２１）$\frac{5cm}{1}$



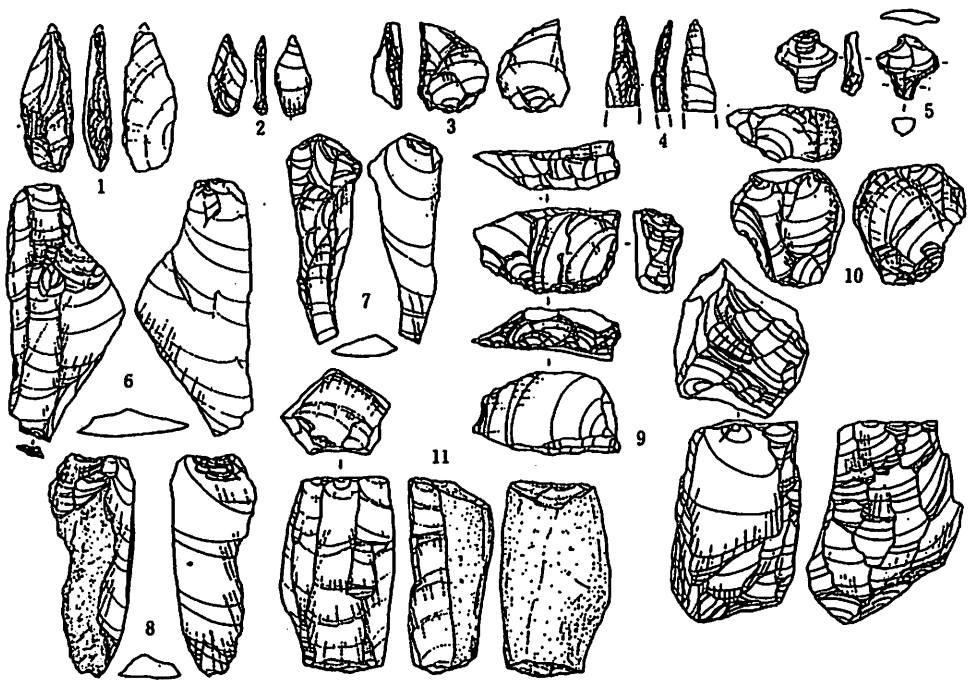
第１４図　越中山遺跡Ｅ地点（２２）



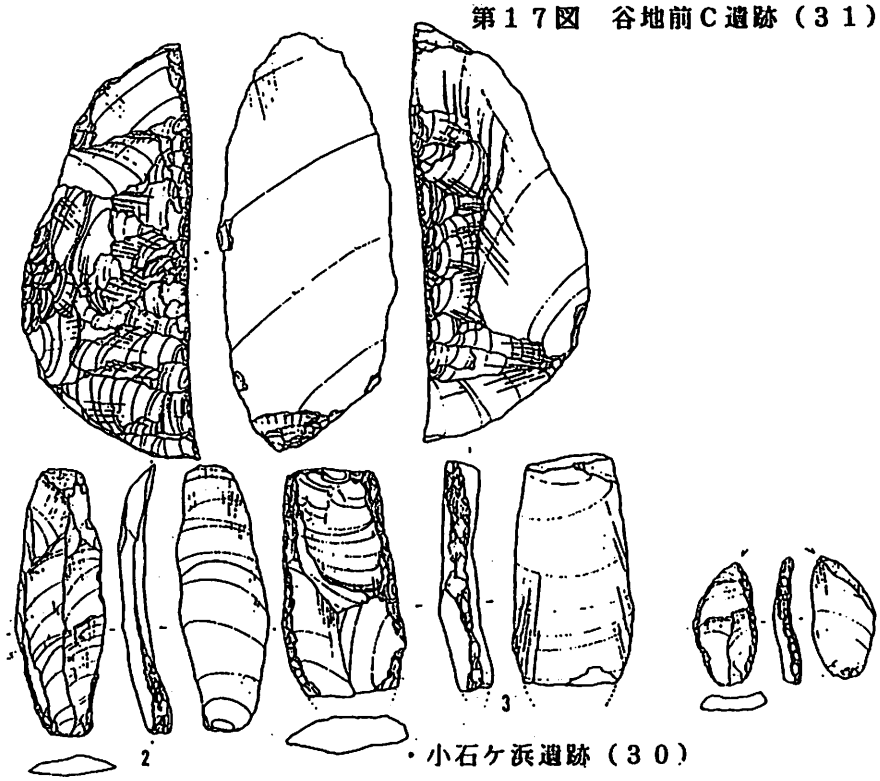
第１５図　越中山遺跡Ｓ地点（２４）



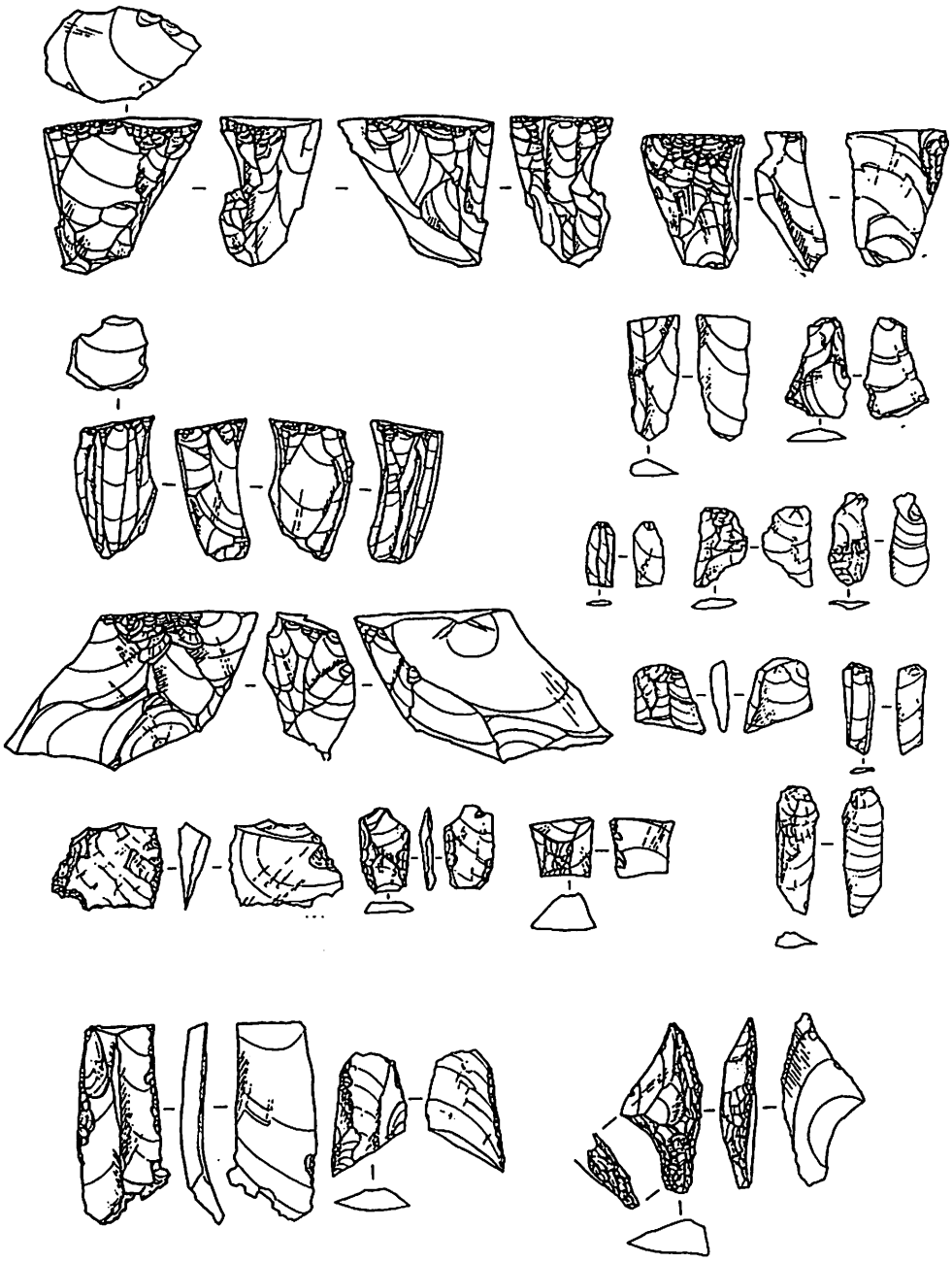
第１６図　宮山坂Ｆ遺跡（２７）



第１７図　谷地前Ｃ遺跡（３１）

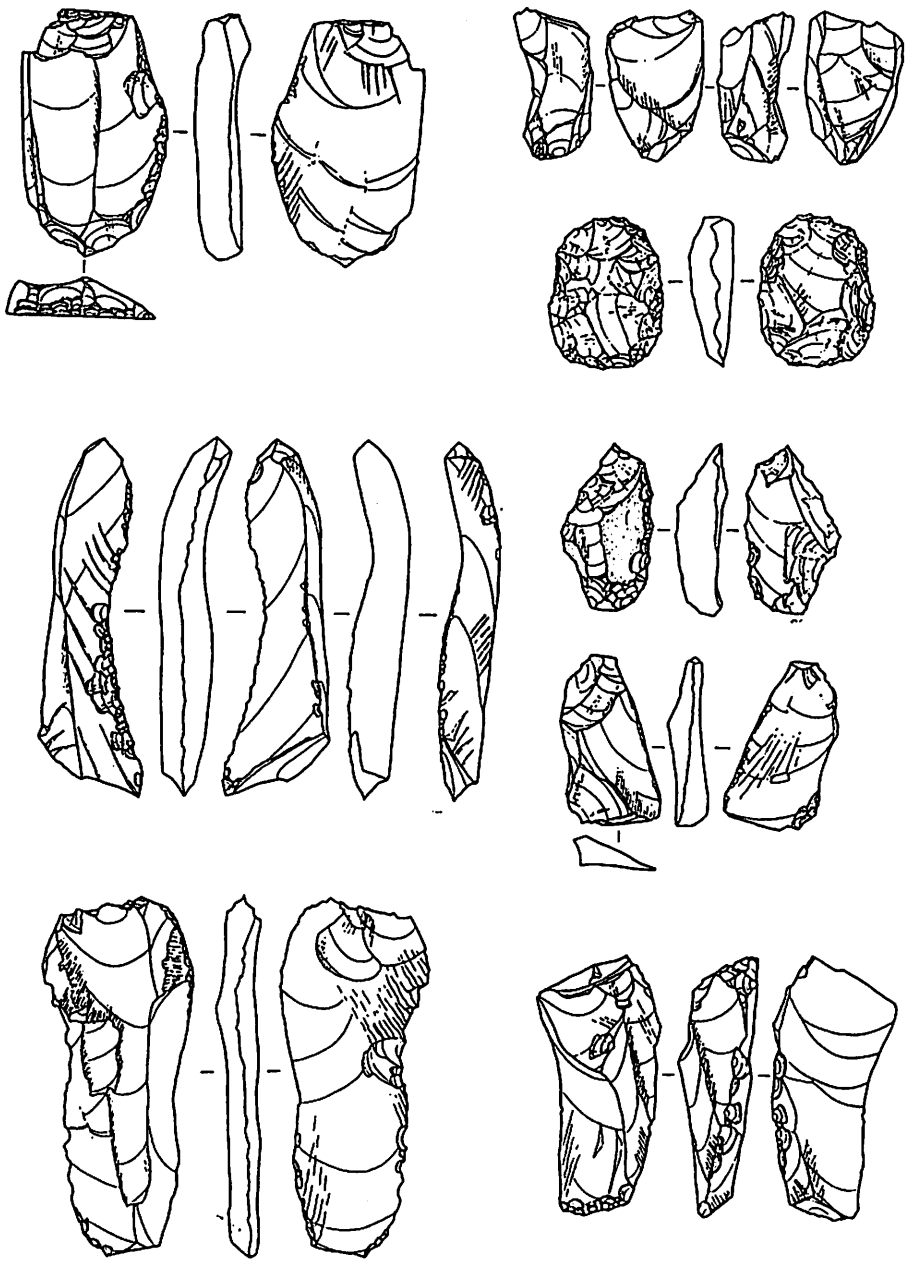


・小石ケ浜遺跡（３０）



第１８図　薬師堂遺跡１（３２）

0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm



第１９図　薬師堂遺跡２（３２）

0 (1:2) 5cm　0 (1:3) 5cm

第 1 表　東北南部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磨	土	発掘	所在	所属	備考
1	歴原D		1	○												有	宮城県加美郡小野田町上ノ台	鳴瀬川流域	東北歴史資料館 1981
2	小泉東山	○														有	宮城県加美郡小野田町上ノ台		
3	大穴山		1														宮城県栗原郡花山村草木沢		花山村教育委員会 東北歴史資料館
4	湯ノ花	30	7	○	○	12						7	1			有	山形県西置賜郡小国町湯ノ花	荒川流域	加藤　稔ほか 1982
5	小松野		1														〃　西村山郡朝日町常磐153	最上川流域	加藤　稔ほか 1982
6	金谷原	○	4	○	○							○				有	山形県寒河江市金谷木ノ沢前	最上川流域	石井浩幸 1990
7	高湖山　L		1	1	1			1	1				3			有	山形県寒河江市高湖山	最上川流域	石井浩幸 1985
8	滝		1														山形県東村山郡中山町土橋滝	最上川流域	加藤　稔ほか 1982
9	弓張平		1	○	○												〃西村山郡西川町志津弓張平	寒河江川流域	山形県教育委員会 1988 加藤　稔ほか 1982
10	月山沢	1	1	○	2								10			有	〃西村山郡西川町月山沢214	寒河江川流域	山形県教育委員会 1988
11	朴ノ木清水		1														〃西村山郡西川町間沢	寒河江川流域	宇野修平 198
12	米沢		1														山形県寒河江市高松米沢	寒河江川流域	加藤　稔ほか 1982
13	西覚寺		1														山形県寒河江市高松西覚寺	寒河江川流域	加藤　稔ほか 1982
14	お仲間林		1	1	1								2			有	山形県西村山郡西川町入間	寒河江川流域	加藤　稔 1992
15	奥土入		1														〃　西村山郡河北町根際土入	最上川流域	加藤　稔ほか 1982
16	所部		1		1								2				山形県山形市山寺所部	立谷川流域	山口博之 1991
17	角二山	1390	13	○	39	37	2	1	12	1	3	4				有	〃北村山郡大石田町上ノ原乙	最上川流域 尾花沢盆地	宇野・上野 1975 加藤　稔 1992 等
18	月橋		1														山形県最上郡最上町月橋	小国川流域 最上盆地	加藤　稔 1982
19	山屋		1		2							○	1				山形県新庄市金沢山崎山	新庄盆地	
20	上野山		1	○								1	1				〃東田川郡朝日村下名川20-2	赤川流域	石井浩幸 1992
21	越中山　D	2	2	2	1								1				〃東田川郡朝日村越中山中入	赤川流域	加藤　稔ほか 1982 加藤　稔　1992
22	越中山　E		1	2	2							2	1			有	〃　〃　〃　〃	赤川流域	〃
23	越中山　M	9	1		1	3											〃　〃　〃　〃	赤川流域	〃
24	越中山　S	79	6	10	17	4			○	○			2			有	〃　〃　〃　〃	赤川流域	加藤　稔 1992 石井浩幸 1987
25	越中山　S′	5		4	3	1				1		1	5			有	〃　〃　〃　〃	赤川流域	加藤・石井 1992
26	高坂杉ケ沢		1		○	○						○					山形県鶴岡市高坂120-6	庄内平野 南部丘陵	小野和彦 1976
27	宮山坂　F	9	1	1		2											山形県飽海郡遊佐町吉出金俣	鳥海山南麓 月光川流域	佐藤禎宏 1983
28	稲沢山		1														山形県寒河江市金谷稲沢山	最上川流域	加藤　稔ほか 1982
29	学壇	○	○	○	○	○						○	○			有	福島県福島市黒岩学壇	阿武隈川流域	佐藤・西村 1992
30	小石ケ浜		2	2	1	2											福島県会津若松市湊町笹山	猪苗代湖周辺	渡辺光一ほか 1979
31	谷地前　C		(1)	2		2	1					5				有	福島県西白河郡東村上野寺島	阿武隈川流域	福島県文化センター 1980
32	鶴師堂	4	2	10	4					○	○	1				有	福島県石川郡石川町中野	阿武隈川流域	福島県文化センター 1983

東北地方北部の細石刃文化

横山裕平

1　研究の経過

１９７０～　　岩手県大台野遺跡、地学団体研究会による調査。
　７３年

１９７７年　　青森県大平山元Ⅱ遺跡、青森県立郷土館による調査。

１９７８年　　青森県大平山元Ⅱ遺跡、青森県立郷土館による二次調査。

１９７９年　　青森県大平山元Ⅲ遺跡、青森県立郷土館による調査。

１９８０年　　青森県大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書刊行。大平山元技法の提唱、湧別技法の大平山元技法母体説（三宅）。舟底形石器製作技法の把握（横山）。

１９８１年　　秋田県下堤Ｄ遺跡、秋田市教育委員会による調査。

１９８９年　　青森県大平山元Ⅱ遺跡、蟹田町教育委員会による調査。

１９９０年　　秋田県鴨子台遺跡、秋田県埋蔵文化財センターによる調査。

2　遺跡の分布

東北地方北部は、細石刃文化遺跡の分布がきわめて希薄な地域である。全体的には、数遺跡が散在している、といった状況である。

とはいえ、削片系の細石刃文化遺跡は、頁岩の豊富な日本海側にある傾向にある。

遺跡を群的に把握できるのは、現在のところ大平山元地区のみである。

3　細石刃石器群

大平山元　　ホロカ技法による頁岩の船底形細石刃核・船底形石器をもつ石器群で、他
　Ⅱａ　　に木葉形尖頭器・彫器・削器がみられる。船底形細石刃核・船底形石器とも端部に被熱を伴った使用痕が認められ、細石刃もほとんどみられないことから両者とも石器として使用されたものと考えた。

大平山元　　湧別技法との関連が想定された頁岩の両面調整素材の石核（大平山元技法
　Ⅱｃ　　ｂ）のほかナイフ形石器・東内野型尖頭器・彫器・削器・掻器がみられる。

大平山元Ⅱ　1989年調査で４枚の文化層が確認された。そのうち第１文化層では、湧別
第１文化層　技法による稜付削片・スキー状削片がまとまって出土し、東内野型尖頭器・荒屋型彫器などを伴った。

大平山元　黒曜石の細石刃石核３点が表採されている。細石刃石核の黒曜石は深浦産
Ⅲａ　のものと考えられる。

下堤Ｄ　楔形の細石刃石核ブランク、細石刃・荒屋型彫器・削器・錐・スクレイパーで構成される削片系の細石刃石器群である。

４　細石刃文化の様相

ここでは、資料的に充実している大平山元遺跡について取り上げておく。

特に大平山元遺跡では、東内野型尖頭器を含み、湧別技法との関連が想定される両面調整品を含む石器群（第１文化層など）、ホロカ技法による船底形細石刃核を含む石器群（Ⅱａ）、いわゆる矢出川技法による黒曜石の細石刃石核を含む石器群（Ⅲａ）が存在しており、その出土層位や石器群の様相から以下のように編年される。

第１次調査	第２次調査	第３次調査	第４次調査
Ⅰ遺跡	Ⅱ遺跡	Ⅲ遺跡	Ⅱ遺跡
Ⅰ			
	Ⅱａ		
		Ⅲａ	
	Ⅱｂ		第１文化層
	Ⅱｃ		
		Ⅲｂ	
			第２文化層
			第３文化層
		Ⅲｃ	第４文化層

5　引用参考文献

青森県立郷土館　1980　『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

青森県立郷土館　1981　『大平山元Ⅲ遺跡発掘調査報告書』

秋田県埋蔵文化財センター　1992　『鴨子台遺跡発掘調査報告書』

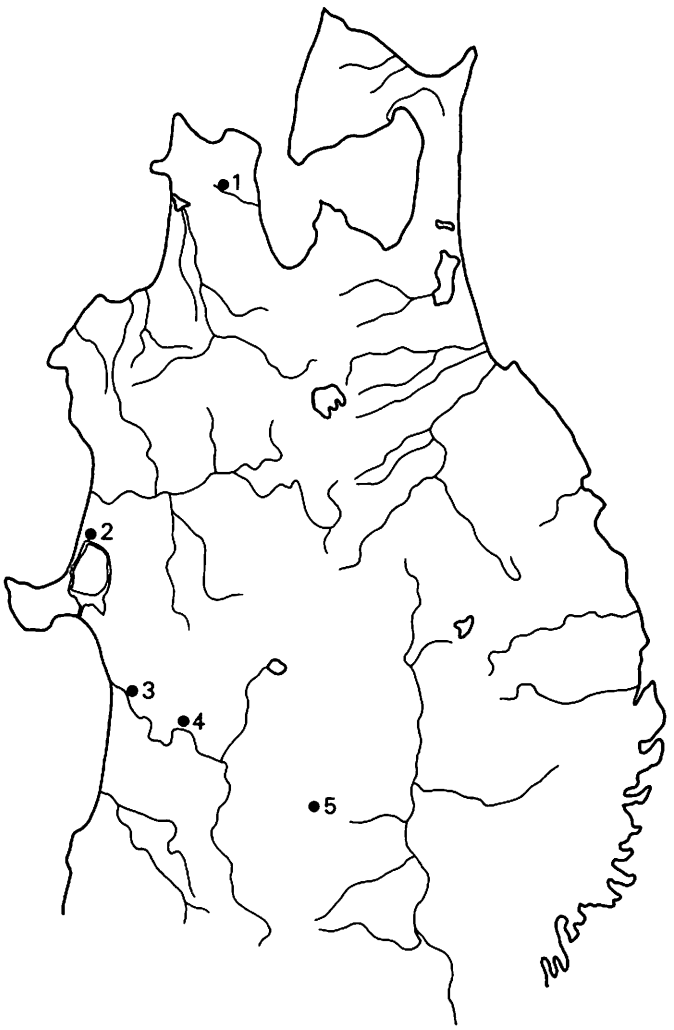
秋田市教育委員会　1982　『下堤D遺跡発掘調査報告書』

菊池強一　1975　「大台野遺跡」『日本の旧石器文化』第２巻

第 1 表　東北地方北部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	礫	土				
1	大平山元Ⅱa	13	10	10	1	5				1	1	3	4			有	青森県東津軽郡蟹田町大平字山元		
	大平山元Ⅱc	6	3	8	2	13				1	7	4	19			有			
	大平山元Ⅲa		3													有			黒曜石製
	大平山元Ⅲb		(1)	6		1								7		有			
2	下堤D	12	2	1		2	1					1				有	秋田県秋田市四ｹ 小屋小阿地字下堤		
3	米ｹ 森Bユニット	3	3			1						3				有	秋田県仙北郡協和町荒川字新田表		
4	鴨子台				2											有	秋田県山本郡八竜町鶴川鴨子台9 外		細石刃核製作削片出土
5	大台野Ⅰe	62	1		3											有	岩手県和賀郡湯田町68地割		頁岩主体，流紋岩，珪岩
6	大渡Ⅱ					1										有	〃　第57地割		荒屋型彫器

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝礫器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
礫＝石礫、土＝土器



1　青森県大平山元遺跡

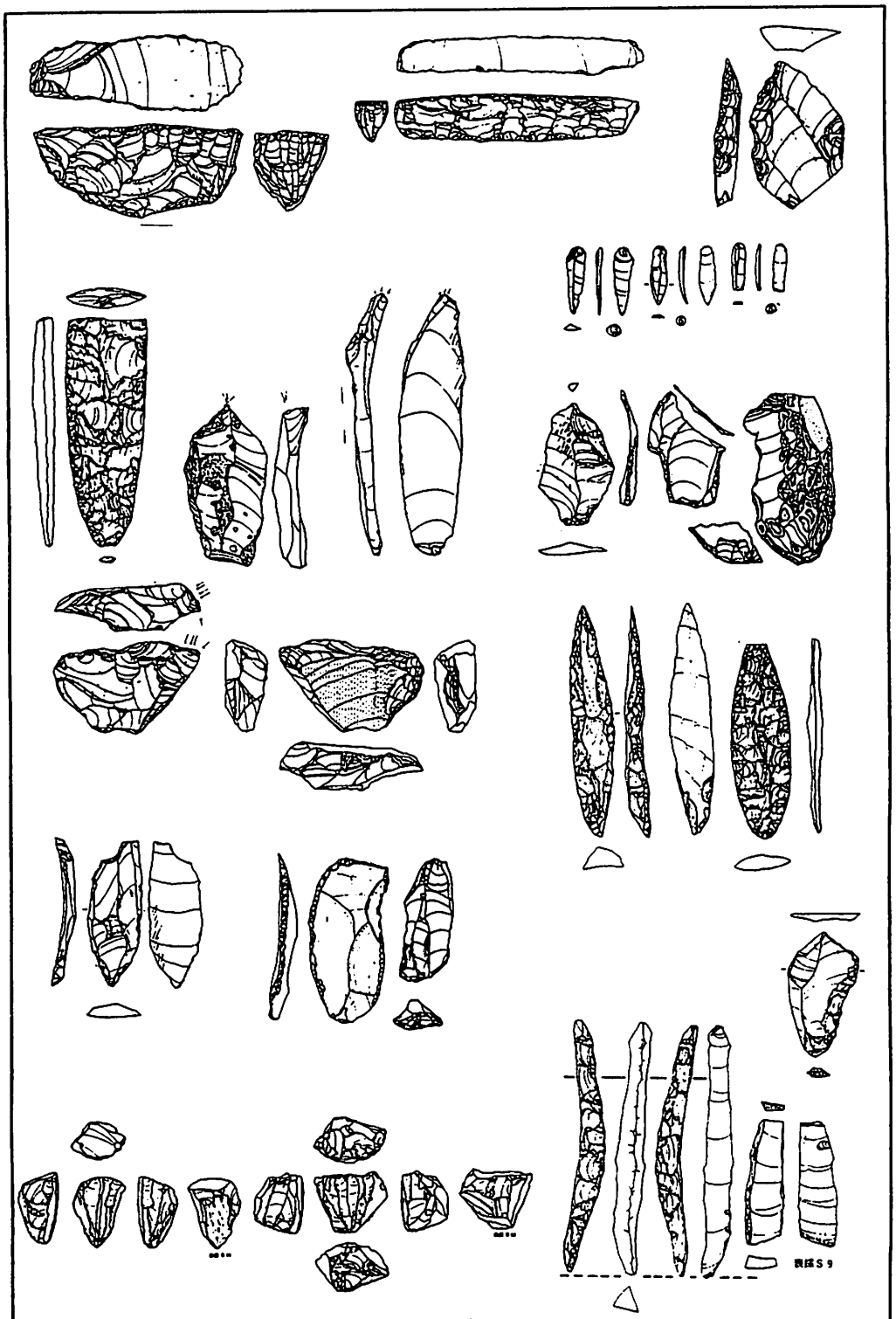
2　秋田県鴨子台遺跡

3　秋田県下堤D遺跡

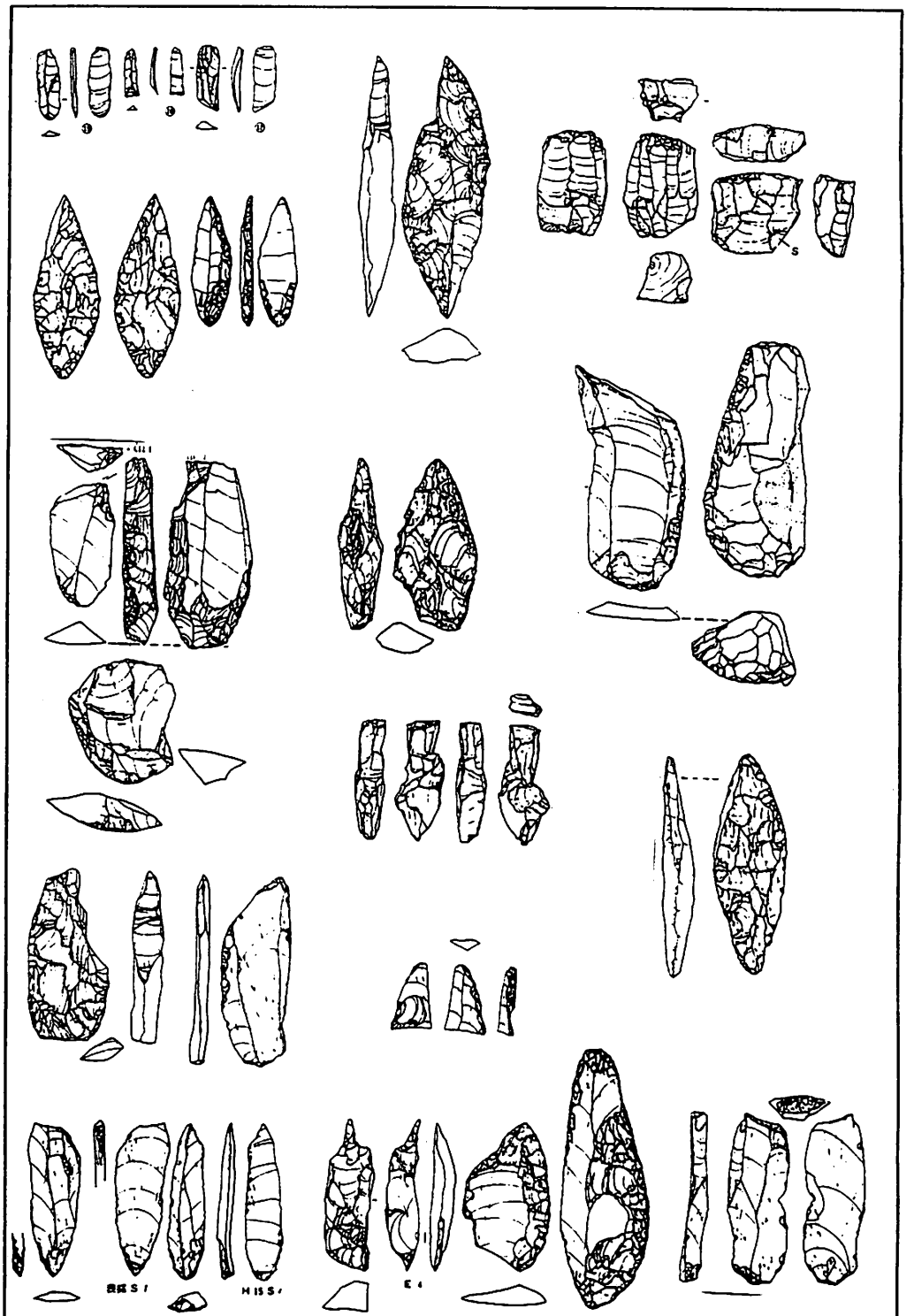
4　秋田県米ケ森遺跡

5　岩手県大台野遺跡

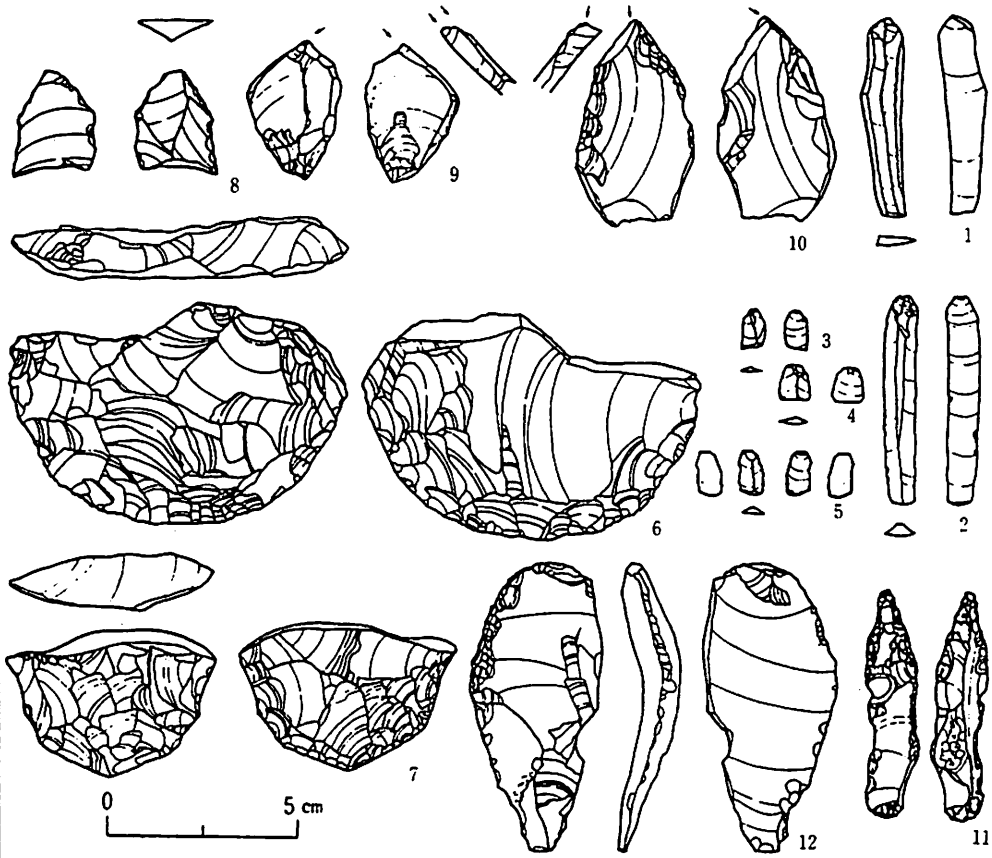
第1図　東北地方北部の細石刃文化遺跡



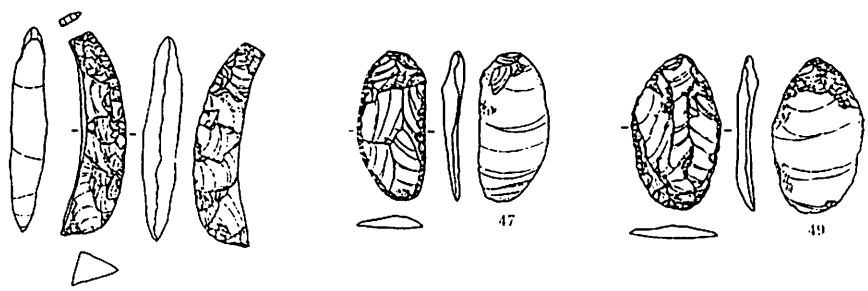
第２図　大平山元遺跡　Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅲａ



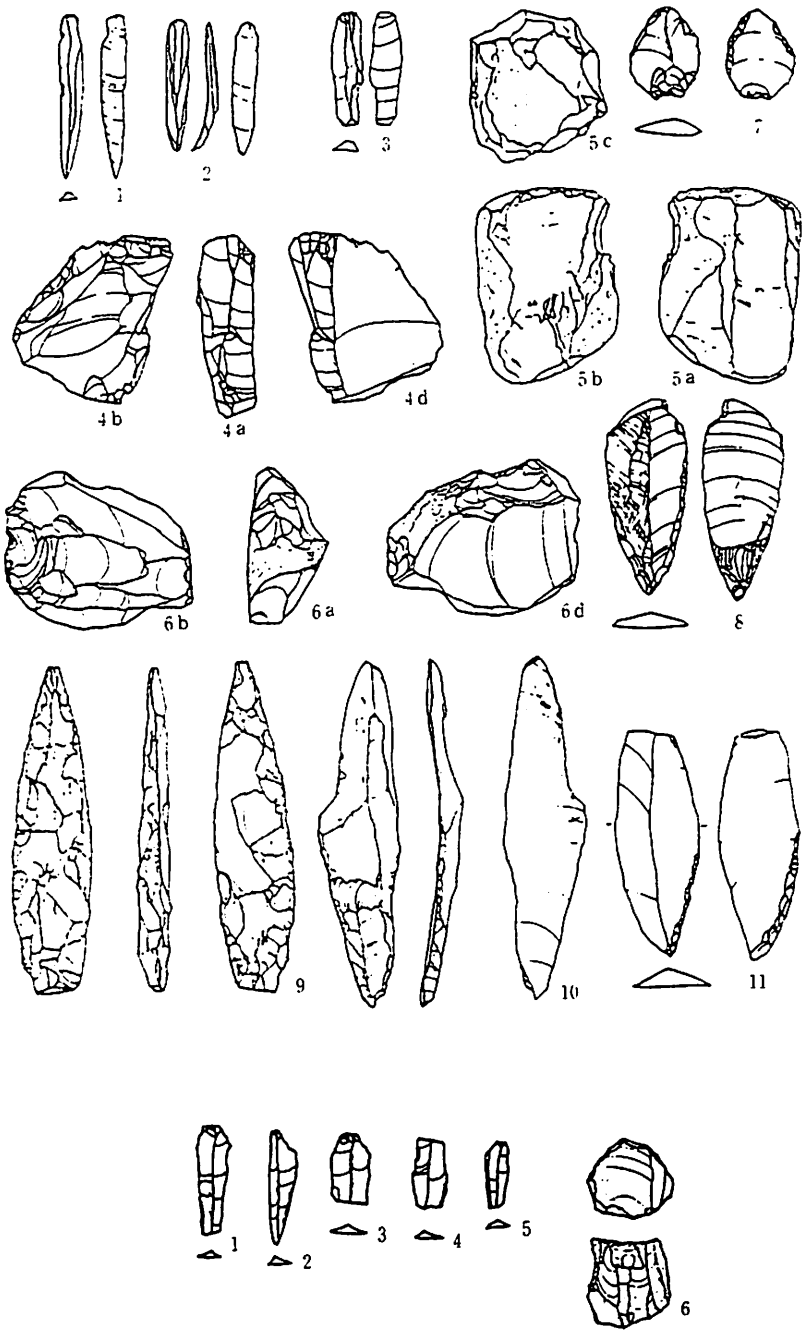
第３図　大平山元遺跡　Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅲａ



第４図　秋田県下堤Ｄ遺跡



第５図　秋田県鴨子台遺跡



第６図　秋田県米ケ森遺跡

北海道西部の細石刃文化

寺崎康史・長沼　孝

1　研究の経過

【A　道南】

美利河以前

（１９５４年　樽岸遺跡の調査：北海道の旧石器文化の本格的な調査研究のスタート）

※地域史研究としての調査・研究

１９５５年　西富遺跡の調査：道内初の細石器の確認（児玉・大場　1957）。

１９５９年　峠下遺跡の調査：峠下型・白滝型細石刃核の確認（名取・松下　1961a ）

※細石刃文化の確認、道内における旧石器の編年作業としての調査・研究。

１９５８　　立川遺跡の調査：立川ポイント、忍路子型・蘭越型・札滑型細石刃核、

・５９年　荒屋型彫器などの出土（吉崎　1960）。

１９６０　　上八雲遺跡群（トワルベツＡ・Ｂ、大関校庭など）の調査：峠下型細石刃

・６１年　核、尖頭器の出土、詳細不明（吉崎　1961など）。

１９７６年　都遺跡の調査：赤井川流域の分布調査、蘭越技法の検討

（上野・宮塚　1976、木村　1978）。

１９７７年　『立川』復刊、報告の訂正・補足、編年案の提示（吉崎　1977）。

※町内の分布調査

１９８１～８３年　ニセコ町内分布調査（篠原　1983）。

１９８８～８９年　今金町内分布調査（寺崎　1989）。

１９９０年　　黒松内町内分布調査（白石　1991）。

美利河以後

※開発に伴う調査、道南旧石器資料の充実

１９８３　　美利河１遺跡の調査：石器群の層位的確認、蘭越型細石刃核に伴う玉の発

・８４年　見、接合資料による細石刃剥離過程の復元・美利河技法の提唱・湧別技法

の再検討（長沼ほか　1985）。

１９８３年　湯の里４遺跡の調査：峠下型細石刃核と台形石器の出土、蘭越型細石刃石

核類似の石刃核の墓と垂飾・玉の発見ほか（畑ほか　1985）。

１９８６年　新道４遺跡の調査：接合資料による峠下・美利河技法の解明ほか（千葉ほか　1988）。

１９８６年　石川１遺跡の調査：湧別技法による細石刃核と彫器、削器、錐、尖頭器などの石器群の確認、遺跡の構造的分析の試み（長沼ほか　1988）。

１９９２年　大関校庭遺跡の調査：忍路子型細石刃核の確認（三浦・柴田　1993）。

１９９３年　神丘７遺跡の調査：湧別技法による細石刃核資料の追加。

【Ｂ　道央・道北】

※地域史研究・石器群把握としての調査研究

１９６０年～　山崎博信らによる天塩川上流、名寄・下川流域の旧石器文化の遺跡・遺物の調査・研究（山崎　1963·1964·1979a·b ほか）。

１９６０年　射的山遺跡の調査：広郷型細石刃核、有舌尖頭器などの出土（佐藤ほか　1961）。

１９７２年　祝梅上層遺跡の調査：道央初の旧石器時代遺跡の調査、忍路子型細石刃核荒屋型彫器、局部磨製石斧、有舌尖頭器などの出土（吉崎　1977ほか）。

１９８０年　日東遺跡の調査：広郷型細石刃核の単純遺跡、詳細不明（木村　1983）。

※開発に伴う調査

１９８１年　メボシ川２遺跡の調査：忍路子型細石刃核、局部磨製石斧、有舌尖頭器などの出土（田村　1983）。

１９８６年　嵐山２遺跡の調査：忍路子型細石刃核、尖頭器などの出土。（石川ほか　1987）

２　遺跡の分布

Ａ　渡島半島南部　主に津軽海峡に注ぐ河川の流域、現海岸線から数km内陸の地点に遺跡がある。湯の里４・新道４遺跡はともに頁岩の得られる地域に近い。現在のところ遺跡は点的な存在であり、石器群も共通性が少ない。

Ｂ　渡島半島北部　黒松内低地以南の朱太川・利別川・遊楽部川流域に遺跡がある。朱太川では未確認だが利別川・遊楽部川流域の遺跡は頁岩の採取できる小河川に近接している。美利河１はその範囲が16haにおよび、丘陵上に点々と石器の製作跡などがあり、石器群も多種多様である。また、美利河１は、上八雲遺跡群とは河川は異なるが、尾根筋では近距離で、峠下型細石刃核や各種の尖頭器類など石器群にも共通性がある。

C　尻別川流域　羊蹄山の北部と西南部に遺跡の集中域がある。本群は道南と道央・道東北をつなぐ部分に位置し、北部の峠下１遺跡では黒曜石が大半だが、西南部の立川１・西富遺跡では頁岩が多くなる。南西部は北海道における旧石器石材利用の黒曜石地帯と頁岩地帯の接点になっている。

D　余市川赤井川流域　赤井川カルデラ内と余市川左岸に遺跡がある。黒曜石原産地の遺跡群で、都遺跡は余市川と赤井川の合流点にある馬の背状の丘陵に位置する拠点的な遺跡である。

E　石狩低地帯　千歳市に集中し、他は単発的に分布する。千歳では古砂丘上に立地し、祝梅上層・メボシ川２遺跡ではいずれも恵庭ａ降下軽石の風化ローム層から忍路子型細石刃核に伴う良好な石器群が検出されている。

F　石狩川上流域　石狩川本流およびその支流に散発的に遺跡がある。大規模なものは確認されていないが、調査されている射的山・日東遺跡はいずれも広郷型細石刃核の遺跡である。

G　天塩川上流域　天塩川およびその支流である名寄川の流域に分布するが、下川町の名寄川の高位段丘に集中する。細石刃は黒曜石が主に利用されているが、他の石器類は周辺で採取できる珪岩の利用率が高い。

３　細石刃石器群

【Ａ　渡島半島南部】

湯の里４遺跡　平面分布を異にする二群の石器群が確認され、Ａ群は有舌尖頭器・尖頭器を中心とし、Ｂ群は峠下型細石刃核、細石刃、石錐、掻器、彫器などで構成される。Ｂ群からは台形石器が出土し、共伴する可能性が高い。

石材は頁岩が主体を占め、遺跡内出土のほとんどの黒曜石はＢ群のもので原産地分析の結果、十勝産75%、白滝産13%、赤井川産６％と判明した。距離的に最も近い赤井川産が少ないことが特徴的である。

新道４遺跡　石器群はブランクを含めると80点にのぼる細石刃核、細石刃、削器、掻器、彫器、石刃などで構成される。細石刃核およびそれに関わる調整剥片の量に比べ、石器の器種および点数が少ないことから細石刃核の製作跡と考えられる。細石刃核には、峠下型、幌加型に加え、美利河１遺跡で提唱された美利河技法によるものがある。豊富な接合資料により多くの新知見が得られたが、同一母岩の中に峠下型と美利河型が共存している例があり、両者が同一の技術体系により製作されたことが確認された。

石材は99.9%が頁岩、0.1 %が黒曜石で、黒曜石は赤井川産である。

石川1遺跡　7か所の石器集中ブロックがあり、細石刃が出土したのは3つのブロックである。細石刃核は2点、断面三角形の削片、スキー状の削片の接合資料から湧別技法によるものである。石器組成は上記の他に彫器、石錐、掻器削器、尖頭器、両面調整石器、ストーン・リタッチャーなどである。

石材は頁岩、めのう質頁岩、黒曜石、めのうなどで、黒曜石は白滝産のものが用いられている。

【B　渡島半島北部】

大関校庭遺跡　1992年の発掘調査では忍路子技法の細石刃核、細石刃核のブランク、尖頭器、石錐、掻器、削器、彫器がある。吉崎昌一氏らが1960年に発掘調査した地点に極く近いと思われるが、1960年の調査の詳細が不明のため、調査地点、石器群の内容などは比較できない。

石材はほとんどが頁岩製で、他に黒曜石、めのうが少量ある。

美利河1遺跡　複数の文化層が層位的にとらえられた、北海道にあっては希有な遺跡である。最下層は峠下技法による細石刃核、細石刃、彫器、石刃という単純な構成の石器群、中層は美利河技法による細石刃核、蘭越技法による細石刃核、彫器、削器、掻器、玉などの石器群、上層は広郷型細石刃核、有舌尖頭器、尖頭器、彫器、掻器などの石器群である。ただし、美利河技法による細石刃核の一群は新道4遺跡の例から、下層の峠下と密接なつながりがある。

石材は下層では頁岩のみだが、蘭越型細石刃核を中心とする中層では、頁岩に黒曜石が、さらに上層ではめのうが加わる。黒曜石の原産地分析の結果、多い順から赤井川、白滝、置戸、十勝産のものが利用されている。

【C　尻別川流域】

立川1遺跡　第Ⅰ、第Ⅱ地点より、細石刃核、細石刃が出土し、ともに忍路子技法による細石刃核が1点ずつあるので、両者を同一石器群として扱う。細石刃核には忍路子型の他に第Ⅰ地点からは蘭越技法によるもの、湧別技法による札滑型と思われるものがある。彫器、掻器、削器、石錐、舟底形石器、打製石斧、局部磨製石斧、第Ⅱ地点では有舌尖頭器が伴出している。

石材は頁岩が多く、ついで黒曜石、安山岩、めのうが用いられている。

峠下1遺跡　発掘調査による資料では峠下技法による細石刃核、彫器などがあり、初めて“峠下形彫刻器”としてその特異な形態が注意された。また、もう一つ

の重要な点は、白滝型細石刃核がまとまって表採されたことである。白滝型細石刃核は近隣の瑞穂遺跡からも採集されている。

石材は表採資料を含め、黒曜石が圧倒的に多く、頁岩、めのうが若干用いられている。黒曜石は肉眼観察ではあるが、赤井川産が多く、白滝産が極く少量含まれるようだ。

【D　余市川・赤井川流域】

都遺跡　蘭越技法による細石刃核、彫器、掻器などがある。蘭越型細石刃核は吉崎昌一が立川１遺跡の細石刃核により型式設定したが、本遺跡の調査において、その技術的解明がなされた。

石材は赤井川産の黒曜石が大半を占め、彫器に頁岩が用いられてる。

また、表採資料には峠下型細石刃核、有舌尖頭器なども見られる。

【E　石狩低地帯】

メボシ川２遺跡　ユニットＤを除く３つの集中地点から細石刃石器群が発見された。細石刃核はいずれも忍路子技法によるもので、報告書中峠下型とされた１例は忍路子型細石刃核の打面に横位調整を施したものと思われる。石器組成は有舌尖頭器、掻器、削器、彫器、石錐、局部磨製石斧などで、近隣する祝梅上層遺跡の組成と非常に類似している。

石斧に泥岩、石器の一部に頁岩があるが、黒曜石が主要石材である。

【F　石狩川上流域】

嵐山２遺跡　忍路子技法による細石刃核、尖頭器、彫器、掻器、削器、舟底型石器などがある。尖頭器はかえしの弱い舌部を持つ両面または反両面加工である。

石材は彫器に頁岩、チャートが用いられている他はすべて黒曜石である。

黒曜石は白滝、置戸、赤井川あるいは十勝三股産で、他に極く少量であるが地元の近文台産のものが利用されている。

射的山遺跡　広郷型細石刃核、有舌尖頭器、掻器、削器などが伴出しているが、細石刃は出土していない。

石材は黒曜石、頁岩などが用いられている。

【G　天塩川上流域】

日進２遺跡　1964年（第１次）と1986年（第２次）の２度にわたり調査されている。第１次では湧別技法の存在を示すスキー状削片、彫器、掻器が出土し、表採ではあるが白滝型細石刃核、蘭越型（？）細石刃核が得られている。

第２次では細石刃、有舌尖頭器、彫器、掻器、石錐、磨製石斧が出土した

が細石刃核は出土していない。

石材は黒曜石、珪岩が半々である。黒曜石では白滝産が７割、赤井川、置戸、十勝産が各１割で、名寄産のものも少量ながら利用されている。

桜ケ丘遺跡　峠下技法による細石刃核、細石刃、掻器、彫器、舟底型石器などがある。石材は珪岩が圧倒的に多く、他には黒曜石、頁岩、玄武岩、粘板岩の順で利用されている。

４　細石刃文化の様相

美利河１遺跡の発掘調査によって得られた層位的事例をもとに、北海道西部の細石刃文化の様相を概観してみたい。

美利河１遺跡では峠下技法による細石刃石器群が最も下層から出土することが確認されている。峠下技法による細石刃核が出土した遺跡としては、湯の里４遺跡Ｂ群、新道４遺跡、上八雲１（トワルベツＢ地点）、峠下１遺跡、桜ケ丘遺跡などがあり、また、目名５遺跡、都遺跡、天瑞寺裏遺跡、モサンル遺跡などから表面採集されており、北海道西部はもとより北海道全域に広く分布する。湯の里４遺跡Ｂ群では細石刃核の素材はすべて石刃あるいは剥片が用いられているのに対して、美利河下層、新道４遺跡では、石刃、剥片素材以外に、一見して両面加工石器を素材と思われるものが含まれている。新道４遺跡における接合資料から、これらは剥片剥離が進んだ核が楔形に調整されたものであることが明らかにされた。打面再生と甲板面および下縁からの側方調整が頻繁に繰返される点、時として横位の打面調整が施される点などから美利河技法によるものと理解されている（千葉 1988）。美利河ⅡＡとされた石器群は、美利河技法の工程を示す接合資料４点のみで構成されるが、新道４遺跡の峠下型細石刃核と美利河技法による細石刃核の共存の在り方からみて、美利河ⅡＡは美利河Ⅰに含まれる可能性がある（千葉　1990）。

このように考えると、峠下技法による細石刃石器群には、湯の里４遺跡Ｂ群のように峠下型細石刃核のみから細石刃を生産する一群と、峠下型と美利河技法による細石刃核が複合するものとの二者があるようだ。この二者が前後関係にあるものか、単に細石刃核の残され方の違いによるものかはより詳細な検討を要する。

美利河中層（ⅡＢ）は蘭越技法による細石刃核に代表される石器群である。類持する石器群としては、立川１遺跡、西富遺跡、都遺跡などがあり、蘭越型細石刃核が表採されている遺跡としては富里Ｂ遺跡、旭岡１遺跡、日進２遺跡などがある。尻別川および余市川・赤井川流域に集中する傾向がある。

美利河上層からは、広郷型細石刃核、有舌尖頭器、尖頭器に代表される石器群が確認さ

れている。広郷型細石刃核は射的山遺跡、日東遺跡などで出土し、母子里３遺跡、高瀬遺跡などで採集されている。分布の中心は道東北部にありそうで、射的山遺跡では有舌尖頭器が伴出している。

美利河１遺跡での層位的事実から、①峠下型＋美利河型 ➡ ②蘭越型 ➡ ③広郷型という細石刃核の変遷がとらえられた訳であるが、北海道地方には前記の他に、湧別技法による白滝型、札滑型、忍路子技法による忍路子型、幌加技法による幌加型の細石刃核、円錐形細石刃核が知られている。これらの様相はどうであろうか。

湧別技法による細石刃核を出土した遺跡には、石川１遺跡、峠下１遺跡（表採）、学校平遺跡（表採）、瑞穂遺跡（表採）、Ｓ３５４遺跡、旭岡１遺跡、北瑛遺跡、日進２遺跡（表採）、モサンル遺跡（表採）などがある。

美利河技法と湧別技法の技術的差異は、ブランクの調整・形状の相違や断面三角形の一次削片の有無であるが、両者は年代的にそれ程隔たりがないと考えられる。湧別技法による細石刃石器群は①に並行するか、後続するものとして位置付けられる。

忍路子技法による細石刃核は大関校庭遺跡、祝梅上層遺跡、メボシ川２遺跡、嵐山２遺跡においてまとまって確認されており、立川１遺跡では蘭越型細石刃核と共存している。大関校庭遺跡を除く各遺跡では有舌尖頭器を伴出しており、祝梅上層、メボシ川２、立川１遺跡では局部磨製石斧が伴っている。これらの石器群は、有舌尖頭器、局部磨製石斧の存在から年代的に③に近いものと考えられる。

幌加型および円錐形の細石刃核は単独で細石刃石器群を構成することがなく、幌加型は湯の里４、新道４、富里Ｂ、峠下１（表採）、高瀬（表採）などの各遺跡でみられる。円錐形細石刃核、昆布西１、峠下１、北町Ｃ遺跡において各１例採集されているにすぎないこれらの編年的位置付けを行なうには資料が少なく、不明といわざるを得ない。

細石刃石器群以前の石器群としては、千歳市祝梅三角山地点、同市丸子山遺跡、苫小牧市美沢１遺跡があり、いずれも恵庭ａ降下軽石層下位の褐色ローム質粘土層に遺物が包含されている。祝梅三角山ではナイフ形石器、スクレイパーなど、丸子山遺跡では掻器、美沢１遺跡では尖頭器様石器、スクレイパーなどが確認されている。絶対年代では祝梅三角山で 21000年B.P.（黒曜石水和層年代）、美沢１遺跡で 18500±1000年B.P.（黒曜石水和層年代）という数値が出されている。道南地方では函館市桔梗２遺跡があり、剥片剥離技術、ナイフ形石器の形態から祝梅三角山に近いものと考えられる。また、今金町神丘２遺跡では、広郷型ナイフ形石器、基部加工のナイフ形石器が出土し、これらの石器群と細石刃石器群との空白を埋める石器群と考えられる。

5　細石刃文化研究の課題

【層位的検出例の増加】　道東北部に比べ、ローム層の堆積が厚い道南部は十勝地方と並んで、美利河１遺跡のような層位的発見が期待できる。同時にローム層中のテフラについてもその検出に努める必要がある。

【細石刃剥離技術の解明】　北海道の旧石器文化研究においては、遺物の個体別・母岩別分類および接合作業は、後れ馳せながら美利河以後行われるようになった。この有効性は美利河１、新道４、石川１遺跡の分析をみれば明らかであり、この方法が定着することにより細部にわたる細石刃技術の解明がなされる。特に美利河技法による場合は残骸の形状からでは判断しがたい。

【石器組成の問題】　細石刃石器群を構成する主な器種である彫器、掻器などは４で概観した段階ごとにある程度の特徴がみられる。しかし、単体では編年などの決め手とするのは難しいので、良好な石器群の把握に努める必要がある。

【剥片剥離技術の検討】　接合資料の検討を中心に、さらに細石刃核や各種石器の素材や石核・調整剥片の検討を通して各細石刃石器群の剥片剥離の技術体系を明らかにして、より広い観点から細石刃剥離技術をとらていく必要がある。

6　主要文献

石川　朗ほか　1987　『嵐山２遺跡』　（財）北海道埋蔵文化財調査報告（以下北埋調報と略す）第40集

上野秀一・宮塚義人　1976　「北海道余市郡赤井村都遺跡出土の石器について」『北海道考古学』12

上野秀一・宮塚義人　1981　『モンサル』　下川町教育委員会

上野秀一ほか　1982　『札幌市文化財調査報告書XIV』　札幌市教育委員会

氏家敏文　1984　「名寄市朝日１遺跡出土の遺物～朝日平間地点～」『道北文化研究』13

氏家敏文ほか　1986　『桜ケ丘遺跡』　下川町教育委員会

大沼忠春　1985　『北町地区の遺跡』　下川町教育委員会

木村アヤ子　1975　「桧山郡厚沢部町の表採資料について」　『桧山考古学学会誌』4

木村英明　1978　「余市川・赤井川流域の先土器石器群について」　『北海道考古学』14

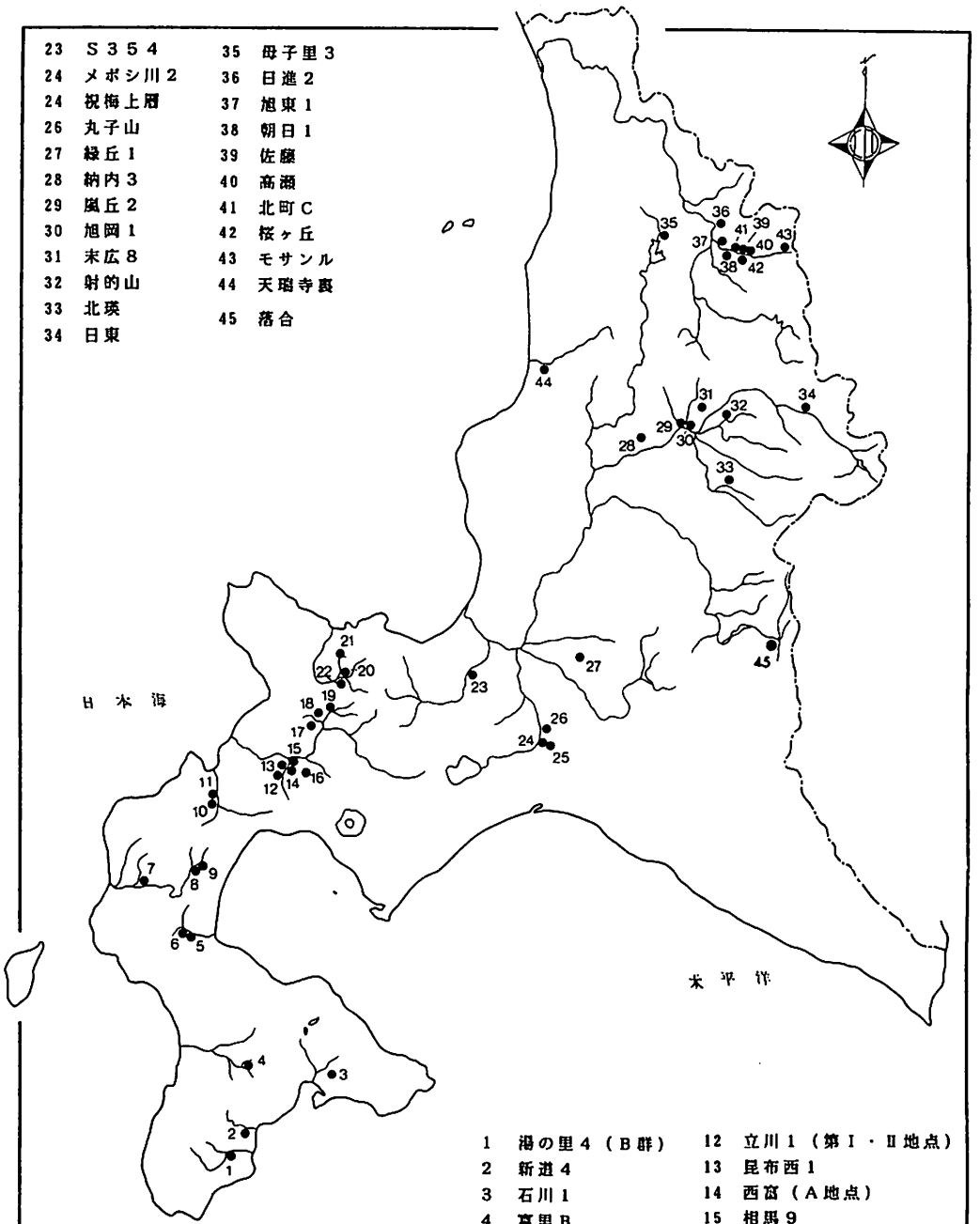
木村英明　1983　「細石器（北海道地方）」　『季刊考古学』4

児玉作左衛門・木場利夫　1957　『狩太遺跡』　狩太町教育委員会

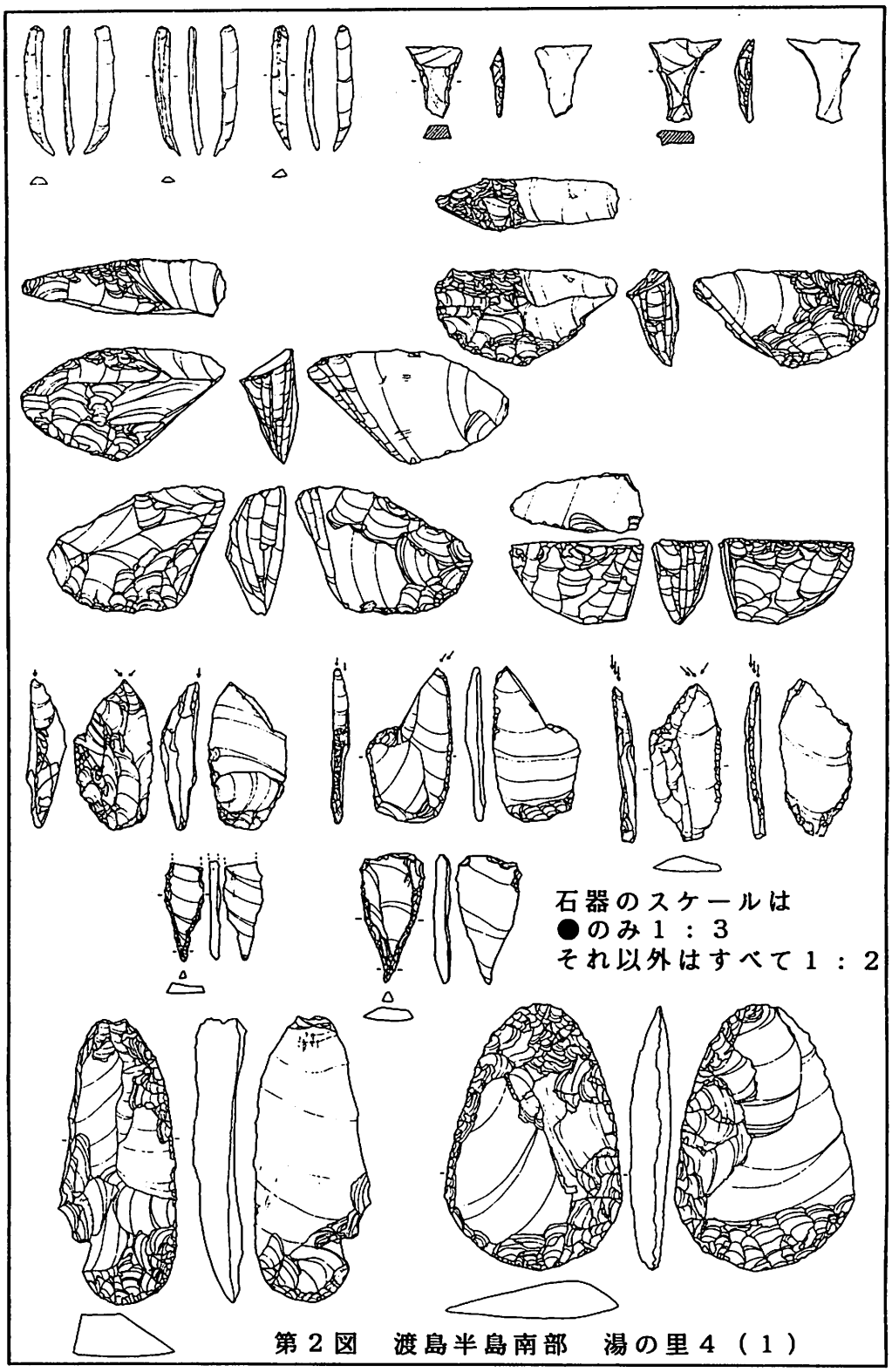
斎藤武一・清杉久義　1958　「旭川市旭ケ丘遺跡発見の無土器文化」　『郷土の科学』22

斎藤武一　1960　「美瑛町北瑛発見の船底形石器について」

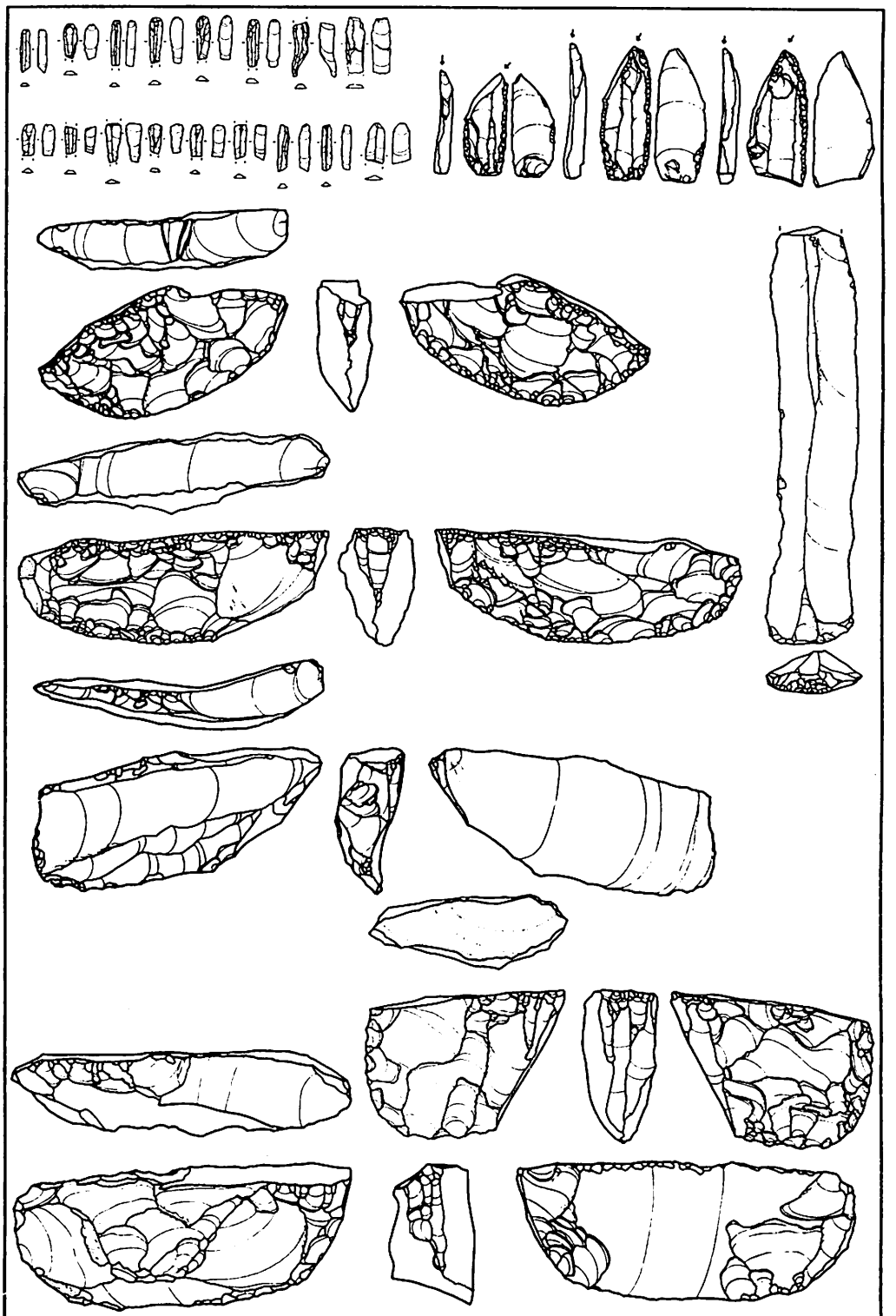
『あけぼの』旭川商業高校　郷土部ノート2
佐藤忠雄・野田武夫　1961　『射的山』　永山町教育委員会
篠原忠男　1983　『ニセコ町内遺跡分布調査報告書』Ⅱ　ニセコ町教育委員会
白石典之　1991　『黒松内町の遺跡』　黒松内町教育委員会
鈴木邦輝　1988　『名寄市日進2 遺跡・日進31遺跡』　名寄市教育委員会
高橋稀一　1969　「富良野盆地の先史」　『富良野地方史』
田村俊之　1983　『メボシ川2 遺跡における考古学的調査』　千歳市教育委員会
千葉英一　1981　「石狩低地帯における旧石器文化」　『北海道考古学』17
千葉英一ほか　1988　『新道4 遺跡』　北埋調報52
千葉英一ほか　1989　『納内3 遺跡』　北埋調報60
千葉英一　1990　「事例報告木古内町新道4 遺跡の石器群について」『北海道考古学』26
寺崎康史　1989　『今金町の遺跡』　今金町教育委員会
長沼　孝　1985　『美利川1 遺跡』　北埋調報23
長沼　孝　1988　『石川1 遺跡』　北埋調報45
名取武光・松下　亘　1961a　『峠下遺跡』　倶知安町教育委員会
名取武光・松下　亘　1961b　「倶知安町の遺跡と先住民」　『倶知安町史』
野村　崇　1977　「旧石器時代の文化」　『石狩川中流域の先史遺跡』
畑　宏明ほか　1985　『湯の里遺跡群』　北埋調報18
福士廣志　1991　「小平町天瑞寺裏遺跡出土の峠下型細石核」
『留萌市のふるさと館　紀要』2
松橋純吉ほか　1972　「厚沢部町富里Ｂ遺跡採集の無土器の遺物」
『桧山考古学会　会誌』1
三浦孝一・柴田信一　1993　『大関校庭遺跡』　八雲町教育委員会
山崎博信　1963　「北海道名寄市旭東南出地点の遺跡」　『道北文化研究』3
山崎博信　1964　『名寄日進遺跡篠原地点』　名寄市立図書館
山崎博信　1979a　『モンサル遺跡』　下川町教育委員会
山崎博信　1979b　「北海道北部における旧石器時代遺跡の集成序論」
『考古学ジャーナル』167
吉崎昌一　1960　『立川』　市立函館博物館
吉崎昌一　1961　「白滝遺跡と北海道の無土器文化」　『民族学研究』26-1
吉崎昌一　1977　「立川以後」　『立川』　（復刻）所収



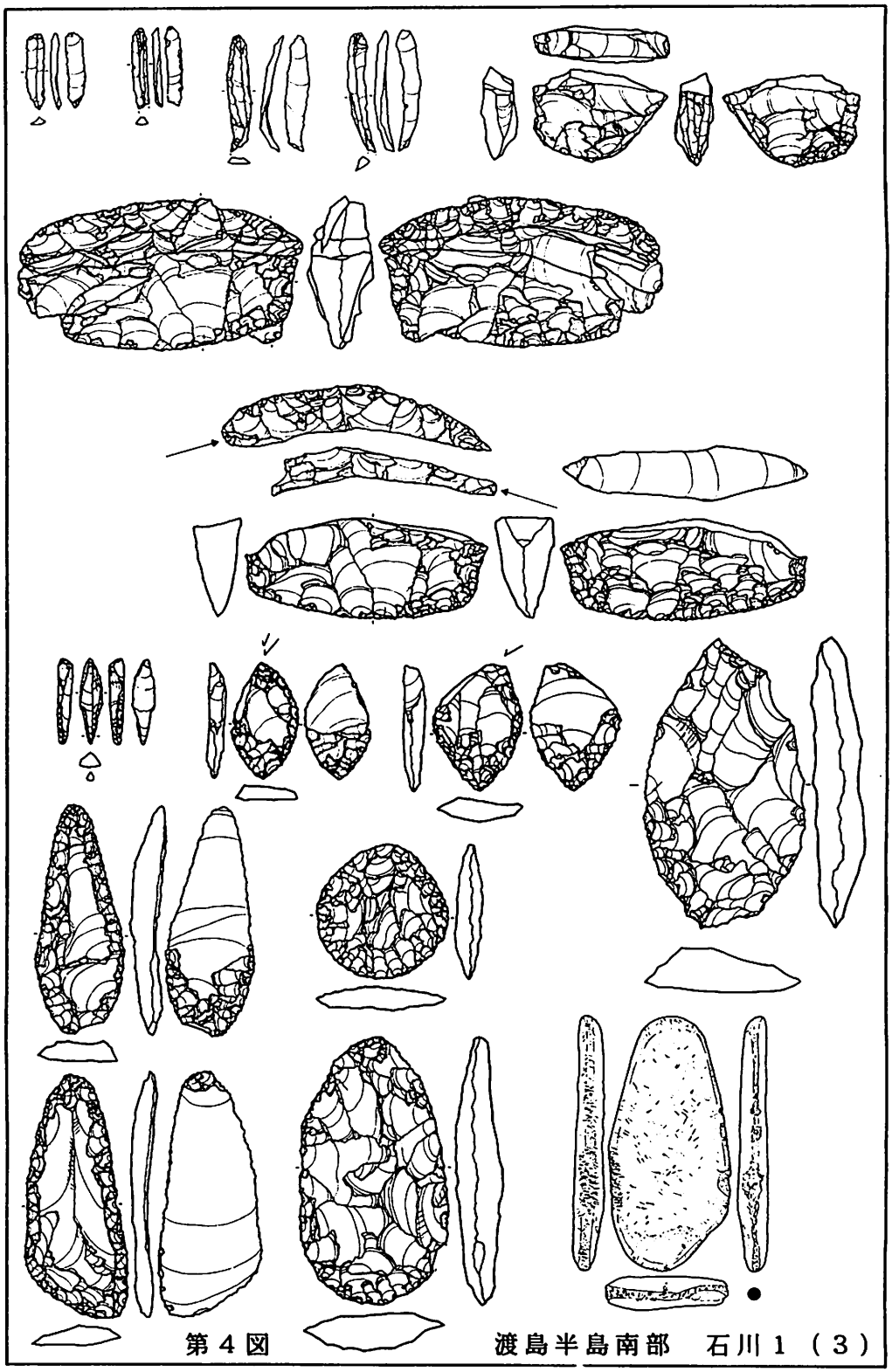
第1図　北海道西部における細石刃文化の遺跡分布



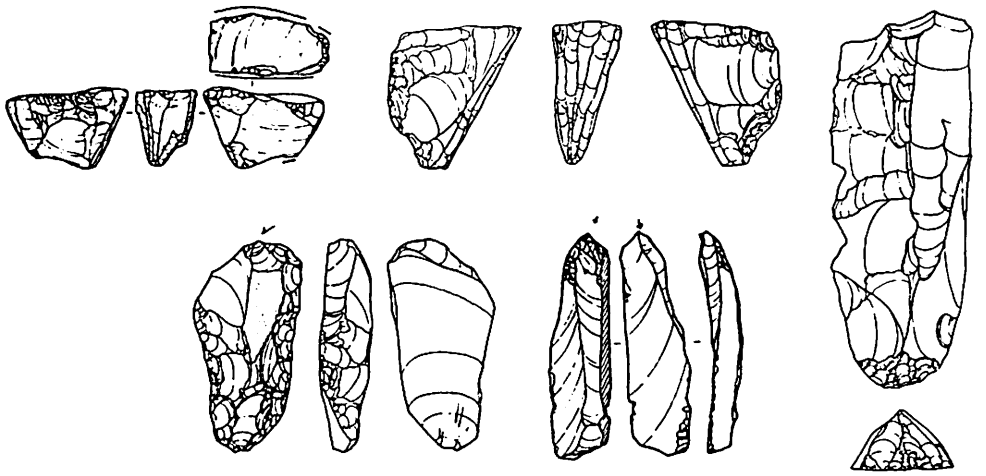
第２図　渡島半島南部　湯の里４（１）



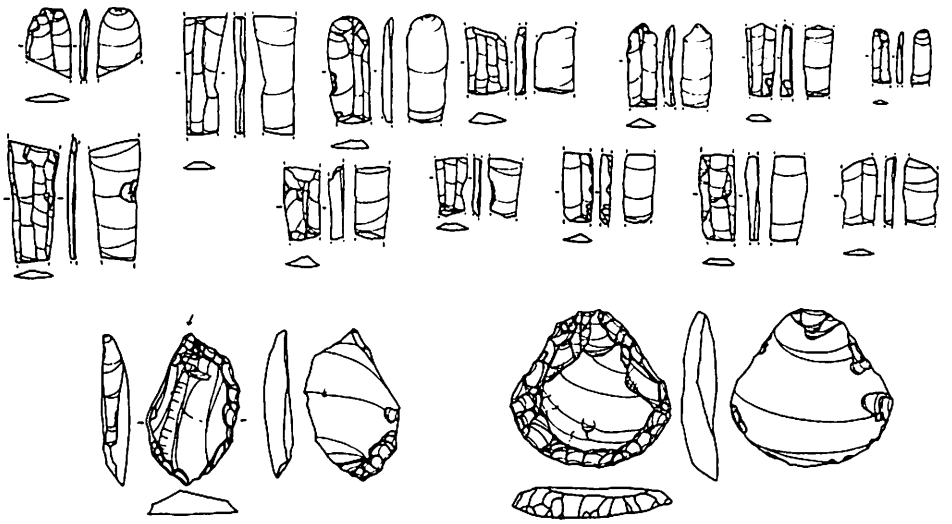
第３図　渡島半島南部　新道４（２）



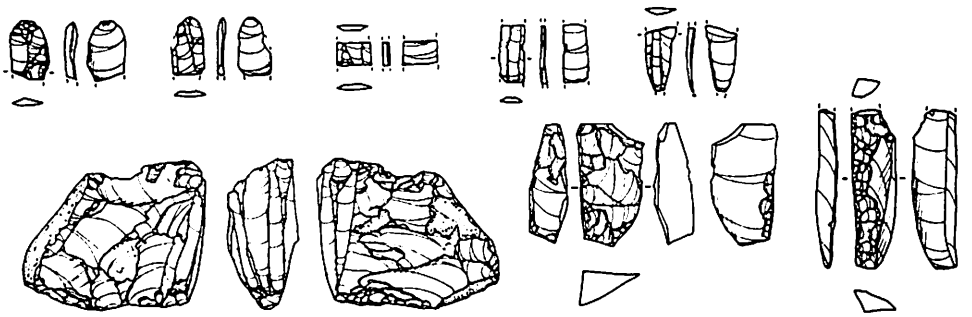
第４図　　渡島半島南部　石川１（３）



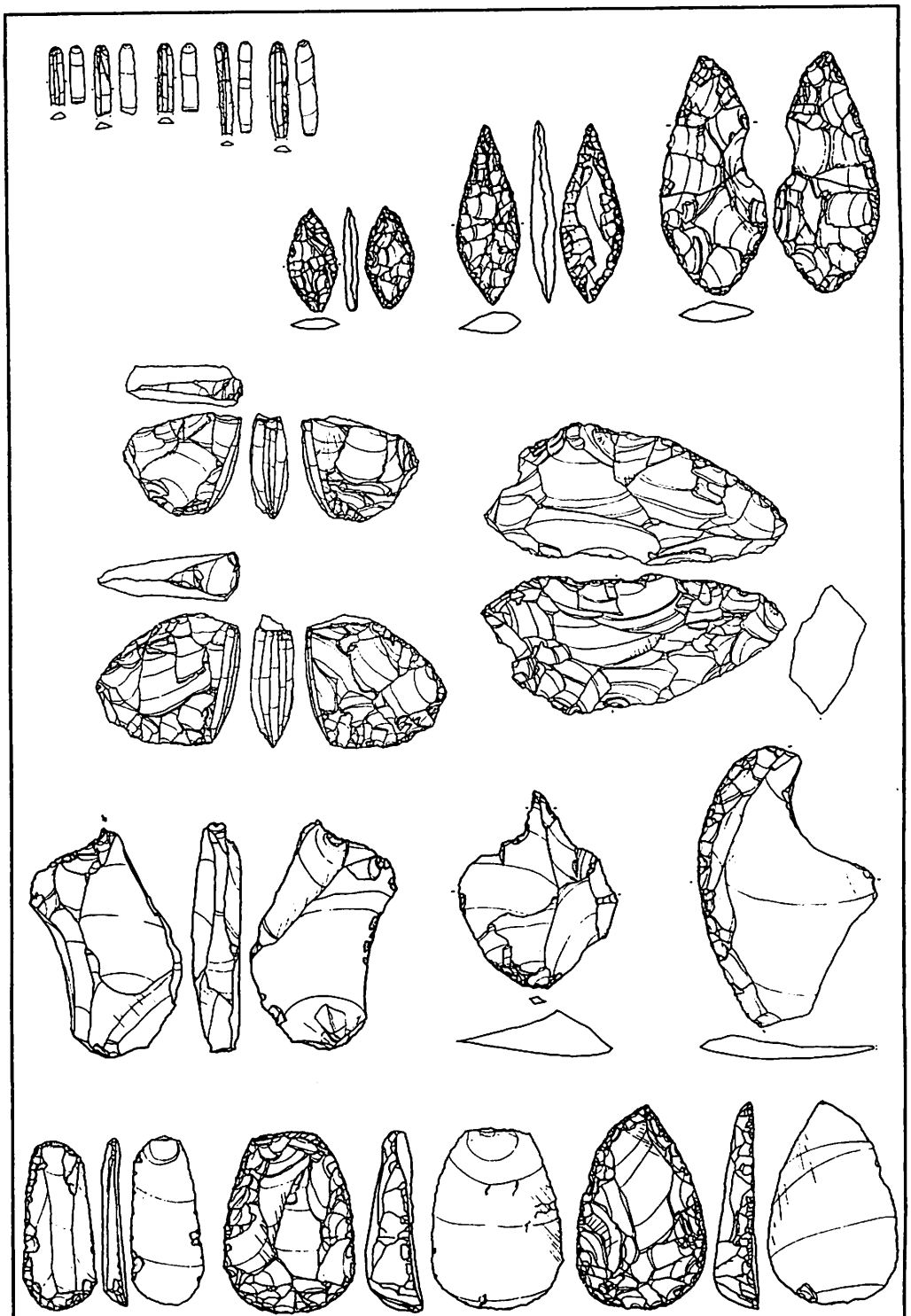
第５図　渡島半島北部　富里Ｂ（４）



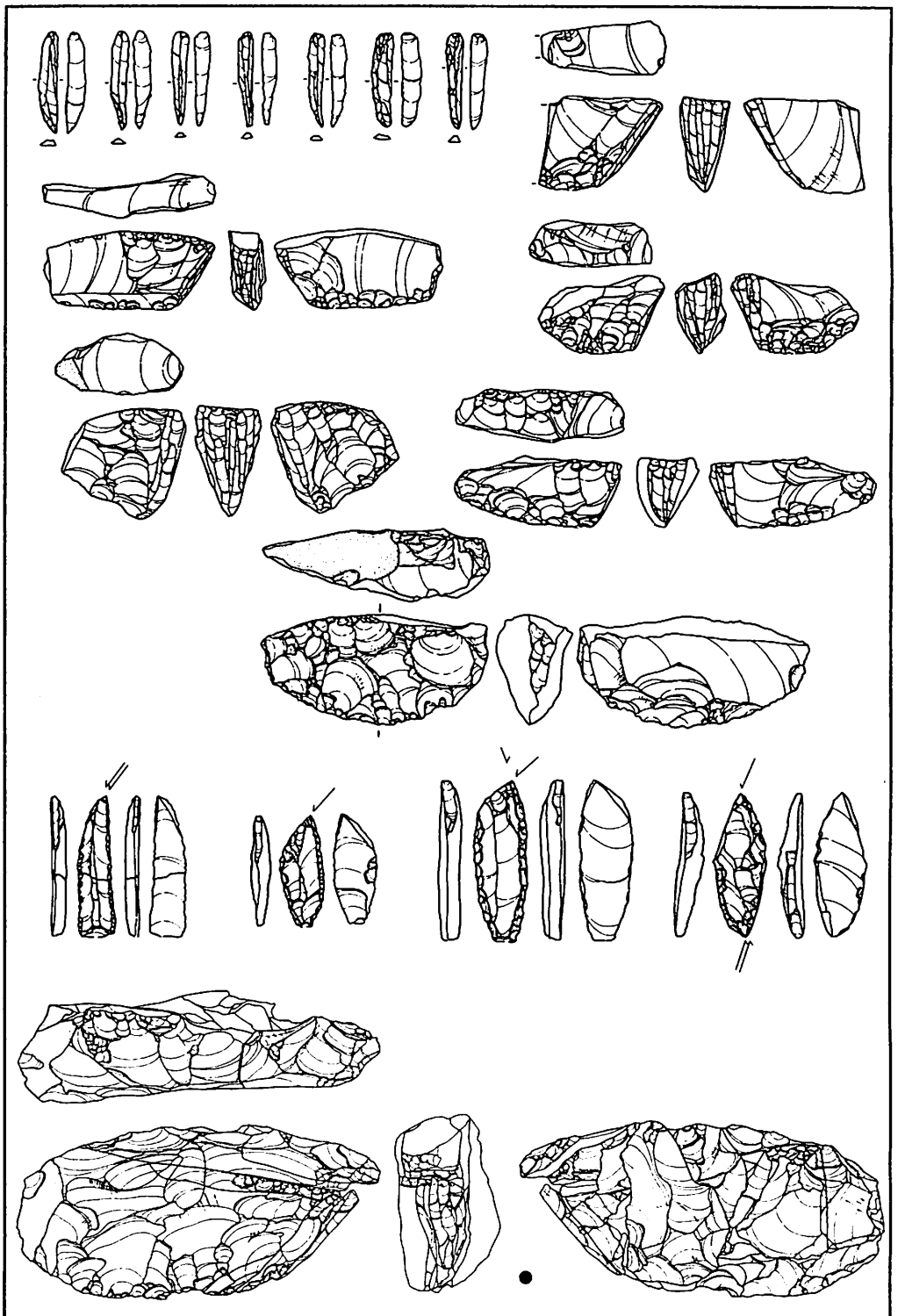
第６図　渡島半島北部　名目２（10）



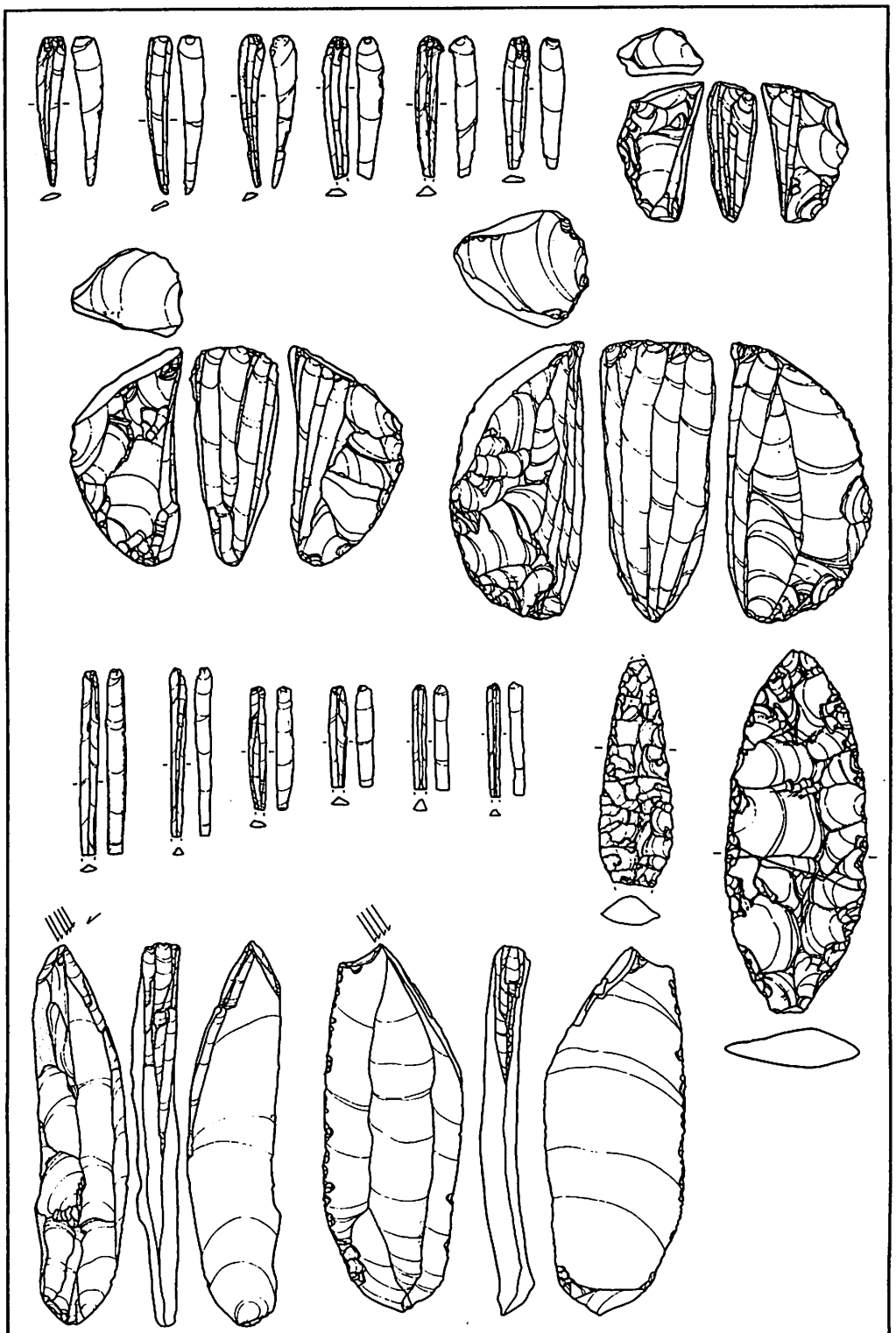
第７図　渡島半島北部　名目５（11）



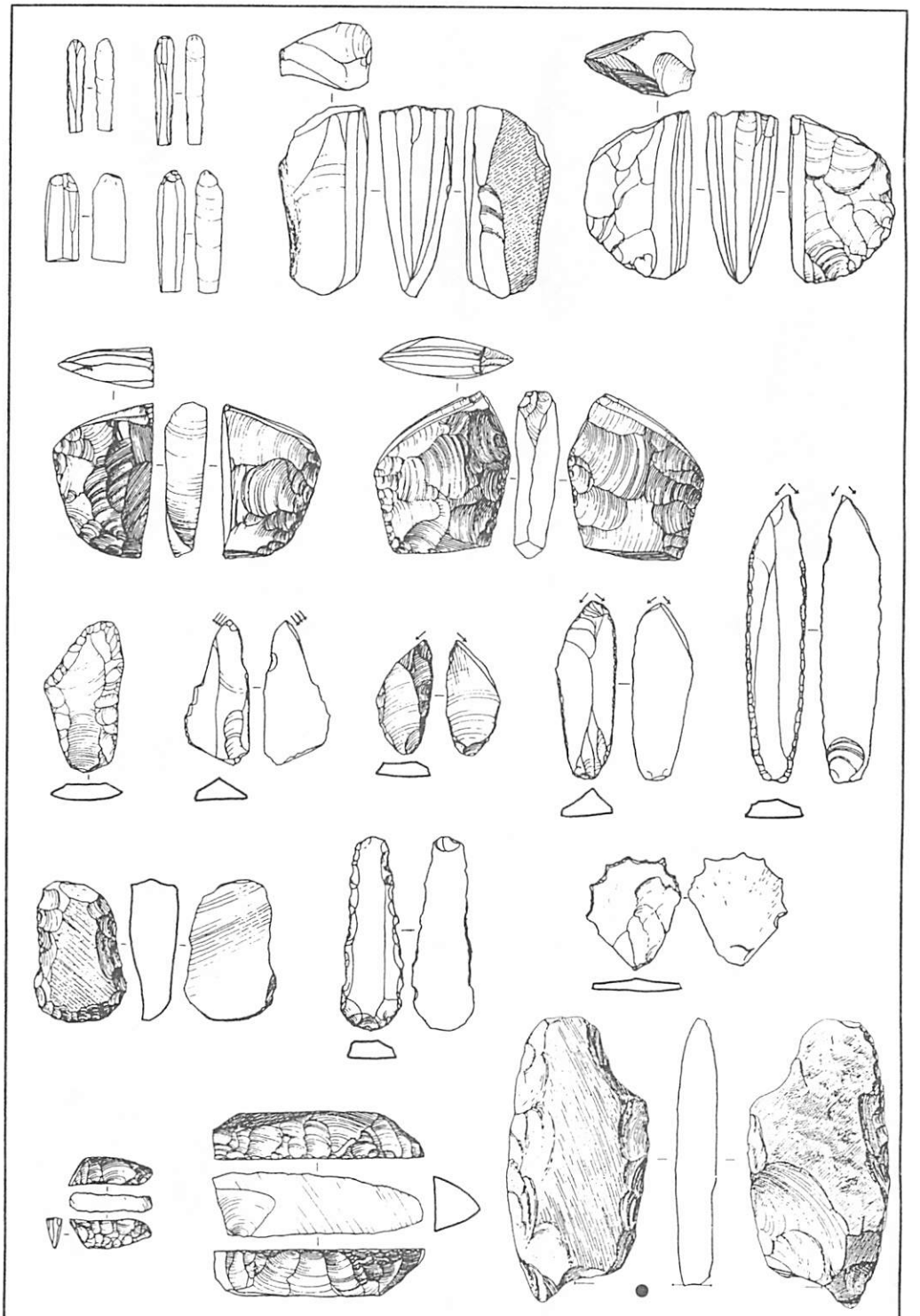
第８図　渡島半島北部　大関校庭（５）



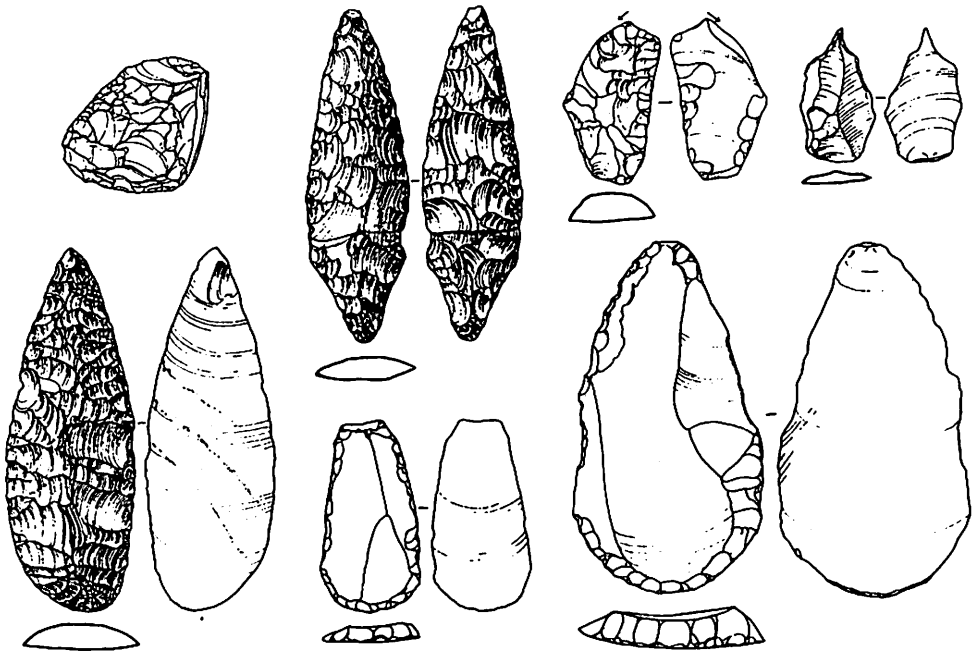
第９図　渡島半島北部　美利河１（８）



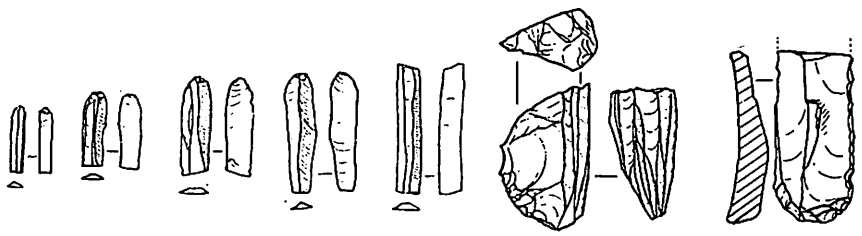
第10図　渡島半島北部　美利河１（８）



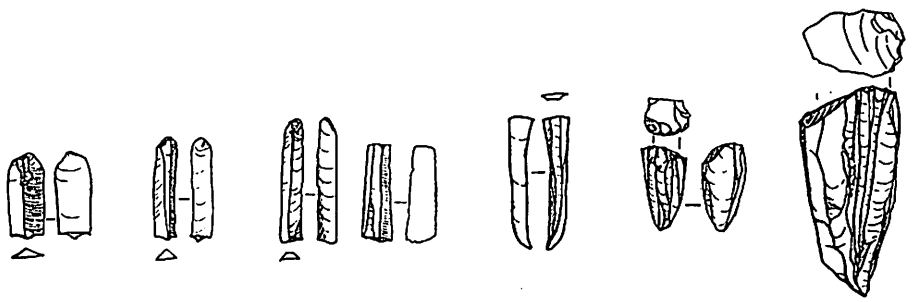
第11図　尻別川流域　立川１（第Ⅰ）（12）



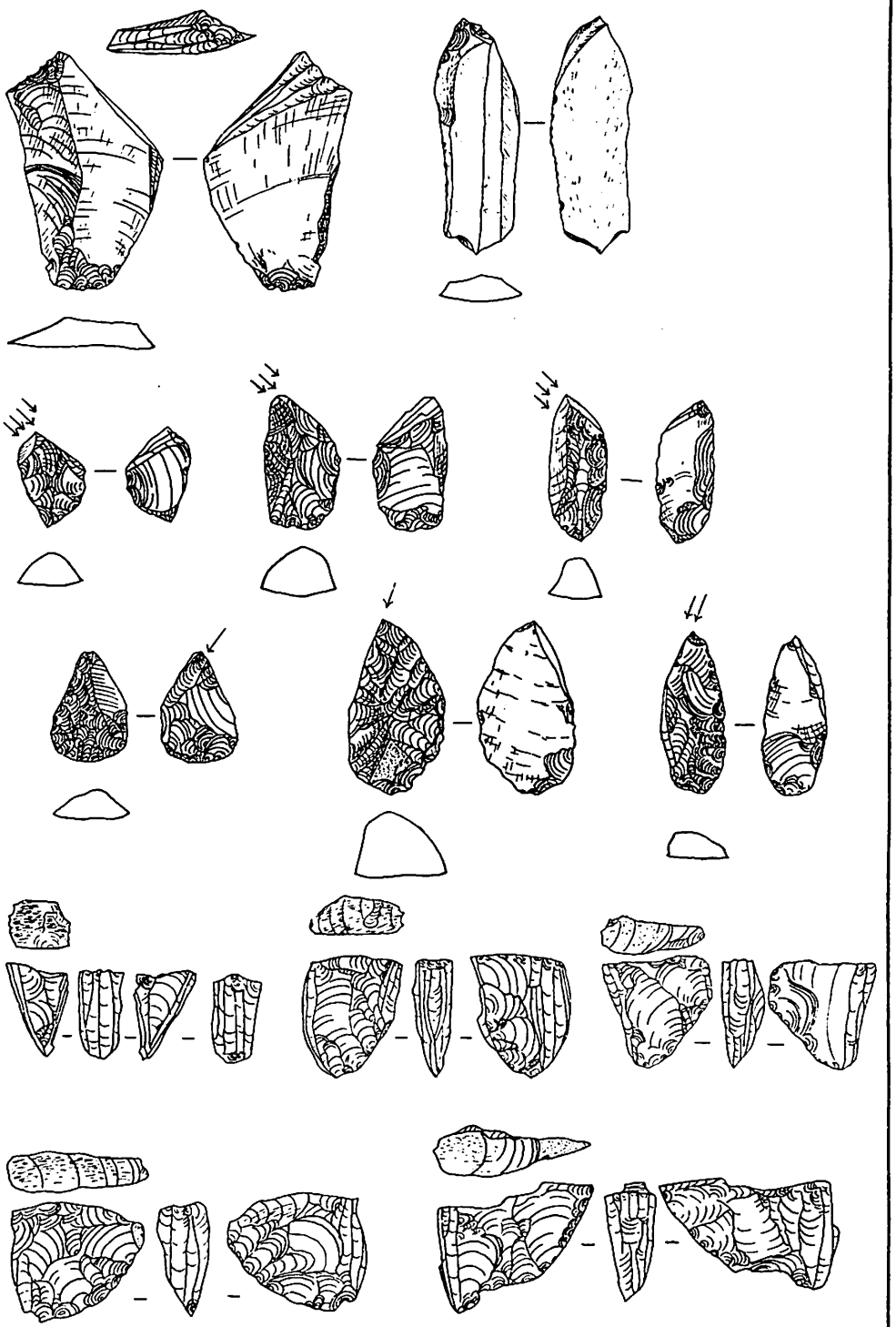
第12図　尻別川流域　立川１（第Ⅱ）（12）



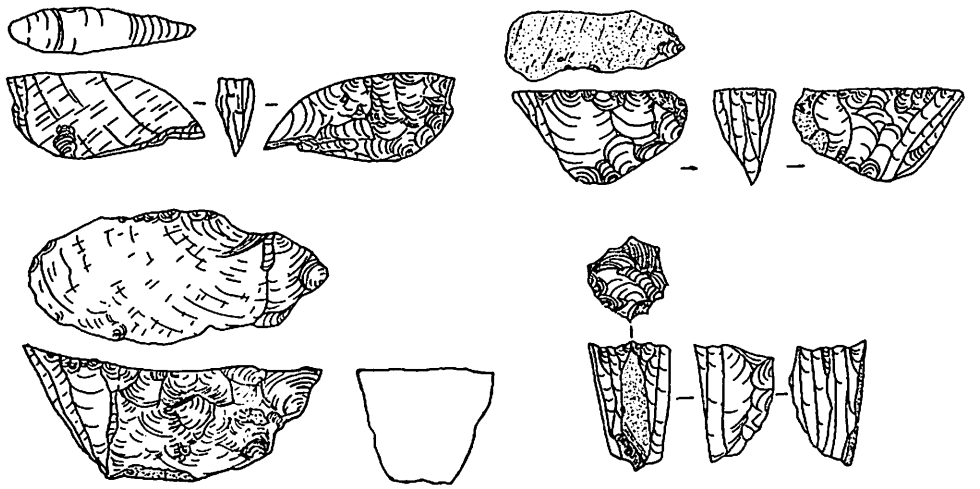
第13図　尻別川流域　西富（14）



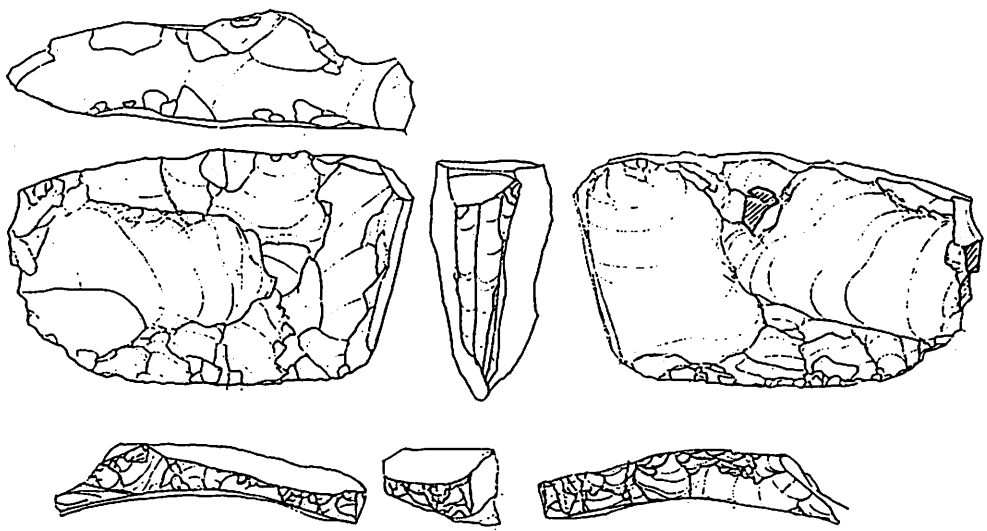
第14図　尻別川流域　昆布西１（13）



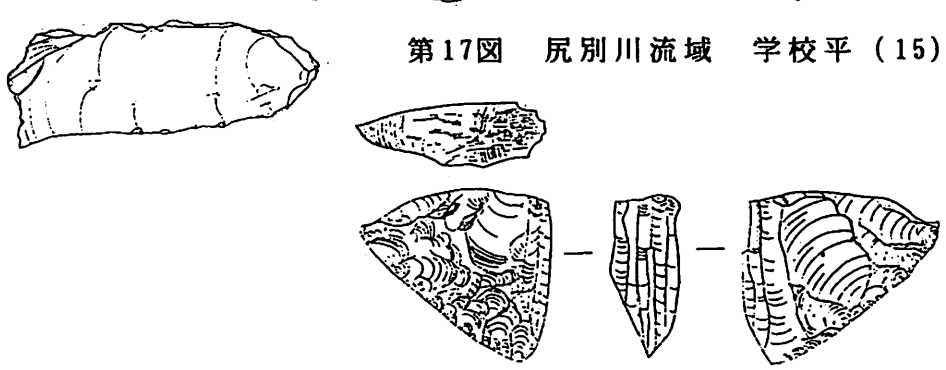
第15図　尻別川流域　峠下１（17）



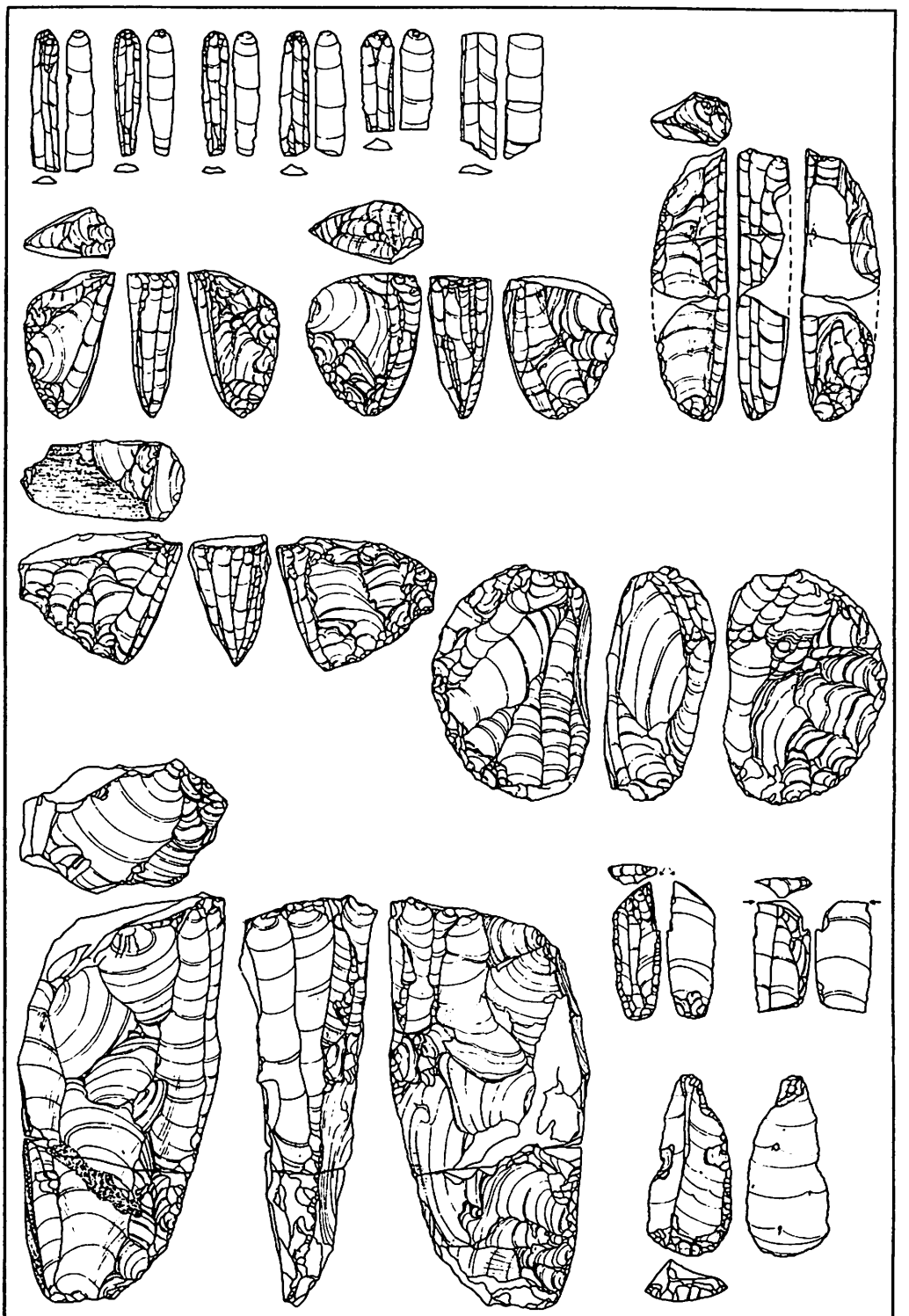
第16図　尻別川流域　峠下１（17）



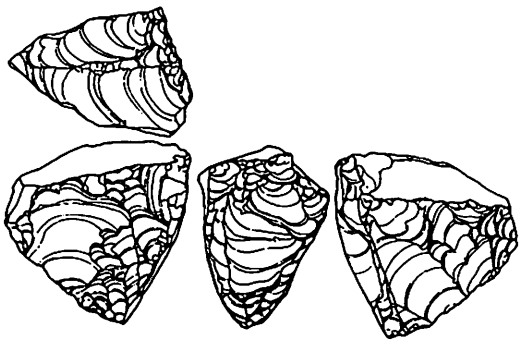
第17図　尻別川流域　学校平（15）



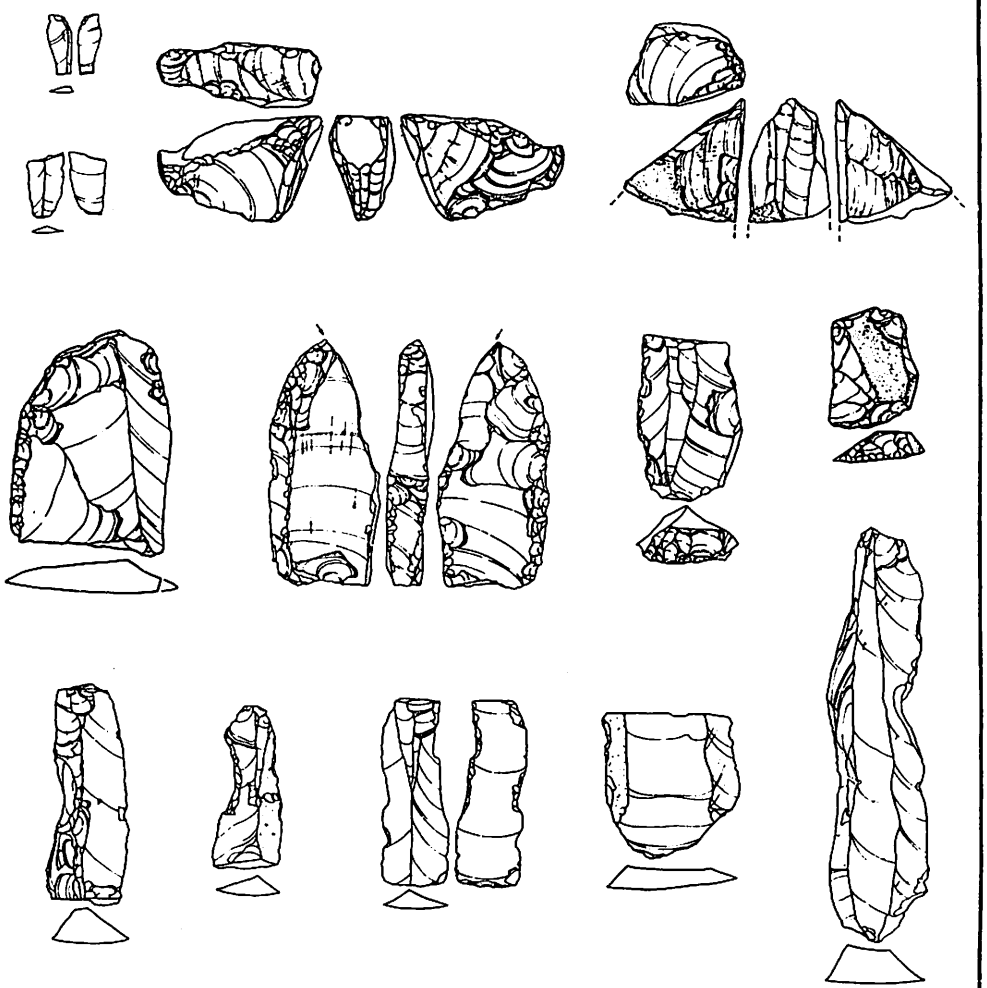
第18図　尻別川流域　瑞穂（16）



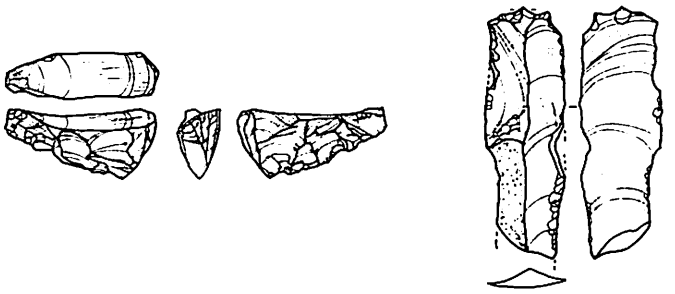
第19図　余市川・赤井川流域　都（20）



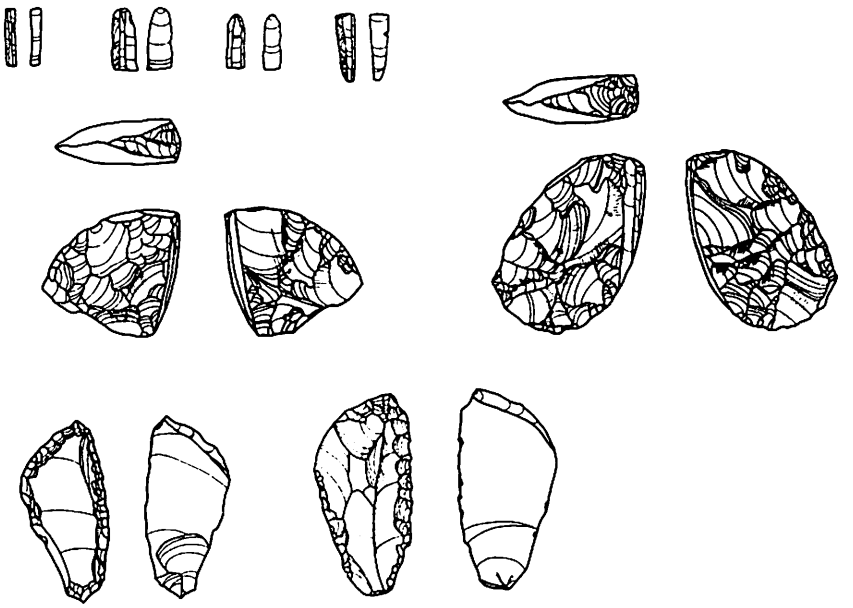
第20図　余市川・赤井川流域　板小屋沢（21）



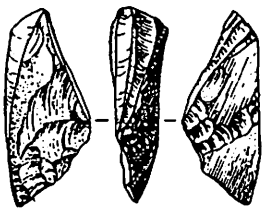
第21図　余市川・赤井川流域　曲川２（22）



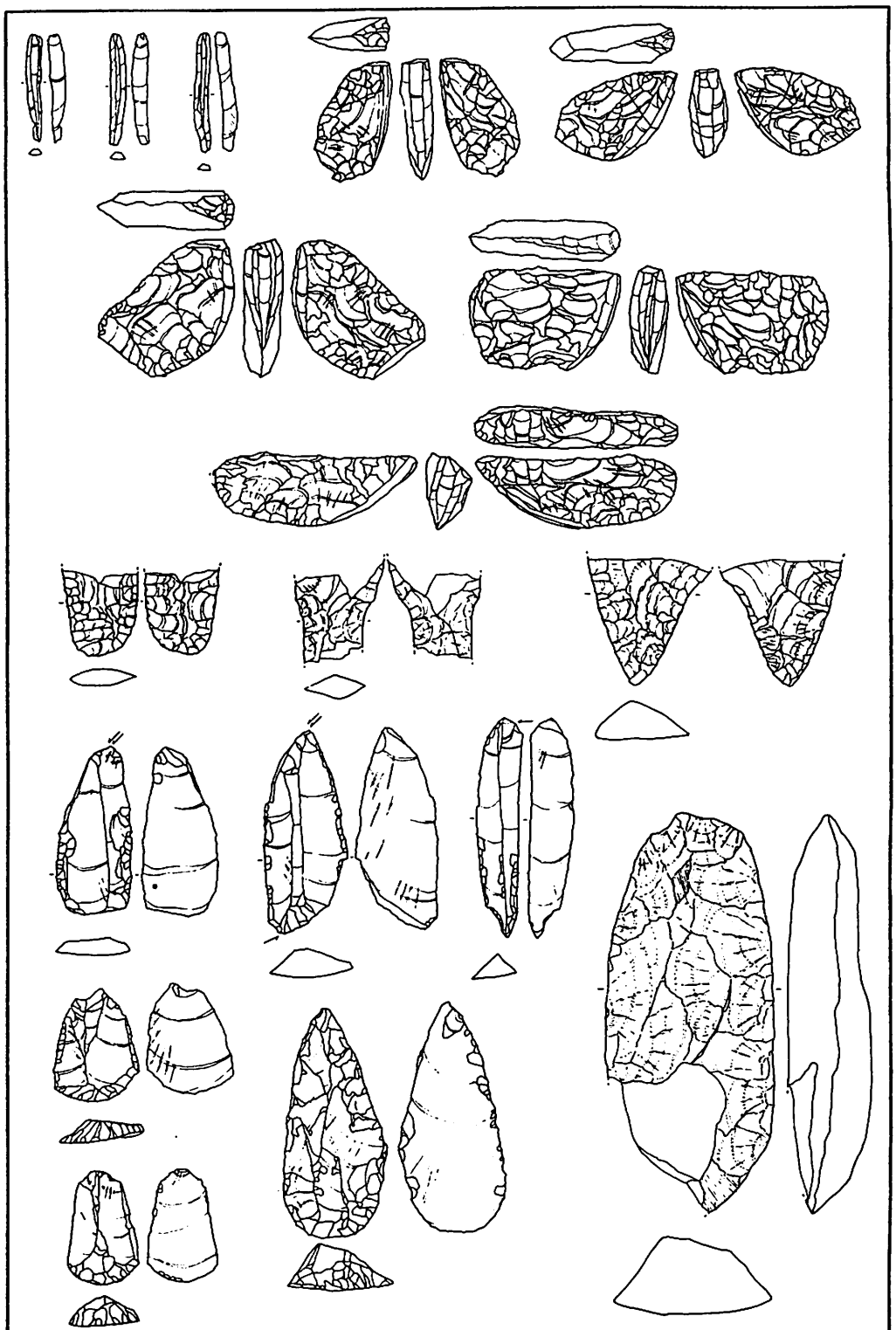
第22図　石狩低地帯　Ｓ３５４（23）



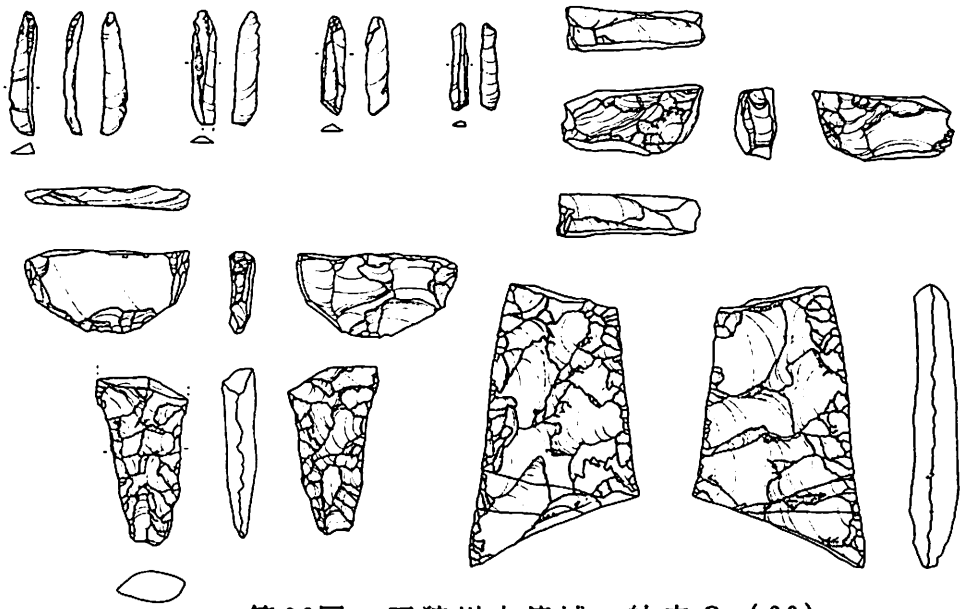
第23図　石狩低地帯　祝梅上層（25）



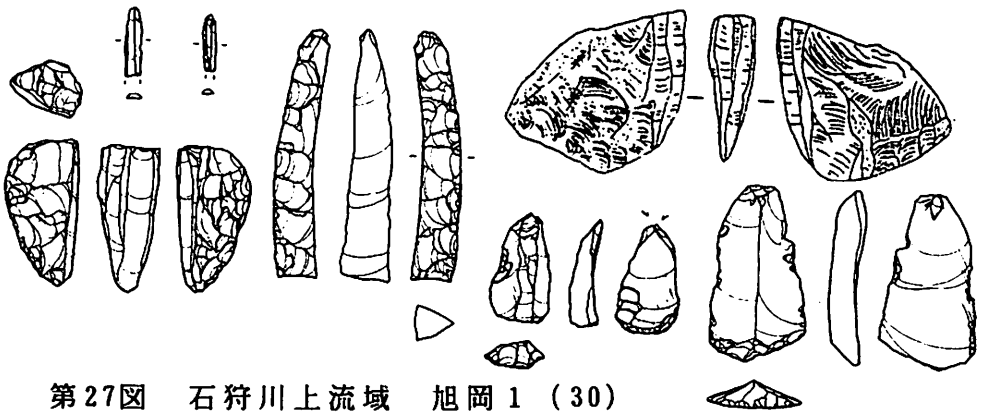
第24図　石狩低地帯　緑丘１（27）



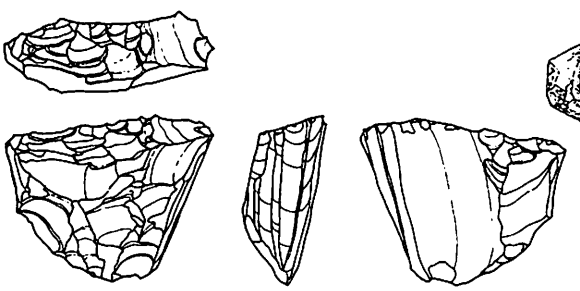
第25図　石狩低地帯　メボシ川２（24）



第26図　石狩川上流域　納内３（28）

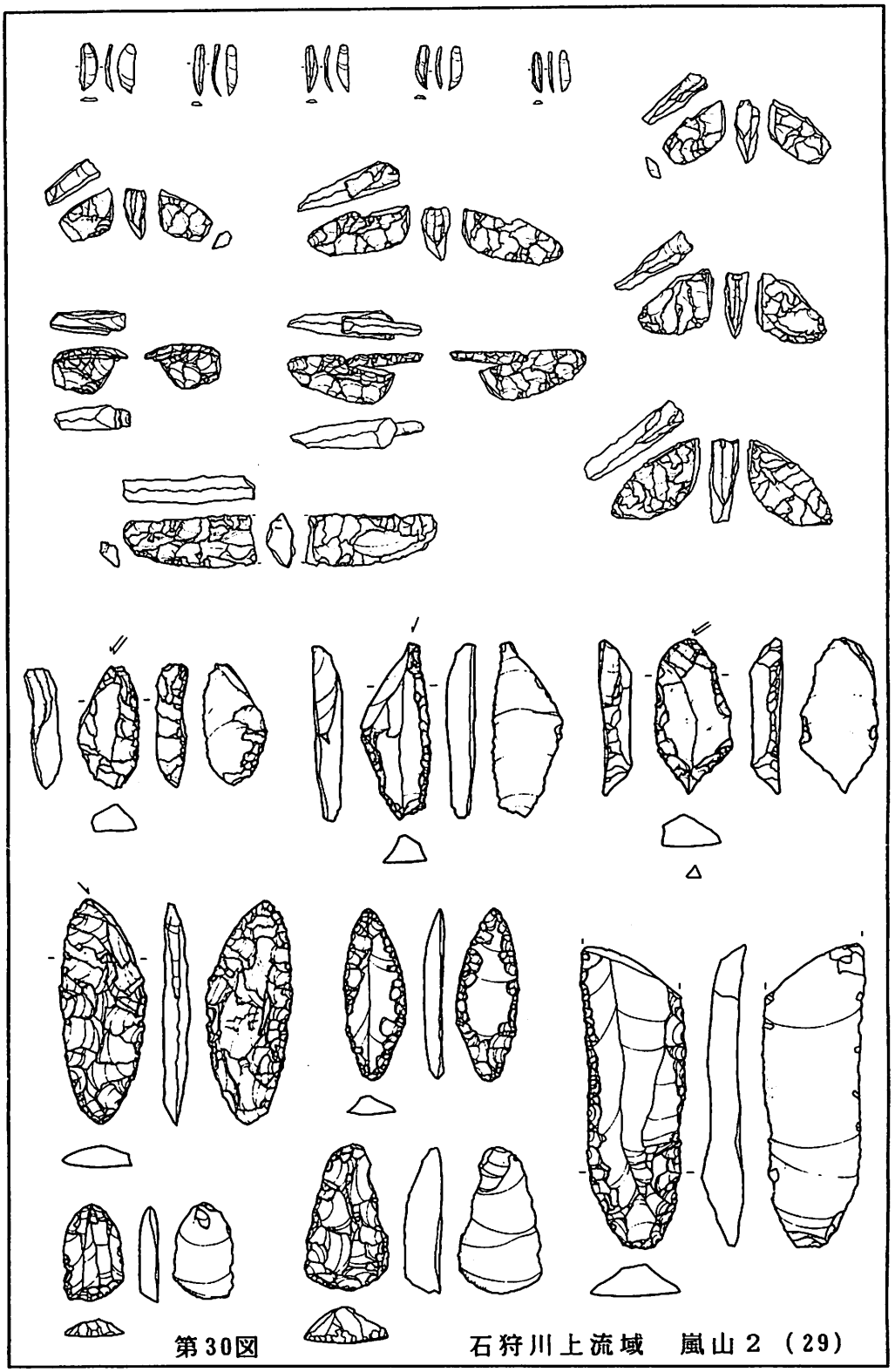


第27図　石狩川上流域　旭岡１（30）

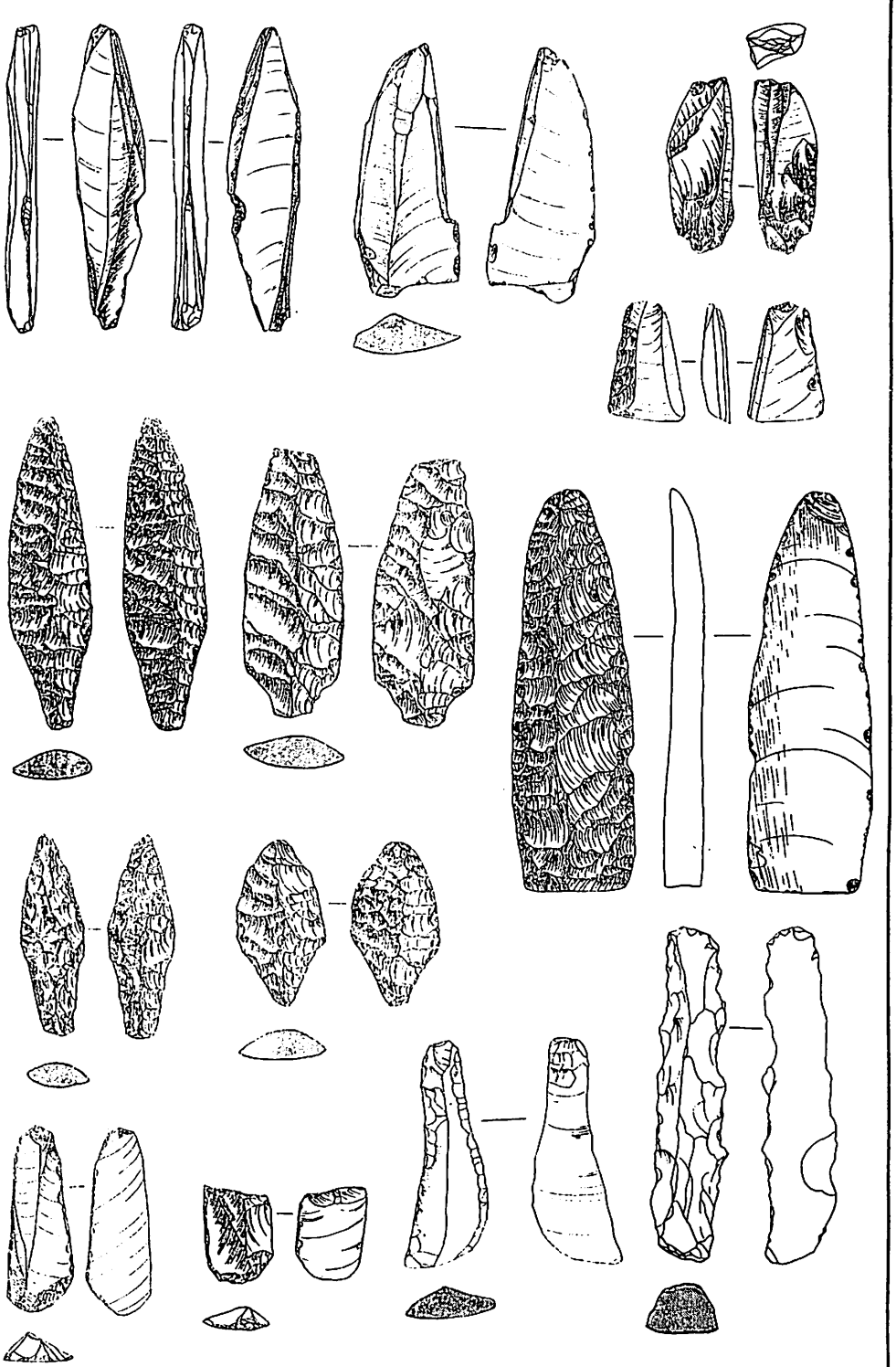


第28図　石狩川上流域
北瑛（33）

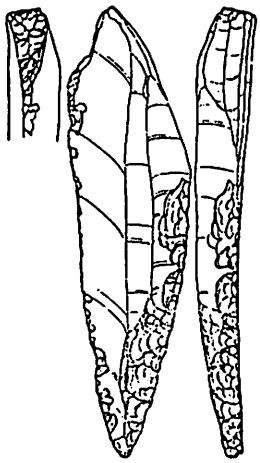
第29図　その他　天瑞寺裏（44）



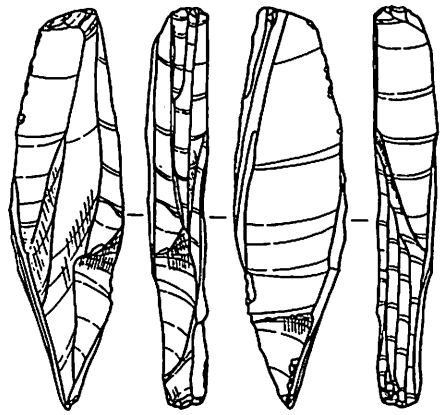
第30図　石狩川上流域　嵐山２（29）



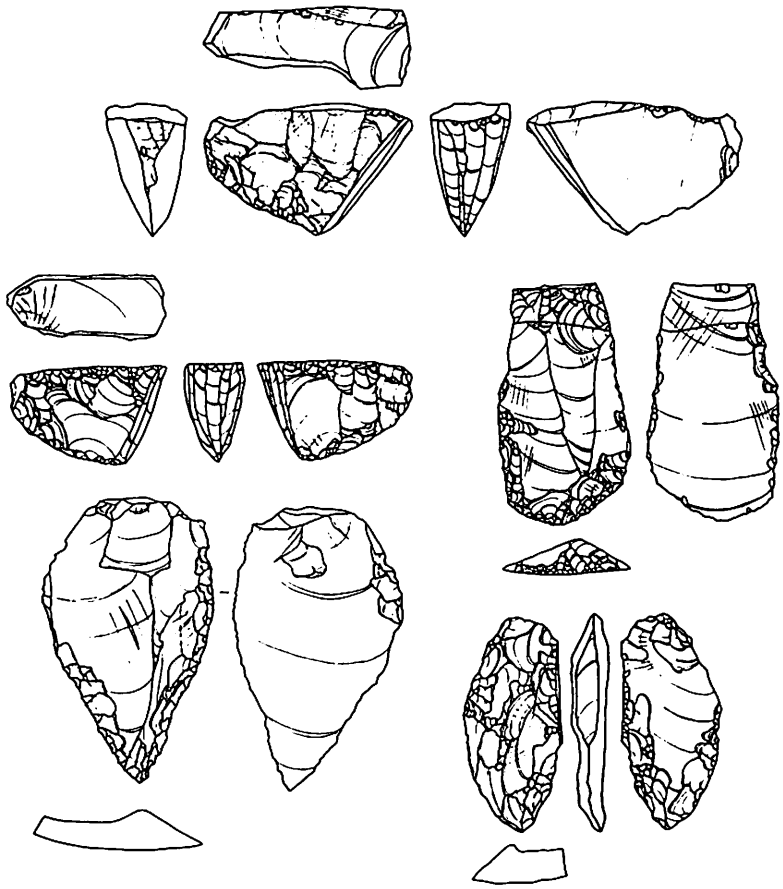
第31図　石狩川上流域　射的山（32）



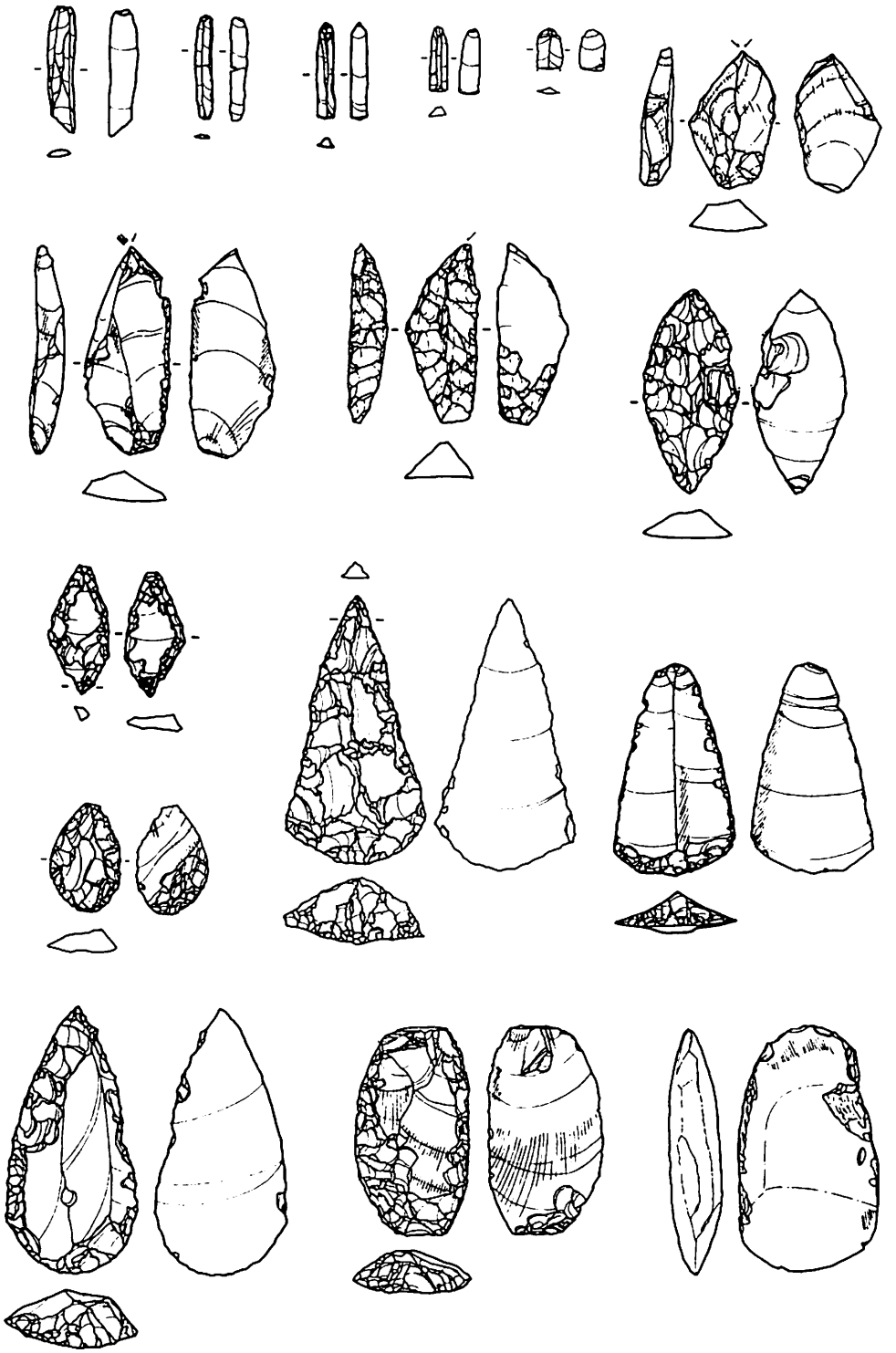
第32図　石狩川上流域
日東（34）



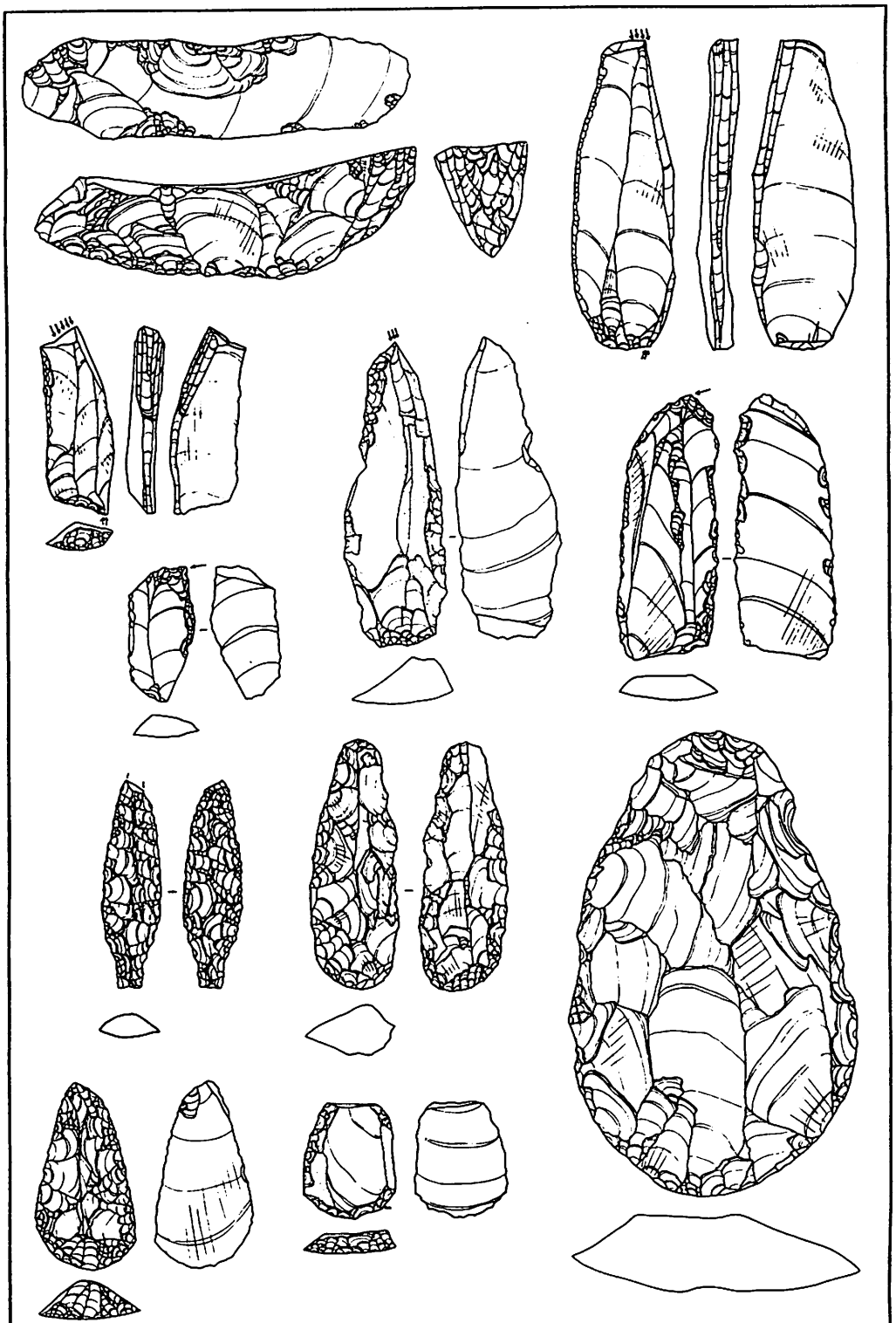
第33図　手塩川上流域
母子里３（35）



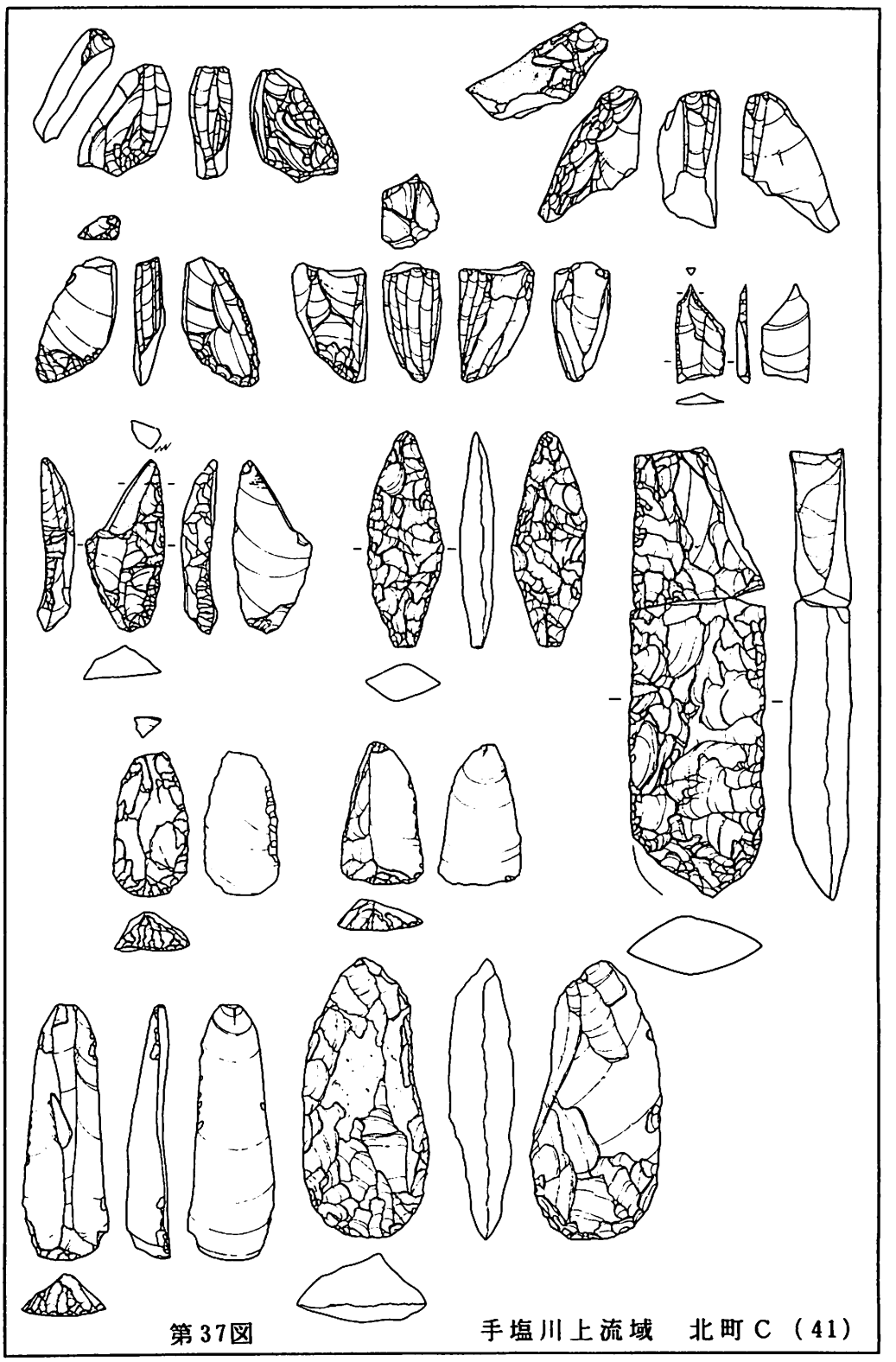
第34図　手塩川上流域　佐藤（39）



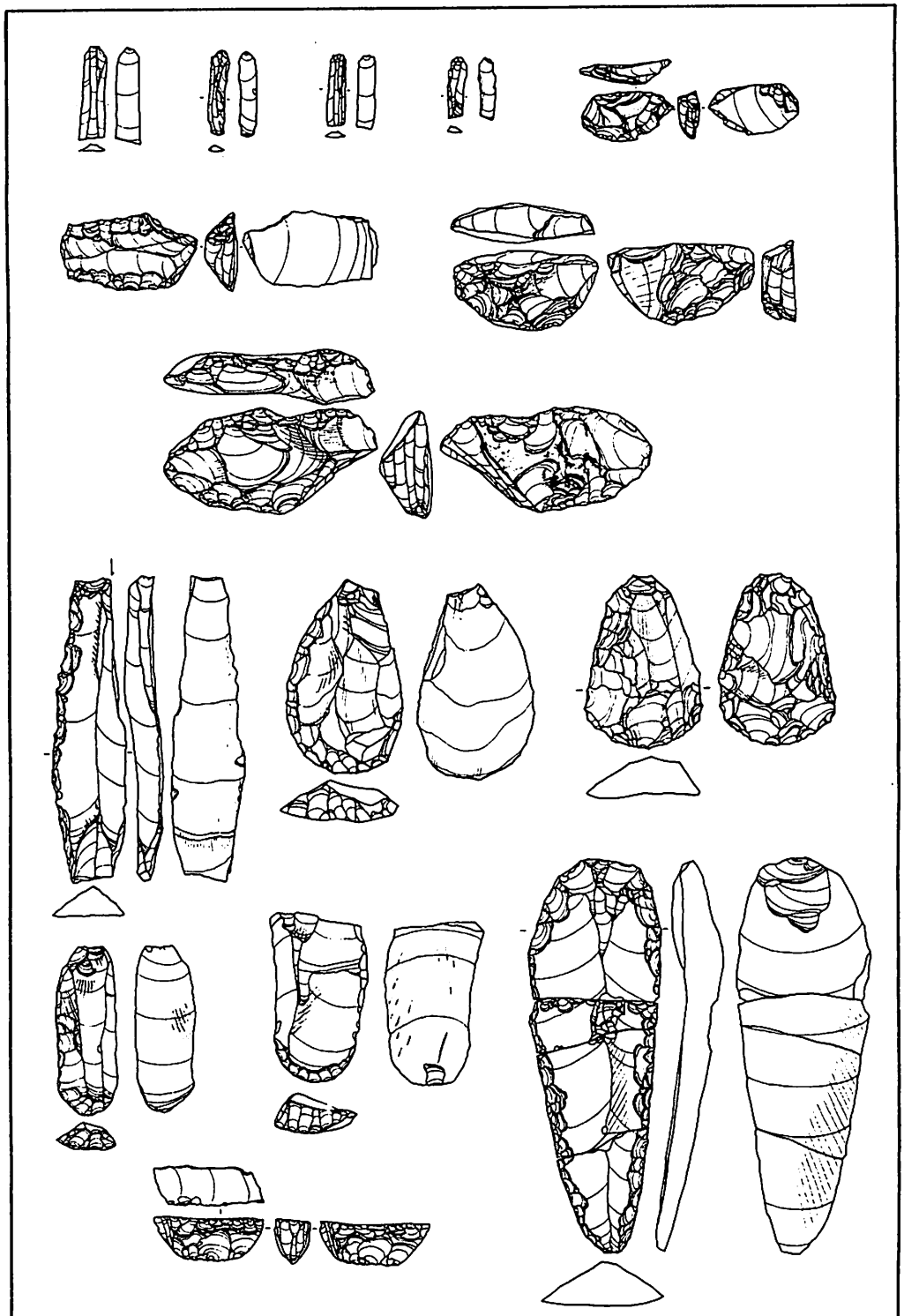
第35図　手塩川上流域　日進２（36）



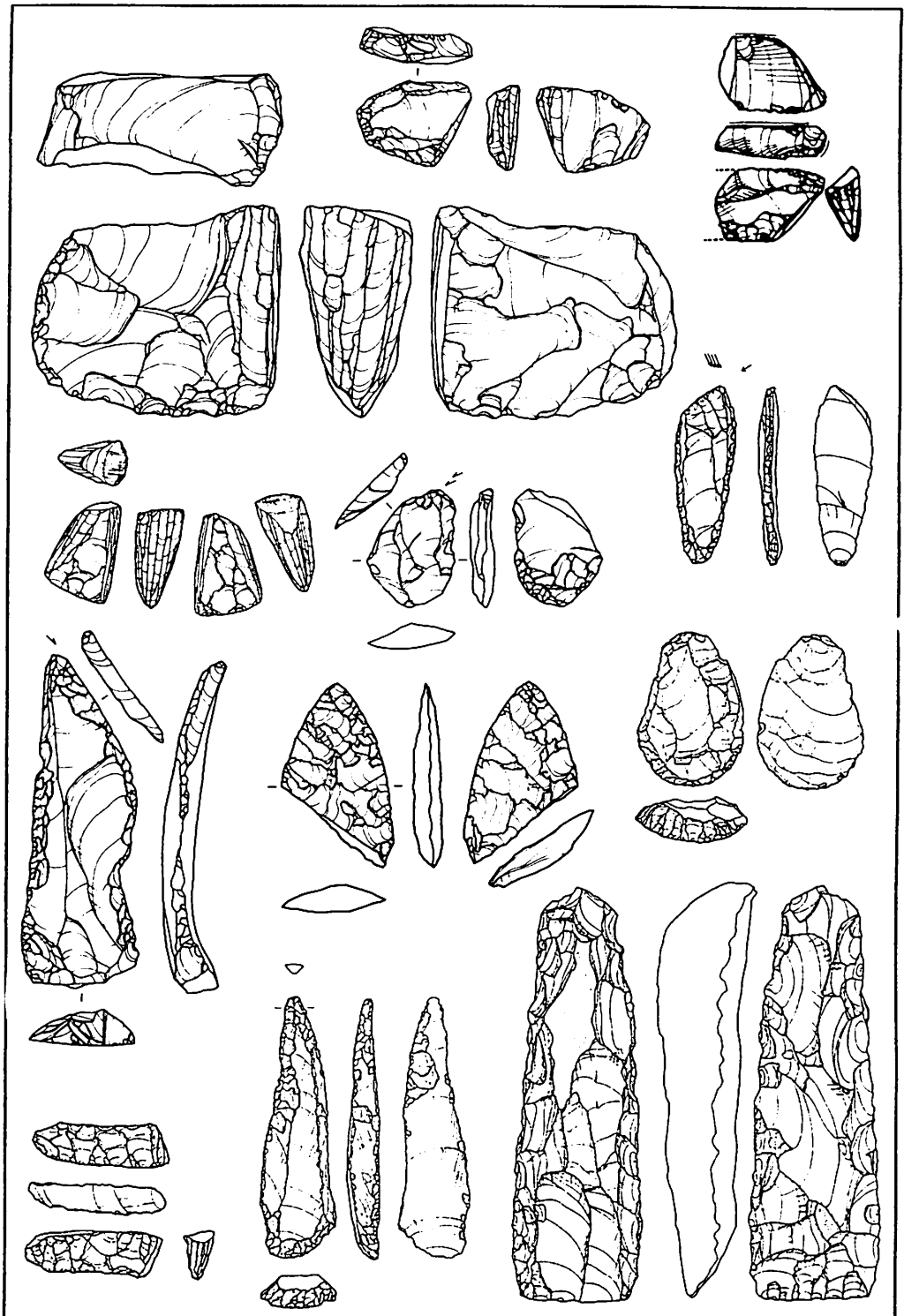
第36図　手塩川上流域　高瀬（40）



第37図　　手塩川上流域　北町C（41）



第38図　手塩川上流域　桜ヶ丘（42）



第39図　手塩川上流域　モサンル（43）

第 1 表 北海道西部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磯	土	発掘	所在	所属	備考
1	湯の里4 (B群)	533	15	20	5	10	7		1		1	台 2				有	上磯郡知内町字湯の里	渡島半島南部	畑ほか (1985)
2	新道4	951	88	3	3	3			15							有	上磯郡木古内町字津川	渡島半島南部	千葉ほか (1988)
3	石川1	88	2	26	4	23	8		3				10			有	函館市石川町	渡島半島南部	兵沼ほか (1988)
4	富里B		○	○	○	○										無	松山郡厚沢部町字富里	渡島半島南部	木村 (1975) 松橋 (1972)
5	大関校庭	63	3	56	15	2	4			1	3		5			有	山越郡八雲町上八雲	渡島半島北部	三浦・柴田 (1993)ほか
6	上八雲1	○	○													有	山越郡八雲町上八雲	渡島半島北部	宮崎 (1961 旧名トワルベツA・B)
7	神丘7	○	○	○	○	○	○									有	瀬棚郡今金町字神丘	渡島半島北部	93年発掘調査未報告
8	美利河1	1107	30	137	39	88	18	5	52	1	12		53			有	瀬棚郡今金町字美利河	渡島半島北部	兵沼ほか (1985) 寺崎 (1989)
9	美利河2		○		○								○			無	瀬棚郡今金町字美利河	渡島半島北部	
10	目名2	○			○	○										無	寿都郡黒松内町字目名	渡島半島北部	白石 (1991)
11	目名5	○	○													無	寿都郡黒松内町字目名	渡島半島北部	白石 (1991)
12	立川1 (第Ⅰ・Ⅱ地点)	29	5	13	18	7	3	1					1			有	磯谷郡蘭越町字立川	尻別川流域	宮崎 (1960)
13	昆布西1	○	○													無	磯谷郡蘭越町昆布町	〃	児玉・大場 (1957)
14	西富 (A 地点)	36	1	3	1								3			有	虻田郡ニセコ町字西富	尻別川流域	児玉・大場 (1957)
15	相川9		○													無	虻田郡ニセコ町字西富	〃	福原 (1983)
16	宮田7	○	○													無	虻田郡ニセコ町字宮田	〃	福原 (1983)
17	峠下1 (A・B)	1	7		1	2							1			有	虻田郡倶知安町字峠下	尻別川流域	名取・松下 (1961a)
18	学校平	○	○													無	虻田郡倶知安町字旭	〃	名取・松下 (1961b)
19	瑞穂		○													無	虻田郡倶知安町字出雲	〃	名取・松下 (1961b)
20	都 (Loc.29)	960	14		2	2							5			有	余市郡赤井川村都	余市川・赤井川流域	木村 (1978)ほか
21	板小屋沢 (Loc.4 ほか)	○	○	○	○								○			無	余市郡赤井村日の出	〃	木村 (1978) 旧名日の出Loc.4
22	曲川2 (Loc.28)	○	○	○	○	○							○			無	余市郡赤井村曲川	〃	木村 (1978) 旧名村木沢Loc.28
23	S 354		1				1									有	札幌市白石区本通1 丁目	石狩低地帯	上野ほか (1982)ほか
24	メボシ川2	320	17	36	97	11	1	3					3			有	千歳市根志越	〃	田村 (1983)
25	祝梅上層	○	○		○	○										有	千歳市祝梅	〃	宮崎 (1977)ほか

第 2 表 北海道西部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土	発掘	所在	所属	備考
26	丸子山		○		○											有	千歳市中央	石狩低地帯	未報告91・92年発掘
27	緑丘1		○													無	夕張郡栗山町字雨煙別	〃	吉崎(1958)ほか 旧名＝緑ケ岡
28	納内3	10	2	1									7			有	深川市納内町字納内	石狩川上流域	千葉ほか(1989)
29	嵐山2	75	8	8	21	6	1						9			有	上川郡鷹栖町2717-14ほか	〃	石川ほか(1987)
30	旭岡1	○	○													有	旭川市旭岡1丁目	〃	斉藤・清杉(1958) 石川(1987)ほか 旧名＝旭ケ丘
31	末広8	○	○	○	○		○						○			無	旭川市末広町7条12丁目	〃	
32	射的山		4	4	4								10			有	旭川市永山町16丁目	〃	佐藤ほか(1961)
33	北瑛		○		○								○			有	上川郡美瑛町字ウバクベツ	〃	斉藤(1960) 旧名＝北美瑛
34	日東	○	○													有	上川郡上川町字日東	〃	木村(1983)
35	母子里3		○	○												無	雨竜郡幌加内村字母子里	天塩川上流域	野村(1977)
36	日進2	11	○	23	6	8	1	1			1		4			有	名寄市日進	〃	山崎(1964) 鈴木(1988)
37	旭東1		○		○	○							○			有	名寄市旭東	〃	山崎(1963) 旧名 旭東南出地点
38	朝日1	○	○			○										無	名寄市朝日	〃	氏江(1984)
39	佐藤	○	○			○										有	川上郡下川町北町	〃	大沼(1985)ほか
40	高淵	○	○	○	○	○		○					○			有	川上郡下川町北町	天塩川上流域	大沼(1985)ほか
41	北町C	○	○		○	○	○						○			有	〃 北町	〃	大沼(1985)ほか
42	桜ケ丘	36	6	6	22											有	〃 西町	〃	氏江ほか(1986)ほか
43	モンサル	○	○	○	○	○	○	○					○			有	〃 一の橋	〃	芹沢ほか(1983) 大沼(1985)ほか
44	天満守裏		○													無	留萌郡小平町本郷	その他	福士(1991)
45	落合	○	○													有	空知郡南富良野町字落合	〃	高橋(1969) 富良野地方史

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝錐器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
磁＝石磁、土＝土器

北海道東部の細石刃文化

米村　衛

1　研究の経過

１９５３年　北見市豊田遺跡で北海道で初めて旧石器文化の存在が具体的に確認される。

１９５６～　湧別川流域の白滝地区や常呂川流域を中心に活発な調査が開始され、新知見の資料の蓄積と遺跡の分布が明らかにされる。

１９５６年　吉崎昌一氏による北海道旧石器文化の最初の編年案提示。

１９５９年　白滝団体研究会が発足され、総合的な調査が開始される。

１９６１年　吉崎昌一氏による「湧別技法」の提示。

１９６３年　白滝団体研究会の調査成果として、理化学的な測定年代値と石器組成に注目した編年案がまとめられる。

１９６９年　加藤晋平氏等が「常呂パターン」を提示し、遺跡群の解明をめざす。

１９７９年　安蒜政雄氏、鶴丸俊明氏が細石刃核の型式学的な検討をまとめ、北海道細石刃文化の構成を示唆する。

１９８５年　「美利河技法」の提唱により、湧別技法の再検討がもとめられる。

１９８５年　北見市広郷８遺跡で小形のナイフ形石器が検出され、北海道の石器文化の性格づけが改めて問題とされる。

１９８８年・１９９１年

北海道最古期の様相を示す上士幌町嶋木遺跡と斜里町越川遺跡において、細石刃文化との関連がとわれる。

１９９０年　筑波大学による白滝村幌加沢点遺跡採集資料の分析。石器群内での石器の素材供給の変化に注目する。

１９９２年　幌加沢遠間地点遺跡での札幌大学の調査成果として、湧別技法の多様なあり方が具体的に示される。

2　遺跡の分布

北海道東部における細石刃文化の遺跡は、河川の流域に集中し所在している。特に大河川をのぞむ段丘上には、多くの遺跡がみとめられる。

A　湧別川流域　大雪山に源を発する大河川である湧別川の流域には、上流域と中流域において多くの遺跡が発見されている（白滝団体研究会　1963、松谷　1987）。細石刃文化の所産として明確なものだけでも２０ヶ所以上を数える。

特に標高４００～５００ｍもの山あいに位置する上流域は、黒曜石の原産地であり、遺跡が群集している。原産地に通じる沢筋をのぞむ地点には、白滝服部台遺跡（杉原荘介・戸沢充則　1975）、幌加沢遠間地点遺跡（木村英明　1992）のように、数万点以上に及ぶ石器の出土がみられる大規模遺跡が点在する。

標高１００ｍ前後にひろがる中流域の台地には、タチカルシュナイ遺跡（吉崎　1973）がある。小支流が交わる合流部をのぞむ丘陵上に立地している。

B　常呂川流域　常呂川は全長１２０㎞にも及ぶ大河川で、北東方向へ流下しながらオホーツク海へと注ぐ。流域沿いには４０ヶ所以上もの遺跡が発見されている。

遺跡は河川の上流域から中流域にかけて集中する。最上流部には白滝と並ぶ黒曜石の大原産地が所在し、置戸安住遺跡（戸沢 1967)に代表される大規模遺跡の他、多くの遺跡が点在しているようである。

常呂川で最も遺跡が群集するのは、支流、無加川が合流する中流域である。標高１００ｍ前後に広がるひらけた段丘面には３０地点以上の遺跡が分布する。

C　網走川流域　網走川は津別山渓に源を発し、その下流で網走湖を流下し、オホーツク海へと注ぐ河川で、流域には発達した丘陵面をあまりもたない。遺跡はその中流域にあたり、湖にむかい河川が侵食面を大きくひろげていく台地の突端部に位置する。

D　釧路川流域　釧路湿原の中央部を横切るように流れ下る釧路川は延長１５０㎞にも及ぶ大河川である。細石刃文化期の遺跡の発見例は少なく、最下流部

の標高１０ｍほどの低位段丘面の周辺に分布する。

E　十勝川流域　十勝川は全長１５０ｋｍ以上にも及び多くの支流を備え、その流域面積は北海道東部における最大規模の河川である。北部上流域には黒曜石原産地をひかえ、遺跡は上流から中流域にかけて多く発見されているが調査例は少ない。流域全域を通じての研究の進展が待たれる。

しかし、いくつかの河川が合流する中流域には、暁遺跡のような大規模遺跡をはじめ、２０ヶ所以上もの遺跡の集中が指摘できる。また、上流域にも上士幌町の嶋木遺跡（加藤・山田　1988）をはじめ特徴的な遺跡が多くみられる。

以上、北海道東部には大河川をひとつの単位とする５つの集中的な遺跡のまとまりがみとめられた。河川の流域においては下流域に分布はみられず、原産地を間近にひかえる上流域と支流河川の合流部である中流域に集中する傾向が指摘できる。

３　細石刃石器群

A　湧別川流域

白滝服部台遺跡　湧別技法と峠下技法の２つの技法によって細石刃が製作される。「荒屋型彫器」を含む多様な彫器と豊富な掻器類、長さ１０ｃｍを越えるものから５ｃｍほどの小形例まで変化に富む尖頭器類が特徴である。有茎尖頭器が組成される点も注目される。

黒曜石が殆どで、彫器の一部が頁岩とメノウ製（第４図）。

幌加沢遠間地点遺跡　削片をはじめ細石刃製作過程の石片類が主体を占める特徴的な遺跡。ホロカ、湧別両技法による細石刃核。小形の尖頭器、削器、掻器、彫器が組成される。

石材の９割が黒曜石製である（第２図）。

白滝第４地点遺跡　オショロッコ型細石刃核に豊富な削器・掻器と石錐、有茎尖頭器が組成される。すべて黒曜石製（第５図）。

B　常呂川流域

置戸安住遺跡　ホロカ、湧別、峠下、置戸の４つの技法による細石刃核が存在。大形のものから小形の「置戸型尖頭器」まで、尖頭器の多様さが特徴である。

彫器も豊富で、刃部の形状において角ノミ形、平ノミ形そして丸ノミ形を呈する「多面体彫器」も組成される（第６図）。

増田遺跡　峠下技法による細石刃核と削器・掻器類、彫器、叩石、そして石錐から構成される（第７図）。

水口遺跡　オショロッコ技法による細石刃核と豊富な掻器、削器、石錐の組み合わせである。その他、安山岩製の細身の尖頭器が伴う。
彫器の一部以外、すべて黒曜石製（第10図）。

C　網走川流域

みどり１遺跡　上下２枚の文化層が抽出できる。下層は湧別技法と峠下技法から構成される。細身の尖頭器の他、削器・掻器、角ノミ形の「ホロカ型彫器」がみとめられる（第11図）。
上層は蘭越技法による細石刃核と有茎尖頭器を主体に「荒屋型彫器」と「多面体彫器」が特徴的に組成される。
頁岩やメノウが多く用いられる。

元町３遺跡　蘭越技法とオショロッコ技法による細石刃核で構成。豊富な削器と掻器、角ノミ形彫器、石錐そして、有茎尖頭器が組成される。
細石刃核は黒曜石製。削器、掻器を中心に頁岩、チャートも用いられる（第12図）。

D　釧路川流域

北斗第８地点遺跡　オショロッコ型細石刃核が出土。散発的な検出のため、他の石器組成は不明である。

E　十勝川流域

暁遺跡　峠下技法を主体としながらも、ホロカ技法、湧別技法による細石刃核から構成される。湧別技法による細石刃核は札滑型のものが多く組成されている。
削器、掻器の他、小形の角ノミ形の彫器を多く含む。
細石刃核は黒曜石製。彫器の一部が頁岩製（第13図）。

上似平遺跡　峠下技法による細石刃核と削器、掻器、角ノミ形の彫器から構成されている。石材は黒曜石を主体に、珪岩製の細石刃核がみとめられる（第14図）。

4　細石刃文化の様相

（1）細石刃文化の編年

河川流域をひとつの単位とする遺跡のひろがりとその内容を概観してきたが、北海道東部地域における細石刃文化は、ほぼ全域の大河川にわたる分布をもち、各遺跡の石器組成は比較的単純なあり方を示していた。しかし、細石刃の製作には複数の技法を併わせもつ特徴的な姿がみとめられた。

細石刃文化はその主体的な石器である細石刃の製作技術の移り変わりを通じて、その通時的な構成が考察されてきている（上野・加藤　1973、安蒜　1979、鶴丸　1979）。ここでは、こうした技術的な側面を手がかりに細石刃文化をあとづけてみたい。

抽出された細石刃製作技術は、湧別技法、峠下技法、蘭越技法、オショロッコ技法、ホロカ技法、置戸技法の６通りである。いずれも汎北海道的な分布をもつ。細石刃の製作は①石核用素材の形成、②石核原形の形成、③打面の形成、④細石刃の剥出、⑤打面の再生という一連の段階的な行程をもってまとめることもできる。各技法の違いは段階ごとの手順の異なりをもって理解されているが、①の素材形成の段階ですでに大きな差異をもつ。最終的な石核形状にまで強く影響を及ぼす最初期の石核用素材のあり方に注目すると、これら細石刃製作技法にはひとつの傾向を知ることができる。すなわち、素材である石片周縁からの求心的な調整剥離により尖頭器様の器体を準備する湧別、峠下、蘭越、オショロッコの各技法（調整系技法）と、それ以外のホロカ、置戸両技法という２つのまとまりが見い出せる。

ところで各遺跡の実際をみると、これら技法が単独で存在することは少なく、複数が組み合わさり構成されているようである。特に調整系技法による細石刃核との組成が多くを占めている点が注目される。調整系技法の技術的な流れを基軸として、細石刃文化の技術的な変遷をたどることもできそうである。

湧別、峠下、蘭越、オショロッコの４技法をもつ調整系技法は、そこから札滑型、白滝型、峠下型、蘭越型、オショロッコ型という５型式の細石刃核が残される。各技法の具体的な内容を詳述できないが、入念に仕上げた長円形の石核用素材を段階的に打ち割り、細石刃の剥出へとすすみ、その過程では削片剥離を伴うものと（鶴丸　1979）、その技術的な特徴をまとめることができる。

しかし、各技法によって最終的な石核形状が大きく異なることから予測されるように、各々の製作段階での技術的な違いも存在するようである。そこでまず、調整系技法の最も

大きな特徴である削片剥離についてみてみたい。

製作過程において削片剥離が関与する段階をみると、湧別技法が①石核用素材の形成、③打面の形成、⑤打面の再生において、峠下技法と蘭越技法が③と⑤、オショロッコ技法が③においてである。剥離のおよぶ範囲では、湧別技法の札滑型が素材長軸の全体、白滝型が素材の半分、峠下技法では素材長軸の一部分、蘭越技法では素材短軸の全体、オショロッコ技法では素材の稜線上である。湧別技法から峠下技法、蘭越技法、オショロッコ技法と順にその役割と範囲を減じていく傾向がよみとれそうである。次に一連の製作過程において素材に対する横方向からの剥離に注目してみよう。湧別技法では横位剥離はみとめられない。峠下、蘭越技法では③石核形成段階であり、オショロッコ技法では④打面形成段階に用いられている。湧別技法から峠下、蘭越、オショロッコの各技法へと順に製作過程の後半に関わっていく傾向が指摘できる。また、その剥離範囲も峠下技法からオショロッコ技法にむかい狭まり、役割を減じているようである。

このように削片剥離と横位剥離をもとに調整剥離のあり方をまとめると、湧別技法（札滑型、白滝型細石刃核）、峠下技法（峠下型細石刃核）、蘭越技法（蘭越型細石刃核）、オショロッコ技法（オショロッコ型細石刃核）という技術的な流れがたどれる。また、蘭越、オショロッコ技法で構成される石器群の多くが、有茎尖頭器をもつという組成上の特徴に注目すると、湧別技法が古く順にオショロッコ技法へと通時的に跡づけられるものと考えられる。

ところで近年提唱されその性格づけが問われている「美利河技法」（長沼編　1985）はどのように位置づけられようか。削片剥離が素材長軸の半分あるいは全体におよび、横位剥離は③石核形成の段階にみとめられるようである。調整系技法における湧別技法と峠下技法の中間的な特徴を備えている。その編年的な位置づけも予測できようか。

以上、このように調整系技法の流れを基軸とする時、細石刃文化は調整系細石刃核との組み合わせのもと通時的に位置づけることができそうである。また、この型式的な知見に石器組成を考慮すると、北海道東部の細石刃文化は次のように大きく前期と後期の２つの段階をもってまとめることができよう。

すなわち、細石刃文化の前期は幌加沢遠間地点遺跡（ホロカ型、白滝型細石刃核）、置戸安住遺跡（ホロカ型、白滝型、峠下型、置戸型細石刃核）、みどり１遺跡（ホロカ型、白滝型細石刃核）、暁遺跡（ホロカ型、白滝型、峠下型細石刃核）等が各分布域の代表的な石器文化である。ホロカ技法と湧別技法、峠下技法を中心に細石刃を作出する製作技術を

備えている時期である。大きさや形態に変化に富む尖頭器を中心に、削器、掻器類と多様な形態の彫器の存在が特徴的な石器組成である。

続く細石刃文化の後期は、白滝服部台遺跡（白滝型、峠下型細石刃核）、本沢遺跡（峠下型細石刃核）、吉井沢遺跡（蘭越型、オショロッコ型細石刃核）、元町３遺跡（蘭越型、オショロッコ型細石刃核）、上似平遺跡（峠下型細石刃核）等が主な石器文化である。豊富な削器、掻器と石錐が多くなり、新たに有茎尖頭器が組み込まれるようになる。後期は峠下技法による前半と、蘭越、オショロッコ技法が顕著となる後半の時期に分けることもできる。

北海道東部の細石刃文化の変遷からは、複数の細石刃製作技術を内包する石器群から単一の技術へとむかう石器製作技術の収斂過程と、有茎尖頭器という新たな時代へむかう狩猟具の獲得という石器組成の大きな変革もよみとれる。

（２）細石刃文化の展開

北海道の細石刃文化は、河川流域沿いに幾つかのまとまりをもって存在しており、そこには河川を単位とする地域性が予測されたところである（米村　1983）。そこでここではひとつの河川流域における細石刃文化の展開の様子を考えてみたい。

先の編年をもとに分布域ごとの河川における遺跡のひろがりに注目してみよう。湧別川流域では細石刃文化の前期の遺跡としては、幌加沢遠間地点遺跡、白滝33地点遺跡、白滝30地点遺跡、ﾀﾁｶﾙｼｭﾅｲVA･B地点遺跡があげられる。前３者が上流域、後者が中流域と分布の偏りがみとめられる。後期での遺跡は少なく、上流域で白滝服部台遺跡、下流域でﾀﾁｶﾙｼｭﾅｲVC地点遺跡が主なものである。特に上流域での遺跡数の減少が顕著である。

常呂川流域においては、前期では上流域に置戸安住遺跡、中流域では散発的な資料であるが、広郷20遺跡、北上４遺跡、北上５遺跡等が分布している。後期になると遺跡数は増加する。後期の前半には緑丘Ｂ遺跡、増田遺跡、本沢遺跡、大正遺跡、北進遺跡等が形成される。上流域から中流域にかけての本流河川から少し沢筋の奥に入り、背後に丘陵をひかえた地点に立地している。続く後期後半になると一層遺跡数は増大し、支流無加川が合流する中流域のひらけた台地上を中心に群集する。吉井沢遺跡、吉田遺跡、水口遺跡をはじめ、広郷31、広郷16、開成３、北上台地等、数多く分布している。

網走川流域では、遺跡は少ないが前期にみどり１遺跡、後期には元町２遺跡・元町３遺跡が残されている。いずれも中流域に位置し、河川が流路をひろげ湖へとむかうひらけた

地点に立地する。また、釧路川流域も遺跡は少なく、通時的な位置づけが明らかな遺跡は北斗遺跡に代表される。後期後半の所産であり、河川の最下流域に近い低位段丘面に形成されている。

十勝川流域は近年、調査例が急増しているが地域的な偏りがあり、河川全域を等質な分析の対象域とすることは難しい。細石刃文化の前期には、暁遺跡、十勝川１遺跡、泉町Ａ地点遺跡等がある。前２者が中流域、後者が上流域に分布している。後期にはその前半に上似平遺跡、後半に空港南Ａ地点遺跡がみとめられ、いずれも上流域に立地している。

以上、分布域ごとに遺跡の通時的なひろがりをたどってみたが、遺跡の密度からすると細石刃文化の前期には湧別川流域、後期には常呂川流域が居住の主体域であったことがうかがわれる。しかし、両地域とも他の時期の遺跡も多く、そこにはひとつの河川における時期的な居住傾向が予測できそうである。

河川における時期ごとのあり方をまとめてみよう。細石刃文化前期では湧別川流域での白滝地区の各遺跡群、常呂川流域の置戸安住遺跡のように、上流域を中心にその規模も大きく、群集する傾向がみとめられる。それに対し中流域には小規模な遺跡が点在するようである。一方、後期になると常呂川流域の遺跡群に代表されるように、河川中流域における遺跡の集中と大規模な遺跡の形成がみとめられ、上流域での遺跡数は著しく減少する。

前期には河川の上流域、後期には中流域が各々主要な居住地域となり、前者の中流域、後者の上流域は小規模な居住地点として存在していたものと、時期的な性格づけが与えられそうである。先述した常呂川流域の後期前半にみられる特徴的な遺跡分布、河川中流域の支流小河川の沢奥寄りの立地は、前期の居住域の特性を踏襲しながら、後期後半のひらけた立地へとむかう過渡的な姿としてとらえられよう。こうした時期的な居住域の移り変わりは、上流域の白滝、置戸などの黒曜石原産地を間近に臨む生活圏から、中流域の支流小河川が合流するひらけた流域地帯を臨む生活圏へという立地背景の変化として考えることもできる。前者に石材、後者にサケ、マス等の遡上魚類と各々高い供給の可能性がうかがえようか。

以上、このような居住のあり方を考慮すると、北海道東部における細石刃文化は次のような通時的な展開をもってまとめられる。湧別技法に代表される細石刃文化の前期は黒曜石の原産地をひかえた湧別川や常呂川そして、十勝川の上流域を中心に居住し、豊富な石材供給を背景とした生活形態をとっていた時期である。この石器文化は網走川流域へも波及するが、石材供給との関連から大規模な遺跡が形成されることはなかったようである。

細石刃文化の後期に至ると、常呂川流域を中心に、ほとんどの大河川で中流域のひらけた河川地域を臨む地点に集中的に居住されるようになる。こうした立地は河川漁撈を加えた生活形態へと発達させたのであろうか。この時期に組成される有茎尖頭器は、新たな居住域における狩猟形態とその対象の変化を示唆しているようでもある。後期の後半になると、釧路川流域へもようやく細石刃文化が展開していく。細石刃文化における北海道東部のほぼ全域への波及ともいえるそこでの立地は、河川の下流域においてである。そして、それは後続する縄文時代早期土器文化の生活圏と重なり合うものでもあった。

5　細石刃文化研究の課題

北海道東部は細石刃文化期の遺跡も多く、研究の当初より中心的な舞台とされてきた地域である。しかし、こうした初期の調査とその報告は、現在の問題意識に立脚した視点からは、資料的価値を減ずるものも少なくないという地域的な大きな課題も担っている。また、近年では「美利河技法」の提唱以来、湧別技法等に対する技術的な見直しや、石材を通じ想起される交易圏の存在が徐々に明らかにされるなど、新たな課題と視点も提起されてきている。以下、ここでは細石刃文化の基本的な構成に大きく関わる近年の新知見をもとに、その上限のあり方に的を絞り本稿のまとめとしたい。

細石刃文化の初源に関わる問題は、研究初期に吉崎昌一氏等によって細石刃文化以前に石刃をもつ石器文化の階梯が設定された時にはじまる。その後発展的にまとめられた石刃文化から細石刃文化そして、有茎尖頭器の文化という特徴的な石器の消長にもとづく編年観は、基本的には変わらず今日にまで至っている。

特に嶋木遺跡（辻　1973）、岐阜第二遺跡（藤本　1977）等の石器群が明らかになるに及び、粗雑な剥片石器を主体とする細石刃文化以前の石器文化として性格づけが改めて強調された。また、三角山遺跡（吉崎　1974）で惹起されたナイフ状石器に対する注目は、広郷８遺跡（宮　1985）の小形のナイフ形石器や共栄３遺跡（北海道埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ　1992）の台形状の石器の検出によって具体的なものとなり、その測定年代の古さを含め、それまでの石刃文化と置き換わるかたちで北海道最古の通時的な階梯があたえられた。すなわち、細石刃文化の初源については、ナイフ状の石刃を主体とした文化階梯における大陸からの細石刃文化の渡来として、そして同時にそれは石刃文化の終焉として理解されることとなった。

しかし、十勝川上流域の嶋木遺跡や斜里岳山麓の越川遺跡（曽根他　1991）からの細石

刃、細石刃核の検出は新たな問題をなげかけた（第15・16図）。両側縁がそろう明確な石刃を作出せず、先細りの石片が多出されるという古期の様相を呈する石器群からの伴出であること。その測定年代が20,000年ほど前の古い値を示すことが注目された。特に越川遺跡では石器を包含していた焼土に対する測定であり、その値は確証の高いものであった。両遺跡の知見は、従来最古と考えられてきたナイフ様の石器をもつ石器文化における細石刃技術の存在を示唆しているようでもある。北海道の石器文化の全体像に大きな転換をもたらすとともに、細石刃文化の上限は大きく２万年前までさかのぼるのであろうか。

発見例が少なく石器群の具体的内容にもとづく検討はできないが、嶋木遺跡出土の細石刃核がホロカ技法にもとづく点は注目される。同技法は先の編年で細石刃文化の前期の所産とされたものであり、資料のもつ通時的位置づけとの整合性が指摘できる。また、両遺跡の立地をみると、ともに河川の上流域に位置しており、古期の細石刃文化の居住傾向との共通性も注目されよう。今後の分析に多くを待たなければならないが、ここではこうしたあり方を評価し、北海道石器文化の最初期から細石刃文化が関っていた例証としてとらえておきたい。

細石刃文化の上限をさぐる方法は、このような細石刃製作技術や石器文化の特性からの検討を一方の分析視点としながらも、いわゆる古期石器群の製作技術総体における細石刃製作技術の位置づけと関わりを具体的に明らかにしていくことが求められよう。また、小形のナイフ形石器を組成する広郷８遺跡においては、ナイフ形石器の出土域での細石刃の分布が報じられている。こうした状態は従来、混在した姿としてとらえられてきたが、周氷河現象の影響が著しい北海道にあっては、平面的な出土状況に対しても今後注意をむけることが必要となろう。

以上、細石刃文化の上限に関わる問題にふれてみたが、資料的制約は大きく、積極的な分析をもつに至っていない。このことは細石刃文化の終焉についても同様であり、有茎尖頭器を指標とした文化の動態についてはいまだに明らかではない。近年、先の広郷８遺跡の石器群を介し、大陸との関連が指摘される等、北海道の石器文化の基幹が北方地域との関連の中で具体的に性格づけられてきている。北からの玄関口として北方への知見をたえず備えながら、北海道東部という地域的な特性を充分把握する必要性が、古くて新しい視点として今日改めて求められているようである。

6　参考主要文献

安蒜政雄　1979　日本の細石核　「駿台史学」47

上野秀一・加藤　稔　1973　東北地方の細石刃技術とその北海道との関連について　「北海道考古学」9

加藤晋平・桑原　護　1969　「中本遺跡」　永立出版

加藤晋平・山田昌久　1988　北海道河東郡上士幌町嶋木遺跡の石器文化　「歴史人類」16

木村英明　1988　シベリアと北海道の石器　「古代史研究」1　講談社

木村英明　1992　「湧別技法の再検討と幌加沢遠間石器文化の研究」

北沢　実　1989　「暁遺跡の発掘調査５」　帯広市教育委員会

久保勝範　1980　北見市北進遺跡発掘調査報告特輯　「北見市郷土博物館紀要」10

白滝団体研究会　1963　「白滝遺跡の研究」

杉原荘介・戸沢充則　1975　「北海道白滝服部台における細石器文化」　明治大学文学部研究報告　考古学5

曽根敏雄・米村　衛・隅田まり　1991　北海道，越川遺跡における約２万年前の細石刃様の石器　「第四紀研究」30-2

辻　秀子　1973　北海道上士幌町嶋木遺跡の調査報告　「石器時代」10

鶴丸俊明　1979　北海道地方の細石刃文化　「駿台史学」47

鶴丸俊明　1975　増田遺跡　「日本の旧石器文化」2

筑波大学遠間資料研究ｸﾞﾙｰﾌﾟ　1990　「湧別川」

戸沢充則　1967　北海道置戸安住遺跡の調査とその石器群　「考古学集刊」3-3

長沼　孝編　1985　「今金町美利河１遺跡」　北海道埋蔵文化センター

畑　宏明　1975　水口遺跡　「日本の旧石器文化」2

藤本　強　1977　「岐阜第二遺跡」　東京大学文学部

松谷純一　1987　「白滝村の遺跡」　白滝村教育委員会

宮　宏明　1985　「広郷８遺跡（Ⅱ）」　北見市教育委員会

吉崎昌一　1956　北海道のblade industryについて　「北海道第四紀研究会連絡紙」7

吉崎昌一　1961　白滝遺跡と北海道の無土器文化　「民族学研究」26-1

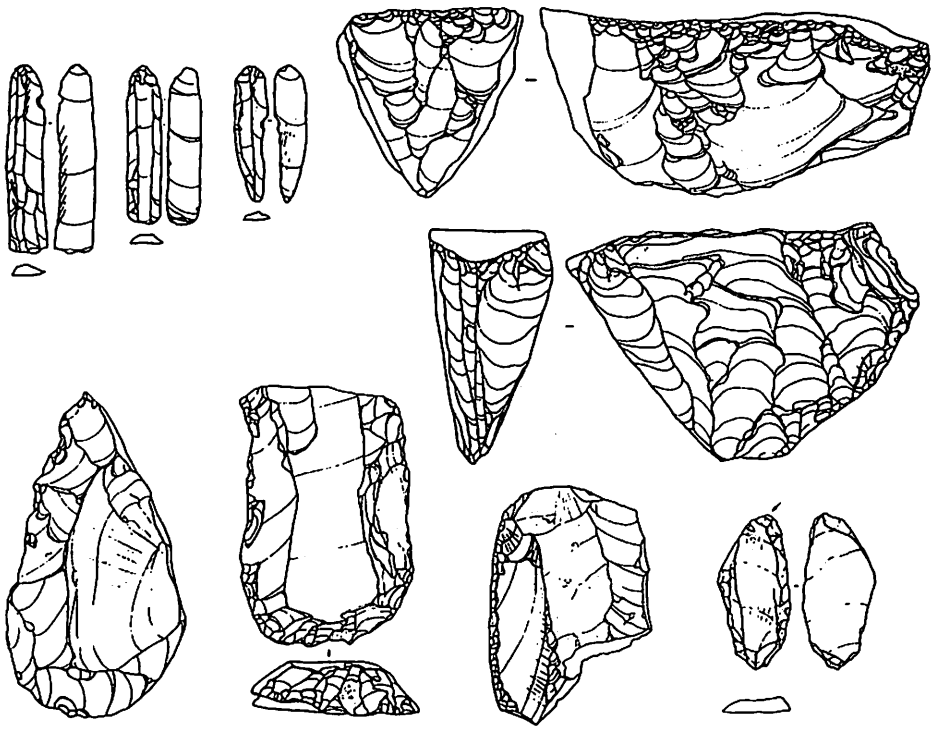
吉崎昌一　1973　「タチカルシュナイ遺跡・1972」　遠軽町教育委員会

吉崎昌一・横山英介　1974　「祝梅三角山地点」　千歳市教育委員会

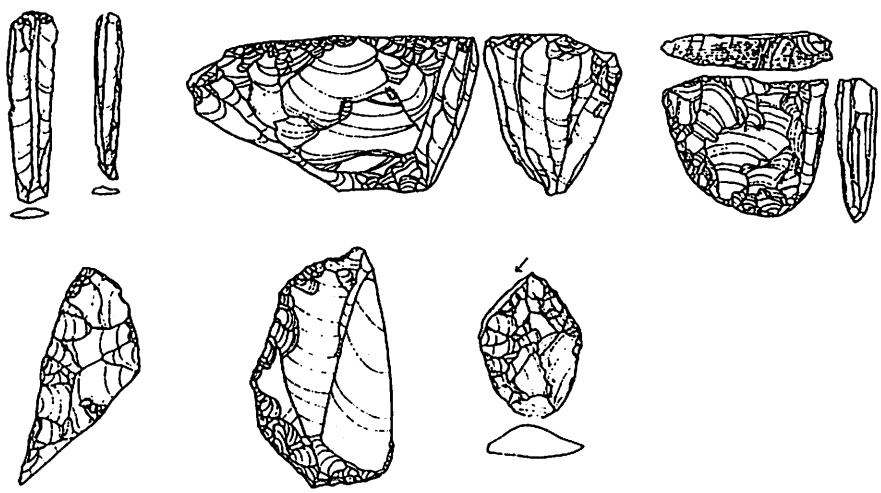
米村　衛　1983　北海道における先土器時代終末の様相　「駿台史学」58

1	白滝服部台遺跡	11	北進遺跡
2	白滝第32地点遺跡	12	吉田遺跡
3	白滝第４地点遺跡	13	水口遺跡
4	幌加沢遠間地点遺跡	14	みどり１遺跡
5	タチカルシュナイ遺跡	15	越川遺跡
6	置戸安住遺跡	16	暁遺跡
7	増田遺跡	17	上似平遺跡
8	広郷20遺跡	18	勢雄遺跡
9	紅葉山遺跡	19	嶋木遺跡
10	本沢遺跡	20	北斗第８地点遺跡

第１図　　北海道東部の細石器出土遺跡

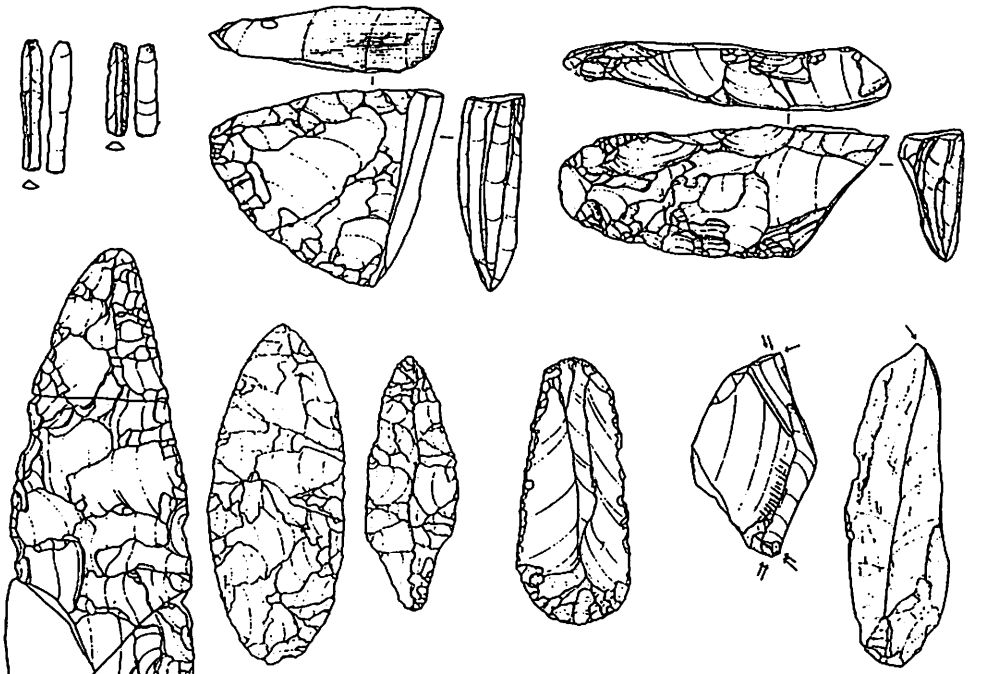


第２図　湧別川流域　幌加沢遠間地点遺跡（４）

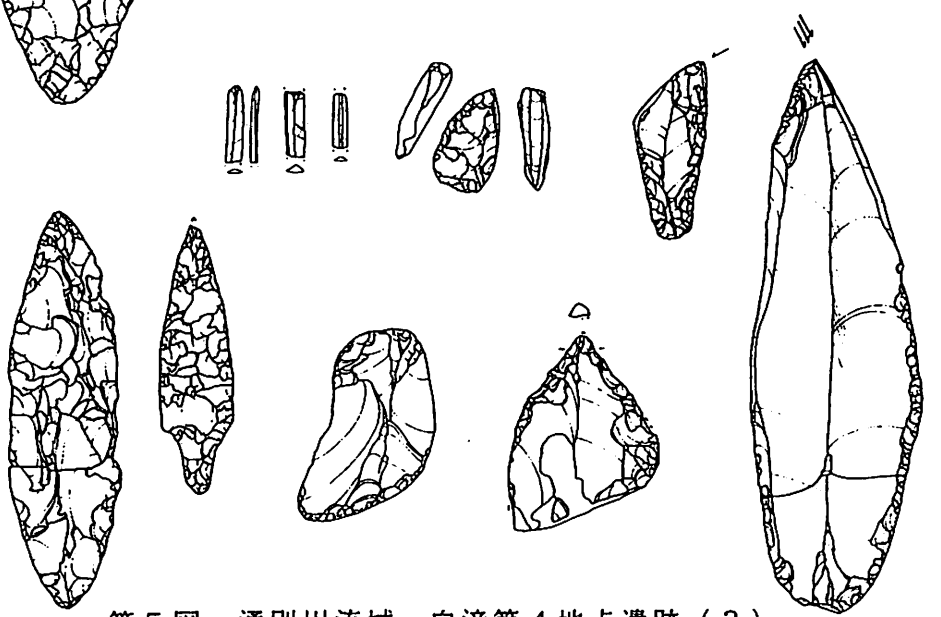


第３図　湧別川流域　ﾀﾁｶﾙｼｭﾅｲVC地点遺跡（５）

0　(1:2)　5cm

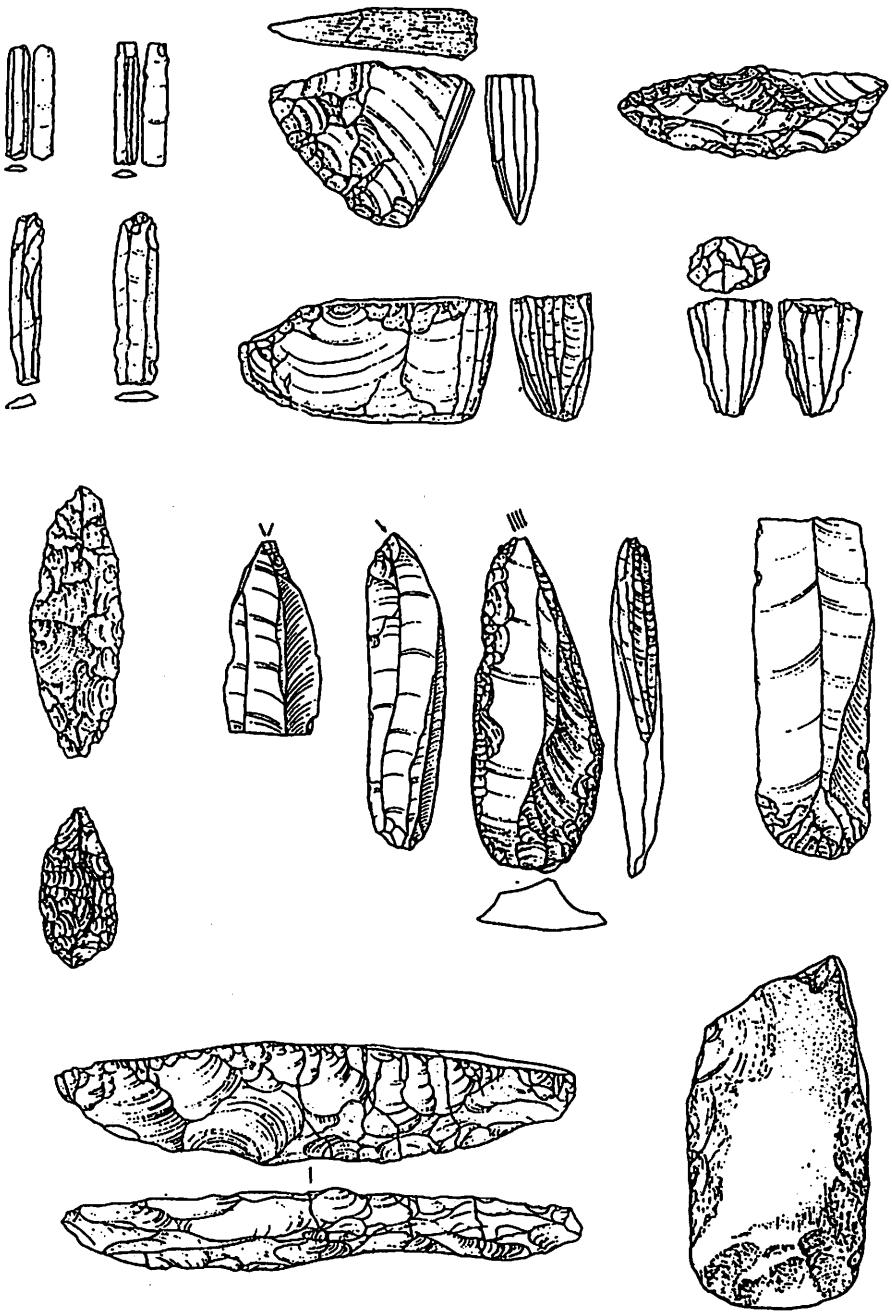


第４図　湧別川流域　白滝服部台遺跡（１）



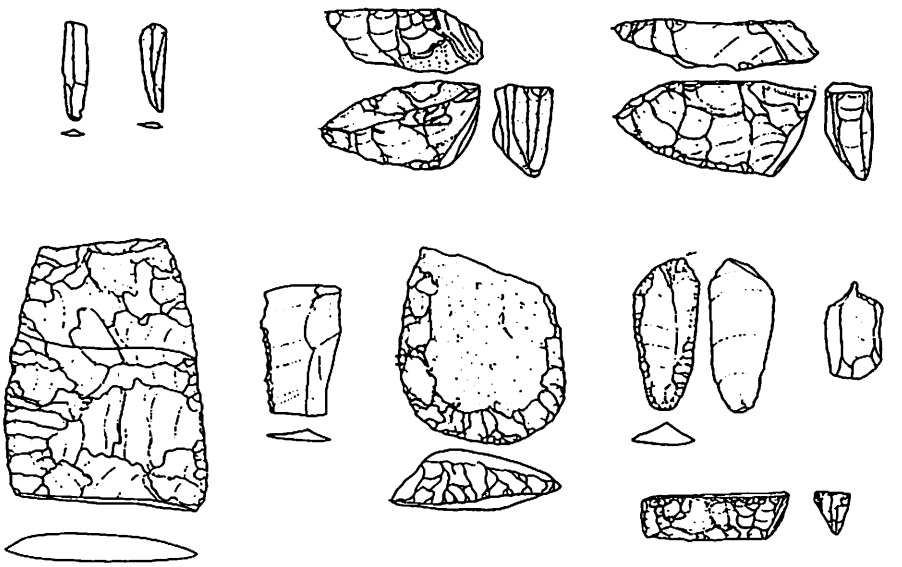
第５図　湧別川流域　白滝第４地点遺跡（３）

0　(1:2)　5cm

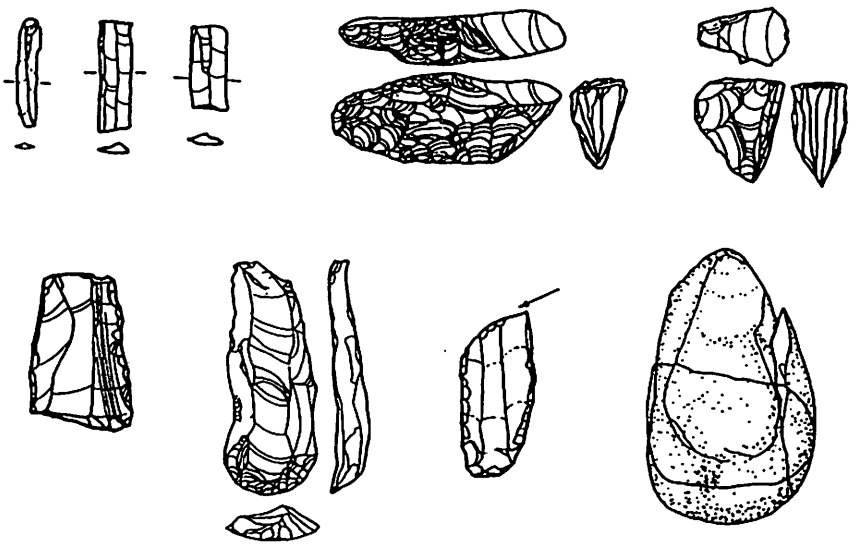


第６図　常呂川流域　置戸安住遺跡（６）

0　(1:2)　5cm

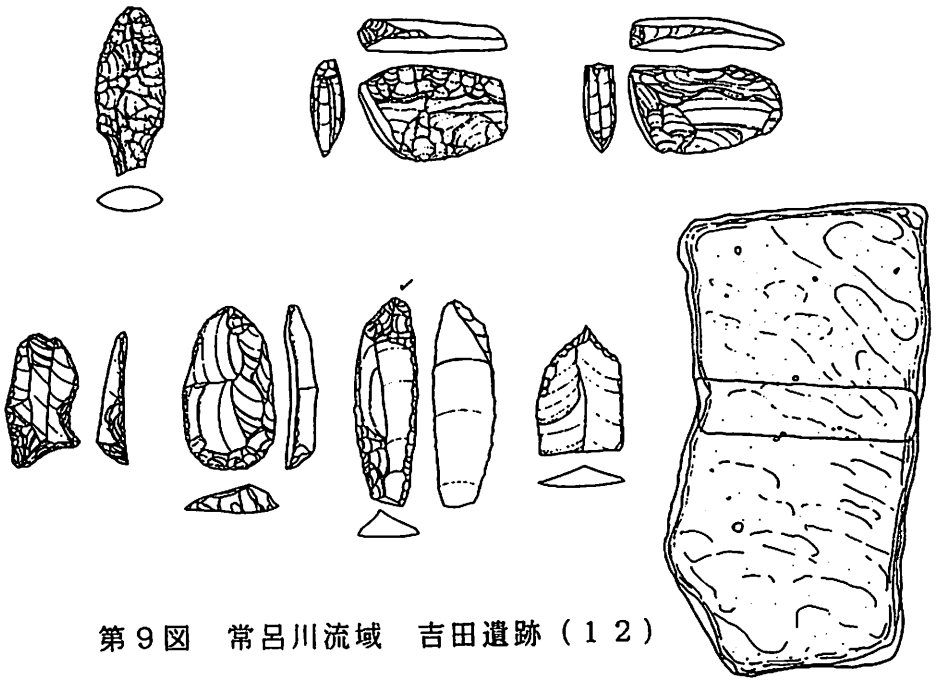


第７図　常呂川流域　増田遺跡（７）

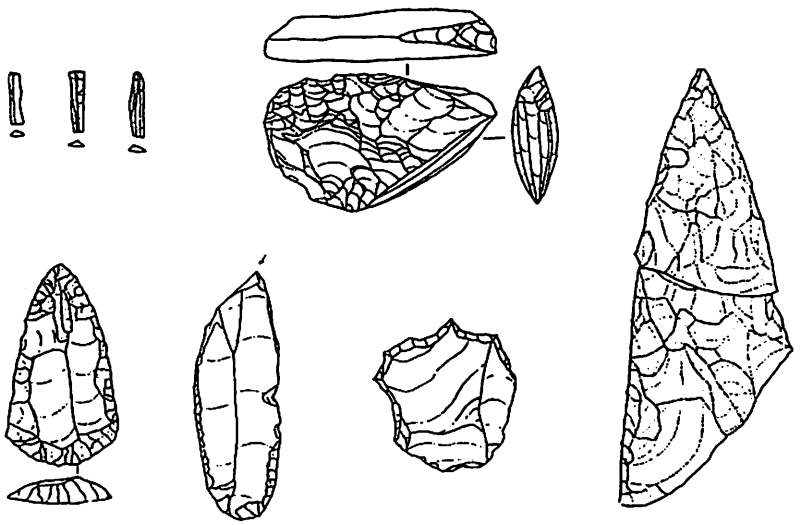


第８図　常呂川流域　北進遺跡（１１）

0　(1:2)　5cm

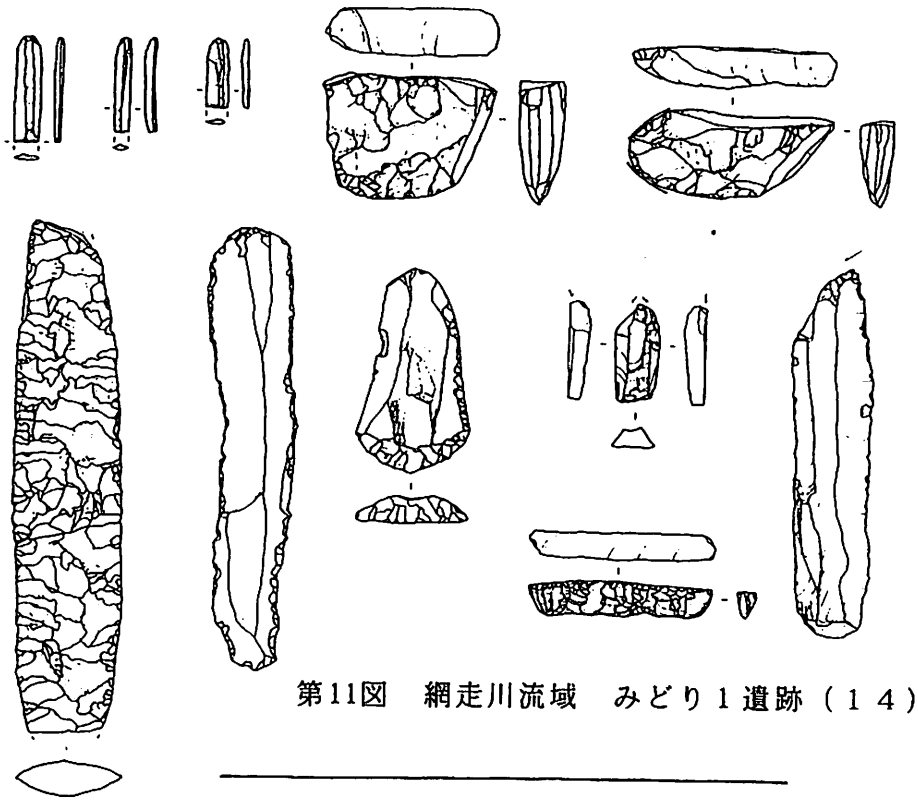


第９図　常呂川流域　吉田遺跡（１２）

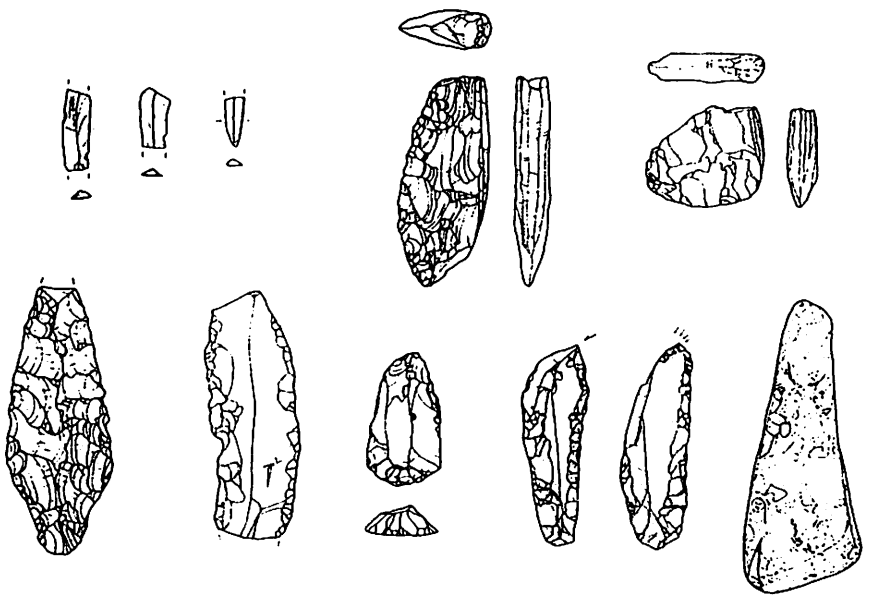


第10図　常呂川流域　水口遺跡（１３）

0　(1:2)　5cm

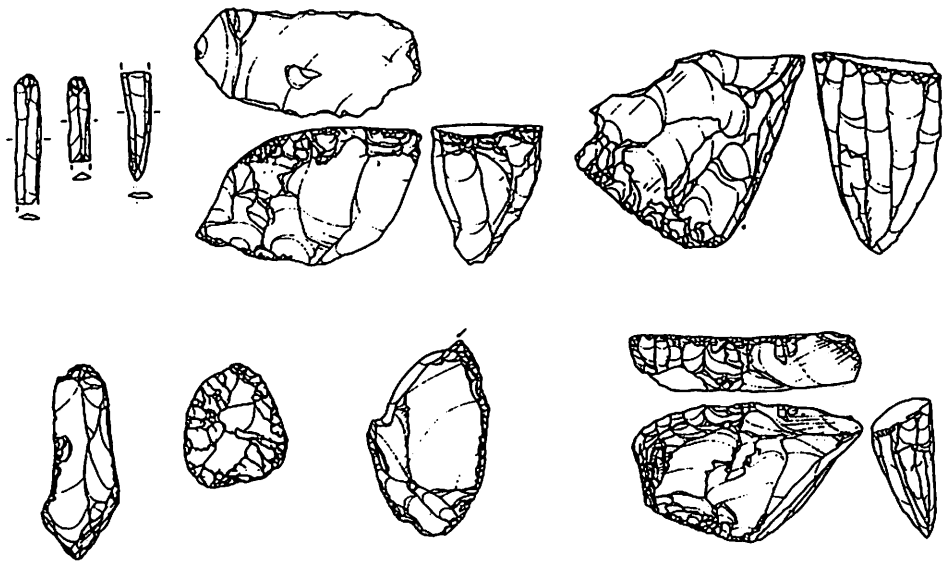


第11図　網走川流域　みどり１遺跡（１４）

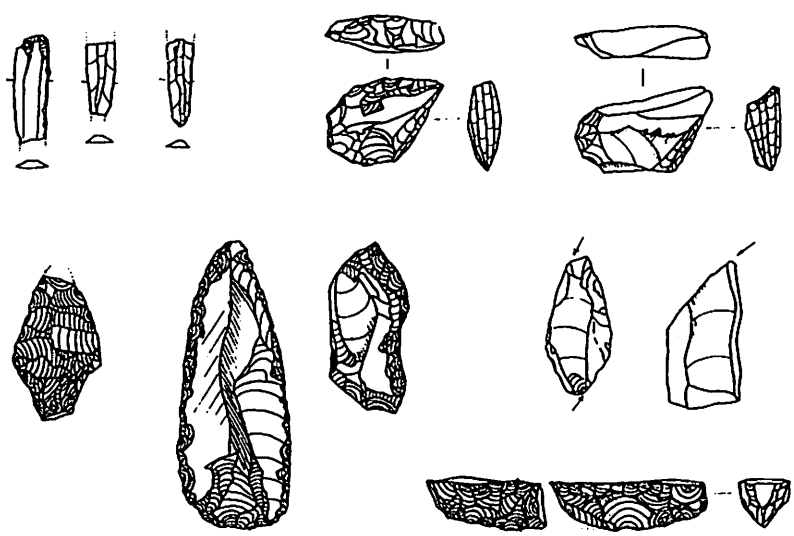


第12図　網走川流域　元町３遺跡

0　(1:2)　5cm

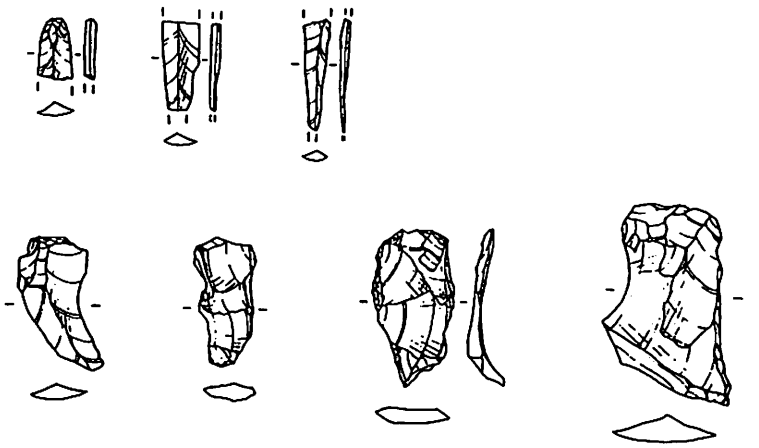


第13図　十勝川流域　暁遺跡（１６）

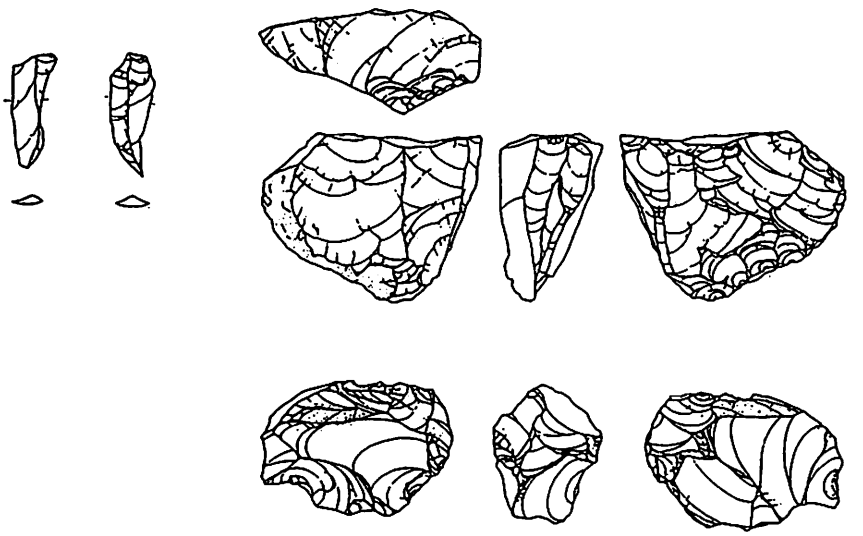


第14図　十勝川流域　上似平遺跡（１７）

0　(1:2)　5cm



第15図　斜里町　越川遺跡（１５）



第16図　上士幌町　嶋木遺跡（１９）

0　(1:2)　5cm

第 1 表　北海道東部　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成														発掘	所在	所属	備考
		MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磁	土				
1	白滝服部台	507	50	20	62	52							78			有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
2	白滝服部台2	207	93	16	359	9				21			21			有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
3	近隠台	3		3		1							2			有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
4	白滝第33地点		○		○	○							○			有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
5	白滝第32地点		14	4	3	1										有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
6	白滝第31地点			○	○											有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
7	白滝第25地点			○	○											有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
8	白滝第30地点	○	○		○	○					○					有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
9	白滝第4地点	40	4	28	44	10							46			有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
10	ホロカ沢Ⅰ					○	○									有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
11	白滝第37地点		○	○	○	○										有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
12	北支湧別3		1													有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
13	上支湧別3		○	○	○	○										有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
14	幌加沢遺間地点	309	87	55	53	2	1						41			有	北海道紋別郡白滝村	湧別川流域	報告書有
15	ﾀｶﾀﾙｼｭﾅｲⅤA	280	3	11	69	84	27	2					55			有	北海道紋別郡遠軽町	湧別川流域	報告書有
16	ﾀｶﾀﾙｼｭﾅｲⅤB	10	4	3	5	6	1						1			有	北海道紋別郡遠軽町	湧別川流域	報告書有
17	ﾀｶﾀﾙｼｭﾅｲⅤC	271	8	11	2	16	1						4			有	北海道紋別郡遠軽町	湧別川流域	報告書有
18	置戸安住	223	21	31	47	131							58			有	北海道常呂郡置戸町	常呂川流域	報告書有
19	置戸拓殖	○	○													有	北海道常呂郡置戸町	常呂川流域	
20	北栄40	2000	23	7	56	42	3									有	北海道常呂郡訓子府町	常呂川流域	報告書有
21	緑丘B	829	4		7	18							3			有	北海道常呂郡訓子府町	常呂川流域	報告書有
22	増田	295	4	5	13	11	4			2	2					有	北海道常呂郡訓子府町	常呂川流域	報告書有
23	日出4・5	9	9	8	2	1					2		3			有	北海道常呂郡訓子府町	常呂川流域	報告書有
24	常川	598	○	3	2	17										有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
25	広郷	148		11		37										有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
26	広郷18	9			3					3						有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
27	広郷20	1700	33	24	18	51							1			有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
28	広郷31		○	○									○			無	北海道北見市	常呂川流域	
29	広郷丸山	○		○	○	○			○							無	北海道北見市	常呂川流域	
30	広郷16		○													無	北海道北見市	常呂川流域	
31	広郷19			○	○	○							○			無	北海道北見市	常呂川流域	
32	広郷32		○													無	北海道北見市	常呂川流域	

※アンダーライン ＿＿＿ は以上をあらわす

第 2 表　北海道東部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	磯	土	発掘	所在	所属	備考
33	常川金比羅山		○										○			無	北海道北見市	常呂川流域	
34	開成３	1	1	14	6											有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
35	開成１				○	○							○			無	北海道北見市	常呂川流域	
36	北上台地	○	20	100	50								○			有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
37	北上４		○													無	北海道北見市	常呂川流域	
38	北上５		○			○										無	北海道北見市	常呂川流域	
39	北上７		○													無	北海道北見市	常呂川流域	
40	北上８		○													無	北海道北見市	常呂川流域	
41	雪原	○		○	○	○	○									有	北海道常呂郡留辺蘂町	常呂川流域	
42	磨谷		○	○	○		○									有	北海道常呂郡留辺蘂町	常呂川流域	
43	竹本				○	○										有	北海道常呂郡留辺蘂町	常呂川流域	
44	吉村				15	31	2						1			有	北海道常呂郡留辺蘂町	常呂川流域	報告書有
45	紅葉山		○	○	○				○				○			有	北海道常呂郡留辺蘂町	常呂川流域	報告書有
46	吉井沢		10		73	24			2							有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
47	豊田					○							○			有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
48	本沢	1084	11			10										有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
49	大正		17		14				2				1			有	北海道北見市	常呂川流域	報告書有
50	大正６		○			○										無	北海道北見市	常呂川流域	
51	柏木４		○		○								○			無	北海道北見市	常呂川流域	
52	北進	180	28	6	14	18			6							有	北海道北見市	常呂川流域	
53	中本		○	13	27	16	11		7		3		3			有	北海道北見市	常呂川流域	
54	川東３	○	○		○								○			無	北海道北見市	常呂川流域	
55	小泉２		○	○	○	○										無	北海道北見市	常呂川流域	
56	吉田		15		147	23	3	2	1				6			有	北海道常呂郡端野町	常呂川流域	報告書有
57	水口	88	8	3	82	7	4						5			有	北海道常呂郡端野町	常呂川流域	報告書有
58	関村				19	15	2	1					1			有	北海道常呂郡端野町	常呂川流域	報告書有
59	上口	○	○	○	○	○		○					○			有	北海道常呂郡端野町	常呂川流域	
60	北陽	○	○		○	○			○							無	北海道常呂郡端野町	常呂川流域	
61	元町２	○	○	○	○	○							○			有	北海道網走郡美幌町	網走川流域	報告書有
62	元町３	4	4	15	28	17	5		1				2			有	北海道網走郡美幌町	網走川流域	報告書有
63	みどり１	○	○	○	○	○	○									有	北海道網走郡美幌町	網走川流域	報告書有
64	越川	6														無	北海道斜里郡斜里町		報告書有

※アンダーライン ＿＿＿ は以上をあらわす

第 3 表　北海道東部　　細石刃文化遺跡一覧表

No.	遺跡名	組成 MB	MC	SS	ES	G	D	A	P	GS	H	KN	PO	礫	土	発掘	所在	所属	備考
65	暁	8700	70	300	50	173			4	2			3			有	北海道帯広市	十勝川流域	報告書有
66	空港南A	○	○	○	○	○							○			有	北海道帯広市	十勝川流域	報告書有
67	空港南B	70	○	6	1	5							1			有	北海道帯広市	十勝川流域	報告書有
68	泉町A	66	7	1		1										有	北海道帯広市	十勝川流域	報告書有
69	上似平	408	6	26	5	6							2			有	北海道帯広市	十勝川流域	報告書有
70	上似平2	27	○	54	19	11										有	北海道帯広市	十勝川流域	報告書有
71	勢雄	57	○	40	1	7	11		2		2					有	北海道河西郡更別村	十勝川流域	報告書有
72	落合			6	1	6	1				1		3			有	北海道帯広市	十勝川流域	報告書有
73	十勝川温泉1	7	1													有	北海道河東郡音更村	十勝川流域	報告書有
74	鳴木	○	1	○												有	北海道河東郡上士幌町	十勝川流域	報告書有
75	居辺16			5	1	2	2						3			有	北海道河東郡上士幌町	十勝川流域	報告書有
76	石井沢			○									○			無	北海道足寄郡陸別町	十勝川流域	
77	石井沢A			○	○								○			無	北海道足寄郡陸別町	十勝川流域	
78	斗満			○									○			無	北海道足寄郡陸別町	十勝川流域	
79	大誉地1				○								○			無	北海道足寄郡足寄町	十勝川流域	
80	鷲府21		○		○											無	北海道足寄郡足寄町	十勝川流域	
81	螺湾8												○			無	北海道足寄郡足寄町	十勝川流域	
82	花輪					○										無	北海道足寄郡足寄町	十勝川流域	
83	オフイピラク												○			無	北海道中川郡本別町	十勝川流域	
84	13の沢			○									○			無	北海道河東郡上士幌町	十勝川流域	
85	牧場川	○			○	○										無	北海道帯広市	十勝川流域	
86	アカシヤ地点		○													無	北海道中川郡幕別町	十勝川流域	
87	英川地点		○	○		○										無	北海道中川郡幕別町	十勝川流域	
88	更別		○													無	北海道河西郡更別村	十勝川流域	
89	北斗第8地点		1													有	北海道釧路市	釧路川	報告書有
90	大楽毛第4地点					○										有	北海道釧路市	釧路川	報告書有

略語　MB＝細石刃、MC＝細石刃石核、SS＝削器、ES＝掻器、G＝彫器、D＝ドリル、A＝石斧、P＝礫器、GS＝磨石、H＝叩石、PO＝尖頭器、KN＝ナイフ形石器
礫＝石礫、土＝土器　　※アンダーライン _____ は以上をあらわす

シンポジウム
細石刃文化研究の新たなる展開

１９９３年　１０月　３０日　発行

発行者　八ケ岳旧石器研究グループ
　　佐久考古学会

発行所　佐久市岩村田1317-1　堤方

編集者　堤　　隆

印　刷　㈱ほおずき書籍